

チャールズ・ディケンズ著

『二都物語』

柳田 泉 譯

チャールズ・ディケンズ著、柳田泉譯『二都物語』――新潮社世界文學全集〈18〉、昭和 3 (1928) 年 10 月 20 日發行――の電子化 (約 39 萬字) は、名古屋大學大学院國際言語文化研究科・國際多元文化專攻・尖端文化論講座・博士後期課程 3 年の松浦由美子氏と共同で行つたものである。電子化の過程において、柳田泉譯の明かな誤字脱字を修正し、舊字舊假名を徹底させた。ウェブ上での公開は平成 18 (西曆 2006) 年 10 月 1 日。ファイル形式は PDF で、閲覽およびプリントアウトはできるが、改變およびコピー&ペーストはできない。

名古屋大學大学院國際言語文化研究科 松岡光治

052-789-4864

mitsu@lang.nagoya-u.ac.jp

<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/~matsuoka/>

【目次】

第一編 復活

- 一、時代
- 二、郵便馬車
- 三、夜の物影
- 四、準備
- 五、酒店
- 六、靴造り

第二編 黄金の糸

- 一、五年の後
- 二、観物
- 三、失望
- 四、祝ひ
- 五、豹(ジャンカル)
- 六、何百の人々
- 七、都会に於けるモンセエニユール
- 八、田舎におけるモンセエニユール
- 九、ゴードンの首
- 十、二つの約束
- 十一、二幅対の一面
- 十二、粹紳士
- 十三、不粹漢
- 十四、正直な商人
- 十五、編物
- 十六、編物のつゞき
- 十七、一夜
- 十八、九日間
- 十九、意見
- 二十、願ひ
- 二十一、反響する足音
- 二十二、海はなほ荒れ狂ふ
- 二十三、火の手は揚る
- 二十四、磁石岩に引かれて

第三編 嵐の跡

- 一、独房拘禁
- 二、刃を研いで
- 三、暗影
- 四、嵐のうちの静寂
- 五、木挽
- 六、勝利
- 七、扉を打つ音
- 八、骨牌の勝負
- 九、勝負開始
- 十、暗影の正体
- 十一、薄暮
- 十二、夜
- 十三、五十二人
- 十四、編物の終り
- 十五、歩みの音は永久に消え去る

— 1 —

第一編 復活

一、時代

それは、今までの時世の中でも、最も傑れた時であると共に、また最も惡の時でもあつた。叡智に充ちてゐるやうで、また愚昧な世でもあつた。信仰の時代であると共に、また不信仰の漲つてゐる時代であつた。光明に輝いた時とも思へるが、また暗黒な時代とも言へる。希望に溢れた春であると共に、絶望に鎖された冬であつた。人々の前にはあらゆるものが備はつてゐるやうだが、反對に何も無いやうでもある。人々は皆、天國へ昇りかけてゐるやうだつたが、同時にその反對の道へ向つて墮ちてゐるのかも知れない。——一口で言へば、この時代は、口やかましい當時の權威者達が、その善惡兩面ともに最大級の言葉を使つて論すべきだと主張した點から考へてみると、非常に現代と似た時代であつた。

その頃、英國の玉座には大きな顎をもつた王と獨り美しからぬ顔をした后がゐ、佛蘭西の玉座には同じく大きな顎をもつた王と美しい后がゐた。何方の國に於いても、この世の利福を國家の名によつて壟斷してゐる貴族達には、水晶よりも明らかに、天下の大勢が永久に安定してゐると思はれてゐた。これは、基督紀元千七百七十五年のことである。この恵まれた時代には、現代と同様、英國に對していろいろな心靈的な啓示が下された。ミセス・サウスコット（當時の宗教狂で、黙示録中でヨハネが述べてゐる女は自分で、基督再生のときは自分を母とすると説き、數萬の愚夫愚婦に信仰された）はその第二十五回の祝福すべき誕生日を迎へたばかりであつたが、すでに、近衛隊の豫言者めく一兵卒が、倫敦とウエストミンスターを併せ呑むやうな用意が整てゐるなど、觸れ歩いて、彼女の莊嚴な出現を先觸れしてゐた。コック・レーンの幽霊（コック・レーンの空家に幽霊が出たといふので大騒ぎしたが、それは或る女中の惡戯でこつそりそこに隠れてことやつたことがわかつた）でさへ、そのお告げをことごとく叩きたてた後でやつと取り鎮められてからまる十二年たつたばかりである。その様子は、丁度去年の精靈が（獨創味は不思議に缺けてゐたが）

— 1 —

そのお告げをしきりに叩きたてたやうであつたといふ。更に純然たる俗世界の出來事ではあるが、近ごろ亞米利加に殖民してゐる英國民の會議から本國に宛て、何か通知が來た（「代表權なき課税」に對する抗議の事）。ところが、不思議なことには、この方がコック・レーン（コックには雄鷄の義がある）で解つたひよつか連中のどれから受け取つたどんなお告げよりも、人類にとつてづつと重要なものだといふことが分つて來た（亞米利加獨立戰爭の原因となつたので）。

概して心靈的な事柄では、楯と三又槍をもつたその姉妹（英國の事でその定紋の守護神は楯と三又をもつてゐる）ほどに惡まれてゐなかつた佛蘭西は、紙幣をつくつて（佛蘭西當局が財政急迫のため紙幣を濫發したこと）それ消費しつゝ、國運の下り坂を威勢よく滑つてゐた。そのほか、佛蘭西は、基督教の僧侶達の指導の下に、さまざまな慈悲深い（反語）ことをして愉快がつてゐた、たとへば、

一人の少年が、眼の前五六十ヤードばかり離れたところを通つた汚ない僧侶の行列に向つて雨中に跪ぶいて敬禮しなかつたといふ廉で、彼の手を斬りとり、舌を釘抜きでもぎとり、生身の彼を焼くやうに宣告したなどがそれである。すでにこの受難者が死刑にされたときに、『運命』といふ樵夫が見つけて置いた佛蘭西や諸威の森に生えてゐた樹が成長して、他日伐られ、板に挽かれて、あの史上に恐ろしい首袋と白刃をもつた機械の一種（斷頭臺）となつたのだといふことは、いかにもありさうなことではないか。又その日、巴里近くの瘦せた土地を耕してゐた或る百姓が雨風にあてまいとして、その粗末な物置小屋に引き入れて置いた粗造の荷車——田圃の泥にまみれ、豚にかき廻され、鶏の宿にされてゐた荷車を、『死』といふ農夫がすでに革命の時の死刑囚護送車にする爲めにとつて置いたのだといふことも、いかにもありさうなことではないか。だが、この樵夫と農夫とは、絶えず働いてはゐるけれども、少しも音を立てない。彼等が聲音をぬすんで歩きまはつてゐるので、誰一人これ聞きつけるものはない。だから、尙更、『運命』や『死』といふものが、ほんとに働いてゐるのではないだらうか、などゝ疑ひを抱くやうな者は、無神論者とか國賊とか言はれなければならないのであつた。

英國は英國で、自ら國家的な誇りにしてゐるほどの秩序の維持も人民の保護も、實際には殆んど行はれてゐなかつた。武装した大膽不敵な強盗や、追剽騒ぎが、倫敦に於いてさへ毎夜のやうに起つた。市民達は、その家財を家具屋の倉庫に託して安全にしてからでないと、市外に出てはならぬ旨を公然と注意されてゐた。夜間の追剽は晝間の商人であつた、或る男はかつて『ギャプテン』（當時の有名な追剽盗賊の綽名）の姿でその仲間の商人に止まれと命じたところ、正體を見顯はされて挑戦されたので、勇敢にも相手の頭を打ちぬいて、馬で逃げてしまつた。又、郵便馬車が七人の盜賊の待伏を

— 三 —

くつたことがあつた。車掌は三人だけ射殺したが、『彈藥が種切れになつた爲めに』残つた四人に自分も射殺され、その後で、馬車は易々と掠奪された。あの素晴しひ勢力家である倫敦市長でさへ、タアナム・グリーンで一人の追剽に會つて、掠奪されたこともあつた。追剽は、この有名な人物の家來多勢の見てゐる前で、彼の持物をすつぽりと奪つてしまつたのだつた。倫敦監獄の囚人達が牢番達と亂闘を始めたので、尊嚴なる國法によつて、銃丸をいっぱい填めた喇叭銃（銃身より銃口の廣い一種の銃）を彼等に向つて發射したやうなこともあつた。盜賊が王宮の謁見式で貴人達の頸からダイヤモンドの十字架を切りとつたり、歩銃隊が密輸人品を搜索するとセント・ジャイルズに進入したり、暴徒が歩銃隊に發砲したり、歩銃隊が暴徒に發砲したり、こんないろいろの出來事が起つたが、誰一人として甚しく珍らしいことだとは考へなかつたのである。かゝる出來事に取巻かれてゐるので、刑吏は（いつも忙しかつた、これは用事がないと云ふことよりも惡ぬのだが）絶えず用があつた、或はいろいろな罪人を長く珠數つなぎにしてみたり、或は火曜日に捉まつた押込み張盜を土曜日に絞罪に處してみたり、或はニューゲートの監獄で十二人づゝ一束にして手に烙印を押してみたり、或はウエストミンスター・ホール（こゝで國事犯が審問された）の戸外で、押收した小冊子を焼き棄てゝみたり、今日は、兇悪な人殺しの生命をとるかと思ふと、明日は百姓の子供から、六ペンスを盗んだ情ない小泥棒の生命をとるといふ風であつた。

かふいふすべての事柄、またこれに類した千百の事柄が、この懐しい千七百七十五年の昔、及びその前後に起つてゐた。あの『樵夫』と『農夫』が人目につかずに働いてゐる一方、かふいふ出來事に取り巻かれつゝ、この大きな顎をもつた二人と美しからぬ顔と美しい顔をした他の二人は、實に騒々

對手がどんな人か互に分らない。めいめいが着物を澤山着こんでゐるので、お互に肉眼を使つても心眼を使つても分る筈はない。その頃の旅客は非常に用心深く、一寸知り合つたぐらゐで打ち解けた話はしなかつた。といふのは、途中でどんな人間に會ふにしても、それが盗賊かその仲間であるかも知れなかつたからである。盗賊の仲間といへば、この頃は何處の宿にも酒場にも『キャプテン』の手下になる者があつて、それがその亭主から厩係りのつまらない小者にまで及んでゐるといふ

—五—

時代だから、かふいふことはいかにも有りさうな事にちがひなかつた。それで、この千七百七十五年の十一月の或る金曜日の夜、このドーヴァ通ひの郵便馬車の車掌も、がたがたとシュータース・ヒルをのぼつて行きながら、一人でこんなことを考へてゐたので、馬車の後部にある自分だけの特別の席に突立つたまゝ、時々足踏みをしつゝ、すぐ前にある武器函から目と手を離さずゐた。武器函の中には、下積みになつた幾口かの短劍の上には七八挺の騎馬ピストルが載つてをり、その上には装填した喇叭銃が載つてゐたのである。

このドーヴァ通ひの郵便馬車も、車掌は旅客を疑ひ、放客は合客や車掌を疑ひ、すべての人が自分以外の人を誰でも疑ひ、馭者は馬の外には何一つあてに出来ないといふお定りの愉快な有様であつた。ところでその馬はといへば馭者が、新舊約兩聖書にかけてたしかに誓つてもゐゝほど、こんな旅行には滴しないものであつた。

「ウオ、ホウ、」馭者はかふあつた。「サウ、シウ！ さあ、もう一息で頂邊だ、いまましい奴だなあすこまで上らせるのにどれだけ骨折つたことか！——をひジョウ！」

「おい！ 車掌は答へる。」

「ジョウ、何時だらうね。」

「十一時をたつぷり十分すぎでらあ。」

「ほう驚いた！」むしやくしや腹の馭者はかふ叫ぶ。

「それでまだシューターの頂邊まで行けねえだ！ チエ！ ヤア！ さあ早くやりな！」

例の強さうな様子の馬は、一鞭喰はされた爲めにあくまでも反對することが出来なくなつて、今度は思ひきり踏張つた、すると三頭もこれになつた。かふして、またもドーヴァ通ひの馬車はえつちらおつちら進み出すと、その横には旅客達が長靴を泥まみれにしながら随ゐて行く。この長靴は馬車が止まるときには止まつた、馬車と離れないやうにびつたりと寄り添つてゐるのであつた。若し三人のうちの誰か一人が、少しでも先に出て霧の籠つた暗黒の中を歩かふなどゝ他の者にいひ出してもしようものなら、彼は當然追劔として立ちどころに殺されてしまふやうになるのである。

最後の一踏張りで馬車は丘の頂上にのぼつた。馬は止つてまた息を入れた。車掌は自分の席から下りて、車が滑り下りないやうに齒止めをかけ、旅客を乗せる爲めに馬車の扉を開けた。

「シッ！ ジョウ！」馭者は馭者臺から見下しながら、かふ警戒して叫んだ。

「何だね、トム。」

二人とも聞き耳を立てた。

一六一

「駄足で馬が一頭やつて来るぜ、ジョウ。」

「いや、大急ぎでやつて来るぜ、トム。」車掌はかふ答へて、扉にかけてゐる手を離して、すばやく自分の座に飛び乗った。「お客様！皆さん、後生ですから！」

かふ口早やに頼んでから、彼は喇叭銃の撃鐵を押し立て、攻勢をとつた。

この物語に關係のある例の旅客は馬車の踏段に足をかけて入らうとしてゐた。他の二人は彼のすぐ後にゐて、つゞゐて入らうとしてゐた。彼は半身を、馬車の中に、半身を外に置いたまゝ踏段の上に立ち止まつた。他の二人は下の道路に立つてゐた。三人とも、馭者から車掌へ、車掌から馭者へと視線をキョロキョロ動かして、耳を澄してゐた。馭者は振り返る、車掌も振り返る、例の強さうな様子の馬までが調子を揃へるやうに、耳を立て、振り返つた。

夜の静かなところへ、更に馬車のがらがらと動く音が止んだので、實際しいんとしてしまつた。馬の喘ぐのが傳つて、馬車までぶるぶると戦くので、丁度ひどく昂奮でもしてゐるものゝやうに思はれた。旅客達の心臓は、恐らく聞きとれるくらい高く鼓動してゐたであらう。とにかく、すべてのものが静まり返つてちつとしてゐたので、人々が息を殺し、どんな事が起るだらうと心配しながら脈を早めてゐるのが、本當に聞えるやうに思はれるのであつた。

急いで駈けて来る馬の足音が、猛烈な勢で丘を上つて来る。

「おーい！」車掌は精一杯の聲を張り上げて、怒鳴つた。

「そこにある！止まれ！打つ放すぞ！」

馬の歩みは俄かに止る、と、泥濘をはねる音、足掻く音が聞えて、やがて霧の中から一人の聲が叫ぶ、「それやドーヴァ通ひの馬車かね。」

「何だらうと大きなお世話だ。」車掌はかふやり返す。「お前は何だ。」

「それやドーヴァ通ひの馬車かね。」

「何だつてそんなことを聞くんだ。」

「ドーヴァ通ひのなら、お客さんに用があるんだ。」

「なんてお客さんだ。」

「ジャーヴィス・ローリイさんてえんだ。」

この物語に關係のある旅客はすぐさま、それが自分の姓名であることを告げた。車掌も、馭者も、他の二人の旅客も、胡散くさうにちろちろと彼を見た。

「其處にちつとしてゐるんだぞ、」車掌は、霧の中の聲の方に向つて、かふ呼びかけた。「ひよつとして、おれの手が狂つてみる、お前は一生、取り返しつかねえ目に會ふんだぞ。ローリイさんて名前のお方、直に返事しておやんなせえ。」

一七一

「どうしたんだらう。」その時例の旅客はいさゝか慄へを帯びた聲でかふ尋ねた。「私に用があるのは何方だね。ジェリイかひ。」

(ジェリイだか何だか知らねえが、そのジェリイつて奴の聲が氣にくはねえ。) 車掌はかふ獨りであつてゐた。「彼奴の聲のしやがれ様が我慢が出来ねえ、ジェリイめだよ。」

「さうですよ、ローリイの旦那。」

「何の用だね。」

「あちら(倫敦)から、急用でまゐりましたのです、へゐ。テ銀行(テルソン銀行)なんで。」

「車掌さん、私はこの使ひの者を知つてゐます。」ローリイはかふいつて道に下りだ、——彼が下るとき、例の二人の旅客は、背後から、深切にしては少し手荒すぎるやうな手助けをした。そして二人はすぐさま馬車にもぐり込んで、戸を閉めて、窓掛を引き上げた。

「傍に來たつて構はない人間ですよ、何も間違ひは無いから。」

「無けれや結構だが、俺にやちつとも大丈夫たあ思へねえからな、」車掌はかふぶつくさと獨り言をゐつた。「もし、お前さん!」

「え!もし、お前さん!」ジェリイは前よりもつと嗔がれた聲で言つた。

「ゆつくり來るんだぞ、分つたかい。それから、たゝへお前が鞍にピストル袋をつけてゐても、俺の見てゐる前で、そんなものを取り出すぢやねえぜ。俺は間違へを仕出來すことア惡魔のやうに早いんだ、そして俺が間違ひするときや、きつと鉛丸を使ふんだ。だから、お前の面をよく見せろ。」

一頭の馬と乗手の姿が渦巻いてゐる霧の中からだんだん出て來て、例の旅客の立つてゐる郵便馬車の横に來て止まつた。乗手はこゝんで、車掌の方を仰ぎ見ながら、小さい折りたゝんだ紙片を例の旅客に手渡しした。その男の馬はふうふういつてゐる、馬の蹄から男の帽子まで、馬も乗手も、泥まみれである。

「車掌さん!」旅客は落ちついた、打ち明けるやうな調子でかふゐつた。

用心深い車掌は、右の手をその狙ひつけた喇叭銃の臺尻に、左の手を銃身にかけて、乗手から少しも眼を離さずに、ぶつきら棒に、「へゐ」と答へる。

「何も心配することはない。私はテルソン銀行のものだ。倫敦のテルソン銀行なら、お前さんだつて知つてゐる筈だ。私は用があつて巴里に出かけるのだ。さ、酒代に一クラウン。これを讀んでもゐゝかね。」

「手早くなざるなら、構ひませんがね。」

彼は自分の立つてゐる側の馬車洋燈の光でそれを開け

—八一—

て、讀んだ。——初めは一人で、それから聲高に。

『「ドローヴァにてお嬢さんを待て。』』どうだ、車掌さん、長くはないだらう。ジェリイ、かふいつてくれ、私の返辭は、『復活した』(この人の台言葉)といふのだつてね。」

ジェリイは鞍の上ではつと驚いた。「そりやまた途方もない變てこな御返辭ですな、」彼は、一番ひど

い嗶がれ聲でかふいふ。

「その返辭をもつてお歸り、さうすれや、私がこれをうけとつたことが、手紙に書くと同じやうに分るんだからな。大急ぎで歸るんだぞ。左様なら。」

かふいふと、旅客は馬車の戸を開けて入つた。二人の合客は今度は彼に少しも手を貸してやらないばかりか、もう手早く時計や財布を長靴に藏ひこんで、何氣なく眠り込んだ風をしてゐた、それは別にはつきりした目的があつてではなく、たゞひよつとして又何か外の騒ぎが起つても安全なやうにと思つたからであつた。

馬車は、再びがたがたと進み始めたが、下り坂にかゝると、前よりも重い霧がその周圍にうづまいた。車掌は直ちにその喇叭銃を武器函に戻して、函の中の他の武器を一わたり見廻し、腰帶に下げてる補充用のピストルを調べてから自分の座席の下にある小さな函を出して見た。この中には二三の鍛冶道具と一對の炬火と、引火奴箱が入つてゐた。それは、これだけの道具がすつかり揃つてゐれば、馬車の洋燈が風に吹き消されても、(實際度々消されたことがあつた)馬車の中へ入つて扉を閉めきり、火打石と火打金を使つて火花を出し、麥稈を丁度ぬくらの距離おいてそれに火を引けば、(うまくゆくと)可成り安全にまた容易に、五分間ぐらゐで火を點けることが出来たからである。

「トム！」馬車の屋根越しにそつといふ。

「おい、ジョウ。」

「お前、あの返辭つてのを聞いたか。」

「聞いたよ、ジョウ。」

「トム、お前、あいつを何と解いたかい。」

「何とも解けねえよ、ジョウ。」

「同じことをいつてゐらあ、」車掌は考へ込んでゐた。「おいらもその通りだつたからな。」

ジェリイは霧と暗黒の中に一人とり残されると、一寸馬から下りて、疲れきつた今を樂にさせてやるばかりでなく、自分の顔の泥を拭いたり、半ガロンも入りさうな帽子の縁から霧の滴を振ひ落したりした。ひどく泥のかゝつた手に手綱をかけた、郵便馬車の車輪がもう聞こえなくなり、また夜がすつかり靜まつてしまふまで立つてゐたが、やがて身を返して丘を下り始めた。

一九一

「テムプル・バーから大急ぎで駆け通して來たんだからな、お婆さん(雌馬ゆるぎ)、平地んところに出るまではお前の前足も當てにやらねえよ、」自分の牝馬を見やりながら、この嗶がれ聲をした使ひの男はかふ言つた。『復活した』つてさ。恐ろしく變な返事だな。そんなことが澤山あつちや上つたりだらうぜ、ジェリイ公！え、おい、ジェリイ公！ひよつと生き返ることなんか流行り出さうもんなら、お前は途方もねえ不景氣な目に會ふだらうぜ、ジェリイ公！(ジェリイは内々死體を發掘して外科醫に賣るのを商賣にしてゐるのでかふいふ)

三、夜の物影

すべての人間が他のすべての人間にとつてあくまで深奥な秘密であり神祕であるやうに出来てゐるといふことは、考へても不思議な事實である。私は、夜、或る大きな都會に入るとき、この黒く密集まつてゐる家屋のどれにもそれ自身の秘密が包まれて居り、どの家屋のどの部屋にもそれ自身の秘密が包まれて居り、そこにゐる幾千幾萬の胸に鼓動してゐるすべての心が、考へてゐる事柄によつては、最も自身に近い者に對してさへも一の秘密であるといふ嚴かな事實に考へ及ぶことがある！こんなことを考へてゐると、何か恐ろしいもの、時には死さへ思ひ合はされることがある。もはや私には、私の愛したこの懐しい書物（心）の頁を繙くことが出来ない、それをすべて讀まうと思つても徒である。もはや私はこの測り知れぬ水（心）の底をのぞくことが出来ない、かつてはそこで、時折光りが差し込んだときに、水底に埋められてある寶やその他の物が沈んでゐるのを瞥見したことがあつたのだが、この書物には弾機がついてゐて、私がたつた一頁讀むと、もう永久に開かれないやうにびんと閉ぢられてしまふやうになつてゐたのである。この水は永遠に凍りついて、光りもその表面にだけしか當らないやうに、又私とその水際に立つても、何も氣がつかないやうに定められてゐたのである。私の友人が死ぬ、隣人が死ぬ、わが意中の最愛の人が死ぬ、それは即ち、いつもその人の心の中に宿つてゐた秘密——そして私が一生涯、自分の心の中に持つてゐなければならぬ秘密——を少しも探知出来ないやうに封じ籠めて永遠に保存することを意味する。私が今通つてゐるこの市（倫敦）の何處かの墓地に行つて見れば、成程そこに永眠してゐる人の魂は不可思議で計り難いにはちがひないが、でもそれは、生きて多忙な生活をしてゐる市民が、その心の一番奥底に於いて、私にとつて一の不可思議であり、或は私が彼等にとつてさうであるよりも以上に、不可思議で測り難いものであらうか。

この、先天的な。他人に譲ることの出来ない性質といふ

— 10 —

ものは、あの馬に乗つてゐる使ひも、國王や、大宰相や、倫敦中で第一の豪商も全く同じものを持つてゐた。又同様に、がたがたと進んで行く一臺の古い郵便馬車の狭苦しい天地に閉ぢこめられてゐるあの三人の旅客も、その通りであつた。たとひ彼等が、各々六頭曳きとか六十頭曳きとかの自分自身の馬車に乗つて、隣りの人との間に一の州ほどの廣い間隔をとつてゐても、お互に、對手が神祕不可思議に思はれることに變りはないのである。

馬に乗つた使ひの男はゆつくりと引き返して行つた。そして随分何度も路傍の酒屋に立ちよつて一杯飲んだが、何やら心に思案してゐることがあるらしく、あくまで帽子を眼深に引下げてゐたさうな様子をしてゐた。彼の眼はかふいふ帽子の被り様と大へんよく似合つてゐる、一寸見では黒眼で、色にも形にも深いところがなく、その上兩方ともにひどくくつき合つてゐる、——ゐはゞめいめい、あまり遠く離れてゐたら、何か嗅ぎつけられはしまいかと心配してゐるかのやうである。その眼は、三角の痰壺のやうな、古い縁のそり返つた帽子の眞下、顎から咽喉をつゞみ、殆んど本人の膝のあたりまで垂れさがつてゐる大きな襟卷の、眞上に、胡散くさゝうな表情を見せてゐる。足をとめて一杯やるときは、彼は右の手で酒を注ぐ間だけ、左の手でこの襟卷をかきのけるが、それがすむと直ぐ、又もとのやうに包んで置く。

「いけねえぜ、ジェリイ公、いけねえぜ！」彼は馬を歩ませながら、頻りに同じことばかり考へ返してゐた。

「ジェリイ公、そいつアどうもお前にやいけなからうぜ！お前は正直な商賣人なんだもの、ジェリ

イ公、そいつアお前の商賣にや向かなからうぜ！『復活した』つてよ！生き返るつてよ！旦那が一杯やつてゐた揚句の出鱈目で、もななくちや助からねえぞ！」

この自分の言葉が彼の心をひどく悩ましたと見えて、何度も帽子をとつて、頭を搔かずにはゐられないやうに見えた。凸凹に禿げてゐる天邊の外は、硬い黒い髪の毛が一面にもちやもちやと突出つやうに生えてゐて、殆んどその幅廣の、平べったひ鼻のところまでも生え下つてゐた。まるで鍛冶屋の細工のやうで、髪の毛の生えた頭といふよりは忍び返しを打ちつけた塀に似てゐたから、いかに蛙跳び遊戯の名人でも、この男を飛び越すのは世の中で一番危ないことだと言つて、斷つたかも知れない。

彼のもつて歸るこの返辭は、テムプル・バーの傍の、テルソン銀行の戸口にある番所の夜番人に渡し、夜番人が更にそれを中にゐる上役に取次ぐのであつた、彼がこの返辭をもつて馬に乗つて歸る道々、様々な夜の物影は彼にとつてこの『復活した』といふ返辭から現はれた幻影のやうに思

— 11 —

はれ、馬にとつては又、馬だけに分る様々な不安の種があつて、それから出た幻影のやうに思はれた。かふいふ不安の種が澤山あつたらしく、馬は道傍の物影に一々おびえてゐた。

その間、例の郵便馬車は、互ひに素姓の分らない三人の合客を乗せたまゝ、重い足竝で、揺ぶつたり、がたつかせたり、跳ね上つたりしてその厄介な道を進んで行つた。この人々の前にも、同じやうに、様々な夜の物影が現はれてゐたが、それは寢ぼげ眼と、とりとめもない思想が暗示した通りの姿をしてゐた。

テルソン銀行は、馬車の中で大繁昌をしてゐた。(ローリイが夢を見てゐる) この銀行の旅客が——彼は吊革に片腕を通してゐた、この吊革は、馬車が特別ひどく揺ぶれたときに、隣の客にぶつかつてその人を隅の方に押しつけないやうに、車内に設けられたものである、——眼を半分閉ぢて坐つたまゝこくりこくりやつてゐると、小さな馬車の窓や、ぼんやりと窓越しに光つてゐる馬車洋燈、又は向ふに坐つてゐる客の大きな包物などが、銀行になつて、盛んに取り引きをやり出した。馬具のがちやがちやいふ音が金貨銀貨のちんちんいふ音になる、國內にも國外にも手廣く取引關係のあるあのテルソン銀行が、今までにその三倍の時間内にも支拂つたことのない程澤山の爲替手形を、わづか五分間のうちに支拂ふ。と、今度は、テルソン銀行の地下金庫、しかもこの旅客の知つてゐる(非常によく知つてゐる)高價な品物や、祕密の品物の納まつた地下金庫が、彼の前に開いてゐる、彼は大きな鍵と、細々と燃えてゐる蠟燭を手にして、その中を見廻つて歩く。と、それは、彼が前に見廻つたときと同じやうに、安全で、堅固で、全く無事であることがわかる。

だが、銀行は殆んど絶間なく彼の傍にあり、馬車も(阿片を飲んだとき起る苦悶のやうに、まことに朦朧げではあるが)いつも彼の傍にあつたけれども、終夜彼の心に絶えず往來してゐたもう一つの印象の流れがあつた。今彼は、或る人を、墓場から掘り出しに行くところだつた。

さて、彼の前に現はれた澤山の顔のうちの何れがその埋められてゐる人の本當の顔であるか、夜の物影はそれを示さなかつた、だがその澤山の顔はどれも年の頃四十五ぐらゐの男の顔であつた、それが主に違つてゐるのは、その現はしてゐる感情と、その瘦せさらばつた物凄く有様との爲めであつた。自尊、輕蔑、反抗、頑固、屈從、哀哭などの顔が、交る交る現はれると共に、落ちくぼんだ頬、死人のやうな顔色、瘦せこけた手や指などの様々なものが交る交る現はれた。だがその顔は大體同じ顔で、どの頭も年に似合はず眞白になつてゐた。この寢ぼうけた旅客は、何

— 一一 —

度も何度もこの幽霊にかふ尋ねてみた、——

「何時頃から埋められてゐたんです。」

答へは、いつも同じことである、「まあ、ざつと十八年ぢや。」

「掘り出されるなんて望みはまをすつかり思ひきつたんですか。」

「とつくの昔に。」

「あなたは今度復活つたことを知つてゐますか。」

「皆がさういふよ。」

「生きたいことは生きたいでせうね。」

「何ともゐへない。」

「あの女をあなたのところへ連れて來ませうか。あなたの方から會ひに行きますか。」

この問に對する答へはいろいろ區々であつた。時には途切れがちに、「まあ待つて貰はふ！あまり早くあの娘を見たらわしは死んでしまふ、」といふ答へもある。時には、やさしい涙の雨のうちにかふ答へたのもある、「わしをあの娘のところへ連れて行つてくれ、」といふのであつた。時には途方に暮れたやうにして、「わしはそんな女は知らん。何のことだか、ちつとも分らない、」と答へるのもあつた。かふいふ空想の會話をかはした後で、旅客は、この哀れな人を掘り出してやる爲めに、——或ひは鋤をもつて、或は大きな鍵をもつて、或は両手をもつて——自分の空想の中で、土を掘つて、掘つて掘りぬくのであつた。顔も髪も土だらけにしてやつと掘り出される、と、その男は俄に倒れて塵になつてしまふ。するとこの旅客は、はつと驚いて窓を下ろし、正面から霧と雨を頬にうけては氣を取り直すのであつた。

だが、彼の眼が、霧や雨や、洋燈から洩れ動いてゐる僅かの火影や、ずいずいと後退りして行く道傍の生籬などに向つてゐるときでさへ、いつの間にか馬車の外の夜の影が、馬車のうちの夜の影の仲間に入つて來る。(外をみてゐてもついうとふと夢心地になる) テンプル・バーの傍の眞物の銀行、前日の眞物の取引、眞物の金庫、彼を追つかけて來た眞物の使ひ、彼がもたして返した眞物の返辭、そんなものがすべてそこにある。さういふすべての眞中から、例の物凄い顔が浮び出す、彼はまたもそれと問答をする。

「何時頃から埋められてゐたんです。」

「ざつと十八年ぢや。」

「生きたいことは生きたいでせうね。」

「何ともゐへない。」

掘つて——掘つて——掘り抜く——と、合客の一人が堪りかねたやうに身動きしたので、彼は、はつと氣がついて

— 一二 —

窓を引上げ、品革にしつかりと腕を通して、眠りこけてゐる二人の姿をぢつと見守る。と、また彼の心はいつの間にか二人のことを忘れてしまつて、またも銀行と墓場の方にすべり込んでゐる。

「何時頃から埋められてゐたんです。」

「ざつと十八年ぢや。」

「掘り出されるなんて望みは、まをすつかり思ひきつてみたんでせうね。」
 「とつくの昔に。」

かふいふ言葉が今しがた口から出されたやうにまだ彼の耳に残つてゐるのに、——生れてからこの方、實在の人の言葉を聞いたときと同じやうに、まだはつきりと残つてゐるのに——この疲れた旅客は夜の明けたのに気がついてはつと驚く。と、もう夜の物影は消え失せてゐるのであつた。

彼は窓を下ろして、さし上る太陽を眺めた。そこには山背の耕地があつて、昨夜馬を解いたときに残して置いたまゝの犁鋤が残つてゐた。その向ふは短い雑木林で、そこでは燃え立つばかりの赤や金色がかゝつた黄色の樹葉が、また樹の枝に残つてゐた。大地は冷たく濡れてゐたけれども、空は晴れてゐた、太陽は明々と、朗らかに、美しくさし上つた。

「十八年か！」例の旅客は太陽を見ながらかふあつた。「あり難いお天道様！十八年も生き埋めにされてゐるなんて！」

四、準備

午前うちに郵便馬車が無事にドーヴァに着いたとき、ロイアル・ジョージ・ホテルの給仕頭は、いつもするやうに馬車の戸を開けた。彼はそれを多少儀式張つて大仰にやつてのけた、何故なら、冬季倫敦から郵便馬車で無事にやつて來られるなんてことは、その冒険的な旅客の成功を祝つてもゝ位の出来事だつたからである。

もうその時には、祝福を述べられる冒険旅客はたゞ一人より残つてゐなかつた、他の二人の旅客は、とつくにそれぞれ途中の目的地で馬車を下りてしまつてゐた。馬車の中は黴臭くて、しめつぽい、汚い麥稈が敷いてあり、それに不愉快な臭氣がしたり、薄暗かつたりして、大形の犬小屋に似たやうなものだつた。旅客のローリイは、體を揺りながら馬車から出て來たが、襟巻をぐるぐる巻にし、鏢のびらびらした帽子をかぶり、泥だらけの足をしてゐるところは、これもまた何方かといへば大きな犬に似てゐた。

「明日はカレエへの定期船が出るだらうな、給仕さん。」

一四一

「はいはい、お天氣がもちまして、可成りの風でさへあれば出ますでございます。潮の具合は、午後の二時頃が丁度よろしうございませう、はい。してお寢みは？」

「晩までは寝ないよ、だが寢間と牀屋を頼まう。」

「では朝御飯は如何様で？はい、畏りました。旦那、どうかこちらへ。『コンコード』（室の名）へ御案内だよ！お客様のお鞆と、熱いお湯を『コンコード』へ持つておいで。お客様のお鞆は『コンコード』でお脱がせ申すんだよ。（旦那、上等の石炭で、火がよく燃えてをります。）牀屋さんを『コンコード』へつれておいで。さあ大急ぎで『コンコード』の御用だよ！」

『コンコード』の寢間は、きまつて郵便馬車で來た旅客にあてがはれてゐたので、またこの郵便馬車の旅客は、いつも頭から足の爪尖まで、重くるしく物を巻きつけてゐたので、この寢室は、ロイアル・ジョージ・ホテルの雇人達にとつては妙な興味があつた。それは、この室に入る人々は、いつも同じ型の人間に見えるが、出て來る時には、どの客もそれぞれ變つた人間になつてゐるからである。

そんなわけで、もう一人の別の給仕や二人の若い衆や、幾人かの女中や女主人までが、申し合はせた

から戻つてからはな。」

「へえ、さやうでございませうか。では手前がまた此處にまゐる前のことでございませうね。今ゐます者はまだ誰も參らない前のことで、はい。このジョージ・ホテルもその時分は他の者の經營でござりました。」

「どうだつたらう。」

「どうござりますが、旦那、こりや一つうんと賭けをいたし

一六六

ても宜しうございますが、テルソン銀行のやうなお店なら、十五年はおろか、五十年前からでも警昌してゐらつたのでございませうね。」

「それを三倍して、百五十年と言つてもゑゝよ、それでも出鱈目ぢやなからう。」

「おや、左様で！」

給仕は口と眼を一緒にまん圓くして、卓子から身を退き右の腕から左の腕へ卓巾を置き換へて、樂な姿勢を取つた。そしてまるで物見櫓か展望塔からでも眺めるやうに、お客が飲み食ひするのを見おろして立つてゐた。これがいつの時代でも變らぬ給仕人達の昔からの習慣である。

ローリイは朝飯をすますと、濱邊へ散歩に出かけた。ドーヴァの小さな、狭い、曲りくねつた町は、濱側からづゝと奥の方にかくれて、たゞまるで海邊に巣くふ駝鳥のやうに、頭だけを白聖土の崖に突込んでゐた。濱邊は、波のつくつた砂山と亂暴にころがつてゐる石塊の沙漠であつた、海は勝手な眞似をしてゐた、その勝手な眞似といふのはつまり破壊であつた。海は町に向つて吼え狂つた、崖に突きかゝつては吼え狂つた、そして無二無三に海岸を突きくづした。家々の間の空氣はひどく魚臭さゝるもので、丁度病身な人間が潮を浴びに飛び込むやうに、病氣の魚が、空氣を浴びに飛び上つたのではないかと怪しまれるほどであつた。この港では、漁業する者もほんの少しはあつたが、夜になつて、ぶらぶら出かけて海の方を眺めてゐるものゝ方がづゝと多かつた、殊に潮がさして來て、満潮に近くなるときには多かつた。(夜間密輸入を商賣にする者の方が多い、満潮に乗じてやるのでかふいふ)これといふ商賣もしてゐない小商人が、時々不思議に、大きな財産をつくることがあつた、そしてこの近所では、誰も彼も點燈人夫をよせつけけないのは、全く目立つ現象であつた。(明るくてはうまい仕事が出来ないので)

午後の日が傾いて、暮れてゆくにつれ、これまで、時々は佛蘭西の海岸がよく見えるほど互え渡つてゐた空が、再び霧と蒸氣を帯びて來た、それと共にローリイの考へもまた、曇り出したやうに見える。夜になつて、例の珈琲室の煖爐の前に坐つて、朝食を待つてゐたときと同じやうに夕食を待つてゐるうちに、彼の心はいつの間にか、赤く活き活きと燃えてゐる石炭の光を浴びながら、いそがしげに掘つて、掘つて、掘りぬいてゐた。(つとむとして例の夢をまた始めたのである)

晚餐後に上等の赤葡萄酒を一本飲んで、この紅い石炭の光を浴びてゐるのは決して悪くなかつた、たゞその爲めに彼に例の掘り出す仕事を止めさせるやうな、傾きを見せただけのことである。ローリイは長い間手持無沙汰らしく黙つてゐたが、やがて一本傾けつくしてゑゝ色をした老年紳士にきまつて見られるやうないかにも満足げな様子で、愈々

一七

最後の一杯を注ぎ終つたときに、がらがらといふ車輪の音が狭い通りに聞えて、旅館の中庭に、ごろごろと入つて来た。

彼はコップに口をつけないで、下に置いた。「お嬢さんだなー」と彼はゐつた。

數分と経たないうちに給仕がやつて来て、倫敦からお着きになつた、ミス・マネットが、どうかテルソン銀行のお方にお目にかゝりたいと言つてゐらつしやる、といふことを知らせた。

「早いな。」

ミス・マネットは途中で休憩もし、食事も済まして来たので、今は別に何も欲しくない、たゞテルソン銀行のお方がお差支へがなく、會つてやらうときへ仰しやれば、是非今すぐにもお目にかゝりたいと切にお望みだといふのであつた。

名指されたテルソン銀行の紳士は、外に仕様もなかつたので、度胸をすゑた自棄の體でぐいと最後の一杯を飲み干し、例の小さな妙な亞麻色の鬘を耳のところを抑へつけ、給仕についてミス・マネットの部屋へ出かけて行つた。それは大きな暗い室で、黒い馬毛織の布をかけた家具や、重さうな黒ずんだ卓子が幾つか備へ付けてあつて、いかにも陰氣くさかつた。これ等の卓子は油でよく拭き込んであつたので、部屋の眞中の卓子に立てゝあつた二本の長い蠟燭は、どの卓子の上にもほの暗く映つてゐた。恰もその蠟燭は、黒い桃花心木の深い墓穴に埋められてゐて、そこから掘り出されるまでは、光といふほどの光を發することも出来ないかのやうに思はれた。

部屋の中はひどく暗くて、奥まで見すかすのがなかなか困難だつたから、ローリイは、もう可なりすり切れた土耳其絨毯の上を拾ひ歩きして入つて来ながら、一時ミス・マネットは、次の間か何所かに居るのではないかと考へた。だが例の二本の長い蠟燭の傍を通り越してしまふと、初めて、その蠟燭と煖爐の間にある卓子の傍に、十七の上とは思はれない、旅行服を着た若い女性が、麥稈の旅行帽のリボンのところを手にさげたまゝ、立つて彼を迎へてゐるのが見えた。小づくりの、ほつそりした、可憐な姿、豊かな金髪、物問ひたげな様子で彼の眼を見迎へた一雙の碧い眼、またその額、揚げたり響めたりする度に、當惑とも、驚きとも、恐怖ともつかぬ、また單に伶俐なしつかりした注意深さといふだけでもない（そのくせこの四つの表情を皆含んではあるが）一種の表情を現はす不思議な力をもつてゐた（それが、いかにも若々しく滑らかなことを思ひ合はせると）。——かゝいふものをつくづくと見てゐるうちに、忽然と或る鮮かな面影が眼の前に現はれた。それは、靄が烈し

——一八一——

く吹きつける、海の波の高い或る寒い日、矢張りこの同じ海峡を渡る間、彼の腕にしつかり抱いてゐた一人の幼な子の面影であつた。だがその面影も、まるで彼女なうしろにある氣味の惡い大姿見鏡の面に吹きかけた息のやうに、直ぐに消えてしまふ、その鏡の縁では、黒奴のキューパイ達の病院行列（五六人は頭をもがれ、その他は皆な跛足になつてゐるので）が、『死の海の果物』（食べられない果物、即ち彫刻の果物）を盛つた黒い色の籠を、色の眞黒な女性の神々に捧げてゐる——と、やつと、彼はミス・マネットへ正式なお辭儀をした。

「どうぞお掛け遊ばして。」ひどく爽やかな、氣持のよい、若々しい聲でかふ言つた。アクセントに一寸外國訛があつたが、それもほんの少しであつた。

「お嬢さん、お手に接吻いたします。」ローリイは、も一度正式なお辭儀をして、椅子に腰を下したとき、古風な作法に従つてかふあつた。

「昨日、銀行からお手紙が参りました、何か新しい消息とか——發見とか——がございましたさう

で。」

「いやお嬢さん、言葉は別に問題ぢやありません。どちらだつて構ひません。」

「あの、父の僅かばかりの財産のことださうで、——わたくし、父には一度も會つたことがございませんのですが——と以前に亡くなりましたから——」

ローリーは椅子の上でもちぢした、そして當惑したやうな眼を、例の黒奴のキューピイの病院行列へ向けた。彼等がその變な籠の中に、何か彼の助けになるものを持つてでもあるやうに！

「——それで、わたくしが巴里に參つて、わざはひその用事で巴里までお出で下さる銀行のお方と、御相談しなければならぬのでございます。」

「その男が私なんです。」

「さうでせうと存じて居りました。」

彼女は彼に向つて、腰をまげ、片膝を屈めてお辭儀をした（當時、若い婦人はみなかふいふお辭儀をした）、それは、あなたは私なぞの足元にも及ばない位の世間を知つた賢い方だと思つてゐますといふことを彼に傳へたひ優しい願ひをこめたものであつた。彼ももう一度お辭儀した。

「わたくし銀行の方へはかふ御返事いたしました、何もかもよく御存じで、いろいろと御深切に教へて下さるお方が、わたくしが是非巴里へ參るやうにとのお考へですし、それにわたくしは孤兒で、一緒に行つてくれるお友達もございませんので、今度の旅行の間、その御深切なお方のお世話になれるやうでしたら、どんなに有難いか分りませんと申し上げたのでございます。そのお方はもう倫敦をお立ちになつたとのことでしたが、多分、此處で待ち

——一九一——

合せて頂くやうにと、追ひかけて使ひの人がお願ひしてくれたことと存じます。」

「喜んでお世話いたします。私にしても望外の合せだと思つてゐます。」ローリーはかふ答へた。

「あり難うございます、心からお禮を申し上げます。銀行からのお話では、あなたが今度のこまごました用事をお話し下さいませうで、そしてひどく吃驚するやうなことだから、そのつもりであつてくれなくてはいけないとのことでした。わたくしをすつかり覺悟してをります、それだけに尙更、あのもう、どんなお話だか伺ひいたしたくて、いたしたくて。」

「御尤もです、」ローリーはあつた。「え、さやう——私が——」

彼は一寸言ひよんだ後で、また亞麻色のりりりした鬘を耳のところでをさへて、附け加へた

「切り出しが一寸難しい事です。」

彼はまだ口を開かないで逡巡してゐるうちに、彼女の眼と出會つた。若々しい額をもち揚げて、あの不思議な表情を現はしてゐた、——だがそれはたゞ不思議といふ外に、美しい、特色のあるものであつた、——彼女は手を舉げて、思はず、通り過ぎる物の影をつかむか、引止めるかのやうな手付きをした。

「あの、あなたはまるきりわたくしの知らない方でございますかしら？」

「それぢや、知つてゐるとでも仰しやるのですか。」ローリーは手を擴げて、理窟ほさうな微笑を浮べながら、その手を外まはしに差し伸じた。

彼女は今までその傍に立つてゐた椅子に、物思はしげな様子で腰を下したが、そのとき、眉と眉と

のあひだのいかにも優しい、美しい鼻すぢをした、小さな女らしい鼻の眞上に、例の表情が深まる。彼は彼女の考へこんでゐるのを、ぢつと見守つてゐた、そして彼女が再び眼をあげたとき、言葉を續けた――

「英國はあなたがお育ちになつた國ですから、お若い英國婦人らしく、ミス・マネットとお呼びした方がゐると存じますが。」

「どうぞ。」

「ミス・マネット、私は事務家です。そしてこれから申上げること一つは事務なのです。で、この事務をお聞きになつても、私を物いふ機械だぐらゐに思召して、あまり氣にかけずにゐて下さい、――實際私なんぞは、まづそんなものなんですからね。ではこれから、私の銀行の或るお得意様の身の上話を申し上げることにいたします。」

「まあ、身の上話ですつて！」（眞實の話ではないと思つてきゝ答める）

一一〇一

彼女が繰り返してかふゐつたのを、わざと聞き違へたやうにして、彼は急いで附け加へた――「さうです、お得意様の事です、われはれ銀行業者は、取引をしてゐる方のお得意と申して居りますので。ところでその方は佛蘭西の紳士でした、科擧者で、非常に學識のある――お醫者でした。」

「ボーヴェイ（巴里の西北四十哩にある町）の方ではございせんか。」

「えゝさうです。ボーヴェイの方でした。あなたのお父さんのマネットさんと同じやうに、その紳士はボーヴェイの方でした、あなたのお父さんのマネットさんと同じやうに、巴里でなかく評判の方でした。私の方と近づきになつたのもそこでした。私どもの關係は事務上のことからでしたが、非常に親しくしてゐたゝゝゐてゐました。私はそのころ、佛蘭西の店に勤めてゐたのです、――さう！二十年も勤めてゐた頃でしたかなあ。」

「そのころと申しますと、――何時ゝゝゝございませうか。」

「いやお嬢さん、二十年も昔のお話です。ところで、その方は結婚しました、――英國婦人として、――そして私はその財産管理人の一人になりました。その方の財務は、大抵の佛蘭西紳士や家族方のなさるやうに、全くテルソン銀行の手に委せてありました。そんなわけで、私は、今も昔も何十軒といふお得意様のいろいろの管理人になつてゐます。これは、純然たる事務上の關係で、それには友情とか、特別な興味とかいふやうな感情的なものは何もありません。私は毎日事務を取り扱つてゐる時に、一人のお得意から他のお得意へと移つて行きます、それと同じやうに、私の事務家としての生涯の間も、一人の方から他の方へと移つて來たのです。手短かに申上げれば、私には感情なんてないので、つまりたゞの機械なんです。ところで今のお話は――」

「でもそれはわたくしの父のお話でございませう。そんな氣がして參りました。」――例の不思議なほど奇立たしげな額が、ぢつと彼に向つてその表情を深めた――「母が父の死後僅か二年ぐらゐで亡くなり、わたくしがほんとの親なし兒になつてしまひましたとき、わたくしを英吉利へつれて來て下さいましたのは、あなたでございませう。屹度あなたに違ひないと、わたくし存じます。」

ローリーは、彼の手を握らうと眞心こめて差し伸べられた、そのためらひがちな小さな手をとつて、いくらか儀式張つて自分の唇に當てた。それから令嬢を直ぐにもとのやうに椅子に掛けさせ、左手で椅子の背を掻み、右手では、交る交る顎を摩つたり、鬢を耳のところで引つ張つたり、手眞似で自分の言葉を補つたりしながら、腰かけて彼を見

—二二—

上げてゐる彼女の顔を見下して立つてゐた。

「ミス・マネット、いかにもそれは私でした。それ以來つゝと私があなたにお目にかゝらなかつたことをお考へになれば、私が今、自分には感情がないとか、また他の人々とも、單に事務上の關係があるに過ぎんとか申したことが、成る程事實だとお分りになつたでせう。さうです、お目にかゝりませんでしたが、それ以來、あなたはテルソン銀行から後見される御身分でしたし、私はまた銀行の他の事務で忙がしかつたのです。感情！私にはそんなものをもつ時間もなく、機會もありません。お嬢さん、私は一生涯を、大きなお札の皺伸機械を廻して過すのです。」

ローリイは、こんな妙な文句を使つて彼の毎日の仕事の説明をした後で、頭の上の亞麻色の鬘を両手で平らに押しつけた（これは全く無用なことであつた、といふのは、艶々と光るこの鬘の表面はどんなことをしたとて、これより平らにはならないからである）、それからもとの姿勢にもどつた。

「こゝ迄は、お嬢さん、（あなたも仰しやつた通り）あなたのお氣の毒なお父さんの身の上話です。これからが違ふことになります。若もあなたのお父さんが死なれたといふ時に、實際は死んで居られなかつたとしたら——いやさう驚かないで下さい、さう吃驚なすつちや困ります。」

彼女は實際飛び上つた。彼女は両手で彼の手頸にすがつた。

ローリイは、左の手を椅子の背から離して、わなはな震へながら歎願するやうに彼の手を攪んでゐる指の上へのせながら、宥めるやうな調子でかふゐつた。「どうぞ、お氣を鎮めて下さい、——これだつてやはり事務なんです。で今申しましたやうに——」

彼女の様子はひどく彼を不安にしたので、彼は話を止めて、どうしようかと間諛々々してゐたが、やがてまた語り出した。

「今申しましたやうに、若しマネットさんが死なれなかつたとしたら、若し突然人に知らせもせず姿を消されたのだつたら、若し神隱しにでも會はれたとしたら、また若しその恐ろしい居所は分るが、どんなことをしても誰もそこまでは行かれないものだとしたら、或は若し同國人の間に敵があつて、その敵が私の若い時分にあちらの佛蘭西で、どんな大膽な者でも小聲で話すことさへ怖れてゐたやうな特權を使ふことの出来る者で、例へば、白紙の拘禁狀（當時貴族寵臣は白紙の收監令狀を用ひて、任意の名をこれに記入し、裁判を経ずしてその人を投獄し得る無法な權利をもつてゐた）に任意の名を記入するだけで、思ふまゝの期間、人を牢獄といふ忘卻の淵に捨てることの出来る權利をつかつたのだとしたら、そして若しその人の奥さんが、國王や、后や、法廷や、僧侶

—二二—

に夫の消息を聞かしてくれるやうに歎願しても、何の甲斐もなかつたとしたら、——あなたのお父さんの身の上は、つまりこの不幸な紳士である、ボヴェイのお醫者の身の上と同じだつたかも知れませんが。」

「どうぞ、もつとさきをお聞かせ下さいませ。」

「宜しうございます。申し上げませう。だが、御辛抱はお出来でせうな。」

「このまゝで不安な氣持にされるのは厭ですが、話してさへゐたゞければ、どんなことでも辛抱いたします。」

「あなたのお話振りは落ちついてゐらつしやめますね。そしてあなたも——落ちついて参りましたね。宜しい！」(だが、口に言つてゐるほどに彼の態度は満足してゐるとは見えなかつた。)「ほんの事務的な事です。たゞ事務としてお考へ下さい、——是非片づけなければならん事務です。さて、このお医者のお奥さんが、たとひ非常に勇氣のある元氣な方であつたとしても、お子さんの生れる前に、この事件でひどく心痛されたものとしますと——」

「その子供は女だつたんでございますね。」

「女の兒でした。えゝ、だが、これは事務の問題ですよ、——どうか氣を落さないで下さい。お嬢さん、若しこのお氣の毒な御婦人が、お子さんの生れる前にひどく苦しんだので、せめて可愛い子供だけには、自分で味はつたやうな苦惱を幾分でもさせまいと考へて、父親は全く亡くなつたと信じさせて育てようと決心したら、——いやどうぞ跪かないで下さい！これはどうも、お嬢さん、どうして脆いたりなさるんです！」

「後生ですから、ほんたうのことを、おゝ御深切な、お慈悲深いあなた、どうぞほんたうの事を仰しやつて下さいまし！」

「いや事、事務の問題ですよ。そんなことをなさるので、私はすっかり問誤つてしまひます。聞誤つてゐては、どうして事務を片付けることが出来ませう。さ、お互に頭を冷靜にしませう。たとへば今こゝで何片を九倍すれば九片になるかとか、又は二十ギニは何志だとか云ふことを一寸考へてゐたゞければ、氣持が引き立つのですがね。そして、あなたの精神状態についてもつとく安心が出来るんですがなあ。」

かふ頼んだのに對して、直接に返辭はなかつたが、彼女は、彼が優しく牀から起してやると、非常に靜かに腰をかけた、そして彼の手頸を握り締めた手は、そのまゝ離さなかつたけれど、それが前よりづゝとしつかりしてゐたので、ジャーヴィス・ローリイは、多少の安心をすることが出来た。

「それであゝ、それであゝ。しつかりおしなさい！事務

— 一三三 —

ですよ！あなたは事務を控へてゐるのです、大切な事務です。ミス・マネット、あなたのお母さんはあなたに對してかふいふ方針をとられたのです。それで、お母さんは死なれたが、——心を傷めすぎたからだつたと思ひますが——これまで、何の甲斐がなくてもお父さんの搜索を決して忽せにしなかつたお母さんが、あなたにだけは、お父さんが牢獄で間もなく悶死したらうか、それともそこで長いわびしい月日を徒に送つたらうかといふやうな不安な氣持を味はせず、たゞ花のやうに、美しく、幸福に育つやうにと、二歳のあなたをこの世に残されたのでした。」

彼はかふるひながら、ふさふさと垂れた金髪の上に眼を落すと、みひ知れずいちらしい氣持でそれに見とれた。その様子は、彼女のこの髪の毛も若し事情を知つてゐたら、疾うに白髪まじりに變つてゐたかも知れぬのにと考へてゐるやうだつた。

「御存知の通り、御両親には大した財産はありませんでしたが、それは皆、あなたのお母さんとあなたのものにされてゐました。金錢にしる、その他の財産にしる、今改めて發見される譯はなかつたのです、けれども——」

彼は自分の手頸を握つてゐる手に力が入つたのを感じたので、言葉を切つた。彼が特に注意してゐた彼女の額の表情が、今も尚ほ去らずに、卻つて、恐怖と苦痛を現はしてゐた。

「けれども、お父さんがその——發見されたのです。お父さんはまだ生きておいでなんです。さぞ

ひどくお變りになつたことせう。大方、癡人同様かも知れませんが、勿論そんなことのないやうに望んでゐるのですがね。とにかく、まだ生きておいでです。巴里に居る昔の召使の家に引き取られてお出でになります、私達はこれからそこへゐるのです。私は、出来るなら、ほんとお父さんかどうかを確める爲めに、又あなたは、お父さんに生命と愛と義務と安息と慰めを與へる爲めに。」

彼女は、思はずぞつとした。それが彼の全身にも傳はつた。彼女は、まるで夢の中で口をきいてゐる人のやうに、低い、はつきりした、畏怖に打たれた聲で、かふゐつた。

「わたくしは父の幽霊を見に行くのでございます！それは父の幽霊でございます、ほんとの父ではございません！」

ローリイは自分の腕をつかまへてゐる手を靜かにさすつた。

「それ、それ、それ！分りましたね、分りましたね！善い事も悪くも、まをすつかりお話し、てしまひました。あなたはあの氣の毒な、ひどい目に會つたお父さんの

—二四—

處へもう半分來てゐるのです、船路の旅が無事に、それから陸地の旅も無事にすめば、もうぢきに懐しいお父さんの側に行かれるのです。」

彼女は前と同じ調子でかふ繰り返したが、それは囁き聲かと思はれるほど沈んでゐた。

「父の幽霊は一度も來てはくれませんでしたけれど、わたくしはこれまで、自由で、幸福に暮してゐました！」

「も一つだけお耳に入れたい事があります、」とローリイは、彼女の注意を惹くゝ方法として、言葉に力を入れて言つた、「お父さんが見つかつたときには、別の名がついてゐました、御自分の名前は、長い間忘れてゐたか隠してゐられたものでせう、そんなことを今更尋ねたつて、無益どころか有害な位でせう。お父さんが長の年月全く忘れられてゐたのか、それともいつも故意と拘禁されてゐたのか、なんていふことを今更穿鑿してみたつて、これも無益どころか有害でせう。今更さういふ穿鑿するのは危険でせうから、それはきつと無益どころか有害でせう。この問題は、處と方法とを問はず觸れない方が宜しいでせう、そして——とにかくこゝ暫時の間は——お父さんを佛蘭西から連れ出す方が宜しいでせう。——英國人として安全な身であり、又テルソン銀行の者として佛蘭西に非常な信用のある私でさへ、この問題を口にするには、全く避けてゐます。私は公然これに關係したことを書いてある書類は一片たりとも持つてゐません。つまり祕密任務なのです。私の信任状も覺書も皆、『復活した』といふ一行の文句に含まれてゐるのです、この文句はどんな意味にもとられるかも知れません。ときに、どうなすつたのです！おや、お嬢さんは一言も聞いてはゐないぞ！もし、ミス・マネット！」

彼女はあくまで靜かに、聲一つたてず、倒れもせず椅子にかけたまゝ、全く無感覺の様子で、彼の手許にゐた。眼は見開いて彼を見つめたまゝで、また額に刻みこまれたか、烙きつけられたかのやうに見える先刻の表情もそのまゝであつた。彼女が彼の腕にひどくしつかりとしがみついてゐるので、無理にそれを離して、若し彼女に怪我でもさせてはと案じたので、體を動かさずに大聲を出して助けを求めた。

たちまち荒々しい顔付の一人の女が駆け込んで來た、ローリイはあわてながらも、その女が眞赤なこと、髪の毛も眞赤で、非常にきつちりと體にくつゝゐた衣物を着、近衛歩兵隊の大桶帽か（それもひどく大きな）（英吉利の近衛歩兵は大男を選んだので）、大きなステイルトン乾酪のやうな、恐ろし

く大きい帽子を被つてゐるのを見てとつた、——とにかくこの女が、旅館の召使に先き立つて部屋の中に駈け込んで来て、いきなり

—二五—

遅しい手をローリーの胸にのせたかと思ふと、手近な壁に彼を突き飛ばして、この可哀さうな令嬢からその體を引離してしまつた。

「(「いつはきつと男に違ひない!」と、ローリーは壁に打つかつたと同時に、息もきれぎれになりながら、考へてゐた。)

「皆何んてざまをしてゐるんだよ!」と、その女は旅館の召使達を怒鳴りつけた。「わたしの顔を眺めて立つてゐる間に、何故行つていろんな物を持つて來ないんだね。わたしの顔なんか大して見栄えがしないぢやないか、え?何故行つていろんな物を持つて來ないんだつてば。お前さんが氣付薬と、冷たい水と、醋を持つて來ないと、きつと思ひ知らしてあげるよ、早くおし、ほんとに思ひ知らしてあげるから!」

註交の氣付薬を取りに皆は早速ばらばらと駈け去つた。この女は病人を靜かに長椅子の上に臥かせ、非常に上手に優しく介抱した、そしてミス・マネットのことを、『大事な方!』とか、『可愛い方!』とか呼んだり、彼女の金髪を、誇らしげな様子で、念入りに肩の上に振り分けてやつたりした。

「それから、その鶯色衣物のお前さん!」と、彼女は憤然としてローリーの方を向きながら言つた。「いくらお嬢さんにお話し、なくちやならないからつて、殺す程驚かさずに話すことが出來なかつたんですか。御覽なさい、お嬢さんを、こんなに蒼い美しい顔をして、こんなに冷たい手をしてるぢやありませんか。お前さんはこれが銀行家のすることだと仰しやるんですか。」

この難問には返辭が出來ず、ローリーはひどく面喰つて、たゞ少し離れたところから、弱々しい同情と謙遜を現はして、眺めてゐるより仕方がなかつた。一方この強い女は、此處で眼を見張つて愚圖々々してゐようものなら、きつと何か(はつきりはゐはないが)『思ひ知らしてやる』と不思議な脅し文句を言つて、旅館の召使たちを、追つ拂つてしまつてから、規則正しく、徐々に病人を回復させ、彼女を賺して、ぐつたりふな垂れた頭を、自分の肩にのせてやつた。

「もう大丈夫でせうね。」ローリーはゐつた。

「大丈夫だからつて鶯色衣物のお前さんのお世話にはなりませんよ。ねえ、わたしの大事な綺麗な方!」

ローリーは又も弱々しい同情と謙遜とから一寸口ごもつたあとで、かふあつた。

「あなたはミス・マネットの同伴で佛蘭西へゐらつしやるんでせうな。」

「まあ、それがほんたうよ!」この強い女は、かふ答へた。

—二六—

「でもほんたうにわたしが、海を越えて行かなくちやならないことに定つてゐるのなら、あなたは神様がさういふわたしに貧乏鬮をあて、島國なんぞに置いてけぼりになさるなんて思ひますか。」これがまた、なかなか返辭の出來ない難問なので、ジャーヴィス・ローリーは、それを考へる爲めにこの部屋を引き上げた。

五、酒店

大きな葡萄酒の樽が往來に落されて壊れてゐた。それは荷車から樽をおろさうとする途端の出来事であつた、樽は突然轉げ出した、箍が破裂した、そして胡桃の殻のやうに滅茶々に碎けて、丁度酒店の入口のすぐ外の鋪石の上に止まつた。

近くに居合した人間は、働いてゐるものも忘れてゐるものも、誰も彼もそこへ駈けつけて酒を飲まうとかゝつた。往來の粗雑なでこぼこした鋪石は八方にとがつてゐて、丁度それに近よる生き物を何でもかまはず跛にしてやるつもりでわざと仕組まれたのかと考へられるやうなものであつたが、それがこぼれた酒を堰き止めていくつかの小さな水溜を作つてゐる、この水溜りが一つ一つその大きさに應じて、それぞれ押し合ひへしあひする群集に團まれてゐる。男達の中には、跪いて、兩掌を杓子のやうにあはせて啜つてゐるものがある、また酒が指の間からすつかりこぼれてしまはないうちに、彼等の肩越しに顔を出してゐる女たちに、睨らせてやらうとしてゐるものもある。また他の連中は、男も女も、縁の缺けた瀬戸物の、小さな杯を持ち出して、泥糲りの酒を掬ひ上げてゐる、女の頭に被つてゐる手巾を浸して、それで赤ん坊の口の中に絞りこんでやる者もある、一方では酒が流れ出すのを堰き止めようと、小さな泥の堤防を築くものもある、また一方では、高い窓から見物してゐる連中に指圖されて、あちらこちらと走り廻つて、新しい方向に流れ出した、葡萄酒の小さな流れを斷ち切らうとしてゐる。また中には、酒浸しの、酒の渣滓で染つた樽の一片を夢中になつて嘗めて居るものもある。あな、もつと湿りの多い、酒に濡れ朽ちた木片を、さも甘さうに舌うちして噛んでゐるものさへある。こぼれた葡萄酒を流す溝といふものがなかつたので、酒が皆嘗めつくされたばかりか、一緒に泥も澤山吸ひとられたので、往來は掃除されたのかと思はれるほどになつた、——もつともこれは、この土地のことをよく知つてゐる人が、掃除人などゝいふ不思議なものがあるのを、信ずることが出来たとしての話である。

この酒飲み遊びが續く間は、笑ひ聲や嬉しさうな聲や

一二七

——男女、子供の聲々——の甲高い響きが往來にどよめいてゐた。この遊びには亂暴なところが少なく、非常に面白かつた。そこには一種特別な友情があつて、誰も彼も他の人間と仲間になりたがつてゐる様子がはつきりと見えた、それで、うまく飲み當てた者や氣輕な連中達の間では、たうたう大はしやぎに抱き含ふやら、乾盃するやら、握手するやら、はては手と手をつないで十二人ばかりの者が踊り出すといふことになつた。だが酒がなくなつて、それまで酒が一番澤山溜つてゐた場所が人の指で焼網模様引掻き蹟をつけられた頃になると、このお祭り騒ぎは、始まつたときと同じやうに突然止んでしまつた。薪に鋸を突き立て、切りかけたまゝで出て來た男は、またもその鋸を使ひに戻り、戸口の踏段に熱灰の入つた小さな壺を置いて來た女は——彼女は、それで自分や子供の饑えた手足の指の痛みを和げるつもりであつた——また、その壺のところへ戻り、兩腕をむき出し、髪を縛らし、蒼白の顔をして、穴倉から冬の日向の中に這ひ出して來た男は、また穴倉へ引つ返した。そして、この場所にとつては、日光よりもつとふさはしく見える暗澹とした氣分に、鎖されるやうになつた。

この葡萄酒は赤葡萄酒で、それがこぼれた巴里郊外、サン・タントアヌの狭い町の地面は赤く汚れたのであつた。その爲めに、數多の手や顔や裸足や木履なども赤く汚れた。薪を挽いてゐた男の手は、

その薪の上に赤い痕をつけた、赤ん坊をあやしてゐた女の額は、彼女の頭に再び結かれた襪褌手巾についた汚染で汚れた。樽の薄板を貪るやうに嚙つた連中は、口の周圍に虎のやうな赤い汚染を残してゐた。そんなに口を汚してゐる背の高い一人の剽悍者は——彼の頭は、寝帽子代りの長い汚れた袋の中に入つてゐるといふよりも、そこからむしろはみ出てゐるとひつた方があつた——指を泥だらけの酒の渣滓の中に突つこんで、塀の上に『血』と、拙い字で書いた。

やがて、また葡萄酒（血）が往來にこぼされ、その汚染が、こゝにゐる多くの人々を赤く染めるやうな時が來なければならなかつた（革命が來ることの豫言、このサン・タントアヌが革命の直接行動の發源地となつた）。

一時の日光に照されてその顔から吹き拂はれてゐた暗雲が、今またサン・タントアヌにかゝつて來ると、その暗澹さがひどくなつた、——寒さ、汚穢、病氣、無智及び窮乏こそ、この聖人の御前に伺候する貴人であつた！——何れも非常な權力のある貴族であつたが、とり分け勢力ある者は、最後の『窮乏』であつた。挽臼で恐ろしく挽かれた人間の見本が、——その挽臼は、全く老人を挽いて若くしてやるといふお伽話の挽臼ではなかつたので、（老人を挽いて若くする石臼の話は、獨逸のお伽話から來たもの）——あらゆる隅々で震へてをり、あらゆる家の戸口

——二八一——

を出入してをり、あらゆる窓から覗いてをり、風にばたばたする、名ばかりのあらゆる上衣を揺り動かしてゐた。かふいふ人々の精根を磨り枯らした挽臼は、若者を老人にする臼であつた、子供達も老人くさい顔付をして、沈んだ聲を出した、そして子供の顔にも大人の顔にも、『飢ゑ』といふ看板がかゝつてゐて、それがありとあらゆる年波の皺を刻まれてゐる上に、なほ新らしく加はつたのである。これは到るところ大はやりの看板であつた、飢ゑは高い家から突出された物千竿と綱にかゝつてゐる見すばらしい衣物にも讀まれた、藁や襪褌や木片や紙片とゝもに、そんな衣物の補布となつた、飢ゑは人が挽き斬つた極く歩しばかりの薪の一片にも見えた、飢ゑは煙の立たない煙突の上から下を睨んでゐた、そしてどんな廢れ物の中にも食へさうなものが何一つ落ちてゐないこの汚い通りから飛び立つた。飢ゑはパン屋の棚の看板で、ほんの少しゝか乗つてゐない粗惡なパンの小さな一片々にさう書かれてゐた、それから腸詰屋の店では、頻りに賣り出してゐた死犬の肉の料理のどれにもさう書かれてゐた。飢ゑの乾枯びた骨が、くるくる廻る圓筒鍋の中で焼ける胡桃と一緒に鳴つた、飢ゑは、油を惜しみながらやつと幾滴かで揚げた皮ばかりの馬鈴薯の一片々にまで入り込んでゐた。

飢ゑの住家は、すべての點でそれに適ふやうに出來てゐた。胸の惡くなるやうなものや惡臭などに満ちてゐる狭い曲りくねつた往來、それから別にくつもに分れてゐる狭い曲りくねつた巷路、何處も何處も襪褌と寝帽子の人間が一杯ある。何處も何處も襪褌と寝帽子の臭氣がする。眼に觸れるすべてのものが、何やら考へ込んだ様子で、それが險惡らしく見える。住民は獵師に追ひつめられたやうな様子をしてゐたが、そのうちにも、いよいよとなれば噛みついてやるぞといふ幾分の野獸氣質がほの見えてゐる。元氣なく、こそこそと歩いてはゐたが、中には火のやうな眼光がないでもない。こみ上げて來るものをぐつと一文字に食ひしばつた蒼白な脣がないでもない、また中には、彼等が自分がかゝるか、人をかけてやるか二つに一つだと思ひこんでゐる絞首臺の繩のやうな皺を額に寄せた者もある。商賣の看板（ほとゝ店の數と同じ位の）はどれもこれも無慈悲に『窮乏』を説明したものである。屠獸商と豚肉屋の繪看板には、申しはげばかりの貧弱な肉片が描かれてゐる、パン屋ではまづさうなパンの一番ひどいところを描いてある。酒店では人々が一杯やつてゐるところをぞんざいに描い

た看板を出してゐるが、その中の人物は薄い葡萄酒やビールの量りのわるいのをぶうぶうひながら、互ひに物凄い顔をしながら打ち解けた様子をしてゐる。道具類や武器の看板の外には、景氣よく書かれてゐるものは何一つない。たゞ勿物

— 二九 —

師の小刀や斧は鋭く光つてゐる、鍛冶屋の鐵槌は重さうに見える、鐵砲店の積荷はいかにも人を殺したさうである。泥や水の小さな溜りが澤山あり、いつでも人を跛足にしさうな舗石道の石は、人道といふものは一切無くて、家の入口のところで急に絶えてゐる。その埋合せといふわけか、水の流れるやうなときには、溝が往來の中央を走つてゐる。——その流れるのは激しい雨降りの後に限つてゐるが、その時にはひどい氣狂ひぢみた勢であべこべに家の中に流れこんで來る、街路を挟んで、間遠に不様な街燈が一つゞ綱と滑車で吊り下げたてゐる、夜になつて點燈人夫がそれを引き下して、火を點けて、また吊し上げると、芯の薄暗い燈火のたよりなきさうな行列が、頭の上の方でふらふらと病みほゞけたやうに揺れるところは、まるで海にでも乗り出した恰好である。いや實際、彼等は涯ない大海に乗り出してゐた（革命の大渦巻）。船も船員も暴風に逢ふ危険を冒してゐたのである。

それは、このあたりの瘦せさらばつた案山子達（貧民）がする仕事もないまゝに空腹を抱へて、長ゐあひだ點燈人夫を眺めてゐるうちに、たうたう點燈法を改良して、彼等自身の暗黒情態を明るくする爲めに、この同じ綱と滑車で人間を吊り上げてやれといふ考へを思ひつくべき時が來る筈になつてゐたからである（革命のときこの街燈柱を利用して即席絞首臺にした）。だがさう云ふ時代はまだ來なかつた、佛蘭西に吹きわたるどんな風も、空しくこの案山子達の檻樓を揺つたばかりであつた、何故なら聲と羽の美しい極樂鳥達（貴族）はまだ何も氣が附かなかつたからである。

この章のはじめに述べた酒店は、角店で、他の店にくらべてその外觀も程度も遙かに立派である。酒店の主人は、黄色い胴衣に緑色のズボンといふ扮装で、店の外へ出てこぼれた葡萄酒の取り合ひを眺めてゐた。

「おいらの知つたこつちやねえや。」と彼は最後に肩をゆすつてかふゐつた。「市場の奴等が仕出かしたんだ。もう一つ持つて來りやぬい。」

こゝで、丁度彼の目が、あの惡戯文句を書きつけた背の高い剽輕者にとまつたので、往來のこつちから、聲をかけた。

「おい、瓦斯、ボール、そんなとこで何してゐるんだい。」

剽輕者は、かふした連中のお定り通り、さも勿體らしくその惡戯書きを指さしてみせた。ところが、それは的是がはづれて見事に失敗した、これもかふした連中のお定りであつた。

「何だつて？ お前が氣狂病院行きのものか。」酒屋の主人はかふいつて、道を横切つて行つて、わざわざ一握りの泥を掬ひ上げ、それを惡戯書きの上に塗つて、すつかり

— 三〇 —

消してしまつた。

「何だつて往來に落書きなんかするんだ。おい、——こゝら、返辭をしな——ほかに、落書きをするところが無えのか。」

かふ叱りつけておいて、汚れない方の手を（多分偶然だつたかも知れないし、又さうでなかつたか

も知れないが) 剽輕者の胸に打ち下ろした。剽輕者は自分の手でそれをぱつと拂ひのけで、ひよいと身輕に上の方へ飛んだ、そして奇妙な踊るやうな恰好で降りるなり、酒に汚れた片方の鞆をほんと投げ脱ぎにして手に受け、それを差し出した。かふ云ふ場合には、狼のやうだとまではひはないまでも餘りひどいふざけ方であつた。

「鞆を穿きな、鞆を、」と對手はゐつた。「酒つてゐふんだよ、酒つて。そこゐらでお終ひにして。」かふ教へておいて、彼は自分の汚れた手を、剽輕者の衣物で拭いた、——彼のせゐでその手を汚したのだからといふので、如何にも悠々と拭いた、それから道を横切つて来て、酒店へ入つた。

この酒店の主人(名はドファルジュ)は、猪頭の、勇俠肌らしひ三十男で、餘程暑がりの性だと思えて、こんな寒い日に、上衣も着ないで、たゞ肩に羽織つてゐた。シャツの袖もまくし上げられて、鳶色の腕は肘まで丸出しになつてゐる。頭には生れつきのごりごりと縮れた短かひ黒っぽい髪の毛より外、何もかぶつてはゐない。全體に淺黒い感じのする男で、美しい限をもつてゐたが、眼と眼の間が、いかにも大膽らしく可成り開いてゐる。概してにこにこ愛想のよさうな様子ではあるが、何處やら執念深さうなところも見える。明らかに強い決心と、確固とした意志をもつた人間らしい。何方側かに淵のあるやうな狭い道を駈け下りるときは會ひたくない人間である、何故ならどんなことがあつても、この男に體を避けさせることは出来ないだらうから。

彼の妻、マダム・ドファルジュは、彼が入つて来たとき、勘定臺の後方の店のところに坐つてゐた。マダム・ドファルジュは、ほゞ彼と同年輩の頑丈づくりの女である。ものをきよろきよろ見る様なことは殆んどないが、油斷のない眼付をして、大きな手には澤山指輪をはめ、しつかりした顔、強さうな目鼻立ちをしてゐる、そして態度はひどく悠然として落ちつき拂つたものである。マダム・ドファルジュには一種の風格があつて、誰でもが、この女ならどんな勘定を預つてゐても、自分自身の越度になるやうな間違ひは、滅多にしないと云ふことが豫知出来るのである。マダム・ドファルジュはひどい寒がりで、體は毛皮で包み、大きな耳環の隠れるほどではなかつたが、頸には華美な肩掛けを仰山に

—三二—

まきつけてゐた。前には編物が置いてある、小楊子で齒をほじくつてゐるので、それを下したのである。右の肘を左の手で支へながら、一心に齒をほじくつてゐたマダム・ドファルジュは、主人が入つて来ても聲を掛けない、たゞ、ほんの一寸咳拂ひをした。だがこの咳拂ひは、黒くくつきりとした眉毛を小楊子越しに僅かに揚げてみせる仕草とともに、彼女の夫に彼が向ふ側の道へ行つた間に誰か新しいお客が入つて来たかどうか、店のお客の間を見まはつて来た方がよからうと暗示したのである。

そこで酒店の主人はぐるりと見廻した、と、彼の眼は隅の方に坐つてゐる老紳士と若い婦人にとまつた。店には他に客もゐた、骨牌をしてゐるのが二人、ドミノをやつてゐるのが二人、勘定臺の傍に立つて、少しばかりの葡萄酒をなるべく長くかゝつて飲んでゐるのが三人ある。主人が勘定臺の後のところを通る途端、その老紳士が若い婦人に眼ませして、「この人のことです、」とひつたのに氣がついた。

「全體そんなところで何をしようつてんだい、」とドファルジュは「こんなに考へてゐた。」おいらはお前達なんか知らないよ。」

だが彼はこの二人の新しい客には氣がつかないふりをして、勘定臺のところまで飲んでゐる三人組のお客と話を始めた。

「どうした、ジャック（ドファルジュを頭とする一種の革命秘密結社の合言葉で、その社員を互ひにジャックと呼ぶ）」二人の中の一人がドファルジュにかぶ話しかけた。「こぼれた酒はもうみんな飲つたのかひ。」

「一滴も残さずよ、ジャック。」ドファルジュが答へた。

この洗禮名（ジャック）の取りやりがすんだときに、マダム・ドファルジュは小楊子で齒をほじくりながらまた一寸咳拂ひをして、僅かに眉毛をあげた。

「滅多にやねえからな。」と三人の中の二番目がドファルジュへ話しかけた。「あの可哀さうな獸物達が多勢で酒の味を占めるなんてことは。酒どころやねえ、黒パンと死ぬことのほかは、何の味だつて知らねえんだ。さうぢやねえか、ねえ、ジャック。」

「さうだとも、ジャック。」ドファルジュはかぶ返辭した。

この二度目の洗禮名を取りやりしてゐるとき、マダム・ドファルジュは、まだあくまでも落ちつき拂つて小楊子を使つてゐたが、もう一ぺん小さな咳拂ひをして、更に眉を少しあげた。

三人組の最後の一人が、空になつ杯を下に置いて唇をなめると、今度は自分の番だといふやうにかぶ話出した。

「うゝ！ますます悪いや！可哀さうな獸物達がいつも

—三三—

口に入れてるなあ、ひどい味のものばかりだ、さうして辛い生命をつないでゐるのよ、ジャック。おいらのいふ通りだらう。なあジャック。」

「お前のいふ通りだよ、ジャック。」ドファルジュはかぶ答へた。

この三度目の洗禮名の取りやりがすんだのは、丁度マダム・ドファルジュが小楊子を下して、眉をきりゝとあげ、椅子のまゝ體を少しごそつかせた時であつた。

「そこゐらで止しときな！成る程な！」と彼女の夫は呟いた。「皆さん——わしの家内だ！」

三人のお客はそれぞれマダム・ドファルジュに向つて帽子を脱つて元氣よく振り廻した。彼女は頭を曲げて、ちらりと彼等の方を見遣つて、その挨拶に返禮した。それから何氣ない風で店の中を一通り見廻し、見たところいかにも冷靜な沈着な様子で編物をとり上げて、餘念もなくそれをやり出した。

先ほどから、よく光る限で彼女の仕事を注意深く見守つてゐた亭主はあつた、「左様なら。それお前達が見たいつてんで、わしがさつき外に出る時にきいておいた獨身者向きの部屋つてのは、五階にあるんだ。梯子段の入口はこの左手につゞいてゐる小さい中庭のところについてゐるから。」かういつて彼は指で示しながら、「この家の窓の近くだよ。あ、それで思ひ出した、お前達のうちの一人はもうあすこに行つたことがあつたんだから、道は分る筈だ。左様なら！」

彼等は酒代の勘定をして、そこを出た。ドファルジュの眼が編物をしてゐる妻君の様子をぢるぢると眺めてゐると、あの老紳士が店の片隅から進み出て、一寸一言お話をと、いひ出した。

「はい、どうぞ。」とドファルジュはあつた、そして老紳士と一緒に徐かに戸口の方へ行つた。

彼等の會談は極めて短かゝつたが、極めて重大なものであつた。老紳士の最初の一言を聞か聞かないかに、ドファルジュは飛び立つばかりに驚いて、ひどく熱心に聞き入つた。一分間とかゝらないうちに、彼は點頭いて出て行つた。すると老紳士は、若い婦人を手招きして、更に二人も出て行つた。マダム・ドファルジュは、眉をきりゝと張つて、輕々と指を運んで編物をしてゐるまゝ、何も見なかつた。

かふしてジャーヴィス・ローリイとミス・マネットが酒店を出ると、つい今しがたドファルジュが他の連中に教へてゐた入口のところで、ドファルジュと一緒に立つた。そこは悪臭のふんぷんする、狭い、黒すゝけた中庭に向いてゐて、ひどく多勢の人間が住んでゐる澤山の折重なつた建物

— 三三 —

に出入りするすべての入口になつてゐる。陰氣な瓦敷きの階段につゞく陰氣な瓦敷きの入口で、ドファルジュはもとの主人の子に對する禮儀として片膝を折つて跪き、彼女の手に接吻した。それは殊勝な行ひではあつたが、そのやり方はちつとも殊勝ではなかつた、數秒の間に驚くほど著しい變化が彼の様子に現はれたからである（貴族の不法を怒る心もえたので）。彼の顔にはにこにこした上機嫌なところがなくなつた、又全然打ちつけた様子も残つてゐなかつた、いかにも祕密ありげな、憤激した、危険な人物になつてしまつた。

「馬鹿に高いんで、ちよつと厄介ですよ。そろそろ始める方が宜うがせう。」と彼等が梯子段を上り始めたとき、ドファルジュは、ローリイに嚴しめ口調でかふあつた。

「二人ですか。」とローリイは囁いた。

「二人ですかつて！お氣の毒だけれど、あの人と一緒にゐる者はありませんよ！」ドファルジュは同じ低い聲で答へた。

「ぢや、いつも一人なんですか。」

「さうですよ。」

「あの人の方でさうしてくれつていふのですか。」

「あの人もさうするより仕方がないんです。わしが初めて會つた時から一人でしたよ。お上がわたしを見つけ出して、あの人を引取るつもりがあるか、生命にかへても祕密にしてくれるかつて聞かれたときが初めてでしたがね、——その時の通り、今もやはり一人なんです。」

「ひどく變つたでせうな。」

「變つたの何のつて！」

酒店の主人は立ち止つて、手で壁を打ち、恐ろしい呪ひの言葉をつぶやいた。それを見てゐると、どんなにはつきりした返答でも、この半分の強さもないだらうと思はれた。ローリイは、自分と二人の連れが上へ上へとのぼつて行くにつれて、益々氣が重く滅入つて來た。

かふいふ梯子やその附屬物は、巴里の古い、人間のもつと澤山住んでゐる處にはよくあるが、これは今では随分惡臭のものにちがひない、だが營時でも、そんな惡臭のものに馴れない、無感覺になりきらない心をもつ人にとつては、實にいやなものであつた。一つの大きな汚い巢のやうな高い建物の中には、小さな都屋が澤山ある——即ち共同の梯子段に向いてゐる戸口の中の一部屋か幾部屋か——それだが、——部屋の上り口には、それぞれの塵芥が山のやうに溜つてゐる、その上、部屋の窓から投げ出される塵芥もあつた。かふして、手のつけやうのなぬ、又その見込みさへ立たない腐敗物の大山が生れるので、たとひ貧乏と窮迫が様々な、無形の不潔物を加へることをしなくとも、その空氣はきつと汚れたことであつたらう。ところが此處ではこの二つの

— 三四 —

惡原因が力を揃へたのだから、もう我慢の出來ないものになつてゐる。かふいふ空氣の中を、塵埃と

毒氣の險しい暗い豎穴（梯子）を通つて行くのである。ジャーヴィス・ローリイは自分自身の不安な心地と、一瞬毎に激しくなつて行く若い連れの昂奮とに負けて、二度程立ち止つて休んだ。この休息は二度とも陰氣な格子のあるところであつた、それは、まだ汚れに染まず力なげに残つてゐた善い空気が逃げ出して、あくまで汚れきつた不健全な空気が入つて来るやうな格子であつた。ごちやごちやした近所の有様は、錆びた鐵棒を通して、目で見るよりもむしろその臭ひで、それと分つた。今立つてゐるところとノートル・ダムの二つの大きな塔との間——その塔の頂より近い、それより低い、人の住む土地には、健康な生活や健全な希望の面影がありさうにも見えなかつた。

たうたう梯子の頂邊についた、皆はそこで二度目の休息をした。だが屋根裡部屋へ行くには、まだ今までよりもつと勾配の急な、幅の狭いもう一つ上の梯子を上らなければならなかつた。この若い婦人に何か質問されることを恐れてゐるやうに、いつも少しづつ皆の先きに立つて、しかもローリイの歩く側ばかりをのぼつて來た酒店の主人は、こゝで振り向いて、肩に羽織つてきた上衣のポケットを丹念に探つて、一つの鍵を取り出した。

「ちや君、戸に錠が下ろしてあるんですね。」ローリイは驚いてかふ訊ねた。

「え、さうです。」ドファルジュは無愛想に答へた。

「あの不幸な紳士をそんなに閉ぢ込めて置く必要があると思ふんですか。」

「わしは鍵をかけて置く必要はあると思ふんです。」ドファルジュは彼の耳にずつと口を寄せてかふ囁き、ひどく眉をひそめた。

「何故です。」

「何故ですつて！あの人はあんなに長い間閉ぢ込められて暮らして來たんでせう、若し戸が開けつ放しになつてゐようものなら、きつと恐ろしくて仕様がないだらうと思ふんです——暴れる——自分の體を八ツ裂きにする——死ぬ——どんな恐ろしいことになるか知れません。」

「そんなことがありますか。」ローリイは大聲を出した。

「ありますかつて！」ドファルジュは、苦々しげに繰り返した。「あるんです。われはれが美しい世界に住んでゐる一方にや、そんなこともあり得るんです、そのほかそれに似たことが澤山あり得るんです、たゞあり得るといふだけぢやない、なされてゐるんです——なされて、ね、そら！毎日あの空の下でゝすよ。惡魔めが萬歳だ！どれ行きませうか。」

—三五—

この答へは極く低い聲で囁やかれたので、一言も連れの若い婦人の耳には入らなかつた。だがもうこの時には、彼女は強い感情のためにわなはなと慄へて、顔には深い心配の色が、殊に何よりも強い恐怖の色が浮んだので、ローリイはこゝで一言三言元氣を引立てる言葉をかけてやるのが自分の義務のやうに感じた。

「しつかりなさい、お嬢さん！しつかり！これだつて事務ですよ！惡むことは一寸で済んでしまひます。たゞ部屋の鬨を跨ぐだけのことで、それで惡むことは済んでしまふんです。それから、あなたがお父さんに對して持つておいでになるあらゆる深切、あらゆる救ひ、あらゆる幸福が始まるんです。こゝにゐる深切なお友達にそつちから手傳つてもらひませう（兩側から彼女を支へたのである）。それで結構です、ドファルジュさん。さあこれからです。事務です、事務ですよ！」

彼等は、そろそろと徐かに上つて行つた。今度の梯子は短かつたので、直きに上りつくした。梯子が急にまがつたときに、突然、或る部屋の入口で、三人の男が戸のそばにびつたり頭を寄せこゝめて、

その内側の部屋を、壁の割れ目からか穴からか、一生懸命に覗きこんでゐるのが彼等の眼に入った。直ぐ手近なところに聲音が聞えると、この三人は振り向いて立ち上つた、それは、先きほどまで下の酒店で飲んでゐた、あの一つ名(ジャック)の三人連れであつた。

「あなた方のお出でにびつくりしたんで、この連中のことをすっかり忘れてゐたんです。」ドファルジュはかふるひ譯した。

「おい皆、あつちへ行つてくれ、わたしたちはこゝに用があるんだから。」

三人は滑るやうにそこを抜けて黙つて下りて行つた。

この屋根裡には他に戸口は見えない上に、酒店の亭主は彼等だけになると、まづ直ぐにその戸口の方に足を向けたので、ローリイは少し憤然とした様子で、小聲で彼にかふ訊いた。

「君はマネット氏を見世物にしてゐるのかね。」

「なあに、今も御覽になつた通り、ほんの少し選り抜きの連中にだけ見せるんです。」

「そりや宜ぬことですか。」

「わしや宜ぬことゝ思つてゐるんです。」

「ほんの少しとはどんな人間です。どうして君は選りぬくんですか。」

「わしは、わしと同じ名前——ジャックといふんですがね——をもつてゐる連中を眞の人間だと思つて選ぶんです、そしてその連中にとつちや、これを見せてやるのが役に立つんです(貴族壓政の實物教訓)。もうこれであつてせう、あなたは

— 三六 —

英吉利人です、だからそんなことア別です。どうか一寸の間そこで待つてゐて下さい。」

言ひかすやうな身振をして、二人を後方に立ち止らせながら、彼は體を屈めて、壁の割れ目からのぞいて見た。そして直ぐに頭をあげて、戸の上を二つ三つ叩く、——それは明らかにたゞ大きな音を立てるだけの目的からである。また同じ目的で、戸の上に鍵を三四度引きずつてから、いかにも不器用に鍵穴にそれを挿しこんで、出来るだけ重さうに廻した。

戸は彼の手でそろそろと内側に開く、彼は部屋を覗きこんで、何かいふ。幽かな聲が何か返辭をする。どちらであつた言葉もほんの一言ぐらゐに過ぎなかつた。

彼は肩越しに振り返つて、手眞似で二人に入れと合圖した。ローリイは令嬢の腰のまはりにしつかり手をかけて、その體を支へた。彼女が今にも絶え入りさうに思はれたからである。

「これが、事——事——事務、事務ですよ！」彼はかふ彼女を勵ましたが、彼の頬の上には事務らしからぬ、ほろりとした滴が光つてゐた。「お入りなさい、お入りなさい！」

「わたくし何だか恐ろしくつて！」彼女は身ぶるひしつゝ答へた。

「恐ろしい？何がです。」

「あの人、父がでございます。」

彼女の様子がこんなである上、案内者がしきりに招くので、彼はもう幾分自暴自棄の氣味で、自分の肩の上でふるへてゐる彼女の腕をぐつと頸に引つけ、少し持ち擧げるやうにして、急いで部屋の中に入れてやつた。そして戸の中に彼女を下ろし、自分にしがみつかせて抱へてゐた。

ドファルジュは鍵を外の鍵穴から引き出して戸を閉め、内側から錠を下ろし、又鍵を引き出して、手に持つた。こんな仕草のすべてを彼は規則正しく、また出来るだけ高い、荒々しい音が立つやうにやつた。やがて彼は部屋を横切つて、ちやんと整つた足取りで窓のある方へ歩いて行つた。彼はそこ

に立ち止つて、顔を振り向けた。

薪や何かの置場としてつくられたぐけに、この屋根裡部屋は、薄暗くぼんやりしてゐた。出窓風の窓は、實は屋根に作りつけた戸で、往來から貯藏品を引き上げるときにつかふ小さなクレーン（起重機）がその上についてゐた。戸には硝子をはめてなく、すべて佛蘭西風の作り方通りに、二枚開きのまん中で閉めるやうになつてゐた。寒さを防ぐ爲めに、この戸の半分がぴつたり閉めきつてある、他の半分が極く細目に開けてあるだけである。かふいふ風に、ほんの少ししか光線が入つてゐないので、最初部屋へ入つたとき

―三七―

には、何も見ることが出来ないほどである、どんな人間でも、こんな薄暗がりの中で細々した細工などをする能力を得るには、どうしても長い間の習慣の力を借りてするより仕方がなかつたらう。しかもかふいふ類の細工が、この屋根裡部屋のうちでなされてゐるのであつた、何故なら、戸口の方へ背を向けて、酒店の主人が彼を眺めて立つてゐる窓の方へ顔を向け、白髪の間が低い腰掛けに坐つて、前屈みになつて、いそがしさうにせつせと鞆を造つてゐたのである。

六、鞆造り

「今日は！」とドファルジュは、體を曲げて鞆を造つてゐる白髪頭を見下してかふあつた。

一瞬間その頭はもちあげられた、そして極めて微かな聲で、まるで遠くからでも言つてゐるやうに、その挨拶に答へた。

「今日は！」

「相變らず精出してやつてゐるな。」（ドファルジュはマネット老人を驚かすまいとしてわざと牢番人のやうに粗暴な言動をする）

長い沈黙のあとで、また一瞬間頭をもちあげて、同じ聲がかふ答へた。

「はい―やつてゐます。」今度は、顔を伏せて仕事にかゝる前に、疲れきつた兩眼で、自分に話しかけた人をぢつと見た。

そのかすかな聲は憐れでもあり、不氣味でもあつた。監禁と粗食の爲めに、幾分さうなつたところはあつたにしても、全く生理的な衰弱のために弱つた聲ではなかつた。特に悲參なことには、彼の聲の弱さが、孤獨で言葉を使はぬといふところから來たことを語つてゐた。それは丁度、遠い遠い昔たてた音の、最後の弱々しい反響のやうなものであつた。人間らしい聲の活氣も響きも、それには全くなかつたので、かつては美しい色彩として感じたものが、今は憐れむべき微かな色に褪せてしまつたのと同じやうな印象を與へた。それはあくまで沈んだ壓しつけられた聲で、まるで地の下の聲かとも思はれた。何の希望もない見棄てられた人間の氣持をひどくよく表はしてゐて、食に飢ゑた旅人がたゞ一人荒野を彷徨ひ、疲れ果てた揚句野末に倒れ、死ぬ前に、故郷と友達とを思ひ出すときの聲がかふもあらうかと思はれた。

數分間は黙々と手を動かすうちにすぎた、と、例の疲れきつた眼がまた見上げた。それは何も興味や好奇心からではなく、先刻自分の眼で見たたつた一人の來訪者が立つてゐた場所がまだ空いてゐないことを、あらかじめ、ぼんやり機械的に感じてゐたからであつた。

―三八―

「こゝへも少し光を入れたいんだが、」この鞆造りから眼を離さずにあたドファルジュが言った。「辛抱が出来るかね。」

鞆造りは仕事を止めて、ぼんやりと聞耳をたてる様子で自分の坐つてゐる方の牀の上を見つめ、同じやうに反対側の牀の上も見つめ、それから顔をあげて話しかけた人を見上げた。

「何と仰しやりましたか。」

「もう少し明るくしても辛抱が出来るだらうな。」

「あなたがお入れなさるなら、辛抱しなくてはなりません。」(しなくてはなりません、といふ言葉に極く微かな影のやうな力を入れて言った。)

先刻から開いてゐる片方の戸がまた少し開けられた、そして暫くの間、その角度のまゝにして置かれた。明るい光線がさつと屋根裡部屋の中に落ちこんで、造りかけの鞆を膝の上に置いて、仕事の手を休めてゐる鞆造りの姿を照らし出した、ありふれた二つ三つの道具や、いろいろな革の切屑が、足もとにも腰掛の上にも散らばつてゐた。彼はぎざぎざに刈つた、餘り長くない白い顎髯を生やし、洞のやうに凹んだ顔に、異常に光る眼をしてゐた。彼の顔が凹んで痩せてゐる爲めに、その眼は、まだ黒いまゝの眉毛ともちやもちやの白髪(ほんとはまだそんな年でもなかつたのだらうが)の下に、ひどく大きく見えた、尤も生來大きな眼ではあつたが、このときは不自然なほど大きく見えたのである。ぼろぼろになつた黄色のシャツが咽喉首のところを開いてゐて、痩せ萎びた體を見せてゐた。彼自身も、その古いツック地の上衣も、だぶだぶの靴下も、身に着けてゐる見すばらしい襪襦布も、長い間直かに太陽の光と外氣にあてられずにゐた爲め、すっかり色があせて、一樣に、羊皮紙のやうなぼやけた黄色に變つてしまつて、今ではどれがどれと見分けもつき兼ねさうになつてゐた。

彼は光線を遮る爲めに目の上に手をかざした、するとその手の骨までが透き通るやうに見えた。彼は仕事を止めて、どつと氣ぬけのした眼をして坐つてゐた。彼は前に立つてゐる人間を見上げるときに、先づ自分自身の足下を見、それから先方の足下を見下してからでないと決して見ない、それはまるで物音を聞いてその場所を感じる習慣をすっかりなくしたものゝやうであつた、彼は先づかういふ落ちつきのない様子をしてからでないと、物も言ふかとも忘れて、話をしなかつた。

「今日のうちに、その鞆を一足仕上げてしまふ積りかね。」と、ローリイに前の方へ来るやうに手招きしながらドファルジュはかふ訊ねた。

「何と仰しやりましたか。」

―三九―

「今日中にその鞆を一足仕上げる積りなのかね。」

「私には積りだなどゝはあへません。大方仕上がるだらうと思ふだけのことです。私には分りません。」

だが、この問ひは彼に仕事のことを思ひ出させた、彼はまた身を屈めて、始め出した。

ローリイは令嬢を戸口に残して、黙つてやつて來た。彼がドファルジュの傍に一二分間も立つてゐたと思はれるころ、この鞆造りは顔を舉げた。彼はもう一人の人間がそこに立つたのを見ても別に驚きはしなかつた、だがその人を見たとき、彼は、片手の指をあてもなく唇に當てた(唇も指の爪も同じやうに青ざめた鉛色をしてゐた)。やがて、その手がぱたりと仕事の上に落ちた、彼はもう一度鞆

の上に屈んだ。この瞥見と仕草とは、ほんの一分もかゝらなかつた。

「そら、お客さんだよ。」とドファルジュはあつた。

「何と仰しやりましたか。」

「お客さんだよ。」

鞆造りは前と同じやうに顔をあげたが、仕事からは手を離さなかつた。

「おい！」とドファルジュはあつた。「こゝにほひの方はない、一寸見ればよい鞆かどうかお分りになるんだ。お前が今こゝへてゐる鞆をお目にかける。どうか、あなた、取つて見てやつて下さい。」

ローリイは鞆を手にとつた。

「それはどういふ種類の鞆か、造り手は誰か、この方に申し上げる。」

鞆造りは何時もよりは長い間黙つてゐたが、やがてかゝ返辭した――

「あなたのお聞きになつたのが何だつたか忘れしました。何と仰しやりましたか。」

「その鞆がどんなものか、この方にお分りになるやうに説明が出来るかつて訊いたんだ。」

「これは御婦人用の鞆です。君が御婦人のお徒歩鞆で、このごろの新型です。尤も私はその新型といふのは見たことはありませんが、自分の手一つを型にして造つたのです。」彼は、かふいつてその鞆をちらと見やつたが、それにはほんの瞬間のみさゝか得意な色が見えた。

「それから造つた者の名前は。」とドファルジュはあつた。

彼は今、手にとり上げる仕事になつたので、右の手の甲を左の掌の中にのせてみ、左手の甲を右の掌の中にのせてみたあとで、片手で髻の生えた顎をぐいと撫でた、そしてこの仕草を瞬時もやめず、順序正しく繰り返した、彼が何かあるふとときにきつと陥る放心状態から呼び戻すことは、非常に衰弱した人間を卒倒から呼び戻したり、或は、

— 四〇 —

ぐんぐん死んで行く人の魂を、何か打ち明け話をさせるつもりで、引き止めようとこゝつたりすると同じことであつた。

「私の名前をお訊ねになりましたか。」

「いかにも訊いた。」

「北の塔の百〇五番です。」(バスチユ獄に監禁されてゐた部屋)

「それだけか。」

「北の塔の百〇五番です。」

吐息とも呻きともつかぬ疲れ切つた音を洩らしたまゝ、彼はまた仕事をしようと身を屈めた。が、やがて沈黙が再び破られた。

「あなたは鞆屋が商賣ではないでせうね。」ローリイはちつと彼を見つめながらかゝあつた。

彼のやつれた眼は、ゐはゞこの問ひをあなたの方で引き受けてもらへまいかとでも頼むやうに、ドファルジュの方へ向いた、だがドファルジュは何の助言もしようとしなかつたので、眼を牀の上に落さうとした途端、問ひかけた人の上に戻つた。

「私は鞆屋が商賣ではないかつてえゝ、私は鞆屋が商賣ではありませんでした。私は――私は、此處で覺えたのです。自分で覺えたのです。私はお許しを願つて――」

かふるひさしたまゝ彼は敷分間ぼかんとしてゐた、そしてその間中、その手を重ねる規則正しい仕

草を絶えず繰り返してゐた。やがて彼の眼は、今しがた視線をそらしたあの顔にそろそろ戻つて來た。彼の眼がその顔にちつと留まると、彼ははつと驚いた、そして眼をさました瞬間に、また昨夜の話を語りつゞける人のやうに、かふ言葉をつゞけた。

「私はお許しを願つて自分で習はふと思ひました。長い間かゝつてやつとのことでお許しを得ました。その時からづゝと、鞆造りをして來たのです。」

彼は、取り上げられた鞆ゆ、取り返すつもりで手を差し出したとき、ローリイはやはりちつと彼の顔を見つめながらゐつた――

「マネットさん、あなたは私のことをちつとも覚えてゐらつしやらないのですか。」

鞆は牀の上に落ちた、彼はかふ問ひかけた人の方をちつと見つめて坐つてゐた。

「マネットさん、」ローリイはドファルジュの腕に手をかけた――「あなたはこの人のことをちつとも覚えてゐませんか。この人を御覽なさい。私を御覽なさい。さ、マネットさん、あなたの心には昔の銀行家、昔の商賣、昔の召使、昔のことが浮んで參りませんか。」

長年の間囚はれてゐたこの男は、ローリイとドファルジュ

一四二

を交る交るちつと見つめて坐つてゐるうちに、長い間掻き消されてゐた、額の眞中の活き活きした熱心な智力の痕が、彼にかぶさつてゐた暗澹たる霧を押し分けてだんだんと現はれ出た。やがてまたその痕は直ぐに曇つて、だんだん微かになり、消え失せてしまつた。だが、たしかにあつたのである。このとき、壁に沿つて彼の顔が見られるところまで忍びやかに歩いて來た彼女の美しい若い顔にも、この表情はすつかりそのまゝ現はれた、――彼女はそこまでやつて來た時、最初のうちこそ、彼を避け、彼の姿を見まいとする爲めではないにせよ、とにかく恐怖半分の同情から手を舉げてゐたのに、今は自分の温かな若々しい胸にあの幽霊のやうな顔を押しあて、愛情の力でそれに生命と希望を返してやりたいと思ふ熱心さの餘りに震はせながらその手を彼の方に差しのべて、ちつと彼を見つめて立つてゐたのである。――彼女の美しい若々しい顔に現はれた表情が（彼よりはちつと強い性質のものではあつたが）、いかにもよく彼に似てゐたので、まるで動く光のやうに、彼から彼女へ乗り移つたものかときへ思はれた。

光のかほりにまた闇が彼を覆ふた。彼が二人を見つめる注意がだんだん朦朧となつた、彼の眼はまた陰鬱なぼんやりした情態になつて、牀の方へ落ちた、そして前のやうに自分のまはりを見廻した。やがて、長い深い吐息とゝもに、彼は鞆を取り上げて、また仕事にかゝつた。

「いかゞです、あの人だといふことがお分りになりましたか。」ドファルジュは囁やくやうにかふゐつた。

「分りました、ほんの一瞬間だけでしたが、最初、私はこりや全く駄目だと思ひましたが、ほんの一瞬間だけたしかに私の昔よく知つてゐた顔を見たのです。しつ！もう少し後へ退きませう。しつ！――」

彼女はもう部屋の壁のところから、彼の坐つてゐる腰掛の直ぐ側へ進みよつてゐた。手を伸ばせば、仕事の上に屈んでゐる自分に觸れることも出来る程に近いところにある人をちつとも氣付かない彼の様子には、何となく畏しあものがあつた。

一言もいはれない、何の音も立てられない。彼女は幽霊のやうに彼の側に立つてゐる、彼は夢中で仕事に屈んでゐる。

やがて彼は手に持つてゐる道具を、造轆用のナイフともち換へる必要が出来た。それは彼女が立つてゐる側とは反対の方にあつた。彼はそれを取り上げて、再び仕事にかゝらうと身を屈めた途端、彼の眼は、彼女の衣物の裾に觸れた。彼は、目を擧げて彼女の顔を見た。傍に見てゐた二人は、はつと驚いてすゝみ出た、だが、彼女は手を動かして二人を止めた。ひよつと彼はそのナイフで彼女を突きはし

— 四二 —

ないかといふ恐れが二人にはあつたのだが、彼女にはなかつた。

彼は恐ろしい眼付で彼女を見つめた、しばらく経つと彼の唇は、何かしら話し始めた、だが何の言葉も出ては來なかつた。が、次第々々に、彼のせはしひ苦しげな息遣ひの途切れ目ごとに、そのいふことが聞えて來た——

「これは何だらう。」

顔には涙を流しながら、彼女は、両手を唇にあて、彼へ送る接吻をした、それからその手を、丁度彼の衰へた頭を抱きしめるかのやうに、ひしと胸の上に組みあはせた。

「あなたは牢番さんの娘さんではないのですか。」

「ゐゝえ。」彼女は吐息をついた。

「あなたは誰ですか。」

また自分の聲の調子が亂れ勝ちで當てに出來ないので、彼女は黙つて彼と並んで腰掛に腰を下した。彼はただちと後退りした。だが彼女は自分の手を彼の腕にのせた。すると、不思議な戦慄が彼を襲つて、體中に傳はるのが眼に見えた。彼は彼女をぢつと見つめたまゝナイフをそつと下に置いた。

長い捲毛にしてゐた金髪を彼女は急いで掻き分けた、それは彼女の頸の上まで落ちて來た。彼は少しづつ手を伸ばして行つて、その髪の毛を手にとつて、ぢつと見入つた。が、さうしてゐる中に、彼の意識はぼうつとなつた、そしてまた深い吐息を洩らして、もとの鞆細工の仕事にかゝつた。

だが長くはなかつた。彼女は彼の腕をはなして、その肩に手をかけた。彼はほんたうに自分の肩にその手がのつてゐるのかどうかを確めるものゝやうに、二度も三度も疑ひ深さうに眺めたあとで、仕事を下に置いて、自分の頸のところに手をやつて、黒ずんだ一筋の紐を外した、それにはたゞんだ襤褸の小片がくつゝゐてゐた。彼はそれを膝の上で丁寧に開けた、中にはほんの少しばかりの髪の毛が入つてゐた、それは昔、何かのはずみに、彼が自分の指に巻きとつた一筋二筋の長い金髪に外ならなかつた。

彼はまたも彼女の髪の毛を手にとつて、それをつくづく眺めた。

「同じぢや。そんなことがあらうか！あれは何時のことだつたかな！どうしたのだつたかな！」

注意を凝すやうな表情が彼の額に戻つて來たとき、彼は同じ表情が、彼女の額にもあるのに氣がついたやうに見えた。彼は彼女を十分光を受ける方へ向けて、彼女の顔をぢつと見た。

「あの晩、わしが喚び出しを受けたときに彼女はわしの肩に頭をのせた。彼女はわしの出かけることを心配したが、

— 四三 —

わしは少しも心配はしなかつた、——それからわしが北の塔に連れて來られたときに、袖の上にこの

髪がついてゐるのをあの人達が見つけた。『これだけは私の手に残して行つて下さるでせうな。これがあつたつて私の體を自由にする手傳ひにはちつともなりません、私の心を自由にしてくれることは出来ませうから。』これがわしのゐつた言葉だ。わしはそれをよく覚えてゐる。」

彼はこれだけの文句を口に現はすのに、幾度も幾度も唇を動かして試した後、やつと言へたのであつた。しかしそれが一度言葉になつて出て來ると、徐々ではあつたが、ちやんと纏つた意味をもつて出て來た。

『どうしてかふなつたのか知らん。あれはあなたとつたのか。』

恐ろしく突然、彼は彼女の方に振り向いたので、傍で見てゐた二人は又もはつと飛び上つた。だが、彼女は彼に掴まれたまゝ何處までもちつとして坐つてゐた、そして低い聲で、僅かにかふいつただけだつた——「お願ひでございませうから、皆さま、どうぞわたくしどもの近くにお寄り下さいますな、何も仰しやつて下さいますな、お動き下さいますな！」

「おや！」彼は叫んだ。「誰の聲だらう、あれは。」

かふ叫ぶとともに、彼は彼女から兩手を離して、自分の白髪頭に當てたと見る間に、氣狂ひのやうに掻きむしつた。とはゐへ、鞆細工以外のことが皆彼から掻き消すやうになくなつた通り、やがてこの狂亂もなくなつた、彼はその小さな包みものを又も折リたゝんで懷ろにしつかりしまはふとしかけた、だがやはり彼女の方を見つめながら、陰鬱さうに頭を振つた。

「いや、いや、あなた若過ぎる、美し過ぎる。そんなことはあり得ない。こゝにゐる囚人が何者だかをよく見て下さい。これは彼女の知つてゐる顔ではない、これは彼女の知つてゐた顔ではない、これは彼女の聞いたことのある聲ではない。いや、いや。彼女のゐたのも——皆北の塔で長い長い年月がたゝぬ前のことだ——幾昔か前のことだ。あなたの名は何とおひひですか、優しい天使さん。」

娘は父の聲音と動作の和らいだのを幸先よしと見て、兩手を訴へるやうに彼の胸にのせたまゝ、彼の前に脆まづいた。

「おゝ、あなた、わたくしの名前や、母が誰で、父が誰だつたかといふことや、またどうして、わたくしが父母のつらい身の上話を知らなかつたかといふことは、いつか又の時に申し上げませう。たゞ今はわたくしお話が出来ません、わたくしこゝではお話が出来ません、今わたくしに言へま

— 四四 —

すのは、どうかわたくしを抱いて、接吻して下さいと願ひするだけのことでございます。どうぞ接吻して下さいまし、接吻して下さいまし！おゝ、おなつかしい！」

彼の冷たい白い頭は彼女の煌々輝く髪の毛と交りあつた、そして彼女の髪は彼を照らす自由の光でもあるやうに、彼の頭を温めて輝かした。

「もしあなたがわたくしの聲をお聞きになつて——ほんとに似てゐるかどうかは存じませんが、似てゐてくれたらと思ふのでございますが——もしわたくしの聲をお聞きになつて、むかしあなたのお耳にとつて美しい音楽だつたそのお聲と幾らか似たところがあると思召しますなら、どうぞお泣き下さいまし、お泣き下さいまし！若しあなたがわたくしの髪にお觸りになつて、あなたが若く自由でおいでだつたころ、あなたのお胸にのせられた最愛のお頭を思ひ起させるものがございませうなら、どうぞお泣き下さいまし、お泣き下さいまし！もしわたくしが、これから先き、出来るだけの孝行をし、眞こゝろからお仕へするわたくしたちの家庭のことをお話しする爲め、あなたのお氣の毒なお心

が悲嘆に枯れてゐるうちに、疾うのむかしに荒れてしまつたあの家庭を思ひ出させるやうなことがございませぬならば、どうぞお泣き下さいまし、お泣き下さいまし！」

彼女は彼の頸をひしと抱いて、子供のやうにわが胸の上で揺つた。

「おなつかしいおなつかしいお父さま、もしわたくしが、あなたの苦しみはもう濟みました、その苦しみからあなたをお救ひに、かうしてわたくしが参りました、わたくし達は平和に安らかに暮す爲めに、英吉利へ参りませうとお話ししたら、たまたもしあなたに、あなたの有爲な御生涯が徒になつたことや、またわたくし達の生れ故郷の佛蘭西があなたをひどくつらい目に會はしたことを想ひ出させますなら、どうぞお泣き下さいまし、お泣き下さいまし！もしわたくしがあなたに、わたくしの名と今も生きてゐるお父さまの名と、もう亡くなつたお母さまの名とを申し上げ、そして、あの可哀さうなお母さまがわたくしを憐んで、お父さまの苦しみを隠してゐた爲め、わたくしがお父さまの爲め終始寝もやらず泣き明かしたこともないのを、あなたの前にひざまづいて、お宥し願はなければならぬのだとお分りになりましたら、どうぞお泣き下さいまし、お泣き下さいまし！お母さまの爲めにまたわたくしの爲めに、お泣き下さいまし！お、皆さま、お、有難い！父の聖の涙が、わたくしの顔の上に落ちます。父のすゝり泣きがわたくしの心にひびきます。お、御覽下さいまし！どうぞわたくし達の爲めに神さまへ感謝して下さいまし、

— 四五 —

まあ有難い！」

彼は娘の腕に身を沈め、彼女の胸に顔を落した。これはいかにも感動すべき光景である、しかも、これまで彼が受けて來た迫害と虐待を思へば、いかにも怖ろしひものがある、見てゐた二人は思はずその顔を隠したのであつた。

屋根裡部屋の静かさが長い間かき亂されずにゐたあとで、そして彼の波打つ胸とふるへる體が、あらゆる嵐の後には必ず來るところの靜穩に長い間まかされてから、——それは人間にとつて、生命を求めこの嵐がやがては靜まり込むにちがひない休息と沈黙の標章であつた、——傍に見てゐた二人は進みよつて、父親と娘とを牀の上から抱き起さうとした。彼はだんだんと牀の上にくづをれたまゝ、疲れきつて昏睡情態に陥つた。娘は彼の頭を自分の腕に休ませようと、彼と抱き合ふやうにして寢たのである、そして彼の上に亂れかゝつた彼女の髪は、彼の爲めに日除けの代りをしてゐた。

「若し父を、かうそつとしまたまゝで、」と彼女は、幾度も鼻をかんだあとで、二人なうへに身を屈めたローリイに手を擧げてゐつた。「直ぐにも巴里を出發する用意が出來ますなら、早速あの戸口から父を連れ出すことが出来るのでございませうけれど——」

「でも、お考へ下さい。お父さんは旅行をしても大丈夫でせうか。」とローリイは訊ねた。

「父にとつて、こんなに怖ろしひこの市に残つてゐるよりは、旅行をした方がまだあゝと存じますわ。」

「なるほど、」跪つて見たり、聞いたたりしてゐたドファルジュはかふあつた。「それだけぢやありません、マネットさんはいろんな理由から、佛蘭西にゐないのが一番あゝんです。それぢや、わしは馬車と馬を雇つてまゐりませうか。」

「どうなると事務です、」とローリイはすぐさまもとの几帳面な態度をとり戻してかふあつた、「もどうしてもしなければならぬ事務なら、私がやつた方が宜からう。」

「では、どうぞわたくし共二人を此處に置いてをひ下さい。」ミス・マネットはかふすゝめた、

「御覽の通り父は大分落ちついてまゐりました、もうわたくしと二人きりになりましても少しも心配はございません。いかゞでございませう。誰も入つて来ないやうに、戸に錠を下して置いて下さいましたら、きつと父は、あなた方が歸つてお出でになるときも、お出かけのときと同じやうに落ちついてゐることはお請け合ひいたしますわ。とにかくあなた方がお歸りになりますまで、父はわたくしがお預りいたしませう、お歸りになり次第、皆ですぐさま父を連れて出ることにはいたしませう。」

ローリイもドファルジュも何方かといへば、この方法は氣

— 四六一 —

がすゝまなかつた、二人のうちどちらかゞ残つてゐる方が賛成であつた。だが彼等は馬車と馬の手配をしなければならなかつた上に、また旅行免狀も手に入れなければならなかつた、もう日は沈みかけ時は迫つてゐたので、やむなく、是非すまされなければならぬ用事を急いで二人で分け、大急ぎで出かけてゐつて、それを果さうといふことになつた。

やがて夕闇が迫つて來るにつれて、娘は頭を父親の側のかたい牀の上に横たへて、ちつと彼を見守つた。闇はだんだん濃くなつて行つた、二人は、壁の割目から燈火がちらちら洩れてくるまで、靜かに横たはつてゐた。

ローリイとドファルジュとは、すつかり旅行の支度を済ました、そして旅行用の外套や膝掛などのほかに、パンと肉、葡萄酒、熱い珈琲までもつてきた。ドファルジュはこの兵糧と、自分の持つて來た洋燈を鞆造りの腰掛の上に置いた。(この屋根裡部屋には藁蒲團よりほかには何にもなかつた) それから彼とローリイとで囚人を起し、手傳つて立ち上らせた。

どんな人間の智慧でも、彼の顔にあらはれた、怯えたやうな、ぼかんと放心した驚きのうちに、彼の心の神祕を讀み解くことは出来なかつたらう。今までに起つた出來事を彼が知つてゐたかどうか、彼等が彼にゐつた言葉を思ひ出したかどうか、自分の自由になつたことを知つてゐるかどうか、それはどんな智慧でも解くことの出来ない疑問であつた。彼等は彼に話しかけようとこゝろをみた、だが彼はひどくまごまごして、なかなか返辭が出来ないので、彼の困惑した様子にゐさゝか氣味わるくなつた彼等は、當分のあひだは彼を試さないことに肌理た。彼は時々兩手で頭を驚つかみにするやうな物狂はしひ失心の仕草をした、こんなことは前には一度もなかつたのである。だが、娘の聲を聞くことだけは幾分愉快らしく、娘が何かいふ度毎にきまつてその方にふり向いた。

長い間壓制的に服従させられて來た人間によく見る卑屈なほど柔順な態度で、彼等が召し上れと言つて差し出したものを飲んだり食つたりした、また彼等が差し出した外套やその他膝掛を着た。彼は娘が自分の腕に手を通すとすぐそれに應じた、そして娘の手を自分の兩手にとつて——放さなかつた。一同は屋根裡部屋から降り始めた。ドファルジュは洋燈を持つて眞先きに立つた、ローリイはこの小さな行列の殿軍になつた。長の廣の梯子をまだ幾段も降りないうちに、マネットは突然立ち止つて、屋根をぢつと眺め、周圍の壁を見廻した。

「こゝを覺えてゐらつしやゐますか、お父さま。こゝを上

— 四七一 —

つて來たことを覺えてゐらつしやゐますか。」

「何と仰しやつたかな。」

彼女がその問ひを繰り返さぬうちに、彼は恰も娘がその問ひを繰り返してきかせでもしたやうに、かふ返辭を呟いた。

「覺えてゐらつしやる？ いや、わしは覺えてゐない。そりや遠い昔のことだつたからな。」

彼が牢屋からこの家に連れられたことについて、何の記憶も持つてゐないことは、彼等にとつて明瞭になつた。彼等は、彼が『北の塔百〇五番』と呟くのを聞いた、また彼が自分の周囲を見廻したの、長い間彼を取りかこんでゐた堅固な城壁を見るためであつたことも明らかであつた。中庭に下りると、彼は本能的に歩み方を變へた、それは吊橋があるかと考へたからであつた。ところが吊橋はなく、往來に馬車が一臺待つてゐるのを見て、彼は覺えず娘の手を放して、またも自分の頭を驚つかみにした。

入口には別に人だかりもなかつた、方々の澤山の窓のどれにも人影が見えなかつた、往來にも偶然通りかゝる者は一人もなかつた。不自然な沈黙と寂寞があたりを領してゐた。唯一人の人が、見れば見られた、それはマダム・ドファルジュであつた——彼女は入口の柱に凭れかゝつて編物をしてゐた、だがそれ以上は何も見なかつた。

囚人は馬車の中に入つた、娘も續めて入つた、が、ローリイの足が階段にかゝつたときに、囚人はさも哀れげに、どうか自分の鞆細工用の道具と造りかけの鞆をもつて来てくれと願つた。マダム・ドファルジュは夫に、自分がそれを取つて來るといつて、編物をしながら中庭を横切つて洋燈の火の向ふに消えて行つた。彼女は忽ちその道具と鞆をもつて來て、馬車の中に渡した、——そしてまた直ぐ入口の柱に凭れかゝつて、脇目もふらずに、編物の手を動かしてゐた。

ドファルジュは馭者臺へ飛び乗つて、「市門までやれ！」とひつた。馭者はびしつと鞭を鳴らした、彼等は、光の弱々しい吊し街燈の下をかつかつと駈け去つた。

吊し街燈の下を——立派な大路になるほどだんだん明るく吊され、惡む通りになるほどだんだんぼんやりと吊されてゐるが——明るい店や、愉快さうな群集や、飾り洋燈のついた珈琲店や、劇場の入口の傍を通り過ぎて、或る一つの市の大門へとついた。その番所には、提燈をもつた兵士がゐた。

「旅行者諸君、旅行免狀は！」

「お役人様、こゝにもつてゐます、御覽下さい。」ドファルジュは馭者臺を降りて、その役人を鹿爪らしく傍の方に連れて行きながらかふゐつた、「これが馬車の中にある頭の白の紳

——四八——

士の旅行免狀です。これは、あの方と一緒にすつかり私がお預りしてゐるんです。そのさるところで——」彼は聲を落した、兵士の提燈がしきりにちらちら動いた、制服を着た兵士の腕が、そのうちの一つの提燈をとつて、馬車の中に差し入れた、その腕の持主の眼が、普通の晝や夜とはちがつた眼付でこの『頭の白い紳士』をぢつと見た。

「宜しい。通れ！」制服の聲である。

「左様なら！」ドファルジュの聲である。かふしてしばらくの間、だんだん光の弱々しくなる頭の上の吊し街燈の點つてゐる下を通つて、きらゝかな星の廣く輝いてゐる下へ出た。

不動な永遠の光にみちた蒼穹のもとでは——これ等の光の或るものは、この小さな地球から非常に隔たつてゐるので、學者の語るところでは、それらの星の光が、果してこの地球を、いろいろ苦しんだり、様々な事をしたたりする人間がある宇宙の一點だと見てゐるかどうか疑問といふが——とにかく

夜の物影はひろく、黒々としてゐた。夜の明けるまでの冷たい、不安な間、何時もこの夜の物影は、ジャーヴィス・ローリーの耳に——今まで埋つてゐて掘り出されたばかりの人と向ひ合はせに坐つてゐて、どんな微妙な精神力が永久にこの人から失はれたか、どれだけ回復される見込があるか、と危んでゐたローリーの耳に、あの古い質問——

「あなたは復活したいとお思ひでせうね。」

と、あの古い返辭——

「何ともあへない。」

それを囁いてゐたのである。

—四九—

第二編 黄金の絲

一、五年の後

テムプル・バーの近くにあるテルソン銀行は、千七百八十年に於いてさへ古風な銀行であつた。それは極めて小さく、暗くて、ひどく醜く、不便であつた。かふした外見からばかりでなく、精神的な特色からいつても非常に古風な銀行で、社員達はその暗いことに誇りをもち、董の醜いことに誇りをもち、その不便なことに誇りをもつてゐたのである。彼等は自分の銀行がかふいふ點で際立つてゐることさへが自慢で、もし銀行にこんないろいろの缺點がなければ、卻つて世間の評判もそれほどのもではない筈だといふ明確な信念に鼓舞されてゐた。これは單に潰極的な信念だけではなく、彼等がもつと便利な設備のある取引場所に行くと、好んで振りまはす積極的な武器でもあつた。テルソン銀行には別にこの上の廣さなどいらぬ、テルソン銀行にはこれ以上の明りなどいらぬ、テルソン銀行にはこれ以上の廣さなどいらぬ、彼等はかふあつた。ノオクス合名會社には必要かも知れぬ、スヌックス兄弟會社には必要かも知れぬ、だが有難いことには、テルソン銀行ではそんなこけ威しなどは要らないのだ——

かふいふ社員の誰でも、もし息子がテルソン銀行を改築する問題を持ち出したなら、その息子を勸當したことであらふ。かふした點でこの銀行はこの國とひどくよく似てゐた、この國は、これまで長い間非常に缺點のあつた、しかもそれだけ尊敬に値するとされてゐたいろいろな法律や習慣を改良しやうなど、言ひ出した息子たちを屢々勘當したからであつた。

かふいふわけで、テルソン銀行は、大威張りでその不便さを何處までも押しとほした。諸君は、低い軋みを立てる馬鹿げて開閉の惡い扉を押し開けると、階段二つほど下り、テルソン銀行に落ちこむ。そして小さな勘定臺が二つ並んでゐる、見すばらしぬ、小さな店の中ではつと正氣に返る、そこではいづれもひどい年寄り達が、諸君の小切手を丁度風がさらさらと描るやうにふるはしたり、ひどく黒ずんだ窓の下で署名を吟味したりしてゐる、この窓はいつもフリート街から泥の驟雨を浴せられてゐる上に、その鐵格子とテムプル・バーの重苦しい影の爲めに、尙更黒ずんだものになつてゐる。若し諸君の取引の都合で、『お店様』（銀行の頭取の意）に會はなければならなかつたら、諸君は後の方にある死刑囚の監房のやうなところに入れられる、諸君がそこで徒費された一生といふことを考へ込んでゐると、やが

て『お店様』が両手をポケットに突っこんで現はれて来る、陰氣くさい薄明りの中で諸君は彼をちらと見る事も出来なかつたらう。諸君の金銀は古い蟲の蝕つた木製の抽斗の中から出たり、また入ったりする、そして抽斗が開け閉めされるたびに、朽ちた木の微塵が諸君の鼻の上に舞ひ上ったり、咽喉の中に飛び込んだりする。諸君の紙幣は、まるでずんずん原料の襤褸に分解してゝもあるものゝやうに、黴臭い匂ひがする。諸君の延金は其處らに見受ける下水溜のやうな處で貯藏される、そして惡氣の浸潤が一日二日のうちに、その見事な光澤を消して終ふ。諸君の證券類は、臺所や洗ひ場を利用して急造された金庫部屋に入れられる、するとその羊皮紙の膏澤がにじみ出て蒸發し、銀行の空氣にまじつてしまふ。諸君の家の記録類の入つてゐる輕函は、二階の室ゐた部屋に抛り上げられる、この部屋にはいつも大食卓が置いてあるが、つひぞ御馳走が置かれたためしがない、千七百八十年だといふのに、この二階では諸君の昔の愛人、或は諸君の子供達によつて諸君宛に書かれた最初の手紙（家族文書）がアビシニアかアシャンシテイなどの邊土にも相應しゐる兇暴な殘忍と兇惡をつくしてテムプル・バーに晒し物にされた首のために窺越しに横目で覗かれる恐怖から、やつと解放されたところであつた。

だが實際、當時、死刑を行ふといふことは、あらゆる商賣、あらゆる職業にわたつて普く流行つた秘訣であつた。テルソン銀行とて決してそれに遅れはとらなかつた。死はあらゆるものに對して自然が下す救濟である、それがどうして國法が下す救濟にならぬ筈があらうか。だからこそ、贋造者は死刑にされた。贋造紙幣の行使者は死刑にされた、地人の信書を不法に開封した者は死刑にされた、四十志六片を盗んだ者は死刑にされた、テルソン銀行の戸口にゐる馬番人が馬を盗んで死刑にされた。贋造貨幣の鑄造者は死刑にされた、すべて『犯罪』といふ全音階中の音を鳴らす連中の四分の三は死刑にされたのである。それは少しでも犯罪を防止する役に立つたわけではない。——卻つて事實はその反對であつたといふことは、注目に値することであつたらう——だがそれは（現世に關する限りでは）一つ一つの訴訟事件の面倒さを一掃してしまつて、それに關係のある問題で、後から始末し直さなければならぬやうなものを残さなかつた。かゝつてテルソン銀行も、その當時、同時代の他の大きな取引場所の例に洩れず、非常に多くの人の命を奪つた、銀行の前に埋められた首が、若し竊かに片付けてしまはれる代りに、テムプル・バーの上に高く竝べられるやうなことがあつたら、それ等の首は、可成り甚しく、銀行の一階の惠まれてゐるほんの僅かな光線の邪魔をしたことになつたであらう（首の山の高さが高いので）。

テルソン銀行では、薄暗い戸棚や檻のやうな處にいかにも窮屈げに押し込まれて、このひどく年寄つた連中が重々しく事務を執つてゐる。若い人間がテルソン銀行の倫敦分店に雇はれても、その人はすつかり老人になるまで何慮かに隠されてしまふ。彼はテルソン銀行のにはひが十分に沁みこんで、青黴が生えるまでは、乾酪か何かのやうに暗い場所に藏つて置かれる。いよいよさうなつてから、彼は初めて出ることを許され、人の前で公然と厚い帳簿を調べて、彼の半ズボンとゲートルの重さをこの銀行の全體の重さに加へることになる。

テルソン銀行の外部に——用があつて呼び込まれない限り、決して内に入つてゐはしなかつた——時に依つては門番にもなれば、走り使ひもするといふ臨時雇ひが一人ゐて、銀行の生きた看板になつ

てゐた。彼は銀行の開業時間のあひだ、使ひに出てゐるときを除くと、決してそこを空けるといふこととはない、彼が使ひに出て留守の時には、彼の倅が代理をした、これは彼にそっくり生き寫しの、十二歳になる薄氣味のわるい人相をした腕白小僧であつた。人々はアルソン銀行が、立派な態度でこの臨時雇ひの男を黙許してゐることを知つてゐた。銀行はいつもこの役をつとめる人間を黙許して來た、そして長い間に、何時かこの男がその役につくことになつた。彼の姓は克蘭チャアとひつた、若い頃、ハウンツディッチの東部教匠の禮拜堂で、代人を立て、後暗い仕事を一切やめると誓つたときにジェリイと云ふ附屬の呼名をもちつた。

こゝに記すのは、ホワイトフライアズのハソギング・スウォード小路にある克蘭チャアの住居の光景で、時刻は、基督紀元千七百八十年の風の強い三月の或る日の朝、七時半過ぎのことである（克蘭チャアは、いつも基督紀元、即ちアノウ・ドミニイといふところをアナ・ドミノオといつてゐた。それは明かに基督紀元は、あの人氣のあるドミノ遊び（トランプに似たもの）發明から始まつてゐるので、これを發明した或る婦人がそれに自分の名（アンナ）をつけたのだと信じてゐた）。

克蘭チャアの、住居の隣り近所は住み心地の良いものではなかつた。間敷は、假りにたつた一枚の硝子のはまつてゐる物置部屋も一間に數へるとしても、みんな二間よりない。だが、その二間がきちんと氣もちよく片付いてゐる。この風の吹く三月の朝、それもまだ早かつたのに、彼が寝てゐる部屋はまをすつかり拭き掃除が出來てゐる。がたがたの松板の卓子には、眞白な、清らかな卓子かけがかけてあり、上には、朝飯につかふコップや皿がならべてある。

克蘭チャアは、出演前のハアレクイン（道化役者）のやうに、

—五二—

つぎはぎだらけの掛蒲團をかぶつて寝てゐた。最初は、ぐつすり眠つてゐたが、だんだんと牀の中で寝返りをしたり、體をうねらせたりし出したかと思ふと、たうたう蒲團の上によつきり頭を出した例の忍びかへしの釘のやうな髪の毛が、まるで敷布をきれぎれに裂き破つてしまひさうな勢ひをみせてゐた。頭を出した途端、彼は恐ろしく立腹したやうな聲でかふ怒鳴つた—

「畜生、あいつまたあんなことをやつてゐやがるな！」

部屋の片隅に跳づいてゐた身装のきちんとした勤勉さうな女が、そのあいつとは自分のことだつたのだと一目で分るほどひどく狼狽して、大急ぎで立ち上つた。

「何だい！」克蘭チャアは、牀の中からきよらきよら長靴を探しながらかふゐつた。「お前またやつてゐたな、え、をひ！」

この二度目の挨拶で『お早やう』を濟ませてから、彼は三度目の挨拶として、女をめぐらして長靴を據りつけた。それはひどく泥だらけな長靴で、この泥だらけといふことが、克蘭チャア一家の經濟情態に關する妙な事實を示すかも知れない、克蘭チャアは、銀行の時間が終へてから、きれいな長靴のまゝで帰宅すること承度々あるが、反對に翌朝起きてから、その同じ轆が泥だらけになつてゐることでも度々あつたからである（銀行の仕事の少ないときは、夜中に體を掘り返して外科醫に賣るといふ昔の商賣をまだやつてゐること）。

「何を、」と克蘭チャアは的を外したので言葉をかへて對手を怒鳴つた。「やゐ、小うるせえ阿魔め、何をしてゐやがるんだい。」

「たゞお祈りをあげてゐたばかりですよ。」

「お祈りをあげてゐたんだと・・・大したもんだ！べつたり坐り込みなんどしやがつて、おいらの

景氣の悪いやうにうつてお祈りをするたアどんな了簡なんだい！」

「お前さんの悪いやうにうつてお祈りしてみたんぢやありませんよ、お前さんの爲めに、よかれとお祈りしてゐたんです。」

「うそをつけ。だがたとへ眞實だからうつて、手前なんぞにそんな眞似をされてたまるもんか。おい！ジェリイ公、お前のおつ母は大したもんだ、父ちやんの景氣がはрийやうにうつて、お禱りなどあげてけつかるんだぞ。をひ小僧、お前は貞女のおつ母をもつたもんだよ。小僧、お前は信心深いおつ母をもつたもんだよ。隅つかへいつちや坐り込んでよ、獨り息子の口からパンとバタがとられてしまふやうにうつて、お祈りをしてゐるんだよ！」

息子のジェリイは（このときシャツを着てゐたが）、これをひどく悪くうつた。それで母親の方に向いて、亂暴な言葉で自分の食物をお祈りですつてしまふやうなことは止して

—五三—

くれと喚いた。

「この自惚れ女め、お前はな、」克蘭チャアは知らず識らず矛盾を犯してかぶあつた。「お前のお祈りの値打がどれほどあると思つてるんだ。お前のお祈りの値打をいつて見ろ！」

「わたしのお祈りはたゞわたしの心から出て來るだけですよ、克蘭チャア。値打つたつて、たゞそれだけのものでせう。」

「それだけのもんだつて、」克蘭チャアは繰り返した。「それぢや、大した値打はないんだな。あつたつてなくつたつて、おいらは祈られたかアねえんだぞ、あゝかひ。我慢がならねえんだ。おいらはお前のそのこそそ禱りで不合せな目をみたかアねえんだ。どうでもお祈りをしなくちややらねえとひぶんなら、ちつたア亭主と子供の爲めになるやうに所るがひゝ、爲めにならねえやうに祈つちやならねえぞ。もしも、おいらに鬼のやうな女房がなかつたならよ、この可哀さうな子供に鬼のやうなおふくろがなかつたならよ、おいらは前週に、あんなに呪はれたり、裡をかゝれたり、信心ごかしに一杯くはされたりして、不合せのどん底にへし込まれる代りに、いくらか儲けたにちげえなかつたんだ。畜生め！」克蘭チャアはかぶあつたが、その間に衣物を着てしまつた。「前の週なんぞ、おいらア信心ごかしや、あれこれの禁厭事で一杯くはされちやつて、可哀さうな正直な商賣人さまの出會すうちでも、いつちひどい損な目に陥されちやつたんぢやねえか！おい、ジェリイ公、お前着物を着てな、おいらが鞆を磨く間、時々おつ母の方に氣をつけてゐな、もつとお祈りをしさうな様子を見せたら、何でもあゝからおいらを呼びな。それから、お前……」彼は又も女房の方へかふ話しかけて、「おいらはこんな風にのろはれるなア御免だよ。おいらア貸馬車のやうにぐらぐらになつてるんだ、おいらア眠り薬でも飲んだやうに眠いんだ、おいらの手足は、痛いところさへなけれや、どれが自分で、どれが他人様だか分らねえ程に働きすぎてるんだ。それだのにおいらの懐ろ具合はちつともよくはならねえ。おいらの邪推ちやねえけれど、お前が朝から晩まであれ（お祈り）をやつておいらの懐ろ具合のよくなるのを邪魔してけつかるんだ、だからおいらはもうあれをやられちや勘辨がならねえ、え、うるせえ阿魔め、さあどうだ、あひ分があるならいつてみる！」

また喚き足りずに、「ウン！さうだ！お前は信心深い方だ。亭主や子供の爲めにならねえやうな眞似をすることはあるめえな、え、おい。あるめえとも！」といふ文句を怒鳴うたばかりか、忿怒の研石車をぶんぶん廻して、いろいろな皮肉の火花をまき散らしながら、克蘭チャアは長靴

を磨いたり、その他勤めに出かけるいろいろの支度にかゝつた。その間ぢう彼の息子は、——彼は父のよりいくらか柔かい釘を植ゑつけた頭と、父に似て互ひにくつきき合つてゐる若々しい眼の持主だつた、——親父の註文通りう母親を見張つてゐた。彼は時々、身支度をしてゐる物置兼の寢間からきつと飛び出して来ては、聲を殺して、

「おつ母、お前はお祈りをしようつてんだね、」といふかと思ふと——「おうい、父ちゃん！」とわざとらしい警告の聲をあげるの、この可哀さうな母親はひどく困つてゐた、子供はこれを眺めては、横着さうに、にやにや齒をむき出して又部屋に飛びこむのである。

克蘭チャアの機嫌は、朝飯の席についたときにも、少しもよくなつてゐなかつた。彼は、ミセス・克蘭チャアが食前のお祈りをあげるのを、特別な憎悪できゝ入つてゐた。

「おい、小うるせえ阿魔！何をしてゐやがるんだ。又やつてゐるな。」

彼の女房はたゞ、食事前の『祝福を願つた』ばかりなのだと言ひわけした。

「やるなつてゐふんだ！」克蘭チャアは、女房のお祈りの利目で眼の前のパンが失くなくなるところを見てやるつもりだともいふやうにあたりを見廻してかふゐつた。「おい、

らは『祝福』つて奴を食つて宿なしになりたかねえんだ。おいらは『祝福』なんかに卓子から食物をさらはれてしまふのは御免だ。黙つてゐろゐ！」

ジェリイ・克蘭チャアは、あまり愉快なこともなかつた宴會で夜通し起きて、もあたときのやうに、恐ろしく赤い眼と無愛想な顔をして、動物園の四足共のやうに朝飯を前にして唸り唸り、食ふといふよりはむしろあんぐり噛みついてゐた。九時近くになると、彼は荒だつた顔付を和らげて、彼の智慧で自分の本性にかぶせることが出来るだけの立派な、商賣人らしい外見をとりつくりつて、その日の勤めにと出かけた。

彼はいつも、好んで、自分のことを『正直な商賣人』と呼んでゐたが、それは格別商賣といはれるほどのものではなかつた。彼の元手は、背のこはれた椅子を短かく切り縮めてつくつた、木の牀几一つだけである、それを毎朝、息子のジェリイが、親父と並んで歩きながら、あの銀行のテムブル・バーに一番近い窓の下まで運ぶのであつた。そこで、手任せに通るかゝりの馬車から徴發した麥稈をつかみ足してこの臨時雇ひの足を冷えないやうに、濡めらないやうにすることが出来さへすれば、それでその日一日の陣地が出来あがるのであつた。かふして、その持ち場を守つてゐる克蘭チャアは、フリート街やザ・テムブルの人達にとつて

は、バー（市門）と同じやうに、よく知られてゐた、——そして、殆んどバーと同じやうに、氣味のわるい様子をしてゐた。

テルソン銀行に入つて行く老人達に三角帽を脱いでお辭儀するだけの餘裕を見て、いつも九時十五分前にこゝに陣取るジェリイは、この風の吹く三月の朝、息子のジェリイを傍に立たせつゝ、同じやうにその持ち場についた。息子は、バーの中までうるふる侵入してゐるか、さもないときにはそのかあひゝ（皮肉）目的にはもつて來るの小さな通りがゝりの子供たちをつかまへて、體にも心にもぴりぴりとこたへるやうな悪戯をこゝろみてゐた。ひどく似てゐる親父と息子が、彼等の兩眼がくつきあつてゐると同じやうにお互の頭を近々と寄せて、黙りこくつてフリート街の朝の人通りを眺めて

ゐる、その様子は、二匹の猿に非常によく似てゐた。父親のジェリイはしきりに麥稈を噛んではずばと一緒吐き出してゐる一方、倅のジェリイのくるくる見張つた眼は、フリイト街のあらゆるものをきよろきよろ眺めてゐると同時に、父親からも離れない。彼等の舉止にかふいふ區々たる差異はあつても、親子の似てゐるところは少しも破れなかつた。

テルソン銀行附屬の、常備の屋内小遣の一人が、戸口から頭をのぞかせた、そして、次ぎのやうな命令を傳へた――

「門番さん、用事だよ！」

「萬歳、父ちゃん！朝つばらからもう一仕事だい！」

若いジェリイは、先づかういつて父親の成功を祈つたあとで、例の牀几に自分で腰を下ろして、父親が噛んでゐた麥稈に親譲りの興味を見せ始めたが、やがてちつと考へ込んだ。

「いつも錆びてらあ！父ちゃんの指は、いつも錆びてらあ！」若いジェリイはかふつぶやいた。

「父ちゃんはあんな鐵錆をどつからもつて來るんだらう。こゝちや鐵錆なんぞちつともくつききはしないんだけれど！」

二、觀物

「たしか、お前はオールド・ベエリイ（裁判所且つ監獄）をよく知つてゐるね。」書記の中で一番年寄つた一人が、走り使ひのジェリイにかふ言つた。

「さやうで、旦那」ジェリイは幾らか片意地らしい態度で返辭した。「ベエリイは知つて居りますとぞ。」

「さうか。それからローリイさんは知つてゐるね。」

「ローリイの旦那様なら、ベエリイよりよつぽどよく知つて居ります。いへ、その、」とジェリイは問題の建物（ベエリイ法廷）で躊躇つく證人のやうに吃りながらかふゐつた。「わしのやう」

―五六―

な正直な商賣人がベエリイを知りたいと思つてゐるよりや、よつぽどよく知つてゐるつて申したんで。」

「よし、よし、そこでな、證人が出入する戸口を探して、番人にローリイさん宛のこの手紙を見せなさい。すると番人はお前を入れて呉れるから。」

「お裁判の場所へでございませうか、旦那。」

「裁判の場所へだ。」

克蘭チャアの二つの眼はお互にいつもより少し餘計に寄りあつて、かふ訊きあつてゐるやうに見えた。「これやどう思つてゐるのかな。」

「わしはその場で待つてゐるんでございませうか、旦那。」彼は眼と眼との談合の結果かふ訊ねた。

「今いふからな。番人はその手紙をローリイさんへ渡すだらう、そこでお前は何でもあゝからローリイさんの注意を惹くやうな身振りをするんだ、そしてお前のあるところをあの人に見せるんだ。それからお前のしなければならんことは、あの人の用事がある迄そこで待つてゐることなんだ。」

「それだけですか、旦那。」

「それだけだ。あの人は手近に走り使ひが置きたいのだ。この手紙には、お前がそこに來てゐるこ

とをあの人に知らせてあるのだ。」

老書記はその手紙を丁寧に折りたぐんで上書きをした。クランチャアは、書記が吸取紙を使ふまで黙つて見てゐたが、やがてかふあつた。

「今朝は贖造事件の裁判をしてるんでせうかね。」

「叛逆罪だ。」

「それや四つ裂きの刑ですな」とジェリイはあつた。「酷たらしめな！」

「法律だよ。」老書記はびつくりした眼鏡を彼の方へ向けてかふあつた。「法律だよ。」

「いくら法律だつて人間を杖にさすなんて残酷でさあ。人間を殺すのだつて残酷だが、人間を杖にさすなんざアあんまり残酷でさあ、旦那。」

「そんなことはないよ」と老書記は返辭した。「法律のことを悪くいつちやいくわん。お前さんは自分の胸と聲に氣をつけるんだ(思ふことをそのまゝ口に出すな)。法律には法律のするやうにさせて置くがひゝ。それだけはいつて置くよ。」

「わしの胸や聲にたゞるのは、旦那、濕氣ですよ。」ジェリイはかふあつた。「わしの商賣が、どんなに濕氣を引っこむものかつてことは、旦那の御推察におまかせ申しますよ。」

「うむ、うむ」と老書記はあつた。「わしどもは誰だつてそれぞれの仕事で飯をくつてゐるのだ。或る人たちは濕氣

一五七一

の多い仕事で、或る人たちは乾からびた仕事でな。さ、手紙だ。頼むよ。」

ジェリイは手紙を受けとつた、そして腹の中では表面に見せた程の敬意も拂はずに、「お前さんも瘦せこけた爺さんだね。」といふ濁り言をたゞきながら、彼に一禮した。そして通りがゝりに、息子に自分の行先きを告げて、出かけて行つた。

そのころ絞罪はまだタイバアンで行はれてゐたので、ニューゲート(一七八三年以後の死刑はこゝでせられた)の外の通りは、後日に其處のつきものとなつた不名譽な評判を受けてはゐなかつた。それにしても、この監獄は非常に惡い場所であつた。こゝではあらゆる亂行や惡事が行はれたし、いろいろな怖しむ病氣が生まれて、囚人にくつゝゐて法廷に入つて來た、時としては被告席から眞直ぐに裁判長閣下をめぐりかゝつて、法官席から彼を引き摺り落しさへした。黒い法冠をかぶつた裁判官が囚人の命數を宣告すると同じやうに、はつきりと自分の命數を宣告するやうなことが一度ならずあつた、中には罪人より先きに死ぬこともあつた(罪人から傳染して)。そのほかこのオールド・ベエリイは、ゐはゞ一種の『死』の旅宿として名高かつた、こゝからは色の蒼ざめた旅人たちが、車や馬車に乗つて絶えずあの世へつゞく急激な旅に出かけた、もつとも二哩半ばかりは天下の往來を通つて行くのだが、これを見て面を掩ふやうな善良な市良はよしあつても非常に少なかつた、——それほど習慣の力は強い、それだけに初めから善い習慣をつけることが益々塑ましくなる。オールド・ベエリイはまた、その曝臺で名高かつた、これは昔の賢明な(反語)制度の一つで、測り知ることの出来ないほどの刑罰を課したものであつた。更にまたこゝは、その答打柱の爲めに名高かつた、これも愛す可き昔の制度の一つで、その行はれるのを見ることは、人の心をひどく情深く柔和しくした。こゝは又、その殺人報償(死に當る罪人を告發するか、又は殺して然るべき人を殺すか、敵にするかして受ける金)の大規模な取引の爲めに名高かつた、これもまた祖先の智慧の一片のあらはれであつたが、自然の結果として、この世で行はれた最も恐ろしい受償犯罪(他から金をもらつてする犯罪)

を續々と導いて來ることになった。全く、そのころのオールド・ペエリイは、『存在するものは皆正し』といふあの格言の最適確な實例であつた、この格言は、『かつてあつたことほ皆間違つてゐない』といふ厄介な結果を含みさへしなかつたら、生ぬるいものではあるが、それだけに動かす可からざるものとなつたにちがひない。

この怖ろしき審判場のあちらこちらに屯ろしてゐる汚い群集を、いかにもこそそ通りぬけるに馴れた人らしく上手に掻き分けて、あのテルソン銀行の走り使ひは自分の探

—五八一—

してゐる戸口を見つけた、そして戸についてゐる落し口に手紙を差し入れた。そのころの人々は、ペッドラム（精神病院）のお芝居を見るのに金を拂つたと同じやうに、このオールド・ペエリイのお芝居を見るのにも入場料を拂つたものであつた。——たゞオールド・ペエリイの餘興の方が遙かに高かつた。それで、オールド・ペエリイの戸口は皆嚴重に番人が置いてあつた、——たゞ、罪人が入つて來る社會の戸口（社會が罪人を生んでこゝによすのでかふいふ）は例外で、これだけはいつも開け放してあつた。

しばらくぐづぐづためらつたあとで、蝶番がしぶしぶ動いて、戸がほんの少しばかり開いた。そして、ジェリイ・克蘭チャアの體だけを、やつと法廷のなかに押し込ませた。

「何が始まつてるんですか、」彼は自分の隣りにゐた男に小さな聲でかふ訊いた。

「まだですよ。」

「何が始まつてる場所なんですかね。」

「叛逆事件です。」

「四つ裂きの事件ですね。」

「えゝゝ」と、その男は、さも楽しみらしくかふ返辭をした——

「奴は棒で連はれて行つて呼吸の根を止め切らない程度で首を絞められるんですね、それから下ろされて、まだ覺えのあるうちに肉をそがれ、臟腑を掴み出されて、眼の前で焼かれる、それからいよいよ首をちよんぎられて、體は四つ裂きにされるといふ段取りですよ。宣告の文句にはさうあるんです。」

「もしその人が有罪ときまつたらつてゐふんでせう？」とジェリイは但しづきを言ひ添へた。

「なあに！皆がきつと有罪にしますとも。そりやもう心配なしさ。」その男がかふあつた。

こゝで克蘭チャアの注意は、手紙を手にもつてローリイの方へ進んで行く番人に向けられた。ローリイは、鬢をかぶつた紳士達のなかにまじつて、卓子を前にして坐つてゐた、彼の近くには囚人の辯護人、——鬢をかぶつた紳士が、書類の大包みを前にして坐つてゐた、その殆んど眞向ひに、これも鬢をかぶつた一紳士が兩手をポケットに突つこんで坐つてゐたが、克蘭チャアが眺めたときも、又その後も、まるで法廷の天井に渾身の注意を集中させでもしたやうに、そこばかり睨んでゐた。ジェリイは無作法な咳拂ひをしたり、顎をさすつたり、手で合圖したりして、彼を探さうと立ち上つたローリイに、やつとそれと氣付かせた、するとローリイは、靜かに點頭めて、また腰を下ろした。

—五九一—

「あの人はこの事件に何か關係があるんですか。」克蘭チャアと口をきいた男が彼にかふ訊いた。

「ちつとも知りませんよ。」とジェリイはあつた。

「それぢや不躰けどが、お前さんが何かこれに關係があるんですか。」

「そいつもまるつきり知りませんよ。」ジェリイはかゝあつた。

このとき裁判官が入つて來たので、法廷に大きなざわめきが起つたが、やがて落ちついた、それやこれやで二人の會話も打ち切りとなつた。間もなく、囚人席が興味を中心となつた。今までそこに立つてゐた二人の牢番が出て行つた、と思ふと、囚人が連れこまれて、囚人席の柵の前に引き据ゑられた。

例の天井を睨んでゐた鬘の一紳士を除いた外のあらゆる人々は、皆彼の姿に眼を見張つた。場内の人間の呼吸といふ呼吸が、波のやうに、風のやうに、火のやうに彼をめぐけて押し寄せた。彼を一目見ようと柱のかけや隅々から、澤山の熱心な顔がさしのべられた、後の列にゐた見物人は、彼の髪の毛一筋でも見逃すまいと總立ちになつた、法廷の平場にゐた人々は、人の迷惑など構はずに前にゐる人人の肩に手をかけて、それを突つかひにして彼を一見しようとかゝつた、足を爪立てたり、少しの出張りでもあればそれに攀ち上つたり、殆んど上り甲斐のないものゝ上にさへのつたりして、彼を餘さず見極めようとかゝつた。かゝいふ連中の間で、ジェリイの立つてゐるのが丁度忍び返しのついたニューゲートの門壁の生きた見本のやうに目だつて見えた、そして來る途中ひつかけて來た一杯の麥酒臭い息を囚人の方にふつかけて、さつきから彼の方に流れてゐた他の麥酒、ジン酒、茶、珈琲などいろいろの波に交ぜ合はしたが、この大波は、汚れた霧となり雨となつて囚人の背後の窓に打つてゐた。

この凝視とどよめきといふのは、二十五歳ぐらゐの日に焼けた頬と黒眼がちの目をした、のびのびとした體つきの、人好きのする顔立ちの若者であつた。身分から見れば青年紳士であつた。彼は質素な、黒つぼい、或は極く濃い鼠色の衣物をきてゐた、黒い長いその髪は、頸の後のところにリボンで束ねてあつた、それは裝飾の爲めといふよりもむしろ邪魔にならないやうにといふ爲めであつた。心の中の感情はどんな體の覆ひを通して表はれるにちがひない通り、こんな場合に表はれた囚人の蒼白い表情が、彼の日に焦げた顛の鳶色を通してあらはれ、靈魂の力が太陽よりも強いといふことを示してゐた。この點を除けば、あくまでも落着いてゐて、裁判官に一禮した後、彼は靜かに立つてゐた。

一六〇一

この囚人をこれ程迄に見つめたり、荒い息を吹きかけたりした人々の興味は、人道を高めるやうな種類のものではなかつた。若しこの囚人がこんなに残酷な刑を宣告されるのでなかつたら、――またこの野蠻な刑の細目の一つでもが免除されるといふ機會がもしあり得たとしたら、――それだけこの囚人のもつ魅力が減つてしまつたことであらふ。言語道斷な寸斷の刑を宣告されようとしてゐる體それが觀物であつた、屠殺され、八裂きにされて末代まで名を残さうとしてゐる人物、それがセンセーションを惹き起したのである。それぞれの見物人がそれぞれの力と技に應じて自分の内心を偽つて、この興味にどんな美しい衣を着せてみても、この興味は、根本に於いては食人鬼のやうなものであつた。

法廷はしんとする！被告チャールズ・ダーネイは、彼を告發した次の勿體ぶつた誇大な告訴に、昨日無罪の抗告をした（以下法官の語）。その告訴の主旨は、彼はかけまくも畏き、叡智聖明云々のわが國王陛下に對する不忠な叛逆者だといふにある、その理由は、彼は種々な場合に、種々な手段、方

法により、かけまくも畏き、叡智聖明云々のわが國王陛下に對して佛蘭西王リュイスの挑んだ戦争に於いて（カナダその他の殖民地の戦争）、彼リュイスを助けた。すなはち、上述のかけまくも畏き、叡智聖明云々のわが國王陛下の國土と、上述の佛蘭西王リュイスの國土との間を往復し、奸悪、不忠、叛逆の限りをつくして、その他さまざまの悪意をつくして、かけまくも畏き、叡智聖明云々のわが陛下がカナダ及び北亞米利加に送る爲めに幾許の兵力を準備してあるかといふことを、上述の佛蘭西王リュイスに洩らした、といふ點である（こゝまでは法官の言葉）。ジェリイは、いろいろな法律上の用語を聞いてだんだん髪を逆立たせ、その頭を釘でも植ゑつけたやうにしながら、それでもこれだけは聞きとることが出来たのでひどく満足を覺えた、そして『上述の』——引切り無しに、一々『上述の』と法官から云はれてゐた——チャールズ・ダーネイが、審問を受ける爲めに彼の目前に立りてゐるのだといふこと、陪審員は就席の宣誓をしてゐるのだといふこと、そして今や検事長が論告を始めようとしてゐるのだといふことを、曲りなりにもやつと呑み込んだのである。

そこに居合はしたすべての人々の心の中で絞罪にされ、斬首され、四つ裂の刑にされてゐた被告は（彼もそのことを知つてゐた）、この立場にあつても臆した風も見せず、別に、わざとらしい芝居のみた振舞ひもしなかつた。彼は落ちついてちつと氣を配つてゐた、眞面目な興味で審問開始のお儀式を見まもつてゐた。彼は兩手を自分の前に置いてある板の上に載せてゐたが、それはあくまで落ちつたも

—六一—

ので、板の上に撒いてある香草の一葉をさへ動かすことはしなかつた、法廷には監獄の惡の空氣と熱病を防ぐ爲めに、一面に香草が撒きちらされ、香醋がふりまかれてゐたのであつた。

囚人の頭の上には、彼を照す爲めに鏡が一面かけてあつた。いまゝでにどれほど多くの惡人、どれ程多くの因果者がこの鏡に盜を映され、この鏡の表面から、またこの世の表面から姿を消したことであらふ。若しこの鏡が、丁度大洋がいつかは自分の呑み込んだ死者を吐き出して再び岸に打ち上げるやうに、それに映つた様々な姿を再び戻し得たならば、この厭はしひ場所はどこなにも恐ろしい幽霊の棲家になつたことであらふ。さすがに、恥辱不名譽の思ひが（その爲めにこの鏡が置かれてゐるのであつた）、囚人の心をちらりとかすめ過ぎたかも知れなかつた。それは兎もあれ、彼は姿勢を一寸動かした途端、顔に落ちる一筋の光線に氣がついて、上を見あげた、そしてこの鏡を見ると、彼の顔にはさつと血がさした、彼の右の手は、思はず香草を拂ひのけた。

この仕草は偶然にも、彼の方から見て、左手になる法廷の方へ顔を向けさせることになつた。丁度彼の目と同じ高さぐらゐの裁判官席の一隅に、二人の人物が坐つてゐるのに彼の目は止まつた、それはひどく早急な出來事であり、又彼の顔色がさつと變つたので、彼にそゝがれてゐた人々の眼が、一齊にその二人の方に向つた。

見物人には、その二人の人物が、二十歳そこそこの若い婦人と、明かに彼女の父親らしく見える一紳士であることが分つた。紳士は、頭髮の眞白な點と、顔に一種言ひ難い緊張をしてゐるのが見える點とで、ひどく目立つた容貌だつた、それも積極的な緊張ではなくて、ちつと考へこんでわれと自分の心に物語るその緊張であつた。この表情がその顔に出ると、彼はいかにも老人に見えた、それが掻き散らされて消えたときには——今、娘に話しかける際に一寸さうしたやうに——彼はまだ人生の盛りを越えてゐない好男子に見えた。

娘は片手を父親の腕と組み合せ、片手はしつかりそれを抑へたまゝ、彼に寄り添つて坐つてゐた。

彼女はこの場の光景が怖しむのと、また囚人が可哀さうでたまらぬ心とから父親にひしとしがみついてゐた、彼女の額には、被告の身の上の危ふさといふ一事以外に何一つ見ないやうな、無我夢中の恐怖と同情の影がありありとあらはれてゐた。これがひどく目だつて、力強く、かつ如何にも飾り氣なしにあらはれてゐたので、今まで被告に何の憐憫もなく、たゞちろちろ眺めてゐた連中も、彼女の爲めに心を動かした、それで、「あの人達は、一體何だらう。」といふ囁きが傳は

―六二―

つた。

走り使ひのジェリイは、彼獨特の流儀で、彼特有の觀察をしながら、夢中に指の鏢を嘗めとつてゐたが、彼等が一體どんな人間だかを聴かうとして頸をのびした。彼の近くにゐた群集はこの問ひを押ししかへし問ひかへして一番前にゐた傍聽人のところまで送つてやつた、するとその傍聽人からその問ひが一層のろろと送り返され押しかへされて來て、たうたうジェリイのところに向いた。

「證人ださうで。」

「どちら側の。」

「反對側の。」

「どちら側に反對なんですわね。」

「囚人に反對な側ださうで。」

これまで八方に眼を配つてゐた裁判官は、検事長がその舌鋒を振つて絞首素をなひ、首斬斧を覗ぎ、絞首臺に釘を打ち込まうと立ち上つた時、その眼をもどして自席に凭れて、自分の手の中にその生命を握つてゐる囚人をば、ちつと見やつた。

三、失望

検事長は陪審席に向つて次のやうな事を報告しなければならなかつた。即ち、彼等の前に立つてゐる囚人は年こそ若い、叛逆運動の實行に於てはなかなか老巧であり、その爲めに彼の生命を奪はざるを得ない。われ等の公敵と彼が通信してゐることは、昨日今日に始まつたものではない、昨年、または一昨年に始まつたものでさへもない。被告がこゝで明白な報告をなすことが出来ぬはずの祕密の用事を帯びて、佛蘭西と英吉利の間を往復することを習慣的にやり出したのは、それよりもずっと前からだつたにちがひない。若し叛逆的行爲なるものが成功する素質を本質的にもつてゐるものとすれば（幸にしてさういふことは決してないが）彼の用務が持つてゐる眞の奸惡なり罪蹟なりは發見されずに濟んだかも知れない。ところが神の攝理は、恐怖にも批難にも動かされない或る人間の心をかりて、この囚人の計畫の真相をかぎ出させた上、その冥罰に戰慄させて、その人間をして、わが陛下の總理大臣及び最も名譽ある樞密院にそれを曝露させ給ふた。この愛國者を彼等の前に出頭させることにしよう。彼の立場及び態度は、概して天晴なものである。彼は囚人の友人であつたが、呪ふ可き、又われはれから見て祝す可き或る機會に、彼の大それた行爲をかぎつけるや、もはや自分の胸に友人としての愛をもつて行くことの出来ないこの叛逆者を、國家の神聖な祭壇に捧げようと決心した。昔の希臘や羅馬に於ける如く、若しわがブリテンにも、公共の恩人に對して肖像をつくる

―六三―

法律があるとすれば、この光輝ある市民はたしかに、その像を建設して貫つたであらふ。だが、自分達にはさういふ掟がないので、彼は多分さういふものを得ることは出来まい。徳といふものは、古來、詩人達が詠じてゐるやうに（さういふ詩の幾多の章を、陪審諸氏は一語残らず舌頭に譜んじてゐるゝことゝ承知して居るが、——と彼はあつたが、それを聞いた陪審官達の顔は、彼等がさういふ詩を少しも知らぬことに氣がついて甚だ相濟まないといふ顔色をあらはした）或る意味で傳染するものである、殊に愛國心とか國家への忠愛とかいふ名で知られてゐる立派な徳がさうである。清淨潔白な一點の批難のない、わが陛下の爲めのこの證人（陛下の御事をお引合にするのは如何な些事でも名譽たるを失はないが）——の氣高い摸範が、囚人の召使にも傳染した、そしてその召使の心に、主人の机の抽斗やポケットを探して、彼の書類を匿すといふ神聖な決心を形造るやうになつた。彼（檢事長）はこの賞讃すべき召使の行爲に加へられる若干の誹謗を聞くことは覺悟してゐる。彼は自分の兄弟姉妹よりもこの召使の方を愛し、自分の両親よりも彼の方を尊敬する、彼は確信をもつて陪審諸氏に、すゝんで同じことをなされるやうに頼む。この二人の證人の證據は、今こゝに呈出される筈の、この二人が見付け出した書類と粗俵つて、この囚人が、陛下の軍隊と、その海陸に於ける配置及び準備についての覺書をもつてみたといふことを示すであらふ、従つてかふいふ報告を絶えず敵軍へ送つてゐたといふことには何の疑も残らなくなるであらふ。これらの覺書がこの囚人の手によつて書かれたものであることは、證明が出来ない、だが結局は同じことである。ゐな、むしろそれは囚人が卻々用意周到であつたことを示すものとして、告發するには卻つて好都合である。その證據は五ヶ年以前に遡つて、この囚人は既に、英吉利の軍隊と亞米利加軍の間に最初の會戦の行はれた時日の數週間も以前から、この兇惡な使命に従事してゐたことを物語るであらふ。これらの理由によつて、忠誠な陪審諸君は（諸君の忠誠は彼がよく知つてゐる）、また責任を重んずる陪審諸君は（諸君が責任を重んずることは諸君がよく知つてゐる）諸君の好むと好まざるとにかゝはらず、斷乎としてこの囚人を有罪とし、死刑に處さなければならぬ。この囚人の頭の斬られぬかぎり、陪審諸君は枕を高くして臥することは出来ぬであらふ、ゐな、諸君の妻が枕を高くしてといふことを考へるだけでも、我慢の出来ぬことであらふ。彼等の子供等が枕を高くして臥ることを思ふだけでも、忍べないことであらふ、一言にしていへば、この囚人の頭が斬られないかぎりには、諸君にとつても、諸君の妻子にとつても、もはや枕を高くして臥ることは出来ぬであら

— 六四 —

う。かふして檢事長は、順々と考へ得られる限りのあらゆるものゝ名にかけ、また、自分はこの囚人をもはや死んだものと同じやうに考へるといふ彼の嚴肅な誓言にかけて、囚人の首を斬ることを陪審諸君に要求する旨を述べて、その論告を終つた。

檢事長の論告が終ると、法廷内にはざわめきが起つた、それは、丁度大きな青蠅の大群が、その囚人が聞もなくどうなるかといふことを豫知して、彼の周圍に群がったかのやうであつた。騒ぎがしまつたとき、例の清淨潔白、一點の批難すべきところもない愛國者が、證人席にあらはれた。

そこで檢事次長は檢事長の指圖に従つて愛國者を吟味した。彼の名はジョン・バーサッド、身分は紳士である。彼の純潔な魂の物語は、檢事長が今、描寫した通りであつた、——多分、それに缺點があるとすれば、あまりよく似過ぎてゐるといふ點であらふ。彼はその氣高い胸から軍荷を下ろしたので、恭々しく退出しようとする、と、ローリイから遠くもないところに坐つて、堆い書類を前にして

ゐる鬘をかぶつた紳士が、彼を呼び止めて二三問ひたいことがあるとひつた。眞向ひに坐つてゐる鬘の紳士は、まだ法廷の天井ばかり睨めてゐた。

君は謀者をしたことがある？いや、自分はスパイのスの字を聽いて屑しとしない。君は何で生活してゐるか。自分の財産がある。君の財産は何處にあるか。自分は財産が何處にあるかを精確には記憶してゐない。その財産は何であるか。何であらふと他人があづかることではない。君はその財産を相續したのか。さうだ、相續したのである。誰からか。遠縁に當る者から。非常な遠縁か。可なり遠縁である。監獄には入つたことがあるか。たしかにない。債務者監獄（フリイト監獄ともいふ）に入つたことは決してないか。そんなことは今度のことゝ何の關係があるとも思はない。債務者監獄には決して入つたことがないか、——さあ、もう一度問ふ、決してないか。ある。幾度。二三度。五六回ではないか。さうかも知れない。何の職業か。紳士、蹴飛ばされ（排斥され、つまみ出され）た事があるか。あつたかも知れぬ。度々あつたか。いや、階段から蹴落されたことがあるか。慥かにない、一度階段の上のところ蹴られて、自分からわざと階段を落ちたことがある。その時は、いかさま賭博をしたので蹴られたのか。さういふ風なことを、自分に暴行を加へた酔拂ひの虚書吐きが言つてゐた。だがそれは本當ではない。誓つてそれは本當でないか。全く。いつも、いかさま賭博で暮してゐるか。そんなことはない。では、普通の賭博で暮してゐるか。まあ、他人様と同じ位に。この囚人から金を借りたことがあるか。ある。拂つたことがあるか。いや。囚人

— 六五 —

とこの親交は、實際、馬車や旅館や郵便船などの中で無理に結んだほんの一寸したものではなかつたか。いや。囚人が覺書をもつてゐるのを慥かに見たか。慥かに。その覺書についてはそれ以上のことを知らないのか。知らない。例へば、その覺書を自分で手に入れたのではないか。ない。この證言によつて何物かを得ようと期待してゐるか。いや。いつも政府から金をきちんきちんと貰つて、その手先となり、人を陥れるのを仕事にしてゐるのではないか。どうして、そんなことはない。それにしても何かそんな事をしてゐるのではないか。決してそんなことはない。それを誓ふか。幾度でも誓ふ。全く愛國心といふより他に動機はないか。少しもない。

忠誠な召使ロージャア・クライは大急ぎで宣誓して、さつさと訊問に答へて引込んだ。彼は四年前この囚人のもとに誠實に、率直に仕へることになつた。彼はカレエ通ひの定期郵便船に乗り合はして、この囚人に軍實な召使を雇ふ氣はないかと訊ねた、すると囚人は彼を雇つた。彼は囚人にかふ訊ねたに過ぎないので、どうぞお情で雇ひ入れてくれるやうにとひたすら懇願したといふ次第ではなかつた、——そんな事は思ひも奇らぬことであつた。聞もなく、彼はこの囚人について疑ひをもち始め、囚人に眼をつけるやうになつた。旅行中主人の衣物を整理するとき、彼は囚人のポケットの中に、これ等によく似た覺書を再三再四見た。彼は囚人の机の抽斗からこれらの覺書を取り出した。彼は初めのうちはその覺書をそこに入れては置かなかつた。彼はこの囚人がカレエで佛蘭西の紳士達にこれと同じ覺書を見せてゐるところをみた、またそれと似た覺書を、カレエ及びブローニユで佛蘭西の紳士達に見せてゐるところもみた。彼は自分の國を愛した、それでかふいふことに我慢が出來ず、たうたう密告したのであつた。彼は銀の茶入れを盗んだといふやうな疑をかけられたことは決してなかつた。芥子壺をどうにかしたといふ、根も無いことを云はれたことはあつたが、その芥子壺といふのも後で鍍金物であるといふことが分つた。彼はこの七八年來、今の證人と知りあつてゐる。それは單に偶然の暗合に過ぎなかつた。彼はそれを特別に不思議な暗合とはひはない。およそ暗合といふものは不

議なものなのである。彼はまた、眞の愛國心が彼の唯一の動機であつたことをも、不思議な暗合とはひはない。彼は眞のブリテン人である、そしてこの國に彼のやうな者の多からんことを希望してゐる。青蠅はまたもぶんぶんうなり出した、検事長はジャーヴィス・ローリイを呼んだ。

「ジャーヴィス・ローリイ氏、あなたはテルソン銀行の書記かな。」

「六六―」

「さうです。」

「千七百七十五年十一月の或る金曜日の夜、用向きのことから倫敦とドーヴァの間を郵便馬車で旅行されたか。」

「しました。」

「郵便馬車には他に旅客があつたか。」

「二人ありました。」

「その二人はまだ夜の明けきらぬうちに途中で降りたか。」

「降りました。」

「ローリイ氏、この囚人をよく見るがひ々。この囚人はその二人の中の一人ではなかつたかな。」

「はつきりさうであるとは請け合はれません。」

「この囚人は、その二人の旅客のどちらかに似てはゐないか。」

「二人は厚く物にくるまれてゐたし、ひどく暗い晩でもあり、われわれは皆遠慮しあつてゐましたので、それさへもしかとは申し上げ兼ねます。」

「ローリイ氏、もう一度囚人を見るがひ々。假にその二人の旅客と同じやうにこの囚人を物につませてみて、その大きさ、背恰好などに、彼等のうちの一人らしからぬやうに見えるところがあるか。」

「ありません。」

「ローリイ氏、ではあなたは、この囚人が二人の中の一人ではなかつたとは誓はないんぢやな。」

「誓ひません。」

「では、少くともあなたは、この囚人を二人の中の一人であつたかも知れぬとゐふんぢやな。」

「さうです。たゞ一つちがふ點は、あの時の旅行者は一人とも―私と同じやうに―ひどく盜賊を怖れてびくびくしてゐました。ところがこの囚人には少しもそんな臆病らしひ様子がありません。」

「ローリイ氏、あなたは臆病らしく見せかけた人物を見たことがおありかな。」

「慥かにあります。」

「ローリイ氏、もう一度この囚人を見るがひ々。あなたは慥かに以前この囚人を見たことがあるか。」

「あります。」

「それは何時か。」

「たゞ今お尋ねの事件から二三日後、佛蘭西からの歸途のことでした。カレエで、私が乗つてゐた定期郵便船にこの囚人が乗りこみました、そして一緒に旅をしました。」

「この囚人は何時頃船に乗つたか。」

「夜中少し過ぎてからでした。」

「深更ぢやな。その時ならぬ時間に乗船したのはこの囚人一人だつたか。」

―六七一―

「一人だけといふ廻り合せになりましたので・・・」

「ローリー氏、『廻り合せ』などゝ要らぬ用心をしなくとも宜しい。囚人はその深更に乘船した唯一人の旅客だつたんぢやな。」

「さうです。」

「ローリー氏、あなたは一人で旅行してゐたのか。それとも連れがあつたか。」

「二人ほど連れがありました。紳士と婦人です。二人ともこゝに來てゐます。」

「二人ともこゝに來てゐるのぢやな。あなたは囚人と何か話をしたか。」

「殆んどしませんでした。天氣は荒れ模様で、航路が長くかゝつて穩かでないものですから、私は彼地を出ましてから、此地につくまで殆んどソーファに臥つてゐました。」

「ミス・マネット！」

若い婦人―さつき一度群集の眼の向けられた彼女に、又もや彼等の眼が向けられた―は坐つてゐた場所に立ち上つた。彼女の父親も一緒に立ち上つた、そして彼女の手を自分の腕に組ませた儘にしてゐた。

「ミス・マネット、この囚人をよく見なさい。」

かふいふ同情、かふいふ純真な若さ、美しさと相對するといふことは、被告にとつてすべての群集對手に立つてゐるよりも、遙にづらいことであつた。彼女と共に、ゐるゝ自分の墓の際に人々から離れて立つてゝもあるやうに、彼に注がれた皆のきらきらした好奇の眼さへ、その時彼を靜かに落ちついてゐさせるだけの勇氣をつけることが出来なかつた。彼の右手はそゝくさと前にある香草を掻き寄せて、何處かの庭園の花壇のつもりに盛りあげた、呼吸を落ちつかせ、しつかりさせようとする努力は、その唇をふるはせた、唇の血の氣はみるみる心臓へさつと引きあげて眞蒼になつた。大きな蠅のぶんぶん唸る音がまた高まつた。

「ミス・マネット、あなたは以前にこの囚人と逢つたことがおありか。」

「はい、いゝございます。」

「何處でぢや。」

「たゞ今申されました郵便船の上で、同じ時でございます。」

「ではあなたが今證人の言葉に出た若い婦人ぢやな。」

「えゝゝ！ほんたうに不仕合せなことに、さうなのでございます。」

彼女の同情に満ちた物悲しさうな聲音は、幾分嚴しくかふるつた裁判官のあまり音樂的でない聲と入りまじつた。

「あなたに出された質問に、きちんと答へなさい、それに餘計な説明を加へてはいかん。ミス・マネット、あなたは海峽

―六八一―

を渡るときにこの囚人と何か話をされたか。」

「はい、いたしました。」

「それを思ひ出してみなさい。」

周囲の深い沈黙のうちに、彼女はほそぼそとかふ口を切り出した――

「この方が船にお乗りなさいますと――」

「この囚人のことをいふのぢやな。」裁判官は眉をひそめながら訊いた。

「はい。」

「では囚人といふがひょ。」

「この囚人は船に乗りますと、わたくしの父が、」と彼女はあひひかけて、ならんで立つてゐる彼の方を愛情をこめてちらと見やつて、「大へん疲勞して、體が非常に弱つて居りますのを見ました。父は非常に衰弱して居りましたので、わたくしは風通しのよくない處に入れるのを心配しまして、船室の梯子段に近いデッキの上に、父の爲めに寢牀をこさへてやり、わたくしも父を看病いたします爲め、その傍に坐つてゐたのでございます。その晩はわたくしども四人のほかには別に乗客もございませんでした。囚人は大變に深切で、わたくしなどよりもつと上手に父を雨風にあてないやうにする方法を教へてくれました。わたくしは港を出てから風がどんなに變るものか存じませんでしたので、それを上手にやる方法が分りませんでした。囚人はわたくしの爲めにそれをやつてくれました。あの人はわたくしの父の様子を見て大變やさしい深切な言葉をかけてくれました、屹度ほんたうに父のことを氣の毒だと感じたのでございませう。かふしたことが縁でわたくしは一緒に話し始めることになりました。」

「一寸待ちなさい。この男は一人で船に乗つたのかな。」

「いへ。」

「連れが幾人あつたか。」

「二人の佛蘭西紳士と一緒にございました。」

「何か一緒に相談をしてゐたか。」

「皆さんは出船の間際まで相談をしてゐました、それから佛蘭西の紳士方は舢舨船に移らなければなりませんでした。」

「この覺書によく似た書類が、彼等の中で受授されなかつたか。」

「何か書類がその方たちの間で受授されてゐました、でも、それがどんな書類だかは一向に存じません。」

「恰好や寸法はこれに似てゐたか。」

「さうかも知れませんが、よく存じません。もつともその人たちはわたくしの直ぐ近くで話してはゐました、それは船室の梯子段の上につるしてある洋燈の光を使ふため」

―六九―

に、そこに立つてゐたからでございませう。洋燈はぼんやりしてゐましたし、その人たちの話聲が非常に低うございませうので、何をいつてゐるのか聞えませんでした、たゞその人たちが何かを見てゐるのだけは見えました。」

「では囚人との話を述べなさい、ミス・マネット。」

「囚人は、父に對して深切に、やさしく、何かと面倒を見てくれましたし、わたくしに對してもすつかり打ち解けていろいろ話してくれました――それはわたくしの頼りない境遇から起つたのでございませう。わたくしは、」彼女はわつと泣き出して、「今日、恩を仇で返すことがなければよいがと

案じられます。」

青蠅からはまたぶんぶんが起る。

「いやミス・マネット、もし囚人が、あなたが義務として與へなければならぬその證言を、——あなたがどうしても與へなければならぬ——また與へずに済ますことの出来ないその證言を——いかに止むを得ず述べるのだといふことを十分理解することが出来ぬとすれば、それが出来ぬのはここにゐる人々のうちで囚人一人だけだ。さ、先きを述べなさい。」

「囚人はわたくしに、自分は或る込み入った、面倒な性質の用事で旅行をしてゐるのだと話しました、その用事ではいろいろな人に迷惑をかけるかも知れないから、自分は假名をつかつてゐるのだと申しました。また自分はこの仕事の爲め数日前に佛蘭西に渡つただけれど、これから先きもずっと佛蘭西と英吉利との間を何度も往復することになるだらうとのことでした。」

「囚人は亞米利加のことについて何かいつたか、ミス・マネット。詳しくはつきりと述べなさい。」

「囚人はわたくしに、あの戦争がどうして起るやうになつたかといふことを説明してくれました、それからまた自分の判斷することの出来る限りでは、これは英吉利側にとつて間違つた馬鹿げたことだつたと申しました。あの人はまた冗談のやうに、多分ジョージ・ワシントンがジョージ三世と同じやうな大きな名前を歴史上に残すやうになるだらうと言ひ足しました。でもさう申しましたからとて、その言ひぶりには少しも惡意があるやうには見えませんでした。それは笑ひながら、ほんの時間潰しに話されたことでした。」

非常に面白い芝居で主役俳優の仕草に多勢の見物の眼が向けられてゐるときに、その俳優の顔に何か強い著しい表情があらはれる度に、知らず知らず見物人がその眞似をするものである。この證言をしてゐる間にも、それから裁判官が證言を書きとめる爲めに、言葉を途切らせる合間々々に、自分の證言の結果の良いか、悪いかを辯護人の顔色に窺ふ

一七〇一

ときにも、彼女の額はいたいたい程の心配をみせて、緊張しきつてゐた。見物人の間には、法廷の隅々に至るまで、同じ表情が充ちてゐた、裁判官が書類から顔をあげて、ジョージ・ワシントンについてその怖るべき邪説をぎろりと睨みつけたときに、そこにゐる見物人の額の大部分は、證人の顔を映しかへす鏡となつたとひつてゐるほどであつた。

ここで検事長は裁判長と合圖をして、念の爲めに、また形式上からも、この若い婦人の父親ドクタア・マネットを呼ぶことが必要だと思ふ旨を耳打ちした。それでドクタアは直ぐに呼ばれた。

「ドクタア・マネット、囚人を見るがひ々。これまでに何處かでこの囚人を見たことがあるかな。」

「一度あります。倫敦の私の住居に訪ねて来たことがあります。約三年……いや、三年半ばかり以前です。」

「あなたはこの男がその時の定期郵便船の合乗客だと認めることが出来るか、又この男とあなたの令嬢との會話の様子を述べる事が出来るか。」

「どちら承出来ません。」

「どちらも出来ぬといふには、何か特別の理由があるか。」

彼は低い聲で答へた。「あります。」

「ドクタア・マネット、あなたは本國に於いて、裁判も、告發さへも、受けずに長期の入牢をさせられたといふ不幸な目に會つたか。」

彼は誰の心にも沁み渡るやうな調子でかふゐつた。「長い入牢でした。」

「あなたは本事件の起つた間に放免されたばかりだつたのか。」

「さういふことでした。」

「その時のことは何も記憶がないか。」

「何もありません。私の心は——それが何時だといふことさへあへないのですが——自分が監獄で鞆造りを仕事にしてゐた時から倫敦で今此處にゐる娘と一緒に暮してゐるのを知つた時までは、白紙なのです。神のお恵みによつて私の能力が回復しましたとき、娘は私にとつて無くてはならぬものとなつてゐました。どうして娘がさうなつたかといふことをさへ私には全くいふことが出来ません。私はその間の出来事については何の記憶も持つてゐません。」

検事長は腰をおろした、父と娘も亦腰をおろした。

やがてこの裁判の進行につれて妙な出来事が一つ湧き上つた。當面の目的は、この囚人が五年前、十一月の或る金曜日の夜、今だに行方不明になつてゐる共謀者と共に、ドーヴァ通ひの郵便馬車に乗つて出かけたが、人目を眩ます爲めに眞夜中に馬車を降り、そこに留まらないで、十二哩以上も海軍衛戍地へ後戻りして、そこで或る情報を蒐めたこと

一七一

いふことを證據立てることであつた。で、呼び出された一人の證人は、丁度その時刻に海軍衛戍地の或る旅館の珈琲室で、この人物が他の誰かを待つてゐたのを見たと言つた。囚人附きの辯護人はこの證人に反對訊問を試みたが、たゞ彼はその時以外には一度も囚人を見たことがないといふことが分つただけで、別に得るところがない。このとき、今までづつと法廷の天井ばかり睨めてゐた例の鬘の紳士が小さな紙片に一言一言何か書いて、くちやくちやに丸め、彼の方へ投げてよこした。次に訊問の途切れたときこの紙片をあけて見た辯護人は、異常な好奇心で囚人の顔をぢつと見た。

「あなたは慥かにそれがこの囚人だつたと繰り返していはれますな。」

證人は慥かだとゐつた。

「あなたはこれまでこの囚人に非常によく似た人物を見たことがありますか。」

自分が見誤るほど似た人は見たことがない、證人はさうあつた。

「それではあそこにあるあの紳士、私の同僚の顔をよく見たまへ、」と先刻紙を投げた紳士を指さして、「それからこの囚人の顔をよく見たまへ。如何です。二人は非常によく似て居るぢやないですか。」

この同僚辯護士の風采が、別に自墮落といふほどではないが、無頓着で無精なところを除外してみると、この二人の非常に似てゐることは、かうして二人を比較してみると、たゞに證人を驚かしたばかりでなく、そこに居合したすべての人々を驚かすに十分であつた。裁判長はこの同僚辯護士に鬘を脱るやう命ぜられたいと願ひ出られて、あまり快くもなさうな同意を與へたので、二人の似てゐるところは益々目だつてみえた。裁判長はストライヴァ（囚人附きの辯護士）に向つて、われはれは次にカートン（同僚辯護士の名）を叛逆罪として審問したものでどうかと訊ねた。だがストライヴァは、裁判長に、それはいかぬと答へ、反對に、自分は證人に一度起つたことは二度起り得るものであるかどうか、また彼の輕卒を示すこの實例をもつと前に見てゐたなら、彼はそれ程確信をもつことが

出来たかどうか、また現にそれを見てもまだ確信があるかどうか云々といったことを訊ねてみたいと申し出た。その訊問の結果は、この證人の述べ立てたことは皿鉢のやうに細々に碎かれ、この事件に對する彼の證言は、無用のがらくたになつてしまつた。

この時分までには克蘭チャアはいろいろな證言を聞きながら、彼の指からかなり澤山な鐵錆の御馳走を食べてゐた。彼は、今度はストライヴァアが囚人側の陳述を陪審員達に、きつちり合つた一揃の衣物のやうに着せかけて行く番

一七二一

なので、注意してゐなければならなかつた。ストライヴァアは陪審員達に對して様々な點を證據だてゝみせた、自稱愛國者のバーサッドは金で買はれた謀者で、裡切者で、無辜の膏血をすゝる破廉恥漢であり、呪ふ可きユダ以來この世に現はれた最大悪人の一人である——彼は寧ろこのユダによく似てゐる。忠誠な召使のクライといふのは、バーサッドの友達でその一味たることに恥ぢない程のものである、この二人の事實捏造者、偽證者の鋭い眼が、この囚人を犠牲にしようとねらつたのは、この囚人が佛蘭西人の血統を引いてゐるところから佛蘭西に於ける或る家庭的問題の爲めに海峡を渡つて幾度か往復しなければならなかつたからである——その問題が何であるかといふことは、彼の近親者に對する考慮から、生命にかけても、打ち明けられないことなのである。また人々が現に見て知つてゐるやうに、若い婦人をあんなに苦しませて無理に捏らへ上げさせたり絞り取つたりした證言は、たゞそんな場合に偶然に出會つた若み令嬢と若い紳士との間に起り勝ちな、一寸した罪のない慰勳や通り一遍の世辭を含んでゐるだけで、全く役にも立たぬものとなつた——尤もジョージ・ワシントンに關する言葉だけは例外だが、これとて馬鹿げた冗談以外のものとして見るには、餘りに法外で、また不可能のことである。兩國間の排外心と恐怖心を卑劣にも利用して人氣取りを試みようとしたこの計畫に於いて破れることは、全く政府の弱味となるに違ひない、だから検事長は極力それを利用したのである。とはゐへ、それには、かふいふ事件を餘りに屢屢汚すことのあるあの邪惡極まる破廉恥な性質の證據の他に何の據るべきものがない、しかもさう云ふものはこの國の國事犯裁判にはみちみちてゐる。然し、此處まで述べて來た時裁判長は、(とても本當とは思へない眞面目くさつた顔付で) 横合ひから口を入れて、自分は法官席に坐つてゐて、しかもこれらの諷刺を默認してゐることは出來ないといつた。

それでストライヴァアは、彼の證人を三三人呼んだ、克蘭チャアは、今度は検事長が、ストライヴァアが陪審員達にきちんと着せた一揃の衣物をすつかり裡返しにする間、注意してゐなければならなかつた。検事長はバーサッド及びクライが自分の考へたよりは百倍も善良であり、この囚人は百倍も惡る所以を、ごてごてと述べた。最後に裁判長が自身で立つて、例の衣物を時には裡返し時には表を出してみるといふ調子で論じたが、大體思ひきつてあすこを裁ちこゝを曲げして、囚人の爲めの屍衣になるやうに形を變へてしまつた。

陪審員達は席をかへて協議し始めた、大きな蠅はまた群がった。

一七二二

長いこと法廷の天井ばかり睨んで坐つてゐたカートンは、この騒ぎの中で、姿勢も崩さなければ動きもしなかつた。それにひきかへて同僚辯護士のストライヴァアは、自分の前にある書類を大束に纏めた

り、傍にゐる連中と囁きあつたり、時々は心配さうに陪審席の方をみたりした、また見物人の方でも席を立つ者が幾人かあつたが、一つにかたまつたりした、裁判長さへも席から立ち上つて、法宮臺の上をあちこちと歩き廻つたが、それは聴衆の心に、彼の氣持がゐらくしてゐることを疑はせずには置かなかつた。ところが例のこの男一人だけは、破れた辯護士服は半ば脱げかゝつてゐるまゝ、きたない鬘は、先きほど一度脱つたあとで偶然頭の上に載せられたところに置いたまゝ、両手をポケットに突込み、眼を終日やつてゐた通り天井に向けて、後の方に凭れかゝつて坐つてゐた。殊に彼の態度に見える無頓着な或る點が、彼の様子をだらしなく見せたばかりでなく、疑ひもなく囚人に似てゐる筈の強い似寄りの點を非常に減じたので（二人が比較されたときには、彼は一寸の間熱心になつて、その似寄りをぐつと強めたが）、見物人の大半は、今さら彼を眺めて、お互ひに、自分たちは二人がさうひどく似てゐるとは思へないがとひひあつた。クランチャアは、自分の見たところを隣りの男に話して、かふ附け加へた。

「わしやあの男が辯護士の仕事なんか出来やしねえといふことに半ギ二賭けまさあ。とてもそんな仕事なんか出来さうな人間とは見えねえ、どうです。」

だがこのカートンは、彼が氣をくぼつてゐさうにも見えない場内の瑣細な出来事に目をつけてゐたのだ、何故なら、ミス・マネットの頭が父親の胸にがくりと垂れたときに、彼が一番先きにそれを見つけて他に聞えるやうな聲でかふあつた――

「守衛！あの若い御婦人を介抱してやりたまへ。あの紳士に手傳つて外に出してあげたまへ。御婦人が倒れるのが分らんのか！」

彼女が外に連れ出されると、人々は彼女に大きな憐憫を感じた、そして父親にも非常に同情した。あの長い入牢の時代を思ひ出させられることは、彼にとつて深い苦惱であつたにちがひない。彼は訊問をうけたときに、内心の強い昂奮を示した、そして彼をひどく老人に見えさせるあの何か考へ込んだやうな沈鬱な様子が、それ以來重くるしい雲のやうに、彼をつゝんでゐた。彼が出て行くと、席を戻して暫らく沈黙してゐた陪審員達が、陪審長を通してかふあつた。

彼等の意見は一致しない、それで退廷して協議したいといふ希望であつた。裁判長は（多分例のジョージ・ワシントン

一七四一

一件を心に思つてゐたので）彼等の意見が一致しないのに幾分驚いたが、それでも快よく、監視つきで退廷してもよろしいといふ意を告げた、そして自分も退廷した。裁判は終日かゝつたので、法廷の洋燈はもう點され始めた。誰いふとなく陪審員達は直ぐには入廷しないだらうといふ噂がたち、見物人も腹ごしらへに立ち去つた。囚人は被告席の後方に退いて腰を下した。

ローリイは、あの若い婦人とその父が出て行つたときに一度外に出たが、また戻つて来て、ジェリイを手招きした。ジェリイは場所がから空きになつてゐたので、すぐ彼に近づくことが出来た。

「ジェリイ、お前何か食べたあなら、食べてあゝよ。だが遠くに行かないやうにしな。お前は陪審員が戻つて来て、陪審が始まる時に間違ひなく聞いてゐてくれ。一寸でも陪審に遅れちや不可ない、一つお前に宣告を銀行までもつて行つて貰ひたひんだ。お前は足が達者だから、わしがテムブル・バーにつくつゝと前に、着いてゐるだらうからな。」

ジェリイは丁度手の甲をあてるだけの額は持ち合はしてゐた（額に手の甲を當てる一種の敬禮）。それでこのお世辭と一志を貰つた禮心に額に手の甲をあてた。このときカートンが來かゝつて、ロー

リーの腕ををきへた。

「あの御婦人は如何ですか。」

「ひどく苦しんでゐます、だが父親が慰めてゐますし、こゝから出たので大分快くなつたやうです。」

「さう囚人に話してやりませう。あなたのやうな立派な銀行家が囚人と話してゐるところを、公衆に見られてはあまり好くないでせうからね。」

ローリーは心の中でその點をとつおいつ考へてゐたことに気がついたか、眞赤になつた。カートンは法廷の柵外にあるいて行つた。法廷の出口は丁度その方についてゐた、ジェリイは體中を眼にし、耳にし、釘のやうな髪の毛を逆立て、彼について行つた。

「ダーネイ君！」

囚人はすぐさま前にすゝみ出た。

「君はきつとあの證人のミス・マネットがどうしたか知りましたひでせう。あの人は追つゝけよくなります。君が見たときはあの人が昂奮し切つてゐた時だつたはけなんです。」

「私はその原因になつたことを、心からお氣の毒に思ひます。どうか私の代りに、私の熱心なこの感謝をあの人にお傳へ下さることは出来んでせうか。」

「ゐゝえ、出来ませとも。お頼みとあればきつとお傳へします。」

カートンの態度は失禮になるほど無頓着であつた。彼は囚人から半ば横向きに隔ての柵に肘をつけて凭れかゝつて

一七五—

立つてゐた。

「お願いいたします。君には心から感謝します。」

「ダーネイ君、」カートンはやはり半ば彼の方を向いた儘でかふゐつた、「君は何を覺悟してゐますね。」

「一番惡の事をです。」

「さう覺悟するのが一番賢いことです、またさうやりたいことでもありませんね。だが陪審員達が退廷したことは、君にとつて有利なんです。」

法廷の出口をうろふろしてゐることは禁じられてあつたので、ジェリイはもうこれ以上聞くことが出来なかつた。で、二人をそのままにしてそこを去つた——姿形はお互ひにそっくりでありながら、その態度は似ても似つかぬこの二人は、竝んで立ちながら、自分達の上にかゝつてゐる鏡に姿を映してゐた。

階下の盜賊や惡黨とひつた種類のものばかりが集つてゐる廊下で一時間半をすごすのは、羊肉のパイや麥酒にいくらか手傳つてもらつても、時の經つのが實に重くるしくのろしたものに思はれるのであつた。この噂がれ聲の走り使ひは、そんなことを考へたあとで腰掛の上に窮屈さうに坐つてゐたが、つひとるところとやりかけた途端に、わつと騒々しい人聲が起つて、法廷に續いてゐる階段に素早い人浪が打ち寄せて、彼をその中に捲き込んでつれて行つた。

「ジェリイ！ジェリイ！」ローリーは、ジェリイが戸口のところに行くと、もうそこに立つて彼を呼んでゐた。

「はい、はい、旦那。こゝまで戻つて來るのは一戦争ですよ。此處です、旦那！」

ローリーは人混みをかきわけて一枚の紙片を彼に手渡しした。

「大急ぎだ！確と受け取ったかね。」

「はい、旦那。」

紙片はたゞ一語『放免』と走り書きされてゐた。

「もし旦那が、またあの時のやうに『復活した』といふ返辭を送つたら、」ジェリーは體を返しながらかふつぶやいた、「今度こそは旦那の意味が何だか分つたらうによ。」

彼はすつかりオールド・ベエリイを抜けるまでは、これ以上他のことをいふ機會はおろか、考へる機會さへもたなかつた、何故なら、群集は非常な勢ひで溢れ出して來て、殆んど彼の足をさらひさうになつた、そしてゐはゞ餌にありつくあての外れた青蠅が、ほかの腐肉を求めて四方に散らばつて行くやうに、騒々しいぶんぶんの群が往來にどつと飛び出したから。

四、祝ひ

薄暗い燈火のついてゐる法廷の廊下から、終日そこで煮

一七六一

えたつてゐた人間の肉汁の最後の渣滓が流れ出してしまつたとき、ドクター・マネット、彼の娘のルウシイ・マネット、ローリー、被告側の辯護人且つ顧問辯護士のストライヴァは、いま放免されたばかりのチャールズ・ダーネイを取り圍んで、彼が死の淵から免れたことを祝つてゐた。

たとひこれよりもつと明るい燈火のもとに於いてにせよ、この智的な容貌と申分の無い舉止のドクター・マネットをみて、あの巴里の屋根裡部屋にゐた鞆造りだつたと見分けることは、困難であつたらう。しかもどんな人でも二度目に彼に會ふ時には、別人かと思はれる迄に一變してゐるので、も一度見直さないとゐられない位である。彼の低い沈んだ聲のもの悲しげな抑揚や、何等理由も無いのに發作的に喪神状態に陥ることまで觀察する機會がないにしても、彼が全く變つてゐるのは一見して分るのであつた。たゞ一つの外面的原因——といふのは、今も尙ほ残つてゐる彼の長い間の苦惱に話がふれさへすれば先き程法廷でしたやうに——いつも彼の魂のどん底からかふいふ憂鬱の情態を惹き出すのがつねであつたが、また一方からいへば、それがかふいふ發作の常として、自然に起つて、彼を憂鬱にするといふこともあり徑ることであつた、その時この憂鬱は、彼の身の上を知らない人々にとつては、ゐはゞ本物のバスチユ（牢獄）が三百哩もかなたにあるのに、その本物の影があかるい夏の陽の爲めに、彼の上に投げられてでもゐるのを見るのと同じやうに、不可解に思はれるのであつた。

たゞ一人彼の娘だけが、彼の心からこの陰鬱な思ひをはらひ除ける力をもつてゐた。彼女こそ彼を、その不幸のあなたの過去とその不幸のあなたの現在に結びつける黄金の絲（幸福の絲）であつた。彼女の聲音、彼女の顔の明るさ、彼女の手の感觸は、殆んどあつても、彼にとつて強い、有益な力をもつてゐた。もちろん絶對にいつでもとはひへない、彼女として、自分の力の及ばなかつた場合を思ひ起すことが出来るのだから。だがさういふ場合は滅多になかつたし、また軽くすんでしまつたので、彼女はこれでもう濟んでしまつたものだとさへ考へてゐた。

ダーネイは彼女の手を激しながら接吻した、それからストライヴァの方を向いて厚く禮をあつた。ストライヴァはまだ三十歳そこそこののだが、二十歳も老けて見える、丈夫な、大聲の、赤ら顔の、

空威張りする、優しみといふものがまるで無く、その爲めに損をするやうなことは薬にたくもない人物で、いつも肩で人をつき退けては、有形にも無形にも人の團樂や話にでしや張るのが常であつた、これは、彼が人生そのものも肩で押しわけて通るといふゝ證據であつた。

一七七—

彼はまだ髪をかぶつて、法服をつけたまゝであつた、そして、罪もないローリイをこの一團からすつかり押し出してしまふほどに肩を角張らせて、つい先きほどまでの辯護依頼人に向つてかふゐつた。「ダーネイさん、私はあなたを立派に救ひ出したんで嬉しくて堪らんです。あれは實に不名譽な起訴でしたな。實に不名譽なものでした。だが卻つてそれだけに成功の望みがあつたわけでした。」

「いや私は一生涯御恩にきます——二つの意味で、」と辯護依頼人は彼の手をとつていつた。

「私はあなたの爲めには最上を盡しました。で、ダーネイさん、私の最上の努力は何人にも劣らんだらうと思ひます。」

明かに誰かゝ何とかなはなければならぬ場合なので、「それやふるどごころぢやありません、」とローリイがひつた。それは多分何の心なくゐつたのではなく、再び話し仲間に入れてもらはふといふ目的からゝしかつた。

「さうを考へかな。」ストライヴアはゐつた。「成程！あなたは一日中出席してゐられたので、當然御存知の筈です。それに、あなたは實務家ですからな。」

「といふ譯で」と、ローリイはゐつた。この法律に明るい辯護士先生のお蔭で、先き程一座の中から押し出されたローリイは、今度は彼のお蔭でもとの一座の中に押し戻してもらつたのである——「といふ譯で一つ、ドクタア・マネットにお願ひ致しますが、この會議はこれで打ち切りとして、一同を帰宅させてゐたゞきたいものですな。ルウシイさんは御不快だし、ダーネイさんは怖しむ目に會はれたのだし、私どもゝ皆疲れきつてゐますので。」

「あなたの分だけお話しなさい、ローリイさん、」ストライヴアはかふゐつた、「私はまだしなくちやならん夜の仕事があるのです。あなたの分だけお話しなさい。」

「私は自分の分だけ申します、」とローリイは返辭した、「それからダーネイさんの分と、ルウシイさんの分と、えゝと——ルウシイさん、あなたは私が私達皆にかはつてお話しゝてもゝとを考へにやなりませんかね。」彼はあてつけるやうに、彼女にかふ質問をして、彼女の父親の方をちらりと見やつた。

彼はひどく異様な眼付でダーネイをぢつと見てゐたが、彼の顔はさながら凍りついたものゝやうになつてゐた、ぢつと見すゑたその眼付は、嫌惡と不信の不快な表情を表はし、恐怖の色をさへ交へてゐた。この異様な表情が彼の顔にあらはれると共に、彼の考へは惑亂し出した。

「お父さま、」とルウシイはそつと自分の手を彼の手にのせてゐつた。

彼はそろそろと幻影を追ひはらつて、娘の方に向いた。

一七八—

「お父さま、お家へ歸りませうか。」

彼は長い溜息をついて、「うむ」と答へた。

この放免された四人の友人たち（見物人）は、まさか彼が今晚放免されるやうなことはあるまいと

考へて——かふ考へさせたのも、彼自身のせみであるが——臨にちりぢりに歸つてしまつてゐた。廊下の燈火は殆んど全部消された、鐵の門は震ひ響きをたてゝ閉められかけてゐた、この物凄い場所は、明日の朝、絞首臺、曝臺、笞打柱、烙鐵とひつた樂しみが再び見物人を呼び集めるまでは、人氣がすっかりなくなつた。ルウシイ・マネットは父親とダーネイの間に立つて外に歩いて出た。通りかゝつた貸馬車を呼び止め、父と娘はそれにつて去つた。

ストライヴァは廊下で彼等と別れて、肩で風を切つて衣裳部屋へとつて返した。例の一團にも加はず、また彼等の誰とも一言もかはさずに、一番影の暖い深い暗の裡に佇んで壁にもたれてゐたもう一人の人間は、黙々として皆のあとについて出て来て、馬車が走り去るまでちつと見送つてゐた。彼はやがて、ローリイとダーネイが立つてゐる敷石のところに行つた。

「ぢや、ローリイさん！信用第一の實務家ももうダーネイ君にお話しが出来るわけですね。」

誰も、今日の訴訟事件に於けるカートンの役を少しでも認めたものはなかつた、誰一人それを卸らなかつた。彼は法服を脱つてゐたが、別にその爲めに風采がよくなつたとも見えなかつた。

「實務家の心が、本能的な好意と商賣上のお體裁との二つに分れるときに、そこにどんな争ひが起るかゞ分つたら、きつと面白いと思ひますね、ダーネイ君。」

ローリイは眞赤になつて、熱心にゐつた、「あなたはさつきもそんなことをいひましたね。會社に仕へてゐる私共のやうな實務家は、自分で自分の氣儘にならないのです。私共は自身よりも何よりも會社のことを考へなくてはならんわけです。」

「知つてゐます、知つてゐます、」カートンは事も無げにかふ答へた、「さう怒るもんぢやありませんよ、ローリイさん。あなたはたしかに善い人です、いや人並ずぐれてとひつてもゐる。」

「それに實際、」とローリイは彼の言葉なんか氣にも止めないでかういひ續けた、「あなたがこの事件にどんな關係があるのか、私には正直のところ分らんです。先づ年では大分先輩のやうだから、それに免じて私がかふいふのを許して頂くとして、今度のことがあなたのお仕事だとは、正直のところ私には分らんです。」

「お仕事！いやはや、僕には仕事なんてものはないんで

—七九—

すよ。」カートンはかふあつた。

「仕事がないとはお氣の毒です。」

「私もさう思ひますな。」

「若しあつたら、」ローリイは續けた。「多分、あなたも忠實にお務めなさるでせう。」

「いや、とんでもない！——私はやりやしません。」とカートンはあつた。

「な、なんですと！」とローリイは彼の無頓着さにすつかり昂奮して叫んだ、「仕事はどこまでも結構なもので、どこまでも尊敬すべきものぢや。ぢやからもしその仕事の上から私共の行爲に遠慮したり、沈黙したり、又は途中で阻止されねばならないやうなときには、ダーネイさんのやうな寛大な青年紳士には、その事情をどう斟酌してゐるかよくお分りでせう。ダーネイさん、御免下さい、どうぞ神様のお恵みがありますやうに！あなたは今日、幸福と繁榮の生涯を邊る爲めに、お救ひをうけたのです。——おい、轎だ！」

ローリイは、辯謹士に對して腹をたてゝあると同じやうに、自分自身に對してもあさゝか腹だち氣味で、そゝくさ轎の中に入つて、さつきとテルソン銀行へと運ばれて行つた。ポート・ワインをぶん

ぶんにほはして、まだすつかり酔が醒め切らない様子のカートンは、そのとき聲をあげて笑った、そしてダーネイの方を向いて――

「君と僕と一緒に落ち合ふなんて、不思議な機会ですな。君にとつても、自分に生き寫しの人間とたつた二人、この大路の敷石の上に立つてゐるなんてことは、不思議な夜ぢやないですか。」

「私はまだ、この世の人間に戻つたやうな気がしないのです。」チャールズ・ダーネイはかふ答へた。

「そりや尤もです。君があゝの世に向つてあんなにずんずん歩いて行かれてから、まださう時がたちやゐませんか。君の聲には元氣がないですな。」

「どうも氣が遠くなつていくやうに思はれます。」

「何故また食事をしないんですか。僕はあの馬鹿野郎どもが君をどちらの世界に置いたらよいか――この世かあの世かと評議してゐる間に、一人で食事したんです。それぢや一つ、晚餐を旨く食はしてくれる一番近くの酒屋に御案内しませう。」

カートンは彼と腕を組み合せてラットゲエト・ヒルを下りフライト街に出て、有蓋露地を上つて或る酒屋に入った。二人は小ぢんまりした部屋に案内された、そこでダーネイは簡單だが旨い料理と、上等の酒を飲んだので、すぐに元氣を回復し出した。カートンは卓子を挟んで、彼の眞向ふに坐つてゐたが、自分の前にも別にポート・ワインの瓶を――

――八〇――

据多つけて、例のかなり無禮な態度をしてゐた。

「君はもうこの世界の仲間に入ったやうな氣がしますか、ダーネイ君。」

「まだ、時間や場所については、恐ろしく混乱してゐますが、君の仰しやるやうな感じがするくらいには、直りました。」

「定めし非常にご満足なことせうな！」
彼は苦々しげにかふいつて、またも一杯ついた、それは大きな杯であつた。

「ところが僕はです、僕のもつてゐる最大の願ひは、自分がこの世のものだといふことを忘れることとです。僕にとつては、この世に何の善いこともないんです。――かふいふ酒を徐めてはですな――またこの世にとつても僕は何の役にもたゝんのです。で、僕等はこの點ではあまり似てゐない。實際僕は、君と僕の間にはこれといつて特別にひどく似た點がないのだと考へ始めてゐるんです。」

晝間の激情で頭は亂れてゐるし、自分と生き寫しの粗野な振る舞ひの人物と、こゝに居るのがまるで夢のやうに思はれもするので、チャールズ・ダーネイは、何と答へていゝか當惑した。たうたう彼は答へをしなかつた。

「これで君の食事は終わりましたね。」カートンはすくにかふゐつた、「何故君は健康を祝さないんです、ダーネイ君、何故乾盃をしないんです。」

「誰の健康です？何の乾盃です？」

「何ですつて？百も承知してゐる癖に。いや承知してゐるべきです、承知してゐなくちやならんです、いや大丈夫御承知だと思ひますがね。」

「では、ミス・マネットの爲めに！」

「では、ミス・マネットの爲めに！」

カートンは、對手が乾盃をする間彼の顔を眞面にちつと見つめてゐたが、やがて自分の杯を肩越し

に壁に投げつけた、杯は微塵に碎けた、それからベルを鳴らして、代りの杯をもつて來させた。

「あれちやあ、暗いところで手を貸して馬車にのせてやるにはもつてこの美人ですね、ダーネイ君！」彼は新らしい杯に酒をつぎながらかふあつた。

微かな苦々しさと、にべもない、『さうです』といふ言葉がその返辭であつた。

「あれちやあ、同情されても、泣かれても、され甲斐のある美人ですね！どんな氣持ですな。あんな美人の同情と憐憫の對象となるんちやあ、生命賭けで裁判されるだけの値打がありますね、ダーネイ君。」

ダーネイは又も返辭をしなかつた。

「僕があなたの傳言をさういひましたら、あの人はそれを

―八―

きいてひどく嬉しうにしましたよ。なあに、あの人が別に自分の嬉しい氣持をみせたわけぢやない、僕がさうだらうと思つたんです。」

この言葉は、折よくもダーネイに、この不愉快な伴侶が晝間の難關に自分から進んで彼を助けてくれたことを思ひ出させる役に立つた。彼は話をその方に向けて、禮をあつた。

「僕は禮などをいはれたくもなければ、又いはれる抵ほどお役にも立つてはあません。」全く無頓着な返辭であつた。

「第一に、あれは何でもないことですし、第二に、僕が何故あゝいふことをやつたか自分でも分らんです。ダーネイ君、どうか質問を一つさせて下さい。」

「どうぞ。君の深切なお世話に對する心ばかりのお返しです。」

「君は、僕が特別に君を好いてゐると思ひますか。」

「正直のところ、カートン君」と對手は妙に狼狽してかふ返辭した、「私はそんなことを考へてみたことがありませんから。」

「ちや、今こゝで考へてみて下さい。」

「君は、いまで私を好いてゐるやうに振舞つておいででした、ですが私には眞にさうだとは考へられません。」

「えゝ、僕もさうだとは考へてゐません、」カートンはあつた。「僕は霜の理解力に敬服しますよ。」

「だからとひつて、」とダーネイはベルを鳴らさうと立ち上つてかふ續けた、「私に勘定を拂はせて頂いて、お互に惡意を持たずにお分れることは別に差支へないやうに思ひますが。」

「えゝ、ありませんとも！」カートンが答へたので、ダーネイはベルを鳴らした。

「君は勘定を全部拂ひますか、」カートンはあつた。そしてさうだといふ返辭を得ると、「それぢや給仕、これと同じ酒をもう一瓶持つて來ぬ、それから十時になったらをれを起しに、來るのだぞ。」

勘定がすんだので、チャールズ・ダーネイは立ち上つて彼に左様ならとひつた。するとカートンは彼の挨拶に返しもせずに一寸脅すやうな、挑戦するやうな様子で立ち上つて、かふあつた。「もう一言、ダーネイ君。僕は酔拂つてゐると思ひますか。」

「大分お飲みになつたやうに考へますね、カートン君。」

『考へる』ことはしないでせう。君は僕が飲んでゐたのを現に御存知の筈だ。」

「さういはなければならんと仰しやるなら、『存じてゐる』と申上げませう。」

「それではついでに何故僕がこんなに飲むのかといふ理由

―八二―

を知らせてあげませう。僕は失望した奴隷です。僕はこの世界の人間がみな嫌ひです、またこの世界の人間で僕を愛してくれる者もありません。」

「それは残念なことです。君はそれだけの才能をもつと有用にお使ひになることが出来たでせうに。」

「さうかも知れませんが、いやさうでないかも知れません。だが、酒など飲まないからつて、得意になつちやいくわん、どうなるか知れたものぢやないのです。左様なら！」

一人きりになると、この變り物は蠟燭を手にとつて、壁にかゝつてゐる鏡のところへ行き、それに向つて自分の姿を細かに吟味してみた。

「お前は特別にあの男が好きか、」と彼はわれとわが姿に向つてかふつぶやいた、「自分に似てゐるからといつて、何故あの男を特別に好きにならなければならんのか。人を好くなんていふことはお前の柄にないことだ、それはお前がよく知つてゐる。えゝこの忌々しいやつめ！變り果てた姿になつたものだ！お前は墮落の底にゐる、酒などに耽らなければ、立派なものになつてゐるだらう――」こんな説教をしてくれた事が、その人間を好きになる結構な理由だともいふのか！あの男と位置を換へてみる、さうすれやお前はあの男と同じやうにあの青い目で見つめられたり、あの男と同じやうにあの上氣した顔で同情されたりしたらうか。さあそれをはつきりいつて見ろ！お前は彼奴を嫌つてゐるんだ。」

彼は氣を紛らさうとまた酒にもどつて、見る見るうちにみんな飲んでしまつた、そして、卓子の上に一杯髪の毛を亂したまゝ、腕を枕にして寝込んでしまつた。燭臺の長い蠟の流れが、彼の上にぼたりぼたりと滴り落ちてゐた。

五、豺

そのころは飲酒の全盛時代で、大抵の人間は痛飲したものである。その頃の或る人が一晚のうちに、申分のない紳士としての體面を汚すことなしに飲みつくす葡萄酒や調合酒の量を控へ目に述べても、今日では、馬鹿々々しひ誇張としか思はれないほど、この點に於いて進んでゐた時代だつた。この飲酒癖といふことにも、辯護士仲間は、たしかに他の如何なる智的職業階級にもひけをとらなかつた。且つまた、もうこの頃はどしどし肩で人を押し退けながら商賣範圍をひろげて大きな儲けになる仕事をするやうになつたストライヴァの如きも、酒ぬきの法律上の競争の場合に於いてと同じやうに、この飲酒といふ點に於いても決して人後に落ちるといふことはなかつた。

オールド・ベエリイやその他の法廷の寵兒であるストライヴァは、自分が此處までのぼりつめて來た梯子の下の方

―八三―

の段を、用心深く切り落とし始めてゐた（他人に登らせまいとて）。あちらこちらの法廷もオールド・ベエリイも今はその寵兒たる彼を特に待ちかまへて招ばなければならなかつた、そして高等法院に於

ける裁判長閣下の方へ向つて、肩で人を押しわけて進むストライヴァの晴れ晴れした顔が、あたかも花壇一面に咲き誇る同じ仲間の美しい花の列から識きんで、太陽をめぐりて押しすすむ大きな向日葵のやうに、鬢の花壇（辯護士連中）からぱつと抜け出ていくのが、毎日のやうに見られるのであつた。もつとも、以前ストライヴァがまだ饒舌家で、無遠慮で、氣早やで、大膽ものだつたころには、辯護士の才能のうちで一番著しい、一番必要であるところのもの——即ち、山のやうな陳述記録からその精髓を抜き出すといふ才能に缺けてゐることが、辯護士仲間の評判になつてゐた。だがこの點について目を見張つてゐるほどの進歩が彼の上に生じた。職務が多くなればなるほど、その要領なり精髓なりを得る力が増すやうに思はれた、そしてどんなに遅くまで、シドニイ・カートンと酒を飲んで夜更しをしてゐることがあつても、翌朝になれば彼は必ず、自分の事件の要點だけはほんの指の尖端でこなすことが出来た。

この上もない怠惰者で、まるで先の見込みのないシドニイ・カートンは、ストライヴァの大事な相棒であつた。二人がヒラリ・ターム（一月十三日）からミカエルマス（九月二十九日）までの間に飲む酒の量は、王の軍艦でも浮べることが出来るくらゐであつた。ストライヴァは何處に於いても、このポケットに両手を突っ込んで天井ばかり睨めてゐるカートンがゐなくては、決して訴訟事件を取りあつかはなかつた。二人は巡廻裁判にも一緒に出かけた、そしてそこでさへ夜遅くまで例の通り底抜けに飲み出すのであつた、カートンほ白晝、丁度夜中ほつき歩いたどら猫のやうに、こそこそと、ひよろつく千鳥足で自分の下宿に歸つて行くのが見られると評判された。やがてこんな事柄に興味をもつ人々の間では、シドニイ・カートンは決して獅子ではないにせよ、驚くべきほどに善良な豺（豺は獅子の手先といふ、ストライヴァが常にカートンの知恵を借りてゐるので）、このいやしい資格に甘んじて、ストライヴァの爲めに犬馬の勞をとつてゐるのだと云ふ噂が立ち始めた。

「十時ですよ、旦那、」先きほど彼が起きてくれと頼んで置いた酒店の男はかゝ呼びかけた。「十時ですよ、旦那、」

「む、何だ。」

「十時ですよ、旦那。」

「何をあつてるんだ。夜の十時になつたとしてもいふのかね。」

「へゐ。旦那が、起きてくれつてお頼みになりましたんで。」

一八四一

「あゝさうだつたね。よし、よし。」

又もうとうと寝入らうとするのを給仕は五分間も讀げざまに、煖爐の火を騒々しく掻きまはして、巧みに彼の眠氣を追拂つたので、彼は立ち上つて、投げるやうに帽子を頭にのせて店を出た。彼はテムブルへ曲つて行つた、そしてキングス・ベンチウオークとペーパー・ビルディングズの敷石を二度往來して元氣を取返してから、ストライヴァの部屋に入つて行つた。

かふいふ寄合ひには決して出席したことのないストライヴァの書記は、もう家に歸つてしまつたので、主人公自身が戸を開けてくれた。彼はスリッパを穿き、ゆるやかな寝間衣を着て、樂々とくつろげるやうに咽喉首のところを露出しにしてゐた。彼の眼のあたりには、やゝ荒つぽい、わざとらしい、乾からびたやうな痕がついてゐた、これはジェフリイズ（慘酷で有名な英國の裁判官）の肖像を始めとして、彼と同じ階級のあらゆる貧飲家に見られるものであり、また藝術のさまざまな假面をかりてども、あらゆる飲酒時代の肖像を通じて認められるものであつた。

「少し遅かったね、記憶の神様。」ストライヴァアがひつた。

「いつもぐらゐだよ。十五分ぐらゐは遅れたかな。」

二人は、四方の壁に書架を一杯に廻らし、牀の上には書類を一面に散らした薄暗い部屋に入った、そこには燐燼の火があかあかと燃えてゐた。爐棚の上の薬罐は湯氣を吐いてゐた、書類が散らばつてゐる真中に、葡萄酒や、火酒や、ラム酒や、砂糖や、檸檬を澤山のせた卓子が一つ光つてゐた。

「君はもう一本やつけたやうだね、シドニイ。」

「今晚は二本やつたらしゐ。僕は晝間の辯護依頼人と食事をして來たんだ、いやあの男が食事をするのを見てゐたんだ、——何方にしる同じさ。」

「いやシドニイ、君が今日顔の似てゐるのを利用したのは珍らしい思ひつきだつたよ。どうしてあれを思ひついたのでか。何時氣がついたのかね。」

「あの男はどつちかといへば好男子だと僕は思つたんだ、だが僕だつて運さへ向いてゐたら、あの男と同じぐらゐの人間になつてゐたらうと考へたんだね。」

ストライヴァアは、年の割に早く、せり出して來た腹の皮がよれるほど笑つた。「君と君の幸運でやつか、シドニイ！働いたらゐゝ、働いたらゐゝんだ。」

豹の方では、可成りむつとしたらしく自分の衣物をゆるめて、次の間に入つて行つたが、大きな冷水の壺と、洗面器と、一二本のタオルとを持つて戻つて來た。そのタオルを水に浸けて、半分絞つて、見るもいとほしひ恰好に頭の上に重ねてのせた、それから卓子に向つて腰を下すと、かふ

—八五—

ゐつた。

「さあ支度が出來たよ。」

「今晚はさう澤山煮つめる仕事はないよ、記憶の神様。」ストライヴァアは書類を見廻しながら陽氣さうにゐつた。

「どれ程あるね。」

「たつた二組さ。」

「難しい方を先きにくれ給へ。」

「それ、それだ、シドニイ。さつさと遣り給へ！」

そこで、獅子の方は、酒の載つてゐる卓子の片脇にある安樂椅子に背中を凭せて悠然と落ちついた、豹の方は、その卓子の他の側の、書類が一面に撒き散らされてある彼自身の卓子に腰を下した。酒罌と杯が手のとゞくところに引きよせてあつた。二人ともしつきりなしに酒卓子に手を出してゐたが、そのやり方は全く違つてゐた。獅子は大抵兩手を腰のバンドにつゝこんで凭れかゝつたまゝ、火を眺めたり、時々はあまり難しくない方の書類を弄つてみたりしてゐた、豹は、眉を寄せて、熱心な顔付をしてゐたが、仕事にひどく夢中になつて杯を取りに差し伸す手にさへ眼をくばらなかつた、彼は手で暫くの間手探りして、初めて杯を見つけて口にもつて行くことが度々であつた。

二三度、手がけてゐる問題が非常にこんがらかつて來たとき、豹君はどうしても立ち上りて、タオルをまた水に浸けなければならなかつた。かふして水の壺と洗面器のところを巡禮すると、彼は何とも言葉では形容の出來ない異様な濡れた冠り物をかぶつては戻つて來た。そして彼が心配さうに眞面目くさつてゐるので、一層、滑稽なものに思はれた。

たうたう豹君は獅子の爲めにきちんとした手ごゝろな善立をこね上げて、それを彼に差し出した。獅

子は注意深くとり上げて、いろいろ選り好みをしたり、意見を加へたりした。豺君はそのどつちにも力を貸してやつた。膳立の講釋がすっかり濟むと、獅子はまたもバンドの中に手を突っこんで、横になつてちつと考へ込んだ、豺君は更に、咽喉を一杯の酒で霑し、頭のタオルを取りかへて元氣を付けてから、二度目の膳立を獵りにかゝつた。これも同じやうにうまく作つて獅子の手許に出した、これが片づけられると丁度時計が朝の三時を打つた。

「これで濟んだね、シドニイ。さ、調合酒を一杯やり給へ。」
ストライヴァはかふゐつた。

豺君は、またも湯氣をたてゝあるタオルを頭からとり、體をゆすつて欠伸をし、ぶるぶると身ぶるひして、そのすゝめに、従つた。

「君は今日、あの原告側の證人の一件ぢや實に健實なものだつたね。どの質問もどの質問も效を奏したからね。」

— 八六 —

「僕はいつでも健實なんだ。さうぢやないかね。」

「わしはそれを否定はしないよ。何が君の氣に觸つたのかね。さあ、調合酒を一杯ひつかけて、機嫌をなほしたまへ。」

さも不平らしくぐぐぐいひながら、豺君は今度もその通りにした。

「あの懐しいシウルウズベリ學校時代のシドニイ・カートンだね。」ストライヴァは、今と昔の彼を比較でもするやうにぢつと眺めて、彼の上のしかゝるやうにしながら頭をうなづかせて、かふるつた。「相變らずの上下板のシドニイだね。今上つたと思ふと、もう下つてゐる、大元氣かと思へばもう惰氣てゐる。」

「あゝ！」對手は溜息を洩らして返辭した、「違ひない！同じ運勢を背負つた相變らずのシドニイだ。あのころでさへ、僕はほかの子供達の爲めに宿題をしてやつて、自分の減多になかつたものだ。」

「何故だね。」

「何故だか知らん。僕の癖だつたらうよ。」

彼は兩手なポケットに入れ、兩足を前にうんと踏みおぼして、ぢつと火を眺めながら坐つてゐた。

「カートン、彼の友は、あだかも燂爐の火格子を、不斷の努力が鑄出される溶鑪と取り違へてもしたかのやうに——シウルウズベリ學校の昔馴染のシドニイ・カートンの爲めにしなければならぬ、たゞ一つの思ひやりのある仕事は、彼をその溶鑪の中に無理やりに押し込むことでもあるかのやうに、——彼の前に體を角張らせて脅かすやうな調子であつた、「君の遣り口は今までもさうだが、いつも矛盾してゐた。君は精力も意志も出さない。僕を見給へ。」

「あゝ煩い！」シドニイはいくらか輕やかに、機嫌よく笑つてかふ應じた、「君のお説教なんざ御免だよ！」

「僕は、これまでのことをどんな風にやつて來たかね、」ストライヴァはあつた、「又、現在はどうな風に遣つてゐるかね。」

「僕に金を分けてくれて仕事を手傳はしてゐるのさ。だがそんなことで僕にお談議をしようといふのか、風にでも物をいつてゐるやうなもので、徒だよ君。君はしようと思ふことはする人だ。君はいつだつて最前列にゐるし、僕はいつも後列にゐたんだ。」

「僕は、最前列に出なければ仕様がなかつたんだ。僕だつて、最前列に生れついたらんぢやなかつたさ、ね、さうだらう。」

「僕は、君の誕生の儀式に立ち會つた譯ぢやないが、どうも生れついてあたらしく思はれるね。」
カートンはかふゐつた。彼はまた笑つた、それから二人

一八七一

とも笑つた。

「シウルズベリ時代の前だつて、シウルズベリ時代だつて、シウルズベリ時代以後だつて、」とカートンは續けた、「君は君の列に落ちついて來たし、僕は僕の列にはまつて來たんだ。お互ひがまだ巴里の學生町の、學生同志で、佛蘭西語や佛蘭西法律や、その他あまり大した御利益まうけない佛蘭西物の落穂などをひろひ上げてゐたころでさへ、君といふものは何時だつて何處かにゐたし、僕といふものはいつだつて、——何處にもゐなかつたんだ。」（君は存在を認められて、僕は認められなかつた）

「ところでそれは一體誰の所爲だつたね。」

「本當をいへば、それや慥かに君の所爲ぢやなかつたと斷言は出來ないんだ。君はいつも少しもちつとしてゐないで、突進したり、割り込んだり、押し込んだりしてばかりゐたから、僕は一生涯錆びついて黙つてゐるよりほかに機會がなかつたんだ。だがもう夜も明けようつてのに、昔のことばかり話してゐるのは陰氣臭いな。お暇とする前に何かほかの話をしよう。」

「よし、よし！僕の爲めにあの美しい證人に乾盃したまへ。」ストライヴァは杯を持ち舉げてゐつた。

「どっだ、君の嬉しい話に變つたらうが。」

さうでないことが一見して分る、それは彼がまた鬱ぎ出したからである。

「美しい證人、」彼は自分の杯の中をのぞきこんで咳いた。「僕は、今日は晝間から晩にかけて可なり大勢の證人に會つてるよ。その美しい證人といふのは誰だね。」

「あの繪のやうに美しいドクタアの愛嬢、ミス・マネットのことさ。」

「あの女が美しい？」

「美しくないかね。」

「ないよ。」

「だつて、君、あの女は今日滿廷の賞讚の的ぢやなかつたかね！」

「滿廷の賞讚なんて馬鹿な！誰がオールド・ベエリイを美人鑑定の判事にしたんだ。あの女は金髪の人形といふだけぢやないか！」

「君は知るまいがね、シドニイ、」ストライヴァは鋭い眼で彼をちつと見ながら、そのてかてかした顔を一つ撫でゝかふゐつた、「君は知るまいが、僕はあの時さう思つてゐたよ、君は同情してゐたから、それであの金髪の人形に起つた出來事も素早く見つけたのだとね。」

「出來事を素早く見つけた！そりや君、人形にせよ、人形でないにせよ、一人の娘が人の鼻先きから二ニヤードのところまで氣絶したら、望遠鏡がなくなつて、よく見えるだ

一八八一

らうぢやないか。それはたしかだよ、だが美人の點は否定するね。やあ、これでもう酒はお終ひにしよう、一つ休まなくちや。」

主人は燭臺をもつて階段の處まで送り出て、彼が降りる間そこを明るくしてやつた、もう陰氣な窓を通して夜明けの太陽は寒さうにのぞきこんでゐた。彼がこの家を出ると、空氣は冷たく、もの悲しかった、鈍い色の空は一面に曇つて、川は暗く臙ろで、あたりの景色はさながら人氣のない沙漠のやうであつた。いくつかの砂塵の環が朝風にくるくると舞ひ上つてゐたが、それは丁度遙かの方に捲き起つてゐた沙漠の砂が、ぐんぐん進むにつれてその塵霧で、この市を蔽ひ始めてゐるやうに思はれた。

かくて、裡には荒みはてた才能を抱き、周圍は一面の沙漠に圍まれて、この人物は人氣ない高臺を横切つて行く途中無言で立ちつくした、ほんの瞬間、彼は自分の前の荒野に貴ぶべき功名心、克己、忍耐の幻影が横はつてゐるのをみた。このま襪樓しの美しい市には、夢のやうにつらなつた棧敷がいくつもあつて、戀の女神や、美の女神達が彼を見おろしてゐる、その花園には生命の果實がみのつて居り、希望の泉が彼の眼の前にきらめいてゐる。それもほんの瞬間で、忽ち消えうせてしまふ。彼は豎坑のやうな家の、高い部屋までよちのぼつて行つて、衣物もぬがずに、打ち棄てられた寢床の上を身を投げた。枕は人知れぬ涙でぐつしより濡れた。

悲しげに、悲しげに、太陽は上つた。立派な才能と強い熱情を持ちながら、それを適所に向けることも出來ず、自分自身の救ひの爲め、又自分自身の幸福の爲めに役立てることも出來ず、わが身を枯らす毒蟲を知らないのではないが、蝕まれるまゝに諦らめてゐる彼、太陽は、これほど悲壯な光景を照し出したことがなかつた。

六、何百の人々

ドクター・マネットの靜かな住居はソホウの辻から遠からぬ或る靜かな町の片隅にあつた。四ヶ月といふ月日の波があゝの叛逆罪の審問といふ出來事をさらつて、(社會の興味と記憶に關する限りでいへば)もう遠い海に押し流してしまつたころの或る晴れた日曜日の午後、ジャーヴィス・ローリーは自分の住んでゐるクラアクンウエルから日照りの強い街を歩いてゐた、ドクターの許に食事によばれて行く途中であつた。幾度か業務上のことで一心に盡力してやつたのち、ローリーはドクターの友人となつたのだ、そしてこの靜かな片隅に設けられたドクターの家庭が、彼の生活のうちの晴れ晴れした一部分となつた。

この晴れ渡つた日曜日の、午を過ぎて間も無い頃、ロー

ー八九ー

リーが、ソホウの方に歩いてゐたのには、習慣的な三つの理由がある。第一に、晴れた日曜日には、彼はよくドクター及びルウシイと一緒に食事前の散歩をすることになつてゐた。第二に、天氣の悪い日曜日には、彼は親類同様に彼等の住居を訪れて、一緒に話したり、讀書したり、窓から外を眺めたりして、大抵その日を過す習慣になつてゐた。第三には、彼は丁度このときは非解決したいと思ふ一寸した難かしい疑問をもつてゐたのだが、ドクターの家の習慣から、今がその疑問を解くのに恰好な時刻だといふことを知つてゐたからであつた。

ドクターが住んでゐるこの一隅ほど變つたところは、倫敦中にもなかつた。そこを抜け通る路がな

かつたので、ドクタアの住居の表窓は、いかにも引込んであるといふ沁々した印象を與へるやうな、物靜かな町を見晴らすことが出來た。オクスフォード街の北にあたるその邊は、そのころまだ建物も疎らで、今はなくなつた野原には森の木が繁り、野生の草花が萌え、山植の花が咲いてゐた。その結果、田舎の新鮮な空氣は、道に迷つた宿無しの乞食が弱々しくとぼとぼと教區に入つて來る時のやうではなく、潑刺とした元氣で自由にソホウ中を吹き廻つてゐた。またさう遠くもないところに、南向きの日常りのゐる垣根が幾つもあるつて、季節にはその上で桃の實が熟れてゐた。

夏の日光は朝の間だけ華やかに、この一隅にも差しこんだ。だが、街中が暑くなる頃には、この一隅は日蔭になつた、日蔭といつても、その向ふにきらきらかな日の光が見られないほどに遠のいた陰氣なものではない。そこは涼しい場所、靜かな、然し樂しむ場所、不思議なほど反響を立てる場所で、街の喧噪から免れた安息の港そつくりであつた。

かふいふ碇泊所にはきつと落ちついた船が泊つてゐる筈であつた、また實際泊つてゐた。ドクタアは大きなもの靜かな家の二つの階を占めてゐた。この家では書間はいろいろな職業が螢まれてゐるといふ事であつたが、どんな日でもそんな仕事の物音は殆んど聞えず、夜になればそんな物音は尙更聞えなかつた。裡手には、籐懸の樹が緑の葉を鳴らしてゐる中庭を通つて達する一つの建物があつて、そこでは教會オルガンが製造されたり、銀が浮彫にされたり、さうかと思ふと又、正面の壁の中から金色の腕を突き出してゐる或る不思議な巨人によつて、金が打ち伸ばされたりといふことが語られてゐた―それは、ゐるゝ彼自身を金色に打ち伸した上あらゆる訪問者を同様のものに變へようと脅かしてゐるやうに見えた。これらの職業について、また、二階に住んでゐるといはれてゐる一人身の下宿人について、また下に帳場をもつてゐるといふ噂の、馬車装束

―九〇―

製作人についても、人々はその聲音を聴いたり、その姿を見たりすることは極く少なかつた。時として戸まどひをした職人が上衣をつけたまゝで玄關を横切つたり、見知らぬ人がそこを覗き廻つたり、また中庭を隔てゝ微かなりんりんといふ音や、金色の巨人がどしんどしんと打つ音が聞えて來た。だがかふいふことは全く例外例で、むしろふだんは家の背後にある籐懸の樹の群雀と前の通りの一隅に起る反響ばかりが、日曜の朝から土曜の夜に至るまで、勝手氣儘を振舞つてゐるといふことの證據になるやうなものであつた。

ドクタア・マネットはこゝで、彼の昔の評判を慕つてか、または口から口に傳へられ、彼の身の上のいろいろな噂の中に再生した評判を聞き傳へて、彼の門を叩きに來た患者を診察してやつた。それだけでなくさへ彼の醫學上の智識と、巧妙な實驗をするときの用心と、熟練とが、彼を可なりに洗行らせたので、彼の必要なだけの収入を得させてゐた。

ジャーヴィス・ローリイが、この晴れた日曜日の午後、その町の片隅にある靜かな家の玄關のベルを鳴らしたときに、彼の智識、思想、注意のなかに、上のやうなことがあつたのである。

「ドクタア・マネットはおいでかね。」

今に歸るだらう。

「ルウシイさんはおいでかね。」

今に歸るだらう。

「プロスさんはおいでかね。」

多分ゐるらしい、然し實際のところは、ミス・プロスの思惑を勝手に推測して、はつきりゐると言

つてゐるか、あないと断つていゝか、取次の女中には分らなかつた。

「わしは別に心配のいらぬものだ、」ローリイはあつた。

「二階へ上らしてもらふよ。」

ドクタアの娘は、彼女の生れた國のことは何も知らなかつたが、詰らぬものでも巧みにこれを利用するといふ才能だけは、生れつき牛國から受けついであるやうに見えた。これは佛蘭西人のもつとも有用なもつとも愉快な性格の一つなのである。家具はいかにも質素であつたけれども、いろいろな一寸した装飾で飾つてあつたので、見た眼はうれしかつた。装飾そのものには別に大した價值があるのではないのだが、その中に如何にもよく彼女の趣味なり、嗜好なりが現はれてゐたのである。大きなものから極めて小さなものまで、部屋の中のすべての調度の配置、色彩のとり合せ、つまらぬものを儉約して、繊細な手と明らかな眼と、思慮とでとり入れた優雅な變化と對照の巧みさ、これはそれ自身として、ひどく愉快な感じを與へたばかりでな

一九一

く、その發案者の氣持をよく表はしてゐたので、ローリイがあたりを見廻して立つてゐると、椅子や卓子までが、彼にとつてはこれまでもう十分馴染になつたあの特別な表情に似たものを浮べて、どうですお氣にいりましたか、と彼に訊ねてゐるやうに思はれた。

三つの室が同じ階にあつて、部屋と部屋をつないである戸は、風通しを十分に爲めに開け放してあつたので、ローリイは微笑しながら、自分の周囲の凡ゆるものが、如何にもよくその持主の佛を偲ばせることに氣をつけて、一つの部屋から他の部屋へと歩いてゐた。最初の部屋が一番立涯な部屋で、そこにルウシイの小鳥だとか、花だとか、また書籍や机、仕事卓子、水彩繪具の箱などが置いてあつた。次の部屋はドクタアの診察室で、また食堂にも使はれてゐた。三番目の部屋は中庭の籬懸の樹のそよぎで、かはるがはる光と影との斑点をつけられてゐたが、これがドクタアの寢室であつた、その一隅には、巴里、サン・タントアヌ郊外にある、酒店の傍の陰慘な家の五階にあつたと同じやうに、今は使はれてゐない鞆造りの腰掛と道具箱が置いてあつた。

「ほう、」ローリイはあたりを見廻すことをやめてゐつた、「自分の苦痛を思ひ出させるものを、傍に置いてあるとは妙だなあ！」

「どうして妙なんですか。」かふいふ問ひが突然出たので、彼ははつと驚いた。

この言葉は、例の腕節の強い、荒々しい、赤い顔した女ミス・プロスから出たのであつた、ミス・プロスとは初めてドローヴァのロイアル・ジョージ・ホテルで知り合つて以來、大分親しくなつてゐたのである。

「なあに一寸さう思つたものですからね——」ローリイはいひ出した。

「ぶうーあの、思つたんですつて——」ミス・プロスにかふ云はれてローリイは言葉を切らした。

「お變りはございませんか。」すると婦人は言ひ出した——鋭い調子ではあつたが、彼に悪意を抱いて居らぬことを示すやうには見えた。

「いや有難う、お蔭さまで、」とローリイはおとなしく返辭した、「あなたは如何です。」

「自慢するほどのことはございませんわ。」ミス・プロスはあつた。

「おやさうですか。」

「えーちやうどでございますとも——」ミス・プロスはかふあつた。「あの、わたくし、お嬢さまのこ

ととても困つてゐるんですよ。」
「おやさうですか。」

— 九二 —

「後生ですから、その『おやさうですか』ばかりでなしに、何かほかの言葉を仰しやつて下さいませよ。でないと、わたくしもう、いらいらして死にさうでございますから。」と

ミス・プロスはあつた。彼女の氣質はその體とは全く異つて短氣であつた。

「では、ほんたうですか。」ローリイは訂正の意味であつた。

『ほんたうですか』つて言葉も随分いやな言葉でございますね。」ミス・プロスはあつた。「でも少しはましでせう。え、わたくし、それはもう困つてゐるんですの。」

「そのわけが何へますかね。」

「わたくしあのお嬢さまのお對手になる値打のまるつきりないやうな人たちが、何十人とお嬢さまを見に来るのが厭でございますしてね。」ミス・プロスはかふあつた。

「そんな目的で何十人もやつて来るんですかね。」

「何百人で参りますわ。」ミス・プロスはあつた。

自分の言ひ出したことが疑問にされると、いつでも誇張して答へるのはこの婦人の癖であつた（今も昔もかふした癖の人間はいくらあるものである）。

「やれ、やれ！」ローリイは、思ひつくことの出来た一番安全な言葉を使つてあつた。

「おたくし、お嬢さまと今まで一緒に住んで参りました——いへ、あのお嬢さまがわたくしと一緒に住むになつて、わたくしにお金を拂つて下さつたと申す方が本當でございます。これだけはあなたに誓紙を差上げてあゝくらゐですけれど、もしわたくしが何もせずに自分なりお嬢さまなりを養つて行けるだけの餘裕がございましたら、わたくしにお金を拂ふなんてことは決しておさせ申さなかつたでございます。——丁度お嬢さまが十歳におなんなすつてからこつちでございますがね。そりや本當に厄介でございますして。」とミス・プロスはあつた。

何がさう厄介なのかはつきりとは分らなかつたので、ローリイは頭を振つてみせた。彼は體のうちで一番大切なこの部分（頭）をどんなものにもびつたりあふ妖精の上衣みたいに使つたのであつた。

「少しもお嬢さまにふさはしくないいろいろな人達が、始終やつて来るんでございますよ。」ミス・プロスはあつた。「あなたがその初口をおきりになつた時なんでも——」

「わしがその初口をきつた？プロスさん。」

「さうぢやございませんでしたか。お嬢さまのお父さまを生き返らせた方はどなたでしたらう。」

「成程！あれがその來始めだつたとすると——」ローリイはかふあつた。

「あれだけでは濟まなかつたんですよ、あなえがこの初口をお切りになつたときなんぞ、それは、随分厄介だつたん

— 九三 —

でございます。とひつて、何もわたくしドクタア・マネットのあら探しをするといふ譯ではありません。尤もドクタアだつてあのお嬢さまにはふさはしくないといふことは申しますよ、これは別にドクタアの悪口ではござあません。何故と申して、それはもう、どんなことがあつたつて、どなたかどお

嬢さまにふさはしくなるなんてことは、望む方が無理でございませうからね。ですけれど、今度のやうに、お嬢さまの愛情をわたくしからひつたくるつもりでお父さまの後から（お父さまだけはわたくし我慢してあげますよ）大勢の人が、どやどやとやつて来るのは、本當に二重にも三重にも厄介なことでございますわ。」

ローリイはミス・プロスがひどく嫉妬深いことは知つてゐた。だがまた、この戀人の裡には、彼女があくまで利己的でない人間の一人だといふことも既に知つてゐた——これは婦人の間にだけ見出されるものだが——つまり純な愛情と敬慕の爲めから、自分達がとうに失つた若さに對して、自分達もたなかつた美しさに對し、自分達が不幸にも習ひ覺えることの出来なかつた藝能に對し、自分達自身の小暗い日蔭の生涯を照したことが一度もなかつた輝かしい希望に對して、よろこんで自分を奴隸にさゝげやうとする人間の一人だといふことも知つてゐた。彼は世間を知つてゐたので、世の中から心の忠實な奉仕ほど立派なものはないといふことも知つてゐた。彼は、このやうに心からつくされ、金銭上の汚れに少しも染んでゐない奉仕をこの上なく尊敬してゐたから、彼が自分の心だけでつくつた應報の類別では——われはれば皆多少かふした類別をやるが——ミス・プロスをば、生れと教養とに依つて、彼女とはくらべものにならないほど高いところで時めいてゐるやうな、いづれもデルソン銀行と取引關係のあるやうな大勢の婦人達よりも、遙かに天使に（下級の天使であることは勿論だが）近いところに置いてゐたのであつた。

「お嬢さまにふさはしひ男は、これ迄にも、これからにもたつた一人しかございませうまい。」ミス・プロスほかうゐつた。「その男と申しますのは、わたくしの弟のソロモンでございました、ほんとはあれが身を誤つてくれませんでしたらねえ。」

こゝで又もや、ローリイはミス・プロスの身の上話をいろいろ訊ねてみて、彼女の弟のソロモンが無情な悪漢で、彼女のもつてゐるものは何もかも剃ぎとつて、相場の掛金に張つてしまつたこと、そして貧乏して途方に暮れてゐた彼女を少しの後悔もなく永久に見捨てたといふことを確めた。ミス・プロスのソロモンを信じ切つてゐることは（この一寸した身の誤りの爲めに、ほんの少しぐらゐ減りはしたが）、ローリイにとつては全く冗談事とは思へなかつた、そ

— 一九四 —

の爲めに彼女に對する好感を一層つよめた。

「今日は偶然にも二人きりです、それにあなたもわしも實務家の方だから、どうか一つ伺はして下さい。」二人が客間に戻つて、親しげに打ちとけて腰を下したときに、ローリイはかふいひ出した。「ドクタアはルウシイさんとお話しなさるとき、あの鞆造りの時代のことを、また一度もお話しなつたことがありますか。」

「えゝゝ、」と云いません。」

「だのに、あの腰掛と、あの道具を傍に置いてあるといふのは？」

「おゝ！」ミス・プロスは頭を振りながら答へた、「わたくし、ドクタアがお心のなかでも、その事を思ひ出してゐらつしやらないとは申しませぬ。」

「あなたには、ドクタアがその事をいろいろと考へてゐられるやうに思はれますかね。」

「えゝゝ、思はれます。」ミス・プロスはあつた。

「あなたの想像では——」ローリイがかふゐひかけた時、ミス・プロスはその言葉を遮つた——「想像などするのはいけません。想像なんか、交へないで下さい。」

「それぢや、直しませう。では、あなたの推測では、かな——あなたも時には推測ぐらゐはなさることがありませうな。」

「時にはいたします。」ミス・プロスはかふあつた。

「それではあなたの推測では」とローリイは彼女を深切さうに見やつて、明るい眼に可笑しさをかみころしたやうな瞬きをみせてかうつぶけた。「ドクターは御自分があんなに非常な迫害を受けられた原因、またその迫害者の名前ぐらゐについて何かドクター獨特の御意見を、この長い間には、お持ちなさるやうになつてゐるだらうかしら。」

「わたくしはお嬢さまが、お話し下さつたことよりほか、それについては、推測いたしましたことがございませぬ。」

「といふと——」

「お嬢さまはドクターがそれをお持ちだと考へてゐらつしやるのでございますよ。」

「いろいろなことをお訊ねしますが、どうかお腹立ちにならんで下さい。わしは氣の利かない一個の實務家だし、あなたも婦人の實務家といふものですからね。」

『氣の利かない』でございませうかしらう。「ミス・プロスは濟ましてかふ訊ねた。

謙遜な形容詞を使はなければよかつたと思ひながら、ローリイはかふ答へた。「いや、いや、いや、決してさうぢやありません。では事務に戻るとして、ドクター・マネットが明らかにどんな罪をも犯さない清淨潔白な身だといふこと

— 九五 —

は、われはれすべてがよく知つてゐるのに、御本人がこの問題にちつと觸れられんといふのは、注意すべき點ではないですか。わしは、たとひドクターと數年前から取引關係があつたにせよ、又、今親しい友達になつてゐるにせよ、自分だけの興味からなら、こんなことをお訊ねするのではないのです。ドクターがひどく愛着してゐられ、又ドクターにひどく愛着してゐられるあの美しいお嬢さんの爲めを思へばこそ、お訊ねするんです。が、プロスさん、わしは單に好奇心から、この問題をあなたとお話するのではなく、熱誠のあまりにするのだといふことを信じて下さい。」

「分りました。わたくしが存じて居ります限りでは、いえ存じてゐると申しても、お察しの通り大したことでございませぬが、「ミス・プロスは、和らいで辯解するやうな調子でかふあつた。「ドクターはそのお話となると、一から十まで恐れてゐらつしやいますわ。」

「恐れておいでとは？」

「何故恐れてゐらつしやるか、わたくしには、はつきり分るやうに存じます。それは恐ろしい思ひ出だからでございませぬ。またドクターが正氣を失くされましたのも、それから起りました。御自分ではどうして正氣をなくし、どうして取り返したか、そのわけはちつとも御存じないので、何だかまたいつかは正氣をなくすることがないとも限らないと思つてゐらつしやるのでございませう。これだけでもそのお話がドクターにとつては面白くないでせうと存じますわ。」

それはローリイが期待したよりもずつと、意味の深い言葉であつた。「成程」と彼はあつた、「思ひ出すと恐ろしい。ですがプロスさん、わしの心にはまだ疑ひが残つてゐるのです。それはドクター・マネットがいつも心の中にさういふ思ひを押し殺してゐられるのは、ドクターの爲めに善いことかどうかといふことです。正直のところ、この疑ひと、その爲めに時々わしに起る不安な氣持が、かうして、わしだちにたい今打ち明け話をさせたのです。」

「だつてどうにも仕方がございませんでせう、」ミス・プロスは頭を振つてゐた。「一寸でも、その話にふれて御覽なさいまし、あの方は、すぐに具合が悪くなつておしまひなさいます。どうぞ、そつとしてお置きなさいまし、いえ語る所が、どうにもそつとして置くより外に仕方がないのでございませう。時々あの方は眞夜中にお起きになりましたね。お部屋の中をあちらこちら、あちらこちらとお歩きになりますのが、臥つて居りますわたくし共に聞えるのでございます。お嬢さまはそんな時、あの方のお心が、あの昔の牢屋の中をあちらこちら、あちらこちらとお歩きになつてゐるのだとお悟りになります。それでお嬢さまは直ぐにお父さまの處へ駆けつけて、お二人であちらこちら、あちらこちらとあの方のお心が落ちつくまでお歩きになるのでございます。ですけれど、あの方は御自分の御心配の本當の原因はお嬢さまへも一言も仰しやあません、それでお嬢さまも、それだけは何も申し上げない方がよいといふ事にお氣がついておいでなのでございます。お二人とも一言も仰しやらずに、一緒にあちらこちら、あちらこちらとお歩きになります。そのうちにやつとお嬢さまの愛情とかうしであの方のお側にゐらつしやるといふことが、あの方を正氣に戻すことになるのでございませう。」

— 九六一 —

ミス・プロスは自分自身の想像を否認したにもかゝらず、『あちらこちら歩きまはる』といふ言葉を繰り返した中には、或る痛ましい考へに一人さびしく取り憑かれてゐるといふ苦痛の感じが、はつきりとごもつてゐて、彼女が、ゐはゆる想像といふものを持つてゐることを、證明してゐた。この巷路の一隅は、不思議なほど反響をたてる場所だといふことはすでに述べた。丁度いまあちらこちらと歩き廻る疲れた足取りのことが話し出されると、その爲めでもあるやうに、こちらへ向つてやつて来る聲音の反響が高く響き始めた。

「あらお歸りでございます！」とミス・プロスは立ち上つてローリイとの會話を打ち切りながらゐつた。「もうすぐ後から何百つて人たちが押し寄せてまゐりますから！」

その聽感的性質からいつてこゝは實に不思議な一隅であつた、實に『奇妙な耳』といったやうな場所であつた、何故ならローリイが開いた、窓のところに立つて、今聞えて來た聲音の主の父娘が見えはしないかと外を眺めても、彼等が近づいて來るやうには思はれなかつた。その反響がきまるで聲音がなくなりでもしたかのやうに消え失せたばかりでなく、その代りに、決して來るとは思はれないほかの聲音の反響が響いて來て、それが近づいて來たと思ふ時分には、永久に消えてしまふのであつた。だが父親と娘はたうとうその姿を現はした、そしてミス・プロスは二人を出迎へる爲めにちやんと表の門のところに待つてゐた。

ミス・プロスは粗野な赤ら顔の無愛想な女ではあつたが、彼女の大好きなルウシイが、二階へ上つたときに、帽子を取つてやつて、手巾の端で、一寸叩いてその埃を拂つてやつたり、マントを疊んでしまふばかりにしてやりたり、それからルウシイの豊かな髪の毛を「若し自分がこの上もなく虚榮深み、この上もない美人であつたなら、さぞ自分自身の髪に對してもつたに違ひないと思はれるやうな誇らしさで撫でつけてやつたりするところは、實に氣持のよい觀

— 九七一 —

物であつた。彼女の大好きなルウシイの方でも、彼女を抱擁したり、お禮をあつたり、自分の爲めに

こんなにまで面倒を見てくれることに對してわざと抗議をあつたりするところは、見てゐてまた氣持のよいものであつた、——尤もこの最後の抗議は、ルウシイがほんの冗談にいつてみたのであるが、さうでなかつたら、ミス・プロスはひどく氣を悪くして、自分の部屋に引き籠つて、泣いてしまつたことであらふ。ドクタアもまた、二人の方を眺めながら、ミス・プロスに、彼女がどんなにルウシイを甘やかしてゐるかといふ意味を、言葉に抑揚をつけたり、眼を働かせたりして語つてゐたが、その態度にはミス・プロスと同じほどの甘やかさを見せてゐた、若し出来ることなら、もつとひどい甘やかさを見せたかも知れなかつた。ローリイもまた、小さな臺を頭にのせて、にこにここの有様を眺めながら、この晩年になつて、獨身者の彼にも家庭といふものを知らせてくれた運命に感謝してゐる様子は感じのゑゑものだつた。だがこの觀物を見るに來るはずの何百の群集は一人もなかつた、ローリイはミス・プロスの豫言の適中するのを待つてみたが徒だつた。

食事時になつても、まだ何百の人々はやつてこない。この小さな家事の切り廻しでは、ミス・プロスは勝手向きの方を受け持つてゐた、そしていつも驚くほど見事にその責任を果した。彼女の御馳走は、極く簡素な材料で出來てゐたけれども、上手に料理され、上手に盛つて出され、半ば英吉利半ば佛蘭西風の、さつぱりした面白い趣向で出來てゐたので、どんなものもこれには及ばなかつた。ミス・プロスの交際は、徹頭徹尾實際的なものでつたので、彼女はソホウやその近所を歩き廻つて、貧乏な佛蘭西人を探し出しては、五六志か半クラウンぐらゐの小錢をやつて料理の、祕訣を傳授させるのであつた。かふして、零落したゴール人の子や娘たちから驚くべき技術を授かつたので、彼女の下で働いてゐる女や娘は、彼女を女魔法使ひかまたはシンダレラ（お伽噺の女主人公）の叔母のやうに見做した。彼女は一羽の鳥、一頭の兔、または畑からとつて來た一つ二つの野菜をもつて來させて、自分の好きなどんなものにも變化させるのが常であつた。

日曜日には、ミス・プロスもドクタアの卓子で食事をしたが、そのほかの日にはどうしても、臺所か、二階にある彼女自身の部屋かで——それは青色の部屋で、こゝには彼女のお嬢さまよりほかのもののは決して入ることが出來なかつた、——人の知らない間にこつそり食事をするをやめなかつた。今日の食事には、ミス・プロスは、お嬢さまの愉快さうな顔と彼女を喜ばせようといふ嬉しい心遣ひとに答へる意味で、非常に打ちくつるいだ、それで食事もまたひ

一九八一

どく愉快であつた。

それは蒸し暑い日であつた、で食事がすむと、ルウシイは、葡萄酒を籐懸の樹の下に運び出して、一同も外で休むことにしようといひ出した。あらゆることが彼女を中心にして動いてゐるのだから、皆は邸座に籐懸の樹の下に出た、彼女は特にローリイの爲めに葡萄酒を運んでやつた。暫く前から、彼女はローリイのお酌の役をつとめてゐたが、皆が籐懸の樹の下に坐つて話をしてゐる間も、彼女は彼の杯に酒が絶えぬやうにしてやつた。此處から見ると妙な恰好に見える方々の家の、裡手が、ここで話してゐる彼等の方を覗きこんでゐた、籐懸の樹はいつものやうに彼等の頭の上でさゝやいてゐた。それでもまだ、何百の人々はやつて來なかつた。皆が籐懸の樹の下に坐りかけてゐたときに、ダーネイがやつて來た。だが、彼はたつた一人であつた。

ドクタア・マネットは深切に彼を迎へた、ルウシイもさうであつた。だが・ミス・プロスだけは突然、頭と體が引きつけたやうにぐるりと横を向いたが、家の中に引き込んでしまつた。彼女がこの病氣にかゝるのは珍らしくなかつた、そして彼女はこのことを、馴染みな人たちとの會話のときには

『痙攣のはじまり』と呼んでゐた。

ドクターは非常に元氣であつた、そして特別に若く見えたり彼とルウシイとの似てゐるところが、かふいふ時には殊更つよく目だつた、娘は父親の肩にもたれ、父親は娘の椅子の背に腕をやすめて、二人ならんで坐つてゐるとき、彼等の似寄りをくらべてみるのは、ひどく楽しいことであつた。

ドクターはいつにない元氣で、終日いろいろな題目について話してゐた。「時に、ドクター・マネット、」皆が籐懸の樹の下に坐つたときダーネイがかふひひかけた―それは偶然にも倫敦の古い建築物といふのが、その時の話題になつてゐたので、それを肖然に發展させるつもりでゐひ出したのであつた―「あなたは倫敦塔をよく御覽になつたことがありますか。」

「ルウシイと一緒にやつてみましたよ、ぢやがたつた一度きりです。何だか面白さうなものが一杯あるなといふことが分るぐらゐの見物で、それ以上には見ませんでした。」

「あなた方が御存じのやうに、私は別の理由であすこにゐたことがあります。」ダーネイは微笑を浮べながらも、いくらか腹立たしさうに顔を赤くしてかふあつた、「もちろん塔の見物があるほど出来るやうな便宜の得られる理由からぢやなかつたのですがね。あすこにゐたところに、私は珍しい話を聞きましたよ。」

「何でございますの。」ルウシイが訊いた。

―九九―

「少し改築するところがあつた時、職人達が、ぐゝと昔建てられたまゝ忘れられてゐた地下牢にぶつゝかつたのです。その牢の内側の壁の右は、どれもこれも囚人の彫りつけた書きもので一杯で―年月日や、人の名や、愁訴や、またお祈りの文句などがあつたといひます。壁の片隅にある一つの石の上には、多分死刑を受けたらしい一人の囚人が、最後の仕事として文字を二つだけ彫つてあつたさうです。それは何か極く貧弱な道具で、しかも覺束ない手で、大急ぎで彫つたらしかつたのです。最初それはD・I・Cと讀まれましたが、なほ詳しく調べてみると最後の字はGであることが分りました。ところが記録にも傳説にもかふいふ頭文字の姓名をもつてゐる囚人が見えないのです、で、この名前は何だらうかといふ推測がいろいろあつたが、結局徒に終わりました。やがてこの三文字は姓名の頭文字ではなくて、一つの完全な言葉、DIG 即ち掘れといふ字ではないかといふ者が出ました。この文字の彫られてゐる下の牀は、注意深く調べられました、すると石か、瓦か、或は敷石の碎片のやうなものか何かの下の土の中に、小さな革の小箱か袋かと思はれるものゝ灰と混つて、紙の灰が見付け出されたのです。この無名の囚人の書いたものは、かうして永久に讀まれる折がなくなりましたが、然し彼はとにかく何かを書いて、それを牢番人の眼に觸れさせないやうに、隠し了せたものだつたのです。」

「おや、お父さま―」ルウシイは叫んだ。「御氣分がお悪いんですの―」

彼は手で頭をつかんで突然立ち上つたのである。彼の態度と顔つきとはみんなをすつかり怯えさせた。

「いや、別に悪くはない。たゞ大粒の雨がやつて來たので、それでびつくりしたのぢや。みんな家へ入つた方があゝだらう。」

彼は見る間に回復した。實際、大粒の雨が降つて來出した、彼が出してみせた手の甲には雨粒の痕がついてゐた。彼は今話されてゐた地下牢での出來事については一言もあはなかつた、そしてみんなが家の中に入つたとき、ローリーの事務的眼光は、チャールズ・ダーネイに向けられたドクターの顔

に、かつて法廷の廊下でダーネイに注がれたあの異様な表情と同じものが浮んでゐるのを認めた、或は認めたやうな気がした。

だが、彼の回復しかたが餘り早かつたので、ローリイは自分の事務的眼光を疑つたほどであつた。ドクタアが廣間にある例の金色の巨人の腕の下に立ち止つて、自分はまだ少しの驚きにもこらへることが出来ない、だから今落ちて來た雨粒にもびつくりしたのだと讀明したときには、もう彼はその巨人の腕よりもしっかりしてゐた。

— 一〇〇 —

お茶の時になつた、ミス・プロスはお茶を入れてゐたが、また痙攣を始めた。だが、まだ何百の人々は見えなかつた。カートンがぶらり入つて來たが、彼でたつた二人目であつた。

その晩はひどく蒸し暑かつた、もちろん彼等は窓や戸を開け放してゐたけれども、どうにも暑くて耐へがたいほどであつた。茶の卓子がかたづけられると、彼等は、一つ窓際を集つて、重くるしい黄昏をちつと眺めた。ルウシイは父親の傍に、ダーネイは彼女の傍に坐つてゐた、カートンは窓にもたれて立つてゐた。窓掛は長くて眞白のものであつた、雷鳴に先立つた突風がこの一隅にもいくらか舞ひこんで、その窓掛を天井に吹きあげ、何か妖怪の翼のやうに揺つた。

「雨はまだ降つてゐるな、大粒のやつが、重さうに、少しばかり、」ドクタア・マネットがひつた。「のろのろと振つてゐる。」

「だが慥かに降つて來る。」カートンがひつた。

彼等は、何かをちつと見張つてゐる人々が大抵するやうに、——暗い部屋で、電光を見張つてゐる人々がいつもするやうに、低い聲で話し合つた。

往來では、雷雨が來ないうちに避難所に急がうと驅けまはる人々でひどくがやがやしてゐた。不思議なほど反響を起すこの片隅では、往つたり來つたりする聲音の反響を騒々しくたてゝはゐたが、ほんものゝ聲音は近くには一つもなかつた。

「大勢の人間が通る、だがこゝへは誰も來ませんね。」一同が暫く聽耳を立てゝゐるとダーネイがかぶあつた。

「ほんとに深い印象を與へるではございませんか、ダーネイさん、」ルウシイは訊いた。「時々、わたくし、夕方こゝに坐つて居りましてね、つい空想に耽つてしまひますの——でも今晩は何もかも眞暗で恐いやうでございませうから、そんな馬鹿げた空想の影でさへ、わたくしもをぞつとさせますわ——」

「ではわれはれもぞつとしたいものですね。然し何故ぞつとするのか、お伺ひが出來ませうか。」
「あなた方にはつまらないものに見えませう。かふいふ氣紛れな氣持はそれを味つてゐる者だけが深い印象を受けるものだと思います。人様にお話しできるものではございせんわ。わたくし時々、夕方こゝに一人で坐つて、ちつと物音を聞いて居りますと、こんな聲音の反響が、おつゝけわたくしどもの生活の中に入つて來るすべての聲音の反響だといふやうに、想像されるのでございませう。」

「然しさうだつたら、われはれの生活の中にはいつか大勢の群集が入つて來るわけですね、」とシドニイ・カートンが

— 一〇一 —

氣むづかしさうな調子で口を入れた。

聲音は絶え間なくつゞみだ、その急しひ反響がますます甚しくなつた。この一隅の反響が入り亂れた、或るものは窓の下にあるやうに、或るものは部屋の中にあるやうに、或るものは来るやうに、或るものは行くやうに、或るものは突然止るやうに、或るものは全くやんでしまふやうにひゞみだ。どれもこれも遠い通りの聲音で、近くに見えるものは一つもなかつた。

「こんな澤山な聲音がわれはれ全部のところと一緒に來さうなのですか、ミス・マネット、それともわれはれがめいめいであの聲音を別けることになるのですか。」

「存じませぬわ、ダーネイさん。ですからわたくし、つまらない空想だつて申し上げたのに、あなたがお訊きになるんですもの。わたくしがそんな空想をしましたときは、一人切りでしたから、あの聲音を、わたくしの生活と父の生活の中に入つて來る人たちの聲音だと想像したのでございまして。」

「僕はその聲音を僕の生活に引きうけてあげます！」カートンがかふいひ出した。「僕は別に質問もしません、條件もつけません。僕にはそのまゝで分るのです。やがて、我々を厭倒しさうな大群衆が襲つて來るのです。ミス・マネット、僕には彼等が見えるのです——そら、あの電光によつてです。すね。」窓にもたれかゝつてゐる彼の姿をあざやかに照した一陣の閃光のきらめいたあとで、彼はこの最後の一句を附け加へた。

「僕には彼等の音が聞えるのです！」彼は、一しきり雷鳴がしたあとでまた附け加へた。「そら、彼等がやつて來ましたよ、速い、激しい、兇暴な彼等が！」

彼が言つたのは雨の土砂ふりど怒號のことであつた、それは彼の話を止めた、この雨の中ではどんな聲も聞きとれなかつたからであつた。恐ろしい雷鳴と電光の嵐が、布をならべたやうな雨と共に、どつどやつて來た、そして夜半に月が出るまで、この轟鳴と電火と雨とは一寸の小やみもなかつた。

ローリーが、長靴を穿いて提燈をもつたジェリイに護られて、クラアクンウエルへの歸路については、セント・ポウルの鐘が澄んだ空に一時を打つたところであつた。ソホウとクラアクンウエルの途中は寂しい路が多かつたので、ローリーは追剣を用心して、いつもジェリイをこの用事の爲めに頼んで置くのであつた、尤もふだんは、もう二時間も前に出かけたのであつた。

「何といふ夜だつたらう！え、ジェリイ。」ローリーはあつた。「死人でも墓場から出さうな夜だな。」

「わしは、旦那、そんな夜てえのを見たことはありません」

— 一〇二 —

よ、——それに墓からその、何とかゞ出さうだなんてことも存じませんがねえ。」ジェリイが答へた。「お休みなさい、カートン君。」この事務家はあつた。

「おやすみなさい、ダーネイ君。わたしたちは二度とかふいふ夜を一緒に見ることはありませんうかなあ！」

*** ** *

恐らくあらふ。恐らく、彼らを厭倒するやうな人民の大群衆がその突進と怒號をつくして襲つて來るのを見ることであらふ。

七、都會に於けるモンセエニユール

宮廷で権力のある大貴族の一人モンセエニユール（モンセエニユールは貴族のことで、こゝでは全貴族を代表してゐる）は、巴里の大邸宅で、二週間目毎にやる接見をしてゐた。表の幾間かに控へてゐる崇拜者の群にとつて、最も神聖なものである奥の一間にゐたモンセエニユールは、いまそのチョコレートを飲むところであつた。モンセエニユールはいろいろ様なものをやすやすと嘸み下すことが出来た。ことに二三の不平等からは、拂蘭西そのものをさへ手つ取りばやく嘸み下してゐるやうに取沙汰されてゐた。だが彼の毎朝のチョコレートは、料理番の外に四人の屈強な人間の手を借りなければ、なかなかモンセエニユールの咽喉の中に入りかねるのであつた。

本當に、それには四人の人間が要つた。四人が四人とも金びかのきらびやかな衣服を着てゐたが、ことにその中の頭分はモンセエニユールに口ざはりのゝチョコレートを運ぶ爲めに、モンセエニユールの肌理た、氣高い高雅な流行を競ふて、彼のポケットの中に黄金の時計を二つ以上もつてゐなくてはやつていくことが出来なかつた。一人の侍者は神聖な御前へチョコレート注器を運んだ。二番目の侍者は特にそれだけに使ふ爲めの小さな器具でチョコレートをかき廻して泡をたゞせた。三番目の侍者はお氣に入りのナプキンを差し出した。四番目の侍者（即ち金時計を二つもつてゐる男）はチョコレートを注いだ。モンセエニユールにとつては、かふいふチョコレート係りの侍者の一人缺けてもこの讚美にみちた天が下での高い地位を維持することは不可能であつた。若し彼のチョコレートが不名譽にも、僅か三人の侍者に依つて給仕されることがあつたら、それは家紋にとつて深い汚辱となつたであらふ。もし侍者が二人となつたら、彼はきつと死んだに違ひなかつた。

モンセエニユールは昨夜、或る小宴會に出掛けたが、その席では、コメデイやグラント・オペラがいかにも面白く催された。彼は大抵毎晩のやうに、美しい連中に取りまかれて小宴會に出かけた。モンセエニユールはどこまでもお愛想がよ

一〇三

くて感動し易いたちだつたので、コメデイやグラント・オペラは、退屈な國事問題や國家の機密に携はつてゐる彼にとつては、全拂蘭西の窮乏よりも遙かに大きな影響を及ぼした。拂蘭西にとつてはまことにあり難いことである、拂蘭西と同じやうに恵まれた情態にあるあらゆる國々にはいつもこれに似たことがある！——例をあげれば、あの、國を賣つた浮かれ國王のスチュアート（チャールズ二世）の遺憾極まる時代の英國にとつては、何時もさうであつた。

モンセエニユールは、國事の總體について一の眞に高尚な（反語）思想をもつてゐた。それは、あらゆるものに勝手な道を進ませて置けといふことであつた。だが、個々の國事については、モンセエニユールはそれとは別の眞に高尚な思想をもつてゐた。それはあらゆるものは彼の爲めにならなければならぬといふこと——彼自身の権力と私囊とを肥すに都合のよいものとならなければならぬといふことであつた。——彼の快樂については、一般的なものであると特殊なものであるとを問はず、モンセエニユールはまた一つ別の、眞に高尚な思想を持つてゐた。それは凡そ世の中は自分の快樂の爲めにつくられたものであるといふことであつた。彼の經典にはかふあつた（代名詞だけが原文と異つてゐるか、それは大したことではない）。『モンセエニユールゐひけるは、地とこれに充てるものは、皆わがものなり。』と。

だがモンセエニユールも次第に公私二つ共にその財政にはいろいろならぬ困難が這ひ込んで來てゐるのに気がついた。そこで彼はその兩種の財政について、やむを得ず租税請負人（一定の金を政府に入れてその代り或る地區の租税を集めて自分の収入となす）と結託した。公の財政については、モンセエニユールは全くそれをどうすることも出来なかつたので、誰かそれをどうにか出来る者に任さなければならなかつたし、彼自身の財政について言へば、租税請負人は金持ちであり、モンセエニユールは積年の贅澤沙汰と多額の失費の爲めにだんだん貧乏になつて來てゐたからである。そこでモンセエニユールは彼の妹を、彼女がつけ得る一番安直な衣物——つまり尼服——の差し迫つた着用をまだ斷る間のあるうちに、いそいで僧院からつれもどした。そして彼女を、家門はいやしいが、大金持ちである租税請負人に褒美として與へた。この租税請負人は、把手に黄金の林檎のついた結構な杖を攜へて、表側の部屋の一團の中に交つて、あらゆる人々からひどく平伏されてゐた——だがモンセエニユールの血統をひく優秀な人類だけはいつても例外で、この連中は（その中には自分の妻も含まれてゐるが）この上もない高慢な輕蔑で彼を見下してゐた。

この租税請負人は派手な人物であつた。彼の厩には三十頭の馬がある。彼の廣間には二十四人の召使が控へてゐる。彼の妻には六人の侍女が侍してゐる。掠奪と徵發の出來る

一〇四

ところでは、たゞそれをやるだけだといふやうな風をしてゐる人間だけに、租税請負人は——彼の婚姻關係が社會道徳を幾分増さしたとはひへ——當日モンセエニユールの邸宅に伺候した人間のうちでは、少くとも最も現實に即した人間であつた。

何故ならかふいふ控部屋は、見た眼には美しくもあり、また當時の趣味と熟練とがなし得る限りの工夫を凝らした裝飾で飾りたてゝあるが、實際をいへば、果敢ないものであつた。何處かに檻樓と寢帽子の案山子達があるといふ事實に幾分でも結びつけて考へると（且つその居る場所もさう遠方ではない、何故なら貧富の兩極から殆んど同距離にあるノートル・ダム物見塔は、同時に兩者を眺めることが出來た）、そんなものはひどく不愉快な仕事になつたことであらふ——尤もそれはモンセエニユールの館に於いて何人かゞこの點に思ひ到つたとしてのことだが。軍事上の智識に缺けてゐる陸軍士官、船のことを少しも知らぬ海軍士官、國務の觀念を全然もたぬ文官、世俗的な世界でも一番惡劣の世界にゐて、好色の眼と放縱な舌と、より放縱な生活をもつ鐵面皮な僧侶、すべてがめいめいの職分に少しも適してゐない、すべてがそれに適するふりをして、恐ろしい嘘をついてゐるのだが、すべて多少ともモンセエニユール一派の人間になつてゐるので、あらゆる公職にはめこまれてどんな望みでも遂げられるのである。實際こんな人間共は、數へるにいとまのない程であつた。モンセエニユールや國家には直接關係しないが、それと同じやうに、眞實といふものには一切觸れたこともなく、或はこの世の眞の目的に向つて眞直ぐな道を踏んで生涯をすごすなどいふことには甚だ縁の遠い人々が、やはり少くはなかつた。ありもせぬ空想的な病氣に贅澤な治療を施して大身代をつくつた醫師達は、モンセエニユールの控部屋で、そのお上品な患者達に愛嬌をふりまいてゐた。國家が犯されてゐると言へば言へる程度の輕微な疾病に對しては、あらゆる救済策を發見しても、眞面目に只一つの罪惡でも根絶しようとする救済策だけは發見の出來ない企業家達は、モンセエニユールの接見會で手當り次第の人々の耳に氣狂ひぢみた泡沫談を吹きこんでゐた。言葉で世界を改造して、大空を摩する紙のバベル塔（舊約聖書、創世記第十一章）を築いてゐた不信仰の哲學者達はモンセエニユールに依つてよび集められたこの驚嘆すべき會合で、金屬の變質（下等のものを上等にする）といふことに眼をつ

けてゐる同じ不信仰の化學者達といろいろの話をしてゐた、高い門閥の風流な紳士達は——高い門閥といふことは、この注意すべき時代では（そしてこの以後もさうだが）、あらゆる人類の福利に就いて、全く無關心になるといふことをその特長としてゐたのである——モンセエニユールの館では、もつとも

——一〇五——

模範的な倦怠に落ちてゐた。巴里のきらびやかな上流社會に於けるかういふ様々な名士達の家庭では、モンセエニユール崇拜家の群にまじつてゐる謀者達でぎへ——それはこのお上品な會衆の大半をなしてゐるが——この社會の天女達（この人々の夫人たち）のうちで、自分に子供があるといふことをその舉動や態度に現はしてゐる奥方をたゞの一人でも見出すことは難しいと思つたにちがひない。實際、たゞ厄介な生き物をこの世の中に生み出すといふだけの行爲を別にすれば、——こんなことだけでは決して母といふ名に値するものではない——母などゝさういふものは流行社會には知られてゐなかつた。さういふ流行はつれの赤坊は百姓女があづかつて育てゝゐた、そして一方では、六十歳にもなる澤々した夫人が、二十歳のものゝやうな衣物をきたり、二十歳のものゝやうに食事したりした。

『眞實缺乏』の癩病は、モンセエニユールに近侍してゐるあらゆる人間の姿を醜くした。一番表側の部屋には以上とは例外な人々が六人ばかりゐたが、これは數年このかた、世間一般がどうやら惡化して來るといふ漠然とした不安を幾分もつてゐた人々である。で世間を匡正する有望な方法として、その六人のうちの半分はコンヴァルジョニスト（羅馬教の一派でジャンセン主義を奉ずる者）といふ狂信的な宗派の信者になつた。そして、この時でさへも、その場で口角に泡を飛ばして、怒つて、わめいて癲癇を起こしてみたものか——かふしてモンセエニユールの道案内として、將來の爲めによく分る道標を立てることにしたものかどうかと、内心に考へてゐた。この三人の苦行僧をのけた他の三人は別の宗派に走つた。それは『眞理の中心』で萬事を彌縫しようとするもので、この派の主張によると、人間は眞理の中心を離れてゐる、——これには大した論證も必要ではない——だが、まだその周圍から出てしまつてはゐない。だから斷食することゝ靈體を見ることゝに依つて、人間がその周圍の外に飛び出すのを防ぐことが出來、更に彼をその中心に押し戻すことさへ出來るといふのであつた。それで彼等のあひだでは、靈體と交通することがひどく流行つた——それには、いろいろな利益があつたといふが、あまりはつきりしたものではなかつた。

が、モンセエニユールの大邸宅に集つた一同が、申分のない服裝をしてゐる點は、いさゝか愉快なことであつた。もし最後の審判の日が衣裳デーであるといふことが確められさへしたら、そこに集つた人々はさぞ永遠に正しいものとなつたことであらふ。細かく縮らせて、粉をふりかけて、かふいふ風に結ばれた髪の毛、技巧的に保護され、手入れされてゐる美しい顔色、これ見よがしの伊達な長劍香ひの感覺に對する微妙な配慮、こんなことをすればたしかに

——一〇六——

どんなものでも永久に持續させることが出來たであらふ。門閥の高い風流な紳士達は、いろいろな飾物を垂れてゐたが、彼等がものろさゝうに動くたびに、それがそゝと音を立てた、黄金の鎖は小さな寶物の小鈴のやうに微妙に鳴つた。かふしたもののゝ音、絹や金襴のさらさらと摺れる音の爲めに、この空氣の中に一種のざわめきが起つて、サン・タントアヌの町をもそのひどく飢えた町民をも、遠

くへ煽ぎ飛ばしてしまつた。

服装こそ、あらゆるものをその適所につかせて置く爲めに用ひられる唯一のあらたかな護符であり、魔咒であつた。人はすべて永遠にやむことのない假裝舞蹈會の爲めに衣裳をつけてゐるのである。チユイルリイの王宮から、モンセエニユールと全宮廷を經、國事會議、法廷、あらゆる社會（あの案山子達を除いた外は）を經て、この假裝舞蹈會は、死刑執行人に至るまで降つて行く。彼でさへその魔咒に従つて、役目を果すときには『頭を縮らせて、粉をふりかけ、金絲レースのついた上衣を着け、舞蹈鞆を穿き、白絹の鞆足袋を穿いて』臨まなければならぬと、規定されてゐた。絞首臺や刑車（車裂きにする）に手をつけるときにも――斧を使ふことは滅多になかつた。――ムツシュユー・パリは（地方の同業の仲間、即ちムツシュユー・オルレアンや、その他の間では、巴里の死刑執行人をかふ呼ぶのが法式であつた）、かふいふ見事な服装をつけて臨むのである。だからこの基督紀元千七百八十年に、モンセエニユールの接見會に出た連中で、この死刑執行人が頭髪を縮らし、粉をふりかけて金絲レースをつけ、舞蹈鞆を穿いて、白絹の鞆足袋をつけるといふやうなことに根づいてゐるほどの制度が、やがて外ならぬ自分の運の星の消えるのを見るやうな目に會はふとは、誰が思つたであらふ！

モンセエニユールはチヨコレートを飲んでしまつて、四人の侍者に重荷をおろさせ、最も神聖な奥の間の戸をさつと開かせて、しづしづと出て來る。と、これはまた何といふ屈從、何といふ阿媚諂ひ、何といふ奴隸根性、何といふ淺ましむ卑下であらふ！連中がその體も心も押しまけてお辭儀をしたところを見れば、もう天の爲めにさゝげるものが、これらの人間には少しも殘されてゐないほどであつた――それは多分モンセエニユールの崇拜者達が決して天を煩はすやうなことのなかつたいろいろなる理由の一つであつたかも知れなかつた。

此處には約束の一言を、彼處には微笑の一つをふりまき、或る幸運な奴隸には何事かをさゝやき、他の幸運な奴隸には手を一ふり振つてみせつゝ、モンセエニユールは、如何にも愛嬌たつぷりで、控部屋を通りぬけて、例の『眞理の中心』の果まで行つた。そこまで行くと、モンセエニユールは、

――一〇七一――

踵をかへして又戻つて來た、そして程よい汐時を見はからつて、例のチヨコレート係りの精靈達の介添でまた聖潔な奥の間に納つて戸を閉てさせた。それつきりもう顔を出さなかつた。

顔見世が終つたので、部屋の空氣の中のざはざはした音がすつかり小さな風になつた。そして例の寶物の小鈴のちやらんちやらんといふ響きが澤山階段を下りてあつた。聞もなく、そこにはあの大勢の中からたゞ一人の人物が殘された。彼は帽子を小脇にはさみ、嗅煙草の箱を手にして悠然と姿見のあひだを通つて出口の方へ行つた。

「貴様なんぞ、」この人物は途中最後の戸口に立ち止つて、神聖な奥の間の方を振り向きながらあつた。「惡魔にでもくはれてしまへー」

かふいふとゝもに彼は足の塵を拂ひ落すやうに、指についた嗅煙草を振り拂つた。そして靜かに階段を下りてあつた。

彼は六十歳ばかりの、美々しい服装をした、傲慢な態度の、見事な假面のやうな顔をした人物であつた。顔は透きとほるやうに蒼白い、顔立ちはいかにもはつきりとしてゐて、一種頑固な表情をみせてゐる。鼻は外の點では見事な恰好をしてゐたが、二つの孔の上がほんの少し凹んでゐる。この二つの凹みや、壓痕は、この顔に表はれるほんの一寸した變化でも宿る、そしてこの二つの凹みはときどき微かな鼓動のやうに動いて擴がつたり、縮まつたりする。それから、これは又、顔全體に叛逆と殘

忍性の表情を興へた。なほ注意して吟味してみると、これがかふいふ顔色を助長させることが出来るのは、あまりに一文字すぎて薄い口の線と、眼窩の線のかげだといふことが分つた、それでもこの顔から受ける印象からいふと、それは美しい顔であり、非凡な顔であつた。

この顔の持主は階段を降りると中庭に出て、自分の馬車に乗つて駈けさしてゐつた。接見の集りでは彼と話を交したものはさう澤山はなかつた。彼は皆から少し離れて立つてゐた、たゞモンセエニユールだけは、彼に對して幾分は熱心な態度を示したかも知れない。

さてかふいふわけで、彼にとつては、自分の馬の前に平民達がばつと散つたり、ときどき危く蝶さ殺されさうになつて逃げたりするのを見ることは、むしろ愉快なことのやうに思はれた。彼の馭者はまるで、讐敵でも追ひかけてゐるやうに馬車を駈けさせた。だが主人の顔にも唇にも、馭者の亂暴な無鐵砲さを答める色は浮ばなかつた。この讐のやうな市、啞のやうな時代に於いてさへも、汰道もない狭い通りでは、あたり構はず馬車を駈ける貴族風のこの猛烈な習慣が、純粹の下民達を、むごたらしくも不具にしたり

一〇八一

するといふ苦情や不平が、自然、ときどき聞えて來た。だがそんなことを二度も考へ直すほどその心に留めたものはほんの少しゝなかつた。他のすべてのことゝ同じやうに、このことでも、惨めな平民達は自分等の力で出来るだけその危険を避けるより外に道はなかつた。

はげしいごろごろがたがたといふ音を立て、今日では容易に想像もつかないやうな思ひやりのない無鐵砲さで、馬車は町から町へ突進して、さつさと町角を曲つていく、女同志はその前で悲鳴をあげる、男同志はそれのお通りの邪魔をしないやうに、互ひに引つ張りあつたり、子供を引つ張りよせたりしてゐる。たうたう、噴水の近くの或る通りの曲り角をさつさとまがつた途端、馬車の輪の一つが、氣持悪くちよつと搔れた、と同時にあつといふ、激しい叫び聲が、大勢の人からあがつたので、馬は棒立ちになつて跳ねた。

馬が棒立ちになつて跳ねるといふ不都合さへなかつたなら、馬車は多分とまることをしなかつたであらふ、かふいふ馬車がその傷つけた人たちを棄て、そのまゝとどんでん駈けて行くのはよくあることであつたし、そして又、それでゐゝのではなかつたか。怯えたやうな侍僕は急いで馬車を降りてみた。馬の手綱には二十ばかりの手がしつかりとかかつてゐた。

「どろしたのぢや。」と貴族は落ちついて外を見まはしてかゝあつた。

寝帽子を被つた背の高い男が、馬の足の間から何やら包みのやうなものを抱へ上げて、それを噴水の臺石の上にのせた、そして、塵と泥水のなかに身を投げて、その包みの上にのしかゝりながら、まるで野獸のやうにわうはうと泣いた。

「御免下せぬまし、侯爵様——ぼろぼろの衣物を着た、いかにも恐れ入つたやうな男はゐつた。

「その、子供でござえまして。」

「あの男は何であのやうな忌はしひ聲を出すのぢや。怪我はあの男の子供か。」

「へゐ、御免下せぬまし、侯爵様——可哀さうなことに——さやうでござえます。」

噴水は少し離れてゐた。この通りは噴水のあるところが十二ヤード平方ぐらゐの廣場になつてゐたからである。その背の高い男が突然地面から起き上つて、馬車を目掛けて駈けて來たときには、侯爵も一寸の間、思はず兩手を劍の櫛にかけた。

「殺されたあ！」とその男はすつかり逆上した様子で、頭の上に兩手を精一杯差し伸べて、彼の顔

をちつと睨みながらかふ怒鳴った。「死んぢやつたんだ！」

— 一〇九 —

人々はまはりへ押し寄せて侯爵をちつと眺めた。彼を見た多くの人々の眼には、油斷のない見張りと、熱心な意氣込みを現はしてゐた。威嚇や忿怒は少しも眼にたゞなかつた。その上、彼等はまた一言も口をきかなかつた。最初わつと叫び聲を立てたきり、彼等は黙つてゐた。あの口をきいた恐れ入つた風の男の聲も低い元氣のないもので、極端な柔順さを見せてゐた。侯爵は彼等が丁度、穴の中から這ひ出して來た鼠でもあるかのやうに、ざろりと見まはした。

彼は財布を取り出した。

「お前達が自分の體や、子供の始末も出來んといふのはわしにとつては思ひも奇らぬことぢや。」彼はかふ言つた。「お前達の一人や二人は何時でも道の邪魔をしてゐる。お前達はわしの馬にどんな損害を與へたかも知れんのぢや。分つたか！これをあの男に遣れ。」

彼は拾つてやるやうにと侍僕の方へ一枚の金貨を投げてやつた。人々の眼は一つ残らず金貨の落ち先きを見極めようとするやうに前方へ首を伸した。背の高い男は、またも、この世のものとは思はれないやうな叫び聲を立てた。「死んぢやつたんださう！」

彼は急いで駈けて來た今一人の男を見て、何やらいふのをやめた。この憐れな父は、彼を見るなりその肩に身を投げて、おひおひと泣きながら、噴水の方を指さした。その

噴水のところでは、一三人の女たちがちつと身動きしない包みの上にかぐんだり、そのまはりを靜かに歩いたりしてゐた。だが彼女たちも、男たちと同じやうに一言も言はなかつた。

「あゝよ、すかり分つてゐる、分つてゐる！今來たばかりの男はかふるつた。男ぢやねえか、しつかりしろ、瓦斯パール！この可哀さうな玩具（子供）の身にすれや、生きてゐるより、かうして死んだ方がまだ優しだ。苦しさ知らずに死んだんだからな。一時聞だつてこんな仕合せに生きてゐることが出來たかい。」

「おひおひ、お前は哲學者ぢやな。」侯爵は微笑してかふるつた。「お前の名は何といふな。」

「皆がドファルジュと申します。」

「何の商賣ぢや。」

「はい、侯爵様、酒屋でございます。」

「それを拾へ、哲學者の酒屋。」侯爵は金貨をもつ一枚出して投げながら言つた。「お前の勝手に使ふがよい。さ、馬ぢや、怪我はないか。」

もう二度と集つた連中の方を振り返りもなされずに、侯爵様は座席にそり返つて、何かのはずみで一寸したありふれた品物を毀したが、その賠償はちやんと果したとでもいふ

— 一一〇 —

やうな、しかも十分に賠償を果すことが出來たとでもいふやうな紳士の態度で、今や馬車を駈けさせようとしてゐる途端、突然彼のゆつたりとした氣分がかき破られた、それは一枚の鐵貨が馬車の中に飛びこんで來て、その牀の上でちりんと鳴つたからである。

「待て！」侯爵はかふるつた。「馬をとめる！誰が投げたのぢや。」

彼は一寸前に酒屋のドファルジュが立つてゐた場所に眼をやつた。だがそこにはあの憐れな父親が

敷石の上に顔をすりつけて、ひれ伏してゐたが、そばに立つてゐたのは編物をしてゐる色の黒い屈強な體格の女であつた。

「犬どもめが！」こと侯爵は鼻の上の兩方の凹みを除いては、別に顔色もかへず、悠然とゐた。「わしは轢かうと思へばお前達の誰を轢くことも出来る、またお前達をこの世から滅してしまふかも出来るのぢや。若しわしの馬車に投げつけたのがどの悪者か分つたなら、若しその悪者がすぐ近くにあつたなら、そいつめの骨を車輪の下で粉微塵にしてやるのぢやが。」

彼等の境遇がひどく怯氣づいたものである上、また侯爵のやうな人間は、法律の範囲内でも範囲外でもどんなことをなし得るかといふことについて、永い間のつらい経験から知り抜いてゐたので、一人として口をきく者も、手を舉げる者も、また眼を舉げる者さへもなかつた。男達の中には一人もなかつた。だが編物をして立つてゐた例の女だけは毅然と顔を上げて、侯爵の顔を眞正面ににらんでゐた。これに氣をとめることは彼の威嚴に關することだつたので、侮蔑をたゞへた眼で彼女をちらつと見すごし、他のすべての鼠どもをもちらりと見過した。彼はまたその座席にそり返つて、

「やれ！」と命令した。

彼は馬車を驅つて立ち去つた。他の馬車が後から後へと引きつゞゐて、渦卷のやうにやつて來た。大臣も國家の企業家も、租税請負人も、醫師も、辯護士も、僧侶も、グラント・オペラやコメディも、全假裝舞踏會をあげて、きらびやかな絶えざる流れとなつて、渦卷いて來た。鼠どもはそれを見物しに、穴から這ひ出して來た。彼等は何時間も何時間もちつと眺めてゐた。時に、兵士や警吏が、彼等とその觀物の間を通り、そこに立ち塞がつて、人間の墻をつくつたので、彼等は墻の後方にしりごみして、その隙間から覗いて見た。悲しみの父親はもう疾うにあの包みを抱へ上げて、それを持つて何處かへ姿をかくしてしまつたが、その包みが噴水の臺石の上に載せてある間、番をしてゐた女達は、またそこに坐りこんで水の流れと假裝舞踏會の行列をちつと見守つてゐた。あの異彩のある、編物をしてゐる

—— ———

一人の女だけは、運命の女神のやうにきつとした態度で、まだ編物をつゞけてゐた。噴水の水は流れる。速かな川は流れる、日は流れて夕べになる、この市にある幾多の生命も捷通りに流れて死の寂寞に入る。時の潮は何人をも待たない、鼠どもはまたも暗い穴の中にひしめて眠つてゐる、假裝舞踏會は輝かしく晚餐の食卓を照してゐる。すべてのものはめいめい自分の道について流れた。

八、田舎に於けるモンセエニユール

美しい風景、そこにはうるはしひ穀物のみのりが、あるにはあるが豊かではない。本當なら小麦のあるべきところに、貧しげなライ麥や貧しげな豌豆大豆の畑があり、ひどく出來の惡の野菜の畑がある。非情の自然の面にも、それを耕した男や女に見ると同じやうに、いやいやながら生ひ立つて行かうとするやうに見える一般的な傾向がある——思ひ切つて枯れてしまひたといふ、元氣のない傾向が見える。

侯爵閣下は四頭の馬にひかせて二人の馬丁を先導にした旅行馬車に乗つて、嶮しむ小山を骨折つてのぼつてゐた。侯爵閣下の蒼白い顔色には一刷けの赤味が照りはえてゐたが、それは別に彼の高貴な育ちの威嚴を裡切るものではなかつた。それは内から出たものではなく、彼の力でどうにも出來ない

外的の事實——即ち、日没によつて添へられたのであつた。

馬車が頂上に達すると、夕陽は尙ほ一層あかあかとこの旅行馬車に射しこんだので、乗つてゐる人は眞紅に浸された。

「洗むの間もないな。」侯爵は自分の手をちらりと見遣つてかぶあつた。

實際太陽はまをすつかり低くなつてゐたので、それは間もなく沈んでしまつた。重い輪止めが車輪につけられて、馬車が燃えがらのやうな臭ひをたて、塵の雲を振はしつゝ下り坂をすべり降りたときには、眞赤な夕映の光もすぐに消えてしまつた。太陽も侯爵も共に降りてしまつたので、輪止めが取りはずされた時分には、夕映は影も残つてゐなかつた。

だがそこには、嶮しむ、又廣々とひろがつた荒れた土地、山の麓の小さな村落、そのかなたの廣い見晴らしと隆起、教會堂の塔、風車、狩獵用の森、牢獄に使はれてゐる堡砦の立つてゐる斷崖などが残つてゐた。夕暗が迫つて來るにつれて、侯爵はだんだん黒ずんで來るかふいふものを見わたした、いかに家路に近づいたものゝやうな態度で見わたした。

——二二二——

村には一寸の貧乏くさい通りがあつて、そこに貧乏くさい酒造場、貧乏くさい製革場、貧乏くさい居酒屋、驛次馬のつけかへにつかふ貧乏くさい厩、貧乏くさい噴水など、貧乏くさい普通の設備がすべてそらつてゐた。そこにはまた貧乏くさい住民もあつた。村の住民は皆、貧乏であつた、彼等の多くは戸口に坐つて、夕飯の爲めに瘦せからびた葱か何ぞを切り裂いてゐた。また多くのものは噴水のところで樹の葉や草や、およそ地から生えたもので食べることの出來る限り、いろいろなつまらないものまで洗つてゐた。彼等を貧乏にした明白な證據も缺けてはゐなかつた。國稅、教會稅、貴族の爲めの稅、地方稅、一般稅が、この小村の嚴かな礎に従つて、こちらでも、あちこちでも、拂はれなければならないならなかつたので、終ひには呑み滅されずに残つてゐる村が一つでもあらうかと不思議がられる程であつた。

子供の姿もあまり見えず、犬の影もなかつた。大人の男や女についていへば、彼等がこの世で選び得るものはかふいふ豫想で語ることが出來た——つまり水車小屋の下の小さな村で、命をつなぎ得られる最下低の生活條件で歩いて行くか、でなければ、あの斷崖の上に聳えてゐた牢獄で囚人となつて死ぬるか、これであつた。

先きに立つた男によつて、また馬丁の打ち鳴らす鞭の音によつて先觸れされて、——馭者の鞭が、夕暮の空に彼等の頭のまはりに蛇のやうにからみ合ふさまは、まるで侯爵がフューリーズ（希臘神話の中の復讐の三女神）にでもお供されてゐるかのやうに見えた——侯爵は旅行馬車に乗つたまゝ問屋場の門口に近づいた。それは噴水のすぐ近くであつたので、百姓達はその仕事をやめて、侯爵の方を見た。侯爵も彼等の方を見た。彼は意識してゐなかつたが、彼等のうちに窮苦にやつれ果てた顔や姿が、そろそろと、だが確實にすり減らされてゐるのを見た。これが全佛蘭西人の憔悴となるのだが、同時にこれについての英國人の迷信も——さういふ事實がなくなつてから、百年近くもやはり續いてゐる——これから生れたものであつた。

侯爵閣下は、彼のやうな連中が宮廷のモンセエニユールの前に頭を垂れたと同じやうに、彼の前に頭を垂れた畏つたやうな多くの顔をぢろりと見やつた——彼と彼等の違ふのは、彼のは機嫌取りの爲めにするのだが、彼等の頭を垂れるのは、たゞ苦痛に堪へる爲めだといふことであつた、——そのとき、白髪まじりの道路人夫が群集に加はつた。

「あいつを、此虜へつれて来ぬ！」侯鬱は、従者にゐひつけた。その男は帽子を手にもつて、連れられて来た。すると他の大勢の連中が、巴里の噴水のところにゐた連中と同じや

― 一一三 ―

うに、傍にたかつて来て眼を見はつたり聞耳を立てたりした。

「お前は道で出會つた男と思ふが。」

「左様でございます、御前様、有難い仕合せに、道でお會ひ申しまして。」

「丘に登るときと、頂上とで、二度ぢやな。」

「左様でございます、御前様。」

「お前は何をあんなに熱心に見てゐたのぢや。」

「はい、御前様、あの男を見て居りましたんで。」

彼は少し屈んで、そのぼろぼろの青い帽子で馬車の下を指した。すると見物人も一齊に馬車の下をのぞいた。

「どんな人間ぢや、これ豚め。何故またそこを見るのぢや。」

「御前様、御免下さいまし。そいつはあの輪止めの鎖にぶら下つてゐましたんで。」

「誰がぢや。」侯爵はかふ詰問した。

「御前様、あの男でございます。」

「この馬鹿どもめ、悪魔にでもさらはれてしまへ！どうしてあの男といふのぢや。お前はこゝらの者を皆よく知つてゐるぢやらう。何といふ奴ぢや。」

「御前様、御免下さいまし。あいつはこゝらの土地の者ではございませんでした。わしが生れてからこゝち、まだ一度も見たことのない男でございます。」

「鎖でぶら下つてゐたど？息が詰るぢやらうが？」

「まことに恐れ入りますが、御免下さいまし、それがその御前様、實に不思議でございます、あの男の頭はこんな風に――ぶらりと下つて居りました！」

彼は體を斜めに馬車の方に向けて、顔を仰向け、頭をがくりと後方にたれたまゝそり返つてみせると、やがて體をもとへ戻して帽子をまさぐりながら、ぴよこんと一禮した。

「どんな奴ぢやつたか。」

「御前様、奴は挽粉屋よりもまだまつ白でございます。すつかり埃をかぶつて、お化のやうにまつ白くて、お化のやうに背が高うございました！」

この描寫は、小さな群集の中に少なからぬ騒ぎを惹き起した。だが人々の眼は、お互の顔色を探り合ふことはせずに、ちつと侯爵の方を眺めてゐた。恐らく、彼の良心をなやますやうな、どんなお化が果してゐるかどうかを見る爲めであつたらう。

「出来しをつた、」侯爵は、このやうな毒蟲が彼を煩はさなかつたことを、ひどく喜ばしく思つてかゝあつた。「馬車に泥棒がくつゝゐて來たのを見ながら、その口を開いて、教へやうともしなかつたとはな、馬鹿め！こいつをそちらに連れて行け、ムッシュー・ガベル！」

― 一一四 ―

ムッシュー・ガベルは問屋場役人で、他に徴税役も兼ねてゐた。彼はひどく謙讓な體で出て來て、この取調べを助けた。そしていかにも役人らしい態度で、取り調べられてゐる男の腕の垂飾（襷褌衣物なので）を掴んでゐた。

「馬鹿め！さ、いつちまへ。」ムッシュー・ガベルはゐつた。

「若しその見ず知らずの男が、今晚お前の村で宿を求めるやうなことがあつたら、そいつを捕へて置くのぢやぞ、そしてそいつの商賣が正直なものであるかどうかを確めて置くがひ、ガベル。」

「ばい、御前様の御命令に従ひますのは冥加の至りで。」

「どうぢや、その男は逃げて行つてしまつたのか？—や、あのいまいましい奴は何處にゐる。」

その『いまいましい奴』はとつとくに六人ばかりの特別な友達（この道路人夫は祕密結社員なのでその仲間をいふ）と一緒に、馬車の下にもぐり込んで、青の帽子で例の鎖を指してみせてゐる。別の六人ばかりの特別な友達が早速彼を引張り出して、息をぜゐる切らしてゐるのを侯爵の前に引き据ゑる。

「こりや馬鹿め、その男は輪止めを掛けに馬車を止めた時に逃げて行つてしまつたのか。」

「はい御前様、あいつはまるで河にでも飛び込むやうに、頭を眞逆様にして、丘の中途をころがつて行きましたんで。」

「ガベル、頼む。やれ！」

一生懸命に鎖を覗き込んでゐた六人の人間は、羊のやうにまだ車輪の間にゐた。突然、車輪が廻り出したので、彼等は仕合せにも際どいところで皮と骨を助けることが出來た。彼等には他に助げるべきものは殆んどなかつた。でなかつたら、彼等はそれほど仕合せとはひへなかつたかも知れない。

馬車は何ものをも突き破るやうな勢で、村から駈け出して、向ふの小山をのぼつたが、間もなく登りの峻しきの爲めに、速力がゆるんだ。だんだん馬車の早さは人歩の程度になつて、夏の夜に薫る野花の馨しい香ひの間をゆらゆら揺れながら、上つて行く。馬丁達はフューリイズの代りに、身のまはりや陽炎のやうにむらがる幾千の蚊群にとりまかれながら、ゆるゆると彼等の鞭の革紐の尾を繕ふてゐる。一侍者は馬と並んで歩く、先驅は朦朧とした遠い彼方を駈けて行くのが聞える。

小山の頂上には小さな墓地がある。一本の十字架が立つてゐて、その上には救世主の新らしい大きな像がある。それは木彫の粗末な像で、無經驗な田舎彫刻師の手になつたものであるが、その彫刻師は、實生活から——多分彼自身の生活から——この像を研究したものであらふ、何故なら、

— 一一五 —

それは恐ろしく憔悴して細々としてゐた。

この大きな苦難——長い間にだんだん悪化してきてゐたが、まだその頂點には達してゐなかつた——の慘たる表象（基督像）に向つて、一人の女が跪いてゐた。馬車が近づいたときに彼女は頭を返して、すばやく立ち上り馬車の扉の傍に身を現はした。

「御前様でございませうか！御前様、願ひでございませう。」

侯爵は苛立たしきうな叫び聲をたてたが、別に顔色は變へずに外を見やつた。

「これ、これ！何の用ぢや。いつもお願ひお願ひといふが！」

「御前様、どうぞお情でございませう！わたくしの夫は樵夫でございませうが。」

「その樵夫の亭主がどうしたのぢや、お前達のいふことはいつも同じぢや。何か納め物が出來んとゐひ居るのか。」

「いへ御前様、納め物はもう何もかも済みました。あの人は死にました。」

「さうか！さぞ安樂ちやらう。わしに亭主を生き返らせてやる事が出来ると思ふのか。」

「あゝ、ゐゝえ、御前様！あの人は向ふの、痩せた草の生えた土饅頭の下に眠つてゐるのでござい
ます。」

「それがどろしたのぢや。」

「御前様、あそこには、痩せた草の生えた土饅頭が澤山ございます。」

「うむ。」

彼女は年とつて見えたが、まだ若かつた。彼女の物腰は強い悲しみを抱いてゐるものゝやうであつた、彼女はその筋立つた、荒くれた兩手を代る代る激しい勢ひで握り締め、片手を馬車の扉にかけた――優しく、愛撫するやうに――丁度その扉が人間の胸で、この手の訴へを感ずることが出来るものゝやうに。

「御前様、お聞き下さいまし！御前様、お願いでございます！わたくしの夫は貧乏で死にました。」

澤山の人たちが貧乏で死にます。もつと澤山の人たちが貧乏で死ぬことございませう。」

「成程な、わしに皆の者が養へようか。」

「御前様、それは御慈悲深い神様だけが御存じのことでございます。わたくしはそれをお尋ね致すのではありません。わたくしは、木の一片でも石の一かけでも宜しうございます故、夫の名を刻んで、あの人が眠つて居ります處をいつまでも教へてくれるやうに、あの人の上に立てさせて頂きたいのでございます。でなければその場所はすぐに忘れられてしまひます、わたくしが同じ貧の病で死にますときには、その場所はもう二度と見つかりませぬ、わたくし」

――二一六――

しは別の痩せた草の生えた土饅頭の中に埋められることございませう。御前様、死ぬ人は大變多いのでございます、そしてどんどんと殖えるばかりです。皆はそれほど貧乏して居るのでございませぬ。

御前様！御前様！

侍者は彼女を扉から引き離れた、馬車は急に走り出し、馬丁は足を速めた、彼女は忽ち遠いうしろに取り残された。モンセエニユールは、またもフューリイズに護られて、彼と彼の館の間に横はつてゐる二二リーグの距離をさつさと縮めて行つた。

夏の世の様々な馨しい、香ひは彼の周囲に起こつた、それは雨が降るのと同じやうに平等に、こゝから餘り遠くも隔たつてゐない用水の傍にゐる、埃まみれの、ぼろぼろの、労働に疲れた群集の上にも送られた。この群集に向つて、例の道路人夫は、その青の帽子の助けをかりて――（この帽子なしでは彼はどうにもならなかつた）――皆が辛抱して聞いてゐられる限り、お化のやうなその男のことを「まごまとしやべつて聞かせてゐた。だんだん彼等は辛抱がし切れなくなつて、一人々と減つて行つた、方々で燈火が小さな窓にまばたいた。やがて、燈火が消されて、多くの星が輝き出た――あだかも燈火は消されたのではなくて、空に射上げられたものゝやうに。

その時までには侯爵の頭上に宏壯な、高い屋根の影と、鬱蒼と茂つた夥しい樹の蔭とがあつたが、彼の馬車が停つたときに炬火の光と代つた、彼の館の大門は彼の爲めに開けられた。

「ムッシュー・シャルル（チャールズ・ダーネイの佛蘭西よみ）を心待ちにしてゐるのぢやが、英吉利からもう着いてゐるか。」

「御前様、まだお着きではございませぬ。」

九、ゴーゴンの首

侯爵閣下の館は堂々たる建物であつた、館の前には、石を敷きつめた廣の中庭があり、正玄関の前の石の露臺のところ、二すぢの階段が左右から出會つてゐた。何處もかしこも石細工で、がつしりとした石の欄干とか、石の壺とか、石の造花とか、石彫の人の顔とか、石の獅子頭とか、何方を向いても見られた。二百年の昔、この建物が完成されたときには、ゴーゴン（古希臘神話、髪の毛は無數の蛇、體には黄金の翼、鐵の鱗があつて、一瞥であらゆるものを石に化したといふ女神）の頭がそれを見おろしてゐたものゝやうであつた。

侯爵は馬車を降り、炬火を先立て、淺く段を刻んだ廣い石階を上つて行つた、炬火の光があくまで夜の闇をかき亂したので、かなたの樹々の間にある厩の大きな棟の屋根にゐる梟からは、喧しく抗議がわめき出された。そのほかは極めて静かであつたので、階段を上つた炬火も、大玄

— 一一七 —

關に差し出されてゐる別の炬火も、夜の戸外にあるものゝやうではなく、丁度閉め切つた御殿の大廣間にでもあるものゝやうに燃えた。梟の聲よりほかに聞えるものとしては、たゞ、噴水がその石造の水盤に落ちる音がするばかりであつた。この、夜は、あの、幾時間か幾時間も息をちつところしたあとで、ほつと長い低い溜息をもらして、それからまた息をちつところすといはれる暗い夜のうちの一つであつた。

玄關の大扉は彼の背後でがたと閉つた、侯爵が通りすぎた廣間には、幾本かの古い猪突槍だとか、長劍だとか、狩獵小刀だとか、もの凄く飾つてある。それよりもつと凄味があるのは、重い乗馬鞭や乗馬杖である。今はその保護者たる『死』のもとに行つた多くの百姓は、その地主が立腹した度にかふいふ鞭を感じたものであつた。

侯爵は炬火持ちを先に立て、夜は眞暗に閉め切つてある大きな部屋は避けつ、階段を上つて廊下に向いた或る扉の方に進んだ。扉が開けられると、侯爵は三間から成る彼の私室へ入つた、寢室とその他か二間であつた。高い圓天井に、涼しい絨毯なしの部屋で冬季薪を燃やす爲めの爐には大きな薪架がある。その他か、あらゆる贅澤な國の贅澤な時代に於いて、侯爵といふ高い地位にふさはしいやうなあらゆる贅澤なものは、皆そろつてゐる。斷絶することなしと云はれた王統の前々代のルイ——即ち、ルイ十四世——時代の流行がこの部屋々々の高價な家具に、著しく現はれてゐる。だがそれは、佛蘭西の歴史の古い幾頁かを物語る他の幾多のものと交りあつて、變つた趣味をみせてゐた。夕食の卓子は第三の部屋に出てゐて、二人前の用意がしてあつた。この部屋は館の四つの圓錐塔の一つにある圓形の部屋であつた。小さな、天井の高い室で、窓は開け放つてあつたが、鎧窓だけは閉めてあつたので、暗い夜もたゞ、鎧窓の石色の廣い線と入れ交り、細い黒い一線となつて見えるだけであつた。

「さて甥めぢやて、」侯爵は夕食の用意されたのを見遣つてかふゐつた。「あれはまだ着かんといふハハハぢや。」

實際彼はまだ着いてゐない、だが皆は侯爵一緒に来るものと待つてゐたのであつた。

「ふう！今晚はもう着きさうにもない。ぢやが卓子はこの儘にして置くがよい。支度をして来て、十五分たつたらわしは始めよう。」

十五分たつて侯爵は支度が出来たので、贅を盡した結構つくめな晚餐の卓子にたつた一人で向つた。彼の椅子は窓の眞向かひになつてゐた。彼はスープを吸つてしまつた、そしてポルドウ酒の杯を唇にもつて行きかけたが、はつとそ

― 一一八 ―

れを下に置いた。

「あれは何ぢや。」侯爵は窓縁と外の暗闇の入り交つたところを注意深く見つめて、静かにかふ訊ねた。

「御前様、あれと申しますと？」

「鎧窓の外ぢや。鎧窓を開けて見ろ。」

鎧窓はあけられた。

「どうぢや。」

「御前様、何でもございませぬ。樹と夜のほかは何もございませぬ。」

かふゐつた侍僕は、鎧窓をさつと開け放つて、空な闇をちつとみつめてゐたが、やがて主人の指圖を受ける爲めに、振り返つて闇を背にして立つた。

「もうよい、」落ちつき拂つた主人はゐつた。「鎧窓を閉めろ。」

窓はまた閉められた、侯爵はそのまゝ食事をつゞけた。

食事が半ば終つたころ、彼はまた杯を手にしたまゝ馬車の音にちつと耳を澄ました。それははずんずん近づいて来て、館の玄關で止まつた。

「誰が来たか訊いて來ひ。」

到着したのは侯爵の甥であつた。彼は午少し過ぎには、侯爵より二三リ―グ後のところに馬車を驅つてゐた。彼は速かにその距離を縮めて行つたが、途中で侯爵に追ひつくほど早くはいかなかつた。

彼は問屋場で、侯爵が先きを駈けさせてゐるといふことを聞いた。

彼はかふいふ傳言を聞いた（侯爵からのである）、晚餐の用意が整つてゐるから、どうか食事にすぐ來るやうにと。暫くすると、彼はやつて來た。彼は英國ではチャールズ・ダーネイとして知られてゐた。

侯爵は彼を禮儀正しく迎へた。だが二人は握手は交はさなかつた。

「叔父さんは昨日巴里をお立ちでしたか。」彼は卓子に席をとつたとき、侯爵にかふゐつた。

「昨日ぢや。してお前は。」

「私は眞直に參りました。」

「倫敦からか。」

「さうです。」

「今度は大へん長くかゝつたな。」侯爵は微笑を浮べていつた。

「いやその反對です、眞直にやつて參りました。」

「いや失禮！わしのゐつたのは旅に長くかゝつたといふのぢやない。旅に出る決心をするまでに長くかゝつたといふ積りぢやつた。」

「つい引きとめられてしまつたのです。」と甥は一寸言葉を途切らせてから、「種々な用事で。」

― 一一九 ―

「さうぢやらうて。」氣の練れた侯爵はかふゐつた。

召便がある間は、二人ともそれ以上の話をしなかつた。珈琲が持つて來られて、また自分達だけとなつたときに、甥は、叔父をぢつと見つめ、見事な假面のやうな顔の眼を見むかへて、話の口をきり出した。

「叔父さん、お察しでせうが、私を彼地へやつたあの目的を果す爲めに今度歸つて參りました。あの目的の爲めには私は思ひもよらぬ、非常な危険に隱つたのです。しかしそれは神聖な目的です。そして、もしその目的があつた時、私を死へ導いたとしても、それはきつと私を勵ましたに違ひないと思ひます。」

「死へではない。」叔父はかふゐつた。「死へなどゝ云ふ必要はない。」

「若し私その爲めに眞の死の瀬戸際までつれて行かれるやうなことがあつたら、あなたはそこで私を引き止めやうとして下さるかどうですか。」

鼻の上の凹みが深くなり、元來が残忍な顔なのに、その眞直ぐな線が伸びたので、それだけ彼は、不氣味に見えた。叔父は優雅な手つきで抗議をしたが、それは明らかに上品な躰から出た形式に過ぎなかつたので、對手に安心はさせなかつた。

「實際、叔父さん、」と甥はゐひつゞけた。「私の知つてゐる限りで申し上げると、あなたは私をとり巻いてゐる不審な事態に、もつと不審な外貌を興へるやうにと、お骨折りになつたらしく思はれません。」

「いや、いや、いや。」叔父は上機嫌さうにゐつた。

「しかし、それはそれとして、」甥は深い不信の色を見せつゝ彼を見ながら、續けていつた、「私はあなたの計略がどうしても私を引き止めやうとするにあること、またさうする爲めには如何なる手段をも躊躇なさらぬことを知つてゐます。」

「わしはお前にさういつたはずぢやよ。」と叔父は二つの凹みをむづむづと動かしてゐつた、「じつと昔、お前にさういつたことを思ひ出してもらはぶ。」

「思ひ出します。」

「ありがたう。」侯爵はゐつた——實際、如何にもやさしげにゐつたのである。

彼の聲音は、殆んど何かの樂器の音のやうに空にたゞよつた。

「實際のところ、」と甥はゐひ續けた、「私がこの佛蘭西で牢に入れられずにあるといふことは、叔父さんにとつての不運であり、私には幸運だと信じてゐます。」

「わしにはよく分らん、」叔父は珈琲を啜りながら返辭した。「面倒ぢやが、説明して貰へまいか。」

— 一一〇 —

「叔父さんが宮廷の不興を蒙つてゐられなかつたなら、また過去欺年聞あの暗雲で覆はれてゐられなかつたら、一枚のレットル・ド・カシエ（特別拘禁狀）で、私は無期限に何處かの牢獄へ送られてゐたらうと思ひます。」

「さうかも知れぬ、」と叔父はひどく落ちつき拂つてゐつた、「家門の名譽の爲め、或はわしもお前にそこまで不自由をみせる決心をすることが出來たかも知れない。いやこりや、許しておくれ！」

「私にとつて有難いことには、一昨日の接見の會も例によつて冷淡至極なものであつたと見えま

す。」と、甥はあつた。

「わしなら、有難いことにはなごはみひ兼ねるところぢや。」と叔父は上品な丁寧な態度で答へた。「それはどうとも分るまいよ。孤獨であられて、考慮するにはもつて來ぬの好機會などいふものは、こりやお前の運命に、お前が自身で及ぼすよりもつと大きな利益のある影響を及ぼしたかも知れぬ。ぢやがこの問題を論じ合ふことは無用ぢや。お前がいふ通り、わしは不利益な立場にある。かふいふ折檻の手段も、家門の権力と名譽を守るかふいふ力も、お前の自由を束縛するレットル・ド・カシエも、今ではたゞ利益や歎願によつてのみ得られるのぢや。これをもとめる者は夥しいが、これを與へられる者は極めて少數(比較的にあつて)だけぢや！今まではこんなことはなかつた、ぢやが、すべてかふいふ事で佛蘭西はだんだん悪化して來る。さほど遠くもないわしたちの先祖でも近隣の下民どもに對して、生殺與奪の權利をもつてゐたものぢや。この部屋からも、さういふ多くの大どもが首を絞められる爲めに連れ出された。わしが知つてゐるところでも、この次の間(今はわしの寢室ぢや)で一人の若者が主人の娘に——人もあらふに主人の娘にぢや——大それたことを云つたといふ廉で、立所に刺し殺されたものぢや。ところが、わし達は多くの特權を失つた。新しい折學が流行し出して來た。ぢやから今日わしどもの地位を、擁護するといふことは、わしどもに非常な不利をもたらずやうになるかも知れぬ(わしはあへてもたらずだらうとはひはん、なるかも知れぬといふのぢや)。何もかも皆惡い、非常に惡い！」

侯爵は靜かに少量の嗅煙草をつまんで、頭を振つた、そして、彼自身といふこの大きな改善に役立つものがまだ生き残つてゐるこの國について、如何にも彼に似つかはしひ優雅な失望をみせた。

「われはれは昔でも近頃でも、餘りにわれはれの地位を擁護して來ました。」甥は憂鬱さうにかふるつた。「だからわれはれの名は佛蘭西中のどの名前よりも最もひどく厭がられてゐるのだと、私は信じます。」

— 111 —

「さうとして置かう、」と叔父はあつた。「高貴の者に對する憎惡は、下民の無意識の尊敬ぢや。」
「ですが、」甥は前と同じ調子で續けた。「この邊の土地で私の見かける顔には恐怖と卑屈の暗い服従が現はれてゐるばかりで、心からの服従の表情を浮べて私を見るやうなものは一人大つてありません。」

「そりや會釋ぢや、」侯爵はかふあつた。「わしどもの一家の偉大さに封する會釋ぢや、わしどもの一家族がその偉大さを保つて來た態度にふさはしいものぢや、はて・・・」
侯爵はまた靜かに嗅煙草を一つまみして、軽く足を組んだ。

彼の甥が卓子に肘を支へて、すつかり考へこんで悄然と手で眼を覆ふたときに、彼の見事な假面はそれを被つてゐる人の無頓着を裝ふ態度とは不釣合ひなほどの鋭い、注意深い、厭惡の、強い緊張した表情をみせて、横からちつと彼を眺めた。

「抑厭こそは一つの永遠の折學ぢや。恐怖と卑屈の暗い服従は、」侯爵はかふあつた。「この屋根が、」とそれを見上げて「空を遮つてゐる限り、大どもを鞭に従順にさせて置くにちがひない。」

それは侯爵が考へたほど永く續くものではなかつたかも知れぬ。若し餘命いくばくもないこの館の光景が、またこれも餘命いくばくもない相似た五十の館の光景が、この夜侯爵に示されることが出來たなら、彼は茫然自失して、火に黒焦げにされ、掠奪に破壊された物凄い殘骸の中から、自分のものを認めることを忘れたかも知れなかつた。彼が自負した屋根はどうかといへば、彼は、それが新しい

方法で、人々の眼と空との間を遮るのを見たかも知れない。即ち、百千挺の小銃の銃身を飛び出したこの屋根の鉛を撃ち込まれて、人々の死體の眼が、永久に空を見ることが出来ないやうな光景を、目撃したかも知れない（革命時代にはかふういふ屋根瓦の鉛をはがして弾にしたので）。

「とにかくぢや、」と公爵はあつた。「わしはお前が望む望まは別として、一家の名譽と安泰とを保つゝもりぢや。ぢやがお前はきつとくたびれたらう。今晚はもう話を止めて置くとしようか。」

「も少しどうぞ。」

「お前さへよかつたら一時間でもあゝのぢや。」

「叔父さん、」と甥はあつた、「われはれは間違つたことをして來たのです、そして今その間違つた悪の結果を刈ることになつたのです。」

「間違つたことをしたと、わしたちが？」侯爵は不審さうな微笑を浮べて、優雅な身振りで最初に甥を、次にわれとわが身を指さしてかふ繰り返した。

— 二二二 —

「われはれの一家がです。われはれの名譽ある一家がです、家の名譽は、われはれ二人にとつてそれぞれ異つた道で大事なものになつては居りますが、私の父の時代にさへも、われはれの快樂が何であらふと、われはれの快樂の邪魔をする人間があればすぐに罰して、澤肉の悪事をしたのでした。いや父の時代は同時に叔父さんの時代ですから、何で私がそのことを申し上げる必要がありますやうか。父とは雙生兒の兄弟で、共同相續人で、家督を繼いだあなたを私が父から引き離すことが出来ませうか。」

「それを、死が引き離したのぢや！」と侯爵はあつた。

「そしてその死は、」甥は答へた、「私にとつて怖しむ制度に私を束縛したまゝ残しました、私は責任を負はされただけで權力は少しもないものでした。私は愛する母の底から出た最後の願ひを果さうと努め、又愛する母の最後の眼差が命じてゐたところに従はふとしました。その眼差は、私に慈悲を施して、悪の償ひをするやうにと願つてゐたのです。その爲めに助力や權力を求めて苦しみました、みんな徒でした。」

「それをわしに求めるのか。」侯爵は人差指で彼の胸に觸つてかふあつた——彼等は今煖爐の近くに立つてゐた。

「永久にそれを求めても徒なことぢや。慥かにな。」喫煙草の箱を手にして、甥の方を靜かに見やつて立つてゐた彼の返えた青白い顔のあらゆる見事な線は、殘忍さうに、狡猾さうに、またひとつにちぢまつた。彼はその指先がよく切れる短劍の尖端——しかも彼が微かな腕をふるつて甥の體に刺し通した短劍のそれでももあるかのやうに——もう一度甥の胸にあてゝ、かふあつた。

「これ、わしはこれまで奉じて生きて來た制度を永續させつゝ死ぬつもりぢや。」

かふいつて、彼は最後の喫煙草を一撮みして、その箱をポケットの中にした。

「何よりも道理の分る人間になることぢや。」彼は、やがて卓子の上のベルを鳴らしたあとで附け加へた、「そしてお前の自然の運命に従ふがよい。ぢやが、ムツシユ・シャルル、お前はもう見込みがないやうぢやな。」

「この財産と佛蘭西は私にはないものです、」甥は悲しさうにあつた、「私はそれを拋棄します。」

「拋棄するといふか、佛蘭西も財産もお前のものか。佛蘭西の方はさうかも知れぬ、しかし財産の方もさうか。そりや殆んど口にするだけの値打もない、ぢやが、あるといふのか。」

「私か今申した言葉には、然し財産を請求するつもりはなかつたのです。若し叔父さんから譲り渡して頂きましても、明日にでも——」

— 一一三 —

「いやそのことなら、多分明日ではあるまいと思ふ自信がわしにはある。」

「——或は二十年さきになり——」

「これはまたひどく敬意を表したものでやな、」侯爵はゐつた、「ぢやがまだその推測の方が有難いよ。」

「——私は財産を抛棄して、他の場所で違つた暮らし方をしたいのです。もともと財産を棄てるといふことに、未練はないのです。それは悲惨と廢滅の荒野といふより外に言ひやうがないではありませんか！」

「ほう！」侯爵は華美を極めた部屋をざろりと見廻してゐつた。

「いまこゝで見ると、見た眼には十分美しく見えます。しかし大空のもどで、白晝にその本來の姿で見れば、それは、浪費と、不始末と、強奪と、負債と、抵當と、壓制と、饑餓と、裸體と、苦難との崩れかけた塔なのです。」

「ほう！」侯爵はまたも満足した様子でかふゐつた。

「もしそれが私のものとなりますなら、私は、その財産が壓へつけられ、引きずり倒されないうちに、そろそろとそれを解放することの出来る（このやうな事が出来るものとして）だけの力ある人の手にまかせます。さうすれば、それを棄て去ることの出来ない憐れな人間も、長い間辛抱しつつして来た人間も、次の代には苦しむことが少なくなりませう、それを私は自分のものにほしません。その財産にも、またこの土地すべてにも、呪ひがかゝつて居ります。」

「ではお前はどうする？」と叔父は訊ねた。「わしの好奇心は許してもらふとして、お前はお前の新しい哲學のもとに楽しく生きやうといふつもりか。」

「私は、生きる爲めには、この國の人達が、たとひ貴族を後援に持つてるとしても、いつかは、しなければならぬことをします——即ち、働かなければなりません。」

「たとへば、英吉利のやうなところですか？」

「さうです。その國では私は一家の名譽を傷つけるやうなことはありません。家名も私から迷惑を受けることはありません、私は他の國ではこの家名を使はないのですから。」

ベルの首は隣室に燈火をつけさせる爲めであつた。その部屋は、今戸口から明々とした光を洩らした。侯爵はその方を見やつて、部屋を出て行く侍僕の聲音に耳を傾けてゐた。

「お前が、如何にも平氣で無事にやつてゐるところを見ると、英吉利は非常にお前の氣に適つたやうぢやな。」彼はやがて平靜な面に微笑を浮べて甥の方を見返りながらかふゐつた。

「私が英吉利で無事に暮してゐる點については、叔父さん

— 一一四 —

のお蔭であるといふことを、もう疾うに申し上げて居ります。つまり、英吉利は私の避難所なのです。」

「あの高慢な英吉利人は自分達の國のことを、多くの人の避難所ぢやとひつてゐる。お前は同國人

で英吉利に避難所を見出した者を知つてゐるか、醫者ぢやが。」

「知つてゐます。」

「娘をつれてゐるかな。」

「やうです。」

「さうか。」と侯爵はゐつた。「お前はくたびれてゐるぢやらう。ではお寢み！」

彼は非常に儀式張つた様子で頭を下げたが、微笑を湛へてゐる顔には、或る祕密があつた、そして彼が今ゐつた言葉にも何やら不可解な氣配がともなつてゐたので、甥の眼と耳とはそれに強く打たれた。同時に彼の眼窩の細い眞直な線と、薄い一文字の唇と、鼻の上の凹みが、美しくも悪魔のやうに見える嘲りにゆがんだ。

「さうか、」と侯爵は繰り返した。「娘を連れだした醫者か。さうか。そこで新しい哲學が始まるのぢやはい！お前はくたびれてゐるぢやらう。ではお寢み！」

侯爵のその顔に何かを問ひたゞすことは、館の外にある石像の顔に問ふのと同じやうに得る所は無かつたであらふ。甥は戸口の方へ歩きながらぢつと彼の顔を眺めたが、徒であつた。

「お寢み！」叔父はゐつた。「明日の朝また會ふのを楽しみに待つてゐる。ゆつくりお休み！この方をあちらの部屋へ燈火をつけて御案内せぬ！——成らうことなら、あいつめを寢床の中で焼いてしまへ。」この後の文句を彼は獨言のやうに附け加へた。そしてまたベルを鳴らして召使を自分の寢間に呼んだ。

召使は来て、やがて退きさがつた、侯爵はゆるい寢衣に着かへて、この暑い静かな夜を、穩かに眠らうとする爲めに、あちこちとゆるやかに歩みを運んだ。柔かな上靴を穿いた足は牀に少しの音もたえず、たゞ部屋のまはりに衣摺の音をさせるだけで、彼はお上品な虎のやうに動いた——彼は物語にある、或る悔いを知らぬほど好悪な、魔咒がかかつて時々虎の姿になる侯爵で、今は丁度その虎に變るか變らないかの境目であるやうに思はれた。

彼は豪奢をきはめた寢間の隅から隅へと歩き廻つて、思ひ出すともなく心に浮んで来る晝間の旅の切れ切れの思ひ出をみつめてゐた。日の入りに丘をのろろ登つたこと、沈み行く夕日、下り路、水車小屋、崖の上の牢獄、凹地にある小さな村、用水の傍に集つてゐた百姓達、青い蜻蛉で馬車の下の鎖を指してゐる道路人夫、その用水の思ひ出はまた巴里の噴水のこと、石段の上に置いてある小さな包み、

——二二五——

その上に屈んでゐる女達、腕をさし上げて、『死んぢやつたさう！』と叫んだあの背の高い男のことなどを思ひ起させた。

「やつと涼しくなつた、」と侯爵はゐつた、「どれ、休むとしよう。」

そこで大きな爐の上に燈火をたゞ一つだけ残して、侯爵は寢臺のまはりの薄紗のカーテンを下ろした、いよいよ眠らうとして枕についたときに、夜が長い溜息と共にその静寂を破るのを聞いた。

外壁の上の石の顔は、重くるしい三時間の間、何も見えない目を見張つて暗黒の夜を見つめてゐた。重くるしいこの三時間の中に、厩の中の馬は秣草架で嘶ゐた、犬は吠えた、鼻は、詩人によつて習慣的に鼻の聲と定められた聲には少しも似てゐない聲で啼いた。然し、彼等の爲めに定められてゐる所ものを、滅多に口に出してゐはないのが、かふいふ生物の頑迷な習慣なのである。

重くるしい三時間の間、館の石の顔は、獅子の顔も人間の顔も、空虚な目を見張つて夜を見つめて

ゐた。深い暗黒は一晝にあたり山川を罩め、またその静寂を、路傍の静まり返つた塵に附け加へた。墓地は、弱々しい草の小さな堆積の爲めにお互ひにそれと見分けがつかない位ゐ、通の路の方まで擴がつてゐた。十字架の上の像は、見たところ、どうやら降りて來さうであつた。村では税を取りたてるもの、とりたてられるもの、何れもぐつすり眠り込んでゐた、多分飢ゑた者がよく見るやうに、御馳走の夢を見ながら、また追ひたてられる奴隷や輓にかけられる牛が見るかも知れぬやうに、安逸と休息の夢を見ながら、この村の瘦せた村人達は深い眠りに落ちて、御馳走を食べたりまた自由の身になつたりしてゐたことであらふ。

重苦しい三時間の間、村の用水は見られず、聞かれず、徒らに流れてゐた、館にある噴水も見られず、聞かれず滴つてゐた——どちらも、時の泉からしたゞり落ちる分秒のやうに、とけ去つてゐた。やがて兩方の灰色の水は、ぼんやりと幽靈のやうな光に浮び出した。と、館の石の顔が眼を開いた。だんだん明るくなつて、やがて太陽は静かな樹の頂きにふれ、きらゝかな光を丘一面にそゞみだ。その光を浴びて、館の噴水の水は血に變つたやうに見えた、石の顔は眞紅に染まつた。小鳥の歌も次第に高くなり、侯爵閣下の寝間の大きな窓の風雨に晒された闕の上には、一羽の小鳥がやつて來て、精一杯の力で樂しむ歌をうたつた。これを聞いて、一番近くにある石の顔がびつくりして目を見張つてゐるやうに見えた、だがあんぐりと口を開けて下顎を垂れてゐるので、非常な恐怖に打たれてゐるやうにも見えた。

—二二六—

太陽はいよいよ高く上つて、村では人間が動き出した。開き窓は開かれ、ぐらぐらになつた戸の掛金はゞづされ、人々はふるへながら外へ出て來た、——爽かな清い空氣にふれるとまた冷たかつた。やがて村人の間にめつたに輕められたことのない一日の仕事が始まつた。或る者は用水のところへ、或る者は野良へ。此處では掘つたり鋤いたりする男と女がある、彼處ではやせた家畜の世話をして、何處の路傍にでも見つけられるやうな牧場へ、骨立つた牝牛を曳いて行く男女もある。教會堂や十字架のところでは跪いてゐる人の姿が一つ二つ、十字架にお祈りを捧げてゐる人たちに引張られて來た牛は、十字架の下で草の中で朝食を食つてゐた。

館は館の資格にふさはしく、遅く目ざめた、だがだんだん慥かに目ざめて來た。先づ最初に、淋しげな猪突槍と狩獵小刀が、昔のやうに赤く染められ、それから朝の日光を浴びて、いかにも切れさうに煌々と光つた、やがて戸口も窓も一杯に開け放たれ、既の馬は、戸口にそゞぎこんで來る光線と爽かな空氣のうちで四邊を肩越しに見廻した、樹の葉は鐵格子の窓のところ、煌々燦めいてさらさらと鳴つた、犬は鎖を強く引張つて、はやく放たれたさうに後足で立ち上つた。

すべてかふいふ取りとめない瑣細な出來事は、日常の生活に、また朝が繰り返される毎に付きものになつてゐた。だが館の大鐘の鳴ること、人があわたゞしく階段を駆け上つたり下りたりすること、高臺の上に忙しさうに往きかふ人影、長靴を穿いて、あそここゝと何處ともなく駆けまはつてゐるもの、馬にあわてゝ鞍を置いて何處かへ駈け去るものなどのあることは、慥かにいつもとは變つてゐた。

この騒ぎをどんな風が、あの胡麻鹽頭の道路人夫に傳へたのであらうか——彼はもう村の向ふの丘の上で、晝の辦當(わぎはぎ)もつて行くには及ばないところの(を、鳥でさへつゝきばえのしない包みにして石積みの上に載せて置いて、仕事を始めてゐたのである——遠方へその騒ぎの種子の幾粒かを運んでいく小鳥が、よく偶然に種子をこぼすことがあるやうに、彼の上にもその一粒を落したのであつたか。それは兎に角、道路人夫はこの蒸し暑い夏の朝を、自分の生命にかゝはりでもするかのや

うに、膝まで塵に塗れて、ひた走りに丘を走せ下つたが、用水のところに行きつくまでは一休みもしなかつた。

村中の人間は用水のところを集つて、鬱ぎこんだやうな様子をして、そこらに立ちながら、何か低く囁いてゐたが、冷たい好奇心と驚愕の外には、どんな感情をも表はしてゐなかつた。急いで連れて來られて、あり合せたものに繋がれた牛は、ぼんやり立つて見まはしたり、また横になつて、別

―一二七―

に骨折り甲斐にも値しないものを―それは中途で止めにされたぶらぶら歩きの間食ひためて置いたのだが―頻りに嚼み返してゐた。館側の或る者と問屋場側の或る者とまた租税取立の役人のすべてとは多少の武装をととのへて、狭い通りの向ふ側にこれといふ當てもない様子で集つてゐたが、それは實に何の役にも立たなかつた。道路人夫はもう疾くに、五十人ばかりの特別な友達の群の眞中にとびこんで行つて、例の青い帽子で自分の胸を叩いてゐた。すべてこれは何を前兆したのであらうか、また大急ぎでムッシュュー・ガペルが召使の乗つてゐる馬の背に飛び乗つた事、あの『レオノーラ』といふ獨逸の歌を實地に作り換へでもしたもののやうに、このガペルと召使が全速力で（馬の重荷は二倍にはなつたが）走り去つたことは何を前兆するものであつたか。

それは館には石の頭が一つだけ多くなつたといふことを前兆した。

ゴーゴンの首が夜のうちにまたも館の建物を見下した、そして今まで不足してゐた石の顔を一つ附け加へたのであつた、それはゴーゴンが二百年の間、待ちに待つた石の顔であつた。

その顔は侯爵の枕の上に横つてゐた。それは、あの見事な假面が突然驚愕させられ、忿怒させられ、そして石化されたものやうに見えた。この顔についてゐた石の體の心臓には、深々と一本の短刀が突き刺してあつた。そしてその櫛のまはりに巻いてある飾り紙の一片に次のやうな文句が走り書きしてあつた―

「こいつを早く墓場へやつてしまへ、ジャックより。」

十、二つの約束

その後、更に十二ほどの月数が過ぎ去つた。チャールズ・ダーネイは、佛蘭西文學に通曉してゐる佛蘭西語の高等教師として、英國に身を落ちつけた。今日なら彼は大學教授にもなれたであらう。だが、その時代のことゝて、彼はたゞの私教師であつた。彼は世界中で話される生きた國語（佛蘭西語）の勉強に興味をもち、またその暇もある若人たちの家庭教師になつた、そしてその國語のもつ豊富な智識と空想に對する趣味を養はせた。彼はその上に、これを立派な英語で書くことも出来、また立派な英語に翻譯することも出来た。かふいふ教師はそのころ容易に見出せるものではない、かつては王子であつた人々や、今に王になるはずの人々は、（ルイ・フィリップその他を指す）また教師の階級に入つてはゐなかつた、破産した貴族がテルソン銀行の帳簿から消し去られ、料理人や大工になるなどはまだこれからであつた。家庭教師としては、彼の素養が學生の進む道を愉快な有益なものにしてや

―一二八―

つたので、また優雅な翻譯者としては、單なる辭書的智識の外に學生の勉強に何ものかを齎してやつたので、若いダーネイは直ぐに名を知られて、自分にも勵みがつくやうになつた。その上、彼は自分の國の事情によく通じてゐたので、これがまた人々に次第に興味を増させることになつた。かふして、非常な忍耐と不屈不撓の勤勉によつて、彼は成功した。

倫敦では彼は別に黄金の鋪石道（富貴の道）を歩かうとも、薔薇の牀（樂な地位）に寝やうとも期待してはゐなかつた。若し彼にかふいふ思ひ上つた期待があつたなら、彼は成功しなかつたであらふ。彼は勞働を期待してゐて、それを見出した。そして、實行し、出来るだけ活用した。こゝに彼の成功が宿つてゐた。

彼の時間の幾分はケンブリッジで過ぎた、こゝで彼は希臘語や拉丁語を正式に税關から輸入せず、歐羅巴語の密輸商人を商賣にする一種の密輸人者と默認されて、大學生達の私教師をつとめたからである。そのほかの時は倫敦で過ぎた。

さて、エデンの園に常夏の日が榮えた時代から、墮落した極地に近いこの國に、冬は鎖された日がつゞく現今に至るまで、男性の世界は變ることなくたゞ一つの道を辿つてゐる。——即ちチャールズ・ダーネイが今辿つてゐる道——一人の女性を戀ふる道を辿つてゐる。

彼はあの危機に瀕した時以來、ルウシイ・マネットを戀した。彼は彼女の情深い聲音ほどに、可憐な懐しい聲音を聞いたことがなかつた、彼は自分の爲めに掘られたあの墓穴のふちで、自分の顔と相對した時の彼女の顔ほど、やさしく美しい顔を見たことがなかつた。だが彼はまたこのことについて何も彼女に打ち明けてゐなかつた。逆巻く波と、長い長い、埃深い道のはるかかなたの空家となつた館で、暗殺があつてから——あの頑丈な石の館さへ果敢ない夢の斷片となつた——はや一年は経つた、だが彼はまだ自分の心持をたゞの一言も彼女に打ち明けることをしなかつた。

これにはそれだけの理由があるのだといふことを彼はよくわきまへてゐた。夏が又立ち歸つた或る日のこと、ケンブリッジの方の仕事を終へて倫敦に遅く着いた彼は、あのソホウの靜かな一隅へと足を向けた、心の中ではドクタア・マネットに彼の心を打ち明ける機會をつかむことを一生懸命に考へてゐた。それはやがて夏の日も暮れやうとする頃であつた。彼はルウシイがミス・プロスと共に外出してゐることを知つてゐた。

ドクタアは實際の肘掛椅子によつて本を讀んでゐた。昔の苦惱の裡に、彼を支へたあの精力、またそれだけに、その苦惱のつらさを二倍にもしたあの精力がだんだん彼に回

— 二一九 —

復して來た。實際、彼は今では、しつかりした目的と鞏固な決心と元氣のあつた活動力をもつた非常な精力家となつてゐた。この精力の回復した彼には、時としていさゝか發作的で唐突なことがあつた、丁度、他の能力の回復されたころ、初めてそれを使ふときもこれと同じやうであつた。だがこれはさうたびたび見られるわけではなかつた。そして今ではますます稀になつてゐた。

彼はよく勉強した、少しゝか眠らずに、非常な疲勞も樂樂と耐へた。何時も變ることなく快闊であつた、今彼の方に入つて來たチャールズ・ダーネイの姿を見ると、ドクタアは本を下に置いて、手を差しのべた。

「チャールズ・ダーネイ！これはよくお出でぢや。わし達はこの三四日君のお歸りを指折つて待つてゐたところぢや。昨日はストライヴァ氏とシドニー・カートンがやつて來て、二人で、君もとうに來なくちやならんのだがと頻りに噂してゐた。」

「私のやうなものゝことを何とか云つて下さるお二人に感謝します、」彼はドクターにとつてはひどく熱心に、だが二人に對してはいさゝか冷淡さうにかふ答へた、「ミス・マネットは——」

「變りありません、」とドクターは中途で遮つてゐた。「君が歸られたんでわし達は皆、大喜びぢや。あれは何か用事で一寸出たが、追つゝけ歸るぢやらう。」

「ドクター・マネット、私はお嬢さんがお留守なことは知つてゐました。あなたにお話し、たいことがありますので、わざとお留守の折を選んだのです。」

二人の間には空な沈黙があつた。

「あゝさう、」とドクターはあつたが、明らかに無理に努めてゐるところが見えた。「こゝに君の椅子を持つて來給へ。一つその話を伺はう。」

彼は言はれた通り、椅子だけは直ぐ持つて來たが、話の口を切ることはさう容易でないやうに見えた。

「ドクター・マネット、仕合せとこの一年半の間、私は御懇意にして頂きました、」と彼はたうたう口をきつた。「今、私が申し上げますお話が、どうかその——」

ドクターが手を差しのべて遮つたので、彼は又口を嚙んだ、ドクターは暫くの間さうしてゐたが、やがて手を引いてかふあつた。

「そのお話はルウシイのことかね。」

「さうです。」

「あれのことを話すのは、わしにとつてはいつだつて辛い。それに君の今のやうな調子であれのことを話されるのを聞くと、一層辛いのだや、チャールズ・ダーネイ。」

「ドクター・マネット、これは熱心な讚美と、眞實の尊敬と、

— 一三〇 —

深い愛情の籠つた調子です！」彼は敬虔な態度であつた。

「またも空な沈黙があつてから、やがて彼女の父親は口を開いた——」

「わしはそれを信じる。君のいふのが嘘ぢやとは思はれん。それはたしかに信じてゐる。」

彼は無理に努めてゐる様子がますます明らかとなり、またそれがこの話に近づきたくないといふ心から出てゐるのだといふことも明らかになつたので、チャールズ・ダーネイは躊躇した。

「お話し、てもゝでせうか。」

「また沈黙があつた。」

「むゝ、話して御覽。」

「あなたは私がお話するのをもうお氣づきのことゝ思ひます。ですが私がどんなに熱心に話し、またどんなに熱烈にそれを感じてゐるかはお分りになりますまい。私の心の底と、長い間、そこに潜んで來た希望と恐れと心配とを御存知がないのですから。ドクター・マネット、私はお嬢さんを優しく、深く、慾も得もなく、獻身的に愛してゐます。若し世の中に愛といふものがあるなら、私こそお嬢さんを愛してゐるのです。あなたは人を愛されたことがありました。あなたの昔の愛を思ひ出して、私のことも考へてみて下さい！」

ドクターは顔をぞむけて、眼を牀の上に落したまゝ坐つてゐた。この最後の言葉を聞くと、彼はまたも急いで手を差しのべて、かふ叫んだ——

「君、それはゐはないで！、そつとして置いて下さい！お願ひぢや、それを思ひ出させないで下さ

い！」

彼の叫び聲は眞實の苦痛の叫び聲と同じやうだったので、その言葉が終つたあとでも、長い間チャールズ・ダーネイの耳の中で鳴り響いてゐた。ドクタアは差しのべた手を動かした。それは話を止めてくれとダーネイに願ふまのゝやうに思はれた。ダーネイはさう思つたので黙つてゐた。

「どうか宥してくれ給へ、」とドクタアは暫くしてから押しつけられたやうな聲であつた。「わしは君がルウシイを愛してゐることは疑はん。それだけは安心して下さい。」

彼は椅子のまゝダーネイの方へ向き直つたが、彼の顔を見上げようとせず、眼を伏せたまゝでゐた。彼の顎は手の上に落ち、白い髪が顔を蔭にした――

「君はもうルウシイに話しましたか。」

「いゝ。」

「手紙も？」

「決して。」

「君が我慢してくれたのは、あれの父に對する思ひ遣りから出てゐるのに、それを知らん振りをするのは、心の狭ゐる」

— 一三二 —

「ごちや。あれの父は君にお禮をいひます。」

彼は握手の爲めにその手を出した、だがその眼は手に伴はなかつた。

「私は知つてゐます。」とダーネイは慇懃に言つた。

「ドクタア・マネット、毎日のやうにお二人を見てゐる私が、どうしてあなたとお嬢さんとの間に竝々ならぬ、人の心を動かすやうな、又その育まれて來た境遇にびつたりと合つてゐるやうな愛情があるといふことを見逃す筈がありませんか。その愛情は親子の間の情味としてさへも、殆んど類のないものなのです。ドクタア・マネット、私はまた――どうしてこれを知らずにゐられませうか――お嬢さんは心の中で、一人前になつた娘の愛情や務めとともに、子供時代そのまゝの愛と信頼をあなたに對して持つてゐるといふことも知つてゐます。また、お嬢さんが子供時代に両親を持つてゐなかつたゞけ、今は、現在の年齢と性格から出る節操と熱情のすべてを、まだあなたのお出でを知らなかつた幼年時代の信賴と愛情にむすびつけて、あなたに仕へてゐるのだといふことも知つてゐます。あなたがあの世からお嬢さんのところへ返されたにしても、お嬢さんの眼から見ても、あなたがお嬢さんとおいでの現在よりも以上に、神聖な性格をお持ちになるやうなことは殆んどあるまいといふこともよく知つてゐます。お嬢さんがあなたに縋りつくときには、子供の手と、娘の手と、一人前の婦人の手とが、皆一つになつて、あなたの頸のまはりにかゝつてゐるのだといふことも知つてゐます。お嬢さんがあなたを愛してゐるのは、御自分と同年代の頃のお母さんのことを考へ合して愛してゐるのだといふこと、この私と同じ年頃のあなたを見、あなたを愛してゐるのだといふこと、腸のちぎれる思ひをした御自分の母親を愛してゐるのだといふこと、苦しい試煉を通つて幸福な蘇生の生活に入つたあなたを愛してゐるのだといふことを知つてゐます。あなた方の家庭で、あなた方とお知り合ひになつてからこの方、夜となく晝となく、私はこのことを知つてゐました。」

彼女の父親は顔を伏せたまゝ黙つて坐つてゐた。彼の呼吸はやゝ荒くなつてゐたが、その他の昂奮の様子ほ抑へて色に出さなかつた。

「ドクタア・マネット、私は只今申上げたことをいつも心に辨へてゐますから、またあなたとお嬢

さんが神聖な光に包まれてゐられるのを何時も見て参りましたので、今まで忍んで来たのです、男子の本性として忍べるだけ忍んで来ました。私はさう思ひました——いへ今でもさう思ひますが、私の愛を、たゞへこんなに熱烈な愛でさへも——あなた方二人の間に入り込ませるといふことは、あなたの今までの御経歴を、つまらないもので冒瀆する事なのだと思つた

——三三三——

のです。ですがやはり私はお嬢さんを愛してゐます。私が愛してゐることは天も御覽になつておいでさす！」

「わしはそれを信じる、」彼女の父親は嘆くやうにかふ答へた。「わしは、前からさう思つてゐた。わしはそれを信じてゐる。」

「ですが、かふは信じないで下さい。」とダーネイはあつた。父親の嘆かはしげな聲が責めるやうな響で彼の耳を打つたのであつた。「若し私の運がうまく開けて、いつかお嬢さんを妻とするやうな幸福な日があつても、私がいつかお嬢さんとあなたとを、少しでも離さなければならぬと思つたのでしたら、私はこんなことを一言だつて言へやしませんし、言はふとも思ひません。私はそれが、當然望めないことであると共に、卑しむべきことであるといふことをも知らねばならないのです。若しこれから何年か遠い将来においても、そんなことを萬一にも望むやうな氣持を心に懐いたり、胸に考へたりして居りますなら——若しそんなことがあつたとしましたなら、——又若し萬一にもあり得るとしましたなら、——私は今、あなたの神聖な手に觸れることは出来ないでせう。」

彼はかふいつて手を彼女の父親の手の上にのせた。

「いへ、いへ、ドクタア・マネット。あなたと同じやうに好んで佛蘭西からのがれた私です。あなたと同じやうに、佛蘭西の狂亂と壓制と悲惨から追はれた私です。あなたと同じやうに幸福な將來を信じつゝ、自分の努力に依つて生きようとしてゐる私です。たゞ運命や生活や家庭をあなたと共にして、死ぬまであなたに對して忠實でありたいばかりが私の望みなのです。あなたの子であり、伴侶であり、また友人であるルウシイさんの權利を私にも分けてもらはふとするのではありません、寧ろ、若し出来ますものなら、それに微力を添へて、ルウシイさんとあなたとを一層親しく結びつけたいのです。」

彼女の父親の手の上にのせられた彼の手は、そのまゝまだ残つてゐた。この手に一寸（だが冷淡にはなく）答へて、ドクタアは椅子の肘に兩手を休め、この話が始まつてから、初めて今顔を上げた彼の顔には明らかに苦悶があつた。それは暗い疑懼と恐怖になりさうな、例の時々現はれる表情を件つてゐた。

「チャールズ・ダーネイ、君はよく思ひやり深く、男らしく話して下さつた、わしは心から感謝します。わしもすつかり心を打ち明けて、或はそれに近い話をしませう。ルウシイが君を愛してゐると信じてゐるやうな理由が何かありますか。」

「何もありません。今のところ何もありません。」

「では、わしに承知さして、それを直ぐさま確かめてみた

——三三三——

ゐるといふのが、この打ち明け話の御主意かな。」

「決してさうではありません。幾週聞も幾週聞も、私にはそんな事をする見込みが立たないかも知れません。ですが明日にもその見込みが（思ひ違ひをしてゐるゐないにせよ）あるかも知れません。」

「君はわしに何か手引きでもして欲しいといふのですか。」

「何もお願いは致しません。ですが若しあなたが、正しいと考へてしたら、御隨意に何かのお指圖をして下さるに違ひないと考へてみました。」

「君は何かはしに約束をして欲しいのですか。」

「して頂きたいのです。」

「どんな約束ですね？」

「私は、あなたがあらつしやらなくては、何の希望もないといふことをよく知つてゐます。たとひ、ミス・マネットがたつた今、あの無邪氣な心の中で私を抱いてくれたとしても——私がそれほど失禮な推測を實際にしてゐるとはお考へ下さいますな——お嬢さんのあなたに封する愛にさからつては、私などがその心の片隅を占めることも出来ないのをよく知つてゐます。」

「さうだとするとちや、その一面にどういふ意味が含まれてゐるかほ分りかね。」

「若しお嬢さんのお父さんが、誰か求婚者の爲めに都合のゐることを一言でも仰しやれば、それがお嬢さんをも、また全世界をも左右することが出来るのだといふことが、同じやうによく分ります。その理由があればこそです。ドクタア・マネット。」とダーネイは謙遜な態度で、だがきつぱりとかふゐつた。「が、こんなことがあつても。その一言をお願いしようとは思はないのです。」

「さうぢやらうと思つた。チャールズ・ダーネイ、神祕は遠く離れてゐるところから生じると同じやうに、親密過ぎる愛からも起る。後者の場合にはその神祕は微妙で、見抜くことが因難なのぢや。この一點でわしの娘のルウシイはわしにとつて大の神祕な者ぢや。あれの眞の氣持を察するのはわしにも出来ない。」

「立ち入つたことのやうですが、お嬢さんはもしや——」

ダーネイが躊躇したので、彼女の父親は彼の言葉を補つた。

「他の者から求婚されてゐはしないかといふのぢやね。」

「えゝ、さうです。」

彼女の父親は一寸考へた後、かふ答へた——

「君はカートン君が此處に来るのに會つてゐるはずぢや。それからストライヴァ氏も時々こゝに見える。ぢやから先づ、さうしたことがあるとしたら、この二人のうちの一人だけに違ひない。」

— 一三四 —

「域は二人とも。」とダーネイは言つた。

「わしは二人ともとは考へてゐない。同様にどちらかといふことも考へがつかない。君は約束をして欲しいといつたね。それはどういふ約束か、いつてみ給へ。」

「それはかふです。若しミス・マネットが何時か自身から、私が今あなたに申し上げた打ち明け話をなさるやうな事がありましたら、私の申しましたことゝあなたがそれを信じてゐられるといふことに就いて、證人になつて頂きたいのです。どうかあなたが好意をお持ち下さつて、私の不利になるやうなことをなさらないでゐたゞきたいのです。私はもうこれ以上、自分の利害の話は申しません。これが私のお願いです。それをお願いする條件、またあなたが當然要求なすつてゐる條件は、今直ちに

守ることに致します。」

「わしは條件なしで約束する。」と、ドクターはあつた。「わしは君の目的が、君の言葉通り純粹で眞實だと信じる。わしは君の意志が、わしとわしの今一つの遙かに大切な自分（ルウシイ）との間の羈絆を弱めるつもりでなく、それを何時までも續けさせるものぢやといふことを信じる。もしあれが自分の完全な幸福の爲めには、是非君がなくてはならぬとわしに話すやうなことがあれば、わしはあれを君に差し上げよう。假令そこにぢやーチャールズ・ダーネイ、假令そこに——」

若者は感謝にあふれて、彼の手を執つた。二人の手が結び合はされたときに、ドクターはかふあつた。

「どんな空想、理由、懸念、その他どんなことでも、あれの本當に愛する人の不爲めになるやうなことがあつても、——もちろん、その直接の責任はその人の頭上にかゝつて

ゐるのではないが——そんなものはすべて、あれの幸福の爲めに消滅せられてしまはなくてはならんのだや。あれはわしにとつてはすべてぢや。わしにとつては苦惱よりも迫害よりも、わしにとつては——うむ、さうか！これはつまらぬことをあつたものぢや。」

ドクターが口を噤んだ様子も、その口を噤んだ間にちつと見すゑた眼付も、ひどく不思議なものであつた。で、ダーネイは彼に握られてゐる手が急に冷たくなつたやうに感じた。と、ドクターの手がそろそろゆるんで、彼の手を落した。

「君はわしに何かいつとつたね。」やがてドクター・マネットは俄に微笑しながらあつた。「わしにいつとつたのは何ぢやつたかね。」

彼は當惑して、何と答へていゝか分らなかつたが、やつと約束の條件のことをいつてゐるのだと思ひ出した。彼の心がそこへ還つたときに、彼はほつとして答へた——

「あなたは私を信用して下さいましたので、私の方でも十

— 一三五 —

分信用して、そのお返しをしなければなりません。私の現在の名は、母の名とさうひどく違つてはゐないのですけれど、これは或はご存知かもしれませんが、私の本名ではありません。私は自分の本名や、またどうして英吉利に參つてゐるかといふことを、お話し致したいと思ひます。」

「お止めなさい！」と、このポーヴェイの醫師はあつた。(ダーネイが、自分を牢獄に投じた貴族と關係のあることを疑つてゐたので、今こゝでそれを明白にすることを好まなかつた)

「私は是非お話ししたと思ひます。御信賴にもつと添ひたくもありますし、また祕密を残して置きたくなひも無いと思ひますから。」

「お止めない——」

瞬間ドクターは両手で耳を塞ぎさへした。そして次には、ダーネイの唇にその手をあてがひさへした。

「わしからお願ひするときに話して頂かう、今ぢやいけない。若し君の求婚がうまく行つて、ルウシイが君を愛するやうになつたら、君の結婚の朝そのお話を伺はう。約束をしてくれませんか。」

「喜んで致します。」

「では、握手させてください。あれはもうぢきに歸るぢやらう。今晚わたちが一緒にゐたことをあれに見せない方がゝやうぢや。さあ、お歸りなさい！神様のお恵みのあるやうに！」

チャールズ・ダーネイがドクターのもとを去つたときには、もう暗くなつてゐた、それから一時間

たつて、夜暗が一層濃くなつてきた時、ルウシイが歸つて來た。ミス・プロスはまつすぐに二階に上つて行つてしまつたので、彼女は一人で部屋に駆けて行つた。そして父親の讀書する椅子が空になつてゐるのを見て、びつくりした。

「お父さま！」彼女は父を呼んだ。「お父さま！」

それには何の答へもなかつた。だが彼女の耳には彼の寢間で槌を打つてゐるらしい低い物音のするのが聞えた。彼女は聲音を忍ばせて、中の部屋を通つて、彼の寢間の戸口をそつと覗いてみた。と、忽ち恐怖に打たれ、總身の血を凍らせてかゝ獨りで叫びながら駆け戻つて來た。「どうしませう！どうしませう！」

彼女の不安な氣持ちは直ぐ止んだ。彼女は急いでとつて返して寢間の戸を叩き、そつと彼を呼んだ。彼女の聲がすると、その物音は止んだ、彼は程なく彼女の方へ出て來た。そして二人は長い間あちこちと歩き廻つた。

その夜、彼女は牀を抜け出して、眠つてゐる彼を見に來た。彼はぐつすりと睡入つてゐた、そして鞆造りの道具も、昔からのやりかけの仕事も、すべていつもの通りであつた。

— 一三六 —

十一、二幅對の二面

「シドニイ、」この同じ夜——といふよりも寧ろ明けがた、ストライヴァはその豺に向つてかふるつた。

「調査酒をもう一杯こさへ給へ。わしは君に話したいことがあるんだから。」

シドニイはその晩も、前の夜も、前の前の夜も、幾晩も幾晩も引き續めて働き通しに働いてゐた。長期休暇が始まらないうちに、ストライヴァの書類の大整理をやつてゐたのである。その整理も漸く片がついた。ストライヴァの滯滞してゐた事務は、見事に一掃された。これで十一月になつて、天氣の霧と一緒に訴訟事件の霧がやつて來て、またどつさり儲けさしてくれるまでは、何もかも一先づ片づけられたわけであつた。

シドニイはこんなに精を出してゐる時でも、格別活氣づいたとやふでもなく、又格別落ちついてゐるといふのでもなかつた。たゞ彼を夜通し起して置く爲めには、いつもよりも濡れタオルが澤山要つた、その濡れタオルをつける前には、同様にいつもよりも餘分な量の酒が要つた、そこで今そのターバン（回教徒の頭被、タオル鉢巻をしやれていふ）を取り脱して、この六時間のあひだ時々それを浸してゐた金盥の中に投げ込んだ彼は、すっかり疲れ切つた體であつた。

「君、調査酒をもう一杯こさへてゐるかね。」と大兵肥滿のストライヴァは、両手をバンドに突つこんで仰向けに臥てゐる長椅子の上からあたりを見廻してゐた。

「あゝ、こさへてゐるよ。」

「ぢや君！わしはこれから君をびつくりさせるやうなことをいふぞ、これを聞いたら君だつて、まさかわしをいつも君が考へてゐるやうな、拔目のない人間だとは思ふまいよ、わしは結婚しようと思つてゐるのだ。」

「君がか」

「さうだよ。それも金錢づくぢやない。ところで君はどう思ふね。」

「僕は餘り兎や角いひたくないな。その婦人は誰だね。」

「當てゝみ給へ。」

「僕の知つてゐる人かね。」

「當てゝみ給へ。」

「朝の五時で、おまけに 脳味噌が頭の中で煮え立つてるんだ。あまり當て物などをする氣にはならないさ。どうしても當てるよと云ふんなら、御馳走に呼ばれてからでなぐちや。」

「よし、ぢや話さう。」ストライヴアはそろそろと坐り直しながらあつた。「シドニイ、君みたいな血のめぐりの悪い人間はないな。君に打ち明けるのは、あきらめかけてみたんだがね。」

— 一三七 —

「そりや君は、」とシドニイは調合酒を一心に混ぜ合はしながら應じた。「實に感じの鋭い、詩的なお方でおいでになるからね。」

「おい、をひ！」ストライヴアは得意さうに、はつはと笑ひながらいつた。「わしは別にローマンズの權化になりたひなどゝは言はないがね、(わしはそんな馬鹿ではないつもりだ。)それでも君に較べるとわしの方が多感な人間なんだね。」

「君のいふ多感とは多幸のつもりぢやないかね。」

「いや、そんなつもりぢやないさ。それはその、わしは君に較べると、もつとその——」

「もつと女の御機嫌をとるといふんだね。そして、そのことに夢中になつてゐるんだらう。」カートンは、かふほのめかして書つた。

「よし、御機嫌とるなら御機嫌とるでよろしい。わしのつもりではかふだ、わしはこれでも」とストライヴアは調合酒を混ぜてゐる友人の方を得意氣に見やりながら言つた。

「婦人と交際するときには、君よりも、もつと對手を氣持よくさせようとし、實際にその通り努力もし、またその爲めにどうすればよいかといふことも心得てゐる人間なんだよ。」

「それから。」とシドニイ・カートンは言つた。

「まああゝ、だが話を續ける前に、」とストライヴアは例の威張つたやうに頭を振つて言つた。「これだけは、君にきつぱり話して置きたいんだ。君はわしと同じくらゐにドクタア・マネットの家に居つたね、或は君の方が多いかも知れん。兎に角、わしはあそこで君の無愛想なものには恥かしくなつてしまつたんだ！君の態度といつたら、黙りこくつて、不機嫌で、いかにも下卑てゐたんで、わしはもうほんたうに、恥かしくて、恥かしくつてな、シドニイ！」

「君のやうに法廷であんな商賣ばかりしてゐる人間に、恥かしがらることを教へるなんて、大した功德さ！」とシドニイはやりかへした。「君は僕に大いに感謝してゐよ。」

「おい、おい、はぐらかしては駄目だよ、君。」とストライヴアはその答を、肩で對手に押し返すやうにあつた。「さうだ、シドニイ、君にかふいつてやるのは僕の義務だよ。君の爲めを思ふばかりに、面と向つて君にあふんだ——ね、君はあゝいふ交際社會では、ひどく場違ひの人間なんだとね。實際、君は不愉快な人間だよ。」

シドニイは自分で調合した調合酒の大杯をぐつと飲みほして、はつはと笑つた。

「あゝかね。」とストライヴアは身構へしながら言つた。「本來なら、わしは境遇上君よりぐつと獨立してゐるから、君ほど人に氣持よく思はれる必要はないわけなんだ。だのに

— 一三八 —

何故わしはさうするかといふのは、だね……」

「僕は今まで、君がそんなことをするのを見たことはないよ。」とカートンは呟いた。

「わしはそれを政略の爲めにやるのだ。主義としてやるのだ。あゝかね！どんどん話すよ。」

「君は結婚したいといふ話は少しもしないぢやないか。」カートンは無頓着な様子で答へた。「どうか話をそつちの方に持つていつて頂きたいな。僕のことなら——こんな度し難い人間はないといふことが、どうしても君には分らないかね。」

彼はいくらか輕蔑したやうに、かふ質問した。

「無理に度し難くなる必要はないよ。」彼の友人の答は、あまり機嫌をとるやうな調子でもなかつた。

「成る程、無理に度し難くなる必要はちつともなひ。それ

はよく知つてゐる。」とシドニイ・カートンはあつた。「時に對手の婦人は誰だね。」

「ぢやア言ふが、言つても氣持を悪くしないやうにしてくれ給へ、シドニイ。」ストライヴァは、これ見よがしに友情を示して、これから言はふとしてゐる打ち明け話に封する用意をさせながらあつた。「わしは君が口に出す半分も腹に思つてゐないといふことを知つてゐるからだ。またよし、腹からさう思つてゐても、大したことぢやなからう。わしが一寸かふ前置きしておくのは、君がかつてその若い婦人のことを輕蔑したやうな口吻で話したことがあるからなんだ。」

「そんなことを言つたかね。」

「言つたとも、しかもこの部屋だよ。」

シドニイ・カートンは自分の調合酒を眺め、得意さうな友人の方を見たが、やがて調合酒をぐつと飲んで、それからまたその得意さうな友人を眺めた。

「君はその若い婦人のことを金髪の人形だといつたね。若い婦人とはミス・マネットのことだ、もし君がその方面に幾分でも敏感な、繊細な感情をもつた人間だったら、君がそんな言葉を使つたことに對して、わしも少しは怒つたかも知れない。だが君はそんな人間ぢやない。君にはそんな感じはまるでないのだ。だからわしは、君の言ひ草を考へても別に腹も立たない。丁度、繪をみる眼のない人間が、わしの繪について意見述べたり、音楽を聞く耳のない人間が、わしの音楽についてこれいつたりしても、少しも腹が立たないのと同様だ。」

シドニイ・カートンは盛んに調合酒を飲んだ。友達の顔を見ながら杯を満たしてはぐいぐいと飲んだ。

「さあ！シッド（シドニイ）、これで何もかも分つたらう。」とストライヴァは言つた。「わしは財産なんかはどうでもあゝん

— 一三九 —

だ。彼女は實に愛らしい女だ。わしは楽しむ目をしようと思つてゐるんだ。何といつても、わしは自分で楽しむだけの力があると思ふ。彼女はまた彼女で、わしといふもう相應に裕福な、どんどん出世する相當名のある夫をもつことが出来るわけだ。彼女にとつては一寸幸運な話さ、だが彼女はそれだけの幸運を受ける値打はあるんだ。君は驚いたかね。」

また調合酒を飲んでゐたカートンはかふ答へた。

「驚くわけがないぢやないか。」

「ぢや賛成か。」

カートンは尙ほまだ調合酒を飲みながら答へた。

「不賛成だといふ譯がないぢやないか。」

「うむ！よろしい。」彼の友人のストライヴアはかふあつた。「君はわしが想像してゐたよりも樂に話を受け容れてくれた、またわしが想像してゐたよりは案外、金銭づくを離れてわしにつくしてゐてくれたんだ。もつとも、君が今までに、君の昔の友達はかなり意志の強い人間だといふことを十分知つたことも慥かだらう。さうだ、シドニイ、わしは随分永い間、一途にかふした生活を續けて來たが、もう倦きた、倦きあきした。何だか自分の家に歸つてみたいやうな氣になる時には、家庭をもつてゐるのは愉快なことだと思ふ。無論そんな氣分にならないときは無理に行かんでも濟むし・・・それにわしはまたミス・マネットなら、どんな處に置いてみても、立派に似合ふし、また決して、わしの名を辱しめるやうなことはないと思つてゐる。そこでわしは決心したわけだ。時にシドニイ、馴染甲斐にわしは、君の將來のことについて一言話して置きたいがね。君は面白くない生活をしてゐる。それは君も知つてゐる通りだ。本當に面白くない生活をしてゐる。君は金銭の價値を知らずに苦しい生活をしてゐる。だから、遠からずすつかり參つてしまふだらう。體は悪くなるし貧乏にはなる。本當に君は、誰か世話してくれる者のことを考へなくちやいかんよ。」

大した庇護者振りを見せて、滔々とかふ述べ立てたが、それが彼を二倍も大きく見せると同時に、四倍も氣障な人間に思はせた。

「そこでだ。」とストライヴアはつづけた。「君はこの點を眞面に考へてみたらあゝと思ふね。わしはわしだけの違つた方法で、その點を眞面に見たんだ。君は君の方法で眞面に考へて見たまへ。結婚をしたまへ。身のまはりの世話をしてくれるやうな人を誰か置きたまへ。婦人達と交際するのが面白なくなつたつて、また、それに理解がなくなつたつて、それを操縱する腕がなくなつたつて氣にかけ給ふな。誰かを見つけ給へ。一寸した財産のある相當の婦人を見つ

— 一四〇 —

け給へ——旅館とか宿屋とかの主婦といつたやうな。そして萬一のときの用意に、その婦人と結婚して置き給へ。これが君には大事な事だ。ね、よく考へてみ給へ、シドニイ。」

「よく考へてみよう。」とシドニイはあつた。

十二、粹紳士

ストライヴアは寛大にも、ドクタアの娘に幸運を與へることに心を極めたので、自分が長期休暇で倫敦を離れないうちに、この幸福を彼女に知らせてやることにした。この點に就いて、いろいろと熟考した揚句、何方かといへば、あらゆる『豫備行爲』を先づ片づけて置いた方がよからう、さうして置けば、彼が彼女に婚約してやるのを、ミカエルマス（九月二十九日）の一二週間前にするか、或はミカエルマスとヒラリ・ターム（二月十三日）との間にある短いクリスマスMASの休みの間にする方がゑゝかといふことは、それから二人でゆつくり取りきめることも出来ようといふ結論に達した。

ストライヴアはこの件の有利なことについては、一點の疑念も持たぬのみか、判決の宣告を受ける自分の行手を明瞭に見越してゐた。具體的な、世俗的な論據——これこそ考慮に値する唯一の論據なのだ——に立つて陪審官と協議したところでは、それは明白な事件であり弱點は一つもなかつた。彼

は自分を原告としてゐた、彼の呈出した證據に打ち勝つものは何もなかつた、被告の辯護人はその依頼事件を抛棄した。陪審官は、考慮しようときへしなかつた。この件を審理したあとで、ストライヴァ裁判長はこれより明白な事件はあり得ないと思つて大いに満足した。

そこでストライヴァは先づ長期休暇の初めに、ミス・マネットをヴォークスホール遊園（倫敦の著名な遊園地）に案内しようと正式に申し出た。それが失敗したので、レーニラ（同じく遊園地）に案内しようとして申し出た、不思議なことにこれもまた失敗したので、どうしても彼は自分でソホウに出かけて行つて、この氣高い心を述べなければならぬことになつた。

そこでストライヴァは、ソホウを指して、ザ・テムプルから肩で風を切つて進んで行つた、それはいま始まつたばかりの長期休暇が、ふくらんだ希望の蕾をまだつけてゐるころであつた。またテムプル・バーのセント・ダンスタン寺院の側にあるのに、もう半身ソホウの方に乗りだしてあらゆる氣の弱い人達を押し分けて、彼一流の威勢を満身にはりきらして、鋪道狭しと歩いて行くのを見た人は、誰でも、彼がいかに頼もしい強い人間なことが分つたであらふ。

途中、テルソン銀行の前を通る上に其處に取引もあり、又ローリイがマネット家の親しい友達であることも知つてゐるので、ストライヴァの心には、一つ銀行に立ち寄つてソホウ一帯に瑞雲が明々とたなびいてゐることをローリイに

一四一

打ち明けてやれといふ考へが浮んだ。そこで彼は例の低い軋みを立てる馬鹿げて開閉の惡い扉を押し開けて、二段ほどよろめき下り、二人の老出納係の傍を通りすぎて、肩で風をきつて黴臭い奥の小屋に押し進んで行く、そこにはローリイが、數字を書きこむやうに罫を引かれた大帳簿を前にして坐つてゐる。前の窓には眞直ぐな鐵の、格子が嵌つてゐるが、これも數字を書きこむ爲めに、罫が引かれてあるやうに見える、天下のありとあらゆるものが、それぞれ一つの合計でもあるかのやうに見えた。

「やあ！」ストライヴァは聲をかけた。「どうですか。お變りありませんかー」

何處、如何なる場所でも、いつも大き過ぎるほど大きく見えるのがストライヴァの特徴であつた。彼はテルソン銀行でも餘りに大き過ぎたので、づゝと離れた隅々にある老書記達は彼の爲めにぎうぎう壁に押しつけられでもしたかのやうに、批難の眼で彼を見上げた。否、傲然と遙かの奥で新聞を讀んでゐる頭取さへも、まるでストライヴァの頭がその尊敬すべき胴衣に押しこまれてもしたかのやうに、不機嫌さうに頭をさげた。

思慮深いローリイはかふいふ場合に推薦めたいやうな摸範的な調子の聲で、「如何ですか、ストライヴァさん、如何でございますか。」といつて握手した。彼の握手の仕方には一種の特徴があつた。それは頭取の睨みがそこらの空氣に行きわたつてゐるときに、お客と握手するテルソン銀行の書記には誰にでもいつも見られるのであつた。彼はいかにもテルソン銀行を代表して握手する人間のやうに——すつかり自分といふものを押へつけて——握手をした。

「何か御用であらうしやめますか、ストライヴァさん。」ローリイは商賣柄相當に、かふ訊ねた。

「いや、なあに、私事で君をお訪ねしたやうな譯でしてな、ローリイさん、わしは内々でお話し、たいことがあつて來たのです。」

「おや、それは、それは！」とローリイは彼の方に耳を傾けはしたが、眼は離れたところにある頭取の方を窺つてゐた。

「あゝわしはその」ストライヴァは、いかにも打ちとけた様子で、机の上に両腕をついてかういひ出した。この机は普通の二倍もある大きなものであるのに、彼にとつては半分にも足らないやうに見えた。「ローリーさん、わしは、あなたの可愛い小さなお友達のミス・マネットに、結婚の申込みをしようといふところなんです。」

「おや、おや！」ローリーは顎を摩りながら怪訝さうに訪問者を見て、かふ叫んだ。

「おや、おや、とは？」ストライヴァは、後退りしながら、

一四二一

繰り返した。「おや、おや、とは？ローリーさん、それはどういふ意味ですか。」

「その・・・意味ですがね・・・」と實務家は答へた。「勿論、好意的のもので、ちやんと理解した上でのことです。それで、あなたの名聲もこの上なく上らうといふのです。——つまりですな、私の今の意味は、あなたの御希望なさることをみな指してゐますので。——が、實際ストライヴァさん——」ローリーは口を噤んで、彼に向つて妙な風に頭をふつてみせた、それは丁度彼が心ならずも内心でかふあひ足さなければならぬかのやうに——「御自分でもお分りでせうが、實際、それはちつとあなたらしき過ぎやしませんかね。」

「うむ！」ストライヴァはその議論すきな手で机をどしんと叩き、眼を大きく見張つて、長い息を吐きながらあつた。

「いやローリーさん、あなたの仰しやるやうなそんなことが、わしに分つてたまるものですか！」ローリーはそれに應ずる手段として両方の耳のところに手をやつて、小さな鬘をちやんと直して、鵜への羽を噛んだ。

「えゝ、いまましいことをツ！」ストライヴァは彼の方をぢろぢろ睨めながらあつた。「わしにはその資格がないと仰しやるんですか。」

「どう致しまして。おありですとも、おありですとも。あなたにはその資格が大ありです！」とローリーはあつた。「あなたがあつたと仰しやるからには、大ありですとも。」

「わしの事業は繁昌しちやあぬいともいふのですか。」とストライヴァは反問した。

「あゝえ！繁昌しておゐでなら、ほんとに繁昌しておゐでゝすとも。」

「それに出世はしてゐないですか。」

「いや出世しておゐでなら、」ローリーは、もう一つ讓歩が出来るのを喜んでゝもあつた。「誰だつてそれを疑ふことは出来ません。」

「それならローリーさん、あなたは一體どういふ積りで『おやおや』などゝあはれたのです。」ストライヴァはかふ問ひつめたが、眼にみえて元氣がなさうであつた。

「えゝと！私は——あなたは今あちらへあつしやるどころですか。」とローリーは訊ねた。

「まつ直ぐに！」とストライヴァは拳をかためて机を一つどしんと打つていつた。

「私でしたら、行かないだらうと思ひますね。」

「何故ですか、」とストライヴァはあつた。

「今度はあなたを一つ問ひつめますぞ。」と人差指をいつも法廷でやるやうに、彼の眼の前に振つてみせた。「あなたは

一四三一

「實務家だから、何か理由があるに違ひない。理由をおひなさい。何故あなたなら行かないのですか。」

「それはですな、」とローリイはあつた。「私なら、成功しさうだと信じられる何等かの理由を持たないでは、さういふ目的に向つて進みたくないのです。」

「えひ、くそツ！」とストライヴァは叫んだ、「そんなことは、定つてゐるぢやありませんか。」

ローリイは遠くにある頭取の方を、ちらつと窺つた、それから怒つてゐるストライヴァの顔をちらつと見た。

「成る程、銀行といふところには實務家がおいでだ、——年功者がおいでだ——経験家がおいでだ。」とストライヴァはあつた、「間違ひなく成功するものとして、三つの主な理由を擧げて置いたのに、成功する理由は一つもないと仰しやる！ 氣が勝れてゐるといふ譯でもないのに、さういふことを平氣で仰しやる！」ストライヴァは若し彼が氣が觸れていつたのなら、少しも不思議なことぢやないが、とでもいふ調子でこの不思議な矛盾を批評した。

「私が成功と申しますのは、あの若い婦人に對する成功を申すのです。私が成功を可能にする原因とか、理由とか申しますのは、あの若い婦人に對して、成功が出来さうな原因や理由のことを申すのです。あの若い婦人ですよ、あなた。」とローリイは、ストライヴァの腕を軽く叩いてあつた。

「あの若い婦人ですよ。あの若い婦人が、何よりも第一ですよ。」

「それではローリイさん、あなたはですな、」とストライヴァは肘を突張りながらあつた。「あなたは、今問題のあの若い婦人は、氣取りやの馬鹿だといふのが、御熟考になつた揚句の御意見だと仰しやる積りなんですな。」

「あなたがちさうではありません。ストライヴァさん、私がお話しやうといふのはです、」とローリイは怒りに顔を赤くしてあつた。「私はどんな人の口からも、あの若い婦人に對する失禮な言葉を聞きたくないといふことが一つ、また若し私が、この机の傍で、あの若い婦人のことを悪くいはずにゐられないやうな下劣な趣味と傲慢な人間のゐることを知つてゐたら、——まあ、そんな男を知らないでゐたいものですが——たとひテルソン銀行の手前があらふが、私とその人間の不所存を叱らないではひられないといふことです。」

腹を立てるにも控へ目にしなければならなかつたので、ストライヴァが怒る番になつたときに、彼の血管は今にも破裂せんばかりの危険情態になつた。ローリイの血管はいつものやうに規則正しく流れてはゐたが、彼が怒る番になつた今は、あまりゐる情態とは言へなかつた。

「これが、私があなたにお話ししたひことなのです。」とロ

— 一四四 —

ローリイはあつた。「どうかその邊を誤解なさらないやうにしてください。」

ストライヴァは暫くの間、簿記棒の尖端を噛んでゐたが、やがてそれで拍子をとるやうにこんこんと齒を打つた。それは多分彼に齒痛を起させたことであらふ。彼はこの氣まづい沈黙を、かふいつて破つた——

「ローリイさん、それは珍らしいことをお聞きします。あなたは熟慮の上で、わしにソホウに行かぬやうに、そして結婚の申込みをしないやうに、わし自身に——このわし、高等法院の辯護士であるストライヴァ自身に忠告なさるのですな。」

「ストライヴァアさん、あなたは私に忠告を求めておいでですか。」
「先づさうです。」

「よろしい。それなら私は申し上げませう。あなたは私が忠告しようと思つたものをたつた今御自分の口で間違ひなくお繰り返しになりましたよ。」

「そんなことですか。」ストライヴァアは苦笑した。「それやどうも——はつ、はつ、——若しあなたの忠告が當つたら、過去、現在、將來のあらゆるものが滅茶々々になるとでも申し上げるより外に仕方ありませんね。」

「そこで、よくお聴き下さい、」とローリーは續けて言つた。「私のやうな実務家は、かふいふ問題について何かをいふのは柄ではありません。といひますのは、実務家の私は、かふいふことについては何も知らないからです。唯ミス・マネットをこの腕に抱いて連れて來たし、また現にミス・マネットとその父の親友で、あの人達二人に對して、大きな愛情をもつてゐる老人として、私はお話ししたのです。あなたのお打ち明けなされた話は私から求めたものではありません、よく御記憶下さい。これでもあなたは私の申し上げることが正當でないとお考へになりますかね。」

「いや、考へないでどうしませう——」とストライヴァアは嘯きながらかふ答へた。「常識だけでは公平な立場なんて分るものぢやありません。私はたゞ自分で、それを見出すことが出来るだけです。私の推測するのは或る點で意味がある。あなたの推測するのは馬鹿用心に過ぎた、子供のやうなことばかりです。今迄そんなことは聴いたこともない、だが恐らくあなたの仰しやるのは正當でせうよ。」

「ストライヴァアさん、自分で推測したことがどうかといふことは、自分でちやんと申し上げるつもりです。よくお聴き下さい。」ローリーはまた顔をさつと赤くしてゐた。「私は——たとひテルソン銀行に於いて、——どんな紳士にせよ、私の考へをとやかくは言はせません。」

「それは、それは——どうかお許しを願ひます！」とスト

—一四五—

ライヴァアはゐつた。

「どういたしました、恐れ入ります。ところでストライヴァアさん、私はかふ申し上げようと思つてゐました。——あなたが御自身で、これは思ひ違ひをしてゐた、と氣がつくことは苦痛でせう。ドクタア・マネットにとつてもあなた封して何もかもはつきり申さねばならぬのは、苦痛かも知れませんが、殊にミス・マネットには、あなたに對して腹藏なく申し上げるといふことは、非常な苦痛だらうと思ひます。幸ひ私がああ家族と、どういふ間柄であるかとゐふことは、御存じです。だから、もし御異存がないやうなら別にあなたのお便ひといふわけでもなく、といつてあなたを代表してといふわけでもなしに、私が、先方に出かけて行つて様子を見ませう、その結果を見て只今の忠告を訂正なり何なりいたしましたせう。それでも若しその結果が御不満でしたら、その時こそあなたが御自身でお確かめになつたらひでせう。若し反對にその結果に御満足で、現在と同じやうでしたら、それは雙方から口に出さないで濟むかとは、出来るだけ出さないで濟ませることになります。どうお考へですな。」

「それにはどのくらの間、倫敦にゐなければならんでせうか。」

「なあに！それはほんの數時間の問題です。私は今晚、ソホウへ行つて、その足で直ぐあなたの事務所をお訪ねいたします。」

「それなら、承知しました。」とストライヴァアはゐつた。「ぢや今あちらへは行かないことにしませ

う、わしは見かけほどさう逆上せてゐるわけではないのです。たしかに承知しました、それでは今晚おいでになるのをお待ちませう。さやうなら。」

そこでストライヴアは踵を返して、銀行から飛び出して行つたが、その通り路の空気を激しく震動させた爲めに、二人の老書記は二つの勘定臺の背後でお辭儀をしながらそれを耐へてゐるには、残りのありたけの力が要つたほどであつた。かふいふ老齡の弱々しさうな人達は、何時でもお辭儀をしてゐるところばかり人々に見られたので、一般には彼等がお辭儀でお客を送り出したときには、別のお客をお辭儀で迎へ入れるまで、誰もゐない事務室でそのまゝお辭儀をしつゞけてゐるのだらうと思はれてゐた。

法律家は流石に鋭い眼をもつてゐたので、いかに銀行家だとして、心中に確信のないやうな不確かな根據に基づいて意見を述べるほど、度はずれた眞似はしないといふことだけは見抜いてゐた。彼はこんな大きな丸薬（不快のこと）を嚙み下さなくてはならないとは少しも豫期しなかつたが、それでも思ひ切つて嚙み下してしまつた。「そこで、」とストライ

一四六

ヴアはそれが咽喉を通つてしまふと、ザ・テムブル一體に對して、法廷でやるやうに、例の人差指を振り廻しながらゐつた。「わしがこれを脱する唯一の道はたゞ、諸君の方が、思ひ違ひをしてゐるやうに見せることなんだ。」

それは或るオールド・ベエリイ法廷の策士がよく使ふ術の一つであつた。彼はこの手段を思ひつゝゐて非常な安心を覺えた。「お嬢さん、どうかはしが間違つてゐるなんてゐはないで下さい、」とストライヴアはゐつた。「あなたの爲めにわしはそんなことをするんですから。」

その晩遅く、十時頃ローリイがストライヴアを訪ねたときに、彼はその爲めにわざわざ取り散した夥しい書物や書類の中に坐つてゐて、朝の問題など、てんで心にかゝつてゐないもやうに見えた。彼はローリイを見たときに驚きの色をさへ浮べた、そして全く何かに没頭して夢中になつてゐるやうな様子であつた。

「えゝと！」この好人物の使者は、それとなく彼を例の問題に連れて來ようと、たつぷり半時間も徒な努力をした後で、かふいひ出した。

「ソホウへ行つて参りましたよ。」

「ソホウへ？」ストライヴアは冷然と繰り返した。「あゝ、さう、さう！わしは何を考へてゐたのだらう！」

「本當に、」とローリイはゐつた。「今朝ほどの話ですが、私の申し上げたことは間違ひがなかつたのでした。私の意見はすっかり裡書きされました。私は今朝の忠告を繰り返して申します。」

「いや全く、」と、ストライヴアはいかにも親しげに應じた。

「わしはあなたの爲めに、又あの氣の毒な父親の爲めに、お氣の思ひます。これはあの一家にとつて、始終思ひ出しても辛い問題となるに違ひないといふことを知つてゐます。もうそのことは何もゐはないとませう。」

「私にはあなたの仰しやることが分りません。」ローリイはかふゐつた。

「いや多分さうでせう、」ストライヴアは和めるやうに、またこれがゐひ納めだといふ風點頭をみせながら答へた、「もつゝあゝのです。もうあゝのです。」

「あゝことばないでせう。」とローリイは言ひ張つた。

「いや、何に、あゝのです。全くあゝのです。意味がないのに意味があるやうに、立派な望みなどないのに本當に立派な望みがあるやうに推測してゐましたが、わしは幸ひ自分の間違ひからうまく逃れて、別に何の害もなく済みました。今までも屢々、若い婦人達はこれによく似た愚かな行爲をして、何度となく、貧乏な日蔭の生活に落ちては後悔してゐるのです。自分のことを抜きにして見ると、わしはこの事が沙汰止みになつたことを残念に思ひます、とひ

一四七

ふのは世俗的な見方でいつて、他人にとつていゝ結果になつたかも知れませんが。自分一個からいへば、わしは沙汰止みになつたことを喜びます、といふのは世俗的な見方でいつて、わしにとつて損なことだつたでせうから——わしはそれによつて何等得るところがないことは言ふまでもありません。とにかくまだ何の傷もついてはゐないのです。わしはあの若い婦人に申込んでゐません、それにこゝだけの話ですが、いろいろ考へてみると、果して自分をそんな退つ引きならん破目に陥れてゐるものかどうかに就いては、全く確信がないのです。ローリイさん、あなたは空つぽの頭をした娘達の氣取つた虚榮と移り氣を制御することは出来ませんよ、あなたはそんなことをしようと思つてはなりません、でなければあなたは何時も失望します。どうかもうそのことは仰しやらないで下さい。實のところわしはそれをほかの人々の爲めに残念に思ひます。然し、わし自身の爲めには満足です。あなたがわしに意見を述べることを許して下さいと、また忠告をして下さつたことを心から有難く思ひます。あなたはわしよりもよくあの若い婦人のことを御存知です、あなたの仰しやつたことは間違つてゐませんでした、それはどうしたつてうまく行かなかつたでせう。」

ローリイはひどく呆氣にとられて、思ひ惑つてゐるその頭の上に寛大と忍耐と好意との雨を注ぐやうな様子を見せながら、實際は彼を肩でぐんぐん戸口の方に押しに行くストライヴァの顔をぽかんと見つめてゐた。

「この教訓は出来るだけ利用なさるがひゝですよ。」とストライヴァはゐつた。「ですがそのことはもう仰しやらないで下さい。わしはあなたが意見を聞かせて下さつたことを重ねてお禮申します。お寝みなさい！」

ローリイは、自分がどこにゐるか氣がついたときには、もう暗い外に出てゐた。ストライヴァは長椅子に長くなつて、天井をまじまじと眺めてゐた。

十三、不粹漢

シドニイ・カートンは何處かよそで暗々としてゐることがあつても、ドクタア・マネットの家で晴々としてゐたことは決してなかつた。彼はまる一年の間に、たびたびそこを訪れた。そして何時も相變らずの、むつゝりとした、無愛想なのらくら者であつた。口をきく氣になれば、彼はよく喋つたが、あの『何もかもいやだ』といふ雲が、否慮なしに、その暗黒さで彼を被ふときになると、彼の内心の光明も殆んどそれを破ることは出来なかつた。

けれども、彼はこの家をとまりまいてゐる町々や、その舗道の無心な敷石などには、いくらか關心を持つてゐたらし

— 一四八 —

る。酒を飲んで東の間の喜びさへ得られないやうなときには、彼は幾晩も幾晩もぼんやりと、味氣なまゝにそこを彷徨ふのであつた。わびしい夜明けが幾度も幾度も、ひとり淋しくそこを彷徨うてゐる彼の姿を照し出した、射し始めた太陽の光線が、教會の尖塔や高い建物の姿をくつきりと浮き立たせ、やがてその建築の美をなくしてしまつたときにも、まだそこを彷徨うてゐた、それは恐らくこの平靜な時間には、ほかのときに忘れて思ひつきもしないやうな、よりよきものに對する意識が彼の心に呼び戻されるかのやうに見えた。この頃になつて、ザ・テムプルにある見捨てられがちな彼の寢床は、いつもよりづゝと彼の用に立つことが少なくなつた。たまに、その寢床に横になつたかと思ふと、數分とたゞないうちに、また起き上つて、家の近所をうろついてゐるのであつた。

八月になつて、ストライヴァは（彼の豺に『あの結婚問題のことは考へ直した』といふ簡単な手紙を與へたあとで）、例の多感な心を抱いて、デヴォンシアへ行つた。そして丁度、こゝ倫敦の街々に咲き出でた花の色や香が、少しづゝでも悪者者の爲めには善を、病弱な人の爲めには健康を、老衰した人の爲めには青春を漂はせるやうになつた頃の或る日、カートンの足ばかりは相變らずその敷石を踏んでゐた。彼の足どのは當もなげに、ぶらぶらしてゐたが、ふと或る決心がつくと急に元氣ついで、それを實行する爲めに、ドクタアの玄關を訪れた。

彼は二階に案内された、其處にはルウシイがたつた一人で仕事をしてゐた。彼女はこれまでカートンにすつかり打ちくつろいだことがなかつたので、彼が彼女の卓子の傍に坐つたときに、ちよつと當惑したやうに彼を迎へた、だが、二三ありふれた挨拶の言葉を交すついでに、彼の顔を見上げると、彼女はそれがいつもと變つてゐるのに氣がついた。

「カートンさん、何處かほ悪めのはございませんの。」

「おゝえ、ですがミス・マネット、僕の今の生活は健康にいゝ筈はないんです。かふいふ放蕩者なのですから、人から見たつて自分が考へたつて、何も期待するやうなことはなゐんです。」

「いつもそんな生活をなすつてゐらして、——あの、こんなことをお訊ねするのは失禮ですけれど——残念なことではございませんか。」

「實際恥辱なんです！」

「では、なぜお改めになりませんの。」

彼女がまた優しく彼を見上げると、彼の眼に涙が浮んでゐるので、はつと驚くとゝもに、悲しい氣になつた。そして、かふ答へる彼の言葉にも涙があつた——

— 一四九 —

「もう遅すぎるのです。僕は現在より善くなることはないでせう。僕はますます墮落して益々悪くなるんです。」

彼は彼女の卓子に片肘をもたせて、手で眼を抑へた。沈黙のうちに、卓子がかすかにふるへてゐた。彼女はこれまで彼が心弱くなつたことを見たことがなかつたので、非常に當惑した。彼は彼女の方を見はしなかつたが、彼女の氣持を察していつた——

「御免下さい、ミス・マネット。僕はあなたにお話したいことがあるんですが、それを考へますと、いつも勇氣がなくなつてしまひます。僕の話を書いて下さいませるか。」

「それが何かのお役に立ちますなら、カートンさん、それがあなたを少しでも仕合せにしますなら、わたくしもどんなに嬉しいことでございませう！」

「あなたの優しいお情けに、神様のお悪みがありますやうに！」

彼はしばらくして、顔から手を離した、そしてしつかり落ちついて、話し出した。

「どうか僕の話聞いて恐がらないで下さい。僕が何をあつても尻込みなさらないで下さい。僕はあはゞ若くて死んだ人間なんです。僕は生涯を通じて、さうだったのかも知れません。」

「あゝえ、カートンさん。わたくし、あなたの生涯の一番ぬゝ部分はまだあると存じますわ、あなたはもつともつと、本當の御自分に似つかはしくおなりになれる方だと存じますわ。」

「せめてあなたに似つかはしくと、仰しやつて下さい、ミス・マネット。然し、そんなことが出来ないのは、僕にはよく分つてゐますが――僕の惨めな心の奥では、よく分つてゐますが――えゝ、僕は、それを決して忘れはいたしません！」

彼女は蒼白くなつてわなはなとふるへた、彼が自分自身に對してきつぱりした絶望を宣告したので、彼女はほつと安心した、かうして、この會見は、今まで二人の聞でした他のどんな會見とも違つたものとなつた。

「ミス・マネット、若しあなたが今眼の前に立つてゐるこの男の――あなたも御存じの通りの自暴自棄の、生涯を徒にした、酔拂ひの、道を誤つた、この可哀さうな男の――愛に報いて下さるやうなことが、萬一出来ることしましても、彼は自分の幸福は鬼に角、この日、この時、自分があなたを悲惨な目にあはせ、悲しませ、後悔させ、萎縮させ、辱しめ、あなたを自分とゝもに墮落させてしまふだらうといふことを、きつと意識したことせう。僕は、あなたが僕に何の愛情も持たれる筈がないといふことはよく知つてゐます、また僕にしても強つてそれをお願いするものではありません。」

一五〇一

「カートンさん、それがなくては、わたくし、あなたをお助けすることが出来ないでせうか。あなたにもつとぬゝ道に――もう一度失禮さしてゐたゞあて――お戻りして頂くことが出来ないものでせうか。あなたのお心をお打ち明け下さつたのにお報いすることは、――わたくしどうしてもお報いすることは出来ないでせうか。今のお話はお心を腹藏なくお打ち明け下さつたことゝわたくし存じますわ。」と彼女は一寸躊躇つたあとで、眞心の涙を浮べてかふゐつた。「わたくし、あなたが今のお話をほかの方にはどなたにも仰しやらないことは、存じてをりますわ。カートンさん、わたくしそれを少しでも、あなたのお爲めになるやうにすることは出来ないものでせうか。」

彼は頭を振つた。

「出来ません。ミス・マネット、それは出来ません。若しあなたが少しの間、僕の話辛抱してお聞き下さいましたら、僕の爲めに盡して下さらうといふお志は、すつかり果せるわけです。僕はあなたが僕の魂の最後の夢だつたことを、あなたに知つて頂きたいのです。僕は墜落してはゐましたが、あなたとあなたのお父さんのお姿、又あなたのお手でつくられたこの御家庭の様子などを見ますと、も早や自分の心から消えてしまつたものと考へてゐた昔の夢の影が掻き立たされずにはゐないのです。あなたとお知り合ひになつてからは、それまで、自分でもう二度と自分を責めることがあつてゐるまいと考へてゐた後悔の念に苦しめられるやうになりました。そして永久に沈黙を守るやうになつてゐるものと思つてゐた昔の聲が、『向上しろ』とすゝめる囁きを僕は聞くやうになりました。僕は

一つ新しく努力をして、新規にことを始め、怠惰と肉慾とをふるひ捨て、一旦は斷念したのでしたが、又戦つてみようといふ考へを抱きかけました、然しそれも、すべてが無に終り、睡つてゐる人間を、もとのところに眠らせて置くに過ぎない夢の夢です。ですが、瞬時にしろ、僕にこの夢を見せてくれたのは、あなたとつたといふことを申し上げて置きたいと思ふのです。」

「その夢はもう少しも残つてはゐないのでせうか。どうぞカートンさん、お考へ下さいまし！もう一度努力してみして下さいまし！」

「駄目です、ミス・マネット。その夢を見てゐるうちも、僕自身そんな價值のある人間ではないといふことを知つてゐました。ですが僕は弱かつたものですから、——その弱點は今でもありますが——あなたがどんなに激しい力をふるつて、燃えのこりの灰に過ぎないやうな僕を、も一度燃えた

—一五—

たして下すつたか、といふことをあなたに知つて頂きたかつたのです——たとひその火の性質上、僕のうちに燻ぶりがへるに過ぎないもので、ほんとに燃え上らすことも、何物をも照らすことも出來ず、何の役にもたらずに、たゞ徒に燃えつきてしまつたにしても——」

「カートンさん、あなたがわたくしを御存知になる前よりもつとあなたを不仕合せに致しましたのは、わたくしの不運でございますから——」

「ミス・マネット、そんなことは仰しやらないで下さい、若し出来ることでしたら、あなたは僕を改心させることが出來たつたでせう。あなたは僕がもつと悪くなる原因には、決してなりません。」

「でもたゞ今仰しやめますやうな、あなたのお心持がともかくわたくしの爲めだといたしますと——はつきりお分りになりますかと思つてかふ申しますのですが、——わたくしの力で、何かあなたのお役に立つやうなことが出來ないのでせうか。わたくしはあなたをよくする力を少しも持つてゐないのでせうか。」

「ミス・マネット、僕は自分に出來さうな最もあつたことを實現する爲めに、こゝに參つたのです。僕は今後も誤つた生活をするでせうが、今後一生涯、廣の世間でも唯一人のあなたに僕の心を打ち明けたといふ記憶を持ち通させて下さい。そして、打ち明けたこの今は、まだあなたが嘆いたり、憐んで下さることの出来るものが、何か僕の中に残つてゐたといふ記憶を持ち通さして下さい。」

「カートンさん、それでございますわ、わたくしが幾度も幾度も、これ程熱心に、眞心をこめて、あなたにお信じ下さいとを願ひいたしましたのは、その何かしらは、もつと善い事が出來たのでございませうに！」

「ミス・マネット、もうそれを信じろなど、仰しやらないで下さい。僕は自分がどんな人間だかお目にかけました。しかもそれは僕の方がよく知つてゐます。あなたには御迷惑でせうから、早く切り上げることにしますが、僕が今日の日を思ひ出すことに、かふ信じさせて下さいませうか。僕の生涯の最後の祕密が、あなたの純な、無垢な胸の中にあつて居られる。それはひとり、そこに隠れてゐて、他の誰にも洩らされはしないのだと。」

「それがあなたにとつてお慰安になれますなら、宜しうございますわ。」

「あなたがお知り合ひの一番親しい方にも、洩らさないで下さいませうか。」

「カートンさん、」と彼女は昂奮したやうに言葉を途切らせてから、かふ答へた。「これはあなたの祕密で、わたくしではございませぬ。ですから、わたくしはそれを尊重する

―一五二―

「ことをお約束いたします。」

「ありがたう。ではもう一度、神様があなたにお恵みを下さいますやうに。」
彼は彼女の手を自分の脣にあてた、それから戸口の方へ歩いてゐた。

「ミス・マネット、僕がまたかふいふ話を、ほんの言葉の行きがよりからでも、二度と口にするこ
とがありはしないかとお考へになるのですしたら、どうかその御心配はなさらないで下さい。僕は二度
とこの話はいたしません。死んで物も言はなくなつた時と同じやうに、決してこの話は人に申しませ
ん。僕に僕の死ぬとき、最後の告白をあなたにしたといふ―そして僕の名前、缺點、不幸があなた
の胸にやさしく残されて行くといふ一つの嬉しい思ひ出を大切に抱いて死にませう―その時、この
思ひ出の爲めに、僕はきつとあなたに感謝し、あなたの幸福を所りませう。このことの外はどうぞ、
あなたのお心が明るくつて、幸福でありますやうに！」

彼は、いつも見せかけてゐた様子とはひどく違つてゐたし、また彼がいかに多くのものを捨て、毎
日々々、いかに多くのものを抑へつけて、誤つた道に陥らされてゐたかといふことに氣がつくと、非
常に悲しく思はれたので、ルウシイ・マネットは彼の爲めに痛ましげに泣くのであつた。彼は立ち止
つて、彼女の方を振り向いた。

「落ちついて下さい！」と彼はゐつた。「ミス・マネット、僕はそんな同情を受ける價值のない人
間です。これから一二時間もたつて御覽なさい、心では蔑みながらも従はずにゐられないやうな卑し
い習慣と下等な仲間が、この僕を、町を這ひまはつてゐるどんな惨めな人間よりも、あなたのその涙
を受ける値打のないものにしてしまふでせう。落ちついて下さい！ですが、たとひ外面は今まで通り
の僕であるとしても、僕は心の裡ではあなたに對して、いつまでも今日この時の僕であるつもりです。
最後のお願ひをする前に、一つお願ひしたいことは、あなたにこれを信じて頂きたいといふこと
です。」

「えゝ、カートンさん、わたくし信じます。」

「それから僕の最後のお願ひですが、これをしてしまふと、僕は、ちつともあなたに相應しない、
そしてまたあなたとの間には越え難い隔てのあるこの僕といふ訪問者に御免をかふむらせることに
いたませう。こんなことを言つたつて、何の役にも立ちませんが、でもそれは僕の魂の底から出た言
葉です。あなたの爲め、あなたの愛人の爲めには、僕はどんなことでも致しませう。もし僕の生涯が、
犠牲になる機會なり力なりを少しでも持つことの出来るやうな立派な生涯だつたなら、僕はあなたの
爲め、またあなたの愛

―一五二―

人の爲めに喜んでどんな犠牲にでもなるつもりです。どうかいつか氣が落ちついた時にも、あなた
の心の中に、僕がこのことだけは眞剣に思つてゐるといふことを記憶しておいて下さい。あなたには
新しい羈絆が結ばれるときが参りませう、もう直ぐに参りませう―それはあなたが大切にしてゐら
れるこの家庭へ、あなたをもつと強く、もつと優しく結びつける羈絆―あなたを優美にし、あなた
を喜ばせる最も樂しむ羈絆です。―おゝミス・マネット、幸福な父親の顔に生寫しのお子さんが、
あなたを見上げるとき、またあなたの足もとに、新しく咲き出たあなたに生寫しのお子さんを、あな

たが御覽になるとときには、どうか折々、あなたが愛する人たちの生命をあなたのお傍に残して置く爲めなら、自分の生命をも甘んじて投げ出さうとする男があることを思ひ出して下さい！」

彼は「さよなら」とひつた、それから最後に、「神様のお恵みがありますやうに！」といつて、彼女の許を去つた。

十四、正直な商賣人

フリイト街に牀几を据ゑて、人相の惡の惡戯小僧を脇立ちにして坐つてゐる、ジェリイ・克蘭チャアの眼には、毎日々々いろいろ變つた澤山なものゝ動いて行くのが見られた。日中の多忙な時間、フリイト街に坐つてゐて、二つの大きな人波——一つはいつも太陽と一緒に西に流れ、他の一つはいつも太陽とは反對に東に流れはするが、結局二つともいつも太陽が沈んで行く赤と紫に色彩られた彼方の平原をさしてゐる——この二つの大きな人波に眼を眩まされ、耳を聳されないものがあらうか。

克蘭チャアは例によつて、口に麥稈をくはへながら、何百年も河の流れが乾くのを待つてゐたといふあの未開の異教徒のやうに、この二つの流れを見張りつゝ坐つてゐた。——たゞ違ふのは、ジェリイには、その流れの乾くのを待つといふ期待がなかつたゞけである——よし、さういふ期待があつたにせよ、それは決して望ましいものとはひへなかつたらう。何故なら、彼の収入の幾分かは、氣の弱い婦人達を（大抵は肥り肉の、人生の中年期をすぎた婦人であつた）、テルソン銀行側の岸から向ふ岸までこの流れを渡してやることによつて得られてゐたからである。一人々々にして見れば、かうしてお供して行く時間は極めて短かゝつたけれども、克蘭チャアは必ずその婦人に對して、彼女の健康を祝つて乾盃したいといふ強い希望を表示しないではゐられないほどの興味をみせたのであつた。彼はこの深切な目的（乾盃）を遂げる爲めに、與へられた僅かの心付けで今も述べたやうに、彼の財政を補つてゐたのである。

詩人が路傍の牀几に坐つて、人間の有様を見て沈吟して

——一五四——

ゐた時代もあつた。克蘭チャアも大道の牀几に腰かけてはゐたが、詩人でなかつたので、少しも沈吟するといふやうなことはなく、きよろきよろ周囲を一見廻してゐた。

或る日のこと、彼は例によつてかうして坐つてゐたが、この日は人通りも少く、路を行きまどふ婦人もなく、彼の仕事が不景氣だつたので、胸の中には、妻のミセス・克蘭チャアが大分力を入れて例の『お祈り』をしてゐるに違ひないといふ強い疑惑の念が湧いて來た、丁度その時、フリイト街を西の方に流れて來る異常な人波が彼の注意を惹いた。克蘭チャアはその方をぢつと眺めると、何か葬式らしいものがやつて來るところだといふこと、この葬式には人々の反對があつて、それで大騒ぎをしてゐるのだといふことが分つた。

「おい、ジェリイ公」克蘭チャアは倅の方を向いてかふゐつた。「お葬式だよ。」

「うはあ、萬歲アゐ、父ちゃん！」と若いジェリイは叫んだ。

この若紳士は、何だか譯ありげに、かふ大喜びの叫びをあげた。老紳士の方は、この叫び聲にひどく機嫌を悪くして、機會をねらつて、若紳士の耳に拳固を一つくらはした。

「何てことだ。何が萬歲だ。自分の父ちゃんに何んてことをあふんだい。こののらくら奴！この餓鬼ア、だんだん、おいらの手にも負へなくならあ。」と克蘭チャアは倅をぢろぢろ眺め廻しながら

ゐつた。「こいつめとこいつの萬歳アと来た日にやあ！これから決してそんなことを父ちゃんの手に入れちやならねえぞ、でないよ、もつと思ひ知らせてやるから。あゝか。」

「おいらは悪あつもりでいつたんぢやないよ。」

若いジェリイは頬をさすりながらかふ抗議した。

「そんなら止めろ、」と克蘭チャアはあつた。「悪あつもりでされてたまるもんか。その牀几の上にあがつて、あの人波を見てゐろ。」

倅は命令通りにした、群集は近づいて来た、彼等は薄汚い樞車を取り圍んで、しきりに怒鳴つたり罵つたりしてゐた。葬儀馬車の中にはたつた一人の會葬者が、會葬者の威厳にはなくてならぬと思つたのか、薄汚い垂飾りのついた衣服を着て坐つてゐた。だがこの會葬者といふ資格に、彼にとつて決して氣持のあつものではないらしかつた、それも道理で、馬車を取り巻いてゐる彌次馬はだんだん増して来て、彼を嘲弄したり、彼に齒をむいてみせたり、眞似も出来ないやうないろいろのひどい悪口とつものに「やああ！諜者奴！。ぺつ、ぺつ！やああ！諜者奴！」と絶え間なく、怒鳴つたり、喚いたりしてゐるのである。

—一五五—

克蘭チャアにとつては、どんな時でも葬式は異常な魅力をもつてゐた。テルソン銀行の前を葬式が通るときには、彼はいつも五感を緊張させて昂奮するのであつた。だからこの異様な見送りの隨ひてゐる葬式が、彼をひどく昂奮させたのは當然であつた。彼は最初によつ突かつた人にかふ尋ねて見た—

「兄弟、何だい。何をしてゐるんだい。」

「おいらは知らねえ、」とその男はあつた。「諜者だい！やああ！ぺつ、ぺつ！諜者だい！」

彼はまた別の男にかふ訊いてみた。「ありや誰だね。」

「おいらは知らねえ。」とその男も答へた、だが急に手を口にあてがつて、驚くほど熱心に、恐ろしく激昂したやうにかふ怒鳴つた。「諜者だい！やああ！ぺつ、ぺつ！諜者だい！」

たうたう、少しは事情を辨へてゐる男に出會して、この葬式がロージャア・クライといふ者の葬式だといふことを聞いた。

「その男は諜者だつたのかひ。」と克蘭チャアは更に訊ねた。

「オールド・ベエリイの諜者だよ。」と彼に教へてくれた男が答へた。「やああ！ぺつ、ぺつ！やああ！オールド・ベエリイの諜者だ！」

「うむ成程な！」とジェリイは自分も見物したあの裁判のことを思ひ出してかふ叫んだ。「おいらもあいつを見たことがある。死んだのかい、あいつは。」

「死んだとも、たしかに。」と對手が答へた。「いくら死んでも飽き足りねえ野郎だ。奴等を拗り出しちまへ！諜者奴！奴等を引張り出しちまへ！諜者奴！」

こんな思ひ付きといふものは何の考へもない者には、いかにももつて來たので、群集は熱心に、奴等を出しちまへ！奴等を引張り出しちまへ！と大聲で繰り返しながら、二つの馬車に殺到した爲め、馬車も立往生となつたのだ。群集に馬車の扉を開けられると、あの唯一人の會葬者は抗がひながらも自分から出て來た、そして暫くは彼等の手に捕へられてゐたが、彼は非常に敏捷な男で、うまく隙を狙つたものか、次の瞬間には、もう外套も、帽子も、長い帽子のリボンも、白のポケット手巾も、その他の喪装として身につけてゐたものを皆投げ捨て、大急ぎで或る裡町へ駆け出してしまつた。

あとに残つたこの品々を、人々は大騒ぎしてずたずたに引裂いて、四方八方にまきちらした。すると、附近の商人達は大急ぎで店の戸を閉めてしまった。その頃の彌次馬は、どんなことでもし兼ねなかつたもので、非常に恐ろしい怪物のやうなものだつたからである。彼等はやがて、柩

―一五六―

車を開けて棺を取り出すまでにしたが、その時、一人の立派な天才が、そんなことは止めにして、この柩を皆の歡呼のうちに目的地まで運んでゐつてやらうではないかといひ出した、何か實際的な思ひつきが是非欲しい時であつたので、この思ひつきも、また大喝采のうちに採用された、葬儀馬車は忽ち、車内に八人、車外に十二人の乗り手で一杯になつた。一方柩車の屋根の上にも、器用な工夫をして、乗れるだけ澤山の人間が乗つた。この最初の志願者のうちにジェイ・クランチャアも入つてゐた、彼は殊勝にもテルソン銀行の人達に見られないやうに、葬儀馬車の向ふ側の片隅に、その釘を植ゑたやうな頭を隠してゐた。

本職の葬儀屋達は、儀式をかふ變へることにいくらか抗議をした、だが、川がすぐ附近にあるし、それに『強情な奴に云ふことを聞かせるには、水につけてやるに限る。』と數人の者が話してゐるのが聞えたので、彼の抗議も薄弱なものになつた。そこでこの造り變へられた葬列は、煙突掃除屋が柩車の馭者になつて進み出した。本職の馭者がわざはぎその爲めに彼の傍に坐つて、嚴重な監督の下に指圖をした。それから菓子屋が、これもまたその介添を従へて、葬儀馬車の方の馭者になつた。この行列がまだストランドをさう遠く行かないうちに、その頃人氣のあつた大道藝人の熊使ひが、餘興の飾物として徴發された、この汚い黒熊がそのそ歩いてゐるところだけは、いかにも葬式らしい様子を添へた。

かふして、麥酒を飲んだり、煙草をふかしたり、歌を怒鳴つたり、あくまで悲哀を茶化しながら、このだらしない行列は進んで行く、人數は、一步ごとに加はるが、店といふ店はそれが來ないうちに戸を閉してしまふ。行列の目的地は、郊外も大分奥のセント・パンクラスの古い教會であつた。やがて行列はそこに着いた。そして皆墓地の中へ雪崩込まうと言ひ張つてゐたが、たうとう死んだロージャア・クライの埋葬を、仕たい放題に、しかも一同がひどく満足の行くやうにやつてのけた。

死人の片はついたが、群集はまだ、自分達の爲めに、何かほかの餘興をやりたくてたまらない。それでもう一人の立派な天才が（或は前と同じだつたかも知れない）、通りかゝりの人達をオールド・ベエリーの諜者と見做して、片端から告訴する眞似をして、彼等に鬱憤を洩らしたら面白からうと思ひついた。こんな慰みの爲めに、早速、生れてからオールド・ベエリーの近所に行つたことのない、罪もない六七十人の通行人が突然、追撃され、手荒くこびき廻されて、亂暴な目にあつた。事態がかふなつては窓破りとなり、居酒屋荒しとなることは、容易な、また當然なことであつた。遂にそれから二三時間たつて、ますます戰鬪的精神を

―一五七―

固める爲めに、方々の別荘を破壊したり、空地の柵を折り散らしたりしたときに、近衛兵がやつて來るといふ噂がたつた、すると、群集はだんだん滅つてしまつた、近衛兵は來たかも知れなひし又來なかつたかも知れない。然し結局かうなるのが彌次馬にとつては普通の経路であつた。

クランチャアは、この終りごろの遊戯には加はらなかつた。墓地に残つて、葬儀屋達と話をしたり、

悔みをあつたりしてゐた。この場所は彼の氣持をさつぱりさせた。彼は近所の居酒屋から煙管を手に入れて来て、煙草をふかしながら、柵のなかを覗きこんで、つくづくクライを埋葬した場所を見つめてゐた。

「なあ、ジェリイ、」と克蘭チャアはいつもの癖で自分にかふ呼びかけた、「あの日、お前はあそこにクライがあるのを見たつけがなあ、あいつがまだ若い、しやんとした體の人間だつてことを、このお前の眼で見つけたつけがなあ。」

煙草をすつかりふかしてしまつてから、暫く思索したあとで、彼は、テルソン銀行が閉らないうちに銀行の前の持場に歸つてゐようと、踵を返した。先きほどから人間の死についていろいろ考へたことが彼の肝臟（感情の源泉と思はれてゐた）に觸れたものか、それとも彼の健康情態が前から悪くなりかけてゝもあたものか、或はこの著名な人物に一寸敬意を表したのかどうか、その邊は一向明かではなかつたが、歸る途中で、彼の主治醫——或る有名な外科醫——を一寸訪ねたことだけは慥かであつた。

倅のジェリイが熱心に留守番をしてゐたので、彼をほつとさせた、彼の留守の間には別に仕事もなかつたと報告したのである。銀行は閉つた。老書記連は出てゐた。いつもの見張番人が置かれた、それで克蘭チャアと息子は夕飯を食ひに歸つてゐた。

「おい、お前、ゐゝ儲け口があるんだぞ！」と克蘭チャアは家に入るなり、妻君にかふゐつた。

「若しもだ、正直な商賣人のこのおいらの仕事が今晩うまく行かなかつたら、お前がきつとおいらに悪のお祈りをしてゐたつてことになるんだぜ、ゐゝかひ、そしたら、お祈りをしてゐた現場を押へたと同じやうに、存分思ひ知らせてやるからな。」

萎れ返つた克蘭チャアの妻君は頭を振つた。

「だつて、お前はおいらの前でさへさうしてゐるぢやねえか！」と克蘭チャアは腹を立てながらも心配になるやうな様子であつた。

「わたしは何もいつてやしないよ。」

「そんならよし、何も考へちやいけねえぞ。お前はお祈り同様に、考へ事も好きなんだ。お前はお祈りでおいらを呪ふやうに、考へ事の中でも呪ふんだ。そんなことはきつぱ

— 一五八 —

りとやめちまへ。」

「あゐよ。ジェリイ。」

「あゐよ、ジェリイ、だつて、」と克蘭チャアは夕飯をとらうと腰を下しながら、繰り返した。「へえ！あゐよ、ジェリイだとよ。まあ、そんなところか。あゐよ、ジェリイぐらゐは大目にみてやらう。」

克蘭チャアがこんなに不機嫌に駄目を押すのは、特別な意味があるわけではなかつた。たゞよく人々がやるやうに、それとない不満を現はす皮肉として、言つたのであつた。

「お前と、お前の『あゐよ、ジェリイ』と來ちや、」といつて克蘭チャアはバターパンを一嚙りして、茶碗皿から摘み上げた、大きな空想の牡蠣と一緒に嚙み下すやうに見えた。「うん！さうかも知れねえ。お前のいふなあ本當だらう。」

「お前さん、今晚お出かけかひ。」彼がもう一口かぶりついたときに、やさしい彼の妻君はかふ訊ねた。

「出掛けるよ。」

「父ちゃん、おいらも一緒に行つてゐるかひ？」と倅はぶつきらぼうに訊いた。

「いや、不可ねえ。おいらは何だ——母ちゃんが知ってるよ——あの、そら釣に行くんだ。おいらは……な、それ、釣に行くんだよ。」

「父ちゃんの釣竿は錆びついでるよ、ね父ちゃん。」

「餘計な心配だ。」

「何かお魚を持つて歸るの、父ちゃん。」

「持つて歸られなかつたら、明日お前は御馳走なしで我慢するんだぞ。」と老紳士は、頭を振りながらかふ答へた。

「お前にはそれが大事なんだらう。おいらはお前が寝てから餘程経たなくちや、出かけねえんだ。」

妻君が彼の利益にならないやうなお祈りを考へる餘裕を與へまいとして、彼は、夕方から夜にかけ、彼女を嚴重に見張つたり、不機嫌ながら話をつづけたりした。かふいふ考へから彼は倅にも、母親と何か話をするやうにすゝめた。そしてこの不幸な女が暫くの間も獨りでちつと反省しないやうに、自分の氣にいらぬいろいろな原因をながと並べたて、彼女を酷い目に會はせた。彼がこんなに妻君のお祈りを恐れて、邪魔だてをしたことを考へると、たゞへどんな信心深い人間でも、誠實な祈禱の效目といふものをこんな心から信ずることは出来なかつたらうと思はれた。それは丁度、自分は幽霊を信じないと公言する人間が、幽霊話にふるへ上るやうなものであつた。

「それでだ、ゐるか！」と克蘭チャアはゐつた。

「明日になつてみる、ふざけた眞似なんかするんぢやねえぞ！若しおいらが正直な商賣人らしく、肉の大片れを一つでも二つでも、工面することが出来たらだ、お前達が誰

—一五九—

もそれに觸らねえでパンばかりかちつてゐるなんてのはよくねえさ。若しおいらが正直な商賣人らしく、ちつとばかりでも麥酒を工面することが出来たらだ、お前達が水た水だといふのはよくねえ。羅馬に入れば羅馬に従へといふぢやねえか。お前達がいふことをきかねえと、この羅馬はお前達にとつて、厭な代物になるんだ。おいらはお前達の羅馬だぞ、なあ、おい。」

やがて、彼はまたぶつぶつゐひ始めた。「お前が自分の食物や飲みものゝことを、かれこれいふなんてことは、やめてしまはなくちやいけねえ！お前がお祈りなんていふ小細工をしたり思ひやりのねえことをするので、この家の食ふ物や飲む物がどれだけ減つてゐるか分りやしねえ。この子を見なそいつはお前の子だらう？まるで木舞板のやうに痩せてゐるぢやねえか。お前はお袋だつて威張つてゐるけれど、お袋の第一番の務めは子供に腹一杯喰はせるのだつてのを知らねえのか。」

これが若いジェリーの急所に觸れた。お袋が母親の第一の務めを果してくれるやうに——彼女が他のことなら何をしようとしなからうと構はないけれども、何を措いても、父親がこれ程、心を動かすうまい言葉で言つた、母としての職分の途行に第一に力を入れてくれるやうにと願つた。

かふして克蘭チャア一家では、だんだん夜が更けてゐつた。やがて倅のジェリーは寢床に追ひやられた。母親も同じ命令を受けてそれに従つた。克蘭チャアは一人で煙草をのんで、時間をまぎらしてゐた、そしてやうやく一時近くになつてから、その『仕事』に出掛けるのであつた。この恐ろしい刻限になると、彼は椅子から立ち上り、ポケットから鍵を出して、錠の下りてゐる戸棚を開けて、

サック、手頃な大きさの鐵挺、綱や鎖とひつた類のものはゆる『釣道具』を取り出した。かふいふ道具を馴れた手つきで身につけて、ミセス・クランチャアに最後の侮蔑の眼をちらりと向け、それから燈火を消して出てゐた。

倅のジェリイは寢床に入つたとき衣物を脱ぐふりをしただけで直ぐ父の後を追つた。彼は暗闇に乗じて部屋から、梯子段、中庭と過ぎて通りを父の後からつけて行つた。彼は家に戻るときのことほちつとも心配しなかつた。この家には大勢の下宿人が居るので、戸は終始開放しになつてゐたからである。

父親の正直な職業に於ける腕前と祕傳とを研究したいといふ殊勝な野心に驅られて、倅のジェリイは、丁度彼の兩眼がお互ひにくつき合つてゐると同じやうに、その體を他家の玄關先きや、塀や、入口に、ぴつたりくつきつけて、尊敬すべき父親を、見失はないやうにした。尊敬すべき父親は北を指して歩いてゐたが、いくらも行かないやうに

—一六〇—

に、彼はもう一人のアイザック・ウォルトン（釣魚大全の著者、漁師を守る聖徒といはれる）の弟子と一緒になつて、一緒に大股に歩いて行つた。

出かけてから三十分とたゝないうちに、彼等は瞬いてゐる街燈や、もう瞬くどころではない夜番どものところを通り過ぎて、淋しい道に出てゐた。こゝでまた一人の釣師が加はつた、——しかもそれが極めてしづかに現はれたので、もし若いジェリイが迷信的な人間だつたら、初めに父親と一緒になつた釣師の體がいつの間にか二つの體に割れたのではないかと考へたかも知れなかつた。

三人はどんどん歩いて行く、若いジェリイもどんどん歩いて行く、やがて一行は、道の上に覆ひかぶさつたやうに見える土堤の下で立ちどまつた。土堤の上には低い練瓦の塀があつて、その上には鐵の柵があつた。土堤と塀の影の中で、三人は道から逸れて、片側は塀——高さ八フィートか十フィートもあらうか——になつてゐる、行きどまりの袋小路を上つてゐた。片隅に蹲つて、その袋小路を覗いてゐると、若いジェリイの眼に映つたものは、彼の尊敬すべき父親が——曇つた月光を背景に可なりはつきりした輪廓を見せて——鐵門を巧みに攀ち上つてゐる姿であつた。彼は直ちにそれを乗り越えた、次いで第二の釣師が越した、それから第三のそれが越した。彼等三人は門内の地面にそつと飛び降りて、暫くそこに伏してゐた——多分物の氣配を窺つてゐたものであらふ。それから三人は四つん這ひになつて這ひ出した。

そこできいよいよ若いジェリイが門に近よる番になつた、彼は息をこらして、近寄り、その片隅に蹲つて中を覗いて見ると、三人の釣師が生ひ茂つた草の中を這つて行くのが見えた！墓地の中の墓石は——彼等が入り込んだのは或る廣る墓地であつた——白衣の幽霊が竝んでゐるやうに見えてゐた。教會の塔までが凄まじい巨人の幽霊のやうに下界を見下してゐた。彼等はさう遠くまで這つて行かずに立ち止つて、眞直ぐに立ち直つた。それから彼等ははゆる釣を始めた。

最初は鋤で釣をしてゐた。まもなく尊敬すべき彼の父親が、大きな桂抜きやうのものを何かに宛がつてゐるのが見えた。どんな道具を使つてゐるのか分らないが、とにかく彼等は熱心に働いた。教會塔の時計が物凄く鳴つたので、若いジェリイはびつくりした。彼は父親のと同じやうに髪の毛を逆立て、逃げ出してしまつた。

だがこの事をもつと委しく知りたいと長い間望んでゐた彼は、やがて逃げ出す途中で立ち止つた上、又あとへ戻つて行つた。彼が二度目に門のところから覗いて見ると、彼等はまだ根氣よく釣を續けて

みた、だがどうやら今度は魚が食ひつゝみたやうに見えた。地下から螺旋をまはす音や物

―一六一―

の軋む音が聞えて来た。彼等の屈めてゐた體は、重いものでも引張つてゐるのか、ひどく力が入つてゐるやうに見えた。そらりそらりと、その重いものは土を撥ねのけて、地面に現はれて来た。それが何であるかは、若いジェリイもよく知つてゐた。だが、さていよいよそれを見、尊敬すべき父親がそれをねぢ開けようとするのを見たときには、さすがに初めて見ることで、ひどく恐怖に打たれた。彼はまた逃げ出して、一哩の餘も走つてから初めて立ち止つた位であつた。

彼は息をつかないでゐられたら、まだ止らずに走つたであらう。彼は駈け出しながらも、氣味のわるい競走でもしてゐるやうな氣がして、早く決勝鮎につきたくてしやうがなかつた。

彼は自分の見たあの棺桶が、自分を追ひかけて来るやうな氣がして仕方がなかつた。その棺桶が狭い方の一端を下に直立して、今にも追ひつきさうに、彼の後からびよんびよんと跳んで来る、いや、もう既に彼と並んで跳んでゐる―あゝ！彼の腕を掴む・・・―そんな想像が浮ぶので、彼はどうしてもこの追蹟者から遁れないではゐられなかつた。それはまた何處ときまつた處にゐないくせに、何處にでも姿を見せる悪魔であつた。悪魔は、一晚中彼を追ひかけて恐ろしい目に會せる。彼の方では、この悪魔が尻尾も翼もない水腫にかゝつた玩具の紙鳶のやうな恰好で、暗い、露路からびよんびよん飛び出して来るのが怖くて、さういふ庭を避けて大通りへ飛び出した。それはまた方々の玄關口に隠れてゐた。その怖ろしひ両肩を戸に摩りつけながら、また大笑ひでもしてゐるかのやうに、その兩眉を耳のところまで持ち上げながら、隠れてゐた。それはまた道に落ちた物影に忍び込んでゐて、彼の足を掬はふと狡猾くも寝轉んでゐた。かふしてゐる間にも、また一方では、絶えず背後からびよんびよんと追ひかけて、彼に迫つてゐたので、少年がやつと我が家の戸口にたどり着いたときには、半ば死んだやうになつてゐたのも無理はなかつた。だがこゝまで來ても、まだその悪魔は彼を離れようとはしなかつた。彼について梯子段をどしんどしん音をたてゝ上り、彼と一緒に寢床の中にもぐり込み、彼が眠りに落ちたときには、胸の上にくつたりと、死んだものゝやうに、重く落ちかゝつた。例の小部屋に寝てゐた若いジェリイは、日の出の前後といふ頃、居間に父親が入つて來たので、重苦しい眠りからさまされた。父親は何だかうまくいかぬことがあるらしかつた。少くとも倅のジェリイは、父親がミセス・クランチャアの耳を掴んで、後頭部をこつんこつんと寢臺の枕板に打ちつけてゐるのを見たので、さう推測したのでつた。

―一六二―

「おれはきつとやるといつて置いたぜ、」とクランチャアはゐつた。「だからやつたんだ。」

「ジェリイ、ジェリイ、ジェリイ！」妻君は哀願するやうに、かふゐつた。

「お前はいつも儲け口の邪魔をしやがる。」とジェリイはゐつた。「おいらも仲間の奴等も困るぢやねえか。お前はおいらの言つたことを敬ひ奉つて、その通りにしてゐればゐゝんだ、何故さうしねえんだ。」

「ジェリイ、わたしこれでもゐゝ上さんにならうと心がけてゐるんだよ。」可哀想な女は涙ながらに抗議した。

「亭主の仕事に楯つのがゐゝ上さんだつてのかひ。亭主の仕事を馬鹿にするのが、亭主を敬ふこ

とになるのかい。亭主の仕事を肝腎なところで邪魔するのが、亭主のみひつけをきくことになるのかい。」

「ジェリイ、それちやお前さんはあの怖ろしひ仕事に行つたんぢやなかつたんですか。」

「お前などにはな、」と克蘭チャアはあつた。「正直な商賣人の女房だつてことだけで十分なんだ。女の癖に亭主がどんな事をやつてるか、やつてゐねえか、などゝ要りもしねえことを考へるにや及ばねえんだ。亭主を奉つて置く穩順しひ女房といふものは、亭主の仕事にあれこれと口出しはしねえもんだ。お前は自分で信心深い女だと思つてゐるぢやアねえか。お前が信心深い女なら、どんなのが不信心なのか見てえもんだ！お前はな、このテムズ川の川牀が、杵なんてものを一本も知らねえのと同じやうに、生れつき義務なんていふ考へが、まるつきりねえ、だからお前も御同様に、杵を打ちこまれなくちやならねえんだ。」

この口論は低い聲でなされてゐたが、やがてこの正直な商賣人が彼の泥まみれの長靴を蹴飛ばして、牀の上にごろりと臥ころんでしまつたので、けりがついた。枕代りに錆のついた両手を頭の下にあてがつて、仰向けに寝てゐる彼の方をおおづ覗いてから、倅もまたごろりと横になり、ぐつすり寝入つてしまつた。

朝飯には魚も、ほかの馳走もなかつた。克蘭チャアは元氣がなく不機嫌だつた。そして鐵の鍋蓋を手許に引き寄せて、若しミセス・克蘭チャアが食事のお祈りをしさうな徴候が一寸でも見えたら、すぐさま彼女をたゞき直してやるための手擲弾として置いた。彼は何時もの時間に頭を撫でつけ、顔を洗つて、表面向きの商賣をする爲め倅と一緒に出掛けてあつた。

日あたりのぬく、人通りの多いフリート街を、牀几を抱へて、父親と並んで歩いて行く若いジェリイは、前の晩、氣味の惡る追蹟者に追ひかけられて、眞暗がりの人氣のないところを、夢中で家まで走つて歸つたジェリイとは、まるで

— 一六三 —

人が變つてゐた。彼の悪戯は朝になると、もと通りになり、その恐怖は夜と共に去つてしまつた。

この點からいへば、よく晴れたその朝、フリート街やシティ・オヴ・ロンドン（倫敦の商業區域）に、彼と同じ氣持の人間が幾人かゐたと言へないことはない。

「父ちゃん、」と倅のジェリイは歩きながら訊ねた。彼は腕一本の長さだけ父親から離れ、その間に牀几をうまく挟むだけの用心はしてゐた。「死體發掘人たア何のことだい。」

克蘭チャアは敷石道の上に立ち止つたが、やがてかふ答へた。

「そんなこと知るもんか。」

「父ちゃん、おいらは父ちゃんなら何でも知つてゐると思つてたよ。」と少年は無邪氣さうにゐつた。

「ふむ！さうか。」と克蘭チャアはまた歩き出して、帽子をとり、釘を植ゑつけたやうな頭髪を自由に遊ばせながら、あつた。「それも商賣人だよ。」

「父ちゃん、どんなものを商賣にするんだい。」と若いジェリイはぶつきら棒に訊ねた。

「その商品か、」と克蘭チャアは心の中でいろいろ思案した揚句、あつた。「お醫者が使ふやうなものだアね、」

「人間の體ちやなゐのかひ、父ちゃん、」と活潑な少年は訊ねた。

「そんな風なもんだらうよ。」と克蘭チャアはあつた。

「あゝ父ちゃん、おいらも大きくなつたら死體發掘人になりたいなあ！」
 クランチャアは何だか慰められたやうな気がしたが、胡亂げに、又お説教でもするやうに頭を振つた。

「そりや、お前の才能次第だ。才能をのばすやうに氣をつけるよ、そして出来るだけ誰にも話さねえやうにしろ、適るか、適らねえか分りもしねえ商賣のことなんぞ、今から話さねえ方があゝぜ。」
 若いジェリイがこんな風に元氣をつけられて、テムブル・バーの影になつてゐるところに牀几を据ゑやうと、二三ヤード先きを駆けて行つたときに、クランチャアは獨言を言つた。「おい、正直な商賣人のジェリイ、あの兒は、これからお前にとつちや有難い倅になるかもしれねえ、そしてお前の爲めにあの子のお袋の償ひをするかも知れねえぞ！」

十五 編物

ドファアルジュの酒店では、何時もより早く店が始まつてゐた。朝の六時だといふのに血色の悪る連中が、鐵各子のはまつた窓越しに覗いて見ると、中では敷人のお客が酒注榊に蔽ひ被さるやうにしてゐるのが見えた。ドファアルジュは大抵の場合極く薄の葡萄酒を賣つた、がこの頃賣るのは特別

— 一六四 —

に薄いやうに思はれた。そればかりでなく酸っぱい味がするのである。少くとも酸っぱく感じさせるものである(酸っぱいの *sour* といふ語には怒らす、ひねくれさすといふ意がある)。何故ならこれらを飲んだ人々は、妙に陰鬱な氣持になるからであつた。ドファアルジュが搾つた葡萄からは、決して快闊なバツカス(酒の神)の焰が飛び出して來なかつた。かへつて闇でぶすぶすいぶる火がその渣滓の中に隠されてゐた。

ドファアルジュの酒店が朝早くから始まるやうになつて、今日で三日つゞゐてゐる。月曜日に始まつて、今日はもう水曜日になつてゐた。だが早朝から酒を飲む人達よりも、何か考へこんである人達の方が多かつた。といふのは、大勢の人達は酒屋の戸が開く時分になると人の話に聞耳をたてたり、囁き交したり、酒場の中をこそこそ歩き廻つたりしてゐたからである。この人達は自分の魂を救ふ爲めに酒店の勘定臺の上に一片の金を置くことも出来ないであつた。が彼等は、まるで自分達がどの酒樽でも自由にすることが出来るかのやうに、非常にこの場所に興味をもつてゐた。彼等は席から席、隅から隅へと歩き廻つて、もの欲しさうな眼付で、酒のかほりに人の話を嚙み込んでゐた。

いつになく客が満ち溢れてゐるにも拘らず、この酒店の主人公の姿は見えなかつた。だが彼に逢ひたがるものは誰もゐなかつた。この酒店の鬨をまたぐ者なら、彼を探すやうな者は一人もなく、彼のことを尋ねる者も一人もなかつた。使ひへらされた小錢——それらの小錢は、それを投げ出した人間中での小錢達(貧民)と同じ程度に、本來の刻印を磨り減らされ、掻き消されてゐた——の入つてゐる皿の前に、マダム・ドファアルジュがたゞ一人切りで、酒の持ち運びを監督しながら坐つてゐるのを見て、誰も怪しむ者はなかつた程である。

上は王者の宮廷から下は罪人の牢獄まで、場所の上下を問はず諜者が覗かない處はないやうに、この酒店も何人かの諜者に覗かれたが、恐らく、彼等の眼には中途半端な興味とすべての人達の放心情態が映じたに過ぎないであらう。骨牌は下火になつて、ドミノ遊びをしてゐた連中は、何か考へながらドミノ札で塔を築いてゐた。飲んでゐた連中は、こぼれた酒で卓子の上に人の顔を描いてゐた、マ

ダム・ドファルジュまでが小楊子で袖の摸様を突つゝきながらうつとりと遙か遠くの、見えも聞えもしない物を見たり聞いたりしてゐるやうな様をしてゐた。

かふして、サン・タントアヌには、この酩酊情態が晝頃までつゞゐた。丁度眞晝、埃だらけの二人の男が、サン・タントアヌの通りを過ぎ、ぶらぶら揺れてゐる街燈の下を通つてやつて来た。一人はドファルジュで、も一人は青い帽子を冠つた道路人夫であつた。二人は體中埃にまみれ、すつか

一六五

り咽喉を渴かして、酒店に入つて来た。彼等の到着はサン・タントアヌの胸に一種の火を點じたやうなものだつた。火は彼等が町に入つて来るにつれてずんずん擴がつて、家といふ家の窓や戸口に出てる大勢の人々のもつてゐる火焰を掻きたてたり、揺がせたりした、だが彼等について行く者は一人もなかつた。また彼等が酒屋に入つて来たとき、すべての人々の眼が一齊に彼等に向けられはしたが、誰も物を言ふものはなかつた。

「皆さん、今日は！」とドファルジュはあつた。

それは一同の舌をゆるめる合圖だつたといつていゝ、それに釣られて、大勢が一緒に、「今日は！」と答へた。

「いやなほ天氣だね、皆さん！」と頭を振りながらドファルジュはあつた。

これを聞くと、一同はお互に隣りにゐる者の顔を眺めてから眼を落して、黙つて坐つてしまつた。中で一人の男だけが立ち上つて、出て行つた。

「おい、お前。」とドファルジュはマダム・ドファルジュに聲高に呼びかけた。「おれはジャックといふこの深切な道路人夫さんと何リーグか一緒に歩いて来たんだよ、おれはこの人と巴里から一日半ばかり行つたところで、偶然に、出會したんだ。このジャックといふ道路人夫さんはそりやゝ人だよ、お前、あの人に一杯あげてくれ。」

又一人、立ち上つて出て行つた。マダム・ドファルジュはジャックと呼ぶ道路人夫の前に酒を出した。彼は青い帽子を脱いで、一座の人達に挨拶してから、その酒を飲んだ。彼は仕事着の懷ろに、粗末な黒パンを入れて持つてゐた。彼はそれを時々嚙つた、そしてマダム・ドファルジュのある勘定臺の傍で、むしやむしや食つたり飲んだりしながら坐つてゐた。三人目の男が立ち上つて出て行つた。

ドファルジュも一杯飲んで元氣をつけた。——だが彼は別に酒が珍しい人間ではなかつたので、この遠來のお客に與へられた程は飲まなかつた。——そしてこの田舎者が朝飯をすませるまで立つて待つてゐた。彼はこゝにゐる誰の方にも眼をやらなかつた。また今は誰も彼の方を見なかつた。マダム・ドファルジュでさへ、編棒を取り上げて編物をしてゐた。

「飯は濟んだかひ君、」とゝゝ加減なこゝろ彼は訊いた。

「濟みました、有難う。」

「それちやかつちへ来たまへ！君に貸してもゝと話したあの部屋をお目にかけるから。きつと君には持つてこゐの部屋だらうよ。」

店から通りに出、通りから中庭に入り、中庭から急な梯子段を上つて、それを上りきると屋根裡の部屋へ入つた。これこそ以前あの白髪頭の老人が低い腰掛けに身を屈めて

一六六

轆造りにいそがしかつたあの屋根裡部屋であつた。

今、この部屋に白髪の人はいなかつた。その代りに先きほど一人一人酒店を出て行つたあの三人の男達がゐた。この三人と今は遠い處にゐるあの白髪の老人との間には、一寸した關係があつた。といふのは、彼等はかつて、壁の割れ目から老人を覗いたことがあつたからである。

ドファルジュは注意して戸を締め、低聲に話し出した。「ジャックの一、ジャックの二、ジャックの三！この人は、わしが——つまりジャックの四であるこのわしが約束して逢つて貰つた證人だ。この人は諸君に何もかも話すだらう。それぢや、ジャックの五、話して貰はふか！」

道路人夫は手にしてゐる青い帽子で黒い額を拭いて、ゐつた。「何處からお話しなませうか。」

「初めからがゐる、」ドファルジュは尤もらしい答へをした。

「それぢや、皆さん、」と道路人夫は話し始めた、「わしがあの男を見たのは、この夏から丁度一年前のことで、それもあの侯爵の馬車の下に鎖でぶら下つてゐるところでしたよ。さあその様子といつたら何といひませう。わしは道路の仕事を止めかけてゐたときで、お日様は西に沈む、侯爵の馬車はだんだん丘を上つて来る、見るとあの男は鎖につかまつて、ぶら下つてゐるんでさあ——丁度こんな風に。」

こゝで、また道路人夫はあの藝當をすつかりしてみせた。これがまる一ケ年といふもの、彼の村の無くてならない餘興となり、退屈しのぎとなつてゐたことを思へば、この時には、もう結構な餘興となつてゐたに違ひなかつた。

ジャックの一は突然口を挟んで、彼がその男をそれまでに見たことがあつたかどうか訊ねた。

「一度もありませんよ、」道路人夫は元通り體を真直ぐにしてかゝ答へた。

ジャックの三は、それだのに後でどうしてあの男だといふことが分つたかと訊いた。

「背が高いことからです、」と道路人夫は指を鼻にあてながら、やさしく答へた、「その晩、侯爵が、『その男はどんな風であつたか話せ』とひつたときに、わしは『お化のやうに背が高うがした』と答へたんです。」

「そこは君、一寸法師みたいに背が低い男だといふべきところだつたな。」とジャックの二が應じた。

「しかしわしはまだ何も知らなかつたぢやありませんか。それにその時はまだ『あのこと』を仕遂げる前だつたし、あの男はわしに何も打ち明けてくれませんでしたしね。どうです。そんな場合でさへ、わしは證據の申し立てをしないんです！侯鬱は村の小さな用水の傍に立つて、指でわしを差してかういひました。『あの悪者をわしの處へ連れて來ゐ』つてな、本當です、皆さん、わしは何も申し立てた

—一六七—

りなんぞしやしなかつたんです。」

「こゝゝゝあらはあれのいふ通りだよ、ジャック、」とドファルジュは口出しをした男に囁いた。「どんな話して貰はふ！」

「ほんとにさ、」と道路人夫は不思議に堪へない様子でいつた。「あの背高が行方不明になる、お尋ねがつかつたんです——幾月位あつたききましたか。九、十、十一ヶ月かな。」

「何ヶ月でもあゝ、」とドファルジュはあつた。「あいつはうまく隠れてゐたんだが、たうたう運悪く見つかつたんだ、さ、どんどん續けて貰はふ！」

「わしがまた丘の上で仕事をしてゐると、お日様がまた沈みかけてゐる。道具をまとめて、下の村にある小屋に下りようと思つてゐると、——村の方はもう暗くなつてゐたんです。——丁度その時、わしがふと眼を上げると、六人の兵士が丘を登つて來るのが見えました。兵士達のまん中に背の高い男が一人、兩腕を縛られてゐるんです——兩脇に——こんな風に。」

彼は例の大切な帽子の助けを借りて、その男の様子——兩肘を腰のところにしつかりと縛りつけられて、綱は後に固く繕はれてゐる——を眞似してみせた。

「兵士達と囚人の通るのを見ようと思つて積み重ねた石の蔭に立つてゐました（何しろ他に人氣のない道のことだから、とんなものでも面白いんです）。最初、皆が近づいて來たときにや、わしの方からは縛られた囚人一人を取り圍んだ兵士が六人だといふだけしか、見えなかつたんです。夕日の當る端の方が赤々となつてゐる外は、この一團は殆んど眞黒に見えました。それにまた皆の長い影法師が、路の向ふ側の丘の麓の凹みから、その上にかけて、大入道の影法師のやうに映つてゐるのです。また皆が埃まみれになつてゐて、歩くごとに、埃も一緒になつて背後に隨ひて來る。間近になつてみると、その背の高い囚人は何時かの男で、わしの方でも氣がつくし、向ふでも氣がつかました。お、だがあの男はわしと初めて出會つたあの夕方、やはりその同じ場所でやつたやうに、その時、中腹から眞逆様に身を投げられたらさぞ満足だつたでせうに。」

彼は現にその場に臨んでゐるやうに、如何にも巧みにその様を寫し出した。彼がそれに深く感動したといふことは明らかであつた。恐らく彼は、生涯に餘り異常事を見たことがなかつたのであらふ。

「わしは兵士達に、自分がこの背の高い男を見知つてゐる様子を見せなかつた、向ふでもわしを見知つてゐる様子を見せなかつた。わし達は眼色でそれと諜し合つたんです。

『さあ、急げ！』と隊長が村の方を指しながらかふひみました。『奴を早く墓場へ引張つて行け！』奴等はどんだんあの男を連れて行きます。男の兩腕は餘り固く縛られてゐるの

— 一六八 —

で脹れ上つてゐる、木靴は大きくて不恰好だ。それにあの男は跛をひいてゐる、あの男は跛だから、それだけ歩くのが遅くなる、奴等は鐵砲で追ひ立てる——かふ、こんな風にして——」

彼は小銃の臺尻で追ひ立てられる者の様子を眞似してみせた。

「まるで狂人が競走でもするやうに、皆が山を駈け下るときに、あの男は倒れました。奴等はげらげら笑つて又あの男を起すと、その顔からは血が流れて、埃にまみれてゐる。でもあの男はそれに手をやることも出來ないので。そこで皆は又大聲で笑ふ。奴等はあの男を村に連れこむ。村中の人がそれを見に走つて來る。あの男は水車小屋を過ぎて、牢屋に連れて行かれる。村中の人は夜の暗闇の中で、牢屋の門が開いて彼を呑みこむのを見ました。——こんな風に——」

彼は出来るだけ廣く口を開け、それから齒をがつちりと噛み合せて口を閉ぢた、彼が、再び口を開けると折角の効果をなくしてしまふと思つて、唇を閉ぢてゐるのを見て、ドファルジュは彼にかふるつた。

『どんだん話したまへ、ジャック。』

「村中の人は、」と道路人夫は足を爪立て、低い聲で話した、引き上げて、用水の傍でひそひそ話を始めました。村中の人は眠つて、崖の上の牢屋の大錠と鐵格子の中に込められて、生きては二度と出てこられない不幸な男のことを夢に見る。次の朝、わしは道具を肩に、パンのかけらを頬ばりながら仕事に行く途中、牢屋の方へ廻つて見ました。すると、あの牢の高い鐵格子の蔭から、昨夜の

まゝの埃にまみれ、血だらけになつてゐるあの男が、外を見下してゐるのが見えました。あの男は手が自由にならないので、手真似をすることも出来ない。わしも呼びかけることはしない。あの男はまるで死人のやうにわしを見てゐる。」

ドファルジュと三人の男達は暗澹とした面持で互ひに目を見交した。彼等の様子は、この田舎者の話を熱心に聞き入つてゐるとき、陰鬱で、怒りを抑へてゐるやうで、また復讐の恨みに燃えてゐるやうであつた。その態度は、潜やかではあるが、又或る力を示してゐた。その有様は丁度、粗末な法廷のやうであつた。ジャックの二と二とは、古い藁薄團の寢臺に腰かけて、めいめい頬杖をついて、道路人夫の上につきつと眼をそゝゐてゐた。彼等の背後に片膝たてゝ、口や鼻のあたりのびくびくした神経の上に落着きのない手を絶えずやつてゐた、ジャックの三も、ぢつと話に聞き入つてゐた。ドファルジュは彼等と話手の中間に立つて、——彼は話手を窓の光線のあたる處に置いた——一方から一方へと交る交る眼を配つてゐた。

「どんどん續けてくれ、ジャック。」とドファルジュはゐつた。

—一六九—

「あの男は幾日かの間、牢屋の中に入れられてゐました。村の人は怖いので、そつとあの男を見に行きます。それも遠くの方から崖の上の牢屋を見上げてゐるのです。夕方になつて、一日の仕事が済み、皆、用水の處へ集つて、徒話をするときには、皆の顔が牢屋に向けられる。以前には問屋場の方へ向けられたものだが、今は牢屋の方へばかり向けられる。皆が用水のところで囁いてゐるのを聞くと、あの男は死刑を宣告されたが、執行されることはあるまいといふ。あの男は子供に死なれて怒りのあまり氣が狂つたのだといふことを述べた歎願書が、幾通も巴里へ出され、そのうちの一通は親しく王様に差し出されたといふ。わしやア自分ぢや何も知らないがね。これはありさうなこつた。多分さうかも知れないし、さうでないかも知れませぬよ。」

「ぢや、ジャック、よく聴くがひ。」と同じ名の第一が嚴かな調子でかふ口を入れた。「王様とお后様に歎願書が出されたわけなんだ、こゝにゐる者は皆——君だけは別だが——王様がお后様とお揃ひで大通りをお通りになる馬車の中で、それをお取上げになつたのを見たんだ。請願書を手に、生命賭けでお馬車の前に飛び出して行つたのは、現に君の前にあるこのドファルジュなんだ。」

「ジャック、もう一度よく聴くがひ。」と片膝をついてゐる第三のジャックがかふゐつた。彼の指は絶えず、何かに飢ゑてゐるやうに、——食ひものや飲みものにはなかつたが、ひどく物欲しさうに（血に渴してゐる暗示）、口邊にびくびくしてゐる神経の上をすべり動いてゐた。「近衛兵の奴は騎馬のも歩行のも、この請願人を取り巻いて、散々に打ちのめしたんだ。分るかね。」

「えゝ、分ります。」

「ぢや先きを話すがひ。」とドファルジュがひつた。

「ところが、又二方ぢや用水のところをかふ囁いてゐる連中もありました。」と例の田舎者は話した。つづけた。「あの男がわれはれの村に連れて來られたのは、直ぐに死刑にされる爲めだ、だからあの男はきつと殺されるに違ひない、といふのです。中には又、あの男は侯爵を殺したので、侯爵は借地人——小作人——何でも構はないが——の父親だから、親殺しとして、刑を喰ふだらうとさへいふ者もある。また或る年寄りが用水のところでは話すには、あの男が短刀を握つた右手は、生きながら焼き切られるだらう。腕や胸や、兩脚は、抉ぐられて、その中に煮えたつた油、熔かした鉛、熱い樹脂、蠟、硫黄などが流しこまれるだらう。終ひには四頭の荒馬で手足を引き裂かれるだらうといふんです。こ

の年寄りの話では、これは、實際、前のルイ十五世様のお生命を奪らうとかゝつた或る囚人に行はれたことだ

— 一七〇 —

さうです。が、この年寄りが嘘をついてゐるのかどうかは私には分りません。わしは物識りぢやないんだから。」

「ぢや、ジャック、もう一度聴くがひ々！」といつても手を動かして、何か物欲しさうな風をしてゐる前の男がかふあつた。「その囚人の名はダミアン（ルイ十五世を傷つけた狂信者）といふんだ。處刑はこの巴里の町中で、眞晝間に行はれたんだ。夥しい見物の中で何よりも眼についたのは、身分のある立派な貴婦人の一群だつた、その連中は最後まで熱心に見てゐた——ジャック、最後までだよ、それは日暮れまでかゝつた、囚人はその時、二本の足と片手とを失つてゐたが、まだ生きてゐたのだ！さうだ、それは・・・時に、君はいくつになるんだね、」

「二十五です。」六十位ゐに見える道路人夫がひつた。

「それは君が十を越したころだ、君だつて見られたんだがな。」

「もうあゝ！」とドファルジュはいらいらしげな様子で無遠慮にゐつた。「悪魔萬歳だ！續けて話すがひ々。」

「宜しうございます。かふして、或る者はあゝだといふし他の者はかふだといふ。用水さへもそれに調子を合せて落ちるやうに見えました。やがて或る日曜日の夜、村中が眠つてゐるときに、數人の兵士が牢屋から廻り路をして降りて來た。奴等の鐵砲が村の狭い通りの敷石の上で鳴り、人夫が土を掘る、人夫はハンマアを振ふ、兵士たちは笑つて、歌ふ。朝になると、用水の傍には四十フィートの高さの絞首臺が建てられて、水はすつかり汚れてゐました。」

道路人夫は部屋の低い天井を眺めて、——いやむしろ天井越しに、眼をやつて——虚空の何處かに絞首臺が見えるものゝやうに、指差した。

「誰も仕事をするものではありません。誰も彼も其處へ集つて來る。連れ出す者がないので、牛も他のものと一緒にそこにゐる。丁度、お晝頃に、太鼓の響が聞えて、兵士達は夜のうちに牢屋に入つてゐたのか、あの男は澤山の兵士達にとりかこまれて出て來ました。前と同じやうに縛られて、その上口には猿轡がはめてあります。——丈夫な絲でしつかり結へつけてあるので、まるであの男が笑つてゐるやうに見えました。」道路人夫は自分の顔に兩方の指で、口の兩端から耳にかけて皺を寄せて見せた。「絞首臺の上には、尖先端を空に向けてあの男の小刀がくつゝけてありました。あの男は四十フィートの高いところで絞罪にされたんです、——そこにぶら下げられて、水を汚したんです。」

彼等は互ひに顔を見合せて、道路人夫はその時の光景を思ひ出して、新たに汗の湧き出した顔を、いつもするやうにその青の帽子で拭いた。

「ぞつとする程恐ろしいんです。女子供はどうして水が汲

— 一七一 —

めませう！その影のさす處で夕方のお喋りの出來る者は一人もありません。絞首臺の眞下なんか、尙更、よりつく者はありません。月曜の夕方、夕日が沈むころ、わしは村を出て、山の上から後を振りかへつてみると、その影が教會を越え、水車小屋を越え、牢屋を越え——大地をさへ越え、その上に

かゝつてゐる空まで突き抜けてゐるやうに見えました！」

例の物欲しきうな男は他の三人を見やつて、頻りに指を噛んだ、その指は彼が内心に抱いてゐるあの一念で顫へた。

「皆さん、それだけです。わしは日の暮れ方に出かけました（さうするやうに注意されてゐたんです）。その夜中と翌日正午頃まで歩きつゞけて、この方と會ひました。これも出會はなくちやならんと注意されてゐたんです。それからこの方と一緒に、昨日の午後から昨夜一晚を馬に乗ったり、歩いたりして、こゝまでやつて來ました。で、かうして皆さんにお眼にかゝれたんです。」

陰鬱な沈黙の後でジャックの一はゐつた。「よろしい、君は忠實にやつてくれたし、話もしてくれだ。どうか部屋の外で暫く待つてゐてもらひたひ。」

「ようございますとも。」と道路人夫はゐつた。そこでドファルジュは彼を梯子段の上のところへ連れて行つて、そこに彼を坐らせて置いて、歸つて來た。

三人は立ち上つてゐた。ドファルジュが屋根裡部屋へ戻つて來ると、一同は顔を寄せた。

「ジャック、君はどう思ふかね。」とその一は訊ねた。「記録して置くかね。」

「死刑を宣告されたものと記録して置かう。」とドファルジュが答へた。

「やあ、素敵だ！」例の物欲しげな男が哽聲でかふゐつた。

「館も一族もか？」とその一が訊ねた。

「館も一族もだ、」とドファルジュはゐつた。「皆殺しだ。」

例の飢ゑてゐる男は有頂天に聲を嗶らして「素敵だ！」と繰り返しながら、また別の指を噛み始めた。

「しかし大丈夫かひ。」ジャックの二がドファルジュにかふ訊いた。「われはれの記録の仕方から何か面倒が起らないだらうかね。われはれより外にあの記録を読み解く者がいないから、その點は、大丈夫は大丈夫だが、しかしわれはれも、何時でもそれを迷はずに読みとけるかどうか、いや、あの女にとけるかどうかといふのさ。」

「ジャック、」とドファルジュは反り身になつて答へた。「わしの家内は諳で記憶しなければならぬやうなことがあるれば、一言だつて——一字だつて忘れるやうなことはないんだよ。あれは編針で、あれ自身の暗號を編物に編みこんであるんだから、あれにとつては何時でも太陽を見るやうに何

—一七二—

でも分明なんだ。ドファルジュの家内を信用してくれ、マダム・ドファルジュの編物の記録から、罪人の名や、罪惡の一字でも掻き消すのは、この世で一番臆病の腰抜けに自殺させようとするよりもよつぽど難かしいんだ。」

信賴と賞讃の囁きが起つた、例の飢ゑてゐる男はかふきいた。「あの田舎者は直ぐ送り返すのかね。わしはそれがいゝと思ふよ。あいつはあまり正直すぎる、一寸危険ぢやないかね。」

「彼奴は何も知らないんだ、」とドファルジュはゐつた。「知つてるのは、このことを口に出すと、同じ高さの絞首臺に直ぐあげられてしまふだらうといふことだけだ。あいつはわしが引受けるよ。わしのところに置いてつて貰はふ。わしはあいつを世話してやつて、その内に出發させてやる。あいつは立派な世界つてのを見たがつてゐるんだ。——王様とか貴族方とかいふものをな。日曜日には一つそんなものを見せてやらうぜ。」

「何だつて？」と例の飢ゑてゐる男は眼を見張つて、かふ叫んだ。「あいつが王家だとか、貴族共

だとかを見たがつてゐるのは、ゐることだらうか。」

「おい、ジャック」とドファアルジュはゐつた。「猫に牛乳を欲しがらせようつてつもりなら、先づ用心深く牛乳を見せて置くがひゝんだ。犬にいつか生き餌をとらせようつてつもりなら、先づ用心深く生き餌を見せて置くがひゝんだ。」

ほかに話はなかつた、道路人夫はもう梯子段の一番上で、居眠りをしてゐたので、藁薄團の寢臺で少し休むやうにすゝめた、彼はすゝめられるまでもなく、すぐぐつすと眠つてしまつた。

かふした田舎の奴隷の限には、ドファアルジュの酒店よりもひどい住居が巴里には容易に見つけられた。ドファアルジュの妻君が、不思議に、怖ろしく思はれ、絶えず彼女にとり愚かれてゐる氣がするごとを除けば、——彼の生活は、非常に目新しい、愉快なものであつた。マダム。ドファアルジュは一日中勘定臺に坐つて、わざと彼のことは少しも氣にとめず、彼が其處にゐるといふことが、表面には見えない或ることと關係があるのだといふ風を、つとめて見せまいとしてゐたので、彼の眼がマダムのの上にとまる度に、彼の足は木靴の中でぶるぶる類へた。何故なら、彼はこの妻君が次にはどんな態度をとるか知れたものではないといふ懸念を、内心に抱いてゐたからであつた。若し彼女が、あのこゝてにて飾つた頭の中で、おれが人殺しをして、その人間の皮を剥ぐところを實際見たやうな態度をとらうと考へたとしたら、この女ならきつその芝居が濟むまで、たしかに、それを押し通すことが出来るだらうと思つたからであつた。

日曜日が來ても、道路人夫は、主人とヴェルサイユに行

— 一七三 —

くの妻君がくつゝゐて行くと思つて、あまり喜びはしなかつた（勿論口では、嬉しいとひつたものゝ）。それに困つたことには、そこへ行く途中、乗合馬車に乗りながらも妻君がぐゝと編物をしてゐたことであつた、更に輿を殺いだことは、その日の午後王と後の齒簿を見ようとして群集が待ちかけてゐる中で、妻君がまだ手に編物を持つてゐることだつた、

「なかなかお精が出ますね、奥さん。」と彼女の近くにある一人の男がかふゐつた。

「えゝ」とマダム・ドファアルジュはゐつた。「仕事がどつさりございましてね。」

「何をおこさへですね、奥さん。」

「いろいろなものですよ。」

「例へば。」

「例へば、」とマダム・ドファアルジュは落ちつき拂つて答へた。「屍衣のやうなものですよ。」

この男は素早く少しわきの方へ遠のいた。道路人夫は、例の青い帽子が何だか餘りきつちりして、頭が壓へつけられるやうに感じたので、帽子を脱いで自分を煽いだ。彼の元氣を恢復させる爲めには王と后が必要だつたとしても、仕合せと彼はその良薬を手近に持つことが出来た。間もなく、幅つたひお顔の王と美しい御纏緞の后とが、黄金色まばゆい馬車でやつて來た。輝きわたるブルス・アイの廷臣達（ブルス・アイは牡牛の眼にて、角燈と明り取りの圓窓との兩義がある。ヴェルサイユ宮殿の一と間に、只一箇の圓窓から光線を取り入れた部屋があつて、「ブルス・アイの間」と呼ばれた、この部屋に出入りしてゐる貴族のこと、にこやかな貴婦人や、立派な貴族達のきらびやかな一群が待つてゐた。寶石、絹衣、白粉、光彩——彼等の優雅ではあるが、近づき難い容貌、立派ではあるが人を見下した顔付などを浴びせられて、道路人夫は、暫らく酔つたやうな氣持になつて、その頃何處の隅にもうつついてゐたジャック黨のことなど忘れて終つたとひつた風で、思はず國王萬歲、お后萬歲

何でも誰でもみな萬歳！と叫んだ。やがてそこには花園や、禁苑や、高臺や、噴水や、緑色の土堤やがあつた。更にもう一度、王と后、ブルス・アイ、貴族と貴婦人、そして何でも誰でも萬歳が叫ばれた。たうたう彼は感極つて泣き出した。この光景は三時間ばかりも續いたが、彼は皆と一緒に叫んだり、泣いたり、激したりした。その間中、ドファルジュは、彼がひは一寸の間その崇拜の的になつたものに飛びかゝつて、それをずたずたに引き裂かうとするのを引きとめてゐるやうに、彼の襟頸をしっかりと捉まへてゐた。

「およう、出来した！出来した！」漸く發作が鎮まつたときに、ドファルジュは如何にも親分らしく、彼の背中を一つどやしてかふゐつた、「おゝ子だなあ！」

道路人夫は、今は昂奮がさめかけてゐた。先刻、夢中に

一七四

なつた時、何か間違つたことをゐはなかつたかしらと不安になつたが、そんなことはなかつた。

「君のやうなのがわれはれに必要な人なんだ。」ドファルジュが彼の耳に口を寄せてゐつた。「君はあの馬鹿者どもに、あんなことが何時までも續くものだと思はせよ。馬鹿者どもはますますつけ上る。するとそれだけに、あんなことは早くお終ひになるんだ。」

「へゐ！」道路人夫は考へ深さうに叫んだ、「なるほどね。」

「あの馬鹿者どもは何も知らないんだ。奴等は君達の呼吸の根を輕蔑してね、奴共の馬か犬一匹の呼吸を止めるくらゐなら、いつそ君や君のやうな人間百人の呼吸を永久に止めてしまひたひとさへ思つてゐるんだが、そのくせあいつ等は、君等の呼吸があいつ等に表面に語つてやるものだけしか知らないんだ。だからもう少しの間、あいつ等を欺して置くがひゝ、あんな奴等は、いくら欺したつて足ることはないんだからな。」

マダム・ドファルジュはこの寄食者の方を鷹揚に、その通りだと頷いてみせた。

「お前さんのやうな人は、」彼女はかふゐつた、「仰山な行列やお祭り騒ぎさへすれば、どんなものだつて囁いたり、涙を流したりするんだらう。え、さうぢやないの。」

「本當だ、お主婦さん、さう思ひますよ。暫くの間はね。」

「若しお前さんに澤山人形を見せて、その人形をきれぎれに壊したり汚したりすると、お前さんの利益になるんだと唆しかけたら、お前さんはきつと一番きれいな、一番立派な人形を選び出すだらう。えーさうぢやないの？」

「本當だ、お主婦さん。」

「さうだよ。又若しお前さんに、飛べない鳥を澤山見せて、その羽根を抜くとお前さんの利益になると唆しかけたら、お前さんは一番綺麗な羽根のある鳥に手をかけるだらう、さうぢやないの？」

「本當だ、お主婦さん。」

「お前さんは今日その人形も鳥も見たんだよ。」マダム・ドファルジュは先ほどまで彼等が立つてゐた方に手を振つて見せて、かふゐつた。「さあ！これでもうを歸り！」

十六、編物のつゞき

マダム・ドファルジュとその夫とは、仲よくサン・タントアヌの住居に歸つて來た。一方、青帽子を冠つた小さなごみのやうな男は、夜の闇のうちに埃を浴びながら、今は墓の中にある侯爵閣下のお

館か樹々の囁きに耳傾けてゐる方角を指さして、竝木路つたひに、幾哩かの道を物憂げにのろろと歩いてゐた。あの石の顔も、樹々や噴水の囁きに聴き入る餘裕が十分出来たので、村の案山子どもが食膳の足

—一七五—

しの蔬菜や薪の補ひの枯れ枝を探しにこの大きな石造の中庭や、露臺の階段が見える邊りまで彷徨ひこんだときには、石の顔付が全く變つたといふことを、彼等の飢ゑた空想にしつかりと刻みつけた程である。かふいふ噂がまだ村に残つてゐた、——勿論、村の人達と同様に、微かに辛うじて生きのびてゐるに過ぎないやうな噂であつたが——あの短刀が急所を突いたときには石の顔が誇らしげな表情から怒りと苦痛の表情に變つた。又例の男が、用水の上四十五フィートの高さに吊り下げられた時には、石の顔は再び變つて、恨みを晴らしたといふ残忍な顔付になつた。今後これが永久に變らぬ表情になるだらう、といふのであつた、暗殺が行はれた寢間の大窓の上にある石の顔の鼻の上に、見事な壓痕が二ヶ所認められた、今では誰も氣がついてゐるが、これまで誰も見たことのないものであつた。極く稀に襤褸にくるまつた百姓連が二三人、化石した侯爵閣下を一瞥しようと大勢の中から抜け出して來ることもあるが、骨と皮ばかりの指が一分間とその黙痕を指さないうちに、彼等はあわて、苦と草の葉の間に逃げこむのであつた、——丁度、こゝに生活を見出すことの出來た、彼等より幸福な野兔のやうに。

館も穿屋も、石の顔も宙にぶら下つた姿も、石の牀の上の赤い汚點も、村の用水の澄んだ水も——何千エーカーといふ土地も——この二州全體も——佛蘭西の全領土も——すべて微かな髪一筋ほどの地平の線に縮められて、夜の大空の下に横つてゐた。また、偉大なものも卑劣なものも併せ含んだ一つの世界全體が、同じく、一つのまた、く星の中に横つてゐるのである。取るに足らぬ人間の智識でさへ光線を分解し、その組織の有様を分析することが出来るのだから、より崇高な智慧（神々）ならば、われはれの地球が微かに輝くのを見て、その上に棲息するすべての理性ある生物の、あらゆる思想と行動、あらゆる惡徳と徳行を讀み取ることが出来るかも知れない。

ドファルジュ夫婦は、星明りの下を乗合馬車でがたと巴里の市門までやつて來た、彼等の旅行は自然その方に向ふのであつた。

馬車は市門の番所で何時ものやうに止められた。何時もの角燈が、何時もの吟味と訊問をする爲めに、ちらちらとやつて來た。ドファルジュは馬車を降りた、彼はそこにゐる兵士の二人と一人の警吏とは知り合ひであつた。殊に後者とは懇意にしてゐたので、彼等は親しげに抱き合つた。

サン・タントアヌがその薄暗い翼の中に、再びドファルジュ夫婦を押しつゝんだ時——二人がその神聖な場所近くで馬車を降りて、その神聖なる町筋の眞黒な泥土と汚物の中を拾ふやうに歩いて行つたときに、マダム・ドファルジュは夫

—一七六—

にかふ話しかけた——

「ちよひと、お前さん、あの警吏のジャックはお前さんに何を言つたの？」

「今晚のはほんの一寸だつたが、あの男の知つてゐるだけのことは皆話したよ。わし達の町内にもう一人別の諜者が任命されたんだつて。あの男はさういつてゐたが、恐らくもつと澤山かも知れない

よ。とにかくあの男の知ってるのは一人だけなんだ。」

「さう！」とマダム・ドファルジュは冷然とした事務的な態度で眉を上げながらゐた。「その男は記録して置かなくちやあね。何んて名前なんですか。」

「英吉利人だ。」

「尙るゝわ。名前は？」

「バルサーつてんだ。」ドファルジュはバーサッドを佛蘭西風にかふ發音して聞かせた。然も彼は注意してそれを精確に覚えて置いたので、彼女に少しの間遠ひもなくその文字の綴りを教へた。

「バルサー」と妻君はかふ繰り返した。「さう。洗禮名は？」

「ジョン。」

「ジョン・バルサー、」妻君は一度咳いてみたあとで、かふ繰り返した、「さう！人相はどうなの？」

「年配凡そ四十前後、身長約五呎九吋、頭髮黒く、肌色淺黒い方。どつちかと云へば美しい顔立ち、眼黒く、頬肉痩せて、面長、顔色蒼黒、鼻は鷲鼻、左の頬の方へ妙に傾いてゐるので、眞直ぐではない。それで表情も凄い所あり、といふわけだね。」

「おやまあ、立派な人相書きだこと。」妻君は笑ひながらいつた、「明日きつとその男を記録にとめてやりませうよ。」

彼等は酒店に歸つた、店は閉つてゐた（もう眞夜中だったので）。マダム・ドファルジュは早速帳場に坐りこんで、留守の間に入つた小錢を勘定し、品物を數へ、帳面の記入を調べ、自分でも別に書き入れ、その他あらゆる方法で雇人を調べて、やがて寢間に追ひやつた。それから彼女は再び錢皿の中味を手巾の中に入れて、結目を澤山鎖のやうにつくる、かうして夜の間安全にしようといふのである。この間ドファルジュは煙草を口に咥えたまゝ、さも満足したやうに感心しながら、だが決して干渉がましむことはせずに、あちこち歩いてゐた。こんな風に、彼は商賣や家事のことは一切彼女に任せきりにして、自分は生涯あちこちと歩きまはつてゐた。

その夜は蒸し暑かつた、店はしつかり閉め切つてある上、その周圍がひどく不潔な爲めに、むつと悪臭がしてゐた。ドファルジュの嗅覺は、決してさう鋭敏ではなかつたが、貯藏してある葡萄酒がいつもより激しく匂つて來た。貯藏の

一七七一

ラム酒、ブランデー、茴香酒などの臭ひも激しくした。彼は喫み終へた煙管を下に置くと、この交り合つた様々の臭ひをふつと吹き拂つた。

「お前さん、疲れたの、」妻君は錢を結びながら、ちらと彼の顔を見上げてゐた。「いつもの臭ひがするだけだわ。」

「ちつと疲れたやうだ。」夫もそれを認めた。

「それに少し元氣もなさうね。」と妻君はゐつた。彼女は、勘定に一心になつてゐたにも拘らず、素早く彼の方にも、視線を向けてゐた。「まあ、男つてものは、男つてものは——」

「だつてお前！」とドファルジュはゐひかけた。

「だつてお前さん！」と妻君はしつかりと頷きながら、同じ言葉を繰り返した、「だつてお前さん！今晚は何だか元氣がなさうよ！」

「うむ、さうか、」とドファルジュは、自分の胸から無理に何か考へを絞り出したとでもいふ風に

ゐつた。「實際長くかゝるからな。」(革命のこと)

「長くかゝるわねえ、」と妻君も繰り返した。「だけど、いつだつて長くかゝるもんだわ、敵を討つたり怨みを返したりするには、長い時間がかゝるもんだわ。それがお定りよ。」

「稻妻が人間をやつゝけるにや長くはかゝらないぜ。」とド・ファルジュがひつた。

「でも稻妻を作つて貯へとくには、どの位の長くかゝるんでせう。」妻君は落ちつき拂つてかふ訊ねた。「お前さん、それを知つてる？」

ド・ファルジュはそれも尤もだといふやうに、深く感じたらしい様子で頭を擡げた。

「地震が町を一呑みにするには、長い時間はかゝらないのよ。」と妻君はゐつた。「ねえ！けれども、地震が起る迄にはどの位の目数がかゝるものでせう？お前さん。」

「そりや長いもんだらう。」とド・ファルジュは答へた。

「でも、一旦用意が出来て、起つたら最後、その前にあるものは、どんなものでも壊してしまふんですからね。それまでの間は、目にも見えず、耳にも聞えないけれど、いつも準備をしてゐるのですよ。さう思ふと慰めになるでせう。倦きちや駄目よ。」

彼女はまるで敵の咽喉頸でも締めるやうに、目を輝かせながら結び目を一つきゆつと結んだ。

「ね、お前さん。」妻君は力をつける爲めに右の手を伸してゐつた。「途中で長い時間がかゝつたつて、それはもう乗り出してゐるのよ、やつて来てゐるんですよ。ね、決して後戻りもしなければ、立ち止りもしないんですよ。ね、いつだつて進む一方よ。あたりを見廻して、わたし達の知つてゐる世界中の人達の生活を考へて御覽なさいよ。わたし達

—一七八—

の知つてゐる世界中の人の顔を考へて御覽なさいよ。あの百姓達が燃やしてゐる怒りと不安とがだんだんに慥かなものになつて来ることを考へて御覽なさいよ。こんなことが長く續くでせうか、え、そんな元氣のないことでは、嗤はれるわ。」

「お前はえらい。」ド・ファルジュは教義問答師の前に立つた柔順な注意深い生徒のやうに、頭を少し垂れて、背中に手を組み合せたまゝ彼女の前に立つて答へた。「わたしはこんなことをかれこれと疑ふんぢやない。だがこれまで、長くかゝつたことは随分長くかゝつた。だからどうやら——そのどうやらがお前にはよく分つてゐるんだらうが、——わたしが生きてゐる間には、やつて來ないかも知れない氣がするんだ。」

「さう！それで？」と妻君はまた一人敵を締め殺してもするかのやうに、結目を一つ作りながら詰問した。

「さうさね！」とド・ファルジュは半ば愚癡つぽく、半ば辯解するやうに、肩をすくめていつた。「わたし達は勝利を見ることは出來まひ、よ。」

「だけど、わたし達はそれを助けてやつた事にはなるでせう。」と妻君は伸した手を強く動かして應じた。「わたし達のことには、一つとして徒なことなんかありやしないわ。わたし達が勝利を見るといふことを、わたしは心から信じてゐるわ。が、たとひさうでないにしても、また慥かにさうでないことがわたしに分つてゐたにしても、わたし壓制者の貴族の首を見せて貰ひたいわ。さうすればわたし——」

こゝで妻君は齒をぎゆつと喰ひしばつて、實に恐ろしい結目を一つ作つた。

「お待ち！」とド・ファルジュは自分が臆病者だと責められでもしたやうに、少し顔を赧くしながら

叫んだ。「わしだつてどんなことでもする覚悟はあるんだ。」

「さう！でも時々、元氣をつける爲めに犠牲のことや、勝味のことを考へてみなくちやならないのが、お前さんの弱身よ。そんなことをしないで、元氣をお出しなさいよ。いざといふ時が來たら、虎のやうに、悪魔のやうになつてあばれ廻らうぢやないの。だけどその時が來るまでは虎も悪魔も、鎖に繋いでおくんだわ。——人に見せないで！でも、いつも用意だけはして置いて——」

妻君はこの一場の忠告の結論に力を添へるつもりで、例の錢の鎖で、小さな勘定臺をさながら脳味噌でも叩き出さんばかりに、力一杯、打ち叩いた。そして、澄した顔でその重い手巾包みを小脇にかきこんで、もう寝る時間だと注意した。

翌日の正午ごろ、この素晴らしい女丈夫は、酒店の何時

— 一七九 —

もの場所に陣取つて、せつせと編針を動かしてゐた。薔薇の花が一本、傍に置いてある。そして、時々その花の方を見やつたが、その様子は何かに氣を奪はれてゐるやうなやつもの様子と同じだつた。店に數人の客があつて、飲んでゐる者や、飲まない者や、立つてゐる者や、坐つてゐるものなどが、あちこちに散らばつてゐた。この日は非常に暑かつた。妻君の近くに置いてあるねばねばしたものゝついた小さなコップの底には、その中まで冒險的な搜索をやつた蠅が、どれにもこれにも山のやうに肅なり合つて死んでゐる。この屍骸も、散歩氣分で、そこらを飛び廻つてゐるほかの蠅には、何の痛痒も與へない、あくまで涼しい顔をして（まるで自分達が象か何か、餘程かけ離れたものだといふ風に）、それを眺めてゐるが、やがて同じ運命に出會ふのである。奇妙な話だが、蠅といふものは何といふ無考へなものであらふ！——恐らく、この輝く夏の日、彼等貴族も、宮廷でこれと同様な無考へな生活をしてゐることだらう。

誰か一人、戸口から入つて來て、マダム・ドファルジュに影法師を投げた。彼女はそれを新來の客だと感じた。彼女は編物を下に置いて、髪披ひに薔薇の花をピンでとめてから、今入つて來た人の方を見た。

これは不思議な有様であつた。といふのは、マダム・ドファルジュが薔薇の花を手にとるや否や、今までの客はびたりと話を止めて、だんだん酒店から出て行つてしまつた。

「今日は、お主婦さん。」と新來の客はあつた。

「今日は。」

彼女は聲高にさう答へて編針を取り上げながら、ひとり腹の内と言ひ足した。「おや、あらつしやゐ、四十前後の年配さん、五フイート九インチの身長さん、黒い髪の毛さん、どつちかといふと、立派な顔立ちさん、淺黒い肌色さん、黒い眼色さん、瘦せて面長で、蒼黒い顔色さん、左り曲りで、凄味を添へる鷺鼻さん！さあ、さあ、みんなおそろひであらつしやいまし！」

「お主婦さん、どうかコニヤックを小さいので一杯と、冷たい新しい水を少し下さい。」

マダムは鄭重な物腰でそれに應じた。

「お、主婦さん、こいつは素敵なコニヤックですわね！」

この酒がこんなに譽められたことは初めてだつた。マダム・ドファルジュはこの酒の素姓を非常によく知つてゐたので、そんなことは本當とは思はなかつた。それでも彼女は、コニヤックが聞いたら有難がつて、お禮をいふだらうと答へて、又編物をとり上げた、客は暫くの間ぢつと彼女の指の動きを見てゐたが、折をみて萬遍なく店の様子を觀察した。

「編物がひどくお上手ですね、お主婦さん。」
 「慣れてゐるものですから。」

— 一八〇 —

「それに美しい模様ですね！」
 「ほんとにさうを思ひですか。」と妻君は微笑を浮べて彼を見ながらゐつた。
 「本當ですとも、失禮ですがそれは何になさるんですね。」
 「ほんの氣晴し。」と妻君は指先きだけは巧みに動かしながら、まだ微笑を浮べたまゝ彼の方を見てゐる。

「何かの役に立たないんですか。」

「時によりましてはね。いつか役に立たせるかも知れません。若しかね——巧くひきましたら・・・。」と息ついて妻君はきつとしたうちにも嬌態をみせながら、點頭ゐて、かふゐつた。「何かの役に立てゝお自にかけますわ！」

それは、注意すべきことであつた、だがサン・タントアヌの趣味は、マダム・ドファルジュの頭被ひにさした薔薇とは明らかに反對らしい。といふのは、二人の客が別々に入つて来て、何氣なく酒を注文しようとしたが、この珍しいものを見ると、たゞろいで、そこにゐもしない友達でも探すやうなふりをして早速出て行つてしまつた。それにこの、客が入つて來た時にゐた客も、今は一人も残つてゐない。先きほどから彼等はみなこそこそと出て行つてしまつた。諜者は熱心に見張つてはゐたけれども、まだどんな様子も嗅ぎ出すことは出来ない。貧乏に責められ、何の目的もなく、行き當りばつたり時間に時間をつぶしてゐるといふやうな彼等の様子は、如何にも自然で、少しも詮議立てするところはなかつた。

「ジョンさん。」指先は編んでゐるが、心の中では仕事もやめて彼女は考へる。眼はやはりこの未知の客を見つめてゐる。「ゆつくりなさいよ、さうすればお前さんが歸らないうちに、わたし『バルサー』を編みこんでしまふから。」

「旦那がおありですね、お主婦さん。」

「ありますよ。」

「お子さんは。」

「ありませんよ。」

「お商賣はよくないやうですね。」

「ずるぶん不景氣なんです。こゝらの人達は皆ひどく貧乏なものですから。」

「むう、不仕合せな、氣の毒な人達だ！實際ひどく虐たげられてゐますからね、——お主婦さんの言ふ通りだ。」

「いへ、旦那の仰しやる通りですよ。」と妻君は彼の言葉を訂正してかゝ遣り返した。そして彼の名前の中に何か餘分なものを巧みに編みこんだが、それは彼にとつていゝ兆ではなかつた。

「御免なさい、いや申したのは慥かにわしだが、あなたも自然さう考へておいでだと思ひますよ。勿論でせう。」

「わたしが考へてゐるんですつて？」と妻君は聲を高めて

— 一八一 —

返辭した。「わたしと主人は考へ事なんかしなくても、この酒店をやつて行くだけで、することがあり餘つてゐるんですよ。わたし共が考へてゐることゝいへば、どうして暮して行くかといふことが精一杯ですよ。他人様のことで頭を苦しめなくとも、朝から晩まで、もうそれだけで十分考へ事があるんです、わたしが他人様のことを考へるんですつて？そんなことは、とても、とても。」

目に觸れるもの、何かの材料になるものなら、どんな話らないものでも拾ひ上げるつもりで来た謀者は、見事に一本參つたが、そんな色は決してその凄顔に現はさない。卻つて徒話で御機嫌をとるやうな様子をして、マダム・ドファアルジュの小さな勘定臺に片肘をもたせ、時々コニヤックを啜りながら立つてゐた。

「お主婦さん、瓦斯・パールの死刑は氣の毒でしたね。あゝ瓦斯・パールは可哀想に！」と深い同情の溜息をしてみせる。

「何んですつて！」と妻君は冷淡さうに、軽くかふ返辭する。「あんな目的で短刀なんか振りまはす者は、それだけの報いを受けるのが當りまへでせうよ。あの人は自分の贅澤三昧の代價がどんなものだかつてことは、前々からよく知つてゐたんですよ、ですから綺麗にその代價を拂つたんですわ。」

「あの、何でせうね、」謀者は人に信用させるやうに、その猫撫聲を更にひそめて、彼の姪惡な顔のあらゆる筋肉にいかにも腹立たしさうな革命感構といふものを現はしてみせながら、「何でせうね、あの氣の毒な男に對して、きつと、この近所の同情や憤概は大變なものでせうね、こりやこの場限りの話ですが。」

「さうですかね。」妻君はぼかんとして、訊きかへした。

「さうぢやないんですか。」

「主人が來ましたよ。」とマダム・ドファアルジュがひつた。

酒店の主人が戸口に入つて來ると謀者は帽子に手をやり、愛嬌のある微笑を浮べながら、彼に挨拶した。「今日はジャック。」

ドファアルジュははつとして立ち止り、彼をぢつと見つめた。「今日は、ジャック。」と謀者は繰り返した。だが、ドファアルジュに見つめられてゐるので、大して馴々しさうにも出來ず、また容易に微笑を見せられさうにもなかつた。

「旦那は思ひ違ひをしておいでさすね。」と酒店の主人は答へた。「あなたは人違ひをしてゐらつしやぬますね。わしの名前はさうじやありません。わしはエルネスト・ドファアルジュといひます。」

「ま、何でもあゝですよ。」と謀者は軽くそらしたが、裡をかゝれた氣味が見えた。「今日は。」

「今日は。」とドファアルジュは無愛想にかふ答へた。

— 一八二 —

「丁度、あんたが入つて來たときはお主婦さんと面白いお喋りをしてゐたところでしてね、——わしはお主婦さんにかふ言つてゐたところですよ、可哀想な瓦斯・パールが不仕合せな目に會つたに就いては、サン・タントアヌぢや非常な同情と憤概が起つてゐるつて評判だと、——またそれに無理もありませんよ！」

「そんなことを言つてゐるものではありませんね。」ドファアルジュは頭を振つていつたり「そんなことは少しも知りません。」

彼はかふいつて小さな勘定臺の後ろに廻り、妻君の椅子の背に手を置いて突立つたまま勘定臺越しに、彼等二人の真正面にゐる相手の顔をぢつと見つめた。

恐らく二人とも、出来ることなら、大喜びでこの男を射殺したかつたゞらう。

だが、仕事によく馴れてゐる謀者は、彼の何気ない態度を改めなかつた。しかも、コニヤックの小さな杯をぐつと飲みほし、冷たい水を一口すゝつてしまふと、コニヤックをもう一ぱい注文した。マダム・ドファルジュは彼に注いでやつて、それからまた編物をとり上げ小聲で何か歌つてゐた。

「旦那はこの邊のことがお詳しいやうですな。わしなどよりもずつとよく御存じのやうで。」とドファルジュがひつた。

「なあに、少しも知りませんよ。だかもつとよく知りたいと思つてゐます。こゝの悲惨な人達には私も非常な興味を持つてゐますのでね。」

「ほう！」とドファルジュが咳く。

「ドファルジュさん、あんたとお話ししてゐると、思ひ出すことがあるんです。」と謀者は切り込んで来た。「わしは大分前から、あんたの名前と一寸關係があるんです。」

「へえ！」とドファルジュは無頓着にかふゐつた。

「えゝ、ありますとも、ドクター・マネットが放免されたときに、あの人の昔の召使だつたあんたが、あの人の世話をなさいましたね。ドクターはあんたに引き渡されたのです。」

「どうです。その邊の事情はよく心得たものでせう。」

「たしかにさうです。」とドファルジュはゐつた。彼は、編物をしながら小聲で歌を唱つてゐる妻君の肘にふと觸れたとき、簡筆でゐゝから出来るだけ返辭はしたがよからうといふ意味を傳へられたのである。

「ドクターの令嬢はあんたのところへ来たのでしたね。」と謀者はゐつた。「それからあんたのお世話で令嬢がドクターを連れて英吉利へ渡つたでせう。きちんとした茶色の衣物を着た紳士に伴はれてゐすね——あの紳士は何といふ名でしたかな——小さい鬘を被つてと、——さうだローリイだ、——テルソン銀行の。」

「さうです。」とドファルジュは繰り返して言つた。

「非常に面白い思ひ出ですな。」謀者はゐつた。「わしは英

一一八二一

吉利でドクター・マネットとも令嬢とも知合つてゐました。」

「さうですか。」とドファルジュはゐつた。

「今、あの人達がどうしておいでだか御存じないでせう。」

「知りません。」とドファルジュは言つた。

「ほんとに。」と妻君が、仕事も歌も止めて顔を上げながら口を入れた。あの方達のことなどさつぱり知りませんよ。無事についたといふお消息と、こゝ一度ぐらゐお手紙が参りましたかしら。ですがそれから後は、あの方達はあの方達の生活にかまけておいでとせうし、——わたし共はまたわたしの生活に追はれて——お互ひに手紙のやりとりは今ぢや全くしないんですよ。」

「いや、全くさうでせう。お主婦さん。」と謀者が答へた。

「ところで、お嬢さんは結婚する事になつてゐるんです。」

「することに？」と妻君は繰り返した。「お嬢さんはそれはお美しい方だつたから、もうとうに結

婚なすつてゐてもいゝんだのに、あなた方英吉利人は冷淡ですね。わたしにはさう思へます。」

「おや、わしが英吉利人なことを御存じですね。」

「お言葉で分りますよ。」と妻君は返辭した。「言葉で判断すれば、その人柄も分るやうに思はれますよ。」

彼はこの身許調べを一片のお世辭とは受けとらなかつた。が、彼は出来るだけ取りつくろつて、笑ひで紛らし、ユニヤックをすつかり飲んでしまつて、かふ附け加へた。

「さうです、ミス・マネットは結婚しようとしてゐます。ですが生粹の英吉利人とちやありません。あの人と同じやうに佛蘭西生れの人とです。また瓦斯・パールのことを噂しますが（本當に瓦斯・パールは可哀さうだつた。あれは慘酷だつた。慘酷だつた！）、あの男が何十フイートといふ高いところに引つ張り上げられたのも、原因はと云へばあの侯爵だが、その侯爵閣下の甥、別の言葉でいへば、侯爵家の當主とミス・マネットとが結婚しようとしてゐるなんて、實に不思議な縁ちやありませんか。ですが侯爵は英吉利では無名の士として生活してゐます。英吉利では侯爵ちやありません。チャールズ・ダーネイ君といつてゐます。ドールネイといふのが母方の家名ですから。」

マダム・ドファルジュはせつせと編物をつゞけてゐる、だがこの報知は、彼女の夫にはつきりと目に見えるやうな影響を與へた。小さな勘定臺の後ろで、彼がどんな舉動をみせようとしたにせよ、マツチを摺つて煙草に火をつけた手つきから見ると、當惑してゐることは明白である。彼の手はどうもしつかりしてゐない。これを見落したり、心に書きつけることが出来なかつたりするやうなことで、謀者の資格がなくなつてしまふ。

その價値はどんなものであつたにせよ、少くともこの一

一八四一

撃だけはうまく打ち込むことが消出來たので、——それに、今一本打ち込む機會をつくるやうな客がもうやつて來さうにもなかつたので、飲んだものゝ代を拂つて、立ち際に溫和しやかな物腰で、いづれまたドファルジュ夫婦にお目にかゝりたいものだ、その機會を期待するといふ意味のことを述べて出て行つた。彼がサン・タントアヌの通りに出てしまつてから二三分の間は、もしや彼がまた戻つて來やしないかといふ怖れから、ドファルジュ夫婦はやはり彼が出て行つたときと同じ態度のまゝゐるた。

「ありや、本當だらうか。」ドファルジュは、妻君の椅子の背に片手をかけて、立つて煙草をふかしながら、彼女を見下して低聲にかふ話しかけた。「あのマネットさんのお嬢さんに就いてあいつが話したことは？」

「あいつが言つたことだもの。」妻君は眉を少し上げてあつた。「多分出鱈目でせう、が、本當かも知れないわね。」

「さうだとしたら」とドファルジュはあひかけて口を噤んだ。

「さうだとしたら？」と妻君は繰り返した。

「もし時節が到來して、わたしたちが生きてゐるうちに勝利を見るやうなことがあつたら——わたしはお嬢さんの爲めに、運命の手がお嬢さんの御亭主を佛蘭西に入れないでくれるやうに望むだけだ。」

「お嬢さんの御亭主の運命の手は。」とマダム・ドファルジュは何時もの通り落ちついてあつた。

「その人が行くべきところへ連れて行くでせうよ。そして、その人が當然落ちつくべき最後まで、導いて行くでせうよ。わたしにはそれだけしか分らないわ。」

「だが、どうも不思議な話だ。——全く、不思議だなあ。」とドファルジュはしきりにそれを妻君に信じさせようとして、言ひ譯でもするやうにゐつた。「わたしたちはドクタアやお嬢さんにはあゝまで同情してゐるのに、お嬢さんの御亭主の名前が、たつた今こゝを出て行つたばかりのあの地獄の犬めの名前と竝んで、現在お前の手で記されてゐるんぢやないか。」

「時がくればこんなことよりもつと不思議なことも起るでせうよ。」と妻君は答へた。「わたしはたしかに二人の名前をこゝに記録してあるわ。二人とも刑罰を受けさせる爲めに、こゝに記録してあるわ。それだけの話ですよ。」

彼女はかふいつてしまふと、編物を丸めて頭髮に巻いてゐた手巾から薔薇の花を抜きとつた。サン・タントアヌは眼障りになる飾りが取りはずされたことを本能的に知つたものか、それとも、それが見えなくなるのを見張つてゐたのかも知れない、とに角、この聖徒（この區の住民）は勇氣を鼓してすぐさま、ぶらりと入つて來た。それで酒店は普通の様子になつた。

—一八五—

夕方になると、——その頃の時節は取分けて——サン・タントアヌの人々はすつかり自分達の家を空けて、一息入れる爲めに、戸口の上り段や、張り出し窓に坐つたり、きたならしい通りや中庭の片隅に出て來たりした。マダム・ドファルジュは手に編物を持つて、彼處から此處へ、群から群へと、渡つて歩くのが習慣であつた。ゐはゞ一種の傳道者である——彼女のやうなものは大勢あつた——世の中が二度と生み出さない方がゐゝといふ部類の女である。どの女もどの女も、編物をした。彼女達はつまらぬものを編んだ。だがこの機械的な仕事は、機械的に飲むこと、食ふかとのお代りをつとめた。手は顎や消化機關の代りに動いた。もしその痩せた指が動かさぬなら、胃袋はもつと強く飢ゑを訴へたであらふ。

だが指が動くにつれて、眼も動けば、考へも動いた。マダム・ドファルジュが群から群へと動くにつれて、彼女が一寸何か話をしては、やがて背後に残して行く婦人達の小さな群の間では、何處でも手、眼、考への三つが、更に早く鋭く動いたのである。

彼女の夫は、戸口で煙草をふかしながら、如何にも感に堪へたやうに彼女を見送つてゐた。「えらい女だ。」と、彼はゐつた。「強い女だ、素敵な女だ、怖ろしく素敵な女だ！」

闇はあたりに迫つて來た。やがて教會の鐘の音と、王宮の禁苑で打ち鳴らす軍隊の大鼓の遠音が聞えて來た。女達はせつせと編物をしながら坐つてゐた。闇は彼女達を押しつゝ玉んだ。これとは違ふ今一つの闇黒も。同じやうに刻々と迫つて來てゐた。おゝ、その時こそ、今は全佛蘭西の聳え立つた尖塔の上で樂しげに鳴り響いてゐる教會の鐘も、すきまじい大砲に鑄直されなければならないであらふ。おゝ、その時こそ、この夜、權勢、榮華、自由、生命の聲のやうにあくまで力強く響いてゐる軍隊の大鼓も、悲惨なる聲を掻き潰す爲めに打ち鳴らされなければならないであらふ（ルイ十六世を死刑に處するとき、ルイが最後に死刑臺上から人民に冤を訴へようとすると係りの役人はそれを聞えさせまいとして、急いで軍鼓を鳴らさせたこと。せつせと編み物をしながら坐つてゐる女達のまはりには、實に幾多のものが迫つて來てゐた。彼女たち自身も、或る未だ建てられてゐない建物（斷頭臺）のまはりに迫つて行きつゝあつた。そして、そこに坐つて、せつせと編み物をしながら、斬り落とされる首の數をとる仕事彼女たちに與へられることになつてゐた。

十七、一夜

ドクタアと娘が一緒に篠懸の樹蔭に坐つてゐた或る忘れ難い夕暮にも勝して、耀かしくソホウのあの物靜かな一隅の空に、太陽が沈んだことはなかつた。またその夜、樹蔭に

— 一八六 —

尙ほ坐り續けてゐる二人の面を、葉越しに照らした時にも勝して和やかに、月が大倫敦の上にさしのぼつたことはなかつた。

ルウシイは明日結婚する筈であつた。彼女はこの最後の夕を父親の爲めに、取つて置いた、彼等は二人きりで篠懸の樹蔭に坐つてゐたのである。

「お父さま、幸福であらうしやいますの。」

「幸福だとも、お前。」

二人は長い間そこに坐つてゐたけれども、そんなに話さなかつた。まだあたりが十分に明るくて、仕事も讀書も出來たが、彼女は何時もの仕事にかゝらうともせず、また父親の爲めに本を讀んでやらうともしなかつた。彼女がこれ

まで父親とこの樹の下に坐つて仕事や讀書をしたことは何度あつたか分らない。だがこの時だけは何時もとは違つてゐた。どうしても何時もと同じ筈はなかつたのである。

「お父さま、わたくしも今晚は本當に幸福なんですわ。神様がお恵み下さいましたこの愛、チャールズに對する愛と、わたくしに對するチャールズの愛を思ふと、心から幸福になります。でも、もしわたくしが自分の一生を、お父さまに捧げることが出來なくなつたり、また、わたくしが結婚した爲めに、たゞへ二三町でも別れて住むやうになつたりしたのでしたら、わたくし、とても口には盡せない位の不仕合せで、氣が答めたらうと思ひますわ。いまだつても——」

さうだ、いまだつても。彼女は自分の聲を自分でどうすることも出來なかつた。

悲しい月光の中に、彼女は父の頸をひしと抱いて、その胸に自分の顔をあてた。彼女を包んでゐる昌光は、丁度太陽の光のやうに——人生と呼ばれるこの光のやうに、——その來るとき、去るときはいつも恐ろしい。

「大事な、大事なお父さま！ どうぞもう一度だけ仰しやつて下さい。お父さま、わたくしの新しい愛情も、またわたくしの新しい義務も、たしかにお父さまとわたくしの間の邪魔にはならないと、本當に、本當にお考へなんでせうか。わたくしにはそれはよく分つてゐますけれど、お父さまはお分りせうか。お父さまはお心の中でも本當に安心してゐて下さるでせうか。」

父親は、これまで顔色に見せたこともないほど、快闊な堅い信念をもつて答へた。「本當とも、お前！ それどころか、」彼は彼女に優しい接吻をしてゐひ足した。「ルウシイ、わしの未來は、お前の結婚を通して見ると、づゝと明るいものになるのぢや、お前が結婚せんでもそれは明るいものになり得たらうし、事實さうでもあつたが、——これからはもつと明るくなるんぢや。」

「お父さま、わたくしさう望む事が出來ましたならね！」

— 一八七 —

「いや、さう信じるがひ々！ 本當にさうなんぢや。さうなるといふことが、どんなに當然でどんなに明瞭だか考へて御覽。お前はわしのことで餘念もないし、それにまだ若いから、どれ程わしが心配

してゐたか、よくは分るまいが——わしはお前の一生を徒にさせまいとどれだけ思つたことか……」

彼女は父親の唇の方へ手をやつた。だが彼はその手を自分の手に握つて、かふ繰り返した。

「——徒にさせまいと——あゝか、わしのせめて自然の理法からはづれて、徒な一生を送らないやうにと、思つたぢや。お前は無慾だから、わしがどんなにこのことを案じつづけたか、十分分かるまい。だが、よく考へて御覽、お前の幸福が不完全なのに、どうして、わしの幸福が完全になれやうか。」

「若しチャールズと會ふことがありませんでしたら、お父さま、わたくしはお父さまと二人で本當に幸福に暮したてございませう。」

父親は、娘がチャールズと會つた上は、彼がなければ自分は不幸であらうといふことを知らず知らずの間に認めてゐるのを聞いて、微笑した。そしてかふ答へた——

「お前はたうとうその人に會つたのぢや。それがチャールズぢや、チャールズでなかつたら、きつと別人がその代りになつたに違ひない。それとも全然どんな男とも一緒になれなかつたら、それはわしのせゐに違ひない。さうなると、わしの生涯についてゐる暗雲が、わし一人に影を投げるだけでは濟まづに、お前まで蔽つてしまふことになつたらう。」

彼が自分の苦難時代のことを口に出したのは、あの裁判の日を除けば、彼女の聞いたのはこれが初めてであつた。彼女はこの言葉を聞いてゐるうちに、異常な、これ迄にない感動を受けた。彼女はその後長い間それを忘れなかつた。「御覽！」とこのボーヴェイの醫師は月の方に手を擧げてゐつた。「わしはあの月を牢屋の窓から眺めたが、その時にはこの光を見るに耐へられなかつた。わしは月を眺めて、それがわしの失つたものゝ上をも照らすことを考へると、もう苦しさにたまらず、牢屋の壁に頭をぶつゝけたものぢや。わしはまた鈍い皆睡情態で月を見ることもあつた。そんな時には、満月の折、月の面に横に引くことの出来る水平線の數は何本か、その線と交叉して縦に引ける垂直線は何本かといふやうなことの外には何も考へなかつた。」彼は月を見上げつゝぢつと瞑想に沈んだ様子であつた。「その線はどちらも二十本だつたと覺えてゐる。だがその二十本目の線は嵌め込むのがなかなか難しかつた。」

父が昔のことを話すときに感じる彼女の異常な戦慄は、彼が縷々と説き出すにつれて一層深まつた。だが彼の話ぶ

——一八八——

りには、彼女に心配させるやうなところが少しもなかつた。彼はたゞ現在の愉悅と幸福とを、過ぎ去つた恐ろしい忍苦に比べてゐるやうであつた。

「わしは月を眺めるたびに、まだ生れないうちに引き離されたわしの子供のことを何度となく考へたのぢや。一體あの子は生きてゐるだらうか、無事に生れたであらうか、それとも可哀想な母親のうけた打撃がもとで死にはしなかつたらうか。それは何時か父の爲めに復讐してくれる男の子であらうか（わしは牢屋にゐた時分復讐の念に燃えて、耐へられぬ頃があつた）、それとも、その息子は父の身の上を少しも知らないのだらうか。——その子は、父が自分から進んで失踪するやうなことが果してあり得るかどうかと、考へるぐらゐの年頃まで生長したであらうか。それともそれは女の子だらうか。そして一人前の女になつてくれるだらうか。」

彼女は更に父親の方へ身をすり寄せて、彼の頬と手に接吻した。

「わしは自分の娘を、全くわしのことを忘れてゐる——といふよりは寧ろ、全然わしのことを知らず、わしのことはその意識にないものとして心に描いてゐた。わしは毎年毎年、娘の年齢を敷へた。わしは、娘がわしの運命のことを少しも知らぬ男と結婚したやうに考へた。わしは生きてゐる人間の記憶から、全然消え失せてゐたのだ。子供の代になると、もうわしといふものは全くの白紙であつた。」

「お父さま！そのありもしなかつた娘さんの事を、それ程までにお思ひになつたと伺つてさへ、わたくしは丁度自分が、その娘さんでもあつたやうに胸を打たれますわ。」

「ルウシイ、お前が？いやお前がわしを慰め、恢復させてくれたお蔭で、この最後の晩に、こんな思ひ出が起つて来て、わし達と月との間をつないでゐるのぢや——うむ、わしは今何をいつてゐたかな。」

「娘はお父さまのことを少しも知りませんでした。お父さまのことを少しも氣にかけてはゐませんでした。」

「さう、さう！だが悲しさと寂寞とがそれぞれわしの心を動かすとき、——又、物悲しい平和の感じに似て、底に苦痛のこもつてゐる感懐のやうな或るものが、わしの心を動かすとき、——そんな月夜には、わしは娘がわしの獄房にやつて来て、城砦の向ふの自由な世界にわしを連れ出してくれるやうに想像した。わしは今、お前を見てゐるやうに月の光の中に屢々娘の姿を見た。たゞわしは一度もこれをわしの手を抱いたことはなかつた。それは小さい鐵格子の窓と戸の間に立つてゐた。ぢやがそれは、わしが今話しかけてゐる子供ではなかつたといふことが、お前には分るぢやらう。」

——一八九一

「その人は、さうではなかつたのでございませうか——その姿は……その容態は……？」

「いや、それは全く別のものぢやつた。それはわしの亂れ狂つた視覚の前に立つてゐた。だが決して動きはしなかつた。その時、わしの心が追ふてゐた幻影は、前のと違つた、もつと眞實味をもつた子供であつた。その外見の姿恰好は母親にそっくりだといふことの外はわしに分らない。前の子供も母に似寄つたところがあつた——お前もさうだ——が、全く同じではなかつた。ルウシイ、お前わしのいふことが分るかね。多分よくは分るまい。孤獨な囚人の身にでもならなければ、お前にはこんな混み入つた區別は呑み込めはしないのだ。」

彼がかふして昔の境遇を分析してゐるときに、その落ちついたもの靜かな態度を見ては、さすがに彼女はぞつとせずにはゐられなかつた。

「さういふ比較的に穩かな氣持ちのとき、わしはあれが月の光を浴びながらわしの許になつて来て、あれの結婚した家庭生活が、失き父親のなつかしい思ひ出に満ちてゐるのを見せようとして、わしを連れ出すことを想像した。わしの肖像畫があれの部屋にあつた。わしの名は何時もあるの祈りの中にあつた。あれは活氣があり、愉快で、徒のない生活をしてゐた。が、わしの哀れな經歷がその全體に満ち渡つてゐたのだ。」

「お父さま、わたくしがその子でございませう。わたくしはその半分もあゝ子ではございませうでしたが、愛情だけはその通りでございませう。」

「あれはわしに子供たちを見せてくれた。」とポーヴェイの醫師はゐつた。「子供たちもわしのことを前々から聞かされてゐて、わしに同情するやうに教へられてゐた。牢屋の前を通る時には、子供たちはその嚴めしむ幄に近よらないやうに氣をつけて、獄房の鐵格子を見上げては何か小聲で囁きあつ

た、あれにはわしを救ひ出すことがどうしても出来なかつた、あれはわしにさういふものをいろいろ見せた後で、いつもわしを牢に連れ戻すものと想像してゐた。だがそんな時に、あれから慰めの涙で祝福されると、わしも跪つてあれを祝福してやつた。」

「お父さま、わたくしがその子でございませう。お、お父さま明日も、その時のやうに熱心に祝福して下さいませうか。」

「ルウシイ、わしがかふした昔の苦痛を思ひ出したのも、わしが言葉でゐぬ程お前を愛してをり、又、わしの大きな幸福の爲め神様に感謝をさゝげていゝわけが、今夜、あるからなのだ。わしは、自分の頭がひどく狂つてゐた時分には、これまでお前と一緒に味つて來た幸福や、尙將來に見えてゐるやうな幸福なぞ思ひも及ばなかつたものぢや。」

—一九〇—

彼は彼女を抱擁して、嚴かな様子で神に彼女の身を祈り、そして彼女を與へられたことを、謹んで感謝した。やがて彼等は家に入った。

結婚式にはローリイ以外に、誰も招待されてゐなかつた。面癩れたミス・プロスを除けば、附添ひの女さへもないことになつてゐた。又この結婚によつて、彼等の住居には何の變化も起らないことになつてゐた。彼等は、あの疑はしひ、ちつとも姿を見せたことのない下宿人が、以前に占めてゐた上の敷室を、自分達の部屋に借りることにして、この住居を廣げることが出来た。彼等はそれ以上には何も望まなかつた。

この夜、ドクタア・マネットは非常な上機嫌でさゝやかな夜食の卓子についてゐた。卓子についてゐるのは三人で、その一人はミス・プロスであつた。ドクタアはチャールズがゐないのを残念がつた。そしてチャールズをそこへ來ないやうにした可愛らしい一寸した陰謀に、抗議したいやうな氣になつた。そして、愛情をこめてチャールズの健康を祝つて乾盃した。

かふして彼がルウシイにお休みをいふ時が來て、彼等は別れた。だが朝の三時といふ沈まり返つた時刻に、ルウシイはまた階下の部屋に降りて來て、そつと父の部屋に入つて行つた。前々からの漠然とした恐怖が去らなかつたからであつた。

だが何もかも、あるべき處にきちんとしてあつた。すべてが静まりかへつてゐた。清らかな枕の上に、繪のやうな白髪の頭をのせ、兩手を靜かに衾の上にやすめて、彼は深く眠つてゐた。彼女は蠟燭をすこし離れた物影に置いて、父の寢牀に悪び寄つて、自分の唇をそつと父のそれに當てた。それから彼の上に屈んで彼の顔をぢつと見つめた。

彼の美しい顔には、幽囚の苦い沈吟の痕が刻まれてゐた。だが彼はその痕を、ひどく強い決心で蔽ひ隠してしまつたので、寢てゐる時にさへも、それをしつかりと抑へてゐることが出来た。この夜、靜かに斷乎として、また用心深く、目に見えぬ寄手と争つてゐるこれほど苦しい顔は、廣の睡眠の全世界にも、外に見ることが出来なかつたであらう。

彼女はおづおづと、愛する父の胸に手を置いて、自分の愛の望むかぎりの、また彼の悲しみが受け得るかぎりの眞實を以て、彼に盡さして下さるやうにとお祈りを捧げた。それから彼女は手を引つ込めて、もう一度彼の唇に接吻して其處を立ち去つた。やがて朝日が登つた。篠懸の樹の葉蔭が、彼の顔の上に靜かに動いた。丁度、彼女の唇が、彼の爲めに、祈りを捧げようと動いたときと同じやうに。

十八、九日間

一九二一

結婚式當日は快晴であつた。一同はドクタアの部屋の閉め切つた戸口で待つてゐた。中ではドクタアがチャールズ・ダーネイと話をしてゐた。彼等は何時でも教會へ出られるやうに支度が出来てゐた。美しい花嫁とローリーとミス・プロス―ミス・プロスといへば、彼女は、この結婚が仕方のないものだと言つてゐるやうになり、今は無上の祝福とさへ考へてゐたが、まだ自分の弟のソロモンが花婿になるべきだつたのにと、未練がましい考へをもつてゐた。

「さうかなあ、」とローリーはいひ出した、彼は、花嫁をどれほど賞讃しても足りない様子で、彼女のまはりをぐるぐる廻つては、その淑やかな、美しい衣裳を隅から隅まで眺めてゐたのであつた。「可愛いルウシイさん、このわしがまだほんの赤ん坊であつたあなたを抱いて、ドーヴァを渡つて来たのは、今日のこのお目出度のためだつたのですね。いや有難い、あの時はわしは、自分のしてゐることに大した考へもなかつたのだが！かふして、圖らずもわしがチャールズ君に與へることになつた大した恩恵も、これがあの時ならさう大したことに考へられなかつたでせう！」

「だつてもともとそんなお考へぢやなかつたんでございませう。」と實務家のミス・プロスは口を入れた。「ですから、どうなることか御存知だつた筈がないぢやございませぬか。あんなことを！」

「そんなもんですかな？まああゝ、だがもう泣かんで下さいよ。」と溫和なローリーがかふあつた。「わたしは泣いてなんか居りません。」と、ミス・プロスがひつた。「あなたこそ泣いておいでせに。」

「わしが？プロスさん。」（この頃はローリーも時々彼女と冗談をきゝ合ふ程になつてゐた）。

「たつた今泣いておいでゝした。拜見してゐましたよ。でも御無理はありませんわ。あなたの、あんな食器の贈物なら誰の眼にだつて涙を出させる値打がございませぬ。あの揃ひの中の肉又一本だつて匙一本だつて。」とミス・プロスはあつた。「昨晚あの箱が届きましたから、私の泣かずに拜見したものは一つもございませぬ。あんまり泣きましたので、よく拜見することが出来ない程でした。」

「いや、大いに感謝します。」とローリーはあつた。「もつとも、わしはあのつまらない記念品を、何方の眼にも見えんやうなものにしてしまふ積りはありませんでしたがね。それはさうと、自分の失くしてしまつたものをつかり思ひ出してみるには、ある機會ですな、あゝあ、この五十年に近い年月のうちに、いつかローリー夫人なんてものがあつたと考へて御覽なさい！」

「まあ！そんなことが！」と、ミス・プロスがひつた。

「あなたは、ローリー夫人なんて者は何處の隅にもゐた筈は

一九二一

ないと考へてるんでせう。」と同じ名をもつ紳士は訊ねた。

「ふう！あなたといふ方は、お生れになつた時から、獨身であらつしやつたんですよ。」

「成る程！」とローリーはにこにこしてその小さな鬘を直しながらあつた。「それも本當らしく思はれますね。」

「あなたといふ方は、お生れにならない前から、もう獨身者向きに出来上つておゐでゝしたんでせうよ。」とミス・プロスは續けていつた。

「いや、どうも」とローリーはあつた、「ひどい取扱ひを受けたものだ。わしは當然、自分の鑄型

の選擇に意見を出すべきだつたんですね。いや先づかの邊りで「さあ、ルウシイさん。」と彼女の腰に優しく手をかけて、「お父さんは次の間でもうお立ちになつてゐるらしい。プロスさんとわしは紋切型の實務家ですから、この最後の機會に、何かあなたが聞きになりたいやうなことがあれば、お話し申ませう。お父さんをお預りするのには、あなたと同じやうに熱心な愛に満ちた人間なんですよ。お父さんには出来るだけのお世話をして差上げませう。あなた方がウオキックシヤアあたりに御滞在なさる二週間の間は、お父さんの爲めなら、テルソン銀行でも一步譲らせてお目にかけますよ（これは比較的的確にゐつてのことですが）。それからその二週間が、終つて、次の二週間、今度はウエールズの方へ、あなたやあなたの大事な旦那様と一緒にお父さんも旅行なさるのだつたら、その時はあなた方がきつと、お父さんは非常に健康で、上機嫌でお出でになつたと仰しやるやうにしてお目にかけます。さあ、もう『誰かさん』の聲音が戸口の方へやつて來ます。どれ、では『誰かさん』が來て、あなたを自分のものだといはぬうちに、昔氣質の獨身者の祝福で、私の大好きなあなたに接吻させて下さい。」

暫くの間、彼はその美しい顔から少し離れて、彼の記憶にしっかりと刻みこまれてゐるあの額の表情をぢつと見つめたが、純な情と思ひやりをこめて、その輝かしい金色の髪を自分の小さな鶯色の鬘に押しつけた。かふいふことを昔氣質といふなら、それはアダム以來の變らぬ古さであつた。

ドクタアの部屋の戸があいて、彼はチャールズ・ダーネイと共に出て來た。彼はまるで死人のやうに蒼ざめてゐた。——二人で部屋に入つたときには、さうではなかつたが、——彼の顔には血の菊らしいものさへ見えなかつた。だが態度は相變らず落ちついてゐた。たゞローリーの鋭い眼にだけは、以前に見られたあの逃避と恐怖の様子が、この頃、冷たい風のやうにまた彼を襲つてゐるといふ陰鬱な兆候が幾分見とられた。

彼は娘に腕を貸して階段を降り、この日の爲めにローリーが雇つて置いた裝飾馬車に娘を乗せてやつた。他の者は、

——一九三一——

みんな並の馬車でつゞゐた。程なく近くの教會につくと、別に他人の目にかゝることもなく、チャールズ・ダーネイとルウシイ・マネットは、そこで幸福に結婚した。

式が終わつたとき、この小さな一團の微笑の間には、煌々する涙が光つてゐたが、その涙のほかに、燦爛と光輝を放つ幾つかのダイヤモンドが花嫁の手の上で輝いてゐた。それはローリーのポケットの眞暗な底から、たつた今引き出されたばかりのものであつた。彼らは朝食の卓子につく爲めに家へ歸つた。萬事は好都合に運んだ、やがて、來るべき時は來て、曾ては巴里の屋根裡部屋で、哀れな鞆造りの白髪と纏れ合つた金髪が、今またこの別れぎはに朝日に照らされつゝ、戸口の闕のところでのその白髪と纏れ合つた。

長い別れではなかつたにせよ、それはつらい別れであつた。父親は彼女をいろいろに慰めた、やがて自分に抱きついてゐる彼女の腕から、そつと身をはづして、かふあつた。

「チャールズ、娘を連れて行きたまへ。娘は君のものぢや！」

やがて彼女の昂奮した手が馬車の窓から彼等に觸られた。いよいよ彼女は行つてしまつた。

この一隅は懶者や物好きな人達の足を向ける場所ではなかつたし、それに準備といつても、至極簡單なわづかばかりのものであつたので、ドクタアとローリーとミス・プロスだけが後に残された。彼等が例の涼しい古の廣間の氣持のゝ日蔭に戻つたとき、忽ちローリーはドクタアに大きい變化の起

つてゐることを認めた。それはそこに振り上げられてゐる黄金の巨人の腕が、彼に毒矢でも射かけたかのやうであつた。

先頃からドクタアは、自分の感情をひどく抑へゐたので、その抑壓の機會が去つてしまふと、きつと彼には幾分かの反動が起こるかも知れなかつた。だがローリイが心配したのは、昔そのまゝの怯えたやうな自失の目付であつた。彼等が二階に上つたときに、ドクタアが放心の體で頭をかゝへて、寂し氣に自分の部屋によろよると入つて行くのを見て、ローリイはあの酒店の夫のドファルジュや、あの星の明るい夜の馬車旅行を思ひ出した。

「どうもわしには、」と彼は心配さうに考へこんだ揚句、ミス・プロスにかふ囁いた。「今のところ、ドクタアに何か話しかけたり、邪魔をしたりしない方があゝやうに思はれますね。わしは一寸テルソン銀行を覗かなくちやならんから、直ぐ出掛けます。が、早く歸る事にしませう。それからあの人を馬車で田舎へ散歩につれ出して、そこで食事をする事にしませう。さうしたらきつとよくなりますよ。」

ローリイにとつては、テルソン銀行から外の世間を覗くことよりも、銀行を覗いて來ることの方が遙かに容易だつ

—一九四—

た。彼は二時間ばかり引きとめられた。ドクタアの家にとつてかへすと、召使には何も訊ねずに、馴染の階段を獨り上つて行つた。やがて、ドクタアの部屋に入つたときに、彼は何かを低くこつこつと打つ音を耳にして、はつと立ち竦んだ。

「これはどうも、」彼はきよつとして言つた。「ありや何だ。」

ミス・プロスは恐怖にみちた顔をして、彼の耳に口を寄せた。「あゝ、あゝ！もう何もかも駄目になりました。」と手を振りしぼつて、彼女は叫んだ。「お嬢さまには、何と申し上げ

げたらいいでせう。旦那様はわたしがお分りになりません。そしてまた、鞆を造つてゐらつしやるんですもの。」

*** ** *

ローリイは出来るだけ彼女を慰めて置いて、ドクタアの部屋に入つて行つた、以前見たときと同じやうに、腰掛けを明るい方に向けて、頭を重たげに垂れ、彼は忙しげに仕事をしてゐた。

「ドクタア・マネット、もし！ドクタア・マネット！」

ドクタアは一寸の間、彼を見た―が、半ば訝るやうに、半ば仕事の最中に話しかけられたのを怒るやうに―また仕事の上に身を屈めた。

彼は上衣と胴衣を傍に脱ぎすてゝゐた。仕事をするときの何時もの習慣で、彼の襯衣は襟元が開けられてゐた。以前の瘦せ衰へ、色褪せた顔付までが再び戻つてゐた。彼は一生懸命に仕事をしてゐた―そして仕事を妨げられたと考へて、苛々しげな様子をしてゐた。

ローリイは彼の手にある仕事をちらりと見た。それは昔と同じ大きさ、同じ型の鞆であつた。彼はドクタアの傍に置かれてある別の鞆を取り上げて、これは何ですと訊ねてみた。

「若い御婦人の徒歩鞆です。」と彼は顔を上げもせずにかふ呟いた。「それはもう疾つくの昔に仕上がつてゐなくちやならなかつたんです。どれ、仕上げることにしませう。」

「ですが、ドクター・マネット、わたしを見て下さい！」
彼は普通りの機械的な素直さで、仕事の手はやすめずに相手の言葉に従った。

「わしがお分りでせう。ね、もう一度考へてみて下さい。これはあなたの本當の職業ではないのです。あなた！」

何ものも彼に二度と口を開かせようとすることは出来なかつた。彼は話しかけられれば、その度毎に一瞬間顔を上げはしたが、どんなに勧めても、賺しても、その口から一言も洩らさうとはしなかつた。彼は無言のまゝ働いて働いて、働きつづけた。彼に話しかけられた言葉は、丁度反響しない壁の上か、虚空にでも落ちると同じやうに、ちつとも手答がなかつた。たゞローリイが見出し得た一縷の希望

—一九五—

は、ときどき何ともいはれないのに、彼がそつと上を見上げることであつた。この舉動には——あだかも彼が、一生懸命、心の中の疑問を解決しようとするものゝやうに、——怪訝と困惑の念らしいものが現はれてゐた。

次の二つの事柄を、ローリイは、何よりも重大な點だと直ぐ心にとめた。第一は、これをルウシイに知らせずに置かなくてはならないこと、第二には、彼を知つてゐるすべての人々にもこれを知らせずに置かなくてはならぬことであつた。そこで、彼はミス・プロスと謀し合せて、ドクターは不快であるから、數日間絶對安靜を要すると告げて、先づかの第二の用心に對する應急の手段をとつた。令嬢に對する細かい心遣ひとして、ミス・プロスが手紙を書くことになつた——ドクターが仕事の都合で家を留守にしてゐること並びにドクターが急いで認めた二三行の手紙（ありもしない）がこれと同じ郵便馬車でお嬢様あてに行く筈、云々と認められた。

ローリイが、どんな場合にも賞讃すべきかういふ手段をとつたのは、ドクターが正氣を恢復することを信じてゐた。もし直ぐにもさうなるやうな場合を考へて、彼はもう一つの手段も豫備してゐた。それはドクターの病症に對して、彼に最上と考へられる或る意見を仰ぐことであつた。

ドクターは恢復するもの、従つて、この第三の手段に訴へることが實行可能となるものと見込んで、ローリイは出来るだけ氣振りには出さずに、注意深くドクターを見張つてゐることに決心した。そこで彼は生れて初めてテルソン銀行を缺勤する手筈を定め、ドクターと同じ部屋の窓近くに腰を据ゑた。彼は間もなく、ドクターに話しかけることは無用といふ以上に悪結果を生むことを發見した。無理にも話しかけると、ドクターは困じ果てたやうな様子を見せるからであつた。彼は最初の日から、かふいふ試みを斷念して、たゞドクターが陥つた、或は陥つゝある迷想に無言の抗議を申し立てる意味で、いつもドクターの前に自分の姿を据ゑて置くことだけを決心した。そこで彼は窓ぎはの座に残つて讀書したり、書きものをしたり、そのほか思ひつくことが出来る限り、様々と愉快な自然な方法で、こゝは自由な場所なのだといふ意味を彼に會得させようとかゝつた。

ドクター・マネットは與へられる飲食物を何んでもとつた。第一日には、暗くなつて、物の見えなくなるまで働きつづけた。——ローリイがどんなことをしても、とても讀むことも書くことも出来なくなつてから、尙ほ、半時間も働きつづけた。朝までは要らないので、彼が道具を取り片づけたとき、ローリイは立ち上つて、彼にかゝつた——

「外へ出掛けてみませうか。」

—一九六—

ドクタアは昔のとほり部屋の牀を眺めてから、矢張り昔の通りに顔を上げて、昔の通りの低い聲でかふ繰り返した。

「外へ？」

「さうです、わしと一緒に散歩にです。いけませんか。」

ドクタアは何故いけないかと、ぬはふとは試みず、それきり一言もぬはなかつた。だがローリイは薄暗い中で、のめるやうに腰掛けて、兩膝に肘をつき、手に頭を支へた彼が、判然とではないが『何故いけないのか』と自問してゐるところを見たやうに思つた。實務家の分別はこゝに一つの機を見つけた。そして彼はそれを離すまいと決心した。

ミス・プロスと彼とは夜中、交替して見張りに當つた。そして時々次の問から彼を見守つてゐた。彼は牀につく前に長い間あちこち歩き廻つたが、たうたう牀に横になつてしまふと、ぐつすりと寢込んだ、朝になると彼はいち早く眼を覺して、例の腰掛けと仕事の方へ眞直に寄つた。

二日目に、ローリイは快闊さうに彼の名を呼んで挨拶をし、最近彼等が幾度も話し合つたことのある話題をとらへて語しかけて見た。彼は何とも返事はしなかつたが、話された言葉が耳に入れ、またどんなに混乱してゐたかは知れないが、それについて考へてゐたことは、明らかであつた。ローリイはこれに勇氣を得て、この日のうちに何回かミス・プロスに仕事をもつたまゝやつて来てもらつた。そして、二人はルウシイのことや、現在そこにある父親のことをいつも通りの態度で、何の變事も無いとひつた風でもの靜かに話し合つた。これは、わざとらしく氣がつけと言はんばかりの餘計な話も添へなかつたし、またドクタアを煩さがらせるほど長くも、それほど度々もやらなかつた。ローリイの友情に厚い心は、ドクタアが顔を振り上げる度數がだんだん多くなつたこと、そして自分の周圍の矛盾にいくらか氣がついて、心を動かされたやうに見えることを信じて、ほつと輕くなるやうに覺えた。

やがてまた夕方になつたとき、ローリイは前日と同じやうに彼に訊ねた――

「外へ出ませうか。」

前と同じやうに、彼はかふ繰り返した。「外へ？」

「さうです。わしと一緒に散歩にです。いけませんか。」

今度は、ローリイは彼から何の返事も得られなかつたとき、一人で出かけるふりをした。そして一時間ばかりその部屋を留守にしてから戻つて來た。その間にドクタアは意際の腰掛けに席を移して、篠懸の樹を見下しながらちつと坐つてゐた、ローリイが歸つて來ると、またいつの間にか自分の腰掛けの方へ戻つてしまつた。

時間は極めて緩慢に經つていつた、ローリイの希望は再び暗く、心は再び重くなつた。それは日毎に重くなつて行

—一九七—

くばかりであつた。三日目が來て過ぎた。四日目も五日目も。五日、六日、七日、八日、九日たつた。日に日に暗くなる希望を持ち、益々重く沈んでいく心を抱いて、ローリイは心配な時を過した。秘密はよく保たれた、ルーシイは何も知らずに、幸福であつた。ローリイは、最初のうちこそ、いさゝか狂つてゐた鞆造りの手が、だんだん器用になつて來たこと、九日目の夕方には、彼がこれまでにな

いほど熱心に仕事にかゝつてゐたこと、彼の手がこれまでにないほど巧妙に、器用に熟練して来たことを見逃すことが出来なかつた。

十九、意見

心配づくめの見張に疲れきつたローリイは、番をしながらつい眠りに落ちてゐた。気がゝりな十日目の朝、彼は部屋に射しこむ太陽の光で驚かされた。昨夜暗くなつたときに、彼はその室でぐつすり寝込んでしまつたのであつた。

彼は眼をこすつて起き上つた。だがさうしてからも、自分がまだ眠つてゐるのではないかと疑つた。何故なら、ドクタアの部屋の戸口に近づいて、中を覗いて見ると、鞆造りの腰掛や、道具がまたすつかり片づけられて、ドクタアその人は窓際に坐つて讀書してゐるのが見えたからであつた。彼はいつもの平常服をつけ、その顔は（ローリイはそれをはつきりと見る）ことが出来た。またひどく青ざめてはゐたが、落ちついて、熱心さうに見えた。

彼は眼の醒めたことがはつきり分つてからでも、この間からの鞆造は、自分だけの厭な夢ではなかつたかしろと思つて、暫くの間眩暈でもしてゐるやうに不安な氣持がした。何故なら、彼の友が現に眼の前で、平常通りの衣物をつけ、平常の様子で、平常と同じことをしてゐるのを、彼の眼が見せてくれたではないか、しかもまた、彼にかくまで強い印象を與へたこの變化が、實際生じたのだといふ何等かの證據が眼のとゞく範圍の中にあつたらうか。

それは彼が最初困惑し、吃驚した時の疑問にすぎなかつた——その答は明瞭であつた。もしこの印象が尤もな、十分な、眞の理由によつて生じたものでなかつたら、彼ジャーヴィス・ローリイは、どうしてそこに來てゐたのか、どうして衣物も着たまゝ、ドクタア・マネットの診察室の長椅子の上でぐつすり寝込んだ揚句、早朝からドクタアの寝間の前にかふいふ問題を論じてゐる筈があらふ。

數分とたゞないうちに、ミス・プロスが傍に來てそつと囁いた。若し彼にいくら疑念の種が残つてゐたなら、彼女の話がきつとそれを解決してくれたであらふ、だが既にこの時は彼の頭もはつきりして、少しの疑念もなかつた。彼はいつもの朝飯の時間になる迄は、そのまゝにして置き、

——一九八一

別段變つたことも起らなかつたやうに、ドクタアに會つた方がよからうと忠告した。若しドクタアの心が平常通りの情態にゐるやうに見えたら、その時十分用心して、この間から心配をつゞけながら、何とかして知りたいと望んでゐたドクタア自身の意見から、ゐひつけなり指圖なりを仰ぐことにしよう——とローリイは考へた。

ミス・プロスも彼の考へに従つたので、この計畫は注意深く實行された。いつもの規則正しい身だしなみに十分の時間を費してから、ローリイはいつもの醇白な肌着をつけ、いつものすつきりした足恰好で、朝飯の時間に姿を現はした。ドクタアはいつも通りに知らせを受けて朝飯に出て來た。

ローリイが唯一の安全な進み方だと考へてゐた通りに、度を越さないやうに用心深くだんだんと接近して、彼のいふことを聞いてみると、彼は最初娘の結婚は、昨日あつたばかりだと推測してゐたらしい。だが今日は何曜日で、何月何日かといふことがそれとなく仄めかされると（わざと持ち出されたのであるが）、彼は何やら考へ、計算してみ、明らかに、不安らしい様子をみせた。然し、ほかのすべての點では、彼は非常に落ちついてゐたので、ローリイは彼の求めてゐる助けを乞ふことに決

心した。その助けといふのはドクター自身の助けであつた。

そこで朝飯が済み、食卓が片づけられて、彼とドクターが二人きりになつたとき、ローリーは眞心をこめてあつた。

「ドクター・マネット、わしは或るひどく不思議なことに深い興味をもつてゐるんですが、内々であなたの御意見を伺はせて頂きたいと思ひます、つまりわしにとつちや、ひどく不思議なものに思はれるんですが、あなたのやうによく御存知の方には、きつとさう不思議なことぢやないかも知れませんが。」

この数日間の仕事で、薄汚くなつた自分の手をちらりと見遣つて、ドクターは當惑さうな様子を見せたが、しかし熱心に聞き入つた、彼は既に一度ならず自分の手を見てゐたのである。

「ドクター・マネット、」とローリーは情をこめて彼の腕に手をかけてゐた。「その事件はわしに特別親しい友人の事件です。どうかその點をよくお含み下さい。そして一人の友人の爲めによい忠告を聞かして下さい、——とり分け友人の娘の爲めに——マネットさん、娘の爲めには。」

「若しかすると、」とドクターは洗んだ聲であつた。「何か精神上の打撃では——？」

「さうなんです。」

「詳しく話して下さい。」とドクターはあつた。「どうか細かいことも省かないで頂きたい。」

ローリーは互ひに胸のうちを諒解しあつたことが分つた

——一九九——

ので、話をすゝめた。

「マネットさん、その事件といふのは、まあ、愛情とか、えゝ、感情とか、えゝ——あなた方がゐられるやうに——精神ですな、その精神に、随分久しい前から未だに續いてゐる鋭い激しい衝撃のことなんです。精神です。この患者はどれくらゐか分らないのですが、久しい間この衝撃に襲はれてゐた、といふ事件なんです。どれくらゐ長かつたか分らないといふのは、患者自身には時間を計算することが出来なかつたと思はれるし、またそれ以外にこれを知る方法がないからです。ところがこの患者は自分でもよく分らない何等かの経過によつて、——いつか公の席で、その事を話して皆を驚かしたのを聞いたことがあります。——この衝撃から恢復して來たのです。しかもその恢復の具合が實に完全で、精神を綿密に働かせることにも、肉體を激しく運動させることにも、それから知識の倉に絶えず新知識を増加させることにも——その知識はもう非常に豊富なのですが——耐へられるやうな、實に聰明な人になつたのです。ですが残念なことには、其處に、」とローリーは一寸話を止めて、深い溜息を洩らした——「輕る再發が起つたのです。」

ドクターは低い聲で訊ねた。「どの位の間に起つたか。」

「丸晝夜です。」

「どんな様子でしたか。」と又彼の手を見遣つて、「その衝擊に關係ある昔の仕藝を何か又始めたのではありませんか。」

「その通りです。」

「所で、あなたは何時か御覽になつたことがありますか。」とドクターは同じ低い聲ではあつたが、はつきりと落ちついて訊ねた。「以前その人がその仕事をやつてゐる處を。」

「一度あります。」

「ではその再發が起つたときに、その人は多くの點で——或はあらゆる點でも——以前の通りだつ

たんですな。」

「どの点でもさうだつたと思ひます。」

「その人の娘のことをお話ししてしたね。娘はその再發のことを知つてゐますか。」

「知りません、娘には秘密にしておきました。いつまでも秘密になつてゐることだと思ひます。知つてゐるものはわしと、もう一人、信用出来る婦人とだけです。」

ドクタアは彼の手を握つてかふ呟いた。「それは實に御深切でした。實に行き届いたことでした。」ローリイも彼の手を握りかへして、暫くは二人とも何もあはなかつた。

「さて、マネットさん」とやがてローリイは思ひやりの籠つた情ある様子でめひ出した。「わしはたゞほんの事務に携はるだけの人間ですから、かふいふ混み入つた問題を扱ふに適して居りません、わしには、それに必要な智識といふもの、學問といふものがありません。指導といふ

—二〇〇—

ものが缺けてゐるのです。安心して正しい指導を仰ぐことが出来る方は、あなたの外にありません。どうか今度の發作がどうして起つたのか話して下さい。まだ再發する恐れがありませんか。それを繰り返させないやうにすることは出来ませんか。又繰り返されたときには、どんな風に扱つたらいいでせうか。一體、どうして發作が超るのでせう？わしは友人の爲めにどうしたらあゝでせう？たゞその方法さへ分つてゐたら、わしが友人に盡したいと思つてゐる一心はどんな人にだつて負けません。ですが、わしはその場合に、どうしてよいかさつぱり分りません。もしあなたの聰明さと智識と經驗とを言つて貰つて、正當な方法がとれたら、わしはいろいろ盡すことも出来ませう。智慧も借りず、指導も受けないでは、何とも盡しやうがないのです。どうかはしの相談對手になつて下さい。わしにもう少しそれがはつきり分るやうにして下さい。わしにどうしたら、もう少し役に立つことが出来るか教へて下さい。」

熱心なこの言葉のあとで、ドクタア・マネットはぢつと考へに沈んでゐた。ローリイに彼を急ぎ立てはしなかつた。

「恐らく、」とドクタアは無理に沈黙を破るやうにしてゐつた。「あなたのいはれた再發が患者自身にさへ少しも豫知されなかつた、といふことはありさうに思へます。」

「患者も再發を恐れてゐたのでせうか。」ローリイは思ひ切つてかふ訊いてみた。

「非常に恐れてゐたのです。」彼は思はず身をふるはせてゐつた。「さういふ心配が、どれほど患者の心を痛めてゐるか、患者を壓へつけるやうなこの問題について、無理に一言でも言はせようとするのが、患者にとつてどんなに難かしく——不可能に近い——ものであるかといふことが、お分りではないでせう。」

「患者が人知れず懊惱してゐるとき、」とローリイは訊ねた。「何とかして、他の人にそれを打ち明けるやうな氣になれば、患者は明らかに救はれることになりませうか。」

「さう思ひます。だが先程もお話ししたやうに、それは不可能に近いことなのです。否、或る場合に於いては——全く不可能だとさへ思ひます。」

「ところで、」とローリイは、暫く沈黙が續いた後で、その手をまたもドクタアの腕にやさしく置いてゐつた。「あなたはこの衝撃の原因を何だとお考へです。」

「わしの考へでは、」とドクタア・マネットは答へた。「最初にこの病氣の原因になつた或る考へと思ひ出が連續して、非常に強くまた異常な姿で甦へつたのだと思ひます。何か極めて苦しい性質の強

烈な聯想が、あざやかに思ひ出されたからだと思ひます。さういふ聯想が、——或る場合に——或る特殊な機會に、——思ひ起されはしないかといふ恐怖

— 二〇一 —

が、長い間患者の心に潜んでゐたといふことは、あり得ることです。患暫は覺悟をしようとしたが駄目だったのです。多分その覺悟しようとする努力そのものが、卻つて餘計に耐へられぬやうにしたのでせう。」

「患者は再發の間にどんなことが起つたか記憶してゐるでせうか。」とローリイは多少の體踏を感じながら訊ねた。

ドクタアは心寂しさうな様子で部屋を見廻したが、頭を振つて、低い聲でかふ答へた。「少しも覺えがありません。」

「そこで、將來のことに就いては、」ローリイはそれとなしに話し出した。

「將來のことに就いては、」とドクタアは再び落ちつきをとり戻して、「わしは非常に望みがあるやうに思ひます、神様のお慈悲で、こんなに早く恢復が出来たのだから、大いに望みがあるやうに思ひます。患者は長い間恐怖し、長い間漠然と豫知しながら、戦つて來た或る入り組んだ事柄の壓迫に、たうたう屈服したが、暗雲が散じ、一過して、再び恢復することが出来たのだから、もうこれで、そんな惡いことは過ぎ去つたと考へてよからうと思ひます。」

「成る程、成る程、それはぬゝ慰めです。どうも有無う！」とローリイはあつた。

「いや、有難う！」とドクタアは恭々しく頭を下げて繰り返した。

「まだほかに是非お教へを願ひたひことが二つあります。」とローリイはあつた。「續けてもよろしいでせうか。」

「あなたの友人にとつても、至極結構なことですから、どうかお話し下さい。」ドクタアは彼に手を差し伸べた。

「それでは申します。先づ第一に、その男は勤勉家で非常な精力家です。非常に熱心に職業上の智識の獲得につとめ、又實驗を試みたり、そのほか種々のことに努めて居ります。あまり働き過ぎるのぢやないですか。」

「わしはさうは思ひません。いつも何かしてゐることが特に必要なのは、その男の心の性質によるのかも知れません。つまり一半は天性の、また一半は苦惱の結果から來たのでせう。健全な仕事に従事してゐることが少なければ少ないだけ、不健全な方向に傾く危険に陥り易いのでせう。その男は自分で自分を觀察して、さういふ發見をしてゐるかも知れません。」

「では、あまり勉強しすぎてゐるのぢやないといふ點は大丈夫ですな。」

「その點は大丈夫だと思ひます。」

「マネットさん、もしその男が今働き過ぎるやうなことがあるとすると——」

「いやローリイさん、さういふことは容易にあり得ないことだと思ひますよ。これまで一方に強い壓迫がありましたの

— 二〇二 —

で、それと平衡をとることが必要なのです。」

「いや事務家といふものは、執拗なものだと思つてお免し下さい。假りに、その男が働きすぎたのだとしたら、その現象が病氣の再發となつて現はれやしなひでせうか。」

「わしはさうは思ひません。」とドクタア・マネットはいかにも自信ありげなはつきりした口調であつた。「先程お話しした一つの聯想以外に、再發させるやうなものはないと思ひます。今後はあの聯想の絃が、異常な不愉快な音を立てさへしなければ、再發するやうなことにならうと信じてゐます。既に起つた後であり、それに、もう恢復した後でもありませんから、さういふ絃の難しひ音を再び想像することは、わしには難かしの事です。わしの考へでは、いやわしは殆んどさう信じてゐるのだが、その病氣を再發させさうな事情はもう盡きてゐるやうに思ひます。」

彼は、精神の微妙な組織が極く小さなことで覆されるといふことをよく辨へてゐる人に見る躊躇氣味と、同時に、特別な忍苦、困難から徐々に確信を克ち徳た人に見る自信とをもつてかふ話した。その自信を減ずることは、友人としてなすべきことではなかつた。ローリイは實際感じてゐた以上に、これで安心もしたし、勇氣も出たといふことを述べて、第二の、そして最後の問題にかゝつた。彼はこれを今迄のうちで一番困難なものだと感じた。だがいつかの日曜日の朝ミス・プロスと交した會話のことを思ひ出し、またこの九日間、自分で見たことを思ひ出せば彼はどうしても、潔くそれに當らなければならぬといふことを知つてゐた。

「この一時的な苦惱——幸に恢復しましたが——の影響のもとに或る仕事が繰り返されたのです。が」と、ローリイは咳拂ひしてゐた。「それを鍛冶屋の仕事だとしませう。鍛冶屋の仕事です。假定の爲め、また説明の便宜上、その男は不幸な時代に小さな轡に向つて働いてゐたことがあつたとしませう。ところが、思ひがけなく、その男が又轡に向つて働いてゐるのが見られたといふことにしませう。その男が轡を手放さないで傍に置くといふことは、悲しいことぢやありませんか。」

ドクタアは手で額を隠して、神經的に牀を踏んだ。

「いつもそれを手放さないで傍に置いてゐたのです。」とローリイは友人の顔を心配さうに見やつていつた。「それを手放した方が良くはないでせうか。」

ドクタアはまだ額を覆つたまゝ、神經的に足踏みをしてゐた。

「御意見をお聞かし下さるのは、容易なことではないのでせうか。」とローリイはあつた。「これは重要な質問だと思ふが……然しわしは——かういひさして彼は頭を振つて、

—二〇三—

口を噤んだ。

「御存じのやうに」とドクタア・マネットは暫く不安な沈黙をつゞけてから、彼の方に振り向いてゐた。「この氣の毒な男の心の奥底の働きを秩序だてゝ説明することは非常にむづかしいのです。この男はかつて、恐ろしくその仕事がしてみたかつたのでした。その仕事が與へられたときの喜びは、非常なものでした。明かにそれは頭の混惑を、指先きの混惑にかへ、また熟練して來るにつれて、精神上の苦惱の複雑さを、手先きの複雑さに代へることによつて、この男の苦惱を大いに救つてくれたのでした。そんな譯で、その道具を全く自分の傍から遠ざけてしまふことには、とても耐へられなかつたのです。今ではこの男も、これまでになかつたほどの希望に満ちてゐるし、一種の自信をもつて、自分のことを話してゐると、わしは思つてゐますが、その今でさへ、この男が萬一その古い仕事を必要とするやうなことになる、しかも、それを見出せないかも知れないといふやうなことを考へると、死人の心臓をさへ慄はすかと思はれるやうな、突然な恐怖の觀念を受けるのです。」

彼が顔を上げてローリイを見たときに、彼自身の様子が今の言葉の説明のやうに見えた。

「ですが——いや御免下さい、わしはたゞ金貨や銀貨や紙幣などのやうな物質的なものばかりを後生大事と取扱ふに過ぎない一事務家として、御教示をお願ひするのですが、あゝいふ物を保存して置くことは、前の迫害を受けたといふ考をも共に残して置くといふことになりはしませんでせうか。マネットさん、もしそんなものがなくなつてしまへば、その恐怖もまた一緒に失くなつてしまふのではないでせうか。要するにその輪を所持してゐるといふことは、その疑惧不安に負けることではありませんか。」

また沈黙がつゞみた。

「あなたもお分りぢやらうが、」とドクタアは身を顫はしてゐた。「それは本當に古馴染なものですからね。」

「わしならそんなものを取つては置けません。」とローリイは頭を振りながらゐた。彼はドクタアが何やら落ちつかなくなつたのを見ると、いよいよきつぱりした調子で、話した。

「わしなら、それを捨てるやうに、その男にすゝめます。わしはたゞあなたの裁斷が欲しいだけです。明らかにそんなものは何の役にも立ちません。さあ、男らしく裁斷を與へて下さい。お嬢さんの爲めです。マネットさん！」

彼の心中に如何に大きな苦闘が戦はれたか、實に見るも異様なものであつた！

「それではあれの名の爲めにさうすることにしませう。わ

一〇四一

しはそれを許します。だが、どうかその男の眼前で取り去らせたくはないものです。其處にゐないときにして下さい。一寸した留守の後で、馴染がなくなつたことを、その男に氣づかせてやるやうにしませう。」

ローリイは早速それを承知した。かふして談話は終つた。二人はその日を田舎で過した、ドクタアは全く恢復した。引き縱き三日の間、彼の様子は極めて良好であつた。四日目に彼はルウシイと、彼女の夫の行つてゐるところに出發した。ローリイは豫めドクタアの音信のないことを説明する爲めにとつた手段を、彼に説明して置いたし、またローリイもそれに調子を合せて、ルウシイへ手紙をやつて置いたので、彼女は何の疑念も抱かなかつた。

ドクタアが立つた日の夜、ローリイは手斧や鋸や鑿や槌などをもつて彼の部屋に入つて行つた。ミス・プロスが、燈火をもつて後に従つた。そこで部屋の戸を閉め切つて、ローリイはいかにも罪深げに、また譚ありげな様子で、あの鞆造りの腰掛けを片々に切り割つた。傍ではミス・プロスが丁度人殺しの手助けでもするよきのやうに燈火をさしのべてゐた。——實際、不氣味な顔をしてゐる彼女は、さういふ仕事に、さう適はしくない人物でもなかつた。屍體を焼く仕事は（この仕事に便利なやう、あらかじめ細かく割られてあつたので）、早速、臺所の爐の中で始められた、道具類や鞆や革の類は皆庭に埋められた。正直な心をもつ人々にとつては、破壊とか祕密とかいふことが、極めて邪惡なことと思はれる、ローリイとミス・プロスとは、この仕事の最中も、その痕蹟を隠しにかゝつてゐる間にも、丁度自分達が恐ろしい犯罪の共犯者であるかのやうに感じた、また殆んどさう見えもした。

二十、願ひ

新婚の兩人が歸宅したとき、一番にお祝ひを述べに來たのは、シドニー・カートンであつた。彼等が自宅に落ちついて何時間もたゝないうちに、彼は姿を見せたのであつた。彼の服装も風采も態度もちつともよくはなつてゐなかつた。然し今日の彼には或る無骨な誠實ともいふ可きものが現はれてゐた。これは、チャールズ・ダーネイの眼に珍らしく思はれた。

彼は機會を見て、ダーネイを窺ぎはに連れて行き、誰も聞く者のないのを見て彼に話しかけた。

「ダーネイ君！」とカートンはゐつた。「僕はわれはれが友人だつたら、と思ひますね。」

「われはれはもうとつくに友人ぢやありませんか。」

「いや君、お座なりにもそんなに言つてくれると有難い、しかし僕は決してお座なりのつもりぢやないんだ、實際、

—二〇五—

僕がわれはれは友人だつたら、といふときには、殆んどそんな氣持はないんです。」

チャールズ・ダーネイは——當然のことだが、——上機嫌で、いかにも親しげに、ではどういふつもりかと訊ねた。

「これはどうも。」とカートンは微笑しながらゐつた。「君の心にお傳へするよりも自分の心で解釋するほうが、づゝと樂なやうに思ひますよ。だがまあ話してみませう。君はあの大變な時のことを覚えてられますか。そら、あの、僕が——僕が、いつもよりも餘程酔つてゐた、あの時のことを——」

「一度大變なことがあつたのを覚えてゐます、無理やりに『たしかに君は飲んでゐらつしやる』と言はせられたあの時でせう?」

「僕も覚えてゐるんです。あゝいふ折の呪ひが、僕の心に重くかゝつてゐるのです。何故つて、僕はいつともそんな折を忘れることが出來ないんですからね。餘命が盡きる時には、大方、それはみんな勘定されることになるのでせう。——いやさう吃驚なさらしないで下さい。お説教なんかしやしませんから。」

「ちつとも吃驚しませんよ、君が眞面目におなりだつて、吃驚なんかしやしませんよ。」

「あゝ！」とカートンは、それを拂ひのけでもするやうに、無頓着に手を振つてゐつた。

「その、たゞ今の酩酊の時、と云つても珍らしくなく——御承知の通り、酔つ沸つてゐるのは始終のことなんですが、あの時は、僕は君を好きになるといふことが厭で厭で我慢が出來なかつたんです。それで君を好きにならなかつたんです。あれをどうか忘れて頂きたいと思ひますね。」

「あんなことはもうづゝと前に忘れてゐましたよ。」

「またお座なりですね！が、ダーネイ君、忘れるといふことは、僕には今君があつたやうにさう容易なことぢやないんです。僕は決してあれを忘れたことがありませんでした。だからさう手輕な御返畢を頂いても、忘れる助けにはならないんです。」

「若し今のが手輕な返畢でしたら、」ダーネイが答へた。「どうぞお許し下さい、私はたゞ、瑣細な事柄を軽く避けようとしたゞけで、別にほかに目的がなかつたのでした。あんなことが君をそんなに苦しめてゐるかと思つて、驚いてゐる位です。私は紳士の面目にかけてかふ君に斷言します。私はづゝと前にそれを自分の心から追ひ出してしまつたのです。いやそれどころか、追ひ出すやうなものは、もとからなかつたのです。あの日、君が私の爲めにして下さつた大きな骨折りを除けて、ほかに記憶しなければならぬほど大切なことがありましたらうか。」

一〇六

「その所謂大きなお骨折りの件については、」とカートンはあつた。「君があれをそんな風に仰しやると、僕は僕で、單なる職業上の場當りにすぎなかつたとしても辯解しなくちや氣が濟まなくなりませう。僕があんなことをしたときには、君がどうなるかといふことなどは、大して心配してゐたやうには思ひません、ゐゝですか！僕はあんなことをしたときには、といつてゐるんです。僕は過去のことをお話ししてゐるんですよ。」

「君は他人に施した恩を、實に軽く見ておいでござす。」とダーネイは答へた。「だが私は、君のお手輕な答のことで喧嘩はしますまい。」

「全く本當のことですよ、ダーネイ君、僕の言葉を信じて下さい！いや僕は肝心の用件からすつかりはづれてしまつた。われはれが友人だといふことの話でしたね。ところで君に僕をよく御承知です。御存じのやうに僕は人間の高尚な立派な活動なら、どんなものにも與ることが出来ない男なんです。若し君がそれを疑ふなら、ストライヴァに訓ねて御覽なさい。あの男はその通りだと申し上げるでせう。」

「私はあの方の助けを借りないで、自分で自分の意見を立てる方がゐゝんです。」

「なるほど！ともあれ、君は僕が放蕩者で、これまで何一つゐゝことをしたことがなく、これから將來もしさうもない人間だといふことを御存知でせう。」

「いや『これから將來もしないゝ』といふことは私には分りません。」

「でも僕には分つてゐるんです。僕がさういふんだから、君は僕の言葉を信じなくちやなりません。ところで、若し君が、僕のやうなこんなやくざな名もない人間が、氣の向いた時に入りに入るのを我慢して下さるなら、自由にお宅に入りに入ることを許して頂きたいんです。つまり昔役に立つたのに免じて、邪魔もの扱ひにせず置いてやるといふやうな不用の家具（僕が君と僕の間に見つけ出したあの似てゐるところがなかつたなら、この不用のといふ言葉の次に、飾りにもならないと附け加へたゐんですがね）の一つと見なして頂きたいんです、僕はそのお許しに甘えるやうなことは滅多になからうと思ひます。一年に四度以上、僕がそれを利用するやうなことは、九分九厘いたしません。自分にその特典があるといふのを知つてさへゐれば、僕にはひどく満足なのです。」

「よろしかつたらどうぞ。」

「それは、僕が願ひした立場にいいよなつたといふことを言葉に換へて仰しやつたのですな。お禮を申します。ダーネイ君、僕はあなたの名前を拜借して、その自由を用ひてもゐゝでせうね。」

一〇七

「今のところでは「私もさう思ひます、カートン君。」

彼等は握手をした。シドニイは彼に背を向けた。一分もたゝないうちに彼は、見たところでは、いつものぐうたらになつてゐた。

彼が立ち去つて、ミス・プロス、ドクタア、ローリイとこれだけで夕方時間を過ぎてゐる時に、チャールズ・ダーネイは言葉ほんやりと今の會話のことを一寸話した。そしてシドニイ・カートンのことを無頓着な、無鐵砲な分らない人聞だとゐつた。彼は別に、シドニイの悪口をゐつたのでもなく、また、含むところがあつていつたのでもない、ありのまゝの彼を見た人なら、誰でもがゐひさうなこ

とをみつたに過ぎなかつた。

彼はこのことが、美しい新妻の心に残つてゐようとは思ひも寄らなかつた。後に、自分達の部屋で彼女と二人切りになつたときに、彼は彼女があつた強い表情の浮んでゐる額を昔の通り可愛く持ち上げて、彼を待つてゐるのを見た。

「考へ込んでゐるね、今夜は。」とダーネイは彼女の體に手をまはしていつた。

「えゝさうよ、チャールズ。」彼女は兩手を彼の胸に置いた。そして何か問ひたげな、注意深い表情で、ちつと彼を見つめた。「今夜は少し考へてゐることがありますの。一寸氣になることがあるものですから。」

「何だね、ルウシイ。」

「あなた、どうかほ願ひですから、決して質問しないといふお約束して下さいますか。」

「約束して下さいますか？ どうかだつて、私がお前に約束しないことがあるものか。」

實際、片手では金色の髪を頬から掻きのけ、片手は彼を思つて脈打つ彼女の心臓に觸れてゐる彼にとつて、どんな約束でもしないことがあらうか！

「わたしね、チャールズ、あのお氣の毒なカートンさんはあなたが今夜仰しやつたよりも、もつと深い同情と尊敬を受けられる方だと思ひますわ。」

「さうかね、どうして？」

「それよ、あなた、わたしに質問なさらないでと申し上げたのは。でも、あの方はさうなんだと思ひますわ——存じてゐますわ。」

「お前に分つてゐれば、それでゐるよ。で、私にどうして貰ひたひといふの。」

「あなた、お願ひですから、あの方にいつでも寛大にして上げて、あの方が傍においでにならないときには、その缺點を大目に見て上げて下さい。お願ひですから。あの方は——滅多に他人にはお見せにならないけれど——眞實のお心を持つた方だといふこと、——そのお心に深い傷を持つ

—二〇八—

ておいでだといふことを信じて上げて下さい、あなた、わたしはその傷から血が流れてゐるのを見ましたのよ。」

「それは濟まないことをした。」とチャールズ・ダーネイは全く驚いてゐた。「あの男にとんだ悪いことをしてゐるかも知れないな。あの男にそんなことがあるとは思ひも寄らなかつた。」

「あなた、さうなんです。わたし、あの方はもうとても直ることはあるまいと思ひますの。あの方の性格にも運勢にも、今更取り返しつときさうな見込みはありませんもの。でも、わたしいつかあの方は、いろいろあつた事や、優しい事や、義侠的な事さへなされるだらうと信じてゐますわ。」

墮落した人を信じきつてゐる、彼女の心情の清らかさが、彼女をひどく美しく見せたので、夫は幾時間でもそのまゝで彼女を眺めてゐることが出来たであらう。

「おゝあなた！」と彼女は彼にしつかり抱きついて、頭を彼の胸にもたせ、彼を見上げてゐた。「わたし達はこんな幸福の中にあつてどんなに心強いかな、あの方はお獨りの不幸の中にあつて、どんなに淋しいかといふことを、どうかお忘れにならないでね！」

この願ひは彼の肺腑に觸れた、「きつと忘れないよ、ルウシイ！ 生命のある限りは覺えてゐるよ。」彼は金髪の上に屈んで、薔薇色の唇を自分の唇に觸れた、そして彼女を兩腕にしつかり抱いた。この時も暗い街頭を飄々と歩いてゐる孤獨の漂浪者が、彼女の純眞な打ち明け話を聞くことが出来た

なら、又、彼女の夫が彼女の優しい青い眼から、——その夫への愛に満ちた眼から——接吻で吸ひとつてやつてゐる、幾滴の涙を見ることが出来たなら、彼は暗い夜に向つて、かふ叫んだかも知れない——しかも、かふした言葉は今初めて彼の唇を洩れたものではなかつたらう——

「神よ、彼女のやさしい同情の爲めに彼女に祝福を興へたまへ！」

二十一、反響する聲音

前にも述べたが、ドクタアの住んでゐる町の一隅は、不思議に物音のよく反響するところであつた。静かな祝福に満ちた生活の中で、夫と、父と彼女自身と、昔から家事取締りとも話對手ともなるミス・プロスを結びつける黄金の糸を絶えず忙しく巻きながら、ルウシイは、穩かによく反響するその片隅の静かな家にあつて、人々の聲音の反響に耳を傾けつゝ幾年も過ごした。

最初のうち、この上もなく幸福な若い人妻の身でありながら、いつの間にか仕事を落して、眼を濡ますやうなときがしばしばあつた。何故なら、あの聲音に交つて、何もの

——二〇九——

かゝやつて来てゐた、輕くて、遙か遠くにゐて、まだよく聞きとれないのであつたが、彼女の心をひどく動かした。彼女の胸を打ち騒がせる希望と疑念——今まで知らなかつた愛の希望と、何時までも存らへてこの新しい喜びを樂しむことが出来るかどうかの疑念——これが彼女の胸を二分した。やがてまた、あの反響のうちに、早死する彼女の墓のほとりを歩く聲音が聞えさうな氣がすることもあつた。淋しく妻に死別して、彼女のことをいたいたしく嘆くと思はれる夫に封する想ひが、彼女の眼までこみ上げて来て、そして波頭のやうに碎けた。

そんな時も過ぎて、小さなルウシイが彼女の胸に抱かれるやうになつた。するとあの近寄つて来る反響にまじつて、子供の可愛い聲音や、片言が聞えるやうな氣がし出した。あの反響がどんなに大きな響をたてやうとも、搖籃の傍に坐つてゐる若い母親は、いつも可愛い聲音や片言がやつて来るのを聞き分けることが出来た。その子供の聲音や片言もたうとうほんとになつた。この日蔭の家は、子供の笑ひ聲で明るくなつた。丁度、彼女が惱みに沈んでゐたときに、その惱みを聽いてくれたあの子供の友なる基督が、その昔『幼兒を抱いた』と同じやうに、彼女の子供を抱き上げたものゝやうに見えた、そして、彼女にとつて神聖な喜びにしてくれた。

この幾年、彼等すべてを結びつける黄金の糸を絶えずいそがしく巻きながら、——彼等すべての生活の織物に、彼女の愉快な感化を織りこみながら、しかもそれを何慮といつて目立たせないで過して来たルウシイは、あの反響のうちに好意ある慰めのひゞきの外には何にも聞かなかつた。その中で、夫の聲音は、強くて活氣づいてゐた。父親のはもの靜かで、落着いてゐた。またミス・プロスを見給へ、毎日々々の仕事に駆け廻つて、まるで手に負へない荒馬が鞭で仕込まれるときのやうに、庭の籬懸の樹の下で鼻息あらく地面を蹴つて、しきりに反響を起してゐるではないか！

長い間には、悲しみの響が聞える時があつても、それは嚴めしいものでも、慘酷なものでもなかつた。彼女によく似た髪が、いたいげな男の子の肉落ちた顔が横はつてゐる枕の上に、まるで後光のやうに振り飢されてゐたとき、そして、その子が輝かしい微笑を漂べて、「お父ちやま、お母ちやま、僕、お別れするのが悲しいの、お姉ちやまとは別れるのも悲しいの、でも僕、誰かに呼ばれてゐるから行かなくちやならない！」とひつたときでさへも、彼女の腕にまかされてゐた魂が、彼女の抱擁

から離れて行くのを見た若い母親の頬をぬらしたものは、たゞ苦悶の涙ばかりではなかつた。『彼等を我に來らせよ、彼等を禁むるなかれ。』(馬太傳十九章十四節馬可傳十章十三節) 彼等は天なる父の顔を見てゐる、おゝ天

— 二二〇 —

なる父よ、祝福すべき言葉よ!

かふして、天使の翼の音も交へたその反響は、地上のものばかりではなく、天の息吹をも、その中に含んでゐたのであつた。また花に覆はれた可憐な墓の上を渡る風の吐息もまじり合つた、それは二つながら、ルウシイには低いさゝやきとなつて—濱の白砂の上に眠る夏の海のつく呼吸のやうに—聞えて來た。その傍では、小さなルウシイが朝の仕事可笑しいほど熱心に手傳つたり、また母親の脚臺のところで人形に衣裳を着せたりして、彼女の生涯に交りあつた二つの都の言葉でおしやべりをしてゐた。

この反響が、シドニイ・カートンの現實の聲音に應ずるときは極めて稀であつた。精々一年に六度ばかりで、彼はあの自由にこの家に入出入りする特權を用ひた。そしてこれまでよくしてゐたやうに、夜になるまで彼等の傍に坐つてゐるのが例であつた。彼は酒に赤くなつた顔をしてこゝにやつて來ることは決してなかつた。彼に關するもう一つの事柄が、その反響の中にさゝやかれた。それは昔からあらゆる眞實な反響によつてさゝやかれて來たものであらた。

若し眞に或る女を愛してゐる男か、その女を失つても、そして女が人妻となり、母となつても尙、潔白な、だが變らない心を持つてその女を思つてゐるとき、その女の子供は彼に不思議な同情をもつ! 本能的に彼に對する憐憫の思ひやりをもつといふ。かふいふ場合に、如何なる微妙な、隠れた感受力が働くかといふことは、どんな反響も語らない。だが、それはその通りである。そしてこゝでもその通りであつた。小さなルウシイが丸々と肥つた腕を他人にさしのべたのは、カートンが初めてゝあつた、彼は彼女が大きくなるにつれていつも彼女と一緒にゐた。あの小さな男の子も、いま臨終といふ間に彼のことを話した。「可哀さうねえ、カートンさんは—僕の爲めにあの人に接吻して上げてね!」

ストライヴァは相變らず、大きな蒸汽船が濁水を遮二無二に押し分けて進むときのやうに、法曹界を肩で押しきつて進んで行つた。それと同時に彼の大切な友人を、船尾に曳かれてゐるボートのやうに、彼の蹟から引張つて行つた。こんな有難い目に會つてゐるボートは、大抵ひどいあふりをくつて、水洩しになるものだから、カートンも矢張り

手も足も出ないやうな生活を送つてゐた。だが習慣といふものは、つき易く又根強いもので、彼は不幸にも、孤獨とか恥辱とかいふ刺戟的な感情のどれよりも、遙かにたやすく、根強くこんな生活に慣れ、こんな仕事を送らねばならなかつたのであつた。それにまた彼は、眞物の豺が獅子にならふなどいふ考を起すやうなことがないのと同様、獅子の手先の豺といふ位地を脱しやうなどは少しも考

— 二二一 —

へなかつた。ストライヴァは財産があつた、彼は三人連子のある或る金持の、またみづみづした未亡人と結婚してゐたのである。三人の息子達は團子のやうな頭に突立つた眞直な髪の毛以外には、特別

に優れたものとは何も持つてゐなかつた。

體全部の毛孔から、鼻持ちならぬ厭味な且那風を滲み出させるストライヴァは、この三人の若紳士を三頭の羊のやうに追ひたて、ソホウのこの静かな一隅にやつて来た。そしてルウシイの夫に三人を弟子にしてやつてくれと申し出たが、またその言ひ草が氣障たつぷりなものだつた。

「やあ、ダーネイ君！チイズ・パンを三片持つて来ました。君達御夫婦がお揃ひで野遊びにいらしたときのお辯當代りです。」

だが三片のチイズ・パンが丁寧な拒絶されると、ストライヴァは大いに立腹した。そして後になつて、この若紳士達の教育にそれを一利用して、あの家庭教師風情のやうに、乞食の癖に徒な見榮を張るやうになつてはならないと彼等を訓戒した。彼はまた素敵な葡萄酒の杯を前にしながら、ストライヴァ夫人に向つて、むかしダーネイ夫人が彼を『ひっかけよう』と試みたとき使つた手管のこと、それから、自分も負けず劣らず手練を盡して『ひっかけられずに済んだ』ことなどを、滔々と雄辯に語る習慣があつた。高等法院での知り合ひの二三人はこの素敵な葡萄酒と虎言の仲間入りをさせられに折々やつて来たが、彼等はストライヴァがあまり度々この虚言を語つたので、自分でもそれを眞實だと思ひ込むやうになつて終つたのだといつて、彼がそんなことを云ひふらすのを恕してゐた、——だがこれは元來邪惡な罪過に性懲りもなく輪をかけることなのだから、こんな悪人は何人にせよ、何處か適當な人目少ない場所につれて行かれて、そこで絞罪にして片付けられるとゐふぐらゐの所が當然であらふ。

時には思ひに沈み、又時には面白がつて笑つたりしながら、ルウシイが耳を傾けてゐたあの反響にはかふいふものがまじつてゐた。彼女は娘が六歳になるまで、この物音をよく反響する一隅で、それに耳傾けて来たのである、娘の聲音、いつも活動的でしつかり落ちついてゐる父親の聲音、愛する夫の聲音、——これ等のものがどんなにひしひしと彼女の心にひびいたかといふことは、語るまでもない。彼女が賢明な手際のぬゝ節約をして、どんなに金銭をかけたよりもずつと豊かに切り盛りしてゐるこの和合した家庭の輕やかな反響は、どんなに彼女にとつて、微妙な音楽になるか、また、父親が幾度も幾度も彼女を獨身のときよりも、結婚してからの方が彼をもつと大事にしてくれる（そんなことがあり得るとすれば）やうな氣がすると語つたことや、

——二二二——

夫が幾度も幾度も彼女に、どんな心配事や義務があつても、少しも變らずに彼を愛し、世話をしてくれると言つて、その上、「ねえルウシイ、まるでこの家には唯一人の人しかゐないやうに、皆を影日向なく扱ひながら、別に忙しさうにも見せず、用があり過ぎるやうにも見せずにおられるお前の魔法ぢみた祕訣は一體どんなものかね。」と訊ねたこと——それやこれやの數多い反響が、彼女の周圍をとりまいて彼女の耳に如何に快くひびいたか、これも述べるまでもあるまい。

だがそこには遠方からの反響もあつて、かふいふ間にも、この一隅に脅かすやうな轟きをたてゝゐたが、小さなルウシイの六回目の誕生日ごろになつて、たうとう恐ろしいひびきを出し始めた。凄まじい海が荒れ狂つて全佛蘭西に大嵐が捲き起つたとしても告げるやうな響きであつた。

千七百八十九年七月中旬の或る夜のこと、ローリイはテルソン銀行から遅くやつて来て、暗い窓ぎはにゐたルウシイとその夫の傍に坐つた、蒸し暑い嵐の夜であつた。三人が三人とも、この同じ場所から電光を眺めてゐたあの昔の日曜日の夜のことを思ひ出してゐた。

ローリイは鶯色の小さな臺を一寸後の方に押しやつて、かふ話し出した、「いやわしは、今夜はど

うでもテルソン銀行で明かさなければなるまいと考へ始めた程でしたよ。一日中、仕事が山のやうにあつて、最初は何かから手をつけてゐるか、どちらの方へ向けばるか分らない程でした。近頃巴里は大變物騒になりましたので、わしどもは實際委託攻めに遭つてゐるわけです！巴里の方のお得意は、急に急いで、わし共の銀行に財産を委託しようと殺到しておいでなやうです。たしかに或る人達の聞では英吉利へ財産を送るといふ事が一種のマニア（狂氣的流行）になつてゐるらしい。」

「それは險惡な事態ですね。」とダーネイはあつた。

「險惡な事態だと仰しやるんですな、ダーネイさん。さうです、ですがわしどもはそれにどんな理由があるのだから分りません。どうもわけの分らん人達です！テルソン銀行でも、わしのやうな者はだんだん年をとつて來てもゐますから、相當な理由もないやうな他の仕事をさせても、さうさう働くわけにいきやしません。」

「何にしても。」とダーネイはあつた。「あの陰氣で、今にも一荒れ來さうな空模様を御覽なさい。」

「成る程、」とローリーは、柔和な氣持がこはれて、愚癡をこぼしてゐるのだといふことを、自分でも信じようと努めながら、彼の言葉に同意した、「一日中煩さぬ思ひをしたので、どんなことをしても輕ぬ氣持になれさうありません。マネットさんは何慮にゐますか？」

「此處ですよ！」この暗い部屋にドクタアが入つて來た。

— 二二二 —

「あなたが御在宅だつたのは有難い。わしは一日中、大急ぎの仕事と、凶ゐ前觸れの爲めの仕事にとり圍まれてゐたもんで、何といふ理由もなく無暗に神経がたかぶつて。ときにお出かけになるんぢやないでせうな。」

「いや出掛けません。宜しかつたら一つバックガモン（雙六）でもしたいものですね。」ドクタアはあつた。

「いや實のところを申し上げると、わしはそんな氣にはなれません。今晚はあなたのお對手にはなり兼ねます。お茶はもうをしまひですか。ルウシイさん、お道具が見えないが。」

「ゐへえ、まだですとも、あなたにと思つて出してございますのよ。」

「どうも有難う。嬢ちやんはもうお牀の中ですね。」

「えへ、ぐつすり寝てゐます。」

「いや、結構々々、何もかも無事で結構つくめです。又、お宅などでは、それに不思議はありませんが、わしは一日中いらいらし通したつたので、十年も老けてしまつたやうな氣がする！濟みませんが、お茶を！どうも有難う。さあこゝに來て、皆のお仲間入りして下さい。皆でちつと坐つてあてあの反響を聞かうぢやありませんか、あなたはあれについて何だか持論をお持ちでしたね。」

「持論なんでものぢやありません、ほんの空想でしたわ。」

「では空想としておきますかね、」とローリーは彼女の手を軽く打ちながらあつた。「あれはどうです。何だか非常に澤山で、高く響くぢやありませんか。まあ、あの音を聞いて御覽なさい……」

* * * * *

倫敦のこの暗い窓際にかふいふ小團圓があつたとき、向う見ずな、兇暴な、危険な、人々の誰の生

活にでも押し入らうとしてゐる足普、一度赤く染まったら容易に二度と清められることの出来ない足普、さういふ聲音が遙か彼方のサン・タントアヌで荒れ狂つてゐた。

その日の朝、サン・タントアヌは四方八方に突起する不気味な案山子の一大集團と化してゐた。波のやうに連つてゐる彼等の頭上には、頻りに幾條かの閃光がほとぼしり、白刃と銃聲が日射しにきらめく。サン・タントアヌの咽喉から、怖ろしひ叫喚がほとぼしる。赤裸な腕の林が虚空にもがいてゐる様子は、木枯しの風に萎えた枝々が立ち騒ぐにも似てゐる。指といふ指は、どんなに離れたところにゐようとも、抛り上げられる武器や、武器として役立ち得るものなら、何んでも必死になつて擲む。武器は誰が與へたのか、今、何處から來たのか、初め、何處から投げ出されたのか、どんな力によつて、さながら一種の稻妻のやうに、一度に二十ぐらゐづゝ、群集の頭上を、うねふねと震へ動いて來るのか、群集の中の誰の眼に

—二二四—

も分らない。だが現に小銃が分配されてゐる、——同様に爆藥莢も、火藥も、彈丸も、鐵や木の棒も小刀、斧、槍、そのほか狂亂した人間の智慧が見出すことが出來、思ひつくことの出來るあらゆる武器が分配されてゐる。ほかに何も手にすることの出來なかつた人々は、手を血だらけにしながら、塀に築かれてゐる石や煉瓦を無理やりにとりはづしにかゝつてゐる。サン・タントアヌのあらゆる人々の脈搏と心臓は熱病的に緊張し、白熱してゐる。そこに住む人間は一人残らず、生命を塵芥のやうに輕んじて、それを犠牲にする機會を狂氣のやうに熱心に望んでゐる。

沸り立つ熱湯の渦巻きに中心點があるやうに、この狂亂はドフ、ルジュの酒店のまはりに渦巻いてゐる。この大釜に注込まれた人間の滴くが一滴残らず吸ひ込まれてゆく渦巻きの眞只中で、ドファルジュ自身は、火藥と汗でもう眞黒になつて、命令を與へ、武器を分け、一人を押し戻し一人を引き出し、甲の武器をとつて乙に武裝してやつたり、——怒號叫喚に渦巻かれながら、われとわが身を勵ましてしきりに働いてゐる。

「傍にあてくれ、ジャックの三、」ドファルジュは叫ぶ、「ジャックの一と二、君達は別々なつて、出來るだけ澤山の愛國者達を率ゐて、その先頭に立つてくれ。家内は何處にゐる。」

「はい、はい！此處よ！」と妻君はいふ。相も變らず落ちついてはゐるが、もう今日は編物はしてゐない。妻君の屹とした右手は、何時もの優しい編針の代りに手斧を握つてゐる。バンドにはピストルと恐ろしい短刀が差してある。

「お前は何方へ行く。」

「今のところは、」と妻君はいふ。「お前さんと一緒に行くよ、そのうちには女連の先頭に立つてるところを、お目にかけるから。」

「さあ、そんなら。」とドファルジュはよく通る聲で叫ぶ。「愛國者たる岡志諸君、用意は出來た！バスタイユへ！」

全佛蘭西の呼吸が凝つて、この『バスタイユへ』なる呪ふべき一語になつたかとはばかり、湧き立つ喊聲と共に、この人間の海は狂ひ立つ。波は波を越え、深みは深みを越え、全市に漲り溢れつゝ、バスタイユ指してひた押しに押しに行く。警鐘、太鼓が亂打される、人間の海は彼等の新らしい目的たる岸頭向つて、白泡噛んでどつと打ち寄せる。攻撃は始まつたのである。

深い濠、二重吊橋、巍然たる石垣、八基の高塔、大砲、小銃、猛火、黒煙。この火煙を旨して——火煙の中で——ドファルジュがこの海の如き群集の先頭に立ち、身を以て大砲に打ち寄せた途端、彼

はもう砲手になつてみた——かふして怖ろしひ二時間の間、酒屋のドファルジュは、勇敢な兵士として働いた。

—二二五—

深い濠、一重の吊橋、巍然たる石垣、八基の高塔、大砲、小銃、猛火、黒煙。吊橋の一つは落ちた！「働け、兄弟、働け！働け！ジャックの一、ジャックの二、ジャックの千、ジャックの二千、ジャックの二萬五千、天使だらうと悪魔だらうと、君達の好きなものゝ名にかけて、働け！」酒屋のドファルジュは、やはり大砲を打つてゐる。大砲は大分前から熱して來てゐる。

「女連はわたしの方だ！」ドファルジュの妻君がかふ叫ぶ、「何ッ！、此處を占領すれや、わたし達だつて男達同様、奴等を殺せるんだよ！」女連は血に乾いた甲高い叫び聲をたてゝ、むらむらと彼女の背後に續く。武器はまちまちであるが、何れも飢ゑと復讐の念を罩めてゐる點は等しい。

大砲、小銃、猛火、黒煙。だがまだ深い濠があり、一重になつた吊橋があり、巍然たる石垣があり、八基の高塔がある。ばたばた倒れる負傷者によつて、荒れ狂ふ海は少し退く。閃く武器、耀く炬火、馬車幾臺かの烟る濡藁、四邊の防柵ではいたるところ力の限り働いてゐる。悲鳴、一斉射撃、怒號、無制限の勇氣、輝き、碎け、飛び散る音、人間の海の阿鼻叫喚。しかもまだ深い濠、一重になつた吊橋、巍然たる石垣、八基の高塔がある。そして酒屋のドファルジュはまだ大砲の傍にゐる、大砲は「四時間も激しく使はれて二倍も熱して來た。

城砦の中から白旗が出る、講和を乞ふ太鼓が鳴る——荒れ狂ふ嵐の中で、これが朦朧と煙つて眼に映るばかりで、何も耳には聞えない。——突如、この海は量り知れぬ程ひろく、高く突起する。と見る間に酒屋のドファルジュを巻き込み、降された吊橋を越え、厚い外壁を通過し、降伏した八基の高塔の間に流し入れる！

彼を押し流して行く大海の力には、とても抵抗出来なかつたので、バスチユ外庭に打ち上げられるまでは、ゐはゞ太平洋の大波の中にあがいてゐるやうに、呼吸づくことも、頭一つ廻らすことも出来なかつた。外庭に打ち上げられた彼は、石垣の片隅に凭れてやうやくあたりを見廻す。ジャックの三が彼の傍にゐる。マダム・ドファルジュはまだ數人の婦人隊の眞先駆けて、城砦の奥深く進んでゐるのが見える。手には窺刀を騎してゐる。到るところ激昂、狂喜、耳を聳し、狂せんばかりの混乱、驚倒せんばかりの噪音、しかもそのうちに恐ろしい默劇が演じられる。

「囚人だ！」

「記録だ！」

「祕密獄房だ！」

「拷問道具だ！」

「囚人だ！」

かふいふききれな幾百千の叫聲怒號の中で『囚人だ！』

—二二六—

といふ一語こそ、人間の海が最も多く叫んだものである。時間や空間と同じく、人間も永遠不盡であるかのやうに、涯しない人間の海は城砦内に雪崩れ込む。先頭の大波がどつと流れこんで、忽ち牢獄の役人を巻き入れ、どんな祕密な隅々でも、一つでも隠し立てすれば、すぐさま殺すぞと脅かしてゐる。

るときに、ドファルジュはその強い腕で、彼等の一人の胸ぐらをとつて——その男は胡麻鹽頭で、手に燃えてゐる炬火を持つてゐた——他の連中から引き離し、壁際に押しつける。

「北の塔を、見せる——」とファルジュはいふ。「早くしろ——」

「一緒にお出で下さい。」その男は答へる。「すつかり、お目にかけます。ですが、あそこには、今誰も入つてゐません。」

「北の塔の百〇五番とはどういふ意味だ。」ドファルジュは訊ねる。「早くゐへ——」

「意味と申しますと？」

「囚人の番號か、監房の意味かつてゐふんだ。返事をしないのは、殴り殺してくれとでもいふ積りか。」

「やつゝけちまへ——」すぐ傍にやつて來たジャックの三が不氣味な嗚れ聲を出す。

「それは獄房のこつてすよ。」

「それへ案内しろ——」

「では、こちらへをひで下さい。」

いつも物に飢えてゐるやうなジャックの三は、談到の摸様が變つて、血を見ることになりさうにもなくなつたのに、明らかに失望して、ドファルジュが牢番の腕をつかむと、彼はドファルジュの腕を掴む。この短い會話の間にも、彼等三人の頭は、互ひに勝れるばかりに近寄つてゐる、まだこの時でさへ、お互の言葉を聞きとるには、かふまでしなくてはならなかつた。人間の波が城砦に侵入して來て、庭や、廊下や、階段に氾濫して、その喧噪が、それほど怖ろしかつたのである。しかもまだ海は城砦の外を一面にとりまいて、深い嗚れ聲でその石垣を打つてゐる、時々その一所から叫喚がどつとわき立つて、水沫のやうに空中に飛び散る。

太陽の光線が決して射したことのない陰鬱な圓天井の下を通つて、暗い土甕や檻の怖ろしひ戸の前を過ぎ、洞穴のやうな梯子段を下り、また階段といふよりは、水の干た瀧とひつた方があゝ、石と煉瓦の急な險しい上り段か登つて、ドファルジュと獄吏とジャックの三は、手に手を繋いで全速力で急いで行く。こゝやかしこで、殊に最初のうちは、例の海の氾濫が彼等をめがけて押し寄せて來て、傍を通つて行くが、階段を下りきつて、ぐるぐると塔によち登るやうになると、もう彼等だけになる。頑丈な壁や、迫持にとり圍まれ

一二二七

てゐる此處では、城砦の内外に荒れ狂ふ嵐は、僅かに鈍い沈んだ音にかつて聞えて來るだけである、彼等が今脱して來たばかりのあの喧囂が、殆んど彼等の聽覺を破つてしまつたやうに思はれる。

牢番は、或る低い戸口の前で立ち止る、がちやんと音をさせて錠に鍵をあてる。そろそろ戸を開ける。一同が頭をこぐめて、室内に入ると、かふあつた——

「北の塔の百〇五番——」

がつしりと鐵格子のはまつた、硝子のない狭小な窓が一ヶ所、壁の高いところにある。その直前には石の目隠しがあるので、室を見るには低く身を屈めて、上を見上げなくてはならない。入つて數フイートのところに小さな煙突があつて、目の詰つた鐵格子がはめてある。爐の中には、久しい以前に燃やされて、羽毛のやうになつた薪の灰の塊りがある。牀几と、卓子が各々一腳、藁蒲團の寢臺が一つある。黒ずんだ壁が四方を劃つて、その一つには錆びた鐵の環がついてゐる。

「おれによくこの壁が見えるやうに、壁にくつ付けてゆつくり炬火を動かしてくれ。」とドファル

ジュは牢番にいふ。

男は命令通りにする、ドファルジュの眼は炬火の光を追つて行く。

「待て！——ジャック、此處を見ろ！」

「A・M！」とジャックの三は貪るやうに讚んでかふ嗅れ聲でいふ。

「アレクサンドル・マネット。」とドファルジュは火薬に汚れてゐる黒い人差し指で、文字を辿りながら彼の耳にかふいふ。「そら、こゝには『哀れなる醫師よ。』と書いてある。この石に曆を彫りつけてあるのは慥かにあの人だ。君の手にあるのは何だ。鐵挺か。一寸貸してくれ！」

彼はまだ大砲の火繩棹を手にしてゐる。彼はこの二つの道具を早速とり換へると、蟲が蝕つた牀几と卓子の方に向ふなり二打、三打、それを片々に砕く。

「明りをもう少し高く上げろ！」と彼は腹立たしげに牢番にいふ。「をひジャック、この砕けたものゝ中を、氣をつけて調べてくれ、ジャック！そら！小刀をやるぞ。」とそれを彼

の方に投げ出して、「簿壘を切り破つて藁の間を探してくれ。おい、お前はもう少し明りを高くしろ！」

牢番の顔を威嚇するやうに見やりながら、彼は爐牀の上を這ひ廻り、煙突を覗いて、その兩側をたゞゝゝ見て見たり、動かして見たりするかと思ふと、それに渡してある鐵格子を壊しにかゝる。二三分たつと漆喰や埃が落ちて來たので、彼はそれを避ける爲めに顔をそむける。それから漆喰の中や、古い友の中や、鐵挺が滑り込むか、無理矢理に押しこまれるかした煙突の割れ目の中を、彼は注意深く探つてみる。

—二二八—

「木片の中には何も無いかね、麥藁の中にも何も無いかね、ジャック。」

「何もないよ。」

「それを皆、部屋の中中に集めよう。さうだ！お前、火を點けろ！」

牢番はそめ小さな堆積に火をつける。それは高く熱く燃え上る。低い弓形の戸口で、又腰をこ集めて、外に出て來た彼等は、火を燃えるまゝにして置いて、中庭の方へ引返した。塔を降りて來ると、彼等の聽覺は改復されたやうに思はれる。やがて彼等は、またあの荒れ狂ふ洪水の中にまじつてしまふ。

彼等は人間の洪水が、ドファルジュを探し求めて、頻りに盛り上つたり押し合つたりしてゐるのが分る。サン・タントア又は、バスチユを防禦し、民衆を射殺した守將を護送する一隊の先頭に、酒屋のドファルジュを立てようと騒いでゐたのである、さもないと守將は審問を受ける爲めに、巴里市廳まで進めないかも知れない、また守將は逃亡するかも知れない、そして民衆の血は（長い年月、全く無價値であつたのが、急にいくらかの値打を持つやうになつた）讐をうつてもらふことが出來なくなるかも知れない。

激情と鬭争のもの凄ちい怒號の世界が、灰色の上衣に赤い裝飾で、人目に立ち易いこの不氣味な老守將を、取り圍んでゐるやうに見える。だがこの世界の中に、たゞ一人きつとして、少しも、動じない人物が見える。しかもそれは女の姿であつた。「そら、あそこに夫がゐるよ！」と彼を指してかふ叫ぶ。「ドファルジュなんだよ！」彼女はこの不氣味な老守將の傍を動かさず立つてゐる。いつ迄も彼の傍を離れずに立つてゐる。ドファルジュの一隊が彼を追ひ立て街々を通つて行くときも、傍を離れずについて行く。彼が巴里市廳に近づいて、誰からともなく、後方から毆られ始めたときも、彼の

傍を離れずにゐる。長い間溜つてゐた棍棒や打撃の雨が激しく落ちかゝつて来たときも、彼の傍を離れずにゐる。打ち殺されて、彼が倒れたときにも、彼の直ぐ傍にゐて、俄かに元氣づいたかと思ふと彼の頸に足をかけて、その酷たらしい短刀——長い間待ち構へてゐた——をもつて彼の首を切り落してしまつた。

時は来た——サン・タントアヌが、街燈代りに人間を街燈柱に吊上げるといふ怖ろしき考へを遂行して、サン・タントアヌの正體と能力を示すべき時は来た。サン・タントアヌの血は昂る、鐵腕による暴虐と壓制の血は注がれる。——バスチユ守將の屍體が、横つてゐる巴里市廳の石階の上に注がれてゐる——マダム・ドフアルジュがその屍體を動かぬやうに踏みすゑて首を斬つた場所に、彼女の鞆の踵の上に注がれてゐる。

——二二九——

「向ふの街燈を下げる！」サン・タントアヌは新しい死刑方法をと、じろじろ探しまはした揚句かふ叫ぶ、「奴の護衛を一人こゝに残して置くぞ！」護衛は街頭柱にぶらりと下つて哨兵任務につかされる。人間の海はそのまゝ雪崩を打つて押して行く。

眞黒な陰惡な波の荒れ狂ふ海、波に波が打ち當つて、何物をも破壊せずには置かないやうにうねり上る海、深さはまだ測られず、力もまだ知られてゐない。騒々しく動揺する人影、復習を誓ふ叫び聲、憐憫の情もその上に微動だも與へ得ぬまでに、苦難の熔鑪で鍛はれた顔——かふいふものゝ交り合つた、悔を知らぬ荒海である。

だが、あらゆる兇猛な怖ろしき表情が生きて動いてゐるこの人間の顔の大海の中に、二組の顔があつて——何を七つ宛の——相互に明らかな對照をなしてゐる。いかなる海のうねりにも、これほど忘れ難い印象を與へる難破物が漂つたことは決してあるまい。この大嵐に墓場を破つてもらつて、俄かに解放された七人の囚人の顔が、人波の頭上高く運ばれてゐる。それらの顔はどれも怯え、途方にくれ、あだかも最後の審判の日が来たものゝやうに、又周圍で歡呼してゐるものが浮びきれない幽靈でもあるかのやうに、彼等は仰天し、呆然としてゐる。他の七つの顔は、これよりも高く運ばれてゐるが、それは七つの死んだ顔である。だらりと垂れた眼瞼、まだ閉ぢ切らない眼は、最後の審判の日を待つてゐる。それは無感覺の顔であるがまだ宙に迷つてゐるやうな、——往生し切らない——表情がある。今は恐ろしげにかふして黙つてゐるが、やがてそのだらりと垂れた眼瞼を持ちあげて、血の氣のない唇で、『汝これをなせり！』と發言しようとするに違ひない顔である。

解放された七人の囚人、槍先きに突き刺した七つの血塗れな生首、八基の高塔のあるあの呪はれた城砦の鍵、斷腸の思ひを抱いて悶死した昔の囚人の手紙やその他の記録類——かふいふものや、これに似た種々なものを警護しつつ、サン・タントアヌの高く反響する聲音が、千七百八十九年の七月中旬、巴里大路を練つて行く。さらば神よ、願はくばルウシイ・ダーネイの空想を破つて、かゝる聲音を彼女の生活より遠ざけたまへ！これは、向う見ずな、兇暴な、危険な聲音だからである。あのドフアルジュ酒店の戸口の前で酒樽が壊れたのは幾年かの昔ながら、一度赤く汚された足は容易に清められやうとはしない。

二十二、海はなほ荒れ狂ふ

憔悴したサン・タントアヌが堅い苦い少しばかりのパンを、打ち解けた抱擁や口々に交はず祝辭の

美味で、出来るだけ和らかにして、有頂天になつてから漸く一週間ばかり

一三〇一

たつたころ、マダム・ドファアルジュは、いつもの通り、お客の番をしながら、勘定臺に坐つてゐた。マダム・ドファアルジュはもう髪に薔薇の花を挿してゐなかつた。何故なら例の『謀者』組の連中は、僅か一週間の中にさへ、サン・タントアヌにお詣りすることを極端に憚るやうになつたからである。この街上に竝んでゐる街燈は、謀者に對して、恐ろしく融通のきく力を藏してゐた。

マダム・ドファアルジュは朝の日向に坐つて、腕組みしたまゝ、店や往來を眺めてゐる。店の中にも往來にも、薄汚い、惨めな連中のぶらついてゐる群が二つ三つ見えるが、いづれも今は自分達の窮迫の上に君臨してゐる或る『力』を明らかに意識してゐる。何時櫛を入れたか分らない蓬々頭に横つちよに乗つかつてゐるぼろぼろの寝帽子さへ、曲りなりにもかふいふ意味を現はしてゐる、『こんな襤褸帽子を冠つてゐるおれにとつて、自分の生命を支へて行くことが、どんなに困難になつて来たかといふことをおれは知つてゐる。だがこんな襤褸帽子を冠つてゐるおれにとつて、お前の生命を斷つことがどんなに容易になつて来たかを、お前は知つてゐるか。』昨日迄何も仕事がなかつたあらゆる瘦せた赤裸の手にとつて、撃つたり斬つたりする仕事、今ではいつでも用意されてゐる、編物をしてゐた女達の指先はものを引き裂くことが出来るといふ経験があるので、兇惡になつてゐる。サン・タントアヌの外貌には變化があつた。サン・タソトアヌの聖像は數百年來、この變化を出さうと鍛錬に鍛錬を重ねられて来たが、最後の仕上げの幾撃ちかゞ途にその表情を力強く現はしたのである。

マダム・ドファアルジュはそれを眺めながら坐つてゐる、さすがにサン・タントアヌ婦人隊の指導者だけに、さうと顔色にこそ現はさないが、心中では大さう喜んでゐる。彼女の率ゐる婦人隊の中の一人が傍で編物をしてゐる。この背の低い小肥りな女は、饑餓に迫つた雜貨屋の女房で、二人の子持ちである、この婦人隊の副隊長はもう『ザ・ヴェンジャンス』(復讐)といふ勇名を贏ち得てゐる。

「あら、お聞きよ！」ザ・ヴェンジャンスはかふいふ。「よ、ちつと聞いて御覽よ！誰が来たんだらう。」

サン・タントアヌ區の一番端れからこの酒屋の戸口まで引いてある地雷火の導火線に突然火がついたものゝやうに、すばやく廣がる囁きの聲がさつと押し寄せて来る。

「おやドファアルジュだよ、」妻君はかふいふ。「靜かに、愛國者の皆さん！」

ドファアルジュは息も切れ切れに人つて来て、被つてゐた赤帽子をかなぐり捨てると、あたりを見廻した。

「お聞きよ、皆さん！」と妻君が再びいふ。「あの人のいふことをお聞きなさいよ！」喘ぎながら立つてゐるドファアル

一三二一

ジュの背後には熱心な眼と、ぼかんと開いた口が、戸口の外側につらりと竝んだ。酒屋の中にゐた者は總立ちになる。

「さあ、お前さん何だい。」

「あの世からの報知だ！」

「何ですつて？」と妻君はさも輕蔑するやうに叫ぶ。「あの世ですつて？」

諸君はあのフウロンの老耄奴を覚えてゐるか、おれ達が飢ゑたら草でも食ふがゝとひつたあいつだ、今時は死んで地獄へ行つた筈のあいつのことだ。」

「覚えてゐるとも！」すべての咽喉は怒鳴る。

「あいつについての報知だ。あいつはまたおれ達の間にあるんだ！」

「おれ達の間だぞ！」再びすべての咽喉が怒號する。「屍骸になつてか？」

「屍骸ぢやねえんだ！あいつはおれ達がひどく怖かつたんだ——これや無理もねえが——それで自分は死んだものゝ態をして、途方もねえ擬葬式をやつたんだ。ところが仲間が、彼奴が生きて、田舎に隠れてるところを見つけて、引つぱつて來たんだ。おれはたつた今、あいつが囚人になつて市廳に連れて行かれるところを見て來た。あいつにはおれ達を怖れるだけのわけがあると、おれは今あつたな、どうだ、皆、たしかにわけがあるだらう？」

七十歳を越えた憐れむべき老罪人よ、よし彼がこれまで彼等を恐れる理由を知らなかつたにせよ、もし今の問ひに答へる皆の叫び聲を聞くことが出來たら、彼は心の奥底までそれを知りぬいたことであらふ。

深い沈黙の一瞬間がつゞく。ドファルジュと妻君は、ちつと互ひの顔を見合せる。ザ・ヴェンジャンスは體を屈める、勘定臺の後方で、彼女の足下にある太鼓に觸れたらしく、微かな音を立てた。

「愛國者諸君！」とドファルジュは蹶然とした聲でいふ。「用意はあゝか。」

忽ち、マダム・ドファルジュの短刀がバンドに挟まれるかと見ると、既に、往來で太鼓が鳴つてゐる、太鼓と鼓手が魔術で現はれたやうである——ザ・ヴェンジャンスは恐ろしい金切聲をあげて、四十のフューリイ（復讐の女神）を一まとめにしたやうに、頭上に兩手を打ち振り振り、家から家へと荒れ廻つて、女連を起して歩く。

慘忍な怒りに燃えてゐる男達は、これを窓から眺めて、ありあふ武器を執ると形相凄まじく往來へ殺到して來る、だが女連の有様こそ不敵者の膽をも寒からしめるばかりの觀物である。彼女等の窮乏を極めた生活が與へ得る限りの仕事を捨て、子供等を捨て、身を被ふまのとてもなく、飢ゆるにまかせて露出しの牀に樽つてゐる老人や病者をして、

——三三——

彼女等は髪振り亂して走り出ると、互ひに勵まし合ひ、われとわが心を勵ましつゝ、猛り狂つて荒々しい叫喚をあげ、荒々しい振舞ひをする。姉妹よ、惡者のフウロンがつかまつたぞ！母よ、老耄のフウロンがつかまつたぞ！娘よ、不埒者のフウロンがつかまつたぞ！すると更に二十人ばかりの女達がこの真中に駆けこんで、胸を打ち、髪の毛を掻きむしつて金切聲を上げる。フウロン奴が生きてゐるか！饑ゑてゐる者は草でも喰へといつたあのフウロン奴だ！うちの父親に何も食べさせるものが無かつた時、草でも食つてると云やがつたあのフウロン奴だ！碌に食べないので乳も出なくなつた時、うちの赤ん坊に草でも吸へといやがつたあのフウロン奴だ！おゝ、聖母様、このフウロン奴を！おゝ神様、この苦難を！死んだうちの坊や、餓死したお父さん、よくお聞き！わたしは、この石の上に脆づいて、きつとフウロン奴に怨みを返してやることを誓ふから！夫たちよ、兄弟たちよ、若人たちよ、わたし達にフウロン奴の血をおくれ、わたし達にフウロン奴の首をおくれ、フウロン奴の心臓を！フウロン奴の屍骸と魂をおくれ！フウロン奴を八つ裂きにしておくれ、あいつを土に埋めてその上に草を生やしておくれ！かふいふ叫び監を上げて、數多の女連は盲ら滅法にあばれ出し、旋風のやうに狂ひまはり、味方をさへも打つたり、引つ掻いたりした揚句、たうたう夢中になつて卒倒する。そして

傍についてゐた男達によつて、辛くも踏みにじられるところを救はれる。

とはゐへ、一瞬時も失はれはしなかつた、ほんの一瞬時も。フウロンは今、市廳にゐる、釋放されるかも知れない。否、若しサン・タントアヌが自分の苦難と、侮辱と、迫害とを覺えてゐる限り、斷じてかゝることはない。武装した男女の群は極めて敏速にこの町から練り出して行く、その強大な吸引力は底の渣滓まですつかり吸ひ取つて行つてしまつたので、十五分と経たぬ中に、サン・タントアヌには、よぼよぼの爺婆が數人と、泣き叫ぶ子供たちの外には、人氣がなくなつてしまふ。

彼等は既にこの時には、あの醜い邪惡な老人が連れて來られてゐる審問廷を一杯に充たして、なほ附近の廣場や往來にまで漁れ出てゐる。ドファルジュ夫婦、ザ・ヴェンジャンス、ジャックの三は最前列の一群の中にあるので、法廷からは餘り離れてゐない。

「御覽よ！」とマダヒドファルジュは短刀で指しながら叫ぶ、「あの老耄の惡者が繩で縛られてゐるところを御覽よ。背中に草を一束くつゝけてゐるところなんぞは大出來だよ。ほゝゝ！全く大出來だよ。今にあいつに食はしてやらうよ！」妻君は短刀を小脇に挟むと、まるで芝居でも見てゐるやうに手をたゞく。

一二三三

マダム・ドファルジュの直ぐ後ろにゐた連中は、彼女の喜んだ理由を後方にゐる者に説明してやる、その連中がまた他の廳中に説明し、それからそれへと傳つて行つたので、附近の往來は拍手の音で鳴りとどろく、この二三時間の長談議——澤山の言葉を篩にかけるやうな氣長な仕草の間に、マダム・ドファルジュが、辛抱しきれぬやうに時々叫ぶ言葉が、同じやうに驚くほど迅速に、遠いところまで反響する、迅速なのも通理、幾人かの男が驚くべき早業で、外側の建物によち登り、窓から中を覗きこんでゐたが、マダム・ドファルジュのいふことがよく聞えるので、彼女と外にゐる群集の聞で、電信機の代りを務めてゐるからである。

やがて太陽は高く登つて、この老囚人の頭上に、希望が保護の光明に似た深切な光線を眞直ぐに射しかける。この寛大な處置には、最早や我慢が出來ない、忽ちの中に、今迄驚くべき長い間立つてゐた塵（混亂）と粉殻（長文句）の牆壁が四方に吹きとばされる。サン・タントアヌが彼を捕へた！

これは早速、一番遠いところにゐる群集にまで知れ渡る。ドファルジュは手摺と卓子を躍り越して、この惨めな惡者を死ぬほど強く抱き締める——マダム・ドファルジュが、その後を追ふたと見る間に、彼が縛られてゐる綱の一本に手をかける——ザ・ヴェンジャンスとジャックの三が、まだ彼等と一緒に起たないうちに、また窓にゐる男達が、高い棲り木から猛禽が舞ひ下りて來るやうに、法廷の眞中に舞ひ下りて來ないうちに——忽ち、「あいつを外へ出せ！あいつを街燈柱のところへ引張つて行け！」といふ叫び聲が、全市に互つて起つたかと思はれるほど響いて來た。

轉んだり、起き上つたり、建物の石段の上で眞逆様になつたり、脆くかと思へば、立ち上り、忽ち仰向けになり、曳きずられ、毆られて、何百といふ手で草や草束を無理矢理に口に挿しこまれて、息もつまるやうになつた上、引つかゝれ、すり剝がれ、喘ぎ、血を流して、しかも絶えず憐れみを願つたり、祈つたり、或る時は人々が彼を見ようとを互に引つぱり合ひをして、彼のまはりに僅かばかりの空地が出來ると、自由にならふと激しくもがき、或るときは人々の足が林立してゐる間を、枯れた丸太のやうに曳きずられる。かふして彼はたうたう致命的な街燈の一つが搖いでゐる一番近くの往來の片隅まで引きずり出される、こゝへ來るとマダム・ドファルジュは彼を放してやつて——猫が廿日鼠に對してやる時のやうに——彼等が用意をすまし、彼がしきりに彼女に哀願してゐる間、無言の

まゝ落ちつき拂つて彼を見つめてゐる。女達はこの間中、彼に向つてさも腹立たしげに金切聲を浴せる、男達はいいつの口に草を詰めて殺してしまへと容赦もなく叫ぶ。彼は一度高く引き

―一二四―

上げられるが、綱が切れる、彼等は泣き叫ぶ彼を捕へる、二度目にもまた高く上げられるが、また綱が切れる、彼等は泣き叫ぶ彼を捕へる。その次には、綱も隣れになつたものか、切れずに彼を吊してやる。彼の頭は間もなく槍尖に刺される。口には一杯青巾をつめてあるので、サン・タントアヌの人々はこれを見て踊り狂ふ。

が、これでこの日のむごい仕事が終わつたわけではない、何故ならサン・タントアヌはこの日の夕暮頃、今日片づけたフウロンの婿で、矢張り人民の敵、人民の侮辱者の一人である男が、騎兵ばかり五百餘騎に護衛されて巴里に入つて來るといふ報知を聞くと、またも叫びわめいて、怒り狂ふ血を躍らせ、沸りたゞせた。サン・タントアヌはよく自立つ紙に彼の罪状を書きつける、彼を捕へる―フウロンのお附合ひをさせてやるには、彼が一軍團に守られてゐたにしても、彼を引つたかつたことであらふ―彼の頭と心臓を槍尖に突き刺す、そしてこの日の三つの獲物を押したてゝ、街々を狼の行列をつくつて練つて歩く。

眞暗な夜になつてから、男達も女達も、やつと子供等のところへ歸つて來る。子供等はパンも食はずに泣き叫んでゐる。そこで見すばらしめパン屋の店が、粗悪なパンを買はふと辛抱張く待つてゐる人々の長い行列にとり團まれる、彼等は空腹で、今にも倒れさうに弱りながら待つてゐる間にも、その日の勝利を祝つて互ひに抱き合ふのみか、いろいろと噂話をしては、更にそれを存分に味つて、かうしてその待遠しい時を過してゐる。次第に、この檻樓をまとつた人々の列は短くなつて、減つて行く。やがて貧しげな燈火が高い窓に輝き始める。通りでは、弱々しい火が燃される、この近隣の幾軒かは、火を共同に使つて夕飯の支度をする、そして各々の家の戸口のところで、それを食べる。

足らぬ勝ちな貧しい夕飯である。肉の氣もまるでなく、また惨めなパンを、うまく食はしてくれるやうな他の調味料も殆んどない。だが人間の友情が、この石のやうな食物にも幾分の滋養物をつぎこんで、それからいくらかのよるこびの火花をうち出すことが出来る。この日の荒仕事に存分、活動した父親や母親は、彼等の瘦せ細つた子供等を對手に、やさしく戯れてゐる。戀人たちは、かふした世界を自分達の周圍や前途に持ちながらも、戀を悟り、希望を持つてゐる。

ドファルジュの酒店では、お客の最後の一群が歸つたときは殆んど曉方に近かつた。ドファルジュは戸締りをしながら、嗚れ聲で妻君にあつた―

「たうたうやつて來たね、お前！」

「えゝ、さう！」と要君は答へる。「これからよ。」

サン・タントアヌは眠つた、ドファルジュ夫婦も眠つた、

―一二五―

ザ・ヴェンジャンスさへも、その饑餓に迫つた雜貨屋と一緒に眠りに就いた、太鼓も休んだ。この太鼓の聲こそ、流血の場でも、急迫の時でも變らないサン・タントアヌに於ける唯一の聲であつた。ザ・ヴェンジャンスはこの太鼓の鼓手として、この太鼓の目を醒まさしきへすれば、バスチユが陥ちる前やフロンが捕へられる前に出したのと同じ聲を出させることが出来た、だがサン・タントア

又の懷に抱かれてゐる男達や女達の嗚れ聲は、そんなわけに行かなかつた。

二十三、火の手は揚る

用水が落ちてゐる村、そしてまたあの道路人夫が毎日毎日出かけて行つて、國道の石をかちんかちん叩いては、彼の憐れな無智な魂と、憐れな瘦せ細つた體とをどうやらつなぎ合せるに足るだけの幾片かのパンを稼ぎ出してゐる村にも變化があつた。崖の上にある牢獄も昔ほど勢力はなかつた。牢獄を守る爲めに兵士はゐたが、もう澤山ではなかつた、兵士を取締る爲めに將校もゐたが、彼等の中の一人として、部下が何をしでかすか知つてゐる者はゐなかつた、——たゞ一つ、多分彼が命令した通りにはならないであらふ、といふことを知つてゐるだけであつた。

見渡す限り、土地は荒廢して、たゞ荒寥としてゐるばかりで、何も産出しなかつた。あらゆる緑の葉、草の葉、穀物の葉は、哀れな人民と向じやうに、萎びて、瘦せてゐた。ありとあらゆるもの元氣がなく、萎れて、壓迫されて、滅茶々にされてゐた。人の住居も、垣根も、家畜も、男も、女も、子供も、そして彼等を住はせてゐる土地までも——あらゆるものが疲れ切つてゐた。

貴族は（個々人として見れば、屢々最も尊敬すべき紳士であつたが）、本來國家の祝福であり、物事に武士道の色を添へ、豪奢なきらびやかな生活の優雅な模範となり、その他これと同じやうなことなら、非常に役に立つた。しかしながら、貴族は彼等全體の階級としては、どうしたものか、物事をかふいふ情態に立ち到らせただけである。明らかに貴族の爲めにつくられた筈のすべてのものが、こんなに早く絞り乾され、絞り盡されたといふことは、何といふ不可思議なことであらふ！きつと、萬物が創造されたときには、何處か近眼的なところがあるに違ひない！とはいふものゝ、事態は正にこの通りであつた、さうして火燧石からさへも、最後の血の一滴が絞りとられ、また拷問臺の最後の一ねぢりがあり度々廻されて、その支への滑車が崩れた上に、今はそれがいくら廻つても廻つても、挟むものがなくなつたので、貴族はそんな不景氣な譯の分らない現象には、背を向けて逃げ始めた。だがこれはこの村や、またそれに似た多くの村に於ての

—二二六—

變化ではなかつた。過去幾十年の間、貴族はその村を振ち上げ、搾りつくして來た。そして狩獵の樂しみの爲め——この樂しみは時としては人民を獵することに、また時としては禽獸を獵することに見出される（かふいふ禽獸を保護して置く爲めに、貴族は野蠻で不毛で荒涼とした甚だ有益な（反語）土地をつくつて置いた。——を除けば、村を訪ねて行くやうなことはなかつた。然り、その變化は、家柄のいゝ貴族達の、目鼻立ちの整つた、さもなくても、生れつきや手入れで美しくされた顔がなくなつた、といふよりも下層民の見知らぬ顔が現はれて來たといふことであつた。

何故なら、現にその時、道路人夫が、たゞ一人塵まみれになつて、おれは塵だから塵にかへらねばならぬ（創世記第三章十九節）といふやうな煩はしひことは考へないで、働いてゐる時に——といふのは、夕飯がどんなに少しよりないか、ありさへすれば、どんなにでも澤山食べてやるのになどといふ考へで心が叫杯だつたので——その對手もゐない仕事からふと目をあげて四方の景色を眺めるときに、何かしらみすばらしい人間の影が、徒歩でやつて來るのをよく見かけた。そんな人間は、以前こそこのあたりで珍らしいものであつたが、今ではよく見かけるやうになつて來た。だんだん近づいて來ると、道路人夫は、毛むくぢやらのさながら野蠻人のやうな顔付をし、背の高い、この道路人夫の

眼にさへも不様に見える木靴を穿いた、氣味の悪ぬ、粗野な、色の黒い男で、澤山の國道の泥と塵を浴びて、澤山の低地の沼臭い溼氣でじめじめし、森を通つてゐる澤山の裡路の刺や樹の葉や苔蘇などが一面にくつ付いてゐるのをよく見たが、別に驚きもしなかつた。

かふいふ男の一人が、丁度幽靈のやうに、六月の或る正午ごろ、彼の方へやつて來た。それは道路人夫が土堤の下の石の積み重ねの上に坐つて、出来るだけ雹の、夕立を避けようとしてゐる時であつた。

その男は彼の顔を見、凹地の村を見、水車小屋を見、崖の上の牢獄を見た。そして自分の無智な心に、それらのものをちやんと見別けてから、やつと分るといふだけのひどい方言で話し出した。

「どうだね、ジャック。」

「おかげで無事よ、ジャック。」

「それちや握手をしよう！」

彼等は握手をした、そしてその男も石の積み重ねの上に坐つた。

「飯は食はないのかね。」

「今日は夕飯がやつとき。」と道路人夫は飢ぢさうな顔付で答へた。

「そりや流行なんだね、」その男は不平らしくゐつた、「ど

一二二七

こへ行つても飯のある奴には會はなかつた。」

彼は黒く滲んだ煙管をとり出して、それに煙草を詰め、火燧石と火打鐵で點火して、やがて煙管が赤くなるまですつぱりすつぱりと吸つた。それから突然、煙管を口から離して、その中へ何かを指でつまんで、落しこんだ、それはぼつと燃え上り、一吹き煙となつて消えた。

「それちや握手しよう！」とこの様子を見てからゐつた、今度は道路人夫の番であつた。彼等は再び握手した。

「今晚かね？」と道路人夫が訊ねた。

「今晚だ。」と男は口に煙管をくはへながら答へた。

「何處でだ？」

「此處だよ。」

道路人夫と彼とは、銃から出る小さな弾丸のやうに彼等の間に飛び込んで來る雹をあびながら、村の空が霽れるまで、黙々と互ひに顔を見合せ、石の積み重ねの上に坐つてゐた。

「教へてくれ！」やがて旅人は山の頂の方へ歩きかけてかふゐつた。

「そら！」と道路人夫は指を延して、返辭した。「こゝを降りて行つて、通りを眞直ぐに抜けて、用水のところを過ぎて――」

「そんなことほどうでもぬ、や！」と對手の言葉を遮り、あたりの景色を見渡しながらゐつた。

「おれは通りも通らねえし、用水のところも通らねえんだよ。」

「さうか！村の上に見えるあの小山の頂から二リーグ位ゐのところだ。」

「ようし。お前はいつ仕事を止めるね。」

「日が暮れるころだ。」

「ぢや行く前にをれを起してくれねえか。おれは休みもしねえで二晩歩きつづけたんだ。どれ、こいつを一服吸つちまつたら、子供のやうに寝ちまふから。起してくれるだらうな。」

「合點だ。」

旅人は煙草を吸つてしまふと、煙管を懐ろに入れ、その大きな木靴を脱ぎ、石の積み重ねの上に、ごろりと仰向けになつた。そしてすぐにぐっすりと寝入つてしまつた。

道路人夫が埃だらけな仕事に取りかゝる時分には、雹の雲は動いて、雲間には青空の輝かしい棒や條斑が現はれ、それが、あたりの野山の上で銀色の微光とうつりあつてゐる。この小さな男は（彼は今では例の青い帽子の代りに、赤いのをかぶつてゐた）、仕事をしながらも、石を積み重ねた上に寝てゐる男の姿に心を惹かれてゐる様子であつた。彼の眼は餘りその方ばかり見てゐたので、道具を使ふのも機械的になり、従つて仕事は殆んどすゝまなかつた。

―二二八―

青銅色の顔、もちやもちやした黒い髪の毛、粗末な毛織物の赤い寝帽子、手織ものと獸物の毛だらけな皮とで造つた粗末な色混りの衣物、がつしりはしてゐるが乏しい生活の爲め瘦せた體格、眠つてゐるときでも、不機嫌に、やけくそにぎゅつと結んでゐる脣、さうしたものが道路人夫に怖ろしく思はれた。旅人は遠い旅をして來たのであつた、足は痛んで、踵は擦り剥けて血が流れてゐた。樹の葉や草がつまつてゐるその大きな木靴を、幾リーグも幾リーグも曳きずつて歩くのは重いことであつたらう。彼の衣物は、彼自身が一杯傷をしてゐると同じやうに、擦り減つて穴だらけになつてゐた。道路人夫は彼の傍に身をこゝめて、その懐中か何處かにもつてゐる祕密な武器を一寸のぞいて見ようとしたが、それは徒であつた。彼は兩腕を胸の上に、その脣と同じやうに固く組んで疲てゐた。道路人夫にとつては、柵や、番所や、門や、濠や、吊橋で堅められた幾多の町も、この男の前には、まるで空と同じやうに思はれた。彼がその姿から眼を上げて、地平線や、あたりを見廻したときに、彼の乏しい想像の中には、どんな障礙にも止められずに、全佛蘭西を踏み越えて、それぞれの目的地を目かけて進んで行く、これと同じやうな姿が浮んで來た。

この男は、雹の夕立にも時々さす明るさにも一向構はず眠つてゐた、その顔に射す日の光にも、物の影にも、體にばらばらと落ちる鈍い氷の塊りにも、またそれが太陽の光線のせいでダイヤモンドのやうな露に變へられたものも、一向構はず眠つてゐた。やがて日が西に低く沈んで、空が眞赤に夕映えた。やがて道路人夫は、自分の道具を掻き集めて、すつかり村に下るばかりに支度が出来ると、彼を起した。

「よし、よし！」と眠つてゐた男は片肘をついて體を起しながらあつた。「あの山の頂から二リ―グだつたな？」

「その位だ。」

「その位だな。ようし！」

道路人夫は風の方向によつて、埃を自分の先にとばせながら、家路についた、そして間もなく用水のところを姿を見せ、水を飲み連れて來られた瘦せた牝牛の間に無理に割り込んで、村中の人達にひそひそと何かさゝやいてゐたが、それは牛の群にまで内鑑話をさゝやいてゐるやうに見えた。村の人達は貧しい夕飯をすませてから、いつものやうに、すぐに寢床に入らうとはせず、また戸外に出て、そこに立つてゐた。村中の人には不思議にも例のひそひそ話が傳染してゐた。その上また不思議なことには、彼等が暗い中を用水のほとりに集つたとき、何かを待つてゐるものゝやうに空の一方を見ることが、傳染してゐた。この

―二三九―

村の役人頭であるムツシュー・ガベエルは、不安になつて來た、それで彼の家の屋根にのぼつて、やつぱりそつちの方角を見てゐた。彼は、煙突の後から、下の用水の附近にゐる暗い人々の顔を見下してゐたが、やがて教會の鍵を預つてゐる聖器守に、そのうち警鐘を打ち鳴らす必要があるかも知れないといふ傳言をした。

夜は更けた。あの古い館をとり圍んで、その館に人を寄せつけないやうに生えてゐる樹々は、闇の中に黒く巍然とそゞりたつてゐる建物を脅かしてもするやうに、折から吹き出した風に揺れてゐた。二つの、露臺の石段の上には雨が激しく降り注いで、大玄關の戸を、丁度急ぎの使ひが家内の者を叩き起してゝもゐるやうに打つてゐた。不安げな突風は廣間の中を通つて、古い槍や短刀の間をくゞり、泣くやうに嘆くやうに階段を駆け上つて、今は亡き侯爵が寝てゐた寢臺の垂幕をゆすつた。東西南北から森を通る重い聲音がして、髪蓬々の粗野な四つの姿が、高い草を踏み分け、樹の枝を踏み碎いて、用心深く進んで來て、中庭で一緒になつた。そこで四つの炬火が別れて、めいめい違つた方角に行つてしまふと、後はまた眞暗になつた。

だがそれは長い間のことではない、間もなく、その館はあだかも發光體にでもなつたかのやうに、それについてゐる何かの光で、不思議にも、はつきりと見えるやうになつた、それから正面の建物の背後には、一條の閃光が躍つて、中の見透される場所を選んで、欄干や圓天井や、窓のありかをはつきりと見せた。やがてその光は、だんだん空高く、廣く、明るくなつた。間もなく何十といふ窓からどつと焰が吹き出した。眼を覽した石の顔は火の中からぢつと見つめてゐた。

館に残つてゐた數人の人々は、家のまはりで微かな騒ぎ聲をたてた、誰かゝ馬に鞍を置いて駆けさせた。拍車をあて、泥を飛ばして闇の中を通り、村の用水の近くの廣場で手綱をしぼり、泡を出したその馬は、ムツシュー・ガベエルの戸口の前に立つた。「助けてくれ、ガベエルさん！助けてくれ、皆さん！」警鐘はゐらだゝしげに鳴つたが、そのほかに（もし警鐘が何かの助けになつたとしても）何の救助もなかつた。道路人夫と二百五十人の特別な同志達は、用水のところで腕を拱いて立つたまゝ、空に上る火の柱を眺めてゐた。

「たしかに四十フイートぐらゐの高さはある。」と彼等は薄氣味悪くいつたが、動かうともしなかつた。

泡をたてた馬に乗つて、館から出て來た男は、馬蹄をかつかつと鳴らして村を通りぬけ、險しい石坂路を上つて、崖の上の牢獄に駆けつけた。門のところには役人の一團が火事を眺めてゐた、彼等から少し離れて兵士の一團がゐた。

―三三〇―

「助けて下さい、役人方！館は火事です！早く助けてゐたゞけたら、大事な品物が焼けずに助かるでせう！助けて下さい。助けて下さい！」役人達は火事を眺めてゐる兵士たちの方を見た、だが何の命令も下さなかつた。そして肩をすくめ、唇を噛んでかふ答へた。「燃えるのが當り前だ！」

馬上の男が再び坂道を駆け降りて、村を通りすぎたときには、村は明々としてゐた。道路人夫と二百五十人の特別な同志は、男も女も一體になつたやうに、燈火を點けるといふ考へから、急いでめいめいの家に飛び込んで、薄暗い小さな硝子窓の中で蠟燭をたてゝゐた。あらゆるものが缺乏してゐるので、蠟燭も、有無をゐはさぬ斷乎とした態度で、ムツシュー・ガベエルから借りなければならな

つた、そして役人頭の方で、一寸躊躇して出し過ぎる様子を見せたので、今までは権力者にはひどく従順だったあの道路人夫が、馬車は篝火にするにはもつて来ぬだ、驢馬は焼肉にして食へるぞと喚きたてた。

館は焰を揚げて燃えるまゝにまかされた。がうがうと荒れ狂ふ猛火の中で、地獄からまつすぐに吹きつけて来る赤い熱風が、その建物を吹き飛ばすやうに見えた。火焔が高くなり低くなる毎に、石の顔があだかも焦熱の責苦を受けてゐるかのやうに見られた。石と材木の大きな塊りが焼け落ちて来たときに、鼻に二つの凹みを持つたあの石の顔は、見えなくなつた。やがてまた煙の中から腕くやうにして出て来たが、それは火炙りの刑にあつて火と闘つてゐるあの残忍な侯爵の顔でもあるかのやうに見えた。

館は燃えた。一番手近の樹木は、火事の火の手をあびたので、焼け焦げて萎び、遠くにある樹木は、あの猛々しい四人の男によつて火をかけられたので、新しい煙の森となつて、炎々と燃えてゐる建物をとり圍んだ。噴水の大理石の鉢の中では熔けた鉛と鐵が、煮えたつた、水は乾いてしまつた、塔の頂上の消火器は、熱にあつた水のやうに消えて、すさまじい四つの火焰の井戸の中に、わづかにしたゝり落ちた。堅固な石壁には、大きな裂け目や割れ目がまるで何かの結晶のやうに擴がつた。呆氣にとられて戸惑ひした鳥は、輪を描いてぐるぐる飛び廻り、やがてこの大火焔の中に落ちた。あの猛々しい四人の人物は、東西南北へと自分達のあげた蜂火に導かれて、夜の暗黒に包まれた道を、次の目的地をさして大股で歩み去つた。蠟燭の光に輝かされた村の人達は、警鐘を占領して、本職の鐘突き人を追ひやつて、歡喜の鐘を打ち鳴らした。

だが、そればかりでは濟まない、饑餓と、大火と、鐘叩きで頭の調子がくるつた村人達は、ムッシュ・ガベルがいつでも家賃と税金の取立てを仕事にしでゐるのだといふこ

— 一三三 —

とを思ひ出して、——ガベルが最近取り立てた税は極めて少額で、また家賃の方は全然なかつたのに——躍起となつて彼に面會を求めた。そして彼の家を取り圍んで、直々で言ふことがあるから出て来ぬと呼びたてた。そこでムッシュ・ガベルは、家の戸に重い門を下ろして、自分一人で考へる爲めに奥へ引つ込んだ。この黙考の結果、更にガベルはまたも屋根の上の煙突の群立つてゐる後方に引つこんで、今度は若し家の戸口が壊されるやうなことがあつたら（彼は復讐的な氣質をもつ小柄な南方人であつた）、手摺越しに眞逆様に下に身を投げ、下にある人間の一人や二人は押し潰してくれようと決心してゐた。

ムッシュ・ガベルは、あの遠くの館の火事を燧燭と蠟燭の代りにし、喜ばしげに鳴る鐘の音と戸口を叩く音の交りあつたものを、普樂代りに聞きながら、恐らく長い一夜をそこで過したことであらふ。かの問屋場の門前の、道の向ふには不吉な街燈が吊されてゐたことは、いふまでもなからう。それは村人が彼の爲め（反語）に敏捷に外してもつて来たものであつた、ムッシュ・ガベルが決心したやうに、いつもそこに飛び込まうと身構へしながら、この暗澹とした海の縁で夏の終夜を明すといふのは、どんなにつらい、不安な氣持であつたらう！だが途に深切な曉が現はれて、村中の藺心蠟燭も蠟がつかしたので、人々は何事もなく四方に散つた、ムッシュ・ガベルは、その間だけは命拾ひをしたやうな氣になつて降りて来た。

その夜か何時か、こゝ百哩以内の處では、そこも亦火事で明るくされて、ガベルよりも、もつと不幸な目にあつた他の役人達があつた、翌日さし上つた朝日が、かつては平和に満ちてゐた街々で

——そして彼等が生れて成長した街で——ぶらりと絞罪にされてゐる彼等の姿を照らし出した。また他の處では、この道路人夫やその仲間よりもつと不幸な村の人々や、町の人々があつた。役人や兵士はこの人々と駿つて勝つたので、今度は彼等の方で、その人々を絞罪にした。だがあの物凄い四人の人物は、何がどうあらうとも、東に、西に、北に、南に、着々と進んで行つた、そして誰が絞罪されたにせよ、きつと火は燃えた。水の方に向いてその火を消すことの出来るやうな高い絞首臺は、どんな役人が如何に數學的才能をつくしても、うまく計算して出すことは出来なかつた。

二十四、磁石岩に引かれて

火の手が揚る、海が荒れる、——怒り狂ふ大海の突進には堅固な大地もゆらぐ、今は最早や引き潮といふものが一つもなく、いつも満潮である、しかもそれがだんだん高まつて來るので濱邊の見物人にひどい恐怖と驚愕を與へる

一三三二

(巴里の暴動が本式の大革命になつて歐羅巴各國に波及したこと)——かふして、嵐の三年は過ぎて行つた。小さなルウシイの誕生日が、更に三回、黄金の絲で彼女の平和な家庭生活の素地に織り込まれた。

幾日となく、幾夜となく、この家の人達は、この一隅に響いて來る反響に耳傾けてゐたが、群集の足音が聞える時には、がっかりするのが常であつた。何故ならその聲音は、彼等の心にとつては、赤い旗(巴里市長の戒嚴旗)の下に喧噪した人々、國家危急の聲に驚いて起つた人々、永い間持續された怖ろしひ魔力によつて、今は野獸と變つた人々の聲音として響いたからであつた。

貴族は、概して、だんだん有難く思はれないやうになつたといふ現象は少しも知らなかつた、また貴族は、佛蘭西ではちつとも用のない者になつてゐるので、佛蘭西からもこの世からも、全く放逐されさうな、非常な危険を招いてゐるといふ現象は、少しも知らなかつた。お伽話にある田舎者が、ひどく骨を折つて惡魔を呪ひ出したところが、その惡魔を一目見るや否や、すつかり仰天して、この敵に何の質問をすることも出來ず、早速逃げ出したといふ、それと同じやうに、貴族も長い年月の間、大膽にも主の祈りを逆に讀んだりそのほか惡魔を呪ふ爲めの咒文を幾つとなく試みたのはしたが、かの恐ろしい姿を一目見ると、忽ち仰天して早速逃げ出したのである。

あの輝かしい宮廷の『ブルス・アイ』もなくなつた。若しゐたら、暴風雨のやうな人民の銃丸的にされたことであらふ。この眼は決してものゝよく見える立涯なものではなくて、——この眼の中にはづつと前からルシファの誇り(神に叛れた天使、天國より追はれぬ前のサタン)の名や、サアダナペラスの豪華(古代ニ、イビの王、奢侈淫蕩の標本)や、土龍のやうな盲目などいふ塵が入つてゐたのだ——だんだん消えて、今はすつかりなくなつた。宮廷そのものが、外の者を一切入れない大奥から、一番外部の、陰謀、墮落、偽善を仕事にしてゐた腐敗しきつた一團に至るまで、悉く滅びてしまつた、王位もなくなつた、それは最後の書信が來るまでは(王政は一七九二年九月二十一日正式に廢された)王宮の中に包圍されて、『停止』の情態にあつた。

千七百九十二年の八月が來た、貴族達はこの時までにあちらこちらへ四散した。

倫敦で貴族の本部となり、集會所となつたものは、自然、テルソン銀行であつた。幽靈は、その生きてゐた頃によく訪れたところへ現はれるといふが、モソセニユールも、同様にギニ金貨一つなく

なつても、かつては彼の夥しいギニ金貨が出し入れされた場所を屢々訪れた。その上こゝには、最も信用することの出来る佛蘭西からの消息が、いち早く着くからでもあつた。且つまた、テルソン銀行は、極く鷹揚な銀行で、今はその高い地位から迂り落ちて、昔

― 一三三三 ―

のお客達なら、非常に氣前よく何かと與へてやつた。またその上、早くから嵐の來ることを察し、掠奪や没收に對する懸念から、用心深くもテルソン銀行に送金をして置いた貴族達の消息が、こゝで屢々、窮迫してゐる同胞の耳に入つたからであつた。加ふるに佛蘭西から新しく來る人は皆、當然のことのやうにして、テルソン銀行に立ち寄つては、彼自身のことやその他の消息を知らせて行くからであつた。かふした種々な理由から、その頃のテルソン銀行は、佛蘭西消息については、あはゞ高等取引所の觀があつた。これが廣く世間に知れた結果、銀行に來ていろいろと訊ねる人々が非常に多くなつたので、テルソン銀行では時々、最近の報知を二二行に書き記して、テムプル・バーを通る人々には誰にも讀めるやうに、銀行の窓に貼り出した。

或るじめじめした霧の深い午後、ローリイは彼の事務机に向つてゐた、チャールズ・ダーネイがその机にもたれて、小聲で彼と話しながら立つてゐた。かつては頭取の應接用の爲めに別にしてあつた、例の妙に人に悔悟の氣を起させる部屋は、今は消息取引所に當てられて、溜れるほどの人が入つてゐた。丁度銀行が閉まる半時間位の前であつた。

「ですが、よしあなたがどんなに若々しい方だとしても、」とチャールズ・ダーネイはいくらか躊躇してゐた。「私はやはりかふ申して置かなくちやならないのです――」

「分りました。わしがあまり年寄り過ぎる、と、かふ仰しやるんでせう。」ローリイはゐつた。

「天氣はきまらず、旅程は長いし、旅行の方法も不安だし、國內は亂れてゐるし、巴里だつて、あなたにとつて餘り安全でないかも知れません。」

「いや、チャールズさん、」とローリイは自信ありげに快闊にゐつた。「あなたが、擧げられた理由は、わしに行けといふ理由にこそなれ、決してこゝに止つてゐるといふ理由にはなりませんよ。わしのことなら大丈夫ですよ。他に邪魔の仕甲斐のある人間が澤山あるのに、誰だつて八十近い年寄りなんぞの邪魔だてをすることはありません、巴里の秩序が亂れてゐるといふお話ですが、若し巴里の秩序が破れてゐないのでしたら、この倫敦の店から巴里の店に向けて、昔から巴里のことも商賣のこともよく分り、テルソン銀行の機密も知つてゐるやうな者を送る必要などないわけでせう。不安な旅行や、長い旅程や、冬の天氣のこともお話にありましたけれど、この長い年月世話になつてゐながら、若しわしがテルソン銀行の爲め、少しばかりの不便を進んで受ける覺悟がないとしましたら、他に誰が引き受けてやりますか。」

「私が自分で行けたらひゝんですが。」とチャールズ・ダーネイは何だか落ちつきのない様子で、聲高に獨言でもいつ

― 一三三四 ―

てゐるやうにゐつた。

「成程、そんな抗議や忠告をして下さるなんて、これはずゑん御深切ですね！」とローリイは叫ぶやうに言つた。「あなたが自身で行けたらひゝんですつて？その佛蘭西生れのあなたが？どうもお

利巧な相談役ですね。」

「いやローリーさん、私が佛蘭西生れであるせゐか、さうした考へが（こゝで申上げるつもりではありませんでしたが）度々心に浮ぶのです。憐れな人民に對していくらかでも同情をもつてゐるだけ、またいくらかのものにせよ、彼等の爲めに、與へたことがあるだけにかゝる思はずにゐられないのです。」と彼は前の何か考へ深さうな態度に歸つてゐた。「ひよつとしたら、今頃自分のいふことに耳を傾ける人があるかも知れないし、そして、彼等に説いていくらかでも、暴動をさし止めさせるだけの力を持つてゐたかも知れない、とかふ考へられるのです。昨夜もあなたがお歸りになつてから、ルウシイに話をしてゐました時に——」

「ルウシイに話をしてゐた時に、と仰しやゐましたね。」とローリーは繰り返して言った。「さうです、あなたはそんな考へを持ちながら、ルウシイさんの名前を口に出して、よくも恥かしくはないんですね。こんな時に佛蘭西へ行きたいと思ふなんて！」

「ですが、私は行くのぢやありません。」とチャールズ・ダーネイは微笑を浮べていつた。「あなたが行くと仰しやるのは、御尤もですがね。」

「いや、わしは本當に出かけるのです。實のところ、チャールズさん。」とローリーは遠いところにある頭取の方をぢろりと見遣つて、聲を低めながらゐた。「あちらで、わしどもの取引がどんなに困難か、またわしどもの帳簿や手形が、どんなに危険に瀕してゐるかといふことは、とてもあなたには分りません。もしわしどもの書類が少しでも掠奪されたり、破毀されたりするやうなことがあつたら、澤山の人々にどんな危ない結果を齎すことになるかといふことは、とても普通の人には分らないのです。ところが、それは何時起るかも知れないのです。あゝですが、巴里が今日にでも火がかけられるか、明日にでも掠奪が行はれるか、分らないやうな情態なんです。で、さうした書類を出来るだけ早く、立派に選り出したり、又その書類を隠したり、或る毀損を加へられない場所へ移したりすることは（貴重な時間を徒にしないで）、もし、それが誰かの力で出来るものとすれば、わし自身その他には殆んどゝんな人間の力にも及ばぬことです。テルソン銀行もこれをよく知つて、口にまで出してゐつてゐるのに、——テルソン銀行のパンをこの六十年間食つてゐながら、——それに腰が少しばかり痛いといふぐらゐの理由で、尻込みが出来ませうか。な

—二三五—

あに、こゝにある六七人の老人連から見れば、わしはまだほんの子供ですよ！」

「ローリーさん、あなたの若々しい勇氣のある精神には全く感心です。」

「馬鹿な！何を仰しやる！——それにチャールズ・ダーネイさん。」とローリーは再び頭取の方をぢろりと見てからゐた。「現在のやうな情態の巴里から、何か持ち出すといふことは、よしそれがどんなものによせよ、殆んど不可能に近いといふことを考へて下さい。書類やその他の貴重品がほんの今日、こゝに届きました（これは絶對に祕密ですよ、あなたにさへこんなことをお話しするのは事務家らしくもないことなんです）、それは思ひもつかぬ奇妙な使ひが持つて來たのです。どの使ひでも、巴里の市門を通るときには、全く髪一本で首を吊されてゐるやうな危あ目に會つて來たのです。他の時なら、わしどもの銀行の小包は、事務的なわが老英國に於けると同じやうに、樂々と往來するのですがね。然し今は何もかも差し止められてゐるのです。」

「あなたは本當に今晩お立ちですか。」

「本當に今晩立ちます。事態は猶豫を許さぬほど切迫してゐるんですから。」

「そして誰もお連れになりませんか。」

「いろいろな人々を推薦して來ましたが、さういふ人達にお願ひすることは何にもないんです。わしはジェリイを連れて行かうと思ひます。ジェリイは、今まで長い間、日曜日の夜毎にわしの護衛になつてくれましたので、あれならよく馴れてゐますから。ジェリイなら誰だつて、英國種のブル・ドックと思ふより他に、何の疑ひをかけるものはありますまいし、又あの頭に、主人に勝れる者があつたら誰にでも飛びかゝつて行くといふより他に何の企計も考へるやうな人間でないといふことが分りませう。」

「又かとお思ひになりませうが、私はあなたの勇氣と元氣には、心から敬服します。」

「わしの方でも、馬鹿なことを仰しやると繰り返すだけの事です！わしがこの小さな使命を果した暁にはテルソン銀行の申し出を入れて、引退して氣樂に暮す事が出來ませう。年寄りになつたと考へるのは、それからの事です。」

この會話はローリイの何時もの事務機の傍で交されたものだが、そこから二ヤード離れたところでは貴族が集つて、今にあの平民の惡黨どもに、どんなにして恨みを晴らしてやるか見て居れと威張りかへつてゐた。この怖るべき革命のことを、それが、種なしに生じたこの世で、唯一の收穫で、もあるかのやうに——革命を起すやうな原因になることは何もされなかつた、若しくは何がされても見逃

— 一三六 —

されてゐなかつたかのやうに——また佛蘭西の人民數百萬の憐むべき情態と、この人民を榮えさせることの出來る資源が、全く濫用され悪用されたことを見通してゐた人々が、革命に先だつ數年前、それが必ずやつて來ることを考へて、彼等の目撃したことを明白な言葉で記録して置かなかつたかのやうに、避難者といふ逆境にある貴族達が話すのは、甚だ眼に餘ることであつた。また土着の英國正教徒がこんなことをいへば、更にひどく眼に餘るものであつた。かふいふ貴族の空威張りが、自分達の立場もなくなると共に、宇宙萬物まで波瀾するやうな以前の情態を取り戻さうとする彼等の無法な計畫と結びつくと、眞實の様子を知つてゐる正氣の人間にとつては、抗議をしないではゐられないのであつた。彼の耳のまほりに聞えるかふいふ空威張りが、彼自身の頭の中の煩い血液の混亂のやうに聞え、その心に潜んでゐた不安がこれと一緒になつて、さつきから、チャールズ・ダーネイを落ちつかなくさせてゐるのであつた。

放談者たちの中には、高等法院のストライヴァもゐた、彼は國家の榮位に昇進してゐたので、尙更盛んにこの問題を論じた。そして平民どもに對して一擧に爆撃を加へて大地の表面から彼等を絶滅させ、彼等なしでやつて行く工夫を、貴族達の爲めに提唱したり、またその本質からいへば、鷲の尻尾に鹽水をたらし鷲族を全滅させる計略に甚だ似た、前と同様の様々な目的を遂げる工夫を持ち出してゐた。ダーネイは彼の言葉を特別の反感をもつて聞いた。ダーネイはいつそこを立ち去つて、もう彼の言葉など耳に入れないやうにしようか、それとも踏み止つて横槍を入れてやらうかと心を肌理兼ねて立つてゐたときに、當然起るべき出來事がかゝる現はれて來た。

頭取はローリイの傍へ寄つて來て、薄汚れた、まだ開封のしてない一通の手紙を彼の前に出して、上書にある宛名の手がかりはまだ少しも分らないかと訊ねた。頭取は、その手紙をダーネイの直ぐ傍に置いたので、彼にはその宛名が見えた、——實に素早く讀みとつた、その宛名こそ正しく彼の本名だつたからである。その宛名は譯せば次の如くなつた。『大至急。前の佛蘭西のサン・テヴェレ

モンド侯爵閣下へ。英國、倫敦、テルソン銀行に託して。』

ルウシイと結婚の朝、ドクタア・マネットはチャルズ・ダーネイに向つて、この本名の祕密は——ドクタア自身の方でその義務を解除しない限り——二人の間だけで堅く守らねばならないといふことを、たゞ一つの緊急な特別な要求としたのであつた。之が彼の本名であることを知つてゐる者は他に誰もなかつた。彼の妻さへもそれについては、何の疑ひも持たなかつた、ましてローリイが疑ふ譯がなかつた。

一三七一

「はい。」とローリイは頭取に答へた。「今こゝにほひでの皆様には大抵お問ひ合せをして見ましたつもりですが、どなたもこの紳士が何處にお住ひか御存知の方はありません。」

大時計の針が銀行の終業時間に近づいたので、大抵の放談者達は、ローリイの事務机の傍を過ぎて行く。彼は何か聞きたさうにその手紙を差し出した、陰謀を企んではよく憤慨する或る貴族がそれを見た、同様に陰謀を企んで憤慨する他の貴族もそれを見た、これからそれ、それからこれへと、すべての貴族がこの住所不明の侯爵について、佛蘭西語や英語でそれぞれ輕蔑したやうなことを何かひつた。

「たしか甥ぢやと思つた——だが兎に角、墮落した相續者ぢや——うむ、あの殺された上品な侯爵のな、」と一人がひつた。「仕合せとわしはその男を知らなかつた。」

「あいつは自分の位置を捨てた卑怯者ぢや。」と他の一人がひつた——この貴族は乾草の荷の中で、兩足を上にして、半ば窒息しながら、漸く巴里を抜け出して來たのであつた——「何年か昔ぢやつたが。」

「新しい主義にかぶれた奴でな。」と三人目のは通りすがりに、眼鏡越しに宛名を覗んでゐつた。「先代の侯爵に反抗しをつて、領地を受けついだ時に抛棄して、それをあの惡黨の群に皆やつたのぢや。あれは今にあいつらから當然のお禮をもらふかとぢやらう。」

「へえ？」と騒々しく喋り散らすストライヴァは叫んだ。

「本當にやつたんですか。そんな人間ですか。どれ、一つそいつの汚らはしひ名前を拜見しませう。この罰當りめ！」

ダーネイは最早や堪へかねて、ストライヴァの肩に手を置いて、かふゐつた。

「私はその人間を知つてゐます。」

「君がですか、おや、おや。」とストライヴァはゐつた。「それはお氣の毒ですな。」

「何故です。」

「何故かと仰しやるんですか。ダーネイ君。君はその人間のしたことを聞きましたか。こんな場合に何故かなど、お聞きなさらん方があゝでせう。」

「ですが、私は何故かとを聞きしてゐるんですよ。」

「それでは繰り返して申しますが、ダーネイ君。お氣の毒なことです。わしは君がそんな法外な質問をなさるのを聞くとお氣の毒に思ひます。こゝに、開關以來かつてない有害な、瀆神的な惡魔の掟にかぶれて、彼の財産を、殺人商賣の卸賣をするやうな極惡なこの世の屑どもにやつてしまつた人間があるのですぞ、だから、君のやうな青年を教育する任にある方が彼と知り合ひなのはお氣の毒だといふのに、その理由をお聞きになるのですか。まあ宜しい。君にお

―二三八―

答へしませう。わしはさういふ惡漢に近寄ると汚く染まると信じてゐるから、それでお氣の毒だといふのです。それが理由です。」

あの祕密の約束に氣がついてゐたので、ダーネイはやつとのことで我慢してゐることが出来た。そして僅かにかふゐつた。「あなたにはその紳士のことがお分りにならないのでせう。」

「いや、わしは君を議論で追ひつめる術は分つてゐるんですよ、ダーネイ君」と威張屋のストライヴァはゐつた、「それを一つやつてお目にかけてませう。若しその人間が紳士であるとすれば、わたしには彼のやつたことが分りません。どうぞわしが御挨拶申上げてゐたとその人に傳へておいて下さい。またこの世の財産と地位とを、あの人殺しの暴徒どもに與へた以上、彼自身が暴動の先頭に立たないのが不思議だと思つてゐることも傳へておいて下さい。ところが紳士諸君、生憎なものでして、」とストライヴァはあたりを見廻して、指をばちばち弾きながらゐつた。「わしは人間の本質といふものを多少辯へてゐるのでお話しませんが、あいつのやうな人間は、あゝいふ大した乾分達のお慈悲に安心してすがつてゐる位なんですから、到底、あなた方のお眼の前に出て来るやうなことはありません。ありませんとも、紳士諸君。彼はいざ戦争となつたら最後、いち早く尻に帆かけて、こそこそ逃げて行つてしまふでせう。」

これだけゐつてしまふと、最後に指をばちんと一つ弾いて、ストライヴァは彼の聽衆の稱讚の中を、悠々と肩で風を切つてフtright街に出て行つた。皆が銀行を出て行つてしまふと、ローリイとチャーلز・ダーネイだけが事務機の傍に残つた。

「この手紙をお預かり願へませんか。」ローリイはゐつた。「お渡しになる宛名の人は御存知なんですかね。」

「分つてゐます。」

「御面倒でもどうかかふ言ひ譯して下さい、わしどもの考へでは、この手紙はわしどもの銀行で何處へ轉送してよいか知つてゐるかも知れないといふので、此處宛にされたものだと思ふといふこと、それからこゝへ來てからもう大分経つてゐるといふことをお話し願ひたいものです。」

「話しませう。あなたはこゝから巴里へお立ちですか。」

「八時に、此處から立ちます。」

「お見送りに後程また参ります。」

自分自身でも、ストライヴァに對しても、また他の多くの人々に對しても、何となく落ちつかない氣持を感じたので、ダーネイは出来るだけ急いで、ザ・テムブルの靜かなところに来ると、例の手紙を開けて、讀んで見た。その内容はかふであつた――

―二三九―

『巴里、アヴェイの監獄にて、

一七九二年六月二十一日

前侯爵閣下

小生は村人の手によつて長い間生命を脅かされてゐましたが遂に甚だしき暴行を加へられて、不名譽にも捕縛され、長き旅路を徒歩にて、巴里に連れて來られました。小生はその旅路で具さに苦難をなめました。然しそれだけではありません、小生の家は破壊され――焼き拂はれました。

前侯爵閣下、小生は或る罪状によつて、入牢させられて居ります。またそれが爲めやがては法廷に喚問され生命を失ふことになるであります（閣下の寛仁なる御助力なくば）。その罪状は彼等の語るところによれば、人民の權威に封する叛逆だと申すことで、小生が一亡命者の爲め、人民に對して不利益なる行爲をしたと申すことださうであります。小生は閣下の御命令に従つて、人民の爲めこそ計れ、不利益になるやうな行爲はしなかつたと申述べましたが徒でありました。また亡命者の財産の没收に先きだつて、小生は人民が拂はなくなつた税金を免除してやり、家賃も決して取立てず、何の訴訟なども起きなかつたといふことを申し立てましたが徒でありました。たゞ一つの答へは、「お前は一亡命者の爲めを計つて働いたが、その亡命者は何處にゐるか」といふことであります。

あゝ！お恵み深き前侯爵閣下よ、その亡命者は何處にゐるのでございませうか。小生は眠つてゐる間も、あの方は何處においでかと、呼びます。小生は天に向つてあの方は、來てわしを救つては下さらぬでせうかと尋ねます。が、何の答へもありません。あゝ、前公爵閣下、小生はこの心細き叫びを巴里で有名なチルソン（テルソン）とかいふ大銀行を通じて、萬一閣下のお耳に達することもあらんかと、願ひつゝ、海のあなたに送ります。

神に封する愛にかけ、正義、寛大、閣下の尊い御家名に對する愛にかけて、前侯爵閣下、何卒小生を救ひ出され、放免させられんことを懇願いたします。小生の越度は閣下に對して忠實であつたと申すことにあります。おゝ前侯爵閣下、何卒閣下も小生に對して眞實をお示しあらん事を！小生の生命が刻々と、死に近づきつゝあるこの恐ろしき牢獄より、前侯爵閣下よ、小生は小生が如何に悲しき、不幸なる奉仕をしたかの保證をお邊り致します。

敬具。

ガベエル拜』

ダーネイの心に潜んでゐた不安は、この手紙に勵まされて、強烈な意氣として燃えたつた。忠實な老僕の陥つてゐる危険——彼の唯一の罪状は彼自身及び主人の家族に忠實だといふことであつた——それが、眞正面からダーネイを呵責するやうに思はれたので、彼はザ・テムブルをあちこちと歩いて善後策を思案しながらも、われ知らず、その顔を通行人に隠すやうにしてゐた。

彼は、この古い名家の悪業と悪評とを絶頂に至らせたあの行爲を怖れるあまり、また叔父に對して抱いた憎惡に満ちた疑念のあまり、また彼が繼ぐと考へられてゐたあの崩れかけてゐた建物に對して、彼が良心から反感を持つてゐたあまり、自分が十分なることをなし得なかつたことはよく知つてゐた。彼はまたルウシイに對する愛の爲めに、自分の社會上の身分を拋棄することを——自分の心にとつては決して珍らしいことではなかつたにも拘らず——餘り急いで、十分なることが出来なかつたことも知つてゐた。彼は、それを秩序だてゝ、自分でそれを監督しながらやるべきであつたといふこと、また自分もさうするつもりであつたが、遂に出來ずに止んだといふことも知つてゐた。

彼自身の英國に於ける選ばれた家庭生活の幸福、いつも忙しく仕事に従つてゐなければならぬこと、時勢の急速な變化と騒亂が、次から次へと恐ろしく迅速に起つて來るので、今週の出來事の爲めに、まだ不完全な前週の計畫が取り潰されてしまふかと思ふと、もうその次の週の出來事が新しく起つて來ること、かふした境遇の力に、自分が屈服したのだといふことを、彼はよく知つてゐた、——それを心配しない譯でもなかつたのだが、彼は、やはり絶えず倍舊の勇氣を出して、反抗をつゞけること

もしなかつたのだ。彼が活動の時代を待ち受けてゐたこと、時勢が動搖し葛藤をつゞけてゐる中に大事な活動時代が去つてしまひ、やがて貴族が群をなして、あらゆる國道間道を通つて逃れて來たこと、彼等の財産が沒收と破滅の運にあひ、彼等の家名さへも抹殺されることになつたこと、これらの事柄は、その爲に彼を弾劾するかも知れぬ佛蘭西の新當局者と同じやうに、彼にも明瞭に分つてゐた。

だが彼は何人を壓迫したこともなかつたし、何人を投獄したこともなかつた。彼は當然取つてもゝ租税でさへ、厳しく催促して支拂はせることなど思ひもよらなかつた。それどころか自ら進んでその租税を廢止した、そして自分は、何の庇護もない世の中に身を投じ、そこで自分だけのさゝやかな地位を贏ち得て、自分のパンを稼いだのであつた。ムツシュー・ガベルは、書付けにするされた命令によつて、疲弊したうるさい領地を預かつて、よく人民をゐたはり、與へ得られるものゝある限りは、たとひ少しにせよ與へたのだ。――あの嚴しむ貸主が冬になつて人民にとつてもゝとゆるす薪のやうなものや、夏に同じ貸主が取り上げないで置くやうな産物などは人民に與へた。たしかに、ガベルは、自分の身の安全の爲めに、その事實を訴へて罪なき證據としたことであらふ、それだけに今は、どうしても

――二四一――

その證據を出さないわけには行くまい。

これは、チャールズ・ダーネイが懷き出した、バリへ行かふといふ決死の覺悟を堅めさせた。

然り、昔嘶にある船乗りのやうに、風と潮流は、彼をあの磁石岩（船を引きつけて破壊させる怪石）こゝではバリのこと）の力の働くところまで吹き流した。岩はしきりに彼を引き寄せてゐた。彼はどうしても行かなければならない。彼の心に浮ぶあらゆるものは、ますます早く、ますますしつかりとこの怖るべき引力の方へ彼を狩り立てた。彼の不幸な故國では、惡の傀儡がよつてたかつて惡の目的を行つてゐるといふこと、そんな人間より當然自分の方が優れてゐると考へてゐる彼が、國外にある爲め、流血を止め、仁慈と人道の要求を主張するやうに多少の努力を試みる事が出來ないといふこと、これが、彼の内心の不安であつた。半ば抑へてはゐるが、まだ半ば彼を呵責するやうなこの不安から、彼は自分自身の姿と、あの義務を守る勇敢なガベルとを比較すると、ひどく際立つてゐることとに氣がついた。こんな比較（彼自身にとつては不利な）をしてゐると、彼の心を痛く棘した貴族達の嘲笑と、奮怨がある爲めに、取り分けて粗暴な振舞で彼を苛々せたストライヴァの嘲笑とがつゞゐて思ひ出された。この嘲笑のあとには、ガベルの手紙がつゞゐて來た――今にも殺されるかも知れない無實な罪の囚人からの、彼の正義と名聲とに對する訴へである。

彼の決心は定つた。バリへ行かなければならない。然り、磁石岩が彼を引き寄せつきあつた。彼はどうしてもそれに乗り上げるまで、船を進めなければならぬ。彼にはどんな岩も分らなかつた、どんな危険も殆んど見えなかつた、たとひ未完成のまゝで残して置いたとはあへ、あれだけのことを成し遂げた自分の意志を思ひ出したとき、若し自分がその意志を貫徹するために佛蘭西に姿を現はしたなら、それは國を擧げて感謝されるにちがひない。すると、善事をするといふ華かな幻影が――これは屢々、數多の善良な人々の、希望に満ちた眩惑となる――彼の前に現はれた。彼はこの幻想のうち、あの怖ろしく兇暴に荒れ狂つてゐる革命を、幾分にもせよ、指導し得る力のある自分の姿をさへ考へてみた。

彼はかふした決心を堅めて、あちらこちらと歩きながら、これはルウシイにも父親にも、自分が行つてしまふまでは知らせないやうにしなくてはならないと考へた。ルウシイ

には離別の苦痛を與へずに濟ましてやりたい、また、昔の危険な土地に彼の考へを向けることをいづも厭がつてゐる父親には、これを出來てしまつたこととして諦めさせたい、不安と疑惑のどつちつかずの情態には陥らせないやうにしたい。彼の處置の不十分なことが――父親に佛蘭西といふ

―二四二―

ものから來る昔の苦い聯想を惹き起させまいといふ骨の折れる心配の爲めに――どのくらゐまで、父親の所爲に歸せられてゐるか、彼はそんなことを考へようとはしなかつた。だがかふいふ事情もまた、彼の處置に影響を及ぼしてゐたことは明かであつた。

彼はあわたゞしくいろいろな事を考へながら、あちらこちらと歩き廻つてゐる中に、テルソン銀行に戻つて、ローリイに別れを告げる時刻になつた。彼は巴里に着き次第、早速この老友に會ひに行くつもりである、だが今は自分の意向について何もいつてはならない。

驛馬をつけた馬車が銀行の玄關の前に用意されてゐた、ジェリイは長靴を鎌めて、旅支度をしてゐた。

「私はあの手紙を渡して來ました。」とチャールズ・ダーネイはローリイにゐつた。「返事を書いてお頼みすることはいけないといつて止めて來ましたが、口頭だけでしたら、お傳へ下さいませうね。」

「お傳へしますとも、お安いことで。」とローリイは答へた、

「危険なことさへなければ。」

「ちつとも危険なことはありません。もつともアヴェイ監獄の囚人への傳言ですがね。」

「名前は何といひますか。」とローリイは手に開いた手帖を持つて訊ねた。

「ガベエル。」

「ガベエル。で、その入獄してゐる不幸なガベエルさんへの傳言と申すのは。」

「たゞ『あの人は手紙を受けとつた。行く』といふだけで澤山です。」

「いつといふことは？」

「その人は明晩出發するでせう。」

「で、誰だといふことは？」

「いや、ゐるのです。」

彼はローリイの手助けをして、澤山の上衣や外套を着せてやつた、そして彼と一緒に、この古い銀行の暖かな空氣から、フライト街の霧深い大氣の中に出た。「ルウシイさんと小さなルウシイちゃんに宜しく、」とローリイは別れ際にゐつた。「わしが歸つて來るまで、大事にお世話して上げて下さい。」チャールズ・ダーネイは馬車が軋り出したときに、頭を振つて、賢束なさうに微笑した。

その夜――それは八月の十四日であつた――彼は遅くまで起きてゐて、二通の熱情をこめた手紙を書いた。一通はルウシイに宛てたもので、止むを得ない義理の爲めに巴里へ行かなければならぬことを説明し、また巴里へついても自分の體に何の危害も受けるやうなことはあるまいと確信してゐるといふ理由が、いろいろと書き記してあつた。他

―二四三―

の一通はドクタアに宛てたもので、ルウシイと愛する子供の世話を彼に託した上、ルウシイに書いた

と同じ事柄を、非常に強い確信をこめて、こまごまと説明してあつた。また雙方に對して、巴里に着いたら、早速自分の無事である證據として手紙を送つてよすからと書いた。

結婚してから初めて、自分の心に隠し事をしながら、何気なく家族と一緒にゐたこの日は、つらい一日であつた。家族が少しも疑つてゐないのに、たとひ悪意がないとはゐへ、彼等を欺しつゞけるといふことは、つらい事であつた。だが、幸福さうに、忙しく働いてゐる妻を、愛情こめて一瞥すると、この差し迫つた出来事については、何も語るまいといふ決心を堅めた（彼は半ば打ち明けてしまはふといふ決心になつてゐた、彼女のやさしい助力を待たずに何かするといふことは、彼にとつてひどく異様に思はれたので）。かふしてこの日は速かに経つた。夕方早く、彼は彼女を抱き、彼女にも劣らず可愛い小さなルウシイを抱いて、暫らくしたら歸つて來るといふ様子を見せた（彼はありもせぬ約束にかこつけて家を出かけた、そして衣類を入れた旅行鞆はもうちやんと隠してあつた）。かふして彼は、陰鬱な街の重くるしい霧の中へ、更に重い心を抱いて出て行つた。

今はもう眼に見えぬ力が、彼をぐんぐんと素早くその方へ引いてゐた、あらゆる潮流も風もその方へ向つて眞直ぐに強く流れてゐた。彼はあの二通の手紙を信用の置ける門番のところに頼んで、眞夜中の半時間ぐらゐ前ごろ、渡してくれるやうに、決してそれより早く渡してくれぬやうにと頼んだ。彼はドーヴァ行きを雇つた、そしてその旅行を始めた。

『神に到する愛にかけ、正義、寛大、閣下の尊い御家名に封する愛にかけて！』と、あの不幸な囚人はかふ叫んでゐる、彼がこの世で愛するすべてのものを後に残して、致命的な磁石岩の方へと、浮き漂ふて行つたときに、沈み勝ちな彼の心を勵ましたものは、この叫び聲であつた。

―二四四―

第二編 嵐の蹟

一、獨房拘禁

千七百九十二年の秋のこと、英國から巴里に向つたこの旅人は、遅々として道を進んだ。たとひ玉座から落された不運な佛蘭西王がその榮光につゞまれて依然君臨してゐたにせよ、やはりこの通りの惡の道や惡の馬車や惡の馬のために、途中で暇取つたであらふ、だが時勢の一變した今では、これとは違ふ他の障礙物が充ち満ちてゐる。何處の町の關門にも、何處の村の徴税所にも、いざといへば直ぐにも爆發したがる國民銃を手にして、愛國市民たちの一團がある、往く者、來る者は誰でも呼びとめ、四方から訊問の矢を浴せかけ、彼等の通行免狀を檢査する、手許にある人名簿に照して彼等の姓名の有無を探す、さてそれから、彼等を追ひ返すなり、通らせるなり、或は抑留したまゝ拘禁するなり、すべて彼等愛國市民たちの氣紛れな判斷至空想が『自由、平等、友愛か、然らば死』を標榜する『一にして不可分』なるこの生れたての共和國の爲めに最善と思つたまゝに處置するのである。

佛蘭西の土地を踏んでまだ幾リグの旅程もつゞけぬうちに、チャールズ・ダーネイは早くも、巴里で運よく善良なる市民と公認されることになるまでは、二度とこの道を通つて歸れる望みなどない――といふことが分り始めた。今となつては何事が起らうとも、目的地まで旅しつゞける外はない。さびれた村落が彼の身をつゞむ時、到る處に見受ける關門の扉が彼の後にした道に下される時にさへ、彼はそれを自分と英國の間を遮る次々と續く鐵の扉の一つだと知つたのである。到るところ、油斷の

ない眼があくまで彼の周圍に光つてゐる、たとひ彼が網をかけられてゐるか、又は軍鶏籠で目的地まで送られてゐるのだとしても、これ程甚しく自分の自由の奪はれてゐることを感じなかつたであらう。この、到るところ油断なく光つてゐる眼が、建場から建場までの一丁場の間で、二十度も彼の足を止めさせるばかりか、一日の内に、眼を光らした連中が後から乗りつけて彼を引き戻したり、先廻りをして引き止めたり、彼と馬を並べて監視したり、様々なことをして何度となく彼の旅程を遅らせるのであつた。一人で佛蘭西の旅をつづけてから幾日か経つたころ、彼は、まだ巴里から遙か遠い國道沿ひの小さな町で、くたびれ切つて寢牀に就いてゐた。

あの可哀さうなガベエルがアヴェイの牢獄から出した手紙さへとどかなかつたら、どんなことがあつても彼をこゝま

―二四五―

で連れ出すことは出来なかつたらう。この小さな土地の自警番所では、何かと面倒がひどかつたので、彼は、自分の旅も、いよいよ大事の瀬戸際に來たといふ氣がした。だから、彼が夜の明けるまで身柄を預けられてゐた小さな宿屋で、眞夜中に叩き起されても、それほど驚きはしなかつた。

起しに來たのは、おづおづしたこの地の町役人と三人の愛國志士で、三人の方は武裝して、粗末な赤帽子をかぶり、煙管を口にくはへてゐたが、來ると直ぐ、寢牀に腰を下した。

「亡命者」と町役人はあつた。「これから、護衛つきで巴里まであんたを送らせることにする。」

「いや君、巴里に行くのは何よりも本望だが、その護衛といふのはなくてもゝと思ふがね。」

「黙れ！」赤帽子の一人が小銃の臺尻で蒲團を叩い怒鳴つた、「溫和しくしろ、貴族め！」

「この愛國衆のいふ通りぢや、」役人はおづおづしながら口を挟んだ。「あんたは貴族やで護衛が無いことにや、―それから、その入費を出して貰はにやならん。」

「仕方がなからう、」とチャールズ・ダーネイはあつた。

「仕方がないだど！おい、あいつのいふことを聞け！」前の赤帽子はかふ喚いた。「あの衛燈の柱に掛けられねえやうにして貰ふのが、有難くねえとでもいふのか！」

「さうぢや、いつも愛國衆のいふ通りぢや、」町役人は口を挟む。「亡命者、起きて支度をしなさいよ。」

ダーネイはいはれる遞りにして、あの自警番所に連れて行かれた。番所では、粗末な赤帽子の多数の愛國志士たちが篝火を圍んで煙草をふかしたり、酒を飲んだり、眠りこけたりしてゐる。こゝでダーネイは護衛費をたんまり取られて、朝の三時に濡れた道を、護衛と共に乗り出した。

護衛といふのは馬にのつた二人の愛國志士で、三色章を附げた赤帽子に、例の國民銃と廣刃刀で武裝してゐるのが、彼の兩側に一人づゝ乗つて行く。護衛されてゐる本人は自分で馬の手綱をとつてはゐるが、緩い細繩が轡に結びつけられ、愛國志士の一人がその端を手頸に捲きつけてしつかり握つてゐる。こんな風で、彼等は、顔に吹きつける突き刺すやうな雨を冒して出かけた、重苦しい龍騎兵流の跑步で町の凸凹の多い、鋪石道をがた踏みならして、泥深い沼のやうな道に出る。こんな風で、彼等は、馬と速力の外には何の變りもなく、彼等と首都の間にひろがつてゐる幾リーグかの泥濘道を辿りつくしたのである。

彼等は夜歩いた、夜が明けて二時間経つと停つて、黄昏の帷帳が落ちるまで休んだ。護衛者達の衣物はひどく慘めなもので、赤裸の脛には麥稈を捲きつけ、又ぼろぼろの

―二四六―

兩肩には同じく麥稈を束ねて雨露を凌いだ。こんなにしてまで付きまとはれるといふ彼の體に封する不快の念や、愛國志士の一人が絶えず酔拂つて、銃の扱ひがひどく亂暴なことから感じられる目の危険などは別として、チャールズ・ダーネイは、自分に加へられたかふいふ束縛の爲めに、それ以上何か重大な結果を考へて恐ろしい氣持になるやうなことはなかつた。何故なら彼は、まだ陳述の濟まない個人的訴件の是非曲直や、アヴェイ獄の囚人によつて裡書きされるべき申立ての眞偽には少しも關係がないことを推測してゐたからである。

だが彼等がボーヴェイの町に來たとき―丁度夕方、街々は人群れで一杯になつてゐた―彼は何かしら事態が極めて不穩なのを認めないわけにはいかなかつた。殺氣ばんだ群衆はよつてたかつて彼が建場の内庭で馬から下りるのを見ようとする、群衆の中で夥しい聲が口々に高々とかふ叫ぶ、

「亡命者をやつけら！」

彼は鞍からひらりと飛び下りようとするところを止まつて、こゝこそ最も安全な陣地とばかり鞍坪に据り直して、かふあつた―

「亡命者だと、諸君！私が自分から好んでこの佛蘭西に來たのが分らんか。」

「汝は罰あたりの貴族野郎だ、一人の蹄鐵工がハンマアを手にしながら、勢烈しく群衆をかきわけて、彼を目ざして進み出ながら、怒鳴つた。」さうよ、汝は罰あたりの貴族野郎だ！」

問屋場の主はこの男と騎者の手綱（明らかにこの男はこれを目がけてゐたのである）の間に身を入れて、宥めるやうにゐつた。「構はんで置け、構はんでな！どうせ巴里で裁判されるんぢや。」

「裁判されるんだとも！」蹄鐵工はハンマアを振り廻しながら繰り返した。「さうよ！それから謀叛人つてんで死刑と來るんだあ。」これを聞くと、群衆は我が意を得たりとばかりどつと鬨の聲をあげる。

問屋場の主が彼の馬の首を内庭の方に向けようとするのを止めて、（例の酔拂ひの愛國志士は手頸に細繩をまきつけたまゝ、悠然と鞍に坐つて見物してゐる）ダーネイは、騒ぎが鎮まつて、彼の聲が聞えるやうになるや否や、かふあつた―

「諸君、諸君は誤つてゐる、でなければ誤まらされてゐる。私は謀叛人ではない。」

「うそを吐け！」蹄鐵工が怒鳴る。「お布令が出たからにや立派な謀叛人よ、謀叛人の生命は人民が勝手にしてゐつてんだ。そいつの罰の當つた生命はもうそいつ自身のものぢやねんだ！」

―二四七―

ダーネイは群衆の眼がさつと閃めくのを見る、その瞬間問屋場の主は内庭に馬を引き入れてしまつた。今一瞬間ためらへば群衆は猛然と彼に殺到したことであらふ。護衛は彼の馬の横腹にびつたりくつ附いて入る、問屋場の主は開閉の惡い二重扉を開て、門をかけた。蹄鐵工はハンマアで扉を一撃を喰はせる、群衆は唸る、だがもうどうにもならない。

「鍛冶屋のゐつた、そのお布令といふのは一體何かね、」ダーネイは、問屋場の主がお辭儀をして、内庭に彼と並んで立つたときに、かふ訊ねた。

「まつたくのところ、亡命者の財産を賣り佛ふといふお布令が出ましてな。」

「何時出たね。」

「十四日でございました。」

「私が英國を立つた日だ。」

「これ一つではないので追つゝけ他のお布令が出るに違ひなからうつて、皆がさう申し居ります——今にも出てゐますか知れませんが——つまり亡命衆をすつかり追拂つて、歸つて来る者は、誰でも構はず死刑にするといふのださうでしてな。それで、あの男も、お客様の生命がお客様御自身のものぢやないなんて申し上げたやうなわけでございます。」

「でも別にまださういふお布令が出てゐるんぢやないんだね。」

「何とも申し上げかねますよ！」問屋場の主は肩をゆすつてかふゐつた。「出てゐるかも知れませんが、さうでないにしろ追つゝけ出ませうて。同じことでございます。何かお上りなさいませうか。」

彼等は眞夜中まで屋根裡部屋の麥稈の上に寝た、それから町中が寢静まつたころ、又も馬を進めた。様々な馴染ぶかい物に激しい變化が澤山認められて、この冒險な騎行を夢のやうに思はせる、かふいふ變化の中にあつて、その最大なものは、到るところ人々が殆んど眠らなくなつたかと思はれることである。長い間、人一人にも出會はずに、荒れ寂れた路を駆けさせた後で、よく貧しげな小舎の一部落に出會すことがある、小舎は深く暗黒に鎖されずに、燈火で明々とかがやいてゐる、そこには、眞夜中の妖物然と、人人が手に手をとつて枯れ萎びた自由の樹を廻つたり、一緒に集まつて自由の歌をうたつたりしてゐるのが、よく見られる。だが、幸ひにも、その夜ボーヴェイの人々は眠つてくれたので、彼等はそれに粟じて脱れ出て、又も無人寂寥の只中のにり出した、さうして時ならぬ寒さ冷たさを忍んで、この年、牧獲を少しも與へなかつた貧寒な野を、鈴音ひさやかに通つて行つた、その軍調を破るものは、焼かれ

——二四八——

た家の眞黒にな、つた廢墟と、四方の道に見張つてゐる愛國志士の巡邏隊が突然隠れ場所から現はれて、さつと道を遮つて手綱を引き止める位のものであつた。

夜が明けて、漸く彼等は巴里の城壁の前についた。木戸に乗りつけてみると、まだ閉つて、嚴重に警備されてゐた。

「この囚人の書類は何處にある。」屹とした顔の、上役立つた一人がかふ訓ねる、彼は例の護衛達によつて呼び迎へられて來たのである。

勿論この不快な言葉に氣持を悪くしたので、チャールズ・ダーネイは、かふ訊ねた人物に、自分は自由な旅行者で、佛蘭西市民であり、又護衛のついてゐること、この護衛は國家の不安な情態から彼に無理に課されたもので、その費用を支辨してゐる點に注意されたいと要求した。

この人物は彼の言ひ分など一顧もせず、繰り返した。「この囚人の書類は何處にある。」

酔拂ひの愛國志士がそれを帽子の中に入れてゐたので差し出した。ガベルの手紙にちらと眼を落とすと、この同じ上役めいた男は一寸狼狽したやうな、驚いたやうな色を見せ、それからつくつく注意してダーネイを眺めた。

だが彼は一言もいはず、護衛達も護衛されて來た者も置き放したまゝ、警備屯所に入る、その間、彼等は門の外で馬に粟つたまゝでゐる。こんな不安な氣持で待つてゐる間、チャールズ・ダーネイは四周を見廻してゐると、城門は兵士と愛國志士等との混合警備隊に守られてゐるのが見えた。志士の數の方が兵士のそれより遙かに多い、又食糧を運び込む百姓の荷車や、それに類した用向きから商人たちが市内に入るのは何の雜作もないが、出ることは、たとひ極く顔の知れ渡つてゐる春でさへ、な

かなか困難である。大勢入雑つた男女の群や、勿論様々な乗物や家畜などまで、出る番を待つてゐる。だが出す前の人改めがひどく嚴重なので、皆少しづつ木戸を洩れ出して来る。中には自分の吟味をされる番がまだなかなかなことを知つてゐるので、地面に横になつて眠つたり、煙草をふかしたりしてゐる者もある、一緒に話をしたり、近所をぶらついたりしてゐる者もある。三色章を附けた赤帽子は、男の間女の間にも別なく、一面にゐた。

こんな物を眺めながら、半時間ばかり鞍坪に坐つてゐると、例の上役立つた男がダーネイの前に又出て来て、警備兵に指圖して木戸を開けさせた。それから、一人は酔拂ひ一人は正氣の二人の護衛に、彼等が護衛して来た四人の受取状を渡し、さて囚人に馬から下りろといふ。彼は下りた、二人の護衛は草臥れた彼の馬を引いてくるりと向きを變へ、市には入らずにその儘鬪つて行つた。

彼は、例の人物の先導する後について、安葡萄酒と安煙草

―二四九―

の匂ひのする警備屯所に入る、幾人かの兵士と愛國志士が、寢入つてゐるもの、眼をさましてゐるもの、酔拂つてゐるもの、正氣であるもの、さては疲れてゐるとも醒めてゐるとも、酔つてゐるとも正氣であるとも何方つかずの様々な心地で、立つたり寝ころんだりしてゐる。屯所内は、光の薄れて行く夜燈と曇つた陽射しとが入り交つて、何となくはつきりしない。二三冊の記録が机の上に開けたままのつてゐる、粗野な、色黒な顔の士官が一人で萬事を支配してゐるのである。

「市民ドファルジュ、」士官はダーネイを連れて来た男にかふゐひながら、一枚の紙を取つて物を書く支度をする。「これが亡命者エヴレモンドか。」

「これがさうです。」

「エヴレモンド、年齢は。」

「三十七歳。」

「妻はあるか。」

「あります。」

「何處で貰つたか。」

「英吉利で。」

「成る程。エヴレモンド、その妻は何處にゐるか。」

「英吉利にゐます。」

「成る程。エヴレモンド、お前はラ・フォルスの監獄に入れられるのだ。」

「何ですと！」ダーネイは叫んだ、「どんな法律で、どんな罪で。」

士官は筆を走らせてゐた紙から一寸顔を上げた。

「エヴレモンド、お前が此方に来てから新しい法律や新しい犯罪が出来たのだ。」と彼は苦笑を洩らしてゐつて、矢張り物を書きつ野けてゐた。

「私は、今君の眼の前にあるその同國民からの手紙の乞ひに應じて、自分から進んで歸つて来たのだといふ點を注意して頂きたい。私の要求するのは、たゞ猶豫なしに、それを實行する機會だけです。之は私の權利ではありませんか。」

「意やエヴレモンド、亡命者には何の權利もないのだ、」と冷やかな返事であつた。士官はすつかり書き終ると、書いたものを裡返して、砂をふりかけてから（インキを乾かすために）、

「獨房。」

といふ言葉と共にそれをドファルジュに渡した。

ドファルジュはその紙片を振つて囚人を差し招きながら、自分の後について来ぬといふ意味を知らせた。囚人はその通りにする、二人の武装志士が護衛として彼の後に従つた。

一行が警備屯所の階段を下りて、巴里の市中に向つたとき、ドファルジュは聲を落してかふめつた。「今度壊されたバスチユに長いことゐたマネット博士のお嬢さんと一緒にな

―二五〇―

つたなあを前さんかね。」

「さうだ。」ダーネイはかふ答へたが、吃驚して彼の顔を見つめた。

「わしはドファルジュつて者だ、サン・タントアヌ町の方で居酒屋をやつてるんだ。大方わしのこととは聞いたらうな。」

「妻が父を引取りに君の家に行つたとかいふのだね、聞いてみると！」

この『妻』といふ言葉が、ドファルジュにとつて憂鬱な追憶の縁となつたものと見えて、突然いら立たしさうにかふめつた。「あの今度新出来の切味のぬぐーヨーツチイヌ聖女様の名にかけていふが、一體何だつてお前さんは佛蘭西へ来たんだ。」

「何故だか、たつた今、私がいふのを聞いてゐたらう。あれをほんたうだと思はないのか。」

「お前さんにとつちや悪あほんただ。」とドファルジュは眉をひそめて、自分の前をぢつと見つめながらめつた。

「さうだ、全く途方に暮れたよ。こゝでは何もかも、先觸なしに、すつかり變つて、それが又ひどく急で片臍負なのだから、どうにも途方に暮れるだけだ。君、一寸お願ひがあるのだが、聞いて貰へないかね。」

「駄目だよ。」ドファルジュはかふいふ、始終自分の前を見つめたまゝであつた。

「では、たつた一つ私の訊くことに返事してくれないか。」

「さうさね。事柄次第ぢやね。何だかいつて見るがひ。」

「何も悪の事をしない、この私を送り込まうといふ牢屋では、外部の者と多少は手紙の遣り取りが出来ようかね。」

「行けば分るだらうよ。」

「まさか、私は、このまゝ十分な裁判も受けず何處に訴へる當てもなく、その牢屋に生き埋めにされてしまふのぢやあるまいね。」

「行けば分るだらうよ。だがそれだからつてどうしたんだ。今までにや、そんな風にもつともつと悪の監獄に生き埋めにされた人達アいくらかもあつたんだ。」

「それは私の所爲ぢやないよ、ドファルジュ君。」

ドファルジュは返事をする代りに暗澹とした顔でぢろりと彼を睨んだ、さうして強情な頑固な沈黙のまゝ歩きつゞけた。ドファルジュが、かふ深く沈黙に沈めば沈む程、少しでも彼の心が和らぐといふ希望は益々微かになる、――少くともダーネイにはさう思はれる、そこで彼は急いでかふめつた

「私としては、テルソン銀行のローリイといふ現に巴里に滞在してゐる英國紳士に、かうして私がラ・フォルス監獄に打ち込まれたといふ簡單な事實を、何も外の文句は要らないが、たゞこの事實だけを傳へることが何よりも大切な。」

―二五二―

となのだ（いやどれだけ大切か君の方が私よりも好く知つてゐる）。何とかして私にそれだけ頼まれてくれまいか。」

「お前さんの用など何一つだつて頼まれたくねえんだ。」ドフルジュは頑固にかふるひ返した。「わしのなす可き務めは國家と人民のためだ。わしはお前さんの敵になつてゐるこの二つのものゝ召使ひだと定めてゐるんだ。お前さんの用など何だつて頼まれたくねえ。」

チャールズ・ダーネイは、この上彼に頼んでも徒だと思つた上、自尊心を傷つけられてゐた。一行が無言のまゝ歩いて行く途中、彼は、人民が囚人の街々を通る光景に如何に

慣れてゐるかといふことに、目を止めないわけには行かなかつた。子供たちでさへが、彼等を見送るものが殆んどない。通りすがりの二三人は振り返つた、彼を貴族だと指差した者も二三人はあつたが然し、美麗な衣裳の人間が監獄に行くことと定つてゐることは、仕事衣の労働者が工場に行くことと定つてゐるのと同様に少しも人目を惹かなかつた。彼等の通つた、或る狭い、暗い、汚ない巷路では、昂奮した演説者が、脚臺の上から、王及び王族達の人民に對する罪惡について、同じく昂奮した聴衆に泡を飛ばして論じてゐた。この男の口からちらと耳に挟んだ數言で、チャールズ・ダーネイは、王が牢屋に入つてゐること、外國の大公使達が一人残らず巴里を引き揚げたことを始めて知つた、巴里への途中では（ボーヴェイを別にすると）、彼は全く何一つ聞き込まなかつた。例の護衛と、到るところ油断なく見張つてゐる眼の爲めに、彼は完全に孤立をまもらされてゐたのである。

英國を出護したときに始まつた様々な危険よりは遙か大きな危険に落ちたのだといふことを、今は彼も勿論知つてゐた。様々な危険が刻々身のまはりに集つてくる、否、時が経つにつれて、益々速く集るかも知れないことを、今は彼も勿論知つてゐた。彼は、若しこの數日間の出來事を豫測することが出來たら、自分はこの旅をしなかつたであらうといふことを自ら認めない謬にはいかなかつた。でも當時の彼の疑懼は今日われはれが想像する程には暗澹としたものではなかつた。未來は何やら面倒になるらしく思はれたにせよ、それは未知の世界である、その摸糊とした中に、盲目的な希望があつた。幾日幾夜もつゞくあの恐ろしい虐殺、時計の針が僅かに幾廻りかする間に、祝福すべき收穫期に一大血痕を印することになつたあの虐殺は、まるで一萬年も昔のことゝ同じやうに彼の推知し得る範圍をかけ離れてゐた。謂ゆる『今度新たに生れた切味の鋭いラ・ギーヨッチイヌ聖女』の名を、殆んど彼は知つてゐなかつた、これは人民の大半にとつてもさうであつた。やがて爲されなければならなかつた様々な戰慄すべき行爲は、恐らくこの頃にはま

―二五二―

だその途行者たちの頭の中にも想像されてゐなかつたらう。ましてそれが彼の溫和な心の中に假りにも座を占めることが出來たであらうか。

こんなに不公申な扱ひをうけて、拘留され虐待され、途には慘酷にも妻子から引離されるやうなことになるのでなからうか、いや慥かになるにちがひない、彼はさういふ豫感はあるが、この豫感以上にはつきりした恐怖が別にあるのではない。この懸念を抱いて（陰慘な監獄の内庭に持ち込むにはこの懸念だけでも澤山である）、彼はラ・フォールの監獄に着いた。

浮腫んだやうな顔の男が厳しい潜門を開ける、それにドフルジュは「亡命者エブレモンド」とい

つて引き渡す。

「全體どうしたつてんだ！あと、どれだけ澤山来るんだい！」浮腫んだやうな顔の男はかふ叫んだ。ドファルジュはこの叫びには一顧も拂はず、受取状をうけとると、二人の仲間の志士と一緒に引き退った。

「全體どうしたつてんだらうなあ！」牢番頭は女房と一人きりになると、またかふあつた。「あとどれだけ詰め込むんだらう！」

牢番頭の女房は、別段その問ひに封する返事をもち合はしてゐなかつたので、たゞかふ答へた。「お前さん、辛抱しなくちやいけないよ！」女房が鳴らしたベルに應じて三人の牢番が入つて來たが、何れも女房の意見に共鳴した。さうして一人は「自由の爲めによ。」とゐひ添へた。それが、場所柄だけに、いかにも不相應な結びと思はれた。

ラ・フォルスの監獄は陰慘なものであつた。暗く不潔で、不快な臭ひがひどく籠つてゐる。世話の行きとどかなひかふいふ場所では、閉ぢ込められた静かな中の悪臭がすぐ外まで分るのは不思議な程である！

「それに、獨房と來やがつた。」牢番頭は書付けを見ながら呟いた。「此處ももうはち切れさうになつてゐるのが分らんかい！」

彼は不機嫌さうにその紙片を書付け刺にさした、チャールズ・ダーネイは彼の機嫌の直るまで半時間も待つた、その間、頑丈な迫持のある部屋の中々彼方此方と歩いたり、石の腰掛に休んだりしてゐたが、何れにしろ、牢番頭と下役の記憶によく止まるやうに待たされてゐたのである。

「さあ！」頭はやがて鍵をとり上げてゐつた、「二緒に來るんだ、亡命者。」

不氣味な監獄の黄昏の中を、彼を受持つことになつた番人が彼を連れて表廊下や階段を通り、幾つもの戸を騒々しく開けたり、背後で鍵をかつたりして、やがて男女の囚人の一杯ある大きな、低い、圓天井の部屋に來た。女連は長い卓子に向つて腰を下ろして、讀んだり書いたり、編物を

一二五二一

したり、縫物をしたり、刺繡をしたりしてゐる、男達は大概女達の椅子の背後に立つてゐるか、部屋の中を彼方此方とぶらついてゐる。

囚人といふものを破廉恥な犯罪や不名譽と本能的に結びつける癖を持つてゐるので、この新入者は一同の姿を見て後退りした。だが、彼の長い夢のやうな騎馬の旅のその大詰として、意想外にも彼等は一齊に立ち上つて、當時に知られたあらゆる優雅な動作をつくし、この世にある限りの愛嬌滴る優美さと禮意をつくして彼を迎へたのである。

然し、彼等の優雅さは怪しくも監獄の作法や憂鬱に曇らされてゐる、現に姿を見せてゐるこの似合はしからぬ不潔と悲參のうちにあつては、彼等はいくまでも亡者めいたものになる、それがチャールズ・ダーネイに死者の一群の眞中に立つてゐるやうな心地をさせた。皆な幽霊だ！美しさの幽霊、氣高さの幽霊、優美さの幽霊、自尊心の幽霊、浮かれ氣の幽霊、機智の幽霊、青春の幽霊、老年の幽霊、何れもこの悲しい牢屋から解放される日を待つてゐるそれらの人達が、こゝに來るとき一度は死んだ身とて、もはや生氣の無い眼をして彼を見た。

彼は固唾をのんで身動きも出來ない。彼を連れて來た牢番は彼の側に立つてゐる、他の牢番は傍を動き廻つてゐる、見たところ、尋常に役目を果してゐるといふ限りでは別に

彼等に覇してゐふところがないのだが、こゝにゐる涙に暮れた母親たちや花恥かしひ少女たちと比

較すると——蓮葉娘、若い美人、深窓に生立つた中年女性などの幻影と比較すると、この牢番達の姿はひどく野蠻なものに見える——そのために、この幽霊の集つた場所のあらゆる経験や、さもあるべき筈の事柄やの顛倒が極度まで高められる。正しく皆幽霊である。正しくあの長い夢のやうな騎馬の旅は、彼をかゝる陰鬱な影法師の世界に連れて來る或る熱病の行進にほかならなかつたのか！

「不幸の淵に沈みました同胞の集りを代表して、ラ・フォルスへの尊來を歓迎申し、併せてあなたを私どもの許によこした災殃について慰籍の言葉を差上げるのを名譽に存じます。」慇懃な言動の紳士が一人進み出てゐつた。「何卒それが仕合せに早くをしまひになりますやうに！お名前と御身分をお訊ね申すのは、よその場所では失禮に當りませうが、ここでは御用捨のお含みをお願いいたします。」

チャールズ・ダーネイはやをら身を起して、その時口を上つて來たゞけの最も適當な言葉で訊ねられた事柄だけを述べた。

「でも、」その紳士は、部屋の向ふ側に歩いて行く牢番の方を見やりつゝ、ゐつた。「でも『獨房』となつておいでゞはありますまいが。」

—二五四—

「いやその言葉の意味はどういふものか存じませんが、彼奴どもがさう申すのを耳にしました。」

「あゝ、何といふことだ！返す返すもお氣の毒に存じます！ですが勇氣を失落しなさいまするな、私どもの仲間の連中にも、初めは『獨房』になつてゐたのがありました、それはほんの少時よりつきませんでした。」それから彼は聲を高めてゐひ添へた、「皆様、お知らせするのも辛い——『獨房』のお仲間です。」

チャールズ・ダーネイが部屋を横切つて格子戸に近よつたとき、同情の囁きが湧いた、牢番はその扉のそばで彼を待つてゐたのである。澤山の聲が彼に好意や激勵の言葉を浴せる、その中で女性の柔しひ情深い聲が際立つて聞えた。彼は格子戸のところで振り向いて、心からの感謝を返す。扉が牢番の手で閉まる、と、その影法師たちは彼の目から永久に消えろせてしまつた。

潜門が開くと石の階段になる、上りである。四十段ほど上りきると（囚人になつて半時間ほどにしかならないが、もうそれを數へざるを得なかつたのである）、牢番人は低い黒い戸を開ける。彼等は人氣のない小部屋に入つた。寒くて濕々するのが身に應へた、だが暗くはない。

「お前の部屋だ。」と牢番人はゐつた。

「何故私だけ一人入れられるのだ。」

「わしの知つたこつちやなゐ！」

「筆、墨、紙などは買つてもらへるだらうな。」

「そんな命令は何もつけやあねえ。見廻り役が來るからその時お願いしてみるがひゝ。今のところは食物を買ふことが出来るだけで、外は何でも駄目だ。」

部屋には、椅子、卓子、麥稗蒲團がある。牢番は引上げる前に、かふいふ品々と四方の壁をざつと吟味してみる、彼の向ふ側の壁に倚りかゝつてゐる囚人の心には、この牢番は顔も體もひどく不健康らしく浮腫れてゐて、まるで水を一杯喰つた溺死人のやうに見える、などゝいふ取りとめのない空想がふらふらと浮ぶ。牢番が行つてしまふと、同じ取りとめのない氣持でかふ考へる、「さてこれおれも、死んだ者同様に置いて行かれたわけだ。」ふと立ち止つて蒲團を見ると、胸のむかむかするのを覺えて、顔を反けた、さうしてかふ考へた、「死ぬと人間の體は第一にかふいふ蛆蟲に變つてしま

ふのだ。」

「四歩半に五つ歩、四歩半に五つ歩、四歩半に五つ歩。」囚人は部屋の中を彼方此方と歩いて、この獨房の大きさを勘定する。市街のどよめきが、ものに押し込んだ太鼓の響に猛り狂ふ人間の聲のうねりを添へたやうに、のぼつて来る。

「あの人は鞆をこさへた、鞆をこさへた、鞆をこさへた。」

囚人は又部屋の面積を測る、だが今繰り返したこの言葉を

―二五五―

自分と自分の心から遠ざけようとして、前より歩を速めた。「潜門の閉つたときに消えた幽霊たち、あの中に一人、黒い衣物をきて窓口に倚りかゝつてゐた女性の姿があつた、彼女の金色の髪は目を浴びてかゞやいてゐた、彼女はまるで――否々、誰一人寝てゐる者のない燈火のついた村々のことでも考へて、氣を紛らさう！……あの人は鞆をこさへた、鞆をこさへた、鞆をこさへた……四歩半に五つ歩。」かふいふちぎれちぎれの考へを深い心の底から抛げ上げたり轉ばし上げたりしながら、囚人は次第に歩を速めて、頑固に勘定をつづける、と、市街のどよめきが少し調子を變へる、――それがものに押し込んだ太鼓の響のやうに鳴りとどろもてゐることは同じであるが、それを凌ぐ人聲のうねりには、彼の聞き知つた聲々の悲嘆するのがまじつて來た。

二、刃を研いで

テルソン銀行は巴里のサン・ジェルマン區に建つてゐて、或る大きな建物の一部を占めてゐる、中庭を通つて出入りするので、往來からは高い塀と頑丈な門で圍はれてゐる。この家ほもと或る大貴族の所有で、現にその人は、今度の動亂の爲めに料理番の衣物をかりて逃げ出して國境を越えてしまふまでは、こゝに住まつてゐたのである。あはゞ獵人をのがれる狩場の獸にすぎない變り果てた身分でありながら、彼は矢張りその唇を潤すチョコレートを支度する爲め、衣物を貸したこの料理番のほかに屈強な男を三人も必要としたあのモンセエニユールと同様であつた。

モンセエニユールは逃げてしまつた、さてその三人の屈強な男達は、かつて彼の高給を食んでゐた罪を許される償ひとして、この『自由、平等、友愛か、然らずんば死』を標語とする『一にして不可分な新生共和國』の祭壇の上でいつでも喜んで彼の咽喉輪を掻き斬らうと決心したので、モンセエニユールの家は最初は差し押へられ、ついで没收の運命にあつた。何故なら萬物があくまでも迅速に動いてをり、恐ろしい程急速に法令が續發されるので、早くも秋九月となつた三日目の夜には、愛國志士團の治安維持隊がモンセエニユールの家を占領して、その立涯な部屋々々でブランデーを飲んでゐた。

これが倫敦であつたら、巴里のテルソン銀行のあるやうな實業區域では、かふいふ家は早速忘却に附されて、やがて『官報』に發表されるぐらゐが落ちとなつたことであらう。『官報』云々は破産者名簿にのせられることをいふ。何故なら銀行の中庭にオレンジの鉢植が並んでゐたり、又は帳場の上にキューピッド像がのぞいてゐるのに對して、生眞面目な英國流の義務觀念や體裁觀念からいへば、何と言つたことであらうか。しかもかふいふ物が實際あつたのである。成る程テルソン銀行ではそ

―二五六―

のキューピッドを白塗りにさせた。だがそれが矢張り、極く薄みリネンに包まれたまゝ天井に見えてゐて、朝から晩まで金をねらつてゐた（實際キューピッドのよくやることだが）。倫敦のロンバード街（銀行區）でなら、このわかい異教の神使（キューピッド）や、それから、この不死の少年（同前）の背後にカーテンのかゝつた凹み間や、壁にはめ込まれた姿見や、さてはほんの一寸したきつかけで公然と踊り出すやうな、まるで年端も行かない書記達やのせいで、きつと破産になつてゐたにちがひない。ところが、佛蘭西のテルソンでは、こんなものがあつても、十分立瀬に繁昌して行くことが出来た、さうして世の秩序が保たれてゐた間は、誰一人こんなものを怖れる者もなく、自分の金を引出してゐたのである。

だがこれからは、どれ程の金がテルソン銀行から引出されるであらうか。またどれ程の金が空しく忘れられたまゝ積まれてゐるであらうか。預け主が牢獄に朽ちたり、非命の死を遂げなければならなくなつたりしてゐる一方、どれ程の延金や寶石がテルソンの隠匿場所で錆ることであらうか。この世ではもはや清算の立てられないテルソン銀行との勘定がどれ程多くあの世に持ち越されなければならぬことか、——この夜、何人にもジャーヴィス・ローリイと同様にそれを語ることが出来なかつたであらう、もつともローリイはかふいふ問題をひどく心配してゐたのである。彼はいま燃やされたばかりの薪の火の傍に坐つてゐる（この實りのない饑饉の歳は、まだその季節でもないのに、寒くなつた）、彼の正直な勇氣を示す顔には深い影があつた、吊洋燈の投げる影よりづゝと深いもの、——部屋の中の何かゞ投げ返す歪んだ影より深いもの——恐怖の影がある。

彼は、あはゞ丈夫な根葛羅のやうに、年を経るにつれて自分がその一部分となつてしまつた銀行への忠誠をみせて、その中の幾部屋かを住居にしてゐる。愛國志士團が母家を占領したので、偶然にも彼の住居の方は一種の保障をうけることになつたが、然しこの誠實な老紳士はちつともさういふことを計算に入れてゐた譯ではない。かふいふ周囲の出來事は、彼にとつては無關係であるだけに、彼はたゞ自分の義務を行ふのみだつた。中庭の向ふ側の、柱廊の下には、廣々とした馬車の置場がある、——そこには實際まだモンセエニールの馬車が幾つか置かれてゐる。柱のうちの二本に、焰の出盛つてゐる二つの大炬火がしつかり結びつけられてゐる、その炬火の光をうけて、大きな廻轉砥石が一つ野天に浮彫のやうに立つてゐる、何處か近所の鍛冶屋か他の工場かゝらでも急いで運んで來たかと思える粗末な臺に乗つたものである。ふと立ち上つて、窓からこんな毒にも害にもならない物を眺めると、ローリイは身ぶるひ

——二五七——

して、薪火の傍の席に戻つた。彼は窓の硝子戸ばかりでなく、その外の格子戸も開けたが、またそれを二つとも閉め切つてしまつて、脳天から足の爪先まで身ぶるひした。

高い塀と頑丈な門を隔てた通りからは、毎夜馴染の市街の騒音が來る。が、時々は何とも名狀し難い響きがそれに籠るのであつた。もの凄しい、この世のものでないやうな、あはゞ何か物恐ろしい性質の耳馴れない音が天にのぼつてゐるやうに思はれる。

「あゝ有難い、」ローリイは兩手をひしと握りながらかゝあつた。「今夜この恐ろしい町におれに近い親しい者が一人もゐないのは有難いことだ。どうぞ、危る目にあつてゐる人達には紳さまがお慈悲を下さるやうに！」

間もなく大きな門のところの鈴が鳴つた、彼は、『奴等が歸つて來たな！』と思つて、黙つて耳を

澄ましてゐた。が、彼が思ひ設けたやうに、歡聲をあげて中庭に雪崩れこむ様子は無い、門がまたもがちやんと鳴るのが聞えたきり、あとは寂然してしまつた。

彼を襲ふ神経の昂ぶりと恐怖のために、銀行に關する漠然とした不安が起るのであつた。かふいふ大變動の際であり、かふいふ感情の昂ぶつてゐる場合であるから、さういふ不安が目ざまされるのも無理があるまい。銀行は十分護衛されてゐた、それで彼も立ち上つて、その頼みになる護衛の人達の間に入らうとした、途端に彼の部屋の扉が不意に開いて、二人の人間が飛びこんで來た、彼は、吃驚して腰を落した。

ルウシイと父親！ルウシイは彼の方に両手を差しすゝむ、例の熱心のこもつた眼色が濃く強く凝つて、ゐはゞ、彼女の生涯のこの一時だけ、強さと力を與へる爲めに特別に、彼女の顔に染めつけられたやうに見える。

「これはどうしたことだ、」とローリイは息せき切つて、狼狽したやうに怒鳴つた。「どうしかんです。ルウシイさん！マネットさん！何か出來たんですか。どうして此方へお出でましたか。何事です。」

彼に抱かれたルウシイは、例の眼でちつと彼を見つめ、蒼い顔も物狂はしく、哀願でもするやうに、「おゝローリイ様！夫のことです！」と喘ぐ。

「ルウシイさん、旦那さまのことゝは？」

「あのチャールズです。」

「なに、チャールズ君がどうしました？」

「こゝに來てをります。」

「この巴里に？」

「もう何日になりませう、——三日か四日か——何日になるかよく分りません——考へが纏まりませんもの。義侠的にした事で、わたしたちに知れないやうに此方へ参りまし

——二五八——

た、そして市門のところで止められて、すぐ牢屋にやられてしまつたのです。」

ローリイ老人は抑へかねた叫びを洩らした、殆んどそれと同時に、大門の鈴が又も鳴つた、聲音や人聲の大きな噪音がどつと注ぐやうに中庭に入つて來た。

「ありや何の音です。」ドクタアは顔を窓の方に向ける。

「見ちやいけません！」ローリイは叫んだ。「外を見ちやいけません！マネットさん、後生ですからその格子戸を開けないで下さい！」

ドクタアは窓の掛金に手をかけたまゝ顔を向けて、落ちついた大膽な微笑を見せてかふゐつた——「いや君、わしはこの市では不死身の生命をもつてゐるんぢや。わしは昔、バスチユの囚人だつたらう。巴里の——いや巴里はおろか、全佛蘭西の愛國志士で、わしがバスチユに捕はれてゐたといふことを知つても、わしの體に手をかけようといふ者は居るまい、それでも手をかけるなら、歡迎の挨拶にわしを抱き締めて息つまらせたり、わしを肩車にのせて擔ぎ廻つたりするつもりからぢや。

わしは古創のおかげで、市門を通ることも出來たし、そこでチャールズの消息を聞くことも出來たし、こゝへも連れて來てもらふことが出來たといふ譯ぢや。大方こんなことだとわしも思つてゐた、わしはチャールズをどんな危険からでも助け出せるといふことを知つてゐるんぢや、ルウシイにもさう話した。——ありや何の音です？」彼はまた窓に手をかけた。

「見ちやいけません！」ローリーはすつかり死物狂ひでかふ叫んだ。「おげません、ルウシイさん、あなたも駄目です！」彼はルウシイの背に手を廻して、しつかと抱へた。

「いへ、さう恐がらんでもゐるんです。誓つておみますが、チャールズさんの身に何か凶事があつたことは聞きません、チャールズさんがこの不吉な土地に来てゐることさへ夢にも知らなかつたんですから。どの牢にゐるんですね。」

「ラ・フォルスですつて！」

「ほう、ラ・フォルス！ルウシイさん、一體あなたがですね、勇氣をお持ちで、何か善いことをしたいといふ方だつたなら——いやいつもさうだが——もう落ちついてわしのいふ通りにして下さい、あなたが思案したり、わしが話したりするより、その方がずっと肝心なんですから。今晩は、もうあなたの方でどうなさりたくても、どうにも出来ません、恐らく外に出かけることも出来ないでせう。かふ申すのも、チャールズさんの爲めにして頂かなければならんことが、この上もなく困難な事だからです。どうぞ直ぐわしのいふことを聞いて、落ちついて穩順しくして下さい。どうぞわしのいふ通り、此方の裡の部屋に行つてゐて下さい。ほんの二分間ばかり、わしとお父さんだけにして置いて下

—二五九—

さい、外のことぢやない、死活問題なんですから、猶豫する場合ぢやありません。」

「仰しやる通りにいたします。あなたのお顔色で、わたしがそれより外にどうすることも出来ないので、あなたがよく御存じなことが分ります。あなたの仰しやるのがほんたうなことは存じて居ります。」

老人は彼女に接吻をして、自分の居間に急がせ、鍵をかけた。それから急いでドクタアのところに戻つて来て、窓を開け、鎧戸を半分開けた、そしてドクタアの腕に手を置いて、竝んで中庭を眺めた。そこには一群の男と女が見える、中庭一杯になるほど澤山の數ではないが、ほど一杯といつてもよからう、總勢で四十人から五十人を越えてゐない。この家を占領してゐる連中が門から彼等を入れたので、彼等はどつと砥石に飛びついて仕事を始めてゐるところである。砥石は、そこが便利で、しかも邪魔にならない場所なので、彼等の用を足す爲めに据ゑられてゐることは明らかであつた。

だが、その恐ろしい仕事師に、その恐ろしい仕事！

砥石には把手が二つある、二人の男が、狂氣のやうにそれを廻してゐる。砥石の廻る度に顔が仰向いて、長い髪が後方に垂れ返ると、その顔がまるでこの上もない野蠻な扮装をした、兇猛極る野蠻人の顔色よりずっと恐ろしく残忍に見える。しかも、附眉毛と附髭が亂暴にくつゝゐてゐる、その凄い面相が血と汗で一杯で、それに、怒鳴り立てるのですつかり歪んでゐる、恐ろしく昂奮してゐる上睡眠が不足と見えて、血走つた眼をかつと見開いて四邊をねめつけてゐる。この二人の兇漢が砥石を廻すと、繩のやうに紆れた髪が、前に跳ね返つて、眼へかぶさつたり、後へ跳ね返つて頸に垂れ下つたりする、傍では二三人の女が葡萄酒を彼等の口許にもつて行つて、いつでも呑めるやうにしてゐる、滴り落ちる血潮やら、滴り落ちる葡萄酒やら、砥石から出る火花の流れやらの爲めに、彼等の周囲の兇惡な空氣が、まるで血凝りと火のやうに見える。この一同の中で、血みどろになつてゐない人間は一人として見つからない。肩を並べて砥石をつかふ番を待つてゐる連中は、腰まで赤裸になつてゐるが、手といはず胴といはず、一面に血痕が飛んでゐる、いろいろ様な襤褸を着てゐる連中は、その襤褸が血痕で染まつてゐる、女用のレースや絹やリボンなどの分捕物を、まるで惡魔のやうに着飾つた連中は、そんな品物が血でぐしよぐしよに染まつてゐる。手斧、小刀、銃劇、劔、刃を研ぐ爲めに

持つて来るものは何でも、みんな血で眞赤である。中には、刃こぼれのした劔が、リネンの切れや衣物の千切れたもので、それを掲げた人間たちの手頸にしつかり結かれてゐるものもある、織帯もいろいろなの

—二六〇—

が見えるが、皆濃く一色に染まつてゐる。やがて、こんな武器を狂氣のやうに振り廻す連中が、火花の流れからひつたくるやうにそれをとつて、人々を掻き分けるやうにして大通りへ出ると、同じ赤い色が彼等の狂亂した眼にも赤く出る——その眼、それはまだ野獸になつてゐない者が見てゐたら、生命の二十年ぐらゐ縮めても、見事に狙ひをつけた銃で打ち眩ましてやりたいと思ふほどのものであらふ。

溺死しかけてゐる人間の視覚か、ひどく重大な危機に立つた人間の視覚か、ゐるど一つの世界がすぐ前に擴がつてゐるのを目に見てとるやうに、彼等もほんの一瞬の間にかふいふすべての事情を見てとつた。二人は窓から離れた、ドクタアは、あれは何かと問はんばかりに、彼の友の灰色の顔を振り返つて見た。

「あの連中は、」とローリイは怯えたやうに鍵の下りた部屋をちらりと見やつて、これだけの言葉を降ろした。「囚人を虐殺してゐるのです。若しあなたが今仰しやつたことに確信がありますなら、今あなたが持つてゐると考へてお出での力が、實際あなたにありますなら、——いや、わしはあなたにあると信じてゐるんですが、——あの悪者どもに、あなたが誰だか名乗つて、ラ・フォルスへ連れて行つてもらふんです。もう遅過ぎるかも知れませんが、そりや分りませんが、もう一分でも遅らさない方がゑでせう。」

ドクタア・マネットは彼の手を握り締めて、帽子もかぶらず急いで部屋から出て行つたが、ローリイが格子戸のところへ取つて返したときには、もう中庭に姿を見せてゐた。

風に靡く彼の白髪、人目を惹く彼の顔、群立つ武器を水のやうに掻き分けて行く彼の態度の苛立たしげな大膽さ、見る間に、砥石のところの渦巻の眞中まで行つた。暫時の間、騒ぎが静まつて、熱心な期待の様子が見え、私語が聞えた。それからマネットの聲の何かいふのが聞える、やがてローリイの眼には、彼が一同に圍まれ、肩と肩を並べ、手と肩をつないだ二十人ばかりの一行の眞中に包まれて急いで出かけるのが見えた、彼等はかふ叫んでゐた——「バスチイユ囚人萬歳！ラ・フォルスにゐるバスチイユ囚人の親類を救へ！前にゐる者はバスチイユ囚人に道を開けてやれ！ラ・フォルスにゐる囚人エヴレモンドを救へ！」すると幾千もの聲がそれに和した。

ローリイは不安な心を抑へながら又格子戸を閉め、窓を閉め、カーテンを下ろした、それから急いでルウシイのところへやつて来て、マネットさんは人民の味方を得て、彼女の夫を捜しに出かけた旨を話した。彼女の傍にはチャールズとの間の子供とミス・プロスがゐた、だが彼がふと我に返つて、二人の姿に今更のやうにびつくりしたのは、大分経つてから後であつた、彼はそれ程長い間、この騒がしいの夜

—二六一—

許す離寂の中で彼等を見守つて坐つてゐたのである。

ルウシイは、その時、彼の手にすがつたまゝ、足下の牀の上で假睡に落ちてゐた。ミス・プロスは

もう先程子供を寢床に入れたが、やがて彼女の頭もだんだんその可愛い子供の傍の枕の上に落ちて来てゐた。おゝ、憐れな妻の嗚咽を聞く長い長い夜！おゝ、彼女の父親も歸らず、何の消息もない長い長い夜！

闇の中では、もう二度ほど大門の鈴が鳴つて、中庭への雪崩れ込みが繰り返され、砥石はしきりに廻つて火花を出した。「まあ何でせう？」ルウシイは怯えてかふ叫んだ。

「シッ！軍人たちがあすこで刀を研いでゐるんです。」とローリイはゐつた。「この家が今ちや國民のものになつてゐるんで、ゐはゞ一種の武器庫の役に使はれてゐる課です。」

大門の開いたのは、二度で終つた、そしてその最後のときの仕事は、弱い途切れがちなものであつた。間もなく日がのぼり始めた。ローリイは縋りついてゐる手を、そつと離して立つた、さうして又も用心深く外をのぞいて見た。ゐはゞ斬りつ斬られつゝの修羅場でやうやく我に返りかけてゐる大傷を負つた軍人といつてもゐゝほど血みどろになつた一人の男が、砥石の傍の敷石から立ち上つて、ぼんやりした風で四邊を見廻してゐる。と、やがてこの疲れ切つた殺人者が夜明けの薄明りの中で、モンセエニールの馬車の一つを認めたものと見え、よろよるとその豪華な乗物に近寄つて、戸口からよぢり込んで戸を閉める、その贅澤なクシヨンの上で疲勞を休めるつもりであらふ。

ローリイが二度目に外を眺めたときには、大地といふ大砥石も大分廻轉して、太陽が赤々と中庭を照してゐた。だがその小さい方の砥石は、太陽に與へられたのでもなく、太陽に取り去られもしない赤色を斑々とあざやかにみせて、靜かな朝の空氣の中に立つてゐた。

三、暗影

執務時間が来たとき、ローリイの事務家としての心に第一に浮んだかふいふ考へがあつた。――亡命囚人の妻を銀行の屋根の下にかくまつて、テルソンそのものを危険に陥れる権利は自分にはないのだと。自分自身の財産や安全や生命なら、彼は少しも遲疑せず、ルウシイとその子供の爲めに、危る目に晒したであらふ。だが彼の手にある大きな委託物は、彼自身のものではない、この業務管理の點にかけては、彼は嚴正な事務家であつた。

初めは、彼はドファルジュのことを思ひ出しぬ。そして、も一度あの酒店を訊ね出して、全市がこんな狂亂情態に陥つてゐる際のことだから、一番安全な住居のことに就いて亭主と相談してみようと考えた。一度はドファルジュを思ひ

――二六二――

出したが、ローリイの心は考へ直して彼のことを諦めた、ドファルジュは一番猛烈な區に住まつて、明らかに勢力があり、その區に於ける危険な仕事にも深く携はつてゐるに違ひない。

晝になつてもドクタアは歸つて来ない、一瞬間でも猶豫するだけ、テルソン銀行を危険に捲き込む恐れがあるので、ローリイはルウシイと相談してみた。彼女は父親が、この區の、銀行に近いところにしばらく貸間を借りるやうなことを話してゐたとひつた。それなら銀行の方の故障もない、それにたとひうまく行つてチャールズが釋放されることになつたとしても、巴里を立ち去るなどは到底思ひも寄らないことだと、ローリイも豫想してゐた。そこで彼は恰好の貸間を捜しに出かけて、或る裡街通りを登りつめたところに、適當な部屋を見つけた。そこには高い陰氣な一群の家屋があり、どの窓にも皆鑑戸が下りてゐて、人のゐない部屋といふことを示してゐた。

この貸間に、彼は早速ルウシイと子供とミス・プロスを引越させ、出来る限り彼女達を慰め、自分で持つてゐるよりも多くのものを添へてやった。彼はジェリイを彼女達の住居にやつて玄關番にした。この男なら誰か訪ねて来て、少し位叩打しても平氣で堪へることが出来ると思つたからである。それから彼は自分の仕事に臨んで来た。彼は彼女達に對して、困惑した憂鬱な心をいだかずには居れなかつた、彼にとつてはこの一日の経つのが、のろのろと重苦しく思はれた。

日はやうやく暮れた、それと共に彼の心も波れる、やがて銀行が閉まる。彼は又も、前夜の部屋に一人きりになつた、さうしてこの次には、どうしたらあゝかといふことを考へてみると、階段に人の聲音が聞えた。おやと思ふうちに、一人の男が彼の前に立つて、鋭い注意深い眼で見つめながら、彼の名を呼んだ。

「はい。」とローリイはあつた。「あなたはわしを御存知ですか。」

それは、四十五六から五十ぐらゐに見える頑丈達りの男で、黒い縮れた髪を垂れてゐた。ローリイへの返辭代りに、彼は語調をちつとも變へずにその言葉を繰り返した！

「あなたをわしを御存知か。」

「何處かでお目にかゝつたやうに思ひます。」

「大方わしの酒店でだつたらう。」

大きな興味と昂奮を感じながら、ローリイはかふあつた、

「ドクタア・マネットのところからお出でですか。」

「さうだ、ドクタア・マネットのところから来たんだ。」

「マネットさんはどういつてゐました？あなたは何か持つて来て下さいましたか？」

一六三

ドファアルジュは、ローリイの待ち焦れた手に封もされてゐない紙片を渡した。それにはドクタアの手で、かふいふ文句が書いてあつた――

『チャールズは安全である、だがわしはまだ安全にこゝを出ることが出来ない。わしは、この使ひの人にチャールズから妻へ宛てた手紙を持つて行つてもらふ好意を受けた。この使ひの人をあれの妻に會はして欲しい。』

それはラ・フォルスからのもので、日付はまだ一時間も経つてゐなかつた。

『どうぞお出で下さい。』ローリイは、聲をたてゝこの短い手紙を讀んでから、嬉しさうにほつとして、かふあつた、「チャールズさんの奥さんのおいでになる處へ、案内しますから。」

「あゝ。」とドファアルジュは答へた。

ドファアルジュが不思議な程無愛想に機械的に物をいつてゐるのには殆んど氣がつかずに、ローリイは帽子をかぶつて、聯立つて中庭に下りた。すると、そこに女が二人待つてゐて、一人は編物をしてゐる。

「ほう、これはマダム・ドファアルジュですな！」とローリイはあつた。丁度十七年ばかり前に彼女が同じ姿勢であたことを覚えてゐたのである。

「うむ、さうだ。」と彼女の夫は口を挾んだ。

「奥さんも、わし達と一緒に行くんですか」彼等が歩き出すにつれて妻君も歩き出したのを見て、ローリイはかふ訊ねた。

「さうだ。相手の人の顔や様子が覺えられるやうにとな。その方が向ふの人の安心の爲めだ。」

ドファルジュの物腰にはつと気がつき始めたローリイは、胡散くさうに彼を見つめたが、そのまゝ案内をつづけた。二人の女が後からついて来る、一番目の女こそ有名なザ・ヴェンジャンスである。

一同は、途中の街々を出来るだけ早く通り過ぎて新しい住居の階段をのぼり、ジェリイに戸を開けさせて入ると、ルウシイが一人で泣いてゐるところであつた。ローリイがその夫の消息を傳へると、彼女は有頂天になつた、さうして夫の手紙を渡した字をしつかりと固く握りしめた、——その男の同じ手が、昨夜彼女の夫の傍で何をしてゐたか、又機會さへあつたら彼女の夫に何をしたかといふことなどは少しも考へつかなかつたらう。

『最愛の妻よ、——元氣にしておいで。私は達者だし、お父さんは私のあるところではなかなか幅が利きます。お前は返箒をよこしてはいけません。私の代りに子供に接吻をしてやつて下さい。』
書いてあるのは、それだけである。だが受けとる彼女に

——二六四——

は、無量の思ひがある、彼女はドファルジュの妻君の方に向いて、編物をしてゐる手の片方に接吻した。それはいかにも情の籠つた、愛らしい、感謝を示した、女らしい仕草であつた、だが對手の手はちつともそれに應じなかつた、——冷たく重たげに垂れてゐたが、やがて又編物の方にかへつた。

その手の蝕感には、ルウシイの有頂天を挫くやうなものがあつた。彼女は手紙を懐ろに納めるのを一寸止めて、兩手を頸のところにあげたまゝ、怯えたやうにマダム・ドファルジュを見た。マダム・ドファルジュはその仰向いた眉毛と額に、冷やかな、無表情な眼をぢつと注いだ。

「ルウシイさん、」とローリイは見かねたやうに説朋する爲め口を缺んだ。「ルウシイさん、この頃街では騒動がよくあるんです、もつとも別にあなたに迷惑をかけるやまなことはありませんまいが、でもマダム・ドファルジュの方では、そんな時に保護して上げられるやうな方を、見て置きたいと仰しやるんです、奥さんによく分るやうに、——奥さんがすぐこの人だと見分けることが出来るやうにです。その・・・」ローリイは三人が三人とも石のやうな物腰をしてゐることが次第々々に強く感じられたので、折角の慰藉の言葉も途切らしながらつづけた。「今いつたやうな次第ですな、ドファルジュさん。」

ドファルジュは陰鬱な眼を自分の妻の方に向けたまゝ、さうだといふ意味を亂暴に一聲あつただけだつた。

「ね、ルウシイさん、」ローリイは聲音や態度で出来るだけ慰めようとしながらあつた、「あの可愛いお子さんや、それからこの深切なプロスさんと一緒にこゝにゐらつしやる方がゐるですよ。ドファルジュさん、このプロスさんといふのは英吉利の女です、佛蘭西語が分りませんから。」

その佛蘭西語を知らないといふ問題の女性は、外國人など自分の對手にはならないといふことを深く信じてゐて、それは、苦惱や危険ぐらゐに動かされるやうなものではない。彼女は腕組みしたまゝ出て来たが、彼女の眼に初めてうつつたザ・ヴェンジャンスに英語でかふ話しかけた、「もし千枚張りのお前さん、御挨拶だよ！ 大方お達者なことだらうねえ！」彼女は、マダム・ドファルジュにも英國流の咳拂ひで挨拶した、だが二人が二人とも彼女に格別の注意を拂はなかつた。

「それがあの人の子なのかい？」マダム・ドファルジュは、初めて編物をやめて、まるで運命の女神の指でゝもあるやうに、その編針で小さなルウシイを指さしながらあつた。

「さうですよ、奥さん。」とローリイは答へた、「これがあの可哀さうな四人の可愛い嬢ちゃんです、

おまけにたつた一人娘でしてな。」

―二六五―

マダム・ドファルジュとその一行につきまといつてゐる暗い影が、この子供の上にひどく險惡に黒々と落ちかゝるやうに思へたので、母親は思はず、子供の傍の牀の上に跪づいて、子供をしつかり胸に抱きしめた。すると、マダム・ドファルジュとその一行につきまといつてゐる影は、また險惡に黒々と母親と子供の上に落ちかゝつたやうに見えた。

「もうゐゝよ、お前さん。」とマダム・ドファルジュはゐつた。「すつかり見たよ。さあ、行かう。」

だがその打ち解けない態度には十分の脅威が――眼に見えるやうに表面へは現はれず、その心に隠されてぼんやりしてはゐたが――あるので、ルウシイははつとして、哀願するやうにマダム・ドファルジュの衣物に手をかけてかふゐつた。

「どうぞあの可哀さうな夫に深切にしてやつて下さい。あの人に辛い目をさせないで下さい。出来ずならお力添へで、わたくしを一度あの人に會はして下さい。」

「わたしはお前さんの御亭主のことごとくへ来たんぢやないんだよ。」とマダム・ドファルジュは憎々しい程落ちつき拂つてゐる返した。「あの父親の娘としてのお前さんに用が

あるんで来たんだよ。」

「ではわたくしに免じて、どうぞ夫に深切にしてやつて下さい。子供からお願ひです！子供にも手を合せて、どうぞ御深切にとを願ひいたさせます。わたくしたちは他の何方よりもあなたが恐ろしいのですから。」

マダム・ドファルジュはそれをお世辭と聞いた、さうして夫の顔を見やつた。ドファルジュは何やら不安げに拇指の爪をかんて彼女の顔を見てゐたが、やがて顔を引きしめて、嚴しむ顔色を見せた。

「その手紙でお前さんの御亭主から何をゐつて来たかね、」とマダム・ドファルジュは薄氣味の惡い微笑を見せてかふ訊ねた。「幅が利く、何とかで幅が利くとかいつてゐたやうだつたね。」

ルウシイは急いで懷中から手紙を出しはしたが、それは見ずに、對手の方にびつくりした眼を向けてゐつた。「お父さまが夫のゐるところで大へん幅が利くといふのです。」

「では大丈夫ゆるされるだらうよ！」マダム・ドファルジュはゐつた。「さうなればゐゝんだがね。」

ルウシイは聲を高めてこの上なく熱心に訴へた。「妻として母親として、わたくしお願ひいたします、どうぞわたくしを可哀さうに思つて下さい。そして、あなた方のお力を、罪の無い夫の不爲めにならないやうに、どうぞ夫の爲めにお使ひ下さいますやうに。おゝ御婦人方、わたくしのことをお考へ下さい。妻として母親として！」

マダム・ドファルジュは、前と同じやうに、冷然と、その哀

―二六六―

願者を見てゐた、そして友達のザ・ヴェンジャンスに向つてゐつた――

「わたしたちが、この子か、もつと小さい時分から見なれて来たお主婦さんたちやお袋たちつていふものは、そんなに大事には考へられなかつたね。あの人たちの亭主たちや親父さんたちだつて、よ

く牢に打ち込まれちやあの人たちと別れ別れの暮しをしてゐたことは、よく覚えてゐるね。わたしたちは、今まで、姉妹たちが、自分も子供たちも、貧乏の爲め、衣物の無い爲め、食ふ物のない爲め、飲むものもない爲め、病氣の爲め、不仕合せの爲め、抑へつけられた爲め、その他いろいろな足りぬ勝ちの辛い目に會つてゐるのを見て来たものだつたね。」

「わたしたちはそればかり見て来たんぢやないか。」とザ・ヴェンジャンスは答へた。

「わたしたちはこんなことを長い間堪へて来たんだよ。」マダム・ドファルジュはまた眼をルウシイの上に向つてゐた。「考へても御覽！ たつた一人のお主婦さんやお袋の困るのが、今更わたしたちにそんな大したことに思へるかどうだか。」

彼女は編物を取り上げて、出て行つた。ザ・ヴェンジャンスは後につゞゐた。ドファルジュは一番後から、戸を閉めて出て行つた。

「さ、ルウシイさん、しつかりしなさい、」ローリイは彼女を起しながらゐた。「しつかり、しつかり！ 今までのところは萬事うまく行つてゐるんです——ついこの頃も、可哀さうな人達が、もつともつとゝ目に會つたんです。元氣を出して、有難いといふ氣持になつて下さい。」

「わたし有難く思はないつもりはないんですが、あの恐ろしい女の人が、わたしとわたしのすべての希望に暗い影を投げるやうに見えるものですから。」

「ちよツ、ちよツ！」とローリイはゐつた、「元氣のゝ可愛いその胸から、どうしてそんな絶望が出て来たんです？ さうだ、ほんの影に過ぎないんです！ 何もありやしませんよ、ルウシイさん。」

だが、このドファルジュ一行の態度の暗い影が彼自身にも暗澹とかぶさつてゐた、そして人知れぬ心の底では、それがひどく彼を悩ましてゐた。

四、嵐のうちの静寂

ドクタア・マネットは出かけてから四日目の朝に、やつと歸つて来た。この恐ろしい間に起つた出来事のうち、ルウシイに知らせずに置くことの出来るだけのものは、完全に隠されてゐた。それだつと後、佛蘭西と彼女が遠くに隔つたときに、初めて、護身の途のない千百人に餘る男女老

—二六七—

若の囚人が民衆によつて虐殺されたこと、四日四晩といふもの、この恐ろしい行爲の爲めに暗澹たるものであつたこと、彼女の周囲の空氣までが死者の血で汚されてゐたことなどを知つたのである。常時彼女の知つてゐたのは、僅かに、牢獄に對して襲撃が行はれたこと、すべて國事犯囚人は危険に陥つてゐたこと、その中の惑る者が群集の爲めに引き出されて虐殺されたことなどに過ぎなかつた。

ドクタアは、ローリイに向つて祕密を誓はせた後に（彼は事新しくそれを要求する必要はなかつたのだが）、次のやうなことを話した——群衆は修羅場を通つて自分をラ・フォルスに連れて行つた。牢獄には、勝手に作り上げた法廷が開かれてゐて、囚人は一人づつその前に引き出され、その法廷よつて、連れ出して殺せとか釋放せよとか、または（さう澤山ではないが）獄房に戻せとかいふ命令を迅速に與へられてゐた。案内者達によつてこの法廷に連れて來られたので、自分は、名前と職業を名乗り、十八年の間、何の裁判も受けずに、囚人としてバスチユに繋がれてゐたことを述べた、すると審判席に坐つてゐる一團の中から一人の男が立ち上つて、自分の言葉を裡書きしてくれた、この男はドファルジュであつた。

そこで自分は卓子の上の記録によつて、娘の夫がまだ生命のある囚人の中に入つてゐるのを確かめたので、法廷に——とひつても裁判官の中には眠りこけてゐる者、覺めてゐる者、屠殺の血に汚れてゐる者、汚れてゐない者、正氣な者、泥酔してゐる者など、さまざまであつたが——法廷に對して、彼の助命と羅放をねんごろに求めた。最初、顛覆した以前の政治組織の爲めの重大な受難者といふので、狂亂のやうな挨拶の雨が落とされると共に、自分に免じて、チャールズ・ダーネイは、この無法律の法廷の前に連れて來られて、吟味をうけた。實際、チャールズは今にも放免されさうに見えたが、彼に都合のぬゝ風向きが、何だか知らないが急に止まつた（これはドクタアには不可解なことだつた）。それから數語祕密の相談が交はされた。やがて裁判長として席についてゐた人物が、自分にかふ告げた、この囚人はまだ拘留されてゐなければならぬ、だがドクタアの爲めに、安全な拘留所に置いて暴行を受けないやうにさせる云々。間もなく、合圖によつて、囚人は再び牢獄の奥に連れ戻された、だが、自分はそのまゝ残つてゐて、自分の婿が故意か過失かで、群集の渦巻に連れて行かれないといふことを確かめたいと強く許可を願つたところ（實際門の外から來るその渦巻の兇惡な叫びは、時々裁判の進行を止めてしまつた）、その許可が與へられたので、危険のすむまで、その血潮に染んだ大廣間に残つてゐた。

合間々々に少しづゝ盗むやうに食物や、睡眠をとりなが

—二六八—

ら、ドクタアがそこで見た様々な光景、それは語らずに置かう。助命された囚人に對して群衆のみせた狂氣ちみた喜びは、寸斷された囚人に對する狂氣ちみた兇猛さと殆んど同じやうに彼を驚かした。彼の語つたところによると、一人の囚人が釋放されて往來に出されたが、思ひ違ひした野蠻な一人がその囚人の通る横から槍で突いた。ドクタアはその囚人の傍に行つて創口に繃帯してやるやうに求められたので、同じ門から出て行つて見ると、彼は一團のサマリタン達（惱む者を救ふ慈悲者、路加傳第十、三十一—三九）の手に抱かれてゐる、しかもそのサマリタン達は、今しがた自分達の虐殺した犠牲の屍骸の上に坐つてゐるのである。この恐ろしい、どんな悪夢にも劣らない程奇怪な、矛盾した態度で、彼等は醫師の手傳ひをした。そして非常に優しい心配を見せながら、その負傷者を看護した、——負傷者の爲めに擔架を造つて、その場から注意深く護送して行つた、——それから又武器を執つて、新たにあの恐ろしい屠殺にと突入した、ドクタアは餘りの恐ろしさに両手で眼を隠してゐたが、やがて、その眞中で氣絶してしまつた。

ローリイは、この打ち明け話に聞き入りながら、今年六十二になる老友の顔を見守つてゐるうちに、かふいふ恐ろしい經驗が昔の危険を復活させはしないかと、心の底で心配してゐた。だが彼は、この老友が今のやうな様子をしてゐるのを見たことがなかつた。彼は、この老友が今のやうな性格をもつてゐることを全く知らなかつた。今や、ドクタアは初めて、自分の昔うけた苦難が頼みになり力になることを感じてゐたのである。彼は初めて、自分があの痛烈な火で、娘の夫の獄舎の扉を破つて、彼を救ひ出すことの出来る鐵を、そろそろと鑄てゐたのだといふことを感じてゐたのである。「あれは、立派な役に立つことになつてゐたんぢや、決してたゞの浪費や身の破滅ではなかつたんぢや。可愛い娘はこのわしを元通りにするために盡してくれたが、今度はわしがあれの一番大切なものをあれに返す爲めに盡してやるつもりぢや、天のお佑けでわしはきつとやつてみせる！」とドクタアマネットはかふあつた。さうして、ジャーヴィス・ローリイは、この人——その生涯が、ローリイにとつてはいつても、特計のやうに何年も何年も止まつてゐたのが、やがてその停つたまゝ何の役にも立たずに眠

つてゐた間に貯へられた活力をもつて、再び動き出したものゝやうに見えたこの人——の燃え立つた眼、蹶然とした顔、落ちついた強い眼付と態度を見たときに、その言葉を信じた。

たとひあるときドクタアが打ち勝たなければならなかつたものより遙か大きな故障があつても、彼の執拗な決心の前には遂に屈服したことであらふ。彼は醫師としての職分

—二六九—

を守つて、自由と束縛、富と貧、善と惡に論なく、あらゆる種類の人間を相手に仕事をする一方、その個人的人望を巧みに利用して、間もなく三つの監獄、就中ラ・フォルスの検査醫となつた、彼は今では、ルウシイに、彼女の夫がもはや一人ではなく、一般の囚人達と一緒に監禁されてゐることを確言することが出来た。彼は毎週彼女の夫に會つた。さうして彼自身の口から、彼女に嬉しい傳言をもつて來た、時としては彼女の夫自身が彼女に手紙をよこすこともあつた（勿論決してドクタアの手からはなかつたが）、だが彼女の方から彼に手紙を書くことは許されなかつたが、何故なら牢獄内の陰謀に對しては、多くの激しい嫌疑がかけられたが、外國に友人を造るか、永續的關係を拵へるかしたことの知れてゐた亡命者に向つては、一番ひどく嫌疑がかけられたからである。

たしかに、ドクタアのこの新生活には心配が多かつた。でも慧眼なローリイは、その生活には一脈の新しい緊張した誇りがあることを見てとつた。その誇りには別に不純なものが交つてはゐなかつた、それは當然な、立派なものであつた、だが彼はそれを不思議なものだと思つた。ドクタアは、その時までは彼の昔の禁獄の結果が彼の肉體的苦惱、窮乏、羸弱を生んだに過ぎないと、娘や友人が考へてゐたのを知つてゐた。だが今やそれが反對になつて、この昔の試煉があつた爲めに、娘も友も、チャールズの最後の安全と救助を彼に求めなければならぬやうな力があることを知つたので、この變化に彼はひどく得意を覺えて、自ら先きに立つて指圖の役を引受け、弱者たる娘や友に對して、強者たる彼に信頼させた。以前彼自身とルウシイの間にあつた相互の位置が顛倒された、しかもたゞ温い感謝と愛情によつてのみ、互の位置を顛倒させることが出来たのであつた。何故なら彼は、自分にあれ程盡してくれた娘に幾分恩返しをするといふ以外には、何等の誇りも持てなかつたからである。「見てゐると不思議な氣がするが」ローリイは例のやさしく聰明らしい様子で考へた。「だが何もかも當然で正當なことだ。ゐゝから先頭に立つてくれ給へ、ドクタア、そして續けてやつてくれ給へ。あなたより以上に、この役を果す人はいないんだから。」

だが、ドクタアがチャールズ・ダーネイを自由の身にする爲め、少くとも裁判を受けさせる爲めに、非常に努力し、少しもその努力をやめなかつたにもかゝらず、時とともに流れる民衆の動きは、彼にとつて餘りに強く餘りに迅速すぎた。新しい紀元が始まつた（一七九二年九月二十六日以後を曆して共和國第一年といふ）。國王は審問され、刑を宣告され、斬首された。『自由、平等、友愛か、然らば死』の共和國は、武装した全世界を對手に勝利か死かと宣告するやうになつた。ノートル・ダムの

—二七〇—

高塔からは黒旗（「祖國危機」と記した黒旗）が日となく夜となく翻つてゐる、地上の暴君達に對して召集された三十萬の人々は、全佛蘭西のありとあらゆる土地から起つた。ゐはゝ毒龍の牙が到るところ巻き散らされて（希臘神話。ケドモスが惡龍を見て殺し、牙をとつて地に播くと幾ばくもなくそ

の牙が悉く武装した勇士となつて生れ出た。丘にも野にも、岩の上にも砂利の中にも、沖積泥にも、南方の輝かしい空の下にも北方の雲の下にも、荒野にも森にも、葡萄園にもオリーブ園にも、狐み揃へられた草の間にも穀物の刈株の間にも、廣る河の豊かな岸にも海邊の砂の中にも、一様に實を生んだやうに見えた。自由第一年の大洪水——上から降らずに下から盛り上り、天の戸が開かず閉ぢられてゐる大洪水（聖書、創世記第七、八章）——に對しては、どんなに個人が懸念してもそれに方向ふことが出来ようか！

休止も、憐憫も、平和も、慈悲深い安息の時間も、時間の算測も何もない。晝と夜は、世界開關の時と同じやうに規則正しく循環して來、夕や朝は最初の日と同じであるが、その他の時間を算測する仕方はなくなつた。丁度病人の熱の激しいときには時間の觀念がなくなるやうに、全國民が荒れ狂ふ熱病にかゝつてゐる際として、時間のことは忘れられてしまつてゐる。今、全市の不自然な沈黙を破つて、死刑執行人は人々に國王の首を示した——しかも今また物憂い八ヶ月間の獄中の寡婦生活と悲參の爲めに、艶々しひ金髪が白髪交りの灰色に變つたあの美しい後の首を示したが、それは八ヶ月も後なのに、殆んど王と同じ時のやうに思はれた。

しかもかゝるあらゆる場合に起る不思議な矛盾の法則を守つてゐたのか、時の歩みはあくまで迅速に焰のやうに過ぎるかと思ふ一方、いかにも長々しく感じられた。首都の革命裁判所、全國に互つて四萬乃至五萬を敷へる革命委員、自由や生命に封する保護を撤廢して、どんな善良な無罪の人でも、邪惡な有罪の人の手に引き渡されなければならなかつた嫌疑者條令、何の罪も犯したことの無い、しかも何處に訴へるところもない人々を、飽きる程つめ込んでゐる牢獄、かふいふものが固定したもののやうな確固たる秩序と性質をもつて、幾週間も繼たない中に既に古い仕來り同様に思はれた。その中でも殊に、一つの恐ろしいものゝ姿が、世界開關の時からこのかた、衆人環視のうちに置かれて來たもので、もあるやうに馴染になつた、——それはラ・ギーヨッチイヌと呼ばれる、鋭い刃をもつ女聖徒の姿であつた。

これはよく人々の洒落の種となつた。これは頭痛にとつて一番の適藥である、たしかに、髪が白くならぬ効果を見せる、顔色に特別な美しさを添へる、頭ごとすつぱり剃り落してしまふ國民的剃刀である、ラ・ギーヨッチイヌに接

——二七二——

吻する人は、その小さな窓から覗いて見て、袋の中へ嚏をする（常時斷頭臺で斬られた人の首を袋に入れるところから出た洒落）。これは人類再生の徴であつた、十字架に代つたからである。人々は十字架のことは忘れて、それに似たものゝことばかり考へるやうになつた。十字架が否定された代りに、これが禮拜され、信仰されるやうになつた。

刈り落した首が餘り夥しいので、ラ・ギーヨッチイヌ自身も、その汚した地面も、腐つたやうに赤く滲んでゐる。またこれは子供惡魔の積木玩具のやうに、片々に壞されてしまふ。さうして又要る時にはいつでも組み立てられる。これは雄辯家を沈黙させ、權力家を打ち倒し、美人や義士をも滅ぼす。國家から高い名譽を擔つてゐる二十二名の盟友（二十一人は生きて一人だけ死んでゐるが）の頭を、或る朝、その人數と同じ二十二分ぐらゐの間に、ころりと斬り落してしまふ。舊譯聖書に見える豪傑の名が下落して、この道具を動かす刑吏頭のものとなつた。だがかふいふ武器があるので、彼の方が本物のサムソンよりも更に強く、更に盲目的で、毎日々々神自身の殿堂の門をちぎり取つてゐた

（聖書士師第十六、二節）。

かふいふ恐怖、及びそれに伴つた恐怖の卵の中を、ドクタアは頭をしつかり据ゑて歩いた。自分の力を信じ、用心深く自分の目的を固持しつゝ、自分が遂にはルウシイの夫を救ひ出すことが出来るといふことを決して疑はなかつた。だが時の流れはあくまで強くあくまで深く流れ去つた。時そのものがあくまで激しく連はれて行つたので、ドクタアがかふ落ちついて確信を持ちつゞけてゐるうちに、チャールズは一年と三ヶ月の間牢獄に横はつてゐた。その年の十二月には、革命がますます兇惡と狂亂を極めて來て、南部地方の川といふ川は、夜間酷たらしくも溺死させられた人人の死腰で塞がつたのみか、南部の冬の太陽の下では囚人が列をつくり方陣を成して銃殺された。だがドクタアは矢張り、しつかりと頭を据ゑて恐怖のうちを歩き廻つた。その頃の巴里で、彼ほど有名な人はなかつた、しかも彼ほど不思議な立場にゐる人もなかつた。寡黙で、慈悲深く、病院でも監獄でも無くてはならぬ、刺客にも犠牲者にも平等にその技倆を盡して惜まない彼は、一人別な人間であつた。その腕を揮ふとき、この昔のバスチユ囚人の風采と經歷は、他の凡ての人々から際立つてゐた。彼は嫌疑をうけたり問題にされたりすることはなかつた、ゐはゞ實際十八年ほど前に蘇生した人間か、または人間の間を動いてゐる精靈かの姿であつた。

五、木挽

一年と三ヶ月。この長あひだ、ルウシイは、明日は斷

一七二一

頭臺が夫の首を斬り落しはしないかと、一刻として、安心する時はなかつた。そのあひだは毎日々々、石を鋪めた街街を、護送馬車が幾臺も死刑囚を満載して、重苦しさに軋つて行く。可憐な少女たち、鳶色や、黒や、または半白の髪をした立派な婦人たち、若者たち、屈強な男子や老人たち、生れながらの貴族や百姓、いづれもラ・ギーヨッチイヌの爲めの赤い酒である、彼等は皆、毎日胸糞の惡あ監獄の暗黒な部屋から明るみへ連れ出され、街々を通つて彼女の許に連はれて、その貧つて飽かない渴きをいやすのであつた。『自由、平等、友愛か、然らば死』——この最後の一語こそ、一番容易に與へられるものであつた。おゝギーヨッチイヌよ！

この突然の不幸と、時の車輪の旋轉とにドクタアの娘が呆然となつて、何の爲すこともなく、結果を待つてゐたものとすれば、彼女も他の多くの人達の場合と全く同じことであつたらう。だが彼女は、サン・タントアヌの屋根裡部屋で、その元氣な若々しい胸に、あの父の白髪頭を抱きしめたときから、自分の義務に對して忠實であつた。殊に、心靜かに眞心をつくす善良な人達によく見るやうに、この長い試煉の間は一番それに忠實であつた。

彼女の一家が薪しひ住居に落ちついて、父に定まつた仕事が出来て、それに進み始めると聞もなく、彼女はその小さな家庭を、夫がそこにゐるかのやうにきちんと整理した。何一つでもちやんと定つた場所に置かれ、ちやんと定つた時に動かされた。小さなルウシイは、英吉利の家に皆一緒に暮してゐたときと同じやうに、規則正しくしつけられた。彼女は自分で自分の氣持を紛らさうと努め、自分達は今に又一緒になれるのだと信じる氣持になる爲めにはいさゝかの工夫をも凝らした。即ち、夫が何時急に歸つて來ても、それを迎へられるやうに用意をしたり、彼の椅子と書物を片隅に揃へて置いたりした。——それからまた夜半には、牢屋にゐて死の影に惱んでゐる數多の不幸な人々の中でも特に一人の大切な囚人の爲めに嚴かな祈りを捧げた。——かふいふことが、彼女の重たい心をさつぱりと

軽くさせる殆んど唯一の方法であつた。

彼女は打ち見たところさうひどく變つてはゐなかつた。彼女と娘が着てゐる黒の平常服は、喪服に似た物であつたが、幸福時代の華やいだ衣服と同じやうに清楚でよく手入れがとゞめてゐた。だが彼女の顔色は褪せ、年寄りぢみた思ひつめた様子が、時折どころか、絶えずそこに現はれてゐた。これさへないと、彼女は非常に可憐な、優しい昔のルウシイであつたらう。時々、夜半に父に接吻する時彼女は日がな一日抑へつゞけてゐた悲愁を、わつと破裂させることがあつた、さういふ時には、天にも地にも自分が頼むのはお

一二七三—

父さまただだといふのが常であつた。するとドクタアはきつぱりと答へた。「いや、わしの知らぬ間にチャールズに變事があるやうなことはない。ルウシイ、わしは大丈夫あれを助けることの出来るのを知つてゐるんぢや。」

一家がかふいふ變つた生活を繰り返してから幾適間にもならないうちに、父は、或る晩歸つて來ると彼女にかふあつた——

「おひおひ、監房には高窓があつてな、チャールズは時々午後の三時頃になるとその傍に行かせて貰へるのだ。そこに行けるとすると——行けるか行けんかはその時のいろいろな都合や出來事であるんだが、——お前の方でわしの教へる場所に立つてゐてさへくれれば、外にあるお前の姿を見ること出来るかも知れないとチャールズがゐふんだ。だがお前は、可哀さうだが、あれを見ることは出來まひし、よし出來たにしろ、何か見えたといふやうな合圖でもした日には、危ない目に會はなくちやならんのぢや。」

「まあ、お父さま、どうかその場所を教へて下さい、わたしきつと毎日參りますから。」

この時以來、どんな天無の悪の日でも、彼女は、そこで二時間づゝ待つのであつた。時計が二時を打つと、彼女はそこに姿を現はし、四時には諦めたやうに、足を返した。子供を連れて來られないほど雨が降つたり何かして、悪る天候でなければ、二人は一緒に行つた。その他の時には彼女一人であつた。とにかく、たゞの一日も缺かさずに通つた。

そこは、細あうねふねとした町の薄暗い汚い隅であつた。薪になる位の長さに木を挽いてゐる男の小屋がその町端れにあるたゞ一軒の家で、他は皆塀ばかりであつた。彼女がそこに通つて三日目に、木挽は彼女に氣がついた。

「今日は、女市民。」

「今日は、市民。」

この市民とか女市民とかいふ呼び方は、その當時は法律で規定されてゐた。それは、徹底的な愛國志士の間では自發的に、少し前から習慣になつてゐた。が、今ではすべての人々にとつて法律になつた。

「また散歩かね、女市民。」

「お察しの通りですわ、市民。」

木挽は身振り澤山の小男であつたが（彼はかつて道路修繕の人夫をしてゐたあの男であつた）、監獄をちらりと見やつて、そこを指さし、自分の十本の指を顔にあて玉鐵窓の代りにして、おどけた様子でのぞいて見せた。

「でもそんなこたアわしの知つたこつちやねえんだ。」と彼はいつて、またそのまゝ木を挽いてゐ

た。

翌日は、もう彼の方で彼女を心當てに待つてゐて、彼女

―二七四―

が姿を見せるや否や、すぐ話しかけた。

「おや？またこゝを散歩かね、女市民。」

「えゝさうよ、市民。」

「ほう！それに子供さんも！小さいの、これはお前さんの母ちゃんだらう？」

「はい、つていふの、お母さま。」と小さなルウシイは彼女の方にすり寄つて囁いた。

「さうだよ。」

「はい、市民さん。」

「ほう！でもわしの知つたこつちやねえ。この仕事かわしの商賣だ、そら、この鋸を御覽！こいつに小ギョッチイ又つて名をつけてゐるんだ。ラララ、ラララーこれで旦那の頭が落つこちるのさー！」

薪の切端は彼の言葉の切れると共に落ちる、彼はそれを籠の中に據りこんだ。

「わしは、自分で薪切りギョッチイ又のサムソンつていつてゐるんだ、そら又だよ！ルウルウルウ、ルウルウルウ！これでお主婦さんの頭が落つこちる！さあ今度は子供だ。テイクル、テイクル、ピクル、ピクル！これで子供の頭もお終ひだ。家中皆さー！」

ルウシイは、彼がかふるひながら二つの切端を籠に抛り込むのを見て身傑ひした。けれども、この木挽が仕事をしてゐるときにこゝへ来て、彼の眼につかずにゐることは出来なかつた。これから後、彼の好意を失ふまいと、いつも彼女の方で先に話しかけることにして、時々酒代もやつた、彼はそれを遠慮もせずにもらつた。

木挽は穿鑿好きの男であつた。時々この男のゐるのもすつかり忘れて、監獄の屋根から門をぢつと見つめてその眞心を夫に獻げるときなど、彼女がはつとわれに歸ると、木挽は腰掛に膝をついて仕事を休めたまゝ、彼女を見つめてゐることがよくあつた。そんな時には、「そんなこたアわしの知つたこつちやねえんだよ！」大概かういつて、またあわてたやうに仕事を始めるのであつた。

どんな天氣の時でも、冬の雪にも霜にも、春の身を切るやうな風にも、夏の暑い日光にも、秋の雨にも、それからまた次の冬の雪にも霜にも、ルウシイは毎日二時間づゝこの場所ですごした。さうして毎日そこを立ち去るとき、彼女は牢屋の扉に接吻するのであつた。彼女の夫は彼女を見た（さう彼女は父から聞いた）、が、それは五六度に一度であつたかも知れない、つゞけて二度三度であつたかも知れない、一週間も二週間もつゞけて一度もなかつたかも知れない。だが、機會のあるときには夫が彼女を見ることが出来たといふだけで澤山であつた、若しそれが慥かに見られると分つたなら、彼女は一週の間七日を毎日朝から晩

―二七五―

まで待ちつくしても悔いなかつたであらう。

かふいふことを繰り返してゐるうちに、またも十二月がめぐつて來た、この時も彼女の父は頭をしつかりと据ゑて恐怖の中を歩き廻つてゐた。或る薄雪の降る午後、彼女はいつものところにやつて來

た。それは何か大騒ぎの祝祭日であつた。こゝにやつて来る途中、彼女は、街の家といふ家が、小さな槍とその上に突き刺した赤帽子や、それから三色リボン、『一にして不可分の共和國、自由、平等、友愛か、然らば死』といふ標語（しかも三色文字が流行してゐた）などで飾られてゐるのを見た。例の木挽の惨めな店は、ひどく狭かつたので、その店面を皆使つても、これだけの字を書きつけることが出来なかつたらしい。けれども彼は誰かに頼んでそれを塗つてもらつた、頼まれた男は、ひどく不釣合にひどく苦しきるにやつと『死』の字を押し込んだ。屋根の上には、善良な市民が當然しなければならぬやうに、槍と帽子をたてた、窓には鋸を飾つて、『わが小さきギョッチイ又聖女』と書いて置いた、——何故なら銚の刃の大きな斷頭臺の方は、もうこの頃は人民から聖女、女神とまで崇められてゐたからである。木挽の店は閉つて、彼の姿は見えなかつたので、ルウシイは安心して一人きりでゐた。

だが彼は遠方に行つてゐたのではなかつた。何故なら間もなく騒然とした大勢の聲音と叫び聲が近づいて来るのか聞えて、それがルウシイの胸を心配で満たした。しばらくして、一群の人間がどつと監獄の角をまがつて来る、その真中にゐるのが例の木挽で、ザ・ヴェンジャンスと手に手をとつてゐた。その人数は、どう見ても五百人より下るとは思へない、それが、まるで五千の悪鬼のやうに踊り狂つてゐた。各々が口々に歌ふ眞の外に、何の音楽といふものもない。一同は流行の革命小唄に合はせて踊り、猛烈な拍子をとつてゐるが、まるで、皆が一度に斬きしりをした聲のやうである。男と女が一緒に踊る、女と女と一緒に踊る、男と男と一緒に踊る、ふとした機會で組合はされるまゝに踊る。最初は彼等は、丁度、粗末な赤帽子と粗末な毛織の襪の嵐のやうに見える、だが、群集がこの場所に一杯になつて、ルウシイの近くで踊るのをやめると、發狂した、舞踊者の姿をした物凄い幽霊のやうなものが、彼等の間に立ち上がった。彼等は進んだり、退いたり、互ひの手を叩いたり、互ひの頭にしがみついたり、一人でくるくる廻つたり、互ひに砲き合つて一緒に廻つたりした揚句、大半はばたばた倒れる。するとその連中が倒れてゐる間、残つた連中は手に手をつなぎ合つてぐるぐると廻る、やがてその環がこはれる、そして二つか三つの環に分れて廻り狂ふかと見ると、さつと止める、それから又始めて、叩いた

——二七六——

り、しがみついたり、掻きむしつたりして、また輪舞を繰り返して、前と別の方に廻る。不意にまた彼等は止めて、休んで、新たに拍子をとつて、國道の幅だけの列をつくる、そして頭を低く下げ、手を高く上げて、金切聲でわめきながら、すつと行つてしまつた。どんな戦争でも、この踊りの半分も恐ろしくはないであらふ。これは實にひどく墮落した遊戲であつた、——かつては無邪氣だつたものまでが、全く悪魔に引き渡されるのだ、——健全な慰薬が、血を怒らせ、感覺を亂させ、心を無感覺にする手段に變へられたものゝやうであつた。それに幾分の美が見られても、その美は、本来よかつたものが如何ほど歪んだ捻れたものになつたかといふことを示すだけで、卻つてこの踊りを醜怪にするのであつた。これが爲めに露はになつた處女の胸、こんなにも狂亂した、可憐な、子供のやうな頭、この血と泥の眞中を氣取つて歩いてゐる細い足、かふいふものが、この調子外れの時代の典型であつた。

これが名高いカルマニユールどほりであつた。木挽小屋の戸口に押しつけられて、怯えたり呆れたりしてゐるルウシイを残して、それが行き過ぎてしまふと、鳥毛のやうな雪が、まるでそんな踊りなどなかつたものゝやうに靜かに降つて、眞白に柔かに積つた。

「あ、お父さま！」彼女がしばらくの間両手でかくしてゐた眼を上げて見ると、父が眼の前に立つてゐた。「あのむごたらしい、酷い有様はどうでせう。」

「うむ、知つてゐる、知つてゐる。何度も見たことがあるんぢや。恐がらんでもあゝ。あの人遠だつてお前をどうもしやしないからね。」

「いへ、お父さま、わたし自身が恐かつたんぢやありませんの。たゞチャールズのことや、あの人達の無慈悲なことを考へますと——」

「もう間もなくわたし達は、あれをあの連中の慈悲に縋らんでもよいやうにしてやれる。わたしはあれを窓に上らせておいたから、それをお前にあひに來たんぢや。今のうちなら見てゐる人もない。そらあの一層高い柵のやうに出つ張つた屋根の方に向いて接吻を送つてやれ。」

「えゝしますとも、お父さま、魂を罩めてしますわ！」

「あれの顔が見えまひな、可哀さうに。」

「えゝ、」ルウシイは接吻を送りながら、懐しさうに泣いてゐた。「えゝ、見えません、お父さま。」

雪の中に聲音がする。マダム・ドフアルジュであつた。「やあ、これは女市民。」とドクタアはあつた。「おや、これは、市民。」通りすがりにかふ答へた。たゞそれだけである。マダム・ドフアルジュは雪路の上を影のやうに去る。

「どれ、腕をお貸し。あれの爲めだ、元氣のあゝ愉快さうな

—二七七—

風をしてから離れるんぢや。さう、さう、巧みぞ。」二人はその場から離れた。「これも徒にはさせないぞ。チャールズは明日呼び出されるんだ。」

「明日ですつて！」

「ぐづぐづしては居れん。わたしは十分用意してゐるが、あれが、いよいよ裁判所に呼び出されるまでは、どうすることも出来ないやうな手配があるんぢや、それを片附げなければならん。あれのところはまだ通知が行つては居るまいが、わたしは、間もなくあれが、明日の裁判に呼び出されて、コンシエルジュリイの方に移されることを知つてゐる、わたしはうまい具合に聞いたんぢや。お前、心配はせんだらうな。」

彼女は辛うじてかふ答へた、「お父さまを信じます。」

「黙つて信用してゐてくれ。お前の不安ももうお終ひぢや。こゝ何時間かのうちにあれをお前のごころに歸らせることが出来る、わたしはあれを出来るだけ保護してやつたんだ。あゝ、わたしはローリイに會はなくちやならん。」

彼は立ち止つた。さう遠くもないところを重くるしい車輪が、こゝろと軌つて行くのが聞える。父も娘もその音が何を意味してゐるか十分知りぬいてゐた。一つ、二つ、三つ。三臺の護送馬車がその恐ろしい荷物を積んでしんとした雪の上を進んで行く。

「わたしは、ローリイに會はなくちやならん。」ドクタアはかゝ繰り返して、娘と別れた。

あの忠實な老紳士（ローリイ）は、矢張りその銀行に残つてゐて、決して離れたことがなかつた。没收されて國有となつた財産のことで、彼は帳簿を持つて度々呼び出しをうけた。彼の力でもとの所有者の爲めに出来るだけのことはした。テルソン銀行の預かつてゐるものをしつかりと擱んで、一言もいはず黙つてゐることの出来る點で彼以上の人間はなかつた。

陰鬱な、赤く黄色い空、セイヌ河から立ちのぼつて来る霧、それが夜の近づくのを告げてゐた。二人が銀行についた頃は、殆んど晩であつた。モンセエニユールの堂々とした邸宅は、殆んど荒れ果てゝ人氣がない。中庭に積まれた塵芥と、炭の堆の上の方には、かふいふ文字が見える。『國有財産一にして不可分の共和國 自由、平等、友愛か、然らざるば死！』

ローリイと一緒におたのは誰であらうか、——椅子の上の乗馬外套の主は？——他人に見られたくない人であらうか。誰だか今着いたばかりのこの人の許から、ローリイが昂奮し、吃驚した様子で出て来て、好きなルウシイを両手に抱へた。だが、ルウシイの絶え絶えの言葉を繰り返すかのやうに、自分が出た来たばかりの部屋の方に頭を向け、聲

——二七八——

を高めて、「コンシエルジュリイに移されて、明日呼び出されるんですつて。」とひつたのは、一體誰に聞かせるつもりであらうか。

六、勝利

五人の裁判官、一人の検事、それから厳格な陪審員達から成る恐ろしい法廷は、毎日開かれてゐる。その扱ふ囚人の名簿は、毎夕發表されて、各監獄の牢番人によつて囚人達に読み上げられる。牢番人は定りきつた洒落でかふあつた——

「おい、中の連中、こゝへ来て夕刊を聞くんぞぞ！」

「シャルル・エヴレモンド、別名ダーネイ！」

やがて、ラ・フォルスでは、所謂夕刊が読み始められた。

誰かの名が呼ばれると、その人は大勢の中から離れて、不運にもかふ記されてゐると読み上げられた人々にあてがはれた場所に出なければならぬ。シャルル・エヴレモンド、別名ダーネイは、幾百の囚人がさうして出て行くのを見てゐたから、この例を知つてゐたのは當然である。

例の浮腫んだやうな牢番は、名簿を読むのに眼鏡をかけてゐたが、チャールズが果してその場所に出たかどうかを確かめる爲めにづらりと見渡して、その次に移る、かうして一人の名前ごとに少しづゝ休んで、名簿を全部読み上げた。皆で二十三人あつたが、返辭したのは二十人しかなく、呼び出された囚人の中の一人は、牢内で死に、他の二人はとうに斷頭臺にかけられて、忘れられてゐたからであつた。名簿の読み上げられたのは、ダーネイがこゝに着いた夜、一緒に集まつてゐる囚人達を見たあの圓天井のある廣間であつた。あの達中は一人残らず例の大虐殺のときに死んだ、その後彼が愛したり別れを惜んだりした人々も、皆斷頭臺で死んでしまつた。

やがて別れを告げる深切な言葉が急いで交はされるが、その別れもすぐ済んでしまふ。それは毎日の出来事であるばかりでなく、ラ・フォルスの所謂社交界では、この夕方、一種の罰金遊びとさゝやかな音楽會の支度にかゝつてゐたからである、彼等は鐵格子のところを群がって来て涙を落したが、折角計畫した遊戯から缺けた二十人の代りが、補充されなければならぬ上、精々よくしても、閉め出しまでの時間が短い、その時になると、共同で使ふ部屋や廊下は夜通しそこに見張番をする猛犬達に引き渡すことになつてゐるからである。囚人達は、決して無感覺とか無感情であつたのではない。彼等の振舞ひは、萬事その時の調子から出てゐる。同様に、よし僅かの差別はあるにしても、或る人々を狩つて、必要もないのに斷頭臺に挑戦させ、遂にそれで死ぬやうにさせたあの一種の熱又は陶酔

慥かにそれは單

一 二七九

に得意がりたひ爲めではない、激烈に動搖してゐる公衆心理の猛烈な傳染の一例である。傳染病の季節には、われ等の中で人知れず、その病氣に心をひかれるやうな連中が出て来る、その病氣で死にたいといふ、一時的だが恐ろしい誘惑である。われ等は誰でもこの胸のうちに同様な不思議なものをかかしてゐる。たゞそれを目覺ませるやうな環境を缺いてゐるだけである。

コンシェルジュリイ監獄への途中は短くて眞暗であつた。蟲の巢のやうになつた監房の一夜は、長くて寒かつた。翌日、チャールズ・ダーネイの名が呼ばれるまでに、十五人の囚人が法廷に連れ出された。十五人が十五人とも死刑を宣告された、全部の審問に一時間半ばかりかゝつた、

シャルル・エヴレモンド、別名ダーネイは、やがて審問をうけた。

裁判官達は、鳥毛帽をかぶつて判事席についてゐる、だが、その他のものゝ冠物は粗末な赤帽子と三色帽章が大部分である。陪審席やさはついてゐる傍聴者席を見渡してゐた彼の心には、かふいふ考へが湧いたかも知れない、まるで社會の秩序が顛倒してしまつて、惡者が正直な人間を裁判してゐるのだと、何時の日でも低劣、殘忍、邪惡の分子を缺いたことのない市の、一番低劣な、一番慘忍な、一番邪惡な民衆がこの場の指導者である、口やかましく批評したり、喝采したり、不贊成の意を述べたり、豫測を加へたり、判決を促したりするが、誰一人止めるものはない。その連中のうち、男の大半は様々に武裝してゐる、女のうちには、ナイフを持つたもの、匕首をもつたもの、傍聴しながら食つたり飲んだりしてゐるものがある、だが編物をしてゐるのが一番多い。この最後の女連の中に、一組餘分の編物道具を小脇にかゝへながらしきりに編んでゐる一人がある。この女は一番前の列に坐つてゐる、その隣りにゐる男は、チャールズが巴里の市門についてから以後は、一度も見ることがないのだが、それでも一目見てすぐドファルジュであることを思ひ出した。彼は、女が二度男の耳にさゝやいたこと、女は男の妻であるらしいことを認めた。だが彼がこの二人の様子に一番氣づいたことは、彼等が出来るだけ自分に近い席を占めてゐたに拘らず、一度も自分の方を見ないことである。彼等は頑固な決心で、何かを待つてゐるやうに見えた、彼等は陪審席だけをぢつと見つめて、他のものは何も眼に入れてゐなかつた。裁判長の下には、普通の目立たぬ衣物を着たドクター・マネットが坐つてゐた。囚人から見える限りでは、法廷に關係のない人で、カルマニョールの粗末な衣物を着ずに普通の衣物を着てゐるのは、彼とローリイとだけであつた。

シャルル・エヴレモンド、別名ダーネイは檢事によつて、

一 二八〇

亡命者として論告された。彼の生命は、死刑に處すといふ法令に照して（このためにすべての貴族は亡命者として逃げ出したのだ）、共和國に沒收されたものである。その法令に彼が佛蘭西に歸つた以後の日附があつたゝて、少しも關するところではない。こゝに彼が居り、こゝにこの法令がある、彼は佛蘭西で捕へられた、従つて、彼の首は斬られなければならない。

「そいつの首を斬つてしまへ！」と聽衆は叫んだ。「共和の敵だ！」

裁判長はこの叫びを靜める爲めにベルを鳴らし、それから囚人に、その方が長年英國に住んでゐたといふのは事實かどうかと訊ねた。

たしかに事實である。と彼は答へた。

それではその方は亡命者ではないのか。その方自身は何といふか。

あの法律の意味と精神によれば、自分は亡命者ではないと考へる。

それは何故か。と裁判長は追究する。

何故なら、自分は自ら進んで自分の大嫌ひな肩書と自分の大嫌ひな身分を振りすて、この國を立ち去つた、——自分はこの法廷で現在認められてゐる亡命者といふ言葉が用ひられるより前に抛棄してゐたのである、——さうして佛蘭西の重荷を負ひすぎた人民の勤勞によつて衣食せずに、英吉利で自分自身の勤勞によつて生活した。

何かその證據があるか。

彼は二人の證人の姓名を擧げる。テオフィル・ガベルと、アレキサンドル・マネットである。

だが、その方は英國で結婚したといふが。と裁判長は彼に念を押した。

さやう、だが英國の婦人ではない。

佛蘭西の女市民か。

さやう、生れながらの佛蘭西の女市民。

その名と家族は、

「ルウシイ・マネットといひます、そこに坐つてゐる善良な醫師ドクタア・マネットの一人娘であります。」

この答へが傍聽席に好い影響を與へた。あの有名な善良な醫師といふ叫びが次第に高まつて堂をつんぞく程であつた。ほんの一寸前には囚人を睨みつけて往來に引き出して虐殺してやりたくて堪らなといふ様子を見せてゐた幾つかの兇猛な顔には、俄に驟雨のやうな涙がつかはり落ちる、それ程民衆は氣紛れに動くものである。

かふしてチャールズ・ダーネイは、ドクタア・マネットが繰り返し繰り返して教へた通り、その危険な道の幾歩かを踏み出した。同じく用心深い忠言によつて、彼の前に横はつ

―二八一―

てゐる道が一步ごとに指圓され、彼の行く道が少しづつ用意されてゐるのであつた。

裁判長はかふ訊ねる。彼がもつと早く歸らずに、あの時佛蘭西に鶴つて來たのは、何故か。

彼はかふ答へた。自分がかつと早く歸つて來なかつたのは、佛蘭西では、自分がかつて抛棄したものである外、生活の手段がなかつたが、英國にゐれば、佛蘭西語とその文學を教授して暮せたからである。自分があつた時になつて歸つて來たのは、自分がゐない爲めに、生命も危る目にあつてゐると書つてよこした或る佛蘭西市民の急な懇願の手紙を受け取つたからである。自分は、この市民の生命を救ひ、一身上のどんな危険もかへりみず、彼の爲めに眞實の證言をしようと覺悟して歸つて來た。これは共和國の眼から見れば犯罪となるのであらうか。

群衆は熱心に叫んだ、「ならねえぞ！」

裁判長はベルを鳴らして彼等を静めようとしたが何の效もない。彼等は自分からやめようと思ふまでは、「ならねえぞ！」を叫びつゝつけた。

裁判長は、その市民の名は、と訊く。被告は、その市民は即ち自分の第一證人だと答へる。その上彼は、自信あり氣に、その市民の手紙のことを述べた——、この手紙は市門で取り上げられたまゝであるが、只今裁判長の前にひるげられてゐる書類の中にあるに違ひないと思ふ、と。

ドクターは、その手紙をそこに置くやうに手配して置いたのである——ダーネイにもきつとそこにある筈だと斷言して置いた——かふして訊問がこゝまで来たときに、その手紙は取り出されて讀み上げられた。市長ガベエルは、要求されて、それを證明した、市民ガベエルは、極めて用心深く、また丁寧にかふ言ひ添へた、共和国の取り裁かなければならない敵が無数にある爲め、革命法廷に課された仕事が頗る多忙なので、物の數でもない自分は、三日前まで一寸見落された形で、アヴェイの監獄にゐた、——事實、革命法廷の愛國的記憶から逸してゐたと見える。だが三日前になつて、革命法廷の前に呼び出され、陪審の方々から、自分に封する告發は、市民エヴレモンド、別名ダーネイの引き渡しによつて、彼の身柄とともに解除される結果になつた旨宣告されて、釋放されたのである、と。

次にドクター・マネットが訊問された。彼の大きな人氣と、彼の答への明智なこと、はい、印象を與へた。そしてその答へがすゝんで、被告は自分があの長い禁獄から放免されたときの最初の友人であること、被告は英國に長くゐて、自分達の英國生活の間、娘にも自分にも、いつも忠實に獻身的に盡してくれたこと、被告は英國の貴族黨政府の氣受けがよかつたどころか、一度は英國の敵、合衆國の味方と

——二八二——

して審問をうけ、實際、生命を危くしたこと、——かふいふ事實を、極めて慎重に、直截な眞實と熱誠の力をもつて眼前に描き出すにつれて、陪審員と群衆は一體となつた。最後にドクターが、當時自分と同じくその英國の審問を見てゐた英國の紳士ローリーが、今こゝにゐて、自分の話すところを裡書きすることが出来るだらうから、聞いてくれといふと、陪審員は、いやもうこれで十分だ、裁判長の方でよろしければ、自分達はすぐさま票決を要求したいとひつた。

一人票決する度に（陪審員は一人づゝ聲高に票決するので）、群衆は喝采の叫びをあげる。票決の聲はすべてが囚人の味方であり、裁判長は放免する旨を宣告した。

忽ち、極めて異常な光景が始まつた。これによつて、群衆は時々彼等の移り氣を満足させたり、また寛容や慈悲に對する彼等のより善良な衝動を満足させたり、或は、これを彼等の次第に増して來る殘忍な怒りに對する一種の相殺作用と見てゐるのである。かふいふ異常な光景がこの三つの動機のいづれによるものか、何人でも決めることは出来ない、惑らくこの三つを混じてゐるのだらうが、中でも第二の動機が一番彊く動ゐてゐたらしい。放免が宣告されるや否や、別の時に流される血と同じ位ゐる存分に涙が洗された。そして當の囚人は、出来るかぎり彼を目掛けて殺到して來た夥しい男女よつて、代る代はる友愛に満ちた抱擁を與へられるので、長い間の不健康な監禁生活から出たばかりの囚人は、疲勞の爲めに氣絶しさうになる。殊に、この同じ群衆が反對の方面に流されたが最後、同じ勢をもつて彼のところに殺到して來て、彼を引き裂いて街路の上に播き散らすに違ひないといふことをよく知りぬいてゐるので、尙更、氣が遠くなりさうであつた。

次に審問を受ける被告達と入れ代る爲めに、彼がその場を動かなければならなかつたので、暫時はかふいふ抱擁から免れることが出來た。次には五人一度に、共和国の敵として審問される。それは彼等が言葉なり行爲なりで共和国に盡すところがなかつたからである。革命裁判所は、それ自身及び國民の爲めに、ひどく迅速に、徒にされた機會の埋め合せをした。といふのは、彼の次に引き出されたその五人は、彼がまたその場を立ち去らない中に、二十四時間以内に死刑に處すといふ宣告を受けて、彼の方にやつて來たからである。彼等の一人が、監獄通用の死刑の符牒——指一本を立てること——で彼にさう語る。そして五人とも言葉を添へて、「共和國萬歲！」とひつた。

事實、この五人のときには、審問の進行を長びかせるやうな聴衆がなかつた、何故なら彼とドクタア・マネットが門から出ると、その周圍には非常な群集で、彼が法廷で見た

―二八三―

あらゆる顔があつたやうに思はれた。が、たつた二つだけ見當らない、それを見付けようとしたがどうしても見えない。彼らが出て来るや否や、この人渦はまたも彼をめぐめて殺到し、泣いたり、抱いたり、喝采したり、皆が代る代る來たり、一緒に押しかけたりする。この狂氣ぢみた光景の演じられてゐた岸の下を流れてゐる川の流れさへ、岸上の人間と同じやうに狂氣したやうに見えるくらゐであつた。

皆は彼を、眞中に用意してある大椅子にのせた。これは法廷からか、或はその廣間か廊下の何れからか持ち出されたものである。椅子の上には赤い旗がかけられ、その後ろには、頂きに赤帽子を突き刺した槍が結びつけられる。ドクタアは熱心に懇願したけれども、彼がこの凱旋車に乗せられて人間の肩で家まで運ばれて行くことを、止めることが出来ない。彼のまはりには、赤帽子の混沌とした大海がうねり上る、まるで荒れくるふ深淵から、難破物のやうに人の顔が抛げ上げられるのが見える、彼は一度ならず、これは自分の心が狂亂してゐるのではないか、自分は囚人護送馬車に乗つて、斷頭臺に行く途中ではないのかと疑つてみた。

熱狂した、魘夢のやうな行列を作つて、彼等は彼を運んで行く、途中で出會つて彼を指さす人々を、誰でも構はず抱擁する。かふして雪の降り積む街々を、威勢のよい共和の色で赤々と染め立てながら、かつては同じ雪の街々をこれより濃い色（虐殺の血）で赤く染めたときと同じやうに、踏みとどろかして、彼らはダーネイを彼の家の中庭にかつき込んだ。彼女の父は彼女に支度させる爲めに一足先に行つてゐたので、彼女は、夫が自分の足で立つや否や、その兩腕に身を投げたまゝ氣が遠くなつた。

彼が妻を胸に抱きしめ、彼女の美しい顔を、叫びわめく群集から見られないやうに自分の方に向けて、人眼につかないやうに自分の涙を彼女の脣に觸れさせた時、群衆の中の數人が踊り出した。間もなく、全群集が踊り始めて、中庭にはカルマニヨールの洪水があふれた。やがて、彼等は群集の中から一人の若い女を選び出して、空いた椅子に乗せ、自由の女神として擔ぎ廻り、中庭から、近くの街へうねり出し溢れ出した。そして川の岸に沿ひ、橋を越え、カルマニヨールは彼等を一人餘さず捲き込んで、渦卷のやうに去つて行つた。

意氣揚々と誇り顔に自分の前に立つてゐるドクタアの手を握り、またカルマニヨールの流れに捲き込まれまいと足掻いてゐたので息も切れ切れに喘ぎながら入つて來たローリイの手を握り、お父さまのお頸をしっかりとお手々でお抱きといつて差し上げられた小さなルウシイに接吻し、それから、小さなルウシイを差し上げてゐるこの何時も變らぬ熱心な

―二八四―

忠實なプロスに挨拶して、彼は妻を抱へて自分達の部屋へ連れて行つた。

「ルウシイ！私のルウシイ！もう大丈夫だ。」

「わたしの大事な大事なチャールズ、わたしは、いつもお祈りする時のやうに膝を折つて、神様にこのお禮を申します。」

夫と妻とはうやふやしく頭を下げ心を捧げる。彼女がまた夫の手に抱かれたときに、彼は妻にみつ

た――
「お前、今度はお父さんにお禮をいふ番だぞ。この佛蘭西中のどんな人だつて、お父さんが私にして下さつたやうなことは出来なかつたのだ。」

遙かの昔、父親の可哀さうな頭を自分の若い胸に抱いた時のやうに、彼女は自分の頭を父の胸にのせた。父は、娘にお禮が出来たので幸福であつた、彼は自分の苦惱を償はれ、自分の力を誇つてゐた。「お前も氣が弱くなつちやならんぞ、」彼は諭した。「さう慄へんでもあゝ。わしはあれを救つたんぢや。」

七、扉を打つ音

『わしはあれを救つた。』それは、彼が今までにたびたび繰り返さなければならなかつた夢の一つではない、チャールズは現實こゝにある。それなのに彼の妻は慄へてゐる、ぼんやりした、だが、重苦しい恐怖が彼女の心にかゝつてゐる。

まはりの空氣はあくまでも濃くて暗澹としてゐる、民衆はひどく復讐が好きで氣が變り易い、罪のない人々が、いゝ加減な嫌疑や腹黒い悪意の爲めに絶えず死刑にされてゐる。彼女の夫と同じやうに罪のない、また彼が彼女にとつて大切だと同じやうに、他の人達にとつて大切な大勢の人達が、今、危ぬところで彼女の夫が免れて来たあの運命に見舞はれぬ日が、一日としてないといふことを忘れるのは到底出来ない。それだけに彼女の心は、重荷をおろして、ほつとしたと感ずるのが當り前だのに向さういふ氣にはなり兼ねてゐるのである。冬の午後の日影は落ちかけてゐる、今でさへあの恐ろしい車は街をころころと軋つて行く。彼女の心はいつしかその車を追つて死刑囚の中に夫の姿を探してゐた。そして、はつと氣がついては、現に眼の前にある夫にひしひしと獅噛みついて、ますます慄へるのであつた。

父は彼女に元氣をつけてやつてゐるが、そこにはかふいふ女性らしい弱さには同情を持ちながらもそれを超越した或るものが見える、これは見る眼に不思議である。もはや屋根裡部屋ではない、鞆造りではない、百〇五號囚でも北の塔でもない！彼は自分の手がけた仕事を成就した、彼の約束は遂げられた、彼はチャールズを救つたのだ。よし、彼等はすべて彼に倚りかゝるがひゝ。

――二八五――

一家の世帯向きほひどく儉約なものであつた、それは、人民に反感を持たせない一番安全な生活方法であつたばかりでなく、彼等は元々そんなに金持ではなかつたし、又チャールズはあの長い禁獄の間、あの粗悪な食物と護衛の爲めにひどく高い金を拂はなければならず、時には彼より貧しい囚人の生活を賈いでやることもあつたからである。一つはこの理由から、また一つは家内に謀者の入りこむのを避ける爲めに、彼等は召使を置かなかつた、中庭の門に門番として働いてゐる所謂市民と女市民が、ちよひちよひ用を足してくれた、それから克蘭チャア（これはもう殆んどローリイから彼等に譲り渡されたと同じであつた）、彼は毎日下僕の役を務め、毎夜彼等のところで寝た。

『一にして不可分、自由、平等、友愛か、然らざるば死』の共和國の法令として、何處の家の戸又は門柱にも、地上から若干の適當な高さのところに、一定の大きさの文字で居住者の姓名を明瞭に記して置かなければならない。それで下の門柱には『ジェリイ・克蘭チャア』の姓名が規則通りに見事に記された、やがて午後の暗い影が濃くなつたころ、この名の持主が一人のペンキ屋を探して歸つ

て来た、ドクタア・マネットは彼に頼んで標札にシャルル・エヴレモンド、別名ダーネイといふ名を書き加へさせた。

到る處恐怖と不信が満ちてゐる暗澹とした時代なので、何時もの平和な生活の仕方は、すっかり變へられた。ドクタアの小さな家庭でも、他の數多のそれと同じやうに、毎日つかふ必要な品物を、毎夕少しづつ、方々の小さい店で買った。人目をひくのを避けたい、人の口端にかゝつたり羨まれたりする機會も、出来るだけなくしたいといふのが、でも希望であつた。

これまで何ヶ月かの間は、ミス・プロスと克蘭チャアが賄方を務めて来た、プロスは財布をもつて、克蘭チャアは籠をさげて出かけた。毎日の午後、街燈のつくころ、二人はこの用で出かけて、必要なものを買つて来る。勿論ミス・プロスは長いこと佛蘭西人の家庭に雇はれてゐるから、自分でその氣にさへなれば、彼女の知つてゐる英語と同じ位ゐるなら、佛蘭西語も覺えられたに違ひないのだが、彼女には少しもさういふ氣がなかつた、それで彼女も、ゐゆる『ちんぷんかん』(よく彼女は好んで佛蘭西語をかふ呼んだ)についての智識は克蘭チャアと同様であつた。だから彼女の買物の仕方は、自分の欲しい品物はどんなものかなど、いふ前置きを一切抜きにして、店の亭主の頭の中にその品物の名前だけを打つけるやうにいふのである、若しそれが彼女の買はふと思ふ物の名でないときは、そこらを見廻し、その品物を探し出して、掴んだまゝ取引談判の済むまではしつかりと持つてゐるのである。彼女の取引談

―二八六―

判といふのは、品物の正當な値段として商人の出して見せる指よりも、一本だけ少なく出して見せることである、そして商人の出してみせる指がどれだけの數であらふと一切お構ひなしなのであつた。

「さあ、克蘭チャアさん、」嬉しさの餘り眼を眞赤にしてミス・プロスはあつた。「お支度がよかつたら出かけよう。」

克蘭チャアは嘎れ聲で、いつでもミス・プロスのお供が出来るかとひつた。彼はづつと前に、もう例の鐵鎊を擦り落してしまつてゐた、だがその釘を植ゑたやうな頭だけは、どんなものをもつて來ても落せさうになかつた。

「いろいろなものが要るんだからね。」ミス・プロスはあつた、「買物をきつさと片付けなくちやいけないんだよ。何より先づお酒が要るの。お酒は何處で買ったつてあゝけれど、あの赤頭巾たちがよくやつてるやうな素敵な乾盃をやるんだよ。」

「大方何だらう、お前さんにや、」と克蘭チャアは答へた。「あの連中がお前さんの爲めに乾盃したつて、惡の親玉めのお祝ひにやつてゐたつて同じやうに、思はれるだらうよ。」

「そりや誰のこと？」とミス・プロスはあつた。

克蘭チャアは、一寸ためらつてゐたが、それは惡魔のことだと説明した。

「まあ！」とミス・プロスはあつた。「あんな連中のことをいふのなら、通辯なんか要らないよ。

あの連中のことなら、たつた一口ですむんだよ。そら、『夜中の人殺し』に『人泣

かせ』や。」

「しつ、お前！どうぞお願ひだから、氣をつけておくれ！」とルウシイが叫んだ。

「はい、はい、はい、氣をつけませう。」ミス・プロスはかふあつた。「でもお互ひの間だけなら、外面のそこゐら中でやつてゐる、あの抱き合ひごつかの眞似をした、葱くさい煙草くさい息のかぶせ合ひなどは無くなつてくれる方が好いぐらゐは申しても宜しうございませう。さあ、奥さま、わたし

の歸りますまで、その爐の傍からお動きなさいますな！折角お取りかへしの旦那さまですもの、大事にして上げなさいまし、どうぞさうやつて、わたしの歸つた顔を御覽になるまで、その可愛いお頭を旦那さまの肩からお除けなさいますな！それから、先生、出かける前に一寸お伺ひしたい事がございませうか？」

「それくらゐの自由は許してゐる。」ドクターは微笑してゐた。

「おや、後生でございませう、その『自由』のお話はもうお止めなすつて、——もうもう澤山ぢやございませうか。」

「しつ、お前！またいふの？」とルウシイは咎めた。

「はい、奥さま、」ミス・プロスはかふいつて、彼女の頭を強

—二八七—

くふなづかせながら、「早いお話が、わたしはジョージ三世陛下の人民でございませうよ。」ミス・プロスはこゝで片膝を一寸屈めて王の名に敬意を表する。「ですから、わたしの格言は、『彼等の政治に禍あれ、彼等の邪惡なる陰謀を押し潰せ、王の上にご我等の希望あれ、神よ、わが王を救ひたまへ！』なんです。」

克蘭チャアは、發作的に忠義な心になつて、教會で人がするやうに、唸るやうにミス・プロスの後についてその文句を繰り返した。

「嬉しいわねえ、お前さんにも英國魂がそれだけあるんだねえ、その聲が感奮をひいてゐなかつたらと思ふけれど。」と、ミス・プロスは感心したやうにゐた。「そこで、先生、お聞きしたいこととございませうが、あの何でございませうか、——何か自分たちにとつてひどく心配になつてゐる事柄を軽々とあしらつて、かふ一寸した思ひつきのやうにそれを持ち出すのは、この可憐な女の癖なのである——」あの、わたしどもが、こゝから出られる見込みはまだございませんでせうか。」

「まだぢやらうな。まだチャールズには危なからうから。」

「やれやれ！」ミス・プロスは、最愛の女主人の金髪が爐の火に照ちされてゐるのをちらりと見ながら、出て来る吐息を元氣よく呑み込んでかふゐつた。「それぢや我慢して待つてゐなくちやいけないでございませうね、いへ、それだけで結構でございませうよ。弟のソロモンがよく申しましたよ、わたしどもは、頭を眞直にして腰を落ちつけて、戦はなくちやいけないでございませうね。さあ克蘭チャアさん！——奥さま、お動きなさいませうな！」

二人の出かけたあとには、ルウシイと夫と、父と子供が、明るい火の傍に残つた。ローリイは今に銀行からやつて來ることになつてゐる。ミス・プロスは洋燈を點けたが、隅の方に片寄せて行つたので、彼等は心置きなく爐の火の明りを楽しむことが出來た。小さなルウシイはお祖父さまの腕を兩手にしつかと抱へて傍に坐つてゐた。彼は、囁くやうな低い聲で、小さなルウシイにお伽話を語り始めた。それは或る力の強い妖精が牢屋の戸を開いて、いつか自分に恩を興へた一人の囚人を助け出した物語である。すべてがひつそりと静かである。ルウシイは先程よりはづと落ちついてゐた。

「あれは何でせう？」と彼女が突然叫んだ。

「どうした！」と父親はお伽話をやめて、わが手を彼女の手にのせてゐた。「しつかりするがひつ。お前の氣持はどうしてさう落ちつかないんだ！ほんの一寸したことでも——何でもなくても——お前はびつくりして跳び上る！お前は、お父さんの豫だぞ！」

―二八八―

「濟みません、お父さま、」とルウシイは血の氣のない顔で、口籠りながら言ひわけをした。「階段に何か變な聲音が聞えたやうに思つたものですから。」

「階段など、まるで墓場のやうに静かぢや。」
彼がその言葉をあひ切らないうちに、いきなり戸を叩く音がする。

「あ、お父さま、お父さま。何でせう！チャールズを匿して下さい。あの人を助けて下さい！」

「これこれ、」ドクタアは立ち上りながら、彼女の肩に手をかけてあつた、「わしはもうあれを救つたのだ。お前は何といふ氣の弱いことぢや！どれ、わしが戸口に行つて見よう。」

彼は洋燈を手にとつて、戸口までの間にある外の二部屋を横切つて、戸を開けると、牀にはどたどたと亂暴な聲音がして、赤帽子をかぶり、長劍とピストルで武装した四人の亂暴な男が部屋に入つて来る。

「市民エヴレモンド、別名ダーネイ。」と眞先の男がひつた。

「誰方からの御用です？」とダーネイが返事した。

「わしだ。いやわれはれだ。エヴレモンド、わしは君を知つてゐるぞ、今日法廷の前で君を見たんだ。君は今から又共和國の囚人になるんだ。」

四人は彼が立つてゐるところを取り圍む、妻と子供とは彼にしがみついてゐる。

「どうしてぞ、何故私が二度と囚人になるのか、いつて下さい。」

「君は、眞直にコンシェルジュリイに戻るだけで澤山だ、明日になれば皆分るんだ。君は明日法廷に呼び出されることになつてゐるんだ。」

この人達の侵入で石になつてしまつたドクタア・マネットは、洋燈をもつ銅像のやうに、それを手にしたま、突つ立つてゐた、が四人の一人がかふ言つてしまふと、體を動かし、洋燈を下し、その男の眞正面に行つて、赤い毛糸シャツのゆるい胸元をおだやかに抑へて、あつた――

「君はあれを知つてゐる、といつたね。ぢや、わしを知つてゐるかね。」

「知つてゐるとも、市民ドクタア。」

「わたしたちは、あなたを知つてゐるんだ、市民ドクタア。」

ドクタアは放心したやうに甲から乙と見廻した、そして一寸言葉をきつた後で、低い聲で、かふるつた――

「それではあれが質問した返辭をわしにしてくれんか。一體どうしてこんなことになつたんだや。」

「いや市民ドクタア、」と眞先の男は澁々あつた、「あの人はサン・タントア又區に告發されたんだ。この市民は、」と部屋に二番目に入った一人を指さして、「サン・タントア又

―二八九―

から來たんだ。」

かふ名ざしされた市民は點頭いて、あひ加へた――

「その人はサン・タントア又から訴へられたんだ。」

「何の罪で？」ドクタアはかふ訊く。

「市民ドクタア、」最初の男は、前と同じやうに澁々とひつた。「もうこの上は訊かずにあてもらひ

たひ。若し共和國があんたに犠牲をよこせといふなら、屹度あんたは、善良な愛國者にふさはしく喜んでそれを捧げるに違ひない。共和國が何よりも第一だ。人民は主權者だ。さあ、エヴレモンド、急ぐんだ。」

「もう一つ、」とドクタアは懇願した。「あれを告發したのは誰か話してもらへるかね。」

「そんなことを言へば規則違犯だ、」と最初の男は答へた。「だが、このサン・タントアヌの人に聞いて見るのなら構はない。」

ドクタアはその男の方に眼を向ける。彼は立つたまゝ、何か不安げに身動きして、一寸髻をしいいでゐたが、やがてかぶあつた――

「さうさ！ 實際規則違犯だ。だが、あの人を告發したのは――それも重大なものだが――ドフアルジュ夫妻だ。それからもう一人ある。」

「その一人は？」

「市民ドクタア、あんたの方が訊くのかね。」

「さうぢや。」

「ぢや、」とサン・タントアヌの男は不可解な様子をしてゐた。「いづれ明日返辭をする。今は言はない！」

八、骨牌の勝負

仕合せにも、留守のうちに起つた新しい不幸を少しも知らずに、ミス・プロスは、腹の中で必要な買物の數を算へ、狭い街々を縫ふやうに通つて、ポン・ヌーウを越えて川を渡つた、克蘭ンチャアは籠を手にして彼女の傍を歩いてゐた。二人とも、左右をきよきよと見廻して、通りすがりの店を大概のぞいて行く、大體に、人が大勢集つてゐるところには、用心深さうな眼を向ける、ひどく昂奮して何やらお喋りしてゐる連中に出會ふと、道を變へてそれを避ける。いやに濕っぽい晩である、霧のかゝつた川には、火焰の明りのお蔭でぼんやり見え、鋭い音のお蔭でぼんやり聞えて來る幾艘かの傳馬船が舳つてゐて、その上では大勢の鍛冶屋が一生懸命に働いて、共和國の陸軍の爲めに武器を造つてゐた。この軍隊に陰謀を弄したり、この軍隊で不相應の昇進を贏ち得た者は禍ひなるかな！ 彼にとつては髻をのばさなかつた方がよかつたであらふ、何故なら、例の國民的剃刀が彼をすつぱりと剃り落してしまふからである。

一一九〇一

二三種の乾物を少しづつと、洋燈用の油をいくらか買つてから、ミス・プロスは皆の飲む酒のことに氣がついた。それで四五軒の酒屋をのぞいて見てから、前にはテユイルリイ宮と呼ばれた（今に又さう呼ばれるであらふが）、ナシヨナル・パレスからさう遠くもない一軒の店に足をとめた、看板には長々しく『古羅馬のよき共和主義者ブルータス』とある。その萬事の様子が彼女の氣に入つたのである。同じやうな場所をいくつも通りすぎて來たが、この酒屋は他の何處よりも靜かに見える。それにも愛國者の帽子の赤色が動いてはゐるが、他の處ほど赤くはない。克蘭ンチャアの氣を引いてみると、同じ氣持なので、ミス・プロスはその騎士をお伴に従へて、その『古羅馬のよき共和主義者ブルータス』に立ち寄つた。

煙りばい明りがかすかに舖つてゐる、お客は、啣へ煙管で、ぐにやぐにやになつた骨牌や、黄色く

なつたドミノをやつてゐる、胸も腕も露出しにして、煤で眞黒に染まつた一人の勞働者が、何かの新聞を聲張り上げて讀んでゐる、他の連中は彼の讀むのを聞いてゐる、いろいろな武器を體につけてゐるものもあれば、すぐ取れるやうに手近に寄せ掛けてゐるものもある、一三人の客は前にのめつたまゝぐつすり眠り込んでゐるが、當時流行の、肩の高い、粗毛のもちやもちやした黒い短外套を着てゐるので、まるで熊か犬が寝てゐるやうに見えた。が、かふいふものにはさう細かく注意もせず、この二人の外國人のお客は、帳場に近やつて行つて、欲しいものをあつた。

丁度酒を量り終つた頃、一人の男が片隅にゐるもう一人の男と別れ、立ち上つて歸りかけた。出て行くには、どうしてもミス・プロスと顔を合せなくてはならない。彼がミス・プロスに顔を合せるか合せぬうちに、彼女は金切聲を上げて、手を拍ち合せた。

忽ち、一座は總立ちになる。大方誰かゞ反對の意見を抱くものに暗殺されたにちがひない。皆が、誰か倒れはしないかと見守つてゐるが、たゞ一人の男と一人の女が向き合つて眼を見張つてゐるのが見えるだけである、男は見たところどうしても佛蘭西人で生粹の共和黨員である、女は一目見て英國人と分る。

この興さめた様子にがっかりした餘り、古羅馬のよき共和主義者ブルータスの門生達が何をいつたか、ミス・プロスとその護衛の騎士にとつては、たとひ體中を耳にしてゐたところで、たゞ何かひどく早口にべちやくちや聲高に喚くのが分るだけで、結局、ヒブル語やカルデヤ語（共に古代の死語）を聞かされたと同じことであつたらう。まして、今は二人とも餘りの驚愕に、何をいはれても耳に入りはしない。それは一寸こゝで書いて置かなければならないが、ミス・プ

―二九二―

ロスだけが無我夢中にびつくりして昂奮してゐるばかりでなく、クランチャアまでも―彼一人だけの特別な理由によるやうに見えるが―なにかしら、この上ない不思議に出會つたやうな氣持であるのが明らかである。

「どうしたつてんだ、」とミス・プロスに金切聲を出させた男はかふ訊いた。不機嫌な、劍突をくはせるやうな聲で（しかも低い調子で）、英語でいつてゐる。

「まあソロモン、ソロモンぢやないか！」ミス・プロスは又手を拍つてゐつた。「こんなに長いこと、顔も見せず消息も聞かせずにゐて、こんなところでいきなり出會ふなんてねえ！」

「おいらをソロモンなんて呼んぢやいけねえ。お前、親身のおいらを殺してえのか。」その男は、こそこそと怯えたやうな様子でかふ訊いた。

「これお前、お前！」とミス・プロスはゐひかけてわつと泣き出した。「そんなことをいはれるほど、わたしがお前に酷くした事があるだらうか。」

「そんならそんなおせつかひなことは言はないでくれ、」とソロモンはゐつた。「話があるんなら、外へ出てくれ。さあ、お前は、酒の金を拂つて外へ出るんだ。この人は何だね？」

ミス・プロスは、この少しも愛情のない弟に、情愛をこめて、だがつかりしたやうに頭を振り振り、涙の中からゐつた。「クランチャアさんだよ。」

「その人にも出てもらひな、」とソロモンはゐつた。「その人はおいらを幽霊だとも思つてるんかね。」

クランチャアの顔付から考へると、明らかにさう思つてゐたやうである。だが、彼は一言もゐはない、ミス・プロスは涙の中に、やつと財布の底から錢を拾ひ出して、酒の代を拂つた。彼女がさうし

てゐる間に、ソロモンはその古羅馬のよき共和主義者ブルータスの崇拜者達の方に向いて佛蘭西語で、何か言譯らしいことを數語述べると、皆はもとの席に歸つて、もとの仕事をつづけ始めた。

「ところで、」とソロモンは眞暗な街角に足を停めてかゝあつた。「何の用だね。」

「まあ、姉弟にしては何てむごい言葉だらう。わたしの方では、どんなことがあつたつて一度も愛情を忘れたことなんかないのに！」と、ミス・プロスは叫んだ、「そんな挨拶をして、ちつとも優しくしてくれないなんて。」

「ちや、それ。忌々しいな、それ、」ソロモンはかふいつてミス・プロスの唇に自分の唇を、言ひわけばかりに押し當てた。「これで得心だらう。」

ミス・プロスはたゞ頭を振つて、黙つて泣いた。

「お前の方やおいらが吃驚して見せたらあゝのかも知れ

—二九二—

ねえが、」と弟のソロモンはあつた。「おいらの方ちや吃驚はしねえぜ。おいらはお前がこつちに來てゐることをちやんと知つてゐたんだ。おいらはこゝにある人間なら大抵知つてゐるんだ。お前、ほんとにおいらの生命を危くしたかねえつてのなら——どうもお前がさうしさうでならねえが——出來るだけ早くお前は自分の行きてえ方へ行つて、おいらはおいらの勝手にさせてくれ。おいらは忙しいんだ。今役人だけ。」

「わたしの弟のソロモンは英國人なんだのに、」と、ミス・プロスは涙の一杯たまつた眼で見上げて、悲しさうにあつた。

「自分の國で、一番好い一番偉い人になる下地をもつてゐたのに、外國人も外國人、こんな奴等のところで役人をしてゐるなんて、まあ！いつそのこと、早くあの可愛い子供るときに——」

「だからさういつたんだ！」と弟は言葉を遮つて叫んだ。「おいらはそれを知つてゐたんだ。お前はおいらを殺してえんだ。おいらは自分の姉弟の爲めに嫌疑をうけるやうになるんだ。それも丁度出世をしかけた時ちやねえか。」

「まあ、このわたしが、何でそんなことをするものかね！」とミス・プロスは叫んだ。「ソロモンや、わたしはいつもお前をほんとに愛して來たし、これからだつてさうなんだけれど、お前が今いつたやうなことになるんなら、もう二度とお前に會はなくなつていゝよ。たつた一言わたしに情愛のある言葉を聞かしておくれ、わたしたちはお互に何も腹を立てたり疎々しくするほど仲が悪いのぢやないつてことを話しておくれ、さうすれや、わたしもお前をもろ引き留めないから。」

可憐なミス・プロス！まるで二人の間の疎遠が自分の過失から生れでもしたやうに思つてゐる。何年前か前、この大事な弟が彼女の金をすつかり費ひ果し、彼女を置き去りにしたといふ事實を、あのソホウの家の静かな片隅で、ローリイに話したこともなかつたやうにしてゐるではないか！

とにかく、ソロモンはやさしい言葉をあひかけるが、その如何にも不承不精らしく見下すやうな恩着せがましゐる態度は、丁度二人の相互の値打や位地が顛倒されたときに見られるかと思はれる（これは世界中到る所いつでもかふだが）ものより更にひどかつた。と、この時クランチャアはソロモンの肩を一寸突いて、例の嗚れ聲で思ひがけなくかふいふ音問を持ち出した——

「もし、もし！一寸聞いてもらひたひことがあるんだがね。お前さんの名前は、ジョン・ソロモンかね、ソロモン・ジョンかね。」

このお役人は、急に胡散くさうに彼の方に振り向いた。クランチャアは今まで一言もいはずに

たのである。

―二九三―

「どうだね！」と克蘭チャアはつづけた。「すつぱりあつてしまつたらどうだい、え、おい。」
 (ついでだが、それは彼自身到底出来ないことであつた)。「ジョン・ソロモンかね、ソロモン・ジョンかね。この女はお前をソロモンと呼んでゐるんだ、お前の姉弟だからにや、知つてるのが當り前だ。ところがわつしは、お前の名がジョンだつてことを知つてゐるんだ、ね、おい。二つの中の何方が先になるんだい。それからプロスつて苗字のことだつてさうだ。お前、英國ぢやそんな苗字ぢやなかつたな。」

「何をあつてるんだい。」

「さうさ、わつしにだつてさつぱり分らないや、英國にゐたときの苗字を何てつたか思ひ出せないもんで。」

「出せねえか。」

「出せねえな、だが、綴りが二つの苗字だつたつてことはたしかだ。」

「ほんとか。」

「さうとも。今一人の奴のは一綴りだつたんだ。わつしはお前を知つてるよ。お前はあのベエリーの監獄で謀者證人(わざと罪人の仲に入つて罪人の祕密をかぎ出し、判決のとき證人として罪人の有罪を慥かにする)を仕事にしてゐたんだ。お前の生みの親父のあの嘘つきの大親玉(惡魔)の名にかけて訊くんだが、あの頃のお前の苗字は何ていつた？」

「バーサッドだ。」と別の聲が口を入れた。

「それだ、その名前が千金の値打があるんだ！」と克蘭チャアは叫んだ。

この時口を入れた聲の主は、シドニー・カートンであつた。彼は両手を背後にまはし、乗馬外套の垂れの下に入れたたまゝ、無雑作に克蘭チャアの近くに立つてゐた。それもほんとのオールド・ベエリーにゐるときのやうに、あくまでも無雑作であつた。

「さう吃驚しないで下さい、ミス・プロス。僕は昨日の夕方ローリーさんのところについて、あの人を吃驚させてやつたんです、それから二人で相談して、萬事うまく行くか、いよいよ僕が役に立つことが出来るかするまでは、僕が姿を出さないことに定めたんです。一寸あなたの弟さんと話したいことがあるからこゝへ出て來たんです。あなたの姉弟だつたら、バーサッド君よりづゝと好い仕事についてゐてくれたらあゝのと思ひますね。僕は、あなたの爲めに、バーサッド君が監獄密偵なんかでなければと思ひますがね。」

羊といふのは、牢番人の下につく謀者を指す當時の隱語であつた。顔の血の氣をなくしてゐた謀者は、更に蒼白になつた。そしてどうしてそんなことが斷言出来るかと訊いた。

「ぢやよく話してやらう、」とカートンはあつた。「バーサッド君、一時間か二時間ばかり前だが、僕がコンシェルジュリイ

―二九四―

の扉を眺めて立つてゐると、丁度君が監獄から出て來るところを見たんだ。元來君の顔が記憶されやすい上に、僕がまたひどく人の顔をよく覚えてゐる性質なんだ。君がそんな方に關係してゐるのを見

ると何だか好奇心に捉へられたんだ。それに、これは君が知らないとあはさないが、今ひどく不仕合せな目を見てゐる友達の不辛と君を結びつけるだけの理由があるんで、僕は君の行く方に随ひて行つた。僕は君のすぐ後からこの居酒屋に入つて、君の近くに腰を下した。僕は君のあけすけな會話と、君の崇拜者達の間にいろいろ取り交はされてゐた噂とから、君の仕事の性質を推量することが、たやすく出来た譯だ。さうしてゐる中に、初めは氣紛れにやり出したことが、だんだん一つの目的の形をとつて来るやうに思はれたんだ。ね、バーサッド君。」

「どんな目的だね。」と諺者はあつた。

「それを往來で説明するのは、厄介でもあるし、危いかも知れない。さうさな、テルソン銀行の事務所あたりで！——内々で一寸の間僕の對手になつてもらへんかね。」

「脅かすのかい。」

「馬鹿な！僕がそんなことをいつたか。」

「ちや、何だつておいらがそこへ行かなくちやならねえんだ。」

「實際、バーサッド君、君の言へないものなら、僕にもあへないさ。」

「ちやお前さんは言はないつもりだつてえのか。」と諺者は思ひきり悪さうに訊いた。

「さうだ、バーサッド君、その通りだよ。僕は言はないつもりだ。」

カートンの無頓着な向う見ずの様子は、彼が今心に抱いてゐるやうな仕事をするとき、しかも今對手にしなければならぬやうな人間を對手にする場合には、その敏活さと老巧さを大いに助長してくれる。彼の經驗に富む眼には、それが分る、だから出来るだけそれを利用する。

「そら、おいらがさう言つたちやねえか。」と諺者は、咎めるやうな眼を姉に向けてあつた。「こんなことから何か面倒でも起つたら皆お前のせゐだぜ。」

「おい、おい、バーサッド君！」とカートンは叫んだ。「恩知らずにも程があるぞ。君の姉さんを、僕がこんなに尊敬してゐなかつたら、氣持よく僕の方で簡單な相談を出して、お互の満足になるやうにしたひなどは思はなかつたかも知れないんだ。僕と一緒に銀行まで行くかね。」

「お前さんがどうしてもさういふんなら、その通りにしませう。宜うがす、一緒に行きませう。」

「それちや二人で、まづ君の姉さんを、姉さんのお出での町の角のところまで無事に送ることにしよう。ミス・プロ

一二九五

ス、この市は、今時分あなた方が一人で歩けるやうな結構なところぢやありませんかね。それから、あなたの護衛はバーサッド君を知つてゐますから、一緒にローリーさんのところへ来てもらふことにします。さあひゝかね、ちや行かう！」

間もなく、ミス・プロスはカートンの腕を両手で握つて、彼の顔をちつと見上げ、ソロモンをひどい目に會はせないでくれるやうに願つたときに、彼の腕には緊張した意志が満ちて居り、彼の眼には一種の靈光がかゞやいてゐるのに氣がついた（彼女はこれを生涯忘れることがなかつた）、それは彼の氣輕な物腰とは反對なものであつたばかりではなく、彼の人柄をまるで變へて氣高いものにしてゐた。この時には、彼女は弟の身の上に對する心配と（少しも彼女の愛情に値しない人間ではあつたが）、カートンの友情をこめた保證の言葉とで、心が一杯になつてゐたので、自分の見たものに十分注意を向けずにしまつた。

彼等はミス・プロスと町の角で別れた、それからカートンが先に立つて、歩いてても數分とはかゝら

ない近くのローリーの住所に案内した。ジョン・バーサッド、別名ソロモン・プロスは彼と並んで歩いて行つた。

ローリーは丁度晚餐を終へたばかりのところ、暖爐に氣持よく燃えてゐる一二本の小さい丸薪を前にして坐つてゐた。おそろくその焰の中に、今は十幾年の昔、ドーヴァのロイヤル・ジョージ旅館で、眞赤な石炭に見入つてゐた、あのテルソン銀行から派遣されたときの、あゝ年齢ではあつたが、今よりは若々しかつた自分の面影を見てゐたのであらふ。彼は、皆が入つて來るとそつちに顔を向けた、そして吃驚した風で、見たことのない人が來たなといふ様子を見せた。

「ミス・プロスの弟です、」とカートンはあつた。「バーサッド君です。」
「バーサッド？」と老紳士は繰り返した。「バーサッド？その名前で——いやその顔で思ひ出すことがあるんだが。」

「君の顔は人に覚えられ易いとひつたらう、バーサッド君、」カートンは冷然とかふあつた。「まあ掛けたまへ。」

カートンは自分も椅子にかけてから、ローリーに思ひ出せないこの顔との聯想を補ふ意味で、眉をひそめつゝ彼にあつた。「そら、あの裁判のときの證人ですよ。」するとローリーはすぐ思ひ出した、さうしてこの新しい客を見る眼には、ありありと嫌惡の色が浮んだ。

「ミス・プロスは、あなたがいつかあの女から聞いたあの親愛な弟がバーサッド君だと思つてゐるんです。」とカートンはあつた。「そしてこの人も姉弟であることを認めました。だが次にはもつと惡の報知です。ダーネイ君がまた

——二九六——

逮捕されましたよ。」

老紳士はあつと仰天してかふ叫んだ。「何をあふんだね、君は！あの人が無事に自由になつたのを見て歸つてからまた二時間にもならないんだ、わしは今また出かけようと思つてゐたところなんだ！」

「でも、とにかく逮捕されてしまつたんです。いつやられたんだね、バーサッド君。」

「やられたとすれや、たつた今でせう。」

「バーサッド君は誰より一番その方は慥かですからね、」とカートンはあつた。「僕は、バーサッド君が一杯やりながら、友達の間密偵仲間話してゐた四方山話から逮捕のあつたことを聞いたんです。バーサッド君は逮捕の人逮と門口で別れたが、彼等が門番の案内で入つたのを見たといひます。ダーネイ君がまた逮捕されたことは決して疑へません。」

ローリーの事務に慣れた眼は、かふ話す相手の顔色を讀んで、この問題をかれこれ議論するのは時間の損失だといふことを知つた。狼狽はしたが、自分が沈着であれば何か効果があると考へたので、無理に落ちついて無言のまゝ耳を聳てた。

「そこで僕の考へだが、」とカートンは彼の爲めにあつた。「ドクタア・マネットの名前と勢力が、明日も同様にダーネイ君に大いに役立つに違ひないと思ふが、——ときに、バーサッド君、あの人は明日また法廷に呼び出されるだらうとかいつたね——」

「さうです、さうだらうと思ふんです。」

「今日と同じやうに、明日も大いに役立つかも知れない。だがさうは行かないかも知れない。正直のところ、ローリーさん、僕はドクタア・マネットにこの逮捕を止めさせるだけの力がないのを見て、

すつかり確信がなくなつたんです。」

「いや前もつて知つてゐなかつたのかも知れんよ。」とローリーはあつた。

「でも、あの人がちやんとドクタアの嬢だと認められてゐることを考へると、その事實だけでも、ちう十分警戒すべきぢやないでせうか。」

「そりやさうだ。」ローリーは、その當惑げな手を顎に、當惑げな眼をカートンに向けて、かふ認めた。

「手取り早いところが。」とカートンはあつた。「この頃は、死物狂ひの賭物をとらうとして、死物狂ひの勝負が試みられてゐる死物狂ひの時代なんです。ドクタアには勝負の多い勝負をお願ひするとして、僕は一つ負目の多い勝負をやつてみよう。こゝちやどんな人間の生命だつて買ふだけの値打がないんです。今日民衆の肩車で家に送られた人が、明日はもう死刑宣告となるかも知れないんです。いよいよつて時に、僕がどんなにしてゝも取らうと決心してゐる賭物

―二九七―

けコンシエルジュリイにゐる友人です。それから僕が勝つて捲き上げてやらうと思つてゐる友人は、このバーサッド君なんです。」

「それにや素敵な持札がなくちやなりません。」と謀者はあつた。

「ちや一つ持札を一わたり見てみよう。僕の手のうちには何があるかな―ローリーさん、あなたは僕が無作法なことは御存じだ、ブランデイを一杯御馳走してくれませんか。」

すぐさま、それが彼の前に持ち出される。彼はぐつと一杯呷る、――更に一杯呷る、――それから考へ込んだやうに酒罈をそつと傍に片寄せる。

「バーサッド君、」彼はまるで本當に骨牌勝負をしてゐる人のやうな語調であつた。「監獄密偵、共和委員の走使、時には牢番、時には囚人になるが、謀者と隠密であることには變りがない、かふいふ役目をつとめさせると英人の方が佛蘭西人よりも教唆の嫌疑をうけることが少ないだけ、こゝでは、英國人である爲めにそれだけ大切にされてゐる、――その人間が偽名をして雇主の許に出入りしてゐる。これは可成りゝ持札だ。ところで、今は共和主義の佛蘭西政府の用をつとめてゐるバーサッド君は、前には佛蘭西と自由の敵といはれた貴族主義の英國政府の仕事をしてゐたといふ、これも素晴らしい持札だ。ところで、こんな疑ひ深い都市では、現にまだ貴族的の英國政府から金をもらつてゐるといへば、バーサッド君がピットの謀者で、共和國の胸にかくれてゐて共和國を裡切る敵で、今到るところに噂が高くて何處にも見つかからないあの英國生れの謀叛人で、あらゆる悪事の張本人だと想像されるのは、日を見るやうに明白だ。この持禮も負けさうにない。どうだ、バーサッド君、僕の手が分つたかね。」

「お前さんの切り方が分らないだけでさあ。」謀者はかふ返事したもので、幾分不安らしい。

「僕は一と切るんだ、あゝか、バーサッド君を何者か最奇りの區委員に告發するんだ。さあ君の手のうちを見給へ、バーサッド君、何かあるかよく見給へ。急がなくてゝんだ。」

彼はまた酒罈を引き寄せて、ブランデイをもう一杯ついでぐつと飲み乾した。彼は謀者の方で、彼がすつかり飲みつづれた餘り、我を忘れて直ぐさま自分を告發するやうな氣持になりはしないかと心配してゐるのを見てとつた。それを見たので、彼はわざともう一杯ついでぐつと飲んだ。

「よく氣をつけて君の手のうちを見給へ、バーサッド君。ゆつくり、ゆつくり。」

それは彼が想像したより貧弱な手のうちだつた。バーサッドは、自分の手には、シドニイ・カート

ンのちつとも知らない負け札があるのを見た。無慈悲な證言を夥しく試み

―二九八―

たが、餘り成功しなかつたので、英國に於ける名譽ある地位から抛げ出されて（何も彼が英國では仕事がなくなつたからではない、吾等英人が隱密や探偵などのないことを誇るやうになつたのは、極く近頃のことである）、彼は、海峽を渡つて、佛蘭西に雇はれ、最初は在留英國人の間の誘惑者や立聞人になつて働いたが、だんだん、佛蘭西人の間の誘惑者になり、立聞人になつたことを自分でも認めた。また、先頃顛覆した政府の下では、サン・タントアヌとドファルジュ酒場の密偵をつとめたこと、油断のない警察から、ドクタア・マネットの投獄、釋放、經歷に關する噂など、何でもドファルジュ家の者と親密に口を聞き合ふ端初になりさうな種を仕入れて、主としてそれをマダム・ドフ、ルジュに試めして、見事にやり損つたことを認めた。彼は、あの女と話したときに、あの女が編物をしてゐたこと、あの女が指を動かしながら彼を胡散くささうに眺めてゐたことをいつも覚えてゐたが、それを思ひ出す毎に、恐怖と戦慄を伴つた。彼はその後サン・タントアヌ區で、彼女が何度も何度も例の編物の記録を取り出してゐろくな人間を告發するのを見たが、彼女に告發された人間の生命はきまつて斷頭臺にかけられてしまふのであつた。彼のやうな仕事をしてゐる人間が誰でもさうであるやうに、彼も、自分の安全でないことを認めた、逃亡の不可能なこと、大斧の影の下にしつかりと縛られてゐること、彼が今更出来るだけの誤魔化しと裡切をこゝろみて、今全盛の恐怖政治の促進につくしたところ、たゞ彼女が一言々へば、その大斧が彼の上に落ちて來るのだといふことを認めた。一度告發されたが最後、しかもたつた今カートンが暗示したやうな重大な根據があつては、あの恐ろしい女、彼がその慈悲容赦もない性格の證據を幾つも幾つも見えて來てゐるあの恐ろしい女は、彼に致命的な例の編物の記録を出して、生命の助かるべき最後の綱をも切つてしまふにちがひないことは、分りきつてゐる。すべて隱密役の人間は容易に脅かされるものだといふ上に、彼の手にはたしかに澤山すぎる程不景氣な黒札があつたので、彼が札を見渡すにつれてだんだん顔色を失つて來たのも當り前であつた。

「手のうちは餘りお無に召さないと見えるね、」とカートンは意地悪くいつた。「どうだ、勝負をやるか。」

「その、何でございますねえ、」諜者はひどく卑下した態度で、ローリイの方に向いてかふるつた。「あなた様のやうな御年輩のお慈悲深い旦那様にお縋りして、あなた様よりぐゝとお年下のこちらの一方の旦那様に、かふお訊ねをお願い申したいのでございしますが、――その、これ程の御身分のお方が今仰しやられたやうな、一からお切りにならふなんて御量見は、どういたしまして、お身分柄に似合はな

―二九九―

るぢやございせんか、とね。わしは、自分の諜者なことは認めて居ります、それに、この仕事から賞められないものだつていふことも認めて居ります、――だが矢張り、誰かゞ務めなくちやならないもんでございませう。然し、この旦那様は諜者でも探偵でもございませぬ、だのに、何んでさう諜者のするやうな眞似をなさる必要がございませうか。」

「僕は一と切るぞ、バーサッド君、」とカートンはその返辭を自分で引きつけて、時計を見ながら

あつた。「容赦はしない、もう三分のうちだ。」

「せめてはね、お二人様」諜者は絶えずローリーを釣り込んで、この話に入らせようと努めながら、「姊に封するお二人様の尊敬が——」

「いやその姊さんに對する僕の尊敬なら、あの人をすつぱりと弟から救つてやれば、それが一番よい證據になると思ふよ。」とシドニー・カートンがひつた。

「まさか、さうを考へては？」

「いやもう、さうときつぱり決心してゐるんだ。」

諜者の馬鹿丁寧な物腰——それは、これを見ろとゐはんばかりの彼の粗末な衣物や、恐らく彼の日常の墨動とは可笑しい程不釣合なものであつた——が、カートンの得體の知れない測り難い態度にすつかり邪魔されたので（カートンはこの諜者より智慧のある正直な人間にとつて一の神祕であつた）、こゝで二進も三進もいなくなつて、ちつとも役にはたゝなかつた。彼が途方にくれてゐる一方、カートンは、また前のやうに骨牌を見つめてゐるやうな態度をして、かふあつた——

「ところで、又かふも思はれるんだ、先刻はまだ勘定に入れてはゐなかつたが、どうも素敵な札がもう一枚あるやうな確信がするんだ。そら、君の友達で、仲間の、あの田舎の監獄に道草をくつてゐるとか話してゐた男だ、あれは誰だつたね。」

「佛蘭西人ですよ。御存じぢやありませんまい。」諜者は早速かふるつた。

「佛蘭西人だ？」とカートンは繰り返した。ちつと考へに沈んで、對手の言葉を繰り返しはしたが、その姿など全く目に入れてゐないらしい。「さうか、まあさうかも知れない。」

「大丈夫、さうなんです。」と諜者はあつた。「もつとも何も肝心なことぢやねえんですけれども。」

「肝心なことぢやないけれども、」とカートンは前と同じやうな機械的な態度で、繰り返した。「肝心なことぢやないけれども、さうか、肝心なことぢやない。さうだ。だが僕はあの顔に見覚えがあるんだ。」

—三〇〇—

「そんなことはねえでせう。大丈夫ありますめえ。ある筈がねえんですから。」と諜者はあつた。

「ある——筈が——ない、」シドニー・カートンはすつかり考へ込んで、もう一杯つぎながら（仕合せにも、それは小さいものであつた）かふ呟いた。「筈が——ない。上手な佛蘭西語を話してゐたつげ。だがどうも外國人のやうに思へたがなあ。」

「田舎者ですよ。」と諜者はあつた。

「あゝや。外國人だ！」平手でびしやんと卓子をうつて、カートンは叫んだ、彼の心には一道の光がはつきりとさして來たのである。「クライだ——變裝してゐるが、同じ男だ。オールド・ベエリイで僕等の前にゐたのを見たことがあつたんだ。」

「それは氣が早すぎるといふもんですよ、旦那。」とバーサッドは微笑を浮べていつた、その微笑は彼の鷲鼻を、横の方に特別にひんまげさせた。「それぢや、あなたが實際わしに一點まげ越しになるんです。クライは（長いこと經ちますから隠さねえでいつちまひますが、あの男はわしの仲間だつたにちげえねえんです）、もう死んでから何年かになりますよ。わしは死際の病氣のときにも看護つてやりましたよ。倫敦のセント・パンクラス・イン・フィールズのお寺に葬つてありますがね。その頃あいつは悪者仲間でもひどく評判が悪かつたもんですから、わしはお葬式にや行きませんでした、

あいつを棺に入れたなアわしなんで。」

この時、ローリイは自分の坐つてゐたところから、壁に特徴のある大入道の影法師がうつゝゐるのに鍼がついた。何の影かたどつて見ると、それが克蘭チャアの頭の硬い髪の毛が、急に残らず異常に立つて硬張つた爲めだといふことが分つた。

「道理に合はないことは止さうぢやありませんか」と謀者はあつた。「公平にやりませうよ。あんたがどれだけ間違つてゐるか、あんたの想像はどんなに根も葉もないもんかつて證據には、クライの埋葬證を出してお口にかけるのが一番だ。偶然に、このわしの手帖の中に入つてゐたんで、」彼は急がしさうな手付でそれを取り出してひろげた。「そらこれですよ。さあ、御賢なさい、御覽なさい！手にとつてもようがすとも、贋物ぢやありませんから。」

この時、ローリイは壁の上の影法師が更に伸びたのに氣がついた。と、克蘭チャアは立ち上つて進み出た、彼の髪の毛は、たとひその時、ジャックの建てた家で曲つた角のある牝牛（「マザー・グース」の唄の文句）に手入れしてもらつたにしても、これ程猛烈に突つ立つてゐるわけには行かなかつたらう。

謀者に見られぬ中に、克蘭チャアは、彼の傍に立つた、さうして幽霊の役人のやうに彼の肩にさはつた。

—三〇一—

「そのロージャア・クライのことよ、」克蘭チャアは、むつゝりした氣難しさうな顔をしていひ出した。「それぢやお前があいつを棺に入れたんだな。」

「My, my。」

「それぢや誰が棺から出したんだね。」

バーサッドはあつと椅子の上へのけぞつて、碌に口もきけなかつた。「何をあふんだい。」

「わつしのいふのはね、」と克蘭チャアはあつた。「あいつは棺に入つたんぢやないつてことなんだ、さうよ！たしかに居なかつたとも！若しか本當に入つたんなら、首を斬られたつてあゝや。」

謀者は二人の紳士の顔を見まはした、彼等は二人とも無言のまゝ、呆れ果てたやうに克蘭チャアの顔を見てゐた。

「はつきりいつてやらう、」と克蘭チャアはあつた。「お前はあの棺に敷石の片らと土ばかり入れたんだ。お前がクライを埋めたなんて、馬鹿らしい、わつしにそんなことをいつてみる。ありや欺しの手だつたんだ。わつしの外にまだ二人知つてる人間があるんだぜ。」

「どうして知つてるんだ。」

「どうしてだつてあゝぢやねえか。畜生め！」と克蘭チャアは怒鳴つた。「わつしが昔から怨んでゐたのはお前なんだ。正直な商人に、不都合な欺し打ちなどをかけやがつて！半ギニも貰へれや、こいつの咽喉を引つ捉まへて息の根をとめてやるんだが。」

シドニー・カートンは、ローリイと同様、事件がかふ急轉したのに我を忘れて呆れてゐたが、こゝで克蘭チャアにもう少し控へ目にしろと言ひつけて、それから彼に説明を求めた。

「それは又の時にませう、」と彼は上手に逃げた。「今ぢや説明の都合がはりいもんですからね。たゞわつしにわかつてゐるのは、クライが一度もその棺に入つたことのないのをこの男が知つてゐることです。こいつがたとひ、たつた一綴りの言葉にしろ、クライが棺に入つたなんてあひ直さうもんなら、わつしは半ギニでも、こいつの咽喉頸をつかんで息の根をとめて見せますから。」——ク

ランチャアは非常に氣前のぬゝ申し出たとおはんばかりに言ひ立てた——「さもなければ、出かけてゐつて、こいつを告發してしまひませう。」

「ふうん！一つだけは分つたね、」とカートンはあつた。「さあバーサッド君、僕の札はもう一枚出た。この荒れ狂ふ巴里で、空氣が猜疑で一杯になつてゐるこんなときに、君自身と同じ經歷をもつた今一人の貴族政府の諜者で、その上死んだふりをして生き返つてゐるといふ、不思議な人物と、君が連絡を持つてゐると來ては、告發を通れることは、

—三〇二—

不可能なんだ！監獄内の陰謀、つまり共和國に封する外國人の陰謀といふやつだ。これは強い持禮だ、——斷頭臺請け合ひつて札だ！どつだ、一勝負やつて見るかね。」

「いやもう！」諜者がかぶ返辭した。「わしはすつかり降參した。正直のところ、わし達はいきり立つた野次馬どもにひどく憎まれたんで、わしは水責めで責め殺されるところをやつと英國から遁れる、クライは何處から何處まで狩り立てられたもんで、そんな手品でもやらなくちや、まるつきり逃げられないつてことになつたんですよ。尤も、この男がどうしてそれが手品だつてことを知つたか、わしには不思議中の不思議ですがね。」

「いやこの男のことなら何もお前の頭を苦しめなくてゐよ、」と喧嘩買ひの克蘭チャアはやり返した。「お前はこの旦那のいふことに氣を配るだけでも澤山だらうがね。だが、をひ！もう一度いふぜ！」——克蘭チャアは彼の非常に氣前のぬゝことを、これ見よがしに見せびらかさずには止められなかつた——「半ギニもらへば、お前の咽喉頸をひつ掴んで息の根をとめてやるから。」

この監獄の密偵は彼からシドニー・カートンの方に向き直つた、さうして前よりきつぱりした態度でかふあつた。「いよいよ肝心な話に入るんだが、わしはもうすぐ當番になるんで、これより長くここにゐられません。何か相談があるやうなお話でしたね、何ですな。わしに出来ないやうな大層も無えことを持ち出したつて、そりや駄目ですよ。わしの繩張内のことなら何でもさせようつてんで、特別餘計な危ぬ註文を出すつもりなのなら、それを承知して命を成行にまかせるといふは、不承知と出て成行にまかせた方がまだ増しですよ。早いところが、わしはその方を選ばなくちやならねえと思ふんで。あんたはさつき死物狂ひとか自棄糞とかひひましたね。こゝちやわしたちは、誰だつて死物狂ひなんです。ね、ようがすか！わしだつて、場合によつちや、あんたを告發するかも知れませんが、わしにや石の堀を突きぬけられると證言することだつてしようと思へば出来るんですよ、他のだつて皆出来るんです。ところで、どういふ御用ですな。」

「大したことぢやない。君はコンシエルジュリーの牢番か。」

「あすこちや逃亡なんて出来ない相談ですぜ、こりや前から斷つて置きますよ。」と諜者はきつぱりあつた。

「頼みもしないことをいふ必要はないよ、君。君はコンシエルジュリーの牢番かね。」

「時々はやりますよ。」

「ならうと思へばいつでも出来るのかね。」

「出入りは好きなときに出来ますよ。」

シドニー・カートンはもう一杯ブランデーをついだが、そ

—三〇三—

れを徐かに爐牀の上にこぼして、一滴々と落ちて行くのをちつと見つめてゐた。それがなくなつてしまふと、彼は立ち上つてかふあつた――

「今までは、札の効果が、たゞ君と僕の間だけのことにならない方があつたら、皆のゐるところで話し合つたんだ。さあ、此方の暗い部屋に来てくれ給へ、今度は二人きりで最後の一相談をするから。」

九、勝負開始

シドニイ・カートンと監獄の密偵とが、すぐ次の暗い部屋で、物音一つ立てぬ程に聲をひそめて話してゐるとき、こちらではローリイが可成りな疑念と不信をいだいてジェリイを見つめてゐた。この所謂正直な商人が、彼の眼を迎へる様子が、どうも信用を強めるやうなものではない、彼は、まるで自分には脚が五十本もあつて、それを皆ためしてゐるのだとでもいふ風に、何度も何度も自分の體を休めてゐる脚をかへる、彼は指の爪を、ひどく胡散くさい細かい注意で吟味する、そしてローリイの眼に出會ふと、その度に、彼は屹度例の掌をあてゝあの特色のある短い咳をする、これは先づ快闊な性格にある病氣ではないといつていゝ。

「ジェリイ、」とローリイはあつた。「こゝへ來ぬ。」

克蘭チャアは片方の肩をつき出して、斜めに前へ出た。

「お前は今まで走り使ひの外に何をやつてゐたんだ。」

しばらく考へ込んだまゝ、彼の保護者をちつと見つめてゐたが、何やらはつきりした考へが纏まつたと見えて、かふ答へた。「百姓仕事みたいなもんで。」

「わしはな、」とローリイはひどく立腹して、彼の方に指をふり立てながらあつた。「お前がこの尊敬すべき偉大なテルソン銀行を利用して世鬪體をつくらつて置いて、内には言語道斷な不埒な仕事をしてゐたんぢやないかと思ふと、心配で堪らんのだ。若しその通りなら、英國に歸つたときに、わしがお前の爲めを計つてやるなどと思つてはならんぞ。わしのいふ通りなら、お前の祕密をわしが守つてやるなどと思ふな。テルソン銀行を欺すことは出来ない相談だ。」

克蘭チャアは赤面してかふ辯解した。「旦那、このわしが頭が白くなるまで端御用を足させてゐたゞゐてゐることをよく御存じの旦那のやうな身分のあるお方が、このわしのやうなものをお懲しめなさらふつてときにや、二度もお考へ直しを願ひてえもんだと思ひますんで、へゐ、よしんば、仰しやるやうなことが昔はあつたにしましても、――わしは決してさうだとは申しませんが、よしんば昔はそんなことがあつたにしましても、でござえますね。そこで昔はそんなことがあつたにしても、それは、決してわし一人――

――三〇四――

だけの仕事ぢやなかつたてえことを一つお考へ願ひてえもんです。それにはちやんと相手方がござえましたんで、へゐ。今だつて世間にや醫者が澤山ござえますね、あの手合は、正直な商人がファージン銅貨（凡そ我が一錢）も拾へないのに、――ファージンどころか、どうして、どうして半ファージンも拾へないのに、――いや、半ファージン銅貨どころか、どうして、どうしてクワータ銅貨さへ拾へないのに、どしどしギニ金貨を拾つちや、さつさとテルソン銀行に預け込んで、何食はぬ顔で、醫

者くせえ眼をしては、自分の馬車に乗り下りしてゐるんで、——へゐ、とにかく、さつさとうまくやりますんで。そこでこいつにやテルソン銀行だつて、一杯くつてゐたに違へねえんでござえます。何故つて、一方だけをこんな目に合せて、他のものを合せねえつてこたア出架ませんからね。それからわしの家内が居ります、いや、あの英吉利にゐたころにや、とにかく居りましたが、へゐ、家内と来ちや明日が日にも折せえあれや商賣が駄目になるやうに——うまく駄目になるやうにつて、體を折り倒して祈つてゐることござえませう！ところがあの醫者の主婦さん方は祈りなんざしません——どうして、祈るなんてとんでもない！それがたまに祈ると、その祈りは大勢の病人が欲しいからなんです。旦那だつて對手がゐないのに、片方だけのすることが決められるもんですか？それから、葬儀屋も居りますし、教區書記も居りますし、墓掘男も居りますし、こつそり見張つてゐる奴も居りますし（皆欲張りで、揃ひもそろつて、旦那の仰しやるそれを仕事にしてゐる連中ばかりですから）ほかの人間はそれで澤山儲けられやしません、よしんば、昔は旦那の仰しやる通りだつたにしましてもね、ところが、その人間の儲けたその少しばかりでさへが、その人間に巧く使へた例がねえんで、へゐ、ローリーの旦那、こんな仕事から善いことのあつた例はねえんでござえます、一度この道に入つても出る道せえ見つけられますれば、始終出ようとばかり思つてゐるんで、——よしんば昔はさうだつたにしましてもござえますがね。」

「ふむ！」とローリーは叫んだが、内心ではいさゝか後悔してゐた。「わしはお前の顔を見ると氣色が悪くなる。」

「そこで、旦那、わしは何とかお考へをお願いしたいことがあるんでござえます。」クラランチャアは語りつづける。「よしんば昔はさうであつたにしても、今でもさうだつたア申しません——」

「お前遁口上を張つちやいけないよ。」と、ローリーはゐつた。
「いへ、旦那、そりやいたしません。」まるで遁口上ほど自分の考へなり行ひなりから、縁遠いものがないとひつた

—三〇五—

風に、かふ返辭した。「今でもさうだつたア申しません、——それで旦那、わしは何とか一つお聞きを願ひたひと思ひますのは、かふでござえます。あのバー（テムプル・バー）のところの、あの牀几の上に、わしの倅が腰掛けて居ります、あれでもわしが手鹽にかけて、一人前の男になるやうにと育てた奴でござえますから、ひよつとお氣に召しましたら、どうか旦那が御存命の間だけは、走り使ひなり、取次ぎ役なり、細々した仕事なり、何なりさせてやつて下さいまし。よしんば昔はさうだつたにしましても、——わしほ矢つ張り今もさうだつたア申しませんが（わしは旦那に對して遁口上なんかゐひやしません）——あの子に親父の蹟をつがせて、お袋の面倒を見させてやつて下さいまし、後生ですから、この親父の信用を落させないやうにしてやつて下さいまし、——旦那、これだけはどうぞお願いします——そして親父に安心して本職の墓堀商賣をやらせ、今までに掘り出したものを——假りに昔はさうだつたとしてのことですがね——すつぱりと掘り埋めさせて、これから先々誰にも掘り出させねえやうにしようつて覺悟で、昔の罪滅ぼしをさせて下さいまし。ローリーの旦那、「クラランチャアは自分の長文句のお終ひになつたのを知らせるやうに、手で額を拭きつゝ、かふゐつた。「ローリーの旦那、これを、お聞き入れ願ひてえのでござえます。どんな人間だつて、この市のやうに恐ろしい事ばかり身のまはりに荒れ狂つてゐるのを見たり、屍骸の値段を運び賃にもつかねえ位に下げてしまふほど、澤山なあの首あ無い人間の山に出會したりして御覽なせえまし、何としたつていろ

いろなことを眞面目に考へないわけにやきませんよ。そこで、これがわしのその考へなんで、へゐよし昔はどうだったにしてもでござるまずね、——どうか旦那、わしが今申し上げたことは隠して置かうと思へば置けるのに、善根をしたい心からすつぱりとあつてしまつたんだつてえことを、忘れねえで下さいまし。」

「とにかく、それだけは本當だ、」とローリイはゐつた。「もう言はんでゐ。お前が今ゐつた通りを立派に守つて、——言葉だけでなく——行ひで悔み改めて見せさへすればわしだつて矢つ張りお前の友達になつてゐられるかも知れんから。わしはもう何も聞かなくてもゐ。」

克蘭チャアが承知したといふ身振りをしたときに、シドニイ・カートンと謀者が、暗い部屋から出て來た。「左様なら、バーサッド君、」とカートンはゐつた。「われはれの約束がかふ出來たからには、君はもう僕をちつとも恐がることはないよ。」

彼はローリイと向き合つて、爐邊の椅子に腰を下した。彼等が二人きりになると、ローリイは、カートンに一體何をしたのかと訊いた。

一三〇九一

「大したことぢやないんです。ダーネイ君にとつて不利になるかも知れませんが、とにかく一度だけは彼の傍に行く手蔓をしつかりと掴みました。」

ローリイは心配げにうつむいた。

「それが僕の方で出來る精一杯のことなんです、」とカートンはゐつた。「あまり無理な註文をする、あの男の首を斷頭臺の下に置くやうになるだけです、あいつがゐつたやうに、若し告發されたところで、これ以上の酷い目には曾ひつこがないんですから。こゝはどう見ても立場の弱味でしたね。どうにも仕方がなかつたんです。」

「だがダーネイの傍に行つたつて、」とローリイはゐつた。「それが萬一法廷でまづい結果にでもなつて見たまへ、あの人は助からんぢやないか。」

「だから僕は助かるとはひはなかつたんです。」

ローリイの眼はだんだん燠爐の方に向いた。あの大好きなルウシイへの同情、この二度目の逮捕を聞いてからの落膽、そんなものがだんだん彼の眼を弱くした、彼は近頃、心配を、負ひきれぬ程背負はされたので、すつかり老人になつてしまつた。涙が落ちた。

「あなたは善い人です、眞の友人です、」とカートンは聲を改めていひ出した。「失禮ですが、あなたはひどく感動してゐるやうに見えます。僕は、自分の親父の泣くのを見て、平氣でそばに坐つてゐることの出來る人間ぢやありません。僕は、あなたが僕の親父だつたにしても、今のあなたの悲しみを有難く思ふ以上に思へなかつたでせう。とにかく、あなたからその不幸を取つて上げます。」

彼がこの最後の言葉をあふときには、だんだんいつもの彼の調子に戻つて來たが、それにしても、彼の語調にも彼の同情にも眞實な感情と尊敬がこもつてゐた。今までカートンの好い半面を全く見る折のなかつたローリイはすつかり間諛つゐてしまつた。彼がカートンに手を與へると、カートンはそれを優しく握りしめた。

「可哀さうなダーネイの話をしませう。」とカートンはゐつた。「ルウシイさんには、さつきの間見や、こんな約束のことを話しちやいけません。それを話すと、あの女がダーネイに會ひに行きにくくなつてしまひませう。あの女は、ダーネイの萬一の場合には、宣告より先に自殺させる手段が運らされてゐるなどゝ考へるかも知れませんか。」

ローリイはそんな事までは考へてゐなかつた、それで、はつとしたやうにカートンの顔を見て、そんなことが彼の心にあるのかどうかを讀み取らうとした。成る程、それはありさうに見えた、彼は眼を外したが、明らかにそれを見て取つたのであつた。

「あの女はいろいろな事を考へるかも知れません、」とカ

一三〇七一

ートンはあつた。「どんなことを考へても、あの女の苦惱は増すだけでせう。僕のことを、あの女に話しちやいけません。最初来たときにあなたに話して置いたやうに、僕はあの女に會はない方がゝんですから。會はなくなつて、僕は手をのばして、僕に出来るやうな一寸した手助けになる仕事ならどんなものでも手をのばして、あの女の爲めに出ることが出来るんです。あの女のところへ行つてあげて下さい。今晚はきつとひどく淋しがつてゐるにちがひありません。」

「これからすぐ行かうと思つてゐる。」

「そりやゝゝ。あの女は強い愛情を持つて、あなたを當てにしてゐます。あの女はこの頃どんな風です？」

「心配ばかりして、不合せだが、それでもずるぶん美しい。」

「あゝー！」

それは、長い、悲しさうな、まるで吐息のやうな、——いや、まるで嗚咽のやうな聲であつた。その爲めにローリイの眼はカートンの顔に惹きつけられた、だが、彼の顔は爐の火の方に向いてゐた。一つの光、また一つの影が（老紳士にはそれが何方かいふことが出来なかつた）、その顔をさつと掠めて過ぎる、丁度烈しく太陽の照つた小山の半腹を一つの變化が掠めて行くやうな素早さである。彼はやがて足をあげて、燃えさかつてゐる丸太薪の一本が前の方にくづれかゝつてゐるのを押し戻した、彼はこの頃流行の白い乗馬外套と大長靴をつけてゐた、それで爐の火の明がその美しい表面にふれて、彼の姿はすつかり青白く見えた、彼の長い鳶色の髪は、ちつとも手入れされずに、顔のまはりにゆるく垂れさがつてゐた。彼が火のことなどすつかり忘れてらしい様子を見かねて、ローリイは一寸注意をした、彼の長靴は、燃えさかる丸太薪を脚の重味で押し潰して、まだその熱い燃えさしの上を踏んでゐた。

「いや、すつかり忘れてゐました。」と彼はあつた。

ローリイの眼は、またも彼の顔に惹きつけられた。本來は美しかるべき顔立ちをこんなに曇らしてゐる憔悴した色に眼がとまると、彼の心には澤山の囚人の顔の表情が生々しく刻まれてゐるので、それをはつきりと思ひ出した。

「此方のあなたの仕事は、もうお終ひになつたんですか。」カートンは彼の方に向いてかふあつた。「さうだ。昨夜ルウシイさんが不意に入つて来たときに話してゐた通り、たうたうわしの力で出来るだけの仕事は片付けてしまつたんだ、わしはもうあの人達をすつかり安全にして置いて、それから巴里を立つゝもりであつた。もうちゃんと通行免状はもらつてある。いつでも立てることになつてゐたんだ。」

一三〇八一

二人は共に口を噤んだ。

「あなたの一生などは、振り返つて見たら長いもんでせうね。」カートンは何か思ひ込んだやうに
 ゐつた。

「七十八年になるんだ。」

「あなたなどは一生有益な生活をなすつたんです。着實に絶えず仕事をして、信用され、尊敬され、
 重んじられてね。」

「わしは一人前になつたときから、ぶゝと事務家だつたんだ。いや、子供の時からもうさうだつた
 とひつてもあゝ。」

「そのあなたが七十八の今日、どんな地位を占めてゐるか御覽なさい。あなたがゐらつしやらな
 かつたら、どんなに澤山の人間が頼りながることとせう！」

「獨り者の年寄のことだ。」と、ローリイは頭をふつていった。「わしが死んだからつて誰も泣いて
 くれはしないさ。」

「どうしてそんなことを仰しやるんです！あの女があなたの爲めに泣かないと思ひますか。あの女
 の子供が泣かないと思ひますか。」

「さうだ、さうだ、うむ有難い。今のは、心から言つたことぢやないんだ。」

「それこそ、神様にお禮をゐつてもあゝとせう、さうぢやありませんか。」

「その通りだ、その通りだ。」

「若しあなたが、今晚でもほんとに、孤獨な氣持になつて、『をればどんな人間の愛情も愛著も感
 謝も尊敬も何一つしつかりと得てはゐない、おれは決して誰にも優しくしてもらつたことなどない、
 おれは後々まで人に記憶されるやうな善い事や役にたつ事は、何一つしちやゐないんだ！』といふこ
 とが出来たなら、あなたの七十八年は、丁度七十八の重々しい呪ひとなつてしまふでせう、さうぢや
 ありませんか。」

「君のいふ通りだ、カートン君、大方さうだらう。」

カートンはまた煖爐の火の上に眼をうつした、そしてしばらくの間黙つてゐた後でかふゐつた――

「一つお訊きたい事があるんですが――あなたには子供の時代がひどく昔のことに思はれますか。
 お母さんの膝の上に坐つてゐた頃は、遠い昔の事のやうに思はれますか。」

彼の物腰のやさしくなつたのに釣ひ込まれて、ローリイはかふ答へた――

「二十年も前にはさうも思つたよ、この頃になつちや、さうは思はんね。何故つて、だんだん死ぬ
 時が近くなるに従つて、翼を描いて歩いてゐるもんで、だんだん子供時分に近寄つて来るんだ。それ
 が丁度臨終の深切な慰藉なり用意なりのやうに思はれるんだね。わしの心はかうしてゐる今でも、長
 いこと寝入つてゐた様々な思ひ出や、わしの綺麗な若いお袋の思ひ出や（こんなに年は寄つてゐるが
 ね！）皆

――三〇九――

が世界と呼んでゐるものが、わしにとつてさう眞實なものではなく、またわしの缺點も心にそんなに
 硬くならない頃の様々な聯想などで、感動してゐるんだ。」

「その氣持はよく分りますよ！」とカートンは顔を明るくして叫んだ。「だから、それだけ餘計
 ゐることがあるでせうね。」

「さうあつて欲しいものぢや。」

カートンはこゝで會話を打ち切り、立ち上つて、ローリイに手傳つて外套を着せてやつた。「だが

君は。」ローリイは前の話題に戻りながらあつた。「君は若いんだからな。」

「さうです。」とカートンはあつた。「僕は年寄りぢやありません、ですが、僕の若さは、決して長生きをするべきものぢやなかつたんです。自分にあきまきしてゐるんですから。」

「今はわしもその通りさ。」とローリイはあつた。「君も出かけるのかね。」

「あの女の門口まで一緒に行きませう。僕の放浪者ぢみた、落ちつかない習慣は御存じでせうね。長いこと町を歩きまはつたからつて、心配することはありません、明日の朝、きつと顔を出しますから。明日は法廷へお出でませう?」

「うん、不都合ながら行かう。」

「僕も行きます、但し、傍聴の一人としてゝす。先刻の諜者が僕の爲めに席をとつて置いてくれる筈です。さあ、腕を貸しませう。」

ローリイは彼のいふ通りにした、二人は階下を下りて、それから外方に出かけた。何分か歩くと、もうローリイの行先きまで来てしまつた。カートンはそこで彼と別れたが、一寸離れると足を緩め、門が閉るのを見てまたとつて返し、門にさはつて見た。彼は、彼女が毎日監獄の傍へ行つたことを聞いてゐた。「あの女はこゝを出たんだな。」彼は四邊を見廻してかふあつた。「そしてこつちに曲つたんだ、きつとこの鋪石を何度も踏んだにちがひない。あの女の足蹟についていつて見よう。」

彼がラ・フォルス監獄の前に立つたのは、夜の十時であつた。こゝは彼女が何百度も立つたところである。小男の木挽はもう店を閉めて、戸口で一服やつてゐた。

「今晚は、市民。」とシドニイ・カートンは通りすがりに足を止めてゐつた。木挽が彼を胡散くさううに見たからである。

「今晚は、市民。」

「共和国の景氣はどうだね。」

「あゝギーヨツチイ又かね。悪くはねえな。今日は六十三人だ。直ぐ百になるだらうよ。サムソンや下端の連中は、

一三二〇一

時々草臥れるつてこぼしてゐるんだ。ハ、ハ、ハ！あのサムソンの奴ア、そりや面白い奴だね。素敵な牀屋だよ。」

「君は時々見に行くのかね、あいつが何するのを——」

「剃るのをかね。毎日行くよ。大した牀屋だ！お前はあいつが仕事してゐるのを見たことがあるかね。」

「いや、無い。」

「お客の大勢あるとき一つ行つて見てやれ。考へて見るがひ、今日はわしが煙草二服喫はねえ中に六十三人片付けたんだぜ！二服しねえうちだぜ。嘘ぢやねえんだ。」

小男の木挽がせゝら笑ひながら、自分のくはへてゐた煙管をつき出して、どんな風にもその死刑の間を計つたかといふことを見せたときに、カートンはひどくむかむかして、この男を殴りつけて息の根をむしり取つてやりたいやうな氣持が湧いて來たので、ふひと傍を離れた。

「だがお前は英吉利の衣物を着てゐるやもだが、」と木挽はあつた。「英吉利人ぢやあるめえな。」

「英吉利人なんだ。」とカートンはまた立ち止つて、肩越しに返辭した。

「まるで佛蘭西人のやうに喋るぢやねえか。」

「長く此方の學生になつてゐるんでね。」

「はゝあ、そんなら立派な佛蘭西人だ！あばよ、英吉利人。」

「左様なら、市民。」

「あの面白い野郎を見に行くがひゝ。」と小男は執拗く彼の背後から怒鳴つた。「そのときは煙管をもつて來よ！」

カートンはこの男が見えなくなつていくからも行かないうちに、道の真中の明るい街燈の下に立ち止つて、鉛筆を出して紙片に何か書いた、それから好く道を知つてゐる人のやうにしつかりした足取りで、幾つかの暗い汚ない通りを通つて、——このあたりの町通りはいつもよりづゝと汚なかつたに違ひがない、この恐怖の時期には一番目抜の大通りでさへ掃除をされたことがなかつたのだから、——彼はある薬屋に立ち寄つた。丁度店の主人は自分で戸を閉めかけてゐるところであつた。曲りくねつた路の悪の通りにある、小さな、薄暗い、いびつな店で、主人といふのも小さな、薄暗い、いびつな男であつた。

勘定臺のところで主人が迎へると、彼はこの市民にも今晚はと挨拶して、例の紙片を主人の前に出した。「ほう、」主人はそれを讀みながら、そつと口笛をならした。「へえ！

へえ！へえ！」

シドニイ・カートンは知らぬ振りをしてゐた、薬剤師はかふあつた——

「あなたが使ふんですか、市民。」

「僕が使ふんだ。」

——三二——

「これは離して置くやうにしないといけませんよ、市民。一緒にするとどうなるかよく御存じでせうね。」

「よく知つてゐる。」

主人は二つ三つの小さい包みをつくつて、彼に渡した。彼はそれを一つづゝ下衣のポケットに納めて、薬の代を拂つて、悠々と店を出て行つた。「これで明日までは、」とカートンは空の月を仰ぎながらあつた。「もう何もしなくていゝわけだ。眠れないなあ。」

空を走る雲の下で、彼が聲高にかふいつたその態度は、自棄らしいものではなかつた、また蔑視した風も、無頓着な様子も見えてゐなかつた。それは、ゐはゞ彷徨し、苦闘し、すつかり路に迷つたあとで、たうたう本當の道を尋ね當て、その目的地を見つけた、草臥れた人のあの落ちついた態度であつた。

づゝと昔、彼がまだ極めて有望な青年で、その頃の競争者の間に有名だつたころ、父について墓場に行つたことがあつた。彼の母は何年前か前に死んでゐたのであつた。五月と空高く走る雲とを仰ぎながら、暗い重い物影の間の暗い町々を下りて行くうちに、彼の心には父の墓碑で讀んだことのあるかふいふ莊嚴な言葉が浮んで來た。『イエス彼に曰けるは、我は復生なり生命なり、我を信ずる者は死るとも生くべし、凡て生て我を信ずる者は永遠も死ることなし。』(約翰傳第十一章埋葬祈禱の起句)

首斬斧に支配されてゐる市で、夜半たゞ一人、今日死刑にされた六十三人の爲め、また今頃牢獄でその運命を待つてゐる明日の犠牲の爲め、更にその明日そのまた明日の犠牲の爲めに、湧き上つて乗る自然な悲哀を胸に抱きながら、海の底から出た錆ついた古い碇のやうに、この莊嚴な言葉をひしと

肝に銘じさせた聯想のつながりは、容易に見つけ出されたにちがひない。彼はそれを見出さうとはしなかつた、だがその言葉を繰り返して、歩きつづけた。

人間が、静かな数時間のあひだ、彼等をめぐる恐怖を忘れて休まうとしてゐる燈火の明るい窓、基督教の假面をかぶつた詐僞漢や掠奪者や放蕩者の多年の跋扈の爲め、人民の反動が途に自滅の淵にすゝませたので、今は一言の祈禱も唱へられなくなつた教會堂の塔、それから門の扉にさう書かれてある通り、永遠の眠りの爲めに殘されてゐる町端れの埋葬場、澤山の監獄、幾度か六十の犠牲が死に連ばれて行つた街々、死そのものまでがひどく常り前な、物質的なものになつてしまつて、斷頭臺がこれ程働いても、人々の間には、つひぞ幽靈になつて出た亡靈の悲しい物語が一つも生れて來ないことなどに一種嚴肅な興味を覺え、忿怒に燃えてはゐながらも短い夜の休息に落ちつかうとしてゐるこの市の生と死の全運命に嚴肅な興味を覺えつゝ、シド

—三二二—

ニイ・カートンは、またセイヌを渡つてもつと明るい街の方に戻つて來た。

馬車は少しより走つてゐない、何故なら、馬車に乗る人には嫌疑をかけられやすいので、紳士階級は皆、赤い寝帽子の下に頭をかくし、重い鞆をはいて、のそのそ歩いてゐたからである。だが、劇場はいづれも皆一杯であつた、彼の通つたとき、見物は元氣よく溢れ出して來て、何かへちやくちやと喋りながら歸つて行つた、或る劇場では、戸口のところに、母親に連れられた小さな娘が立つて、泥の海になつた街路を向ふへ渡る道をさがしてゐるのであつた。彼はその子供を抱いて渡してやつた、そして彼の頸からそのおぼつした手を離さないうちに、子供に接吻をもとめた。

『イエス彼に曰けるは、我は復生なり生命なり、我を信する者は死るとも生べし、凡て生て我を信する者は永遠も死ることなし。』

今は通日も静まり、夜も更けたので、その言葉は彼の足の反響の中に聞え、空にたゞやつてゐた。すつかり心が澄んで落ちついた彼は、歩きながら時々自分でこの言葉をくり返して見る、すると、いつもそんな風に聞えて來るのであつた。

夜は更け盡きた、彼が、橋の上に立つて、人家や、伽藍が繪のやうに入り雜つて月の光に明々とかゞやいてゐる島(セイヌ河の中の一帯大きな中洲)の岸壁に水沫をあげる川水の音に耳を傾けてゐると、朝が冷たくやつて來て、空からまるで死人の顔のやうにのぞきかけた。やがて夜は月や星とともに、蒼白くなつて死んで行く。しばらくの間は森羅萬象が死の領分に引き渡されたものゝやうに見えた。

だがいよいよ光り眩ゆひ太陽がさしのぼると、夜中重荷のやうに持つて廻つてゐたあの言葉が、その長い明るい光線の中で、眞すぐに濃く彼の心に打ち込まれるやうに思はれた。恐る恐るその光線について眼に手をかざして見渡すと、一道の光明の橋が、彼と太陽の間の大空にわたつてゐるやうに見える、川はその下に煌々光つてゐる。

この強い流れ、あくまで速く、あくまで深く、あくまで慥かなこの流れは、朝の靜寂のうちで、仲好しの友達になつたやうに思はれる。彼は、人家から遠く離れ、流れについて歩くうち、太陽の光と温かさに包まれて、土堤でぐつすり寝込んでしまつた。眼をさまして、そこをもう少し先までぶらぶら歩く、と渦巻が眼についた。これは何の目的もなくめぐりめぐつて、やがて流れに吞まれて海に連ばれてしまふ、——「おれに似てゐるなあ!」

枯葉色をぼかしたやうな帆を上げた商船が一艘、彼に見えるところまでやつて來て、彼の傍を通つ

て、消え失せて

―三二二―

しまふ。この船の音も立てずに水に残した足蹟が見えなくなると、隣むべき不明さと数々の誤謬に慈悲深い斟酌を興へてもらふ爲めに、心から爆發して來た祈りが、終にこの言葉となる、『我は復生なり生命なり。』

彼が歸つたときにローリイは、もう出かけてゐた、この老人の行先きは容易に推測することが出来た。シドニイ・カートンは少しばかりの珈琲とパンを食つた、それから手足を淨め、衣物を着換へてさつぱりした氣持になつて、審問の場所に出かけて行つた。

例の悪者の密偵が―流石に大勢の人も恐ろしさうに彼の傍から退いた―群集の人目立たない片隅に彼を押し込んだときには、法廷はまをすつかりざはざはと噪音につままれてゐた。ローリイはもう來てゐた。ドクタア・マネットも來てゐた。彼女も來て父の傍に坐つてゐた。

夫が連れ込まれたとき、彼女はその方に眼を向けた、それは、しつかりさせるやうな、勵ますやうな、また見とれるやうな愛情と、同情するやうな優しさに満ちたものであつた、しかも彼の爲めに二元氣よくしてゐたので、これを見る夫の顔には活々した血色が漂り、見る眼差が明るくなり、心が活潑になつた。若し誰かが、彼女の眼色の、シドニイ・カートンに與へた影響を仔細に見てゐたなら、彼も亦全くこれと同じなことを見たであらう。

この不正な法廷の前には、被告にその道理ある言葉を言はせるやうな、審問進行の手順などいふものは殆んどなかつた。あらゆる法律、形式、儀式などが恐ろしく濫用されたので、革命の自滅的な復讐がそれらのものを四方に播き散らしてしまふことになつたのである、でなかつたら、かふいふ革命は起る筈がなかつたであらう。

誰の眼も陪審席に向けられた。昨日や一昨日と同じな決意の固い愛國志士とよき共和主義者達がある、これは明日も明後日も同じことであらう。彼等の間でも熱心で圖抜けて見えるのは、いかにも物欲しさうな顔をした、指を絶えず口のあたりに動かしてゐる男である、彼の姿は見物に大きな瀾足を與へた。人の生命を奪ふことに飢ゑた食人鬼らしい眼付の、血腥さの心をもつたこの陪審員は、サン・タントアヌのジャックの三である。陪審員全體が、ゐはゞ鹿を裁判する爲めに選ばれた獵犬のやうに見える。

次には誰の眼も五人の裁判官と二人の檢事に向ふ。今日はその方面にも被告を眞眞にしてくれる都合のゝ空氣がない。あるのは、兇猛な、堅くとつて譲らぬといつたやうな残忍な、職分一點張りの氣持だけである。次に誰の眼も群集の中に他の一人の眼をさがして、それに出會ふと嬉しさうに光る、そして注意を拂ひつゝ前へ體をのり出させる。頭と頭とが互ひにうなづき合ふ。

―三二四―

シャルル・エヴレモンド、別名ダーネイ、昨日釋放。昨日、再告訴され、再逮捕さる。昨夜起訴狀が彼に交附された共和國の敵、貴族黨、或る暴主の家族の一人、その廢止された特權を利用して忌はしくも人民を壓迫せんと試み、爲めに法律の保護を奪はれた階級の一人、このやうな嫌疑で告發されてゐる。シャルル・エヴレモンド、別名ダーネイは、かゝる法規に照して、國法上死刑に相當する。

かふいふ意味のことを、これ位ゐるか、それより少ない書葉で、檢事が述べた。

裁判長はかふ訊ねた。「被告は公訴されてゐるのか、密訴されてゐるのか。」

「公訴です、裁判長。」

「誰によつて。」

「三人です。サン・タントアヌの酒商人エルネスト・ドファルジュ。」

「宜しい。」

「彼の妻、テレーズ・ドファルジュ。」

「宜しい。」

「醫師アレキサンドル・マネット。」

すると法廷の中には大きな叫びが起つた。その眞最中に、ドクター・マネットが蒼白になつて身ぶるひしながら、先程坐つてゐた席に立ち上つた姿が見られた。

「裁判長、わしは憤然抗議を致します、これは偽造です、詐偽です。あなたは、被告がわしの娘の夫だといふことを御承知でせう。わしの娘と、娘に大事な人々は、わしにとつては生命よりも大事なのです。わしが娘の夫を告發するなど、いふその嘘つきの陰謀家は誰です、何處にゐます！」

「市民マネット、落ちついたまへ。革命法廷の權威に服従しないことはあなた自身を法律の保護外に置くことになる。あなたにとつて生命よりも大事なものの云々とお話だが、善良な市民にとつては共和国そのものより大切なものはあり得ないのだ。」

耳を聳せんばかりの喝采がこの叱責を賞めた。裁判長はベルを鳴らす、ぞして熱心にかふ續けた。

「若し共和国があなたの娘を犠牲にすることを求めたとすれば、あなたの義務は、たゞ彼女を犠牲にするより外にない筈だ。これからどういふことになるか聞いてゐたまへ。それにしても、先づ靜かに、靜かに！」

またも狂氣ちみたま賞讃の叫びがあがる。ドクター・マネットは、眼であたりを見廻し、唇をふるはしつゝ席に戻る、彼の娘は彼のそばに寄り添つた。陪審席にゐる物欲しさうな男は、両手をしきりにもみ合はせる、そして例の通り手を口の方にやつた。

ドファルジュが連れ出されたときには彼の聲が聞える位の

―三二五―

に延内ほ靜まつた。彼の聲音、さうして手早く、ドクターの投獄の話、目分がドクターに仕へてゐた頃はほんの子供であつた話、釋放の話、釋放されて彼に引き渡されたときの囚人の情態の話などを述べる。それにすぐつゞゐて次の短い質問がある、法廷は敏活にその仕事を片付けてゐた。

「君はバスチユを奪取する際に立派な働きをしたか。」

「したと思ひます。」

これを聞くと群集の中から、昂奮した一人の女が金切聲を揚げた。「お前さんはあのとき一番立派な愛國者の一人だつたんだよ。何んだつてさういはないの？お前さんはあの日大砲方だつたんだらう、それからあの罰當りの城砦が落ちたときに第一番に飛び込んだ人達の一人だつたんだらう。愛國者の皆さん、わたしは本當のことをいつてゐるんです！」

聴衆の熱心な賞讃の中に、かふいつて進行を助けてゐるのは、ザ・ヴェンジャンスである。裁判長はベルを鳴らす、だがザ・ヴェンジャンスは、聴衆の獎勵であらゝ氣になつて、金切聲を張り上げた。

「えゝ氣に食はないベルだ！」それで彼女はまた同様に大喝采される。

「市民、その日君がバスチユの中でしたことを當法廷に申し立てたまへ。」

「わしは、」とドファルジュはいつて妻の方を見下した、彼の妻は夫の上つた階段の下に立つて、夫の方をしつかりと見上げてゐる。「わしは、今申します囚人が北の塔の百〇五番といふ部屋に入れられてゐたことを知つて居りました。彼自身の口から聞いてゐたのです。彼はわしの家の屋根裡部屋で鞆を造つてゐた頃は、自分の名前をこの塔の百〇五番といふのだとしか知りませんでした。その日、わしは大砲方をつとめながら、今こゝが落ちたら、その部屋を吟味してやらうと思つてゐました。ところが、それが落ちたので、わしは、今日この陪審席に見えてゐる一人の友なる市民と、牢番から教はつてその部屋に上つて行き、そこを極く細かく調べて見ました。すると、煙突の中に一つの穴があり——そこは一つの石が動かされて、また蓋のやうにはめこまれてゐた——その中に、何かしら紙に書いたものがありました。これがその紙です。わしは、一心にドクタア・マネットの手蹟の見本を二三吟味して見ました。これはドクタア・マネットの手蹟なのです。わしは、ドクタア・マネットの手蹟で書いてあるこの紙片を裁判長の手引き渡します。」

「それを讀み上げてみる。」

死のやうな無言と静寂であつた、——審問中の囚人は愛情をこめて妻の方を見る、彼の妻は彼から眼をそらして、氣はつかしげに父の方を見る、ドクタア・マネットは熱心に

—三二六—

讀み上げ役を見つめてゐる、マダム・ドファルジュは一寸の間も囚人から眼を離さない、ドファルジュは一寸の間もその楽しさうな妻君から眼を離さない、他のすべての人たちの眼は、ドクタアの上集つてゐるが、彼には一つも眼に入らない、——かゝる間に、その書き物は次のやうに讀み上げられた。

十、暗影の正體

『餘、印ちボーヴェイに生れ後に巴里の住人となつた不幸な醫師アレキサンドル・マネットは、千七百六十七年の最後の月の間にこの陰惨な記録をバスチユ獄内の佗しる監獄に於いて認む。餘はこれを、あちゆる困難を冒し、時間を竊んで認める。餘はこれを煙突の壁に隠すつもりである、既に餘は徐々と非常な勢力を費して、これの隠匿場所を造つて置いたのである。餘の體も餘の悲しみも灰になつた頃、何人かの憐憫深い手が、これを見出すかも知れない。』

この文字は、餘の拘禁の第十年目の最後の月に、錆びた鐵片の尖端を筆にし、煙突の煤と炭の掻き落しに餘の血を雜せてこさへたものを墨汁として、辛ろじて認めたものである。餘の胸からは希望が全く去つてゐる。餘は様々な恐ろしい前兆から、餘の理性がさう長い間無事ではゐまいといふことを餘自身で認めたのだ。だが、現在は自分がしつかりした意識を持つてゐること——餘の記憶が精確で詳細であること——餘の最後に書き記した言葉が、果して人間によつて讀まれるか否かは兎に角、神の永劫の審判廷に於てはこの責を負ふつもりで餘が眞實を書いてゐることを、嚴肅に宣言する。

千七百五十七年十二月の第三週の或る曇りがちな月夜のこと（どうも二十一日だつたと思ふ）、餘は、冷たい爽快な空氣を味ふつもりで、醫學校街なる餘の佳居から歩いて、一時間程離れたセイヌ河岸の波止場の人通り少ない處を歩いてゐると、餘の背後から一臺の馬車が非常な早さでやつて來た。餘は、うかふかすると礫き殺されるかも知れないと思つて、傍に避けて、その馬車をやり過ぎうとしてゐると、窓のところに一人の人の頭が見えて、馭車に止めろといふ聲が聞えた。

馬車は、馭者が馬を引き止めるとともに止まった、すると前と同じ聲が今度は餘の名を呼んだ。餘は返辭した。馬車は可成り餘の先を進んでゐたので、餘がその傍へ行く頃には、二人の紳士が戸を開けて下りるだけの餘裕があつた。餘の見たところでは、二人とも大マントに身を包んで、一見身分を隠してゐるやうに思はれた。彼等は馬車の戸のところを並んで立つてゐたが、餘は更に、二人ともほゞ餘と同年か少しは若く見えること、背丈も、舉動も、聲も、（餘

―三二七―

の見たことが出来る限りでは）顔も亦、實によく似てゐるといふことを見てとつた。

「君はドクタア・マネットかね」とそのうちの一人はあつた。

「さうです。」

「ボーヴェイ生れのドクタア・マネットだ、」と今一人の方はあつた。「元來外科の専門家で、この二年來巴里でぐんぐん有名になつた若る醫師といふことだが？」

「いや紳士方、」と餘は答へた。「お褒めで恐縮ですが、私がそのドクタア・マネットです。」

「われはれば君の宅に行つたんだ。」と前の方の一人がひつた。「不幸にして君は不在だったが、大方こちらへ散歩に出かけたものだらうと聞いたんだ。それで君に出會へるつもりで追つて來たわけだ。どうか、君、馬車に入つてくれたまへ。」

二人の態度は命令的であつた、かふいふうちにも二人は體を動かして、餘を彼等と馬車の戸の間に挟むやうにした。彼等は武器を持つてゐた。餘には何もなかつた。

「紳士方、」と餘はあつた。「私の習慣上、治療を乞ふ方は何方か、その病氣の性質は何かをお訊ねすることになつて居ります。」

この問ひに封しては、二番目に口をきいた人が答へた。

「ドクタア、君を頼む人は身分のある人なんだ。また病氣の性質といふが、それは、われはれが君の技倆を信賴してゐるから、われはれが口でいふよりも君自身で一層よく確めることが出来るにちがひないと確信してゐる。どうか一つ馬車に入りてくれたまへ。」

餘は應ずるより外に仕方がなかつたので、無言のまま中に入つた。二人も餘につゞいて入つた、――後の一人は踏み臺を上げた後でさつと跳び乗つた。馬車はぐるりと廻つて、もとのやうな早さで駈け出した。

餘はこの會話を、あるとき實際取り交はされた通りに繰り返す。餘はこれが一語と雖も全殊當時と同じものなるを疑はない。餘は、餘の心をこの仕事から逸らさないやうに緊張させつゝ、すべての出來事を実際起つたとほりに述べる。次のやうな點々……を書くときは、しばらくやめてこの紙を例の隠し場所に入れるときである……

馬車は巴里の町々を後にし、北の市門を通つて、田舎道に出た。市門から三分のニリーグも行ったころ、――餘はこの時は距離を測りはしなかつたが、後に自分で通つて見て分つた、――馬車は、本道から傍道に逸れたが、間もなく一軒家の前で止つた。餘等三人は下りて、庭（手入のどゞかない噴水が流れてゐた）にある湿々した柔かい歩道を通つてその家の戸口まで歩あで行つた。ベルの音を鳴らしたが、戸は直ぐには開けられなかつた、それで餘を案内し

―三二八―

て来た二人のうちの何方か、戸を開けた男の顔を汚れた乗馬手袋で打った。

この行爲には別に餘の特別な注意を惹くに足るものとはなかつた、何故なら普通の人間が打擲されるのは、犬よりもよくあることを見て知つてゐたからである。だが二人のうちのも一人も同様に立腹してゐたので、同じく腕でその男を打擲した、その時の兄弟の眼つきや態度が甚だよく似てゐたので、餘はその時始めて彼等が雙生昆の兄弟なのだといふことが分つた。

餘等が外の門のところまで馬車を下りた時から（この門は錠が下されてゐた、そして兄弟のどちらかゞそれを開けて餘等を入れると、また錠を下した）、餘の耳には上の方の部屋から出る叫び聲が聞えてゐた。餘は直ちにこの部屋に案内された。餘等は階段を上るにつけて、この叫び聲が次第に高くなつた、餘は高熱で腦を犯されてゐる病人が、寢床の中に臥てゐるのを見た。

その病人は非常に美しい、しかも若い婦人であつた、どう見ても二十歳を多く越えてはゐなかつた。彼女の髪は、掻きむしられ、ほぐし散らされてゐた。彼女の兩腕は、飾帶や手巾やで胴に縛りつけられてゐた。餘は、これ等の細紐が、いづれも紳士の衣物の一部分であることに氣がついた、そのうちの一つには（それは儀式用禮装に使ふ總付き飾帶であつたが）、貴族の定紋と、田といふ文字があるのを見た。

餘がこれを見たのは、病人を診察した後すぐであつた。何故なら彼女は、小止みなく身悶えするうち、寢臺の端のところに俯向けに轉がつて、その飾帶の端を口の中に押し込んだので、今にも窒息するところであつた。そこで餘は第一に手をのばして彼女の呼吸を樂にしてやつた、口に入つてゐた飾帶を取り除けると、隅のところの縫箔が餘の眼についたのである。

餘は彼女を靜かに寢返らせ、彼女を落ちつかせて寢かして置く爲めに、兩手をその胸にのせ、ぢつと彼女の顔を見た。彼女の眼は瞳孔が擴がつて、錯亂の兆候を見せてゐた、彼女は、絶えず劈くやうな悲鳴をあげて、次のやうな言葉を繰り返した。「わたしの夫、わたしの父、わたしの弟！」それから數を十二まで數へて、「しつ、しつ」とひつた。しばらく彼女は何か聞くやうに耳をすます、だが、たゞそれだけである、やがて劈くやうな悲鳴が、再び始まつて、「わたしの夫、わたしの父、わたしの弟！」といふ叫びを繰り返して、十二まで數へては、「しつ、しつ！」といふのが常である。その順序にも態度にも、少しも變化がなかつた。たゞ言ひ始めるときに一定の時間休むだけで、後は絶えずかふいふ聲を出してゐた。

―三二九―

「これはもうどのくらゐ續いてゐるのです？」餘はかふ訊ねた。

兄弟を區別する爲めに、餘は彼等を假に兄と弟と呼ぶことにしよう、兄といふのは比較的多く權力を使つてゐる方を意味する。餘に答へたのは兄の方であつた。「昨夜の今時分からだ。」

「この女には夫と父と兄弟があるのですか。」

「弟がある。」

「あなたがその弟ではありませんまゐな。」

彼はひどく輕蔑した態度で、「違ふ」と答へた。

「何か最近十二といふ數と係り合ひがあつたのですか。」

弟の方は煩さうにかふ答へた。「十二時のことだ。」

「どうです、」と餘は矢張り彼女の胸に手を置いたまゝゐつた。「折角お連れ下さいましたけれども、何のお役にも立たないぢやございませんか！どんな病人を見に行くんだといふことが分つて居りまし

たら、その用意をして來ることが出来たんでしたに。たゞこのまゝでは、どうしても手遅れにならざるを得ません。こんな淋しい處では薬など手に入りますまい。」

兄の方が弟に目配せをすると、弟は傲然と答へた。「この家には薬箱があるんだ。」そして戸棚から取り出して、卓子の上に置いた……

餘は二つ三つ罌の口をとつて、嗅いで、その栓を唇で嘗めてみた。若し餘が、本來毒薬である痲酔劑以外のものを用ひようと思つてゐたなら、こんな薬劑を服用させはしなかつたであらう。

「君はこれを疑ふのかね。」と弟の方はかふ訊ねた。

「御賢なさい、あなた、今これを使ふところです。」と餘は答へて、それきり何もゐはなかつた。

餘は、いろいろ骨を折つてやつとのこと自分でやらうと思つてゐる薬を病人に服ませた。餘はしばらくしてまたそれを服ますつもりで、又實際それがどんな效能を與へるかを見張つてゐる必要もあつたので、寢臺の傍に腰を下ろした。附添へにはおどおどした黙りこくつた女がゐたが（これは階下の男の女房であつた）、隅の方に引込んでゐた。この家は濕々した、壞れかけたもので、家具もひどいものばかりであつた、——ほんの最近住んだもので一時的の目的で使はれてゐることが、はつきり分つた。悲鳴の響きを消す爲めに、窓の前には、厚い古びた壁掛が釘で打ちつけられてゐた。その悲鳴も、「わたしの夫、わたしの父、わたしの弟……」といふ叫びと、十二まで數へて、「しつ、しつ……」といふ聲も、きちんと間を置いて絶えず續けられてゐた。その狂亂があまり烈しかったので、兩腕を縛つてある紐や布切を解かなかつた、だが、手が痛まないやうに氣をつけて

—三三〇—

はやつた。この病症に見える唯唄つの希望の火花は、病人の胸にのせた餘の手が驚く程鎮靜の效を與へて、時々、敷分間くらゐつゞゐて彼女を落ちつかせたことである。だがこれは叫び聲の方には何の効果もなかつた、どんな時計の振りでも、これ程精確ではなかつたらう。

餘の手でかふいふ効果が生れたので（餘は慥かにさう思ふ）餘は二人の兄弟に見張られたまゝ、半時間ばかりも寢臺の傍に坐つてゐた、すると、兄の方がかふゐつた——

「もう一人病人があるんだ。」

餘は吃驚して、訊ねた。「急な病氣ですか。」

「見れば分るよ。」と彼は無雜作にゐつた、そして燈火を持つた……

今一人の病人といふのは、二番目の階段を突切つたところにある裡部屋に臥てゐた、この部屋は、ゐはゞ厩の上の二階であつた。その一部分には低い、漆喰塗の天井が出来てゐた、その他は天井無しで、瓦葺の屋根の棟木まで見通しであつた、縦横に梁が渡してあつた。天井の無い部分には乾草と麥稈が貯へられてある外に、薪にする粗菜や砂に埋めた林檎の堆積があつた。天井のある方へ行くには、こゝを通り抜けなければならなかつた。餘の記憶は詳細で、しつかりしてゐる。かふいふ細々したことを書いてゐると、餘の拘禁の十年目の絡りに近い今でも、このバスチユ内の監房にゐても、すべであの夜見た通り、眼の前に見ることが出来る。

牀に敷かれた乾草の上に、頭の下には一つの小蒲團を投げるやうに支つたまゝ、美しい百姓の少年が、一人臥てゐた、——せいぜい十七歳を越えてゐまいと思はれる少年であつた。彼は仰向きに臥て、齒を喰ひしばつて、右の手で胸をしつかり掴んで、ぎらぎらする眼で、天井の方をまつすぐに見つめてゐた。餘は、片膝をついて彼の上に屈んだが、何處に傷があるのか見ることが出来なかつた、だが餘には、彼が鋭利な刀傷で死にかけてゐるのだといふことは分つた。

「これは可哀さうに。私は醫者だ。」と餘はあつた。「一寸その傷を見せるがひ。」

「おいらは見ても貰ひたくはねえんだ。」と彼は答へた。「そつとして置いておくれ。」

傷は彼の手の下にあつた、餘は彼を慰めてその手を除けさせた。その傷は、二十時間乃至二十四時間前に受けた長劍の突傷であつた、だが、たとひその時直ぐ手當を加へられたにしても、どんな手腕を盡しても彼を救ふ事は出来なかつたであらふ。彼にこの時もうだんだん死にかけてゐた。餘は例の兄の方に眼を向けると、彼は、今や生命の汐が去りかけてゐるこの美しい少年を、まるで怪我した鳥か、兎

—三三二—

でももあるやうに見下してゐた、全く自分と同じ人間を見てゐるやうにはなかつた。

「これはどうしたんです。」と餘はあつた。

「氣が狂つた青二才の百姓野郎だ！ 奴隷だ！ 弟に無理に喧嘩をしかけて劍を抜かせ、その劍で倒れたんだ——まるで身分のある紳士らしく。」

この答へには、哀憐とか、悲哀とか、同胞に封する人道とかいふものは微塵もなかつた。かふあつた彼の様子は、こんな種類を異にした生物がこゝで死にかけてゐるのは甚だ不都合であること、彼は彼に相應はしく、いつもの通り人知れず蚯蚓のやうな流儀で、死んだ方がづゝと結構だつたらうといふ意味を語るやうに思はれた。彼はこの少年なり、少年の運命なりについて、少しの同情的な氣持も持つことが出来なかつたのだ。

彼がこのやうにゐつたときに、少年の眼はのろろと彼の方に動いた、だが、今度はまたのろろと餘の方に動いて來た。

「先生、この貴族つて手合はえらく威張つてゐるね、だがおいらのやうな土百姓だつて、時々は意地が出るんだ。あの手合はおいら達の物を引奪くる、おいら達の姉妹を情ねえ目に遭はせる、殴る、殺す。だが、おいら達にも時々またちつとは意地が残つてるんだ。あれを——お前さんはあの女を診たかひ、先生。」

例の悲鳴と叫聲は、遠いので幾分弱められてはゐたが、矢張りそこまでも聞えて來た。少年は、いかにも彼女が餘等の目の前に臥せてゐるやうに、この悲鳴と叫聲のことをいつてゐるのだつた。

餘はあつた。「あゝ診たよ。」

「あれやおいらの姉さんだ、先生。この貴族つて手合は長いことおいら達の姉妹の貞操とかいふものを、恥かしくもなく自分のものみてえに玩弄にして來たんだ、それでもおいら達の中にやゝ娘達もゐたんだよ。おいら自分でも知つてるし、お父つあんがさういつてたのを聞いてゐるんだ。姉さんはゝ娘だつた。それにゝ若い衆のそこへお嬢に行くことに定つてゐたんだ、その若い衆がそこにゐるそいつの小作人よ。おいら達は皆そいつの小作人だ、——そこに立つてゐるその男のな。もう一人はそいつの弟で、悪者の中でも大悪なんだ。」

この少年は非常に苦しみながら、やつと話をする力を出すのだつた。だが彼は、精神に恐ろしいほど力を入れてかふ語つた。

「おいら達はそこに立つてゐるその男に物を盗まれた、おいら達のやうな土百姓はそんな目上の偉えお方連によくやられるんだ。——そいつに慈悲容赦もなく税はとられる、

—三三二—

そいつの爲めに賃銭なしで働かされる、おいら達の穀物でさへそいつの水車で挽かせなくちやいけな
い、おいら達の無けなしの收穫でそいつらの何十といふ飼禽に物をやらさせる、その癖おいら達が
たゞの一羽でも鳥を飼ふかたア生命がけで禁められてゐるんだ、引奪くるも引奪くるも、ひどいもの
さ、だからおいら達がひよつとして一片の肉でも手に入れゝや、戸に門をかけて、窓を閉めきつて、
びくびくしながら食ふんだ。そいつ等の連中に見つかると持つて行かれてしまふからな、——そんな
にひどく盗まれて、そんなにひどく探し立てられて、そりやもうひどく貧乏になつたもんで、お父つ
あんは、よくさういつたよ、子供を生むのは恐ろしいことだつてな、何よりも第一にお祈りしなくち
やならねえのは、女どもが子供を生まなくなつて、おいら連のやうな惨めな人間が死に絶えてくれる
ことだつてな！」

餘は今までに、壓制に對する意識が熱火のやうになつて迸しつたのを見たことがなかつた。餘は人
民の何處かにはそれが潜在してゐると想像してゐた、だが今この瀕死の少年から見せてもらふまでは、
その爆發したのを見たことがなかつた。

「先生、それでもどうにかおいらの姉さんはお姫になつたんだ。婿の若い衆は、可哀さうにその時
體が悪かつた、姉さんが好きな人と一緒になつたのは、その人をおいら達の家で——家つていつたつ
て、そこにゐる男がいふやうに犬小舎さ——介抱したり慰めてやりてえからだつたんだ。お姫になつ
て何週間にもならねえうちに、そこにゐる弟の方が姉さんを見つけて、惚れてしまつたんだ、そして
姉さんの亭主に權柄づくで姉さんを貸せつてゐつた——亭主は宜しうがすといつたんだ、だつて、お
いら達の間ぢや亭主なんていつたつて、何になるもんぢやねえ！だがおいらの姉さんはしつかりした
いゝ女だつた、それにその弟の奴を、おいらと同じやうに嫌ひぬいてゐたんだ。そこでこの二人は、
姉さんの亭主に納得させて、姉さんが亭主のいふことなら何でも聞くのを幸ひ、その手で姉さんに承
知させようとかゝつたんだ、どんな事をしたと思ふかね。」

餘の眼を一心に見つめてゐた少年の眼は、そろそろと傍に立つてゐる二人の方に動いた、餘はその
二つの顔に、少年の言つてゐることが凡て事貴だといふことを見て取つた。二つの全然反對の誇りが
眞正面に睨み合つてゐる、餘はこのバスタイユにゐてさへそれを見てゐるやうな氣がする、紳士のは
狡獅な無關心、百姓のは、踏みにじられた感情と、熱烈な復讐である。

「先生、お前さんも知つてゐるだらう、貴族の手合の權利といふものゝ中にや、おいら達のやうな
土百姓を馬車に縛

—三三三—

りつけて馬のやうに駆けさせることだつてあるのをな。この二人は、姉さんの亭主を馬車につけて駆
け廻らせたんだ。それから、お前さんも知つてゐるだらうが、その權利といふものゝ中にや、おいら
達を夜つびて貴族の地面に留めて置いて、そいつらのお立派な眼がさまされねえやうにつて、蛙を追
はせることもあるんだ。この二人は、姉さんの亭主を、夜は體に毒な夜露の中に出して置き、晝間は
馬代りにしたんだ。だが姉さんの亭主は納得しなかつた。どうしてもしねえ！或る日の午に晝飯を食
ふ爲めに——食ふ物がめつかれば食ふんだよ——馬車から外されると、鐘が一つ打つ度に一度づゝ、
丁度十二度すゝり上げて泣いたつきり、姉さんに抱かれて死んぢやつたんだ。」

自分の受けた彼等の邪惡を残らず語らふといふ彼の決心をのぞけば、この少年の生命を支へるのは、
人間業では出来ないことであつた。彼はその握りしめてゐた右手に力を入れ、傷を掩つて、次第に迫

つて来る死の影を押し返した。

「それから、そこにゐる男も承知の上で、承知どころか手助けまでして貰つて、悪の弟は姉さんを連れて行つちやつたんだ、姉さんはきつとその弟に何かひつたに違へねえ、——それが何だか、先生今は分らなくても、間もなく分るよ、——でも、弟めは姉さんを連れて行つちまつた、ほんのしばらく、自分の玩弄にして、慰さまうつてつもりでな。おいらは道で姉さんに會つた。家へ歸つてさういふと、お父つあん胸は張りさけちやつた、お父つあんは胸に一杯たまつてゐたことを一言もひなかつたんだ、をひらは、小さい妹を（もう一人姉妹があるんだ、この男の手のとゞかなひとところに連れて行つた。あすこにぬれや、あの妹は、せめてそいつの奴隷にならんでもぬらう。それからおいらは、その弟めの蹟をつけてこゝへ来た、そして昨夕塀を越えて入つたんだ、——土百姓だけでも、手はや劍をもつてな。——「階の窓は何處だか？何處かこゝいらなんだが。」

部屋の中はもう彼の眼には暗くなつて来てゐた、彼に見える世界は狭まつて来た。餘が自分の周囲を見廻すと、丁度格闘でもあつたやうに、牀の上の乾草と麥稈が踏みにじられてゐるのに氣がついた。「姉さんはおいらの聲をきゝつけて、駈け込んで来た。おいらは、あいつが死ぬまで二人の傍に来るなつていつて置いた。あいつは入つて来た、初めはおいらに金貨を二つ三つ投げた、それから鞭でおいらを打つた。だが、おいら、土百姓にちげえねえけれど、あいつをひどく打ち返したものだから、あいつは抜いた。あいつは、おいらのやうな土百姓の血のついた劍を、好きなだけ細かく折るがひゝ、あゝ

—三三四—

いつは防ぐに抜いたんだ——そして生命惜しさにありつたけの力でおいらを突いたんだ。」

ほんの一才前に、餘の眼は、乾草の中に横たはつてゐる折れた劍の片らに觸れた。この武器は正しく紳士用であつた。別のところに、一見兵士用だつたらしく見える古い劍が横たはつてゐた。

「さあ、先生、おいらを起してくれ、おいらを起してくれ、あいつは何處にゐる。」

「こゝにはお出でぢやないよ。」餘は少年を抱き起してやつたが、多分彼はその弟の方をいつてゐるのだと考へてかふあつた。

「あいつ！この貴族なんて手合は、偉く威張りくさつてゐるけれど、あいつはおいらを見るのが恐いんだ。こゝにゐた男は何處にゐる？あの男の方においらの顔を向けてくれ。」

餘は少年の頭を膝で支へて起しながら、いふ通りにしてやつた。だが一寸の間、異常な力を授かつたものか、彼は一人で、すつくと起き直つた、その勢ひで餘も起き上つた、さうしないと彼を支へてゐることが出来なかつたからである。

「侯爵。」少年は眼をかつと見開き、右の手を振り上げて、彼の方に向いてかふあつた。「何もかもすつかり勘定をつけられる日になつたら、おいらはお前とお前の一家の悪者を一人残らず呼んで、この報いをするぞ。その記號に、おいらはこの血の十字架の極印をお前に打つて置くんのだ。すつかり勘定をつけられる日になつたら、おいらは、お前の弟の、あの悪者中の悪を別に呼び出して、この報いをしてやる。その記號に、おいらはこの血の十字架の極印をあいつに打つて置くんのだ。」

彼はその手を二度胸の傷に當て、人示指で虚空に十字架を描いた。彼は指を振り上げたまゝ一寸の聞立つてゐたが、指が下りると共に、彼も倒れた、餘が彼を横にしてやるともう死んでゐた……

餘は、若い婦人の寢臺の方に歸つて見ると、彼女は前とすつかり同じ順序で、同じやうにつゞけて、叫び狂つてゐた。餘は、これが何時間も何時間も續いて、恐らく落ちつくところは、墓場の沈黙に相

「違ふことを知つてゐた。」

餘は前に與へた藥劑を繰返してやつた、そしてづゝと夜が更けるまで寢臺の傍に坐つてゐた。彼女は、その劈くやうな特徴の悲鳴を少しも變へなかつた、また彼女の言葉の明瞭さなり順序なりも、少しも狂はなかつた。それは定つて、「わたしの夫、わたしの父、わたしの弟！一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、しつ、しつ！」

―三三五―

といふのであつた。

これは、餘が最初彼女を見た時から二十六時間續いた。餘は二度往復した、さうして二度目に彼女の傍に坐つてゐるうち、彼女は弱り出した。餘は、この機會を助ける爲めに、出來得る限り何もしいやうにした、次第に彼女は昏睡に落ち、死者のやうになつて横たはつた。

それは、ゐはゞ長い恐ろしい大荒れの後で、風と雨がたうとう凧いだやうなものであつた。餘は彼女の腕を解き、附添の女を呼んで、餘に手傳はせて彼女の寢姿と彼女が裂きむしつた衣物をきちんと整へさせた。丁度この時、餘は彼女の體が、人の母になる最初の兆候が現はれ出してゐるのに無がついた、同時に、餘は彼女について抱いてゐた小さな希望も失つてしまつた。

「死んだかね。」遠乗りの歸りと見えて長靴のまゝ部屋に入つて來た侯鬱は（餘は矢張り彼を兄と呼ぶことにしよう）、かふ訊いた。

「まだ死にません。」餘は答へた。「だが、もう死にさうです。」

「この平民どもの體には何といふ力があるのだらう！」彼は一寸好奇心に捉はれたやうに彼女を見下してゐつた。

「悲哀と絶望には、」と餘は答へた。「恐ろしい力があるものです。」

彼は、初めは餘の言葉をからからと笑ひ飛ばした、だがやがて眉をひそめた。彼は、足で餘の椅子の方に椅子を二つ寄せ、附添の女を向ふにやつて、聲をひそめてかふ語り出した――

「ドクタア、弟がこの犬どもとこんな面倒を仕出來したのを見て、君の助けを借りなくちやならんと勧めたのは、私だ。君の評判は大したものだ、それに將來幸運をつかめる若い體だから、君はきつと君の利害を考へるだらう。ここで君が何を見ようとも、それはたゞ見ただけで、決して口に出してはならないのだ。」

餘は病人の呼吸をちつと聞いて、返辭もせずにあつた。

「私のいふことは聞いてくれるだらうね、ドクタア。」

「あなた。」餘はかふあつた。「私の職業では、病人の談話は何時も内密にすることになつてゐます。」と餘は用心深い返辭をした、何故なら餘の心中では、自分の見たもの、聞いたものに少なからず惑はされてゐたからであつた。

彼女の呼吸は、非常に聞き分け難かつたので、餘は入念に脈と心臓を診た。また生命はある、が、たゞそれだけのことだつた。席に戻つて周圍を見まはすと、兄弟二人が一心に餘を見つめてゐた……

餘はひどい困難を忍んでこれを書いてゐるが、寒氣が嚴しる上に、發見されて地下牢に入れられ眞暗闇に置かれる

―三三六―

のが恐ろしいから、この物語を短縮しなければならない。餘の記憶にはまだ混乱も喪失もない、餘とこの兄弟の間に語られた言葉を一語残らず思ひ出すことが出来る、書かうと思へば書くことも出来る。彼女は一週間ばかり生きのびた。愈々臨終の間際に、餘は、彼女が餘の耳を自分の口に近よせて、餘に語つた言葉のうち二つ三つを聞き分けることが出来た。彼女は、自分が何處にゐるのかと訊ねた。餘はそれを教へた。餘が誰かと訊いた。餘はそれを教へた。餘の方から彼女に、彼女の名前を訊ねたが、それは徒であつた。彼女は微かに枕を埋めてゐる頭を振つた、そしてあの少年と同じやうにその祕密を明かさなかつた。

餘は兄弟に、彼女がだんだん死にかけてゐること、もう一日とは生き延びられないことを話すまでは、彼女に何も訊ねる機會が得られなかつた。その時までには、附添の女と餘自身の外には、誰一人彼女の意識してゐるものはなかつたにも拘らず、餘がある時は、兄弟のいづれか一人がいつも、寢臺の頭の垂幕の蔭に疑ひ深げに坐つてゐるのであつた。だがいよいよ彼女が死にかけたとなると、彼等は餘が彼女とどんな談話をしようと思ひ介しないやうに見えた、ゐはゞ——かふいふ考へが餘の心をちらと掠めた——餘も亦死にかけてゐるものかやうに。

餘の眼にいつも映つたことは、弟（印ち私のいふ弟）が百姓と、それもほんの百姓の子供と劍を交へたといふので、ひどく誇りを傷つけられたやうに思つてゐることであつた。彼等兩人の心を動かしつゝの唯一の考へは、これは自分の一族にとつて、極めて墮落した不名譽な笑ふべきものであるといふことであつた。弟の眼に出會ふ度に、その表情は、彼が餘を深く嫌つてゐることを思ひつかせた。それは餘が少年から何を聞いたかといふことを知つたからであつた。彼は、餘に對して兄よりもずつと柔和で丁寧であつた、だが餘はこれを見てとつた。餘は、自分が兄の方にも邪魔物と思はれてゐることを知つた。

この病人は、夜半より二時間前に死んだ、——餘の時計でいへば、餘が初め彼女を見たときと殆んど同じ時刻であつた。餘はその時彼女と二人きりでゐたが、やがて、彼女の寄る邊ない若々しい頭が靜かに一方に垂れた、かうして彼女の嘗めた地上のあらゆる邪惡も悲哀も終つた。

兄弟は、遠乗に出ようといらいらしながら、階下の一室で待つてゐた。餘が寢臺の傍にたつた一人でゐたとき彼等が乗馬鞭で長靴をたゝきながら、彼方此方とぶらぶら歩いてゐる音を聞いた。

「たうたう死んだかね。」餘がそこへ行つたときに、兄の方はかふあつた。

—三三七—

「はい、死にました。」餘はあつた。

「をひ弟、お祝ひをいふぞ。」ぐるりと後ろ向きになつて彼はかふあつた。

彼は以前に、餘に金をくれようとしたが、餘は受けとることを延ばして置いた。今度、彼は金貨を一包み出して餘にくれた。餘はそれを彼の手から受けとつたが、そのまゝ卓子の上のせて置いた。餘はこの問題を考へた、さうして何も受けまいと決心した。

「失禮ですが。」と餘はあつた。「事情が事情ですから、頂かないことにします。」

彼等はちらと目配せをした、だが餘が彼等に頭を下げると彼等も餘に下げた、かうして餘等は雙方とも何ともいはずに別れた……

疲れた、疲れた、疲れた、——不幸の爲めに疲れきつた。餘は、この瘦せ細つた手で何を書いたか、讀むことが出来ない。

翌日早朝、その一包みの金貨は、餘の名を表に書いた小さな箱に入れて餘の戸口に置いてあつた。最初から、餘は、如何にすべきかといふことを一心に考へてみた。餘はその日、内々に當路者に書翰を認めて、餘が迎へられた二件の傷病の性質と餘の赴いた場所とあらゆる出察事を仔細に報告することに決心した。餘は、宮廷の勢力が如何なるものであるか、又貴族には如何なる犯罪被免權があるかといふことを卸つてゐたので、この件も取り上げられないであらうといふことも覺悟してゐた、だが、餘は何より自分の心を軽くさせたかつた。餘はこの事件を極秘にして置いた、餘の妻にさへも打ち明けなかつた、それでこの事をも、書翰に書き込むことに決心した。餘は、ほんとにどれだけの危険があるかといふことは少しも心配しなかつた、たゞ、若し他の人々が餘の知つてゐることを知つた爲めにこの事件に捲き込まれたら、その人々にとつて危険になるかも知れないといふことだけを意識してゐた。

餘はその日甚だ多忙であつた、で、その夜書翰を書き終へることが出来なかつた。餘は翌朝、書き終へようと思つて何時もよりづゝと早く起きた。それは、その年の最後の日であつた。丁度書翰を書き終へて前に置いたばかりのころ、餘に面會したいといふ一人の貴婦人が待つてゐると取り次がれた……

餘は、自分で着手したこの仕事だんだん自分の力に及ばなくなるのを感じた。非常に寒くて、暗い、餘の感覺は痲痺してゐる、それに餘の上には恐ろしい憂鬱が蔽つてゐた。

その貴婦人はまだ若く、愛嬌もあり、美しくもあつた、だが長生きをせぬことは一見して分つた。彼女はひどく興

—三三八—

奮してゐた。彼女は、侯爵サン・テヴレモンドの妻であると名乗つた。餘はあの瀕死の少年があの兄の方に呼びかけた肩書を、飾帯の上に縫箔された姓名の頭文字と結びつけた、すると、餘が最近出會つたのがこの貴族であつたのだといふ結論に達するのは容易であつた。

餘の記憶はまだ慥かである、だが吾等の會話を書くことは出来ない。どうも、餘は前よりも一層嚴重に監視されてゐる形蹟がある、何時監視されてゐるかも知れない。彼女は、あの慘忍な物語の大體の窺實と、彼女の夫が、それに興つてゐること、餘が治療を乞はれたことを、推測したり、發見したりして知つてゐたのであつた。彼女はあの女が死んだことは知らなかつた。彼女はひどく煩悶しながらかふあつた、自分の希望は、内々であの女に女性としての同情を注ぐことであり、また、惱んでゐる數多の人々が、長い問厭はしく思つてゐる自分の家へ、神の怒りが下らないやうにしたいといふことであつた。

彼女は、種々な理由から、あの女の妹が生きてゐることを信じてゐた、さうしてその妹を扶助すること、それが彼女の最大の欲望であつた。餘は、なる程さういふ妹があつたといふことの外には何一つ彼女に告げることが出来なかつた、それ以上に、餘は何も知らなかつた。餘が他人の祕密を守るのを信じてゐる彼女が、餘の許にやつて來た動機は、餘が彼女にその妹の名と居所を告げることが出来はしないかといふ希望であつた。だが情ないことには、今に至るまで、餘はその何れをも知らないのである……

紙片も手許にはなくなつた。昨日は、警告された上、一枚取り上げられた。餘は今日中にこの記録を終らなければならない。

彼女は善良な、同情深い女性であつたが、その結婚生活は幸福ではなかつた。どうして幸福であり

得よう！例の弟は彼女を信ぜず、彼女を嫌った、そして彼のもつてゐる勢力は彼女の邪魔をするばかりであつた。彼女は弟を恐れ自分の夫を恐れた。餘が彼女の手をとつて戸口まで案内して行くと、馬車の中には一人の子供がゐた、二つか三つ位の可愛らしい男の子であつた。

「あれの爲めにですよ、ドクター。」と彼女は涙にむせびながらその子供を指さしてゐた。「あれの爲めに、わたしは及ばずながら、出来るだけの償ひをしようとして一生懸命になつてゐるのです。さもないと、あれが家督をとつてもこの家は繁榮しません。もしも他の罪の無い人がこれを償はないならいつかきつとそれが彼から奪はれるやうな氣がしてなりません。わたしは、自分のものといはれるものを残してありますから——やつと二つ三つの寶石ぐらゐの値打しかありませんけれど——萬一、その妹が見つかりますな

—三三九—

ら、亡き母親の同情と涙を添へて、この虐げられた一家にやつてくれることをこの兒の生涯の第一の義務にさせたいのです。」

彼女は子供に接吻した、そして彼を抱きしめてゐた。「これは皆可愛いお前の爲めなんだよ。シヤルルちゃん、お母さまのいふことをよくお守りだらうね。」男の子は元氣よく、「はい！」と答へた。餘は彼女の手に接吻した、彼女は子供を両手にかゝへて、抱きしめたまゝ行つてしまつた。餘は彼女を二度と見なかつた。

彼女は、餘が知つてゐると信じて夫の名をゐつたのだから、餘はそれを更に書翰に書き加へなかつた。餘はその書翰を封じたが、安心して他人の手に任せることが出来なかつたので、その日自分で差し出しに行つた。

その夜、即ちその年の最後の夜の九時ごろ、黒装束の人物が餘の門に案内を乞うて餘に面會することを求めた、さうして音のせぬやう、餘の召使の若者エルネスト・ドファルジュが引き返すのについて二階に上つた。召使が餘と妻がゐた部屋に入つて來ると「おゝわが妻、眞心より愛らしき者よ！美しく若かつた英國生れの餘の妻よ！——門のところにゐる筈の男が、無言のまゝ彼の背後に立つてゐるのが見えた。

サン・トノレ街から急病の迎へである、と彼はゐつた。さう手間は取らせない、馬車が待たしてあるから。

その馬車が餘をこゝへ連れて來た、それが餘をこの墓場に連れて來た。餘が家を出離れると、背後から黒い面紗がしつかり餘の口の上に縛られた、餘の腕は羽交絞めにされた。例の二人の兄弟は小暗い町角から道を横切つてやつて來た、さうしてたつた一つ手眞似をしたゞけで、餘をうむれだと教へた。侯爵はポケットから餘が認めた書翰を取り出して餘に見せ、それから、手に提げてゐた提燈の火で焼いた、灰は足でもみ消してしまつた。たゞの一言もいはれなかつた。餘はこゝに連れて來られた、餘は生ける墓場に連れて來られた。

若し神の思召で、この恐ろしい十年の間に、一度でも餘の最愛の妻の消息を——たゞ一言、生きてゐるか死んでしまつたかを教へるだけでもあゝから——餘に傳へてやらうといふ氣があつたのだと考へることも出来たであらう。だが、今では、赤い十字の記號が彼にとつて大敵であること、彼等は全く神の慈悲を受けてゐないことを信ずる。彼等及び彼等の子々孫々、その一家の最後の一人に至るまでを、餘、不幸なる囚人たるアレキサンドル・マネットは、この千七百六十七年の最後の夜、堪へ難い苦痛を忍んで、あら

ゆる物が審判されるべき日に告訴す

— 三三〇 —

る。餘は彼等を天と地に對して告訴する。』

この記録が讀み終つたときに、恐ろしい囁音が起つた。たゞ血の外には何物をも求めようとしな
い渴望と熱心の囁音である。この物語は當時の一番張る復讐熱を煽つた、さうして全國民中何人として
その前に頭を下げないものはなかつたらう。

かふいふ法廷とかふいふ傍聴者があるのに、何故ドフアルジュ夫婦が、あの時、行列をつくつて持
ち廻つた他のバスチユの分捕紀念物と一緒に公表せず、それを藏して時機

を待つてゐたものかといふことを證明する必要は殆んどない。この憎惡された家族の名がサン・タ
ントアヌでは長い前から呪詛されてゐて、あの致命的の記録に織り込まれてゐたことを説明する必要
もない。筈くも大地を踏んだことのある人間なら、その能力と勤勞をつくして、この日、この場所で、
かふいふ告訴に反對して彼を助けるやうなことがなかつたであらう。

それに、告訴者が有名な市民であり、死刑を宣告された人間の親愛な友人であり、彼の妻の父であ
つたといふことが、死刑を宣告された人間にとつてそれだけ更に惡い結果を生んだ。この頃の民衆の
狂氣ちみた理想の一つは、古代の疑はしひ公德をまで摸倣することであつた（羅馬のブルータスがわ
が子を死刑にした例の如き、國家のために善惡一切の私情を犠牲にすること）、好んで人民の祭壇の
上で犠牲になり、自身を捧げるといふことであつた。だから裁判長が、共和國の善良な醫師は、貴族
黨中の醜々紛々たる一家を根絶させることによつて、更に一層共和國に相應はしひ人物となるであら
ふし、また疑ひもなく彼の娘を寡婦にし、彼女の子を孤兒にすることに、神聖な光明と歡喜を感じる
であらふ云々と述べたときに（かふ述べなかつたなら彼自身の頭が肩の上で慄へたであらう）、そこ
には荒々しい昂奮と愛國的熱情がみなぎつた、が、人間らしい同情は一脈もなかつた。

「あいつは周圍のものにひどく幅が利くつてゐたぢやないか、あのドクタアは。」マダム・ドフ
アルジュが、ザ・ヴェンジャンスの方に微笑しながら、かふ囁いた。「今度そいつを救つて御覽、ド
クタア、救つて御覽よ！」

陪審員が一人投票する度に、大騒ぎであつた。一人、また一人、そして騒ぎに騒ぎが重なつて行く。
一人の反對者もなく投票した。心の髓からの、生れつきの貴族、共和黨の敵、邪惡な人民の壓制者。
彼をコンシェルジュリイに戻せ、二十四時間以内に死刑を與へよ！

十一、薄暮

かふして死刑と定つたこの無辜の人の可哀さうな妻は、

— 三三一 —

宣告を聞くと、まるで自分が致命的の打撃でも受けたものゝやうに倒れた。だが彼女は一言も出さ

なかつた。そして今不幸の頂上にゐる夫の元氣を落させぬやう、夫の不幸を増させぬやうにしなければならぬのは、全世界中でお前だけだと内心に強く語る聲があつたので、彼女は、これ程の打撃からさへ、素早く回復することが出来た。

裁判官たちは戸外でやる公けの示威行列に加はらなければならなかつたので、法廷はこの次に延ばされた。澤山の出口から全法廷の人間が吐き出されて行く急がしげな噪音と動搖はしばらく止まなかつた、ルウシイはその時、夫の方に両手を差しのべて立つてゐた、彼女の顔にはたゞ愛情と慰めだけが満ちてゐた。

「あの人に觸ることが出来たなら！ たつた一度でもあの人の體を抱くことが出来たなら！ おゝ、立派な市民方よ、それだけの同情は持つて下さいまし！」

残つてゐるのは、たつた一人の牢番の外に、昨夜ダーネイを逮捕した四人の中の二人とバーサッドだけである。群衆は通りを練つて行列する爲めに、もろ殆んど出拂つてゐた。バーサッドは他の連中にかふ言ひ出した、「ぢやあの女に抱かしてやらうよ、ほんの一寸だけ。」それは無言のまゝ承認された、彼等は彼女を連れて、廣間の席を越えて、一段高い庭に行つた、こゝで、ダーネイが囚人席に倚りかかりさへすれば、彼女を兩腕に抱くことが出来るのであつた。

「左様なら、最愛の私の魂よ。可愛いお前に、私の最後の祝福をあげる。つかれた者の休むところで、私たちはまた會はふ！」

夫は、彼女を胸にしつかりと抱きしめたときに、かふあつた。
「チャールズ、わたしは辛抱します。わたしは天から助けて頂いてゐるんです、わたしの爲めに苦しまないで下さい。さ、わたしたちの子供に別れの祝福をしてやつて下さい。」

「私の代りにお前があの子供を祝福してやつてくれ。私の代りに接吻してやつてくれ。別れを告げておいてくれ。」

「あなた、いけません！一寸ですから！」彼は妻から體を振りもぎつてゐた。「わたしたちはさう長くは別れ別れになつてゐますまい、わたし、今度の事がだんだんわたしの體の心を壊して行くやうに思ひますもの、でも、出来るだけは、自分の義務をやり遂げませう、わたしがあの兒のところになくなつたら、その時は神さまがあの子の爲めに友だちを見つけて下さるでせう、丁度わたしにして下さつたやうに。」

彼女の父は彼の後について來た、さうして二人に向つて跪かうとしたが、ダーネイは手をのべて彼を止め、かふ

— 三三三 —

叫んだ—

「いけません、いけません！何をなすつたと仰しやるんです、何をなすつたから、さう私どもに跪つくなどゝ仰しやるんです！あなたが昔どんなに苦しんだかといふことが、今始めて私どもに分りました。あなたが私の素性を疑つたとき、續いてそれを知つたときに、どんな目に會つたかといふことが、今始めて分りました。あなたがこの女の爲めばかりに、その當然な憎悪と戦つて、征服したのだといふことが、今始めて分りました。私どもは心から感謝します、私どもの愛と義務のありたけを擧げて感謝します。神様がお守り下さいませうやうに！」

彼女の父が與へた唯一つの答へは、頭の白髪に両手を突つ込んで、苦悶の絶叫と共に掻きむしることであつた。

「どうしてもかふなるより仕方がなかつたのです。」と囚人はあつた。「様々な出来事が、だんだん皆一緒になつてかふなつたのです。初めてあなたと私を近づきにし、この悪縁の種を播いた可哀さうな母の頼みを果すことは、いつも徒な努力に終りました。あんな邪惡から善い事の生れて来よう筈がありません、初めがもうそんなに不幸なですから、どうしたつて、これより幸福な結果がなかつたのでせう。どうぞ落ちついて下さい、そして私を赦して下さい。神様が祝福して下さいますやうに！」

彼が連れ去られたので、彼女は彼を離した、そしてお祈りをする時のやうに両手を合はしたまゝつと彼を見邊つて立つてゐた、彼女の顔には輝かしい色が浮んでゐた、それには慰めの微笑さへまじつてゐた。彼が囚人の出入口から出て行つてしまふと、彼女は振り返つて、愛情をこめて父の胸に頭をのせ、彼に何かあはふとしたが、そのまゝぱったり彼の足下に倒れてしまつた。

その途端、身動きもせずになつと立つてゐた小暗い隅から、シドニイ・カートン出て来て、彼女を抱き上げた。彼女の父とローリイとが彼女の傍にゐるだけであつた。彼女を抱へ起して彼女の頭を支へたとき、彼の腕は戦ゐた。しかも、彼の態度には、たゞ同情からだけでは無い或るものがあつた、——それには、誇りの閃きがまじつて見えた。

「馬車まで連れて行きませうか。ちつとも重いことはありません。」

彼は軽々と彼女を戸口まで抱へて行つて、馬車の中にそつと臥かした。彼女の父とその老友とがそれに乗つた、カートンは馭者の傍に席をしめた。

皆がマネット家の住居の門口についたときに——おゝこれこそ、數時間以前にカートンが低徊して彼女の優しい足が踏んだのはこの通りの粗末な鋪石のどれかしらと想像した場所ではないか、——彼はまた彼女を抱き上げて、

——三三三——

かゝへたま、階段を上つて彼等の部屋へ連れて行つた。部屋に入ると、彼は彼女を寢臺の上に下した。小さなルウシイとミス・プロスが彼女の上に身を投げかけて泣いた。

「ルウシイさんを醒まささん方があゝ。」彼は優しくミス・プロスにあつた。「ルウシイさんはかうしてゐる方があゝのだ。しばらくの間は、氣がつかないでゐる方があゝ、たゞ氣絶したただけだから。」

「おゝ、カートンさん、カートンさん、カートンの小父ちゃん！ 小さなルウシイは跳び起きて、かふ叫び、両手を強く彼の首に投げかけて、悲しさの餘りわつと泣き出した。「小父ちゃんが来て下さつたんだから、どうかしてお母ちゃんを助けて下さるでせうね、父ちゃんを救つて下さるでせうね！ おゝ、母ちゃんを御覽なさいよ、カートンの小父ちゃん！ 小父ちゃんも母ちゃんが好きでせう、その小父ちゃんも、母ちゃんがこんなになつてゐるのを黙つて見てゐられて？」

彼は子供の方に身を屈めて、彼女の花のやうな頬を自分の顔につけた。それからしづかに彼女を離して、まだ正氣に返らない母親を見た。

「行く前に、」と彼はいつて一寸躊躇した——「お母ちゃんに接吻してもあゝですか。」

彼が屈んで彼女の顔に自分の唇を觸れたときに、何かをさゝやいたことを、人々は後になつて思ひ出した。彼の一番近くにゐたこの子供は後になつて、自分には、彼が、『あなたの愛する人たちの生命を』どうかかするといふのを聞いたと彼等に語つた、そして彼女が美しい老婦人になつたときには孫達にもさう語つた。

次の間に行つてしまつてから、彼は、自分について来たローリイと彼女の父親の方を急に振り向い

て、父親にかぶあつた――

「ドクタア・マネット、あなたはほんの昨日までは、偉い勢力をもつてゐたんです、とにかくそれを試めしてみようぢやありませんか。あの裁判官達や、すべての勢力家達は皆あなたにはずゑん深い様子ですね、あなたの功勢を認めてゐるやうぢやありませんか。」

「チャールズに關係のある事でわしから隠されてゐたことは何もなかつたんぢや。わしにはあれを救ふことが出来るといふ強い確信があつたんぢや、そして又實際救つたのぢやが。」彼はひどく困惑したやうに、ゆつくりと答へた。

「もう一度、やつて御覽なさい。明日の午後までのあひだには、もういくらも時間がありません、ですがやつて御覽なさい。」

「やるつもりではある。わしは一寸だつて休まん。」

「そりや結構です。僕は前から、あなたのやうな偉大な精

―三三四―

力を持つた人は、きつと大きな事をなさるに違ひないと知つてゐたんです――でも、」彼は微笑と吐息を一緒に洩らして言ひ足した。「こんな大きな事をなさらうとは思はなかつたんです。ですが、やつて御覽なさい！人生なんて、拙く使ふと三文の價値もないんですが、こんな努力をすれば大したものです。これに價値がなかつたら、どんな仕事だつてやるだけの價値のあるものはありやしません。」

「わしは行かう、」とドクタア・マネットはゐつた。「検事と裁判長のところへ直ぐに行かう、それから他の人達のところにも行く、名前はゐはん方がゑがね。手紙も書かう、これから、だが待てよ！町ではお祭りだ、日暮までは誰のところへ行つたつて會へないぢやらう。」

「さうですね。その通りです！これはいくらよく行つたつて大した望みはないんですから、日暮まで延ばされても、それだけ餘計望みがなくなるつてことはないでせう。たゞ僕は、あなたがどの程度まで急がれるか、それが知りたいんです、尤も、僕は何も當てにしてるわけぢやないんですよ！ドクタア・マネット、いつごろその恐ろしい有力家達に會はれることになりませうね。」

「多分日暮後すぐには會へるだらう。今から一時間か二時間以内ぢや。」

「四時すぎには暗くなりますね。そこで、その一二時間といふのを少し延ばしませう。九時にローリーさんのところへ参りましたら、ローリーさんからあなた御自身からか、どんな事をなすつたかつてことを、聞くことが出来ませうか？」

「宜しい。」

「では一つ巧く成功して下さい！」

ローリーは戸口までカートンを送つて行つた、そして、立ち去らうとする彼の肩を抑へて、振り返らせた。

「もう駄目だと思ふよ。」ローリーは低い悲しげな聲でさゝやいた。

「僕だつてさうです。」

「假りにその勢力家の誰かゝ、いや彼等の皆が彼を助けてやる氣を持つてゐたにしてもだ、――これはゑゝ加減な假定だがね、何故つて、彼等からいへばあの人の生命だつて、誰の生命だつて、何でもないんだからね！――法廷であんな示威運動を見た後で、故障を押しつけて彼を助けるかどうかは疑問だよ。」

「僕もさう思ひます。僕はあの噪音のうちに、首斬斧が落ちて来る音を聞いたやうな氣がしたんです。」

ローリイは門柱に腕をもたせて、その上に顔を伏せた。

「力を落しちやいけません、」とカートンは極く靜かにゐつた、「悲しんでばかりみちや駄目です。僕はさう考へて、ド

―三三五―

クタア・マネットを勵まして來たんです、かうして置くと、きつといつかあの女にとつて慰めになるだらうと思つたからなんです。でない、あの女がひよつと、『夫の生命はつまらないことで捨てられたのだ、浪費されたのだ。』と考へるやうなことがあると、あの女を苦しめるにちがひありません。」

「さう、さうだ、さうだ。」とローリイは涙を拭つて答へた。「君のいふ通りだ。だがあの人は助かるまい、ほんとに何の望みもないんだから。」

「さうです。助かりすまひ、ほんとに何の望みもないんですから。」カートンは鸚鵡返しにかぶつた。そして落ちついた足取りで階段を下りて行つた。

十二、夜

シドニイ・カートンは往來に出たが、さて何處へ行つたものかと足をどろめた。「九時にテルソン銀行でだ。」と彼は考へ込んだやうな顔付であつた。「その間、おれの姿を見せてやる方がよからうかな。その方があゝだらう。あの連中に、おれのやうな人間も世間にはあるといふことを知らせてやるのが一番あゝ。これは安全な豫防策だ、必要な用意かも知れない。だが注意しなくちやいけない。注意、注意だ！よく灣へて見よう！」

何處かに行くつもりでその方に向けてかけた足を止めて、彼は、もう暗くなり始めた街を二度ぐるぐる廻つて、自分の今の考へやその結果をいろいろと辿つてみた。彼の最初の考へが出來た、「あの連中に、」と彼はたうたう決心してゐつた。「おれのやうな人間も世間にゐるといふことを知らせてやるのが一番あゝ。」そこで彼はサン・タントアヌの方へ向つた。

ドファルジュはこの日、自分のことを郊外サン・タントアヌの酒店の主人だと述べた。この市をよく知つてゐる人には、誰に訊かなくても彼の店を見つけることは難しくはなかつた。その所在をちやんと確かめてから、彼は一旦その特別に狭い町から出て來て、最寄の料理店で晚餐をとつたその後でぐつすりと寝込んだ。今まで多年の間に彼が強烈な飲物を口にしなかつたのは今度が初めてある。昨夜から、彼は少量の軽い薄い葡萄酒より外に手を觸れなかつた。現に昨夜の如き、ブランドイと縁を切つた人のやうに、ローリイの爐牀に溢してしまつた。

彼がさつぱりした氣持で眼をさまして、また通りに出て行つたのはもう七時過ぎであつた。サン・タントアヌを指して行く途中、鏡のかざつてある店窓に立ち止つて、緩んだ襟飾と上衣の襟と、亂れかゝつた髪などの亂雑な様子を少し整へた。それが終ると、彼は眞直ぐにドファルジュの店

―三三六―

まで行つて、その中へ入つた。

店には、例の隙なく動いてゐる指と喰れ聲をしたジャックの三の外には、客は一人もゐなかつた。この男が陪審席に坐つてゐるのをカートンは今日見た、彼は小さな帳場のところで立ち飲みをしなから、ドフアルジュ夫婦と何かしきりに話してゐた。ザ・ヴェンジャンスは、まるで酒場の中の者のやうにその會話を助けてゐた。

カートンが入つて、席に就き、(拙い佛蘭西語で)葡萄酒をほんの少し注文すると、マダム・ドフアルジュは無頓着に彼の方を見る、やがてきつと眼を鋭くする、ますます鋭くする、それから自分で彼の傍にやつて来て、御注文は何かと訊ねる。

彼は、自分が今いつたことを繰り返した。

「英吉利の方ですか。」マダム・ドフアルジュは、その黒い眉毛を胡散くささうにあげて訊ねた。

たつた一つの佛蘭西語の音さへ、意味をとるのにいかにも手間が取れるやうにして、ちつと彼女の顔を見つめてから、彼は、前と同じ強い外國託りでかふ答へた。「さうだよ。さうだよ。僕は英吉利人だよ！」

マダム・ドフアルジュは葡萄酒をとり帳場に歸つた。そして彼がジャコバン新聞を取り上げて、一心に讀んで、謎でも解くやうにその意味を解いてゐる様子をしてゐると、彼女がかふいふのが聞えた。「皆さん、エヴレモンドにそつくりね！」

ドフアルジュは彼のところへ葡萄酒を持つて来た、そして今晚はとひつた。

「何？」

「今晚は。」

「あ！今晚は、市民。」かういつて杯に注ぐ。「あゝゝ酒だ。一つ共和国の爲めに飲まう。」

ドフアルジュは帳場の方に引返してゐつた。「少し似てゐるね。」すると、妻君は鋭く言ひ返した。「非常によく似てゐるわ。」ジャックの三は仲裁するやうにかふ口を入れた。

「そりやきつとあなたの心があいつのことで一杯になつてゐるからなんだ、ね、お主婦さん。」ザ・ヴェンジャンスは、はつはと笑つて言ひ添へた。「さうだよ、きつと！それに明日もう一度あいつに會ふのを、ひどい御機嫌でお待ちかねなんだから！」

カートンは、指をのろのろと動かして、熱心な夢中なやうな顔をしながら、その新聞の行や字をたどつてゐる。彼等はびつたり寄り合つて帳場に腕をもたせながら、低い聲で話してゐる。しばらく沈黙がつゞく、その間彼等は、カートンの表面ばかりの熱心を、ジャコバン記者の名文から逸らさぬやうに試みながら、彼の方を見つめてゐる。やがて彼

— 三三七 —

等はまた會話を始めた。

「お主婦さんのいふのはほんとだぜ。」とジャックの三はゐつた。「なぜ止めるんだね。それや非常に効果があるんだ。なぜ止めるんだね。」

「さうさなあ、」とドフアルジュは考へ込んだ、「だが誰だつて何處かで止めなくちやならねえんだ。問題は矢張り、何處で止めるかつてことになるんだ。」

「根絶やしするまでやるのさ。」とマダムはゐつた。

「素敵だ！」とジャックの三は喰れ聲であつた。ザ・ヴェンジャンスも大賛成である。

「根絶やしはゝ主義だよ、お前。」ドフアルジュはかふあつたが、いさゝか當惑してゐる。「大體

それで文句はないさ。けれど、あのドクターはひどく苦しんで来たんだ。お前も今日見たらう、あの書付けが読み上げられてあるときのドクターの顔を見たかい。」

「見てあたとも！」マダムは軽蔑か、立腹でもしたやうに、かふ繰り返した。「さうさ。あの人の顔は見てみたよ。あの人の顔を見て、これは共和国のほんとの味方の顔ぢやないなと思つてみたんだよ。あの人は勝手に自分の顔をどうでもするがひさ！」

「それからお前、」とドファアルジュは哀願するやうにゐつた。「あの人の娘の苦しみを見たらう、あれが又、ドクターには恐ろしい苦しみにちげえねえんだ！」

「娘も見てみたよ！」とマダムは繰り返した。「さうさ、何度も何度も見たよ。今日も見てみた、いつかも見たことがあるよ。裁判所でも見たことがあるし、監獄の傍の通りでも見たことがある。ほんとにわたしに指を上げさせようもんなら——」彼女は指をあげて（聞いてあるカートンの眼はやはり新聞の上から離れない）、あは、首斬斧でも落ちるときにやうに、ばたんと音をさせて彼女の前の帳場臺に落したらしい。

「女市民、素敵、素敵！」今日の陪審員は嗔れ声をあげた。

「ほんとに天使だよ！」とザ・ヴェンジャンスはいつて、抱擁した。

「お前さんはね、」妻君は執拗く追究の手をゆるめずに、ドファアルジュに呼びかけた。「もしお前さんの勝手にどうでもなるものなら、——仕合せと、どうにもならないからあゝけれど、——今でもお前さんはあの男を助けてやりたいんだらう。」

「違ふ！」とドファアルジュは断言した。「このコップを持ち上げるくれえに簡筆に出来るとしても、そんなことは金輪際しねえ！だがわしは、これくれえにして置きてえんだ。まあ、そこで止めて置きな。」

「ぢやあゝかひ、ジャック。」とマダム・ドファアルジュはすつか

— 三三八 —

り腹を立てゝゐつた。「それからお前さんもあゝかひ、小さいヴェンジャンス、二人ともいゝかひ！よくお聞き！あの貴族一家の壓制者達が長いことやつて来た他のいろいろな罪で、わたしはづゝと前からあの一家をわたしの記録につけて、根絶やししようと定めておいたんだよ。夫に訊いて御覽。さあだかどうだか。」

「さうだよ。」とドファアルジュは訊かれないうちに答へた。「ね、あのバスチユの落ちた素晴しひとときさ、夫は今日の書付けを見つけて家へ持つてる、夜中ごろお客が皆歸つてからこゝをすつかり閉めきつて、わたしたちがそれを讀んだ。丁度この場所で、このランプの明りだよ。夫に訊いて御覽さうかどうか。」

「さうだよ。」とドファアルジュは同意した。

「その晩、この書付けを皆讀んでしまつて、洋燈の油がなくなつて、お日様が鎧戸の上や鐵の格子の間にさし込んで来たときに、わたしは夫にかふゐつた、ね、わたしはお前さんに是非話さなくちやならない祕密があるんだつて。夫に訊ねて御覽、さうかどうか。」

「さうだよ。」ドファアルジュは又同意した。

「わたしはその祕密を夫に話したさ。わたしは、この通りに、両手で胸をうつて、夫に話したよ。『ドファアルジュ、わたしは海邊の漁夫たちの間で育つた人間だけれど、そのバスチユから出た書付けにあるやうに、二人のエヴレモンド兄弟に、そんなひどい目に會わされた百姓の一家といふのは、

わたしの一家なのだよ。ドファルジュ、牀の上でひどい傷で死にかけてゐた若い男の姉さんつてのはわたしの姉さんだよ、その不仕合せな亭主つてのはわたしの姉さんの亭主だよ、その生れ損つた子供つてのはわたしの姉さん夫婦の子だよ、その弟つてのはわたしの兄さんだよ、その親父さんつてのはわたしのお父つあんだよ、その死んだ人たちは皆わたしの家の人たちだよ。だからこんな悪事の報いをするつて誓ひは、わたしが受けつぐことになるのだよ!』かふるつたのさ。夫に訊いて御覽、さうかどうか。」

「さうだよ。」とドファルジュはまた同意した。

「それを知つてゐる位なら、何處でやめるかつて相談は、風か火とでもをし。」とマダムはかふるひ返した。「わたしに相談したつて駄目さ。」

聽手は二人とも、彼女の忿怒の執拗なところを恐る恐る喜んでゐる——今一人の聽手は、彼女の顔を見ないでも、どんなに蒼白になつたかを感じてゐた——前の二人はひどくそれを賞讃した。微力な少数黨となつたドファルジュは、情深い侯爵夫人のこと思ひ出させるやうに、一言二言あつたが、たゞ自分の妻にその最後の答へを繰り返させるだけであつた。「ね、何處で止めるかつて相談は、風か火とで

—三三九—

もをし。わたしは厭だよ!」

客が入つて來たので、その一座は分れた。例の英國人の客は自分の飲んだものゝ代を拂つて、間違つたやうに釣錢を勘定した、それから、この土地が不案内なので、ナショナル・パレスの方へはどへ行けばあゝか教へてくれとあつた。マダム・ドファルジュは彼を戸口まで連れて行つて、道を教へるときにその腕を彼にかけた。その時、この英國人の客は、その手を捉へ、捻ぢ上げて、下へ、強く深く一撃を喰はしてやるのが、善いことになるかも知れないといふ考へが湧かないでもなかつた。

だが、彼はそのまま去つた、そして間もなく監獄の塀の影に見えなくなつた。約束の時間に、彼はその影から出て來て、またローリーの部屋に姿を見せた、老紳士はいかにも心配さうに彼方此方と歩きまはつてゐた。彼は、たつた今までルウシイのところに行つてゐたが、約束を守る爲めにほんの數分前に彼女と別れて來たとひつた。彼女の父は、四時ごろ銀行を去つてから、まだ見えない。ルウシイは、父の調停で、チャールズが救はれるかも知れないといふ微かな希望を持つてゐるが、それは極く微かなものである。父親が出かけてから五時間以上にもなる、一體何處にゐるのだらう?

ローリーは十時まで待つたが、ドクタア・マネットは歸つて來ない、彼はこれ以上ルウシイの傍を離れてゐることが出来なかつたので、彼女のところに歸つて行き、十二時にまた銀行へ戻つて來ることとに手筈を肌理た。その間、カートンは一人爐の傍でドクタアを待つ事にした。

彼は待つた、待つた、時計は十二時をうつた、だがドクタア・マネットは歸つて來なかつた。ローリーは戻つて來たが、歸つても父親の消息はなく、勿論先方の家でも何にも得るところはなかつた。彼は何處にゐるのだらうか。

彼等はこの問題をいろいろ語り合つた、彼の不在が思ひの外に長引くのは吉兆だと、弱いながらも一種の希望をきづいてゐる最中、彼が階段を上つて來る聲音が聞えた。だが彼が部屋に入つた途端、もう萬事休したことがはつきりと分つた。

彼が實際誰かのところへ行つたのか、或はこの間街から街へとさまやひ歩いてゐたのか、それは全く分らない。彼が二人を見つめて立つたとき、彼等は彼に何一つ問ひかけなかつた、何故なら彼の顔

を見てゐれば何もかも分つたからである。

「どうもあれが見つかからない。」とドクタアは突然あつた。

「あれがなくちや困るんだ。何處にあるかね。」

彼の頭も頸もむき出しである、そして頼りなげな眼をしてきよろきよろとそこら中を見廻し、かういひながら上衣を

―三四〇―

脱いで、牀の上に落した。

「腰掛は何處だね？わしはもう方々腰掛けをさがしてゐるんだが、見つからない。わしの仕事をどうしてしまつたんだらう？時間が無いのだから、どうしてもあの鞆だけは仕上げなくちや。」

二人は顔を見合せた、二人の心は身内で絶え入るばかりだつた。

「さ、さ！」と彼はすゝり泣くやうな哀れな口調であつた。「わしに仕事をさしてくれ。わしの仕事を返してくれ。」

何の返辭もないので、氣違ひになつた子供のやうに、彼は髪を掻きむしり、牀の上に地團駄ふんだ。「可哀さうな望みのない年寄りを苛めるもんどぢやない。」彼は恐ろしい聲で叫びながら、かふ二人に哀願した。「何でもあゝ、仕事を返してくれ！あの鞆が今晚中に出来なかつたら、わし達は一體どうなるんだ。」

おしまひだ！萬事休す！

彼に理窟をゐつたり、正氣に歸さうとしたりすることは明らかに絶望である、――と、まるで言ひ合したやうに、――一人はめいめいドクタアの肩に手をかけて、今すぐ仕事を持つて来てやるからと約束し、彼をすかして爰爐の前に坐らせた。彼は埋るやうに椅子にかけて、ぢつと燃えさしを見つめてゐたが、はらはらと涙を落した。丁度あの屋根裡部屋時代の以後に起つたことが皆一瞬の幻想か一場の夢でもボめるや、うに、ローリイは、ドクタアが昔ドファルジュが世話してゐたころと全く同じ姿になるのを見た。

この破滅の姿には二人とも大へん動かされた、恐ろしい氣持さへした、だが今はさういふ感情に負けてゐるべき時ではなかつた。今はその最後の希望なり頼りになるものを失つた彼の寄る邊ない娘が、二人の心にあまりに強く訴へた、またも、言ひ合したやうに、二人は、互ひに顔を見合せた、彼等の顔にはたゞ一つの意味より浮んでゐなかつた。カートンの方が先に口を切つた――

「最後の機會は去つたんですね、もつとも大したものぢやなかつたんです。さうです、あの女のところへ連れて行つて上げた方があゝでせう。ですが出掛ける前に、一寸でいゝですから、僕のいふことを、よく聞いてくださいませんか。僕がどうしてこんな條件を持ち出すのか、また無理に約束をさせるのかとは訊かないで下さい、僕には理由があるんです、――十分な理由があるんです。」

「わしは、疑はない、」とローリイは答へた。「いつて見たまへ。」

二人の間の椅子に坐つてゐる人物は、この間、單調に體を前後にゆすつて、唸つてゐた。二人は、夜中に病人の寢牀の傍に起きてゐるときのやうな調子で話をした。

―三四一―

カートンは屈んで上衣を拾ひ上げた、上衣は殆んど彼の脚にからまんばかりに投げ出されてゐた。

その途端に、ドクターが平生その日その日の仕事の簡條書を入れて持つて歩いてゐた小さなケースが、軽々と牀の上に轉がり落ちた。カートンはそれを取り上げた。中には折り疊んだ紙片が入つてゐた。「これは是非見なくちゃならない！」と彼はゐつた。ローリイは頷いて同意の意味を現はした。彼はそれを開けて、同時に、「おやつ、これは！」

「何だね、」ローリイは熱心にゐつた。

「一寸！それはいふべきときには言ひます。先づ、」といつて彼は自分の上衣に手を入れて、そこから今一枚の書付けを取り出した。「これは、僕がこの市から去ることを許すといふ通行免狀です。御覽なさい。そら、シドニイ・カートン、英國人とね。」

ローリイはそれを廣げたまゝ手に持つて、熱心な顔で見つめた。

「これを明日まで僕の代りにもつてゐて下さい。御存じのやうに。多分明日、僕はダーネイに會へるだらうと思ふんです、だからこれを監獄に持ち込まない方があゝと思ふんです。」

「何故かね。」

「それは分りません、僕は持ち込まない方があゝと思ふんです。それから、ドクター・マネットが持ち廻つてゐたこの書付けをとつて下さい。これは同じやうな通行免狀で、ドクターアと、ルウシイと、あの女の子とが、いつでも市門や國境を出ることを許すと書いてあるんです。ね？」

「どうだ！」

「きつと昨日、ドクターは萬一のことを考へて、最後の出来る限りの用心としてこれを貰つたんですね。日附が何時になつてゐるか。だが、それはどうでもあゝ、手間どつちやならん、これを、僕のとあなたのとを一緒にして、丁寧にしまつて置いて下さい。ところで、こゝですよ！これが一二時間前だつたら、ドクターがこんな書付けを持つてゐても、又はそれを貰ふことが出来ても、僕はちつとも不思議には思ひませんがね。これは取り消されるまでは、効果があります。だが今にも取り消されるかも知れません、いや大方さうなるでせう、僕はさう考へるわけがあるんです。」

「あの人は危険ぢやないだらうね。」

「ひどく危険なんです、マダム・ドフ、ルジュから告發される危険があるんです。僕はあの女自身の口でさういつたのを知つてゐるんです。今夜、ふとしたことで、あの女の言葉が耳に入れたんですが、僕にはあの人達の危険が迫つてゐるといふことが分つたんです。僕は手遅れになるやうなことはしません、で、その後であの諜者に會つて來たんで

—三四二—

す。あいつは僕に斷言してゐます。何でも監獄の堀の傍に住んでゐる木挽が、ドファルジュ夫婦の息のかゝつてゐる奴で、この木挽が、あの女——彼は決してルウシイの名を口にしなかつた——が囚人に手眞似や合圖をしてゐるのを見たつてことを、マダム・ドファルジュに告げ、それを更にマダムからあいつが聞いて知つてゐるんです。告發の口實が、獄内陰謀となるのはよくあることで、容易に豫言が出来ませう、さうなるとあの人の生命もあぶなくなる、——恐らくあの女の子の生命も——あの女の父の生命もあぶなくなるでせう、——何故つて二人ともその場所で、あの女と一緒にゐたのを見つられてゐますからね。いやさう怯えた顔をなさらないでもあゝんです。あなたの手であの女達を皆救へるでせう。」

「救ひたいのは山々だよ、カートン君！だがどうして出来る？」

「今お話しします。全くあなたを當てにすること、またあなたのやうな人でなくては當てにな

らないです。この新らしひ告發はきつと、明後日までは出されないと思ひます、多分明日から二三日は出されなくてせう、一週間ぐらゐは大丈夫かも知れません。あなたも知つてゐるやうに、斷頭臺で死んだ者の爲めに泣いたり、同情したりする者は、死罪になつてゐるんです。あの女もあの女の父もきつこの罪を犯すに定つてゐます、そこでこの女は（こいつの追究の執拗のところは言語道斷だが）、自分の訴件にその強味を添へて、自分の方の言分を二倍も確實にするまで待つて定つてゐますね、ゐゝですか。」

「あゝ、あまり身を入れて君のいふことに夢中になつてゐたんで、しばらくはこの人でさへ」と、ドクタアの椅子の背中にさはつて、「この人の苦悶でさへ眼に入らなかつたくらゐだ。」

「あなたは金をもつてゐるんだから、金で何とかして出来るだけ旅程を早めて、早く海岸まで行きつく工夫をつけることは出来まづね。英國へ歸る支度はもう何日か前からすつかり出来上つてゐます。明日早く馬を用意させて、午後の二時には、ちゃんと出立の出来るやうに支度させて下さい。」

「よろしい！」

彼の態度には極めて熱烈な、人を動かすものがあつたので、ローリイもその熱に感染して、青年のやうに敏捷になつた。

「あなたは氣高い方です。僕は先刻、あなたのやうな人でなくちや當てにならないとゐつたでせう。今晚、あなたから、あの女の危険なこと、それがあの女の子供にも父親にも關係があることを、知つてゐるだけ話して下さい。よく」

一三四三—

話して下さい、といふのは、あの女は喜んで自分の美しい頭を、夫の頭の傍に並べて死なうとするかも知れませんか。」彼はちよつと口籠つて、それから前の通りに續けていつた。「あの女に、子供と父の爲めだから、是非あなたや他の人と一緒に、僕のゐつた時間に巴里を去らなくちやならないつてことを、納得させて下さい。これがあの女の夫の最後の計らひだつてことを話して下さい。あの女が無埋に信じたり望んだりすることよりも、この方がづゝと頼りになるつてことを話して下さい。どうです、あの女の父は、こんな惨めなことになつても、やつぱりあの女のいふことを聞くでせうか。」

「そりや大丈夫だ。」

「僕もさう思つたんです。あせらずに着々と、今いつたやうな支度を、この中庭にちゃんと整へて、いざといへばあなたが馬車に乗つて席につくまでにして置いて下さい。僕があなたの方に行くと同時に、僕を乗せて、そのまゝ走らせて下さい。」

「ちや、どんなことがあつても君を待つてゐるんだね。」

「他の人のと一緒に僕の通行免狀をあなたに渡して置いたでせう、だから僕の席はどつて置けるでせう。たゞ僕の席が塞がるまで待つて下さればゐゝんです、塞がったらすぐ英吉利へ向けて立つて下さる。」

「うん、それちや」とローリイは、カートンの熱心な、だがあく迄しつかり落ちついた手を握りしめてゐつた。「何もかもたつた一人の老人を當てにするわけぢやなくて、わしの傍には熱心な若者が付き添つてくれる譯なんだね。」

「天のお蔭で、さう出来るんです！どうか、僕たちがお互ひに誓つたこの道順をどんなことがあつても狂はせないといふことを、神かけて約束して下さい。」

「どんなことがあつてもせんよ、カートン君。」

「明日、この言葉をよく覚えておて下さい、道順を變へたり、途中で手間どつたりして御覽なさい——どんな理由があつてもです——多分、誰の生命も救はれないでせう、どうしても澤山の人の生命が、犠牲にされなくちやなりません。」

「よく覚えておるよ。わしは自分の役目だけは忠實にやるつもりだ。」

「僕も僕の役目を忠實にやる積りです。では左様なら。」

彼は重々しい眞面目な微笑を浮べてかふあつた。そして老人の手を自分の脣に當てることまでしたが、そのまゝ別れて出て行かなかつた。彼は老人に手傳つて、あの消えかけてゐる燐燐の前で矢張り體をゆすつてゐる人を起して、外套を着せ、帽子をかぶせ、その人物が、まだ呻き呻き『あれがなくつちや』とゐひ續けてゐる腰掛と仕事、何處に

—三四四—

隠されてゐるか探してみようと、彼は誘ひ出してやつた。彼はその人の片側について歩いて、あの悶え切つてゐる可憐な女性の心——彼が自分のわびしい心の想ひを打ち明けたあの記憶すべき時に、ひどく幸福だつた——が恐ろしい一夜を待ち明かした家の中庭までその人を送つて行つた。彼は中庭に入つて、しばらく一人そこに残り、彼女の部屋の窓に映る火影を仰いでゐた。立ち去る前に、彼はそれに向つて、祝福の習葉を投げて、別れをつげた。

十三、五十二人

コンシェルジュリイの暗黒な監獄では、その日の死刑囚がその運命の來るのを待つてゐた。彼等の數は一年間の週の數と同じであつた。五十二人の人間がこの日の午後、巴里の市の生命の波の上をうねつて際涯ない永劫の大海に向ふことになつてゐた。彼等がその監房から出てしまはないうちに、もう新しい囚人が定められてゐた、彼等の血がまた昨日流された血に融け合はないうちに、もう明日彼等の血と一緒にゐるべき血が、用意されてゐた。

二十と二十と十二の人數が勘定されてゐた。あり餘る富をもつてしても、その生命を購ふことが出來なかつた七十になる租税取立人の頭から、いくら貧乏でも無名でも助かることが出來なかつた二十の縫裁女まで、この數の中に入った。人間の惡徳と怠慢のうちに生じた肉體的病患はあらゆる犠牲に乘ずるものである。言語に絶した苦痛、忍ぶことの出來ない壓政、哀れみのない無關心などから生れた、恐るべき道德的無秩序が、何の區別もなく平等に荒れまはつた。

獨房に監禁されてゐるチャールズ・ダーネイは、革命法廷からそこへ來て以來、最早や氣休めの希望などで無理に元氣をつけるやうなことはしなかつた。あのとき聞いたあの記録の一行々に、彼は自分の死刑の宣告を聞いたのである。どんな個人の勢力を持つてしても、恐らく自分を救ふことが出來まひといふこと、自分は實際數百萬の人間によつて宣告されたのだといふこと、數人位ゐの人間の力では自分をどうすることも出來ないといふことが、彼には十分分つたのである。

それでも、最愛の妻の顔を今更のやうに眼の前に見えては、流石の彼も、當然忍ばねばならないこととして、その心を鎮めることは容易に出來なかつた。生に封する彼の執着は強かつた、この執着を弛めることは、この上もなく困難なことであつた、だんだんと努力をかさね、漸くにしてこゝを少し弛めたかと思ふと、他のところが前より堅く締まる、一方を堪へようと全力をつくし、やつとそれを征服したかと思ふと、他の一方がまた締まる。その上、彼のあらゆる

—三四五—

考へは急速に動き、心臓は混沌たる熱した活動をつゞけて、諦めようとする氣持に反抗する。若し一寸でも彼が諦めたやうな氣持になると、今度は彼の死後も生きつゞけて行かなくてはならない妻と子供が、そんな氣持は我儘勝手だと抗議するやうに思はれた。

だが、こんなことも初めのうちだけであつた。しばらくたつと、彼が受けた運命には何の恥づべきものもなく、他の敷多の人々も不法な扱ひを受けて、同じ道を毎日しつかりした足取りで進んで行くのだといふ考へが、俄に湧き上つて彼を勵ました。そして次には、あの最愛なものたちが將來平和な氣持であられるかどうかは、彼が今平靜に辛抱をつゞけることによつて、殆んど定まるのだといふことを考へた。それで、だんだん彼の心はうまく落ちつくやうになり、そのときから、自分の思想をづゝと高めて、そこから慰安を引き出すことが出来るやうになつた。

死刑宣告の夜、まだ暗くなりきらぬうちに、彼は今までの道をこゝまで辿つてみた。筆紙の類や燈火を買ふことを許されたので、彼は監獄の洋燈が消される時間まで書きつゞけた。

彼はルウシイに長い手紙を書いて、彼女の父の入獄のことは、彼女自身から聞くまでは少しも知らなかつたこと、又自分の父と叔父があゝいふ悲劇の責任者だといふ點は、例の書類が讀み上げられるまでは、彼女と同様全く知らずにゐたことなどを報じた。彼がとうに彼女に説明したやうに、彼の據棄した家名を彼女に隠して置く事は、彼女の父が二人の許婚につけた唯一の條件——今はそれが十分わかるが——であり、二人の結婚の朝強要した唯一の約束であつた。更に彼女に對して、彼女の父の爲めに、彼がかふいふ書類の存在を全く忘れきつてゐたものか、それともあの昔の日曜日に、庭のなつかしい籐懸の下でバスチユ塔の物語をしたときにそれを思ひ出したものか（一時の間にせよ、永久にせよ）を、知りたいと思はないでくれるやうに、と願つた。よし彼がはつきりとそのことを覚えてゐたにしても、群民がそこで見つけた囚人達の遺物、全世界に喋々と述べ立てられたあの遺物の中にもその名が見えないのを見て、大方バスチユとともに滅んでしまつたものと想像してゐたことは、疑ふことが出来ない。それから——これは勿論いふまでもないことだがと書き加へて、——彼女が考へられるだけの優しい手段をつくして、お父さんは、自分を責めねばならぬやうなことは何もしてゐないこと、それどころか彼等一人の爲めに自身を忘れ、ひたすら盡してくれたといふことをお父さんによく思ひ込ませ、慰めて上げて欲しい、と書いた。自分の最後の感謝に満ちた愛情と祝福をいつまでも忘れずにゐてくれるやうに、それから悲しみに

—三四六—

打ちかつて、二人の間の可愛い子供に一身をさゝげてくれるやうにゐつた後で、彼は、二人が又天國で會ふまのゝやうに、お父さんを慰めてくれと頼んだ。妻の父にも、彼は同じ調子の手紙を書いた、だが、それには、自分は偏へに妻と子供をあなたの世話にお任せすると述べた。彼は、ドクタアの心がその方に傾いて行きはしないかと、かねて案じてゐた氣鬱症か危険な回想に落すまいとの老婆心から、特にこの事を強く述べた。

ローリイには、家族すべてを宜しくたのむ旨を認め、自分がこの世に残しておいた用事についても詳しく書いて置いた、感謝に満ちた友愛と、温かい愛慕の意を表した文字を澤山震ねたとの手紙を書き終ると、もうそれで用事は全部済んだのである、彼はカートンの事は考へなかつた。心が他の人々

のことで一杯になつてゐたので、一度も彼のこと思ひ出さなかつたのである。彼は、燈火が消されないうちに、これだけの手紙を書いてしまふことが出来た。それから、麥稈の寢牀に身を横たへると、もう自分はこの世界とは縁が切れたのだと思つた。

だが、彼の眠つてゐる間に、この世界が彼を呼び返し、輝かしい姿をして現はれた。彼は自由に幸福に、ソホウの馴染み深い家に歸つてゐて（もつとも、その家には眞物の家にあるやうなものは何一つなかつたけれども）、何ともいひやうのない解放された、軽くなつた心で、ルウシイと一緒にゐた。彼女は彼に、今までのことは皆夢で、あなたは何處へも行きはしなかつたのだと話してゐた。暫らく忘却がつゞくと、やがて彼はもう處刑されてしまひ、死んでちつと穏順しくなつて、彼女のところに歸つてゐた。それでも彼女には何の變りもなかつた。更に暫く忘却がつゞくと、今度は、彼は陰鬱な朝に目ざめてゐた。自分が何處にゐるのか、どんなことがあつたのか覺えがないが、やがて彼の心にはかふ閃めいた。『今日はおれの死刑の日だ！』

かふして、五十二の首が落ちるべき時が、數時間の後に迫つたが、いよいよ彼が落ちついて、従容たる勇敢な態度で、最期を迎へることが出来るやうにと望んでゐる時に、彼の目ざめかけた頭の中には新しい活動が始まつた、それはどうしても抑へ難いほどのものであつた。

彼はまだ一度も、自分の生命を取ることになつてゐるあの機械を見たことがなかつた。地面からどれだけ高いのか、階段がいくつあるのか、何處に立つのか、どんな風にして殺されるのか、殺す手は眞紅に染つてゐるかどうか、顔は何方に向けるだらうか、一番先きにやられるかそれとも一番後になるのか、かふいふいろいろな澤山の疑問が、何度と數へきれぬ程現はれて来て、彼の意志のいふことを少しもきかない、といつて、そんな疑問は別に恐怖と關聯

一三四七

してゐるわけではなかつた、彼は恐怖を少しも感じなかつた、むしろそれは、最後の時が来たときにどうするのか知りたいといふ不思議な執拗な希望から起つたことである。それはやがて来るべきあの迅速な最後の數瞬間に比べると恐ろしく不釣合な慾求であり、自分自身といふよりは、むしろ自分のうちにある或る精靈の驚異に近いものであつた。

彼があちらこちらと歩いてゐるうちに時間が経つて、時計は、彼の耳に二度と入ることのない時を打つた。彼にとつて、九時といふ時間が永久に消えた。十時が、十一時が、永久に消えた。そして十二時が今に消え去らうとしてゐる。今まで彼を困惑させてゐたあの異常な働きをもつてゐる考へと激しく闘つた後、彼はとにかくそれに打ち勝つた。彼は心に彼等の名をやさしく繰り返しながら、あちらこちらと歩き廻つた。一番苦しい心の闘ひは終へた。彼は、氣狂ぢみた空想に煩はされることなく自分や彼等の爲めに祈りつゝ、歩きまはることが出来た。

十二時が永久に消え失せた。彼は、最後の時間が三時だといふことを聞かされてゐた、それにもう死刑囚護送車が重さうにのろのろと街を軋つて行くのが聞えたので、三時よりいくらか前に呼び出されるにちがひないといふことが分つた。それで彼は、最後の時が二時であると心に決め、その間に元氣を養つて、自分の、死後には他の人たちに元氣をつけてやらうと決心した。

腕を胸に組み合はせて、規則正しい足取りであちらこちらと歩いてゐる彼は、かつてラ・フォルスで歩き廻つてゐた囚人の彼とは全く別の人間であつた。彼は一時を告げる音が永久に消え去るのを聞いたが、驚きはしなかつた。自分の落ちつきが恢復されたことを恭々しく天に謝しつゝ、彼は、『あと一時間よりないんだな。』と考へてゐた。そしてそのまゝ又足を返して歩き出した。

戸外の石の廊下に響音がした。彼は立ち止つた。錠前に鍵が入つて、まはされる、戸が開けられるか開けられないうちに、一人の男が低い聲で、しかも英語でかふあつた。「あの人はこゝでわしにあつたことは一度もありません、わしはわざとあの人に會はねえやうにしてあんで、へゐ。さ、一人で入つて下さい、わしはそこゐらで待つてゐます。急いで下せえよ！」

戸が素早く開いて又閉つた。すると、彼の前には、靜かに熱心に彼を見つめながら、シドニイ・カートンが向ひ合つて立つてゐた。彼の顔には微笑の光があり、脣には用心深く指があてられてゐた。

彼の顔色はひどく輝かしく、際立つてゐたので、暫らくは、囚人も、自分の想像から造つた幽霊ではないかと疑つ

―三四八―

た位であつた。だが彼は口をきいた、しかも、彼のほんとの聲であつた、彼は囚人の手をとつたが、それは實際彼の握手であつた。

「世界中の人間のうちで、まさかこの僕が君に會ひに来ようとは思ひがけなかつたらうね？」と彼はゐつた。

「いや、私は君だとは信ずることが出来なかつたよ。この今だつて、殆んど信じられない位ゐだ。だが君はまさか、――その心配が急に彼の心に湧いた――「囚人ぢやないんだらうね。」

「違ふよ。僕はふとした事で、こゝの番人の一人を手に入れたんだ。そのお蔭で、かうして君の前に立つてゐられるわけさ。僕はあの女のところからの使ひだ、――君の奥さんからだ、ダーネイ君。」

囚人は堅く手を握りしめた。

「あの女からの言傳を持つて來たんだ。」

「何だね。」

「君にとつてどれ程なつかしいか分らないあの聲――君はよく知つてゐるね――この上ない物哀れな口調で、君に、非常に眞面目な、大急ぎの、力をこめたお願ひをしてくれといはれて來たのだ。」

囚人は一寸顔をそむけた。

「何故僕がそれを持つて來たか、また、どういふことかなんてことを訊いてゐる暇はないんだ、僕の方でも話してゐる暇がない。君は黙つて聞き入れなければいけない。さあ、その君の穿いてゐる長靴をぬいで僕のを穿きたまへ。」

囚人なうしろに、監房の壁に一腳の椅子がよりかゝつてゐた。カートンは進んで、電光のやうな早さで囚人をそこに坐らせた、そしてもう自分の鞆を脱いで、彼の前にかぶさるやうに立つてゐた。

「さ、この鞆を穿きたまへ。手で持つて、元氣を出して穿きたまへ。早く、早く！」

「カートン君、こゝから逃げることは出来ない相談だよ、どうしたつてそんなことは出来ないんだから。君は私と一緒に死ぬのが落ちだらう。そりや氣狂沙汰だよ。」

「逃げるなんていつたらそれこそ氣狂沙汰さ、そんなことをいふもんか。その戸から出て行つてくれとでも僕がいつたら、その時こそ氣狂沙汰とでも何とでもいつて、此處を動かないでゐたまへ。その襟飾も、その上衣も僕のと代へたまへ。その間に、僕は君の頭からそのリボンをとつてあげるから、髪の毛を僕のやうにかふ散らしたまへ！」

驚くほどの早さで、また全く超人的と思はれるほどの意志と行爲の力で、カートンはかふいふ變化を囚人に押しつけてしまつた。囚人はまるで幼い子供のやうに彼の自由になつた。

一三四九一

「カートン君！君、カートン君！これは氣狂染みてゐるよ。そんなことは出来ないよ、どうしたつて出来ないよ。前にも度々やつたのがあるんだけど、皆失敗してゐるんだ。後生だから、君まで死んで私に餘計辛い目をさせないでくれたまへ。」

「ダーネイ君、僕はその戸から出て行けつていつたかね。そんな事をいつたら拒絶するがひよ。この卓子には筆も墨汁も紙もある。君は字を書くだけの落ちつきがあるかね。」

「君が入つて来たときには落ちついてゐたよ。」

「ぢやもう一度落ちつくんだ、そして僕のいふことを書きとつてくれ給へ。早く、君、早くするんだ！」

片手で何が何やら分らなくなつた頭を支へて、ダーネイは、卓子に向つた。カートンは右手を胸にあてたまよ、彼に寄り添つて立つてゐた。

「僕のいふ通りに書いてくれたまへ。」

「誰に宛てゝ書くんだね？」

「宛名はないんだ。」カートンはやはり右手を胸にあてたまよであつた。

「日附は？」

「いらなご。」

囚人は、一つ訊く度に顔をあげる。カートンは、右手を胸にあて、傍に立つて彼を見下してゐる。

『若しあなたが、』とカートンは口授しはじめた。『つよと昔、われ等の間に交はされた言葉は御記憶ならば、これを御覧になると直ちに諒解されるでせう。必らず御記憶の事と存じます。あなたの性質としてあの言葉をお忘れなさるやうなことはないでせう。』

彼はそろそろ胸から手を離れた、囚人が丁度この時、急いで口授を書きながらも不思議に感じてふと顔をあげると、彼の離れかけた手が止まつた。何か隠してゐるらしい。

『あの言葉をお忘れ』と書いたかね」とカートンは訊いた。

「書いたよ。君の手にもつてゐるのは武器かね。」

「ゐよや、僕は武器などもつて来てゐやしないよ。」

「何を手にもつてゐるんだね。」

「今に教へてあげるよ。續けて書いてくれたまへ。もう二三語なんだ。」そして彼はまた口授を始めた。『私は、あの言葉を実行すべき時が来たのを感謝してゐます。私のすることは、決して悔恨や悲嘆さるべきことではありません。』彼は、書き手の顔にちつと眼をそゝるで口授しながら、その手をそろそろと動かして、書き手の顔のそばへやつた。

ダーネイの手から卓子の上にペンが落ちた。彼はぼんやりとあたりを見廻してゐた。

「今のは、何かの蒸氣かね？」と彼は訊いた。

「蒸氣？」

一三五〇一

「何だか、私の前を通つたやうだが？」

「僕はちつとも氣がつかなかつたよ、こんなところに何もある筈がないぢやないか。筆を持つてお

終ひまで書いてしまつてくれたまへ。急ぎだ、急ぎだ！」

記憶が弱つたか、又は脳力が亂れたかのやうに、囚人は注意を集中しようと努めた。彼が曇つた眼をし、變つた呼吸使ひで、カートンを見上げると、カートンは——その手を胸にあて、——彼をぢつと見つめてゐた。

「急ぐんだ、急ぐんだ！」

囚人は再び紙の上に身を屈めた。

『もし今果さなかつたら』とゐひながら、カートンの手は又も用心深くそつと忍び出て来る。『私は、これ以上長引く機會を利用する折がなかつたでせう。もし今果さなかつたら、』彼の手は囚人の顔の傍まで行つた。『私はそれだけ重い責任を負ふに過ぎなかつたでせう。もし今果さなかつたら——』カートンがペンに眼をとめると、それが這ひずつて、意味の分らない記號のやうなものを書いてゐることが分つた。

カートンの手は二度と胸の方に動かなくなつた。囚人は怨めしさうな顔付で跳び起つた。だがカートンの手が彼の鼻のあたりをぴつたりと固く抑へた。カートンの左の手は彼の腰をしつかりと抱へた。數秒の間、彼は、自分の爲めに生命を捨てに來てくれた人と弱い抵抗をつづけたが、一分位で彼は知覺を失つて牀の上に倒れてしまつた。

その心と同様にこの目的に忠實な手をつかつて、カートンは、素早く囚人が脱いで片寄せて置いた衣物を着、髪に櫛をあて、囚人がつけてゐたリボンでそれを結へる。それから靜かに呼んだ。「入つてもゐよ、よーさ、入つてくれたまへ！」すると、例の諜者が現はれた。

「そらね？」知覺を失つて倒れてゐる姿の傍に片膝ついて、その懷中に口授を筆記した紙片を押し込んでゐたカートンは、顔を仰向けていつた。「これでも君は大きな危険を冒さなけりやならないと思ふかね？」

「カートンの旦那、」諜者は臆病さうに指の節をびしびしと鳴らしながら、答へた。「あなたが約束を守つて下さりせえすりや、これ位のの仕事の中へ入つたつて、大して危険でもありませんがね。」

「僕のことなら心配せんでゐよ。死ぬ迄きつと守るから。」

「そりや守つて頂かなければなりませんよ、カートンの旦那、五十二の數に不足を出さねえやうにしようつてんならね。あんたがその衣物を着て不足を隠してゐて下さりや、わつしも心配なんざしませんよ。」

「心配せんでゐよとも！僕はもうすぐこの世からお暇と來るんだから、君に都合の惡いことなどしやしなひし、も

—三五二—

一人の男は神様のお助けで、もうすぐこの土地から離れてしまふんだからね！さあ一寸手傳つて、

『僕』を馬車まで連れてつてくれ。」

「あんたを？」と諜者は、神經的にゐつた。

「何だね君、この人のことだよ、僕がこの人と變つたんぢやないか。君は僕を連れて來てくれた門から出るんだらう。」

「どうですとぞ。」

「ゐよかね、君が僕を連れて來たとき、僕はもう弱つて氣絶しさうだつたんだ、だから今君が連れて出るときには、もつと弱つてゐるつてわけなんだ。別れの會見に僕は堪へきれなかつた。こんなこ

とはこゝちや度々あつた、ありすぎる程あつたんだ。ね、君の助かる助からは君の考へ一つだ。早く！誰か手傳ひを呼びたまへ！」

「わつしを裡切らねえつてことを誓ひなされるかね。」謀者は一寸黙つてゐたが、ぶるぶる慄へながらゐつた。

「君、君！」とカートンは地團駄ふみながら、答へた。「きつとやり通すと、あんなに嚴重な誓ひをしたぢやないか、それなのに、今になつてこの大事な時間を徒にする者があるもんか。君はこの人を、君の知つてゐるあの家の中庭につれて行きたまへ、君はこの人々馬車の中に入れ、ローリーさんに見せて、この人には空氣より外の氣付薬をやるなど話してくれたまへ、そして昨夜の僕の言葉とローリーさんの約束を思ひ出すやうに、それから僕に構はず馬車を出すやうにいつてくれたまへ！」

謀者は引き退つた。カートンは卓子に向つて腰を下し、両手で額を支へた。謀者は間もなく二人の男を連れて引つ返して來た。

「どうしたんだね、こりや。」とその一人が、倒れてゐる姿をみてゐつた。「友達がサン・ギーヨッチイヌ聖女様（斷頭臺）の當り鬮を引いたのを見て、ひどく消魂ちまつたんかね。」

「この貴族めが空鬮を引きやがつたつて、愛國者にやこれ程悲しがる者はゐねえかも知れんぜ。」他の一人がひつた。

彼等は、この知覺を失つた男を抱き起して、戸口までもつて來た擔架に乗せて、それを運び去らうと體を屈めた。

「もう間がねえぞ、エヴレモンド。」と謀者は豫告するやうな聲であつた。

「承知だ。」とカートンはかゝ答へた。「私の友達に氣をつけてやつてくれたまへ、お願いだ、それから私を一人にして置いてくれたまへ。」

「ぢや皆、さあひゝか。」とバーサッドはあつた、「此奴をもちあげてあつちへ行くんだ！」

戸が閉つて、カートンは一人きりになつた。聽覺の能力を極度に緊張させて、何か嫌疑や警戒をするやうな聲はしないかと耳を澄ましてみたが何もない。鍵がかはれて、戸

一三五二一

ががちやんと鳴つた。聲音は遠い廊下の方に消えて行つたが、別に變つた叫び聲も、あわたゞしひ聲もしなかつた。暫らくしてから、大いに寛いで一呼吸つき、卓子に向つて腰を下し、またも耳を澄して聞いてみると、やがて時計が二時を打つた。

それから直ぐ、何やら噪音が聞え始めたが、彼は意味を察してゐたので、別に恐れるやうなこともなかつた。幾つかの戸が次々と開かれ、たうたう彼の部屋の戸も開かれた。一人の牢番人が、名簿を手にして、部屋の中をのぞきこんで、簡單にかゝあつた。「隨ゐて來るんだぞ、エヴレモンド！」それで彼は牢番人について、少し離れた大きな暗い部屋に入つた。丁度暗澹とした冬の日である、部屋の内の影と外の影との爲めに、手を縛られにそこに連れて來られる他の人々たちを、ほんの朦朧としか見分けることが出來ない。或る者は立ち、或る者は坐つてゐた。或る者は泣きつゞけ、ちつとも落ちつかずに歩き廻つてゐた。だが、かふいふ人達は少ない。大多數の人達は言葉少なに、靜かにして、ぢつと牀の上を見つめてゐる。

彼は薄暗い片隅の壁際に立つてゐた。その間にも五十二人の中の或る者が、彼の後から後からと連れられて來る、中に一人、通りすがりの男が、彼を見識つてゐて、彼を抱いた。彼は、發見されはしないかとひどく恐れて、思はず身慄ひをしたが、その男は向ふに行つてしまつた。それからほんの暫

らくして、一人の若い女が席から立つて（彼は前から彼女がそこに坐つてゐるのを見てゐた）、彼の傍にやつて来た。纖細の小娘らしい背恰好をした、色の青い痩せた可憐な顔に、大きな、ぱつちりと開いた忍従的な眼を持つた女である——この女が、彼の傍にやつて来て話しかけた——

「エヴレモンドさん、」と彼女は冷たい手で彼にさはつていつた。「わたし、ラ・フォルスで御一緒に居りました、あの貧乏な裁縫女ですの。」

彼は返辭のつもりで呟くやうにいつた。「さうでしたね。あなたの告訴されたのは何でしたつけ。」

「陰謀ですよ。もちろん正しいお天道様には、わたしが全く潔白なんだつてことが分つてゐますけれどね。一體そんなことがありさうに見えまして？わたしのやうな、貧乏な小さい弱い人間と一緒に、陰謀を企てようなんてことを考へる人があるでせうか。」

彼女がかふあひながら浮べた淋しい微笑が、ひどくカートンの心を動かした、彼の眼から涙が落ちた。

「わたし、死ぬことなんか恐課ありませんの。エヴレモンドさん、けれどもわたし、何もしなかつたことは慥かなんです。共和國はわたし達のやうな貧乏人にはひどく爲めに

—三五三—

なる事をするんださうですから、わたしが死んで共和國が儲かりますのなら、わたし喜んで死んで上げてゐるんですのよ。でも、果してどうなるんだか、わたしには分らないんですもの、エヴレモンドさん。こんな貧乏な小さな弱い人間がねえ！」

この世で、心を温め、和らげる最後のものとして、彼の心はこの可憐な少女によつて温められ和らげられた。

「わたし、あなたは放免されたと伺つてゐましたわ、エヴレモンドさん。どうぞそのやうにと祈つてゐましたのに！」

「ほんとだつたんです。ですがまた捉つて有罪にされてしまつたんです。」

「エヴレモンドさん、わたしあなたと一緒にの馬車で行けますやうなら、あの、あなたのお手を握らせて下さいませうね。わたし恐くはないんですけれど、小さくて弱いんです。」

さうさせて下されば、きつとわたし、もつと勇氣が出ると思ひますから。」

彼女の忍苦の眼が彼の顔を仰ぎ見たとき、急にその中に疑ひの色が浮んだかと思ふと、やがて驚嘆に變るのが見られた。彼は、仕事に痩せ、飢ゑに痩せた若い指を握つて、彼の脣にそつとあてた。

「あの人の身代りにおなりなんですか。」と彼女は囁いた。

「それからあの人の奥さんとあの人の子供の爲めにです。静かに！さうなんです。」

「まあ、あなた、どうかわたしにあなたのお手を取らして下さいまし。」

「静かに！あゝですとも、可哀さうな方、お終ひまで取つてゐらつしやぬ。」

この午すぎで間もない時刻、監獄に落ちかゝつてゐるのと同じ影が、市門とそのまはりの群集の上にも落ちかゝつてゐた。その時、巴里を離れやうとする一臺の馬車がやつて来て、吟味をうける。

「誰だ？馬車に乗つてゐるのは何者だ？免状を見せろ！」

免状は手渡しされ、讀み上げられる。「アレキサンドル・マネット。醫師。佛蘭西人。この人は何

方だね。」

「この人がさうである、と指された老人は、取り止めもないことを咳いてゐて、最早望みもない氣狂ひであつた。」

「見たところ、ドクターはどうも正氣ぢやないやうだね。革命熱が少し強すぎたのぢやないかね。」

全く強すぎたのだ。

「ほう！革命熱で困つてゐる人は大勢あるんだ。ルウシイ。ドクターの娘。佛蘭西人。何方がさうかね。」

これがさうである。

「成る程さうに違ひない。エヴレモンドの妻のルウシイぢ

—二五四—

やないかね。」

その通り。

「ほう！エヴレモンドは他に行くところが定つてゐるんだね。その子ルウシイ。英吉利人。これがさうだね。」

さうに違ひない。

「エヴレモンドの子、わしを接吻しろ。さう、さうだ。お前は立派な共和國民を接吻したんだぞ、お前の家族ぢや珍しいことだ、よく覚えてお出で！シドニイ・カートン。代言人。英吉利人。何方がさうだね。」

彼は馬車の隅に寝てゐる。彼もまた指さして教へられる。

「どうやら英吉利の代言人は氣絶してゐるやうだね。」

大方もつと新しい空氣のあるところに出たら癒るだらうと思はれる。彼は平生健康ではないのに、今共和國の咎めを受けてゐる友達に、悲しい別れを告げて來たばかりのところであると言ひ立てられる。

「それだけかね。そんなことは大したことぢやないぢやないか！共和國の咎めを受けて、小さな窓から世間を見てゐなぐちやならん人間は大勢あるんだ。ジャーヴィス・ローリイ。銀行家。英吉利人。これはどの人かね。」

「わしです。言ふまでもなく、最後に残つたはしです。」

今までの質問に皆答へたのは、ジャーヴィス・ローリイである。ジャーヴィス・ローリイは馬車を下り、その戸に手をかけて立ちながら、一群の役人達に答へてゐた。役人達は悠々と、馬車のまはりを歩いたり馭者臺に乗つたりして屋根の上に乗つてゐるほんの少しばかりの荷物に目をとめてゐる、そこらをうろふろしてゐる田舎者達は、馬車の戸口に近寄つて來て、物欲しさうに中をのぞきこむ、母親に抱かれてゐる小さな子供は、斷頭臺にかけられた貴族の妻に觸れてみられるやうにと、その短い手をのばさせてもらふ。

「さ、ジャーヴィス・ローリイ、君達の免狀の裡書きが出來た。」

「ぢや出かけてもあゝんですね？」

「あゝとも。さあ馭者、出かけたまへ。途中大事にな！」

「有難う。——さあこれで第一の危険も濟んだ！」

ジャーヴィス・ローリイは手を堅く握つて、天を仰いでかふ言ひ添へた。馬車の中には恐怖がある、悲泣がある、まだ近くを失つたまゝの旅行者の重い呼吸がある。

「何だかひどくのろのろしてゐるやうぢやありませんか。馭者たちに何とか頼んでもつと早くやつて貰ふ譯にはいかないんですか。」とルウシイは老人にしがみついて訊いた。

「そんなことをすれば逃亡者のやうに見えますよ、ルウシイさん。あまり急ぎ立てちやいけない、きつと變に思はれまづから。」

「後ろを見て下さい、後ろを見て下さい、追手が来やしないかひかどうか見て下さい！」

―三五五―

「誰も来やしませんよ、ルウシイさん。今のところ、追つかけて来るものはありませんよ。」

人家が二つ三つぐ塊つてゐる傍ら、人氣のない農場、壊れた建物、染物屋や製革場の類、廣々とした野原、葉一つない竝樹道を通り過ぎて行つた。馬車の下は固い凸凹の鋪石道、兩側は柔かい、深い、泥濘である。馬は時々、體をがたんとしんと揺する石を避けるつもりで、傍らの泥濘に入りこむ時々、轍の蹟や泥坑に落ち込んで動けなくなる。そんな時の苦しい焦躁といつたら、何ともいひやうがない。氣狂ひぢみた周章狼狽のあまり、馬車から飛び下りて駈け出してどこかに隠れてしまはうかとさへ思ふ―たゞちつと立ち止らないであらたら、どんな事をしてゐると思ふ。

廣の野原を越えると、また、壊れた建物、人氣のない農場、染物屋、製革場、その他、茅屋が二つ三つぐ、葉のない竝樹道となる。この馭者どもが欺して、別の道からまたもとへ連れもどしてゐるのではあるまいか。これは二度同じ處を通つてゐるのではなからうか。有難いことに、さうではなかつた。また村落がある。後ろを見よ、後ろを見よ、追手が来やしないかどうか！しつ、しつ！驛馬の間屋場である。

ゆつくりと四頭の、馬がはづされ、馬車も悠然として馬をはづされたまゝ、小さな往來に立つてゐる、どう見ても二度と動き出しさうな様子がない、やがて、またゆつくりと新しい馬が一頭づゝ引き出されて、新しい馭者達が、鞭の尾紐をしやぶつたり編んだりしながら、ついて来る。前の馭者達はこれも悠然と賃銀を勘定して、間違つて不足をぬひ立てるが、結局不承不精に自分の間違ひを認める。その間、彼等の張りきつた心臓は、かつて生れた一番早い馬の一番早い駈足を遙か凌ぐほどな早さで鼓動してゐる、

やがて新しい馬者がめいめいの鞍に就き、前の馬者が後になる。そして村を通り、丘にのぼり、丘を下り、低い水氣の多い土地にかゝつた。急に、馭者達は、いきり立つたやうな身振り手眞似で言葉をやへたかと思ふと、馬がぴたりと止められて、殆んど尻餅をつかんばかりになる。さては追手が来たのか！

「もし！馬車の中の方、一つ教へておくんませえ！」

「何だね。」ローリイは窓に顔を出して訊いた。

「今日は幾人だつて話してゐやしたつかけかね。」

「お前のいふことは分らんな。」

「先刻の間屋場でのことでさあ。今日は幾人斷頭臺に行きやしたかね。」

「五十二人だ。」

「そら見ろ！素敵な數だぜ！こゝにゐる仲間が四十二

―三五六―

人だなんてゐふんですが、その上十人も増えれや、増えても増え甲斐がありやすよ、斷頭臺め、うまくやつてゐらあ。わしは大好きさ、そらはい、はい。はい！―

夜が来て暗くなつた。ダーネイはだんだん動くやうになつた。正氣にかへり、はつきりと物をのみ始めた。彼は矢張りカートンと二人であるつもりである、カートンの名を呼んで、手にもつてゐるのは何だと訊いてゐる。おゝ慈悲深い紳よ、彼等を憐れみたまへ、彼等を助けたまへ！外を見よ、外を見よ、追手が來やしないか。

風が彼等の後から吹きまくつてゐる、雲は彼等を追つて飛んで來る、月は彼等の後から空に登る、荒涼たる夜が彼等を追ひかけてゐる、だがそれ以外に今までのところ、彼等を追ひかけてみるものはない。

十四、編物の終り

五十二人がその運命を待つてゐるのと丁度同じ頃、マダム・ドファルジュは、ザ・ヴェンジャンスと革命陪審員のジャックの三を對手に、暗澹とした様子で不氣味な相談を凝らしてゐる。今マダム・ドファルジュがこの二人の助手とゐるのは例の酒店ではない、前には道路人夫だつたあの木挽の小舎である。本人の木挽はこの相談には入らず、従者のやうに少し離れたところに立つてゐて、言へといはれなければ口をきかず、訊かれなければ意見も述べない。

「だがドファルジェ親方は、」とジャックの三はゐつた。「たしかに立派な共和市民ならうねえ？」

「佛蘭西中探したつて、あの人より立派な人はないよ。」

お喋りのヴェンジャンスは例の金切聲で言ひ張つた。

「静かにおしな、ヴェンジャンス。」とマダム・ドファルジュは軽く眉をひそめて、介添役の唇に自分の手をあて、ゐつた。

「わたしのいふことをお聞き。ね、お前さん、夫は立派な共和市民で、大膽な人間で、見事に共和國にふさはしひ人だから、信用もされてゐるんだよ。でも、夫にも弱いところがある、で、弱いときには、ドクタアに對してしたことを後悔するやうなこともあるのさ。」

「そいつはどうも残念だが。」ジャックの三は胡散くさうに頭をふつて、飢ゑた口へ残念さうに指を當て、嗚れ聲であつた。「全く立派な市民らしくもねえことだ。残念なことさね。」

「そこだよ」とマダムはゐつた。「わたしはそのドクタアなんか氣に留めてやしなひんだよ。わたしがあの人のことを少し位ゐ氣にしてゐたにしても、あの人の首がつながつてゐるかゝないか、などいふことは、どちらだつてゐんだよ。けれどエヴレモンドの一家は塵しにしてやらなくちやならないんだから、女房と子供にも、亭主や親父と同

―三五七―

じ目に會はしてやらなくちやね。」

「あの女の頭は、あれにかけるにはもつて來あだ。」とジャックの三は嗚れ聲であつた。「おれはいつかあすこで、青の眼玉の金髪の女を見たつけが、サムソンが抱き上げたときにや、惚れ惚れしちや

つたね。」彼は吸血鬼ではあるが、口先きでは美食主義者めいたことをいふ。マダム・ドファルジュは眼を伏せて暫らく考へてゐた。

「子供もさうだ。」とジャックの三は内心自分の言葉に酔つてゐるものゝやうにゐた。「金髪に青い眼をしてゐるんだ。それにおれ達は子供を見ることなんざ、減多にねえからな。可愛い観物だぜ！」

「つまり、」とマダム・ドファルジュは、しばらく瞑想してゐたが我に返つてゐた。「わたしはこの事については、夫を信用するわけにやいかない。どうも昨夜からこつち、わたしは細かい計畫を夫に洩らしちゃならないやうな氣がするだけぢやなく、その上まゝにしてゐたらあの人、あいつらを用ひさして、逃がしてしまひはしないかつて氣もするんだよ。」

「そんなことがあるもんかね。」とジャックの三はゐつた。

「一人だつて逃がしてはならない。今のところぢや、半分もいつてゐないと思つてゐるんだ。一日に百二十はどうしても欲しい。」

「つまり、」とマダム・ドファルジュはつゞけていつた。「夫には、あの一家を塵しにするまで追ひつめる理由がないんだし、私のはうちやまた、あのドクタアにどんなお慈悲をかけてやる理由もないんだからね。だから、わたしは自分だけで仕事するより仕方がないのさ。一寸、お前さんこゝへお出で。」

ひたすら彼女を尊敬し、服従してみる木挽は、赤帽子に手をやつたまゝ進み出た。

「ね、お前さん。」マダム・ドファルジュは厳しい口調でゐつた。「あの女が囚人たちにした合圖のことなんだが、今日すぐにもその證人になつておくれだらうね。」

「へゐ、へゐ、ようがすとも！」と木挽は叫ぶやうにゐつた。「毎日々々、どんな天氣でも、二時から四時まで、定つて合圖をしてゐたんですよ。子供を連れて來たり、一人で來たりしてね。わしは自分の知つてゐるだけは知つてゐるんだ。この眼でぢやんと見てゐるんですからね。」彼は實際には見たこともこともないのだが、いろいろな合圖の中の二三を眞似するやうな調子で、身振りを交せて話した。

「きつと何かの陰謀さ、」とジャックの三はゐつた。「定り切つてらあ！」

「陪審員は大丈夫かね。」とマダム・ドファルジュは陰鬱な笑を洩らしながら、彼の方に眼をむけて訊ねた。

—三五八—

「あの愛國心の強い陪審員のことなら、親船に乗つたつもりでゐなせえよ、こりや仲間の陪審員を代表しての返辭だがね。」

「そこで、先づどうしよう。」とマダム・ドファルジュは再び考へ込みながらゐつた。「もう一度！あのドクタアを夫に渡してもゐゝかね？わたしはどちらだつて何とも思ひやしなひがね、くれてやつていゝかね。」

「あいつも首敷の中に勘定した方がゐゝだらう。」とジャックの三は低い聲でゐつた。「實際まだ首敷が不足してゐるんだ、可哀さうだがね。」

「あの人は、わたしの見たときには、娘と一緒に合圖をしてゐたよ、」とマダム・ドファルジュはゐつた。「一方のことをいはずに娘の方だけいふつて譯に行きやしなひ、それかつて黙つてゐちや悪みから、この事件を皆こゝにゐるこの人に委せることにはいかないさ。證人としちやわたしだつてさ

う悪くないからね。」

ザ・ヴェンジャンスとジャックの三は、互ひに競争するやうに熱心な口調で、彼女が、一番立派な一番の証人だと言ひ立てた。すると彼女が『この人』と言つた男は、これに負けまいとして、彼女なら、神のやうな証人だと斷言した。

「あの人は何かの機會を捉へるに違ひない。」とマダム・ドファルジュはあつた。「さうだ、あの人のいふことをさせちやいけない！ 皆は三時には出かけるんだね、今日の一組がやられるのを見に行くんだね。——お前は？」

この間ひは木挽に向けられた。木挽はあわてゝ、行くと答へ、そしてこの機會をとらへてかふ言ひ添へた。自分は最も熱烈な共和主義者だから、若し何かの都合で、あの面白い國民理髮師（斷頭臺）の仕事を眺めながら午過ぎの衣服をやる楽しみをとられてしまふと、實際あらゆる共和主義者中でも一番惨めな氣持になるだらう、と。彼が餘りわざとらしく言ひふらすので、どうやら一寸した個人的な理由から、自分自身の安全が一日中心配になつて堪らないのではないかと、疑はれたかも知れない（きつと、さも輕蔑したやうに彼を見つめてゐたマダム・ドファルジュのあの黒い眼玉によつて、疑はれたであらふ。）

「わたしも——」とマダム・ドファルジュはあつた。「わたしもあすこに用があるから。それが濟んで、——さうね、今晚八時ごろ——サン・タントアヌのわたしの家に来ておくれ、それからあの連中をわたしの區に告發することによつようよ。」

木挽は、女市民の命令を聞くことは自分の誇りであり、大へん嬉しく思ふやうなことをあつた、その女市民がちつと彼を見つめてゐるので、彼は當惑して、まるで小さい犬がするやうに彼女の視線を避けて、商賣物の薪の中

—三五九—

に引つ込み、鋸の柄にその狼狽を、隠してしまつた。

マダム・ドファルジュは、陪審員のジャックとヴェンジャンスを戸口の方に手招きして、二人に、更に自分の意見を述べた——

「あの女は今頃は家におゐて、亭主の死刑を待つてゐるにちがひない。きつと泣いたり、悲しんだりするにちがひない。共和國の正義を呪ふやうな心持になつてゐるにちがひない。共和國の敵に精一杯同情してゐるにちがひない。だからわたしは、あの女のところに行つて來よう！」

「何んて偉え女だ、何んて素崎らしい女だ！」ジャックの三は有頂天になつて叫んだ。「おゝわたしの大事な姐御！」ザ・ヴェンジャンスはかふ叫んで、彼女に抱きついた。

「この編物道具をもつて行つてね。」マダム・ドファルジュは介添役の手にそれをつかませてあつた。「わたしがいつも坐る席を、ちやんと用意して置いておくれ。いつもの椅子をとつて置いてね。まつすぐにあちらへお出で、今口はきつといつともよりひどく混雜するに連ひないから。」

「首頭のお命令ならよつこんで聞きますよ。」とザ・ヴェンジャンスは活潑に返辭して、彼女の頬に接吻した。「遅くはならないだらうねえ？」

「始まる前には行くよ。」

「馬車の着く前にね。きつと來ておくんさいよ、ねえ。」彼女はもう往來へ出てゐたので、ザ・ヴェンジャンスはその後からかふ叫びかけた。「馬車の着く前にだよ！」

マダム・ドファルジュは一寸手をふつて、自分に聞えたといふこと、大丈夫遅くならないうちに

くからといふことを知らせた。そしてそのまゝ泥道を通り、監獄の角を曲つて見えなくなる。ザ・ウエンジャンスと陪審員とは彼女の立ち去る姿をちつと見邊つたまゝ、その美しい姿と才能にひどく感心してゐた。

このころ、時代の爲めに、恐ろしく醜くされた婦人は大勢あつた、だがそのうちの一人として、今大路を歩いて行くこの残忍な婦人よりも恐ろしくはなかつた。強い、恐怖を知らぬ性格があり、鋭敏な知覚と敏捷さがあり、異常な決意があり、一種の美しさ――その持主に剛毅と憎惡を興へるやうに見えるばかりか、他人にもかふいふ性質を本能的に深く思ひこませるやうに見える美しさがある。このやうな人間なら、騒然たる時代には持て囃さされるのが當然であらふ。だが子供のときから、或る階級の鬱積した迫害感と頑固な憎惡に込みきつてゐるので、機會は彼女を虎にしてしまつた。彼女には憐憫といふものは微塵もなかつた。たとひ曾つてその徳が彼女の心にあつたにしても、今はまをすつかり消えてしまつてゐるのであつた。

無辜の人間が父祖の罪惡の爲めに死ぬ、さういふことは

―三六〇―

彼女にとつては何でもないことであつた、彼女の眼中にはその人間はなくて、父祖のみがあつた。彼の妻が寡婦になり、彼の子が孤兒になる、さういふことは彼女にとつて何でもないことであつた、その位では十分の罰とはひへなかつた、何故なら、彼等は彼女の生來の敵であり、餌であり、そんな彼等には生きる権利がなかつたからである。彼女に哀願することは、自分自身に對してさへ當人がまるで憐憫といふものを持つてゐない位みだから、望みのないことであつた。若し彼女が今まで何度もした戦ひに敗れて、路上に倒されるやうなことがあつたとしても、彼女は決して自分を可哀さうだとは思はなかつたらう、又、明日にも斷頭臺の斧に行けといはれたにしても、彼女は、自分をそこへやつた人間と處を變へたいといふ猛烈な欲求の外には、別に悲しい氣持もなく行つたことであらふ。

マダム・ドアフアルジュはかふいふ心を、その粗末な衣物の下に持つてゐた。その衣物も無雑作に引つかけてはゐるが、一種異様な風體ながら、よく似合つてゐる、粗末な赤帽子の下からは眞黒な彼女の髪がふさふさと見えてゐる。懷中には、裝弾したピストルが祕められ、腰には鋭利な匕首が隠されてゐる。かふいふ扮装で、またかふいふ性格のもつ自信ありげな、また娘時代に脛も足も露はにして海邊の鳶色の砂の上を歩くのを仕事にしてゐた女性の、繙りのない自由さをみせる足取りで、マダム・ドアフアルジュは街々を進んで

行つた。

丁度この時、あの旅行馬車が、その荷物を積み終る爲めに待つてゐた。昨夜、この旅程の計畫を立てたとき、ミス・プロスを乗せて行くことが困難なので、ローリイは非常に困つた。何といつても、馬車に人や荷物をあまり載せすぎないやうにしたい。單にしたいといふ位でなく、馬車と乗客を檢閲するに要する時間を、極度に短縮させることが極めて大切な事であつた、何故なら彼等が虎口を脱するか脱しないかは、こゝかしこでほんの数秒間を節約することによつて定るかも知れないからである。やがてローリイは、いろいろ熱心に考へた後で、ミス・プロスとジェリイとはこの市を自由に去ることが出来るのだから、その頃あつた乗物のうち一番車體の輕いものに乗つて午後三時に出發しては

どうかと提案した。荷物といふ邪魔物がないのだから、直ぐに彼等の驛馬車に追ひつくことが出来よう、多分途中でそれを追ひ越して先になるから、前もつて次の馬を註文して置く、さうすると遲滞といふことを極度に恐れなければならない夜の大切な時間の間、大いにその進行を捗らせることが出来るよ、といふのであつた。

この計畫は、かふいふ危急の場合に眞實盡すことの出来

―三六二―

るといふ望みがあると考へて、ミス・プロスはそれを歓迎した。彼女と克蘭チャアとは馬車の出發するのを見邊つた、そしてソロモンが連れて來たのが誰かといふことを知り、宙吊にされるやうな苦しみのうちに十分ばかり過し、それから馬車に追ひつくといふ彼等の計畫を果さうと出發した。その間にも、マダム・ドファアルジュは通りから通りを縫ふやうに進みながら、彼等の相談してゐる家、でなかつたら空家になつてゐる筈の家にだんだんと近づいて來る。

「ねえ、克蘭チャアさん、」とミス・プロスはあつた。彼女はひどく昂奮してゐるので、殆んど口をきくことも、立つてゐることも、動くことも、そして生きてゐることさへも出来ない程である。「ねえ、克蘭チャアさん、わたしはこゝの中庭から出かけない方があゝやうに思ふけれど、どうだらうね。もう、今日は一臺、こゝから出たんだから、きつと疑はれるかも知れないよ。」

「そりや、お前さん、」と克蘭チャアは答へた、「お前さんのいふ通りだ。わつしは、よかれ悪かれ、何だつてお前さんに味方するつもりだよ。」

「わだしはもう大事な大事なあの人たちのことで、心配したり望みを持つたりして、氣狂ひのやうになつてゐるんでね。」とミス・プロスは亂暴に怒鳴るやうにゐつた。「もうどんな考へも浮ばないよ。お前さんには何か考へでもあるかね、克蘭チャアさん。」

「そりやね、將來のことなら、お前さん、」と克蘭チャアはあつた。「何かあゝ考へを思ひつけるか知れねえがね。今が今ちやこの石頭は駄目なんだ。そこでお前さん、お願ひがあるんだが聞いておくんせえ。わつしは二つ誓へをたてたからその證人になつてもれえてえんだ、こんな大事の場合にそれを立てゝえのがわつしの望みなんでね。」

「おや、まあ！」とミス・プロスはまた怒鳴るやうに叫んだ。「ちや今すぐ言つておしまひな、そしてすつぱりと男らしく片づけておしまひよ。」

「第一は、」と克蘭チャアはすつか慄へて、灰色の嚴肅な顔色であつた。「あの可哀さうな人たちが見事に今度の災難をのがれたら、わつしは二度とあれ（屍體を掘つて賣る商賣）はしねえつもりだ、決して二度としねえ！」

「克蘭チャアさん、」とミス・プロスは答へた。「たしかにお前さんは二度としなくなるだらうよ、それが何であつてもね、そのあれが何かつてことをもつと詳しく話さなくちやならないなんてことは考へてもらふまいよ、ねえ。」

「さうだよ、」と彼は答へた。「お前さんにや別にゐはねえことにするよ。第二に、あの可哀さうな人たちが見事に今度の災難をのがれたら、もう二度とわつしは家の嬢のお祈りにかまはねえことにする、決して二度とはしねえ！」

―三六二―

「そりやどんな家事向きの用事かは知らないけれど。」とミス・プロスは、眼を拭いて落ちつかうと努めながらゐった。「たしかに、上さんがすっかり自分の考へでやるのに、委せておく方が一番ゑえよ。あの氣の毒な人達はどうしてゐるだらう！」

「そればかりぢやねえ、わつしはかふまでも言ふ積りだ。」と克蘭チャアはまるで説教壇からでも辯じ立てるやうに、滔々と述べ立てさうな様子であつた。「お前さん、一つわつしの言ふことを書きつけて、お前さんの手から家の嬢にやつてもらえてえもんだがね——かふだよ、お祈りについちやわつしの考へがすっかり變つたことが一つ、わつしはたゞ、家の嬢が今といふ今、お祈りをやつてゐてくれ、ばいひにと腹の底から思つてゐるつてことが一つ。」

「それ、それ！わたしもさうしてゐてくれたらと思ふよ、お前さん。」氣が氣でない様子で、ミス・プロスはかふ叫んだ。「そして上さんの願ひ通りになつたらひ——にと思ふよ。」

「それからよ。」克蘭チャアは益々嚴肅の度を加へ、更にゆつくりと、この上また辯じつゞけさうな様子であつた。「あのお祈りを止めさせてまで、わつしが今までに言つたり仕たりしたことが、今こんななまでに案じてゐるあの氣の毒な人達に報いて来るやうなことがねえやうに！あの人達がこの恐ろしい危険に陥らねえやうに皆がお祈りをするのを、利益があるものなら、止めさせたりなんぞしやしねえやうに！そんな馬鹿なこと、ねえ、お前さん！わつしはゑふよ、そんな馬鹿なことア——ねえやうにつて——長々ともつとゑ結論を見つけようと思つたが、徒に終つたので、これが克蘭チャアの結論になつた。」

この間にもマダム・ドファルジュは、街路を急ぎつゝだんだん近くやつて来る。

「わたしたちが故國に歸つたときにはね、」とミス・プロスはゐつた。「お前さんがあんなに熱心に言つたことを、わたしが覚えてゐられて、分つただけのことはきつと上さんに話してあげるから、當てにしてお出でよ、どんなことがあつたつて、屹度この恐ろしい時にお前さんがすっかり眞人間になつたつてことの證人になつてあげるからね。さあ、今度は一つ考へを出さうぢやないの！克蘭チャアさんは偉いもんさ。一つ考へてみようよ！」

その間にも、マダム・ドファルジュは路を急ぎつゝ、だんだん近くやつて来る。

「お前さんが先に行つてね、」とミス・プロスはゐつた。「馬車や馬をこゝまで來させないで、何處かでわたしを待つてゐてくれることにしたら、——それが一番よくはないだらうかね。」

克蘭チャアも、それが一番よからうと考へた。

—二六三—

「ぢや何處で待つてゐてくれるの。」と彼女は訊いた。

克蘭チャアはひどく途方に暮れてゐるので、テムブル・バーの他の土地のことは何も考へつかない。そのテムブル・バーはこゝから何百哩も離れてゐる！しかもマダム・ドファルジュはほんとに眞近まで迫つて來てゐるのだ。

「お寺（ノートル・ダム寺院）の門の傍は、」とミス・プロスがひつた。「あの二つの塔の間にある大きな門の近くでわたしを乗せてもらふことにしたら、あまり廻道になりすぎるかしら。」

「ゑゝとも、お前さん。」と克蘭チャアはゐつた。

「それぢや男らしく元氣を出してね、」とミス・プロスがひつた。「馬車の問屋場へ行つて、さう變へて來ておくれよ。」

「どうも心配だよ。」と克蘭チャアは躊躇して頭をふりながらゐつた。「お前さんを一人きり置い

ていくのはね。どんなことが持ち上がるか分らねえんだから。」

「そりや分らないさ。」とミス・プロスは答へた。「でもわたしのことなら心配しないでおくれ。三時頃、まあ出来るだけそのころに、わたしをお寺のとこで馬車に乗せておくれ、きつとその方が二人ともこゝから一緒に出掛けるよりもいゝと思ふよ。たしかにゝに定つてゐる。さあ！どうしたの、克蘭チヤアさん！わたしのことなんか考へずに、わたしたち二人を當てにしてゐるあの人たちのことを考へて御覽よ！」

この激励の言葉と、ミス・プロスが彼の手を握つて如何にも苦しさに頼むその両手の力が、克蘭チヤアに決心させた。彼は力をつけるやうに一つ二つ點頭くとも、彼女の提案を容れ、彼女一人残してすぐさま豫定の手順を變へに出かけた。

兎にかく嫌疑を避ける手段を工夫して、それをもう實行してゐるといふことは、ミス・プロスにとつて大きな氣休めであつた。また、きちんと落ちついた態度をして、往來で特別に人の眼を惹くやうなことをしてはならないといふことが、更に彼女の心配を紛らすものであつた。彼女は自分の時計を見ると、もう二時を二十分過ぎてゐる。ぐづぐづしてはゐられない、すぐに支度にかゝらなければならぬ。ひどく狼狽したあまり、人氣のない部屋の淋しさと、その部屋の開いた戸といふ戸の蔭からのぞいてゐるやうに思はれる人間の顔を恐れつゝ、ミス・プロスは、洗面器に冷たい水を汲んで、赤く腫れ上つた眼を洗ひ始めた。焼けつくやうな心配に絶えず憑かれてゐるので、彼女はつゞけて一分間とは水の滴で眼をふさいでゐることが出来ず、絶えず手をとどめては、誰も見張つてゐはしないかと、四邊を見回すのであつた。何度目か手をとどめたときに、彼女は竦んで、あつと叫んだ、彼女の眼には部屋の真中に立つてゐる人の姿が映つたからである。

―三六四―

洗面器は牀に落ちて、水はマダム・ドファルジュの足下に流れて行つた。不思議な嶮しき道を通り、夥しい血潮の汚れを踏んで、彼女の足はいよいよこの水に出會ふところまで來たのである。

マダム・ドファルジュは冷然と彼女を見てゐた。「エヴレモンドの家内は何處にゐるんだね。」

ミス・プロスの心には、戸が皆開け放しになつてゐるので、逃亡を覺られはしないかといふことが閃めいた。彼女の第一にすべきことは、それを閉めることである。この部屋には戸が四つある、彼女はそれを皆閉めてしまつた。彼女はそれから、ルウシイが居間にしてゐた部屋の前に立ちふさがつた。マダム・ドファルジュの黒味勝ちの眼は、彼女が手早く戸を閉めて廻る間その仕草を見守つてゐたが、それが終ると彼女の上になつと据ゑられた。ミス・プロスには何一つ美しいところはない、年はとつてもその野性ぢみた風采はおとなしくならないし、その無愛嬌さは和らげられもしない、そして彼女はまた彼女で利かぬ氣の女であつた。彼女は、その眼で一インチづゝマダム・ドファルジュを測つてゐた。

「お前さんは、見たところ、ルシファ（魔王の名）の主婦さんにだつてなれさうだね。」とミス・プロスは吐く息とともにゐつた。「でも、わたしはお前さんなんぞに負けてゐやしないよ。わたしだつて英吉利女だもの。」

マダム・ドファルジュはさも輕蔑したやうに彼女を見てゐたが、矢張り、自分たち二人は絶體絶命の場合になつたのだといふミス・プロスの感じと同じことを幾分か感じてゐた。マダム・ドファルジュは、ローリイが過去數年の間この同じ姿をした腕節の強い女を見たと同様に、自分の前に、緊張した、頑丈な、屈強な女を見た。マダム・ドファルジュはミス・プロスが、この家族の獻身的な味方だ

といふことを、ミス・プロスの方では、マダム・ドファルジュがこの家族を毒する敵だといふことを十分よく知つてゐる。

「あすこに行く途中でね。」とマダム・ドファルジュは刑場の方に手を軽く動かしながらあつた。「椅子と編物の用意をしてもらつてあるんだけど、丁度通りだからあの女に挨拶しに寄つてみたんだよ。あの女に會はしてもらはふぢやないか。」

「わたしは、お前さんの腹の中にも毒があるつてことは知つてるんだよ。」と、ミス・プロスはあつた。「よく覚えておいで。わたしはわたしの腹で對手になつてやるから。」

めいめい自分の國の言葉でいつてゐるので、どちらも對手の言葉が分らないが、雙方ともひどく油断なく睨み合つて、その分らない言葉の意味を、顔色や物腰から推察しようと一生懸命になつてゐた。

— 三六五 —

「こんな時にあの女がわたしから隠れてゐるなんてことは、あまり爲めにやなるまいよ。」とマダム・ドファルジュはあつた。「立派な愛國者達は、それがどんな意味かつてことを覺るだらうからね、あの女に會はせてもらはふ。わたしが會ひたひつてことを、あの女にいつておいで、ね。」

「そのお前さんの眼玉が寢臺の螺旋釘で、わたしが英吉利出來の四本脚の寢臺だとしても、決してお前さんの自由にされやしないよ。さうさ、意地惡の外國女め。わたしがお前の對手になつてやるよ。」とミス・プロスは言ひ返した。

マダム・ドファルジュには、こんな癖のある文句の細かいところまでは分りさうにもないが、自分が侮辱されてゐるのだといふ位ゐのことは分る。

「わからずやの豚！」マダム・ドファルジュは眉をしかめながらあつた。「お前の返事なんか聞きやしないよ。あの女に會はうつていふのだよ。わたしが會ひたひといつてると、あの女に話しておいで。それが厭なら、そこをお退き。わたしが自分で行くから！」そして自分の氣持を分らせようとして、右手を腹立たしさうに振りまはした。

「お前さんの國の馬鹿々々しひ言葉が分りたひなんてことは、わたしは考へたこともなかつたがね。だけど、お前さんがほんとの事を嗅ぎつけてゐるか、それとも少しでもそれを嗅ぎつけてゐるかどうだか、それが分りさへすれや、今着てゐるものゝ外はわたしの持つてゐるものを皆やつてもあゝよ。」とミス・プロスはあつた。

二人の何方も、ほんの一瞬間も眼を通らさない。マダム・ドファルジュは、ミス・プロスが彼女に氣がついたときに立つてゐた場所から退かうとしない、いやそれどころか、彼女は今一步すゝめたのである。

「わたしは大英國のお方だよ。」とミス・プロスはあつた。「わたしは今死物狂ひなんだよ。自分のことなんか、英吉利の二ペンズ銅貨位ゐにも思つてやしなひ。でも、こゝでお前さんを長く喰ひ止めて置けば置くだけ、わたしの大事な奥さまの助かる望みが大きくなるつてことは、よく知つてるんだ。もし指一本でもわたしに觸つて御覽、お前さんの頭の黒い髪の毛を、一握りだつて残しちや置かないから！」

ミス・プロスは早口に一句いふ度に、頭を振り立て、眼を閉めかせる、その早口の文句を、まる一息でいふ。ところがこのミス・プロスは、今まで一度も他人を打つたことのない女性である。

だが、彼女の勇氣はひどく情熱的であるだけに、その眼に堰きとめかねて涙が浮んで來た。かふいふ勇氣をマダム・ドファルジュは殆んど理解してゐないので、それを弱さのせめだと取りちがへた。

「ほ、ほ！」と彼女は笑った。「可哀さうな弱蟲め！お前など何になる！わたしは自分で

―三六六―

ドクターにゐふよ。」それから彼女は聲を高めて呼んだ。「ドクター！エヴレモンドの主婦さん！エヴレモンドの子供衆！このひどい馬鹿女でなければ誰でもあゝから、マダム・ドファアルジュさまに答へををし！」

呼んでも返辭がなかつたからか、ミス・プロスの顔色に隠しきれなかつた何かゞ現はれたのか、またこの二つとは違つた疑ひが念に起つたのか、マダム・ドファアルジュは、彼等は逃げたのだと囁かれたやうな氣がした。彼女は素早く戸を三つ開けて、のぞき込んだ。

「この三つの部屋はみんな滅茶々に散らかつてゐる。急いで荷造りをしたものと見える、牀の上にはこまこました品物がいろいろ轉がつてゐる。お前の後ろのその部屋には誰もゐないんだね！どれお見せ。」

「駄目だよ！」とミス・プロスはあつた。彼女にマダムの要求がはつきり分つたと同じやうに、マダムにもはつきりミス・プロスの返辭が分つた。

「もしあれ等がその部屋にゐなければ、逃げたのだ。その時は追手を向けて連れ戻して見せるから。」とマダム・ドファアルジュは獨言をあつた。

「あの部屋は皆があるかゝないか、それが分らないうちは、どうしてあゝか間違つくだらう。」とミス・プロスも獨言をいふ。「わたしがお前さんに知らせてやらないうちは、お前さんにや分らないんだ。なに、それが分らうと分るまいと、お前さんを引き止めてゐられる間は、こゝから動かしはしないよ。」

「わたしだつて初めから外で働いてゐる人間だよ、どんなものだつて、わたしの邪魔をしたことはないんだ。お前を引きささいでも、その戸から退かしてみせるから。」とマダム・ドファアルジュはあつた。

「わたし達はね、人氣のない中庭の、高い家の頂邊に二人きりでゐるんだよ、大きな聲を出したつて外に聞えさうにはないし、お前さんをこゝに止めて置く力が欲しいだけさ、お前さんがこゝにゐる一分間は、わたしの大事な奥さまにや十萬ギニにも當るんだから。」とミス・プロスはあつた。

マダム・ドファアルジュは戸の方へ進んで來た。ミス・プロスはその場の機轉で、彼女の腰に両手をまきつけて、しつかりと抱へた。マダム・ドファアルジュが腕かふと打たうと、徒だつた、何時でも憎しみよりは幾倍もつよい愛情の猛烈な執着力を持つてゐるミス・プロスは、彼女をしつかりと抱きしめて、腕き合ふやうなときには、牀から抱へ上げさへした。マダム・ドファアルジュは両手で彼女の顔を打つたり引つ掻いたりする、だが、ミス・プロスは頭をさげて、彼女の腰を抱へ、まるで溺れかけてゐる女の力よりも強い力で彼女にしがみついてゐた。

―三六七―

やがてマダム・ドファアルジュは打つ手をやめて、しつかり抱へられてゐる腰のあたりをさぐり出した。「お氣の毒だが、わたしの腕の下だよ」とミス・プロスは息づまるやうな聲であつた。「お前さんに抜けやしないよ。有難いことには、わたしの方がお前さんより強いらしいね。二人のうち、どちらかゞ氣絶するか死ぬまではかふやつてお前さんを抱へてゐるよ！」

マダム・ドファルジュの手は懷中をさぐり出した。ミス・プロスは顔を上げて、何かといふことが分つたので、それを擲る。と、にはかに一道の閃光が迸つて、ぐわんといふ音、氣がつぐとたゞ一人が立つてゐる――煙で何も見えない。

すべてが、ほんの一瞬の出來事である。煙が、後に恐ろしい靜寂を残して、空の方に消えてなくなる、それが、今は屍骸となつて牀の上のころがつてゐるあのいきり立つた女の魂のやうに見えた。初めは自分の立場に對する驚愕と恐れから、ミス・プロスは、出来るだけ遠くはなれて屍骸の傍を通りぬけ、階段を駆け下りて、最早や甲斐もなくなった助けを呼ぼうとした。が、仕合せと、彼女は自分のしたことの結果に考へ及んだので、急いで止めて引返した。再びその戸を入るのは恐ろしいが、思ひきつて入り、屍骸の傍まで近づいて行つた。自分の身につけなければならぬ帽子やその他の品物をとる爲めである。その品々をつけてしまふと、階段口に出て、先づ戸をしめ、錠を下ろし、鍵を持つて出て行つた。それから階段に腰を下して、暫らく息をついたり、泣いたりしてゐたが、やがて起き上つて急ぎ足に立ち去つてしまつた。

仕合せと、彼女の帽子にはヴェールがかゝつてゐた、でなかつたら彼女は途中引き止められずに往來を歩いて行くことが、殆んど出来なかつたであらう。更に仕合せなことには、彼女は生れつき容貌が大分人並と變てゐるので急に顔の造作が變つても他の婦人のやうにさう目立たない。彼女にはどうしても上の二つの幸運が必要であつた、何故なら、指で握りしめた痕が顔に深く残つてゐるし、髪はほどけてゐるし、衣物は（彼女はわなはなな慄へる手で、あわてゝ搔き合は莫せたけれども）滅茶苦茶にもまれたり引つ張られたりしてゐたからである。

橋を渡ると、彼女は川の中へ鍵を投げ込んだ。お寺の門に来てみると、馬車よりまだ數分早かつた待つてゐる間にも、鍵が今にも網にひつかゝつたり、それがあの部屋の鍵だと分つたら、戸が開けられて屍骸が見つかつたら、市門で引き止められて監獄にやられ、殺人罪で起訴されたりしたらどうしやうなどといふ考へが湧く。こんなことをいろいろ考へてゐる最中に、馬車がやつて来て、彼女を乗せ

―三六八―

て連れ去つた。

「街路には別に騒ぎはないかね。」と彼女は彼に訊ねた。

「いつもの騒ぎだよ、」とクランチャアは答へた。そしてミス・プロスのこの問と彼女の様子にびつくりした風をした。

「お前さんのいふことは聞えなかつたよ。」と、ミス・プロスはあつた。「何といつたんだね。」

クランチャアが自分のいつたことを繰り返しても徒である。ミス・プロスは彼のいふのを聞くことが出来ない。

『ちや、一つ點頭いてやることにしよう、』クランチャアは呆れてかゝ考へた。『さうすれやあの女にも見えねえこたアなからう。』今度は彼女もたしかに見た。

「たつた一時間で聾になつたのかな。」とクランチャアはすつかり考へこみながらあつた。「この女はどんな目に出會したんだらうな。」

「わたしはね。」とミス・プロスはあつた。「ぴかつと光つたのと、ぐわんつて音がしたやうな氣がするんだよ、そしてそのぐわんつて音が、一度と聞くことの出来ないやうなものだつた氣がするんだよ。」

「氣でも變になつてくれたんでなければあゝが！」クラシヤはだんだん狼狽しながらゐた。「今まで何を飲んであんなに元氣を落さずにあつたのかしら？そら！あの恐ろしい馬車の音がする！あれが聞えるかね、お前さん。」

「何も聞えないよ。」とミス・プロスは彼が自分に話しかけてゐるのだと見てゐた。「あのねえ、お前さん、はじめにぐわんつて、大きな音がしたつきり、あとはとても静かだつたんだよ、あの静かさは、あのまゝ何時までも續くやうな氣がする。わたしの生命のある間は、もう二度とあの沈黙が破れることがないやうな氣がする。」

「もう大方行き着いたらしいが、あの恐ろしい馬車の音でせえ耳に入らねえつてのなら、」クラシヤは肩越しにちらとその方を見やつていつた。「わつしの考へぢや、ほんとに二度とこの世で何も聞くことが出来なからうよ。」

全くその通り、彼女は、何も聞えずに終つたのである。

十五、歩みの音は永久に消え去る

巴里の大路を、死の馬車が軋つて行く、軋る音には、ごろごろと空洞のやうなうちにも、荒い無慈悲さがこもる。六つの馬車が、今日の御酒をラ・ギーヨツチイヌのもとに連ぶのである。人間が想像したものを記録に残すことが出来てより、それ等の、貧乏で飽くことを知らぬ奇怪なものをあらん限り混ぜ合せて形に實現したものが、この斷頭臺である。地味も氣候も豊かに、變化に富むこの佛蘭西ではあつたが、こんな恐怖を生むやうな社會情態であつた爲めに

一三六九一

もつと慥かな時世ならば、當然生長成熟するはずの、草の葉、木の葉、根、細枝、胡椒の實ほどのものゝ一つとして生長してゐない。今一度、同じハママアの下に形を止めぬほど人間を打ち潰して見よ、それは自然に振れまがつて同じやうなひしやげた形となるであらふ。今日再びあの貧乏な放縱と壓制の同じ種をまき散らして見よ、きつとその種に應じて同じ實を生むことであらふ。

六つの死刑囚護送馬車は街路を軋つて行く。おゝ、素晴しひ魔術者たる時よ、かゝる護送馬車を變へて、その本來の姿に還元させて見よ、それが、専制君主の齒簿、封建貴族の供回り、光まばゆきジイゼベル（以色列王アルプの妃、その淫蕩兇悪は魔女の手下となる）たちの化粧道具、『父なる神』の家ではなくて『盜賊の巢』（新約馬太傳第二十一章、第十三節）となつた教會、今飢死にしかけてゐる幾百萬人の百姓のあばら家となつて現はれるであらふ！いや、造物者の與へた命令を莊嚴に果たすこの偉大な魔術者は、決して一度變形させたものを元に還しはしない。『もし汝、神の思召にてかゝる形に變へられしならば』、智慧に富む亞刺比亞物語の中で豫言者は呪ひ變へられたものにかゝいふ、『この形のまゝにてあれ、されどもし汝、かりそめの呪ひによりてかゝる形を帯びしならば、その時はもとの形に還れ！』元の姿に還りもせず、またその望みもないものゝやうに、護送馬車は軋つて行つた。

六つの馬車の陰鬱な車輪は、廻るにつれて、街上に群る市民の間に長いうねくねした畝を犁めて行くやうに見えた。人間の顔から成る畝の背は、こなたかなたと梨き起される、そして梨鋤そのものはずんずん前に進んで行く。街路に面した家に何時も住んでゐる人間は、かふいふ光景にすっかり馴れきつてゐて、多くの窓には、人の顔も見えない。或る時には窓から、護送馬車の中の顔をのぞいてゐ

る者もあるが、その時でも仕事の手を休めはしない。こゝやかしこの家では、この光景を見に来た客がある。その時には家の者は、幾分先達役か權威ある讀明者にふさはしひ得意げな態度でこの車あの車と指さして見せ、昨日はこゝに誰が坐つてゐたか、一昨日はそこに誰が坐つてゐたかなどと話してゐるやうだつた。

護送馬車に乗つてゐる連中のうちで、或る者はかふいふことや、この世の見納めの路傍に見えるあらゆる事を、何の表情もない眼をみはつてゐる、また或る者は生活と人間の様々なすがたに未練げな興味をもつて眺めてゐる。頭を垂れて坐つたまゝ無言の絶望に沈んでゐる者もある、また、中には自分の風采をひどく氣にする伊達者もあつて、舞臺や繪畫で見ると同じ秋波を大衆に投げてゐる。ぢつと眼を閉ぢて考へたり、迷ひ勝ちな考へをまとめようとする者も數人はある。たゞ一人、狂人のやうな風をした慘めな男だけ

一三七〇—

が、恐怖の爲めに、打ちひしやがれ酔はされて、唄つたり、踊つたりしようとしてゐた。だが全囚人のうちの一人として、眼付や身振りで人民の憐憫に訴へる者はあなかつた。

數人の騎馬兵から成る一隊の護衛が馬車と並んで駆けて行つた。人々の顔が時々彼等の或る者の方に向けられ、何か質問をすることがある。それはいつも同一な質問であるらしく、その後ではきつと人々が三番目の馬車をめがけて押し寄せるのであつた。この馬車に並んで駆けてゐる騎馬兵は、時々創の尖端でその馬車の中の一人を指さして見せた、人々の第一の好奇心は、どれが彼かといふことを知るにあつた、彼はその馬車の後ろの方に、頭を俯向けて立つたまゝ、同じ馬車の縁に腰を下して彼の手をつかんでゐる普通の少女を對手に何か話してゐた。彼は自身の周圍の光景に對しては、何の好奇心も顧慮も持ちあはさぬ様子で、始終その少女に話してゐる。サン・トノレの長い通りのこゝかしこでは彼に對して怒罵の叫びが揚げられる。その叫びが、よし幾分でも彼を動かすとしても、頭を揺る度毎に顔へ亂れかゝる髪の間から、たゞ靜かな微笑を浮べるだけのことだつた。

彼は両手を縛られてゐるので、容易にその顔にさはることが出来なかつたのである。

或る教會堂の階段の上では、例の諜者、監獄密偵が馬車の來るのを待つて立つてゐた。彼は一番目の馬車をのぞいて見たが、ゐない。一番目をのぞいて見たが、矢張りゐない。「あいつはおれをだしに使つたんぢやねえかな。」と彼が獨言を言ひかけた途端、三番目の馬車をのぞくと彼の顔は晴れやかになつた。

「どれがエヴレモンドだね。」と彼の後ろにゐる一人の男が訊いた。

「あれさ。あの後ろんところにある。」

「娘に手をつかませてゐる奴かね。」

「やうだ。」

するとその男は叫び出した。「エヴレモンドをやつゝけら！すべての貴族を斷頭臺にかける！エヴレモンドをやつゝけら！」

「しつ、しつ！」と諜者はおつおつと彼を止めた。

「何故いけねえんだね、兄弟。」

「あいつは今罰金を拂ひに行くところだ、もう五分もしたら、支拂ひ濟みとなるんだ。まあ、そつとしいてやれ。」

だがその男は、構はずに叫び續けた。「エヴレモンドをやつゝけら！」エヴレモンドの顔はほんの

一寸の間彼の方に向いた。エヴレモンドはその時諜者をもとめ、ちつと彼を見つめたがそのまゝ行つてしまつた。大衆の間に掣かれた敵は、方向を變へてどんどん死刑場までやつて来て、

一三七二

そこで止まらうとしてゐた。彼方此方に掣き返された敵の背は、くづれてしまつて、最後の一掣きがすぎると共にそのすぐ後ろに續いて行つた。これは誰も彼も斷頭臺をめざしてついで行くからであつた。斷頭臺の正面には、まるで公けの催し物の會場かなんぞのやうに、一群の女がづらりと椅子を並べて坐つて、忙しげに編物をしてゐる。一番前の椅子の一つにはザ・ヴェンジャンスが立ち上つて、しきりに四方を見まはして、友達を探してゐる。

「テレーズ！」と彼女は金切聲を張り上げて叫んだ。「誰かあの女を見た者はないかひ？テレーズ・ドファルジュー！」

「今までは一度も缺かさずに來た女だのに。」と婦人隊の一人の編物をしてゐるのがあつた。

「さうさ。今だつて來ないことはないだらうよ。」とザ・ヴェンジャンスは苛立たしさに叫んだ。

「テレーズ。」

「もつと高く。」と今の女は煽る。

さうだ！もつと高く、ヴェンジャンスよ、もつと高く叫べ、それでも彼女にはお前の呼ぶのが決して聞えないだらう。その上もつと高く、ヴェンジャンスよ、少し位は呪ひの言葉を添へて叫んで見よ、それでも決して彼女を連れては來ないだらう。他の友達を彼方此方にやつて、何處にぐづゝゐてゐるか、彼女を、探させてみよ、その使ひたちが、様々な恐ろしいことをした連中であつても、果して自分からすゝんで、彼女の今あるところまで出かけるかどうかは疑はしひことだ！

「間が悪ぬええ！」とザ・ヴェンジャンスは椅子の上で地團駄を踏んで叫んだ。「もう馬車が來たぢやないか！エヴレモンドは、もう瞬く間に片付けられてしまふつてのに、あの女はゐないんなんて！そら、わたしの手にあるのがあの女の編物だよ、これがあの女の分にとつてある椅子だよ、これでは來なかつた日には、腹が立つたり落膽するんだもの、怒鳴らずにゐられるもんかね！」

ザ・ヴェンジャンスが我鳴るつもりで椅子から下りると、一方では護送馬車はその荷物を下し始めてゐた。ラ・ギーヨッチイヌの祭祀達（斷頭臺を扱ふ刑吏達）が、法衣をつけて支度が出來た。どしやん！——一つの首が持ち上げられる。その首が考へたり口をきいたりすることの出來た一瞬間前には、碌々目をあげて見もしなかつた編物女たちは、一つと數を取つた。

二番目の馬車が荷物をあけて歸つて行つた。三番目がやつて來た。どしやん！——編物女は、ためらひも手も休めもせずに、仕事をつゞけながら、二つと數へる。

賈のエヴレモンドが馬車から下りた。例の裁縫女が彼の次に抱へ下された。彼は外に出ても彼女の辛抱強い手を離さずに約束通り握つてゐる。彼は彼女を、絶えず囂々と上

一三七二

つたり落ちたりしてゐるこの響音の凄しい機械に背を向けて立たせた。彼女は彼の顔をぢつと見て、感謝した。

「あの、わたしは生れつきこんな可哀さうな小さな氣の弱い女でございますが、お蔭さまでかうして落ちついてゐられます。あなたが出でなかつたら、きつと十字架につけられた基督様に、わた

しの思ひを申し上げて、今日こゝでわたしたちに望みと慰めを興へて下さるやうにお祈りすることも出来なかつたでせう。ほんとにあなたは、天からわたしに授かつた方だと存じますわ。」

「或は、あなたが僕に授かつた方かも知れません。」とシドニイ・カートンはあつた。「ね、あゝですか、僕の顔から眼を離さずに、他の事は何も考へずにゐらつしやぬ。」

「かふしてお手を握らしてゐたゞゐてゐるうちは何も考へませんわ。若しあの人たちが早くやつてくれさへしたら、お手を離しても何も考へずにゐられるでせう。」

「えゝ早くやつてくれるでせう。心配しないでゐらつしやぬ！」

二人はずんずん目に見えて減つて行く一團の犠牲にまじつて言つてゐたが、まるで彼等より外に人がゐないものゝやうにして語り合つてゐる。眼と眼、聲と聲、手と手、心と心を合せて、この自然といふ母の二人の子は、——こんな事情がなければ遠く離れ、ひどく違つた生活をした筈の二人は——いま手を攜へて冥府（死の）大路を辿り、ともに家路について、母の胸に休まうとしてゐる。

「あの、お心の寛み、勇氣のあるあなた、どうぞもう一つだけわたしの間ひにお答へ下さいまし。わたし、何も存じませんから、それが氣にかゝつて——ほんの一寸ですけれど。」

「どんなことです、仰しやつて御賢なさい。」

「わたし従妹が一人ございますの、たつた一人の身寄りでわたしと同じやうに孤兒なんですけれど、——わたしはその女を非常に愛してゐるのでございます。わたしよりは五つ年下で、南の方の田舎のお百姓さんの家にあるんでございますの。貧乏で一緒に居られませんでしたから。その女はわたしがかふなつたことなどちつとも蜘蛛ません、——わたし手紙が書けませんし——よし書けたところで、どうしてその女に事情を話せませう！このまゝでゐる方があゝのでございます。」

「さう、さう、このまゝでゐる方があゝのです。」

「わたし、来る途中づゝと考へても來ましたし、今もわたしをこんなに落ちつけて下さるあなたの御深切なほ強いお顔を見ながら、考へてゐましたんですけれど、つまり、——共和國がでございますよ、共和國がほんとに貧乏な人たちの爲めになることをしてくれて、貧乏な人たちが食べられないやうなことがなくなつたり、そのほかいろいろ苦し

—二七三—

むかどが少なくなつたりしたら、わたしの従妹は長生きすることでございます、年寄りになるまで生きてゐるでございます。」

「それで？」

「で、どつでございませう。」大きな忍苦を宿した不平いはぬ眼は涙に溢れ、唇は少し開いてふるへてゐた。「あの、きつとあなたとわたしに慈悲深く宿を貸してくれる好いところで、従妹を待つのもりですけれど、その間がわたしには長く思はれるでせうか知ら。」

「そんなことはありません！そこには時間なんてものも、心配なんてものもないんですから。」

「まあ、それで安心でございますわ！わたし、何も存じませんから。では、あなたに接吻しても宜しいでせうか。」

もう番が參りましたか。」

「宜しい。」

彼女は彼の唇に、彼は彼女の唇に、互に接吻し、互に祝福し合つた。彼女の痩せ細つた手は、彼が離しても、もうふるへない、その忍苦の顔には、可憐な輝かしいしつかりした心より外には何も現は

れてゐない。彼女は彼のすぐ前に行く、——そして行つてしまつた、編物女達は二十一と敷を取る。

「我は復生なり生命なり。」と主は仰せられた。「我を信する者は死るとも生べし、凡て生て我を信する者は永遠も死ることなし！」

數多の聲のさゝやき。數多の仰ぎ見る顔。十重二十重の群集の環の外縁に押しよせて、それをまるで巨大な波のうねりのやうに一團として打ち進ませる數多の人々の聲音。すべてのものがたゞ一瞬に去る。二十三。

*** **

この夜、市の内外では、人々が彼のことをかふ評判してゐた、あれは今まであすこで見えなかつた一番平和に満ちた顔であつた、とり多くの人々は更に、彼は神々しひ豫言者めいた様子にさへ見えたと言ひ添へた。

つい最近、岡じ斧で刑をうけた非常に著名な人々の中の一人——女性だが——はこの同じ斷頭臺の足場で、今自分の心に湧いて來た考へを書きつけることを許されたいとひつた。同様に、若しカートンが自分の思想を幾分でも發表したとして、それが豫言的なものであつたなら、次のやうなものではなかつたらうか——

『餘には、バーサッド、クライ、ドファルジュ、ザ・ヴェンジャンス、陪審員連、裁判官、舊い壓制者の破滅によつて興つた新しひ壓制者の長い行列は、この報復的機械が現在の用に立てられなくなるまでに、皆これで生命を失つてしまふことが見える。餘には、この無底地獄から美しい市と素

——三七四——

晴らしい人民の生れて來るのが見える、そして來るべき長い年月に眞の自由を得ようとする彼等の苦闘のうちに、そのときどきの勝利と敗北のことに、現時の罪惡と、それを産んだ前代の罪惡とが、をのづからだんだんと消滅し滅盡して行くのが見える。餘には、生命を犠牲にさゝげたあの幾つかの生命が、餘の目には再び簿れることのない英國で、平和に、有用に、隆々と、幸稿に送られてゐるのが見える。餘には彼女が、餘の名を持つた子供を胸に抱いてゐるのが見える。餘には、彼女の父が、いかにも年寄つて腰に弓を張つてはゐるが、その他の點では立涯に若返つて、その醫術ですべての人々に深切をつくし、今は平和に暮してゐるのが見える。餘には、あれほど長く彼等の友となり、十年の長い間自分の持つすべてを擧げて彼等を豊かにして來たあの善良な老人が、やがて靜かにその報いをうけに神の御許に赴くのが見える、餘には、餘が彼等の心に聖殿をもつてゐること、今後幾代の間彼等の子孫も心にそれをもつてゐることが見える。餘には、老いた彼女が、今日の記念日にはきつと餘の爲めに泣くのが見える。餘には、彼女とその夫が、この世の歩みを終つて、その最後の土の牀に並んで横たはるのが見える、二人が互の靈魂のうちで崇められ聖ばれてゐるのにも劣らず、餘が二人の靈魂のうちで崇められ聖ばれてゐることが分る。餘には、彼女の胸に寝てゐる子供、餘の名を與へられた子供が、立派な人になつて、かつては餘の踏んで來た人生の道を見事に通りぬけるのが見える。彼が見事に成功して、餘の名が彼の光をかりて赫々たるものになるのを見る。自分がかつてそれに投げた汚點が消え去つてゐるのが見える。公正な裁判官、名譽ある人士として第一人者になつた彼が、同じく餘の名を持ち、餘のよく知つてゐる額つきと金髪をもつてゐる子供をこの場所に連れて來て——その時分にはこの市も今日の醜い創傷の痕がたゞ一つもなく、見る眼も美しく變つてゐようが、

—やさしい、口ごもりがちな聲で、その子供に餘の物語を話して聞かせるのが見える。餘が今なすことは、今までに爲した何よりも遙かに、遙かに立派な事である。餘が今赴かんとするのは、今までに知つたどれよりも更に、更にあく休息である。』

—了—